九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—51—

甘木市所在宮原遺跡の調査（D地区）　Ⅳ

1998

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—51—

甘木市所在宮原遺跡の調査（D地区）　Ⅳ

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託を受けて、1979（昭和54）年度から九州横断自動車道建設に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、1981（昭和56）～1983（昭和58）年度に調査を行った甘木市に所在する宮原遺跡の4冊目の報告であります。

本遺跡は古墳時代から奈良時代にかけての集落跡で、墨書土器や硯が発見されており、奈良時代以降においては、大宰府や小郡官衙等との関係が深い村落であったと思われます。報告書として十分に満足できるものではありませんが、地域史研究や文化財愛護思想普及の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査及び整理報告にあたり、御協力いただいた方々や諸機関に深く感謝いたします。

平成10年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　**光安　常喜**

例　言

1　本書は、九州横断自動車道建設路線内に位置する遺跡について、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した甘木市宮原遺跡の４冊目の報告書である。

2　本書は九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の51冊目にあたる。

3　この報告は、宮原遺跡Ｄ地区西半部を対象とする。

4　遺構の写真撮影及び実測図の作成は、調査担当者、調査補助員が行った。

5　出土遺物の整理は、福岡県文化課整理指導員岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館復元室及び福岡県文化課甘木発掘調査事務所において行った。

6　鉄製品等の保存処理は九州歴史資料館学芸第二課横田義章氏に依頼した。

7　出土遺物の写真撮影は、福岡県文化課整理指導員北岡伸一に依頼した。

8　出土遺物の実測は、福岡県文化課甘木事務所の渡辺輝子、大野愛里、岡泰子、辻啓子、原富子氏による。なお、特殊遺物は、各執筆者による。

9　製図は、福岡県文化課甘木事務所の江上佳子氏による。なお、第188図は文化課参事補佐木下修氏による。

10　表の面積は、プラニメーターによる計測値である。計測は、福岡県文化課甘木事務所の窪山頼子氏による。

12　本書の執筆は、武田光正（214～217号竪穴住居跡）、伊崎俊秋（刻印土器・焼塩土器）、木下修（石製品：第188図）が、その他は児玉真一が担当した。

13　報告した出土品は、福岡県文化課甘木事務所において保管している。

14　本書の編集は、伊崎及び武田氏の協力を得て児玉が担当した。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
第１節　調査の経過……1
⑴はじめに……1
⑵調査の経過……1
第２節　位置と環境……2
第２章　調査の内容……5
第１節　調査の概要……5
⑴遺構と遺物の概要……5
⑵遺構の説明の前に－竪穴部各部の名称－……5
第２節　遺構と遺物……8
1　竪穴住居跡……8
2　掘立柱建物跡……101
3　土　坑……120
4　土壙墓……166
5　おとし穴……172
6　溝……172
7　柵列・通路状遺構……176
8　出土遺物各説……179
墨書土器……179
円面硯……179
転用硯……181
刻印土器……187
焼塩土器……190
瓦……196
土製品……198
鉄製品……199
石製品……201
その他出土土器……203
第３章　おわりに……206

図 版 目 次

図版 1 立野・宮原遺跡空中写真（西上空から）
図版 2 宮原遺跡空中写真（北東上空から）
図版 3 宮原遺跡A・D地区空中写真（北東上空から）
図版 4 宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）
図版 5 宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）
図版 6 宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）
図版 7 宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）
図版 8 上：214～217号竪穴住居跡（遺構検出中、南から）
下：214～217号竪穴住居跡（遺構検出中、南から）
図版 9 上：214～217号竪穴住居跡（貼床除去後の状況、南から）
下：214号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 10 上：214号竪穴住居跡カマド（西から）
下：216号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 11 上：218号竪穴住居跡（西から）
下：218号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 12 上：219号竪穴住居跡（西から）
下：219号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 13 上：220号竪穴住居跡カマド①（検出時の状況、南から）
下：220号竪穴住居跡カマド②（壁体補強の土器、西から）
図版 14 上：220号竪穴住居跡カマド③（支脚の断ち割り状況、南から）
下：220号竪穴住居跡カマド④（壁体の杭痕跡、南から）
図版 15 上：221～223号竪穴住居跡（西から）
下：221号竪穴住居跡カマド（西から）
図版 16 上：224号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）
下：224号竪穴住居跡貼床下層の状況（東から）
図版 17 上：225号竪穴住居跡貼床面検出状況（南から）
下：225号竪穴住居跡貼床下層の状況と4号おとしあな（東から）
図版 18 上：226号竪穴住居跡貼床面検出状況（北から）
下：226号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 19 上：227号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）
下：227号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 20 上：228～235号竪穴住居跡付近（北東から）

図版 21 上：235号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）
下：235号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 22 上：236号竪穴住居跡貼床面検出状況（北東から）
下：236号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版 23 上：237号竪穴住居跡貼床面検出状況（北から）
下：237号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 24 上：238・239号竪穴住居跡（北から）
下：240号竪穴住居跡（西から）
図版 25 上：240号竪穴住居跡カマド（南から）
下：241号竪穴住居跡（東から）
図版 26 上：241号竪穴住居跡カマド（南東から）
下：241号竪穴住居跡カマド支脚の断ち割り状況（南東から）
図版 27 上：242号竪穴住居跡（北東から）
下：243号竪穴住居跡（北から）
図版 28 上：243号竪穴住居跡カマド（東から）
下：244～246号竪穴住居跡（南西から）
図版 29 上：245号竪穴住居跡カマド（南から）
下：247号竪穴住居跡（東から）
図版 30 上：247号竪穴住居跡カマド（南から）
下：249号竪穴住居跡（北から）
図版 31 上：249号竪穴住居跡カマド（東から）
下：251号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 32 上：252号竪穴住居跡カマド（南から）
下：258号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 33 上：112号掘立柱建物跡Ｐ３土器出土状況（東から）
下：Ｄ区北西部の掘立柱建物跡（東から）
図版 34 上：115～118号掘立柱建物跡（東から）
下：118号掘立柱建物跡（南から）
図版 35 上：118～120号掘立柱建物跡（東から）
下：119号掘立柱建物跡（東から）
図版 36 上：120号掘立柱建物跡検出状況（東から）
下：120号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（東から）
図版 37 上：121号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（東から）
下：121号掘立柱建物跡Ｐ１

図版 38 上：121号掘立柱建物跡Ｐ３
下：121号掘立柱建物跡Ｐ９
図版 39 上：122号掘立柱建物跡（西から）
下：124号掘立柱建物跡（東から）
図版 40 上：125号掘立柱建物跡（北から）
下：131号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（西から）
図版 41 上：50号土坑の甕①（北から）
下：50号土坑の甕②（東から）
図版 42 上：50号土坑の甕③（北から）
下：50号土坑の甕④（北から）
図版 43 上：53号土坑土層断面（南から）
下：53号土坑北側の土器出土状態（南から）
図版 44 上：54号土坑土器出土状態（北から）
下：54号土坑土層断面（北から）
図版 45 上：56号土坑土層断面（北から）
中：63号土坑（北から）
下：65号土坑土層断面（南から）
図版 46 上：11号土壙墓（南から）
下：11号土壙墓土器出土状態（西から）
図版 47 上：14号土壙墓（北東から）
下：15号土壙墓（北から）
図版 48 214～216・218・220号竪穴住居跡出土土器
図版 49 221～224号竪穴住居跡出土土器
図版 50 225～228号竪穴住居跡出土土器
図版 51 229・235・236・238・241号竪穴住居跡出土土器
図版 52 242・244・245・247・249・250・252・253・257号竪穴住居跡出土土器
図版 53 258竪穴住居跡、47～49号土坑出土土器
図版 54 50号土坑出土土器
図版 55 50・53号土坑出土土器
図版 56 53号土坑出土土器
図版 57 54号土坑出土土器
図版 58 54・56・57・61号土坑出土土器
図版 59 62・63・65号土坑出土土器
図版 60 65号土坑出土土器

図版 61 65・66号土坑出土土器
図版 62 10号土壙墓出土の土器と鉄釘
図版 63 上：墨書土器
下：円面硯
図版 64 転用硯
図版 65 刻印土器
図版 66 刻印土器とその他出土土器
図版 67 上：焼塩土器（外面）
下：焼塩土器（内面）
図版 68 上：焼塩土器（外面）
下：焼塩土器（内面）
図版 69 上：焼塩土器（外面）
下：焼塩土器（内面）
図版 70 上：焼塩土器（外面）
下：焼塩土器（内面）
図版 71 上：焼塩土器（外面）
下：焼塩土器（内面）
図版 72 上：平・丸瓦（表裏面）
下：平・丸瓦（表裏面）
図版 73 上：土製品
下：土製品
図版 74 上：砥石
下：砥石
図版 75 上：鉄製品
下：石鏃等

挿 図 目 次

第 1 図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）…… 3
第 2 図　宮原遺跡と周辺遺跡（1/50,000）…… 4
第 3 図　竪穴住居跡の竪穴部模式図と各部の名称 …… 7
第 4 図　214～217号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込

第 5 図　214・215号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……9
第 6 図　214号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……10
第 7 図　215号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……12
第 8 図　215号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……13
第 9 図　216号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……13
第10図　216号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……14
第11図　217号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……15
第12図　218号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……16
第13図　218号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……17
第14図　219号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……18
第15図　219号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……20
第16図　220号竪穴住居跡実測図（1/60）……21
第17図　220号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……22
第18図　220号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……23
第19図　221号竪穴住居跡実測図（1/60）……24
第20図　221号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……25
第21図　221号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……26
第22図　221号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……27
第23図　222号竪穴住居跡実測図（1/60）……28
第24図　222号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……29
第25図　222号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……30
第26図　222号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……31
第27図　223号竪穴住居跡実測図（1/60）……33
第28図　223号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……34
第29図　223号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……34
第30図　224号竪穴住居跡実測図（1/60）……35
第31図　224号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……36
第32図　225号竪穴住居跡実測図（1/60）……37
第33図　225号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……38
第34図　226号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……39
第35図　226号竪穴住居跡実測図（1/60）……40
第36図　226号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……41
第37図　227号竪穴住居跡実測図（1/60）……43
第38図　227号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……44

第39図　227号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……44
第40図　228～234号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第41図　228号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……46
第42図　228号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……47
第43図　229号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……49
第44図　230号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……50
第45図　233号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……52
第46図　234号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……52
第47図　235A・B号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第48図　235カマド・カマド横土坑実測図（1/30）……53
第49図　235号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……54
第50図　235号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……55
第51図　235号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/4）……56
第52図　226・228～235号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……58
第53図　226・228～235号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……59
第54図　236号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……59
第55図　236号竪穴住居跡実測図（1/60）……60
第56図　236号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……61
第57図　237～239号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第58図　237号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……62
第59図　237号竪穴住居跡実測図（1/60）……63
第60図　238号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……64
第61図　239号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……64
第62図　237～239号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……65
第63図　240号竪穴住居跡実測図（1/60）……65
第64図　240号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……66
第65図　240号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……67
第66図　241号竪穴住居跡実測図（1/60）……68
第67図　241号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……69
第68図　241号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……70
第69図　242号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第70図　242号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……72
第71図　243号竪穴住居跡実測図（1/60）……73
第72図　243号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……74

第73図　243号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……75
第74図　244号竪穴住居跡実測図（1/60）……76
第75図　244号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……77
第76図　245・246号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第77図　245号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……78
第78図　245号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……79
第79図　246号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……81
第80図　247・248号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第81図　247号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……81
第82図　247号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……82
第83図　248号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……83
第84図　249号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……84
第85図　249・250号竪穴住居跡実測図（1/60）……85
第86図　249号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……86
第87図　250号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……87
第88図　251号竪穴住居跡・カマド実測図（1/30）……88
第89図　251号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……89
第90図　252～257号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第91図　252号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……90
第92図　252号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……91
第93図　252号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……92
第94図　253号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……94
第95図　254号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……95
第96図　255号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……96
第97図　256号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……97
第98図　257号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……98
第99図　258号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……98
第100図　258号竪穴住居跡実測図（1/60）……99
第101図　258号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……100
第102図　112号掘立柱建物跡実測図（1/80）……102
第103図　113・114号掘立柱建物跡実測図（1/80）……104
第104図　115～117号掘立柱建物跡実測図（1/80）……106
第105図　118号掘立柱建物跡実測図（1/80）……折込
第106図　112～115・118号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……107

第107図　119・120号掘立柱建物跡実測図（1/80）……109
第108図　121号掘立柱建物跡実測図（1/80）……111
第109図　122・123号掘立柱建物跡実測図（1/80）……112
第110図　118～121・125～127号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……114
第111図　124～126号掘立柱建物跡実測図（1/80）……115
第112図　127～130号掘立柱建物跡実測図（1/80）……116
第113図　129・131・132号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……118
第114図　131号掘立柱建物跡実測図（1/80）……118
第115図　132・133号掘立柱建物跡実測図（1/80）……119
第116図　47～49・51・52号土坑実測図（1/60、48；1/100）……121
第117図　47号土坑出土土器実測図（1/4）……122
第118図　48号土坑出土土器実測図①（1/4）……123
第119図　48号土坑出土土器実測図②（1/4）……125
第120図　49号土坑出土土器実測図①（1/4）……126
第121図　49号土坑出土土器実測図②（1/4）……127
第122図　50号土坑（1/80）・土器出土状態（1/30）実測図……128
第123図　50号土坑出土土器実測図①（1/4）……130
第124図　50号土坑出土土器実測図②（1/4）……131
第125図　50号土坑出土土器実測図③（1/4）……132
第126図　50号土坑出土土器実測図④（1/4）……133
第127図　50号土坑出土土器実測図⑤（1/4）……134
第128図　50号土坑出土土器実測図⑥（1/4）……135
第129図　50号土坑出土土器実測図⑦（1/4）……136
第130図　50号土坑出土土器実測図⑧（1/4）……137
第131図　53号土坑実測図（1/100）……139
第132図　53号土坑出土土器実測図①（1/4）……140
第133図　53号土坑出土土器実測図②（1/4）……141
第134図　53号土坑出土土器実測図③（1/4）……142
第135図　53号土坑出土土器実測図④（1/4）……143
第136図　53～54号土坑土層図（上）、54・55号土坑実測図（1/80）……144
第137図　54号土坑出土土器実測図①（1/4）……145
第138図　54号土坑出土土器実測図②（1/4）……146
第139図　54号土坑出土土器実測図③（1/4）……147
第140図　56～60号土坑実測図（1/60）……149

第141図　56号土坑出土土器実測図（1/4）……150
第142図　57号土坑出土土器実測図（1/4）……151
第143図　58・59号土坑出土土器実測図（1/4）……152
第144図　60号土坑出土土器実測図（1/4）……152
第145図　61号土坑出土土器実測図（1/4）……152
第146図　61～64・66～68号土坑実測図（1/60、66号は1/30）……153
第147図　62号土坑出土土器実測図（1/4）……154
第148図　63号土坑出土土器実測図（1/4）……155
第149図　64号土坑出土土器実測図（1/4）……156
第150図　65号土坑実測図（1/60）……157
第151図　65号土坑出土土器実測図①（1/4）……158
第152図　65号土坑出土土器実測図②（1/4）……159
第153図　65号土坑出土土器実測図③（1/6、53；1/4）……160
第154図　65号土坑出土土器実測図④（1/6）……161
第155図　65号土坑出土土器実測図⑤（1/4）……162
第156図　65号土坑出土土器実測図⑥（1/4）……163
第157図　66号土坑出土土器実測図（1/4）……164
第158図　67号土坑出土土器実測図（1/4）……165
第159図　68号土坑出土土器実測図（1/4）……165
第160図　10号土壙墓実測図（1/30）……166
第161図　10号土壙墓出土土器実測図（1/3）……167
第162図　10号土壙墓出土鉄釘実測図（1/2）……168
第163図　11号土壙墓実測図（1/30）……169
第164図　12号土壙墓実測図（1/30）……169
第165図　12・14・15土壙墓出土土器実測図（1/4）……170
第166図　13号土壙墓実測図（1/30）……170
第167図　14号土壙墓実測図（1/30）……171
第168図　15号土壙墓実測図（1/30）……171
第169図　4号おとし穴実測図（1/30）……172
第170図　10～12号溝出土土器実測図（1/4）……174
第171図　12・14・16号溝出土土器実測図（1/4）……175
第172図　柵・通路状遺構及び掘立柱建物跡配置図（1/800）……177
第173図　墨書土器実測図（1/3）……180
第174図　円面硯実測図（1/3）……181

第175図　転用硯実測図①（1/3）……182
第176図　転用硯実測図②（1/3）……183
第177図　転用硯実測図③（1/3）……184
第178図　転用硯実測図④（1/3）……185
第179図　転用硯実測図⑤（1/3）……186
第180図　刻印土器実測図（1/3）……188
第181図　焼塩土器実測図①（1/3）……191
第182図　焼塩土器実測図②（1/3）……192
第183図　焼塩土器実測図③（1/3）……194
第184図　焼塩土器実測図④（1/3）……195
第185図　瓦実測図（1/3）……197
第186図　土製品実測図（1/3）……198
第187図　鉄製品実測図（1/2）……200
第188図　石製品実測図①（1/2）……201
第189図　石製品実測図②（1/3）……202
第190図　その他出土土器実測図①（1/4）……204
第191図　その他出土土器実測図②（1/4）……205

表　目　次

第１表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表……折込

付　図　目　次

付図１　宮原遺跡遺構配置図（上：1/1,250）、立野・宮原遺跡付近路線図（下：1/2,000）
付図２　宮原遺跡Ｄ地区西半部遺構配置図（1/200）

第１章　はじめに

第１節　調査の経過

(1)　はじめに

九州横断自動車道第11地点は、すでに報告済みの立野(たての)遺跡（註１）と今回が最終報告の宮原(みやばる)遺跡の二つの遺跡が存在し、宮原遺跡はこれまでに３冊の報告書（註２）を刊行している。

両遺跡は間に小規模な谷をはさみ、約100ｍほどの距離をおいて東に宮原遺跡（Ａ～Ｄ地区）が、西に立野遺跡（Ａ～Ｅ地区）が営まれている。ともに、生活遺構が主体を占めるが、立野遺跡の東及び西側においては方形周溝墓等の埋葬遺構も検出した。生活遺構は、立野遺跡の方が総体的に古い遺構が多く、宮原遺跡の主体は７～８世紀代の遺構である。

今回報告するのはＤ地区西半部の遺構であり、これで宮原遺跡の事実報告はすべて終了することとなる。なお、九州横断自動車道第11地点総集編として、立野遺跡及び宮原遺跡の報告漏れの遺構・遺物、遺構の性格判断の変更により再報告するもの、及び、若干のまとめを掲載し、本書とは別冊で、今年度報告している。

(2)　調査の経過

調査の経過については、註２文献において報告したので、以下簡単に記すことにする。

宮原遺跡の調査は、まずＡⅠ地区について1981（昭和56）年５月18日から開始し、立野遺跡及び他の調査区の工事優先順に従って間断的に調査を実施しながら、最終的には宮原遺跡Ｄ地区が残り、全ての調査が終了したのは、青葉の香る1984（昭和59）年４月30日であった。

11地点の上記２遺跡の調査は約３年にわたって実施し、立野遺跡を先行して報告してきた。調査終了から14年の歳月が経過し、どうにか、最終報告までたどりついたところである。宮原遺跡の最終報告である今年度の関係者は以下のとおりである。

【平成９年度関係者】

福岡県教育委員会

［総　括］	教育長	光安　常喜
	教育次長	松枝　　功
	指導第二部長	竹若　幸二
	指導第二部文化課長	石松　好雄

	指導第二部文化課長補佐	城戸　秀明
	〃　参事兼文化財保護室長	柳田　康雄
	〃　文化課長技術補佐	井上　裕弘
	〃　参事補佐兼調査班総括	橋口　達也
［報　告］	〃　文化財保護係参事補佐	児玉　真一
	甘木歴史資料館副館長	伊崎　俊秋
	遠賀町教育委員会社会教育課社会教育係	武田　光正

第２節　位置と環境

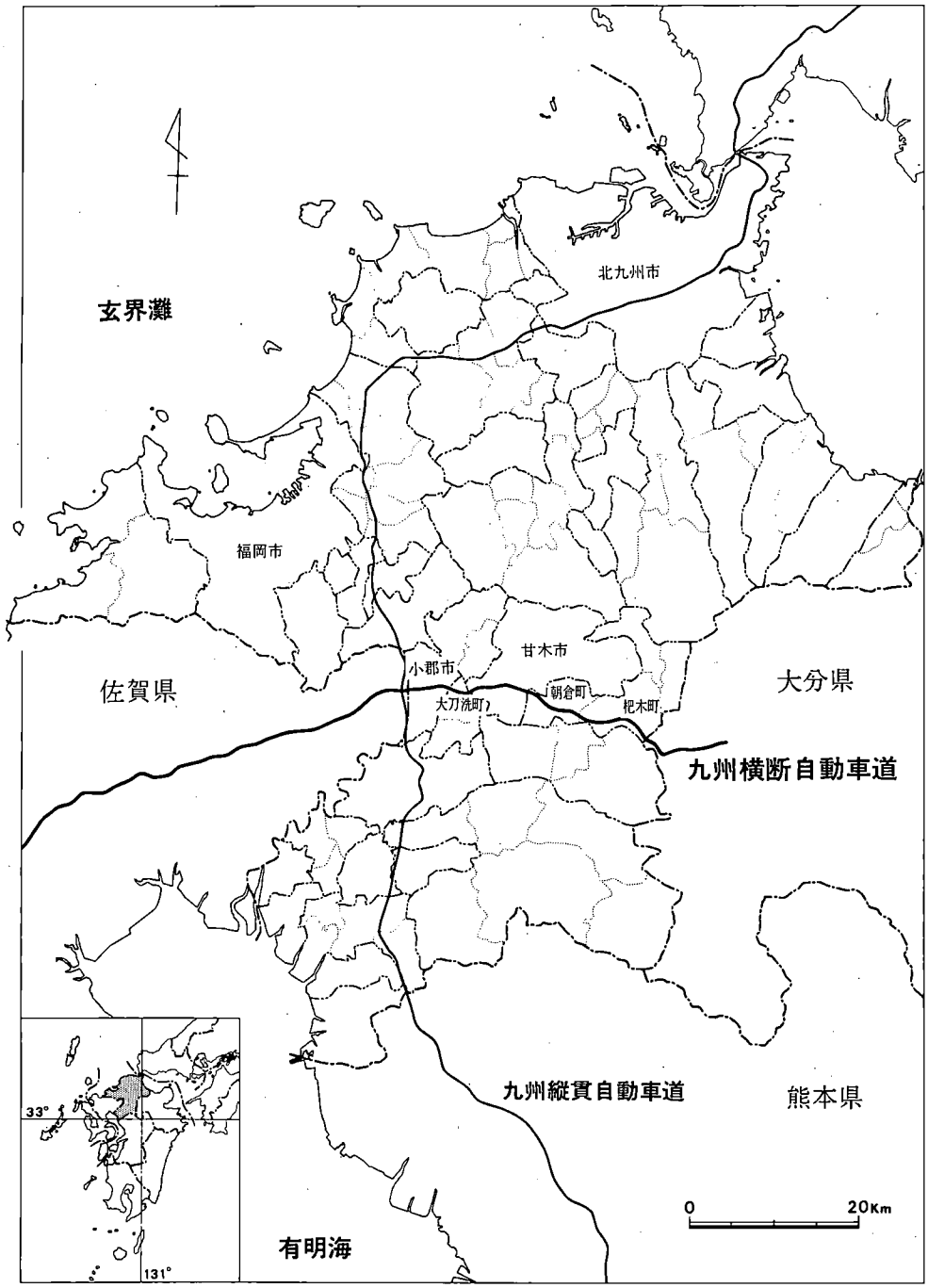
宮原（みやばる）遺跡は福岡県甘木（あまぎ）市大字下浦（しもうら）字宮原（みやばる）に所在する主に７～８世紀代の村落遺跡である。眼下には比較差１ｍ程の筑後川にまで広がる広大な平野を有し、後背部には標高130ｍの城山を頂点とする低台地が控える。

城山周辺は初期須恵器の窯跡が所在し、また、焼ノ峠古墳（前方後方墳）・小隈古墳（前方後円墳）が構築されている。初期須恵器の小隈窯跡の周辺には小規模円墳からなる群集墳が存在する。

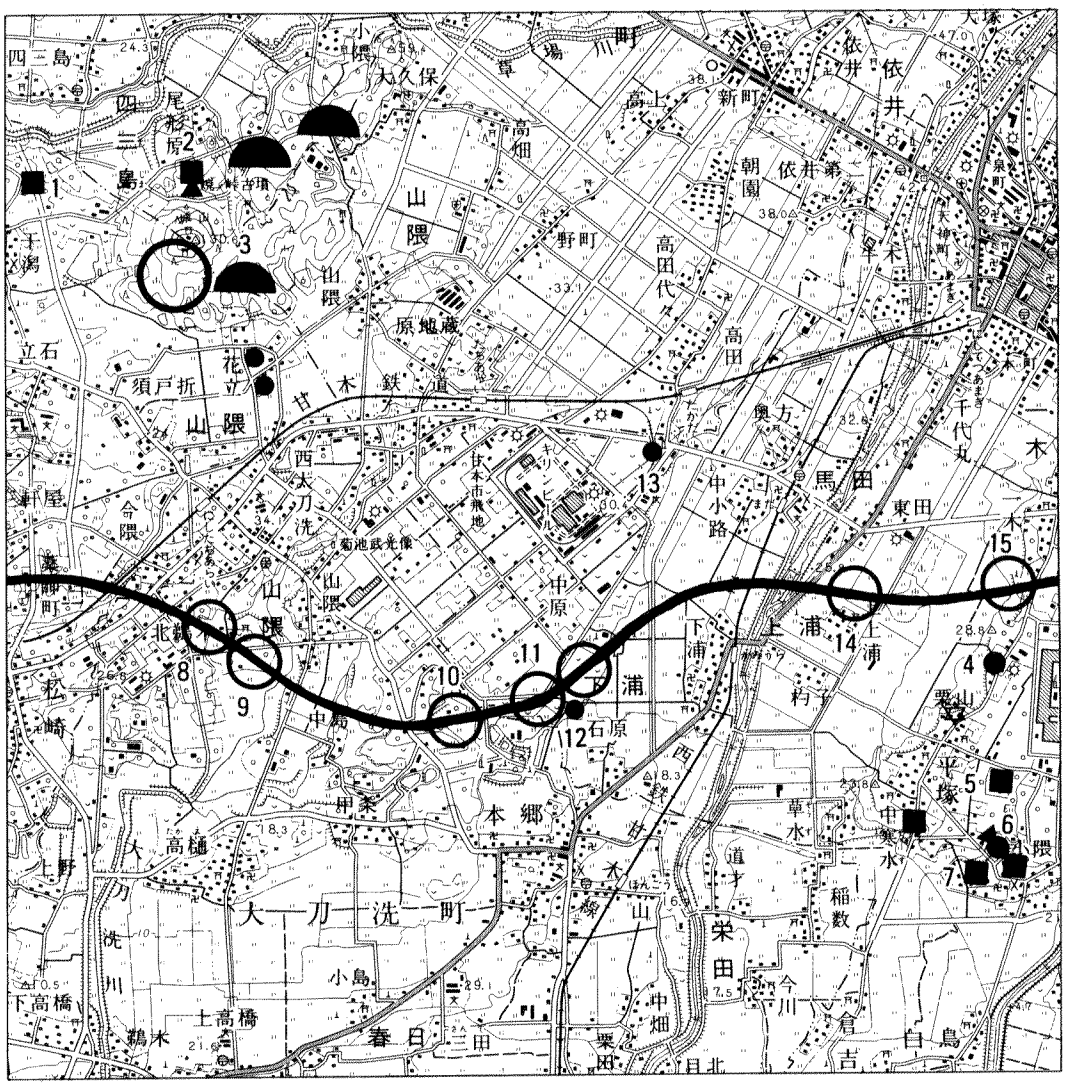
宮原遺跡に南接し、内容的に近い関係にある下浦宮原遺跡については、その後、甘木市が調査を行っており、本年度報告書が刊行されている。宮原遺跡と下浦宮原遺跡の合成図は総集編に掲載している(註３)。

なお、宮原遺跡及び立野遺跡の周辺の関係遺跡については、従前の報告書に依られたい。

註１　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第２・５・８集　1983・1984・1986
２　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第14・17・46集　1988・1990・1997
３　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第52集　1998



第１図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）



1. 干潟遺跡
2. 焼ノ峠古墳
3. 花立南麓窯址群
4. 大願寺遺跡
5. 小田道遺跡
6. 神蔵古墳
7. 小隈出口遺跡
8. 宮巡遺跡
9. 春園遺跡
10. 10地点
11. （西）立野遺跡
（東）宮原遺跡
12. 宮原古墳
13. 馬田りんりん石古墳
14. 上々浦遺跡
15. 下原遺跡

第2図　宮原遺跡と周辺遺跡分布図（1/50,000）

第２章　調査の内容

第１節　調査の概要

(1)　遺構と遺物の概要

今回報告する宮原遺跡Ｄ地区西半部の遺構は次のとおりである。なお、遺構番号は昨年報告したＤ地区東半部からの続き番号である。

［遺　構］

・竪穴住居跡	47軒（214～258号、建て替えが２軒ある。）
・掘立柱建物跡	22棟（112～133号）
・おとし穴	1基（４号）
・土坑	21基（48～68号）
・土壙墓	6基（10～15号）
・溝	11条（10～20号）
・柵列？	2
・ピット	多数

［出土品］

通常の村落遺構から出土する須恵器・土師器を主体に、土製品・石製品・鉄製品が出土している。須恵器には円面硯・転用硯・墨書土器、土師器には墨書土器・刻印土器・焼塩土器が含まれる。その多くは、６世紀後半～８世紀代に含まれるが、平安時代に下るものもある。

(2)　遺構の説明の前に（第３図）－竪穴部各部の名称－

遺構の主体を占める竪穴住居跡の竪穴部については、次頁の図により説明している。この模式図は、これまでの九州横断自動車道関係の報告では、第11地点（立野遺跡・宮原遺跡）の１冊目の報告書（註１）に掲載した図をもとに、その後、必要に応じて名称を変え、加筆したものである。模式図に示した個別遺構をすべて備える住居はなく、両遺跡において検出した竪穴部の周囲、床面上、床面下の遺構を一枚の図面に模式的に集約したものである。

立野遺跡・宮原遺跡の竪穴部の床はすべて貼床である。黒線は貼床面上の遺構、すなわち、生活時あるいは住居廃棄時に目に触れることができる遺構や、後世に掘り込まれた遺構を示している。赤線は、貼床下層に検出される遺構、すなわち、住居に伴うが生活時には目に触れることができない遺構、及び、図示した当該住居より古い遺構を示している。ただし、主柱が抜き取られた場合の主柱穴P_1～P_4は貼床面が荒らされ、床面に検出できるので、黒線で図示し

ている。また、竪穴部の削平が著しく貼床が遺存しない場合の下層遺構についても黒線で図示している。

以下、説明を要する竪穴部の各部について簡単に説明する。なお、各竪穴部の計測値については第1表を参照されたい。

竪穴部（黒）：竪穴住居の範囲は、通常、竪穴住居跡として図示し報告される部分の外まで広がると考えるので、それを竪穴住居跡の一部と認識し、竪穴部と呼ぶ。

主柱間エリア（黒）：貼床面上の4本の主柱痕（主柱穴）に囲まれた方形の空間を示し、表では面積で示している。

壁小溝（黒）：竪穴部壁際の貼床面に検出される周溝状のもので、板材を土壁際に埋め込んだ（打ち込んだ）痕跡であろうと考えている。杭で板材を固定したと思われる小ピットを溝底に検出する場合がある。

カマド対面土坑（黒）：カマド対辺の土壁のほぼ中央にある小さな土坑である。弥生時代後期～古墳時代初期の竪穴部に一般的に見られる屋内土坑に、系譜的に連なるものであろと考えている。これまでは、屋内土坑Aとして報告している（註2）。

中央土坑（赤）：竪穴部のほぼ中央の貼床下層に検出され、地山を掘り込んだ不整形の浅い土坑である。埋土に焼土等を含む例があることから、弥生時代の炉が遺制として貼床下に残ったものであろうと考えている。

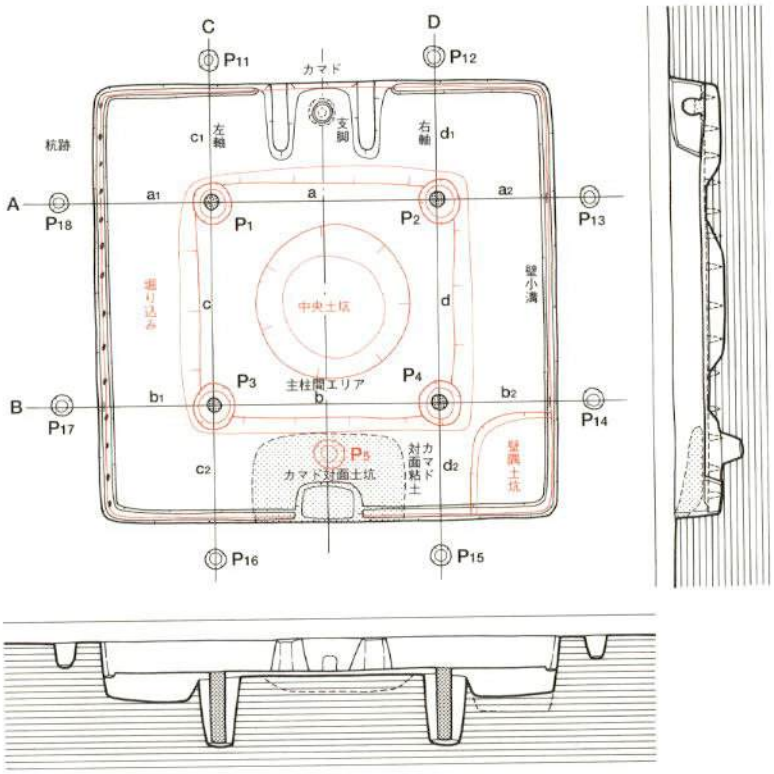
壁隅土坑（赤）：竪穴部の隅角部の貼床下層に検出される。場所は一定しない。弥生時代後期～古墳時代初期の竪穴部貼床面において、隅角部に屋内土坑を検出する場合があり、これまでは、屋内土坑Bとして報告している（註3）。系譜的には屋内土坑Bに連なるものであろうと考えている。

掘り込み（赤）：竪穴部の貼床下層では、主柱間エリアと土壁との間の地山面が一段深く掘り込まれており、この部分を掘り込みと呼ぶ。弥生時代終末期～古墳時代初期の竪穴部においては、屋内土坑Aの部分は途切れるが造設されたベッド状遺構が壁際を巡り、その下層の地山面は、他の部分の地山面よりも一段深く掘り込まれている。このような竪穴部の造りかたが遺制として残ったものであろうと考えている。

P_1～P_4（赤）：主柱穴を示す。カマドに対してP_1～P_4の順に番号を付す。a～dは各主柱（穴）の中心間の距離を示す。また、a_1～d_2は各主柱（穴）の中心から、土壁下端までの距離を示す。

P_{11}～P_{16}（赤）：支柱穴的なものである。必ずしも主柱（穴）を結んだ一直線上に乗るとは限らない。上部構造を考える時、各支柱穴の存在を認めるならば、住居空間は竪穴部外まで広がるであろうことの傍証証拠の一助となるであろうと考えている。

以上のように、立野遺跡及び宮原遺跡の竪穴部貼床下層の遺構には、弥生時代以来の各遺構



第3図　竪穴住居跡の竪穴部模式図と各部の名称

が遺制として取り込まれているように推測される。しかし、残念なことに、両遺跡においては弥生時代終末期～6世紀中葉の間の竪穴住居跡の資料が貧困である。よって、単一遺跡において、竪穴部貼床面及び同下層の遺構を系譜的に追求するに際し、時間を追って連続的に把握することはできない限界をはらんでいる。このことは、集落又は村落立地の選択の問題が、時代によっては、複雑な政治的・社会的な諸条件や、自然的な要因にも左右されたであろうし、間断なく数世紀に及ぶ集落・村落の継続的展開自体が不可能であったことにも起因していると推測される。したがって、今後は、集落・村落の構成集団の移動を追う調査手法や出土遺物の分析技術の開発が、より細かな集落・村落の内容を解明する手段のひとつとなろうと思われる。

註1　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第2集　1983

2　宮原遺跡3号住居跡（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第14集　1988）立野遺跡135号住居跡；屋内土坑が長壁中央部（A）とベッド状遺構の北東隅（B）に存在する。報告書では屋内土坑A・Bとは記述されていない。（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第8集　1986）

3　宮原遺跡3号住居跡（『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第14集　1988）

第２節　遺構と遺物

１．竪穴住居跡

214号竪穴住居跡（図版８・９、第４図）

略同じ主軸方位をとる４軒の住居が重複し、中央部に位置する当住居が最も新しくなる。東壁側を溝と土坑に切られているが、遺存状況は比較的良好であり、住居の規模や形態が窺われる。南北の両辺に略平行な２条の壁面を検出しているので、壁小溝の巡る内側と壁小溝を持たぬ外側の２軒が重複していると考えられる。しかし、主柱穴が重複するばかりか北壁に化粧壁的な特異な施設が確認されたので、壁穴部の縮小した建て替えと判断し、敢えて１軒の住居として報告する。以下、縮少した壁小溝の巡る内側を新住居、外側を旧住居として述べて行く。

まず、新住居から説明すると、東壁と南壁の一部は不明であるが、壁穴部の規模は西辺で４ｍを測り、北辺で3.9ｍ程が遺存しており、中型規模に属すと考えられる。壁面は急勾配な立ち上がり、最大壁高13㎝を測る。幅が10㎝前後で、深さ４㎝～５㎝の壁小溝を付設しているが、カマド周辺とカマド対面周辺では検出していない。この壁小溝と関連する施設と考えているのが、北壁で検出した粘土を貼付した壁面で、当遺跡でも唯一の事例である。

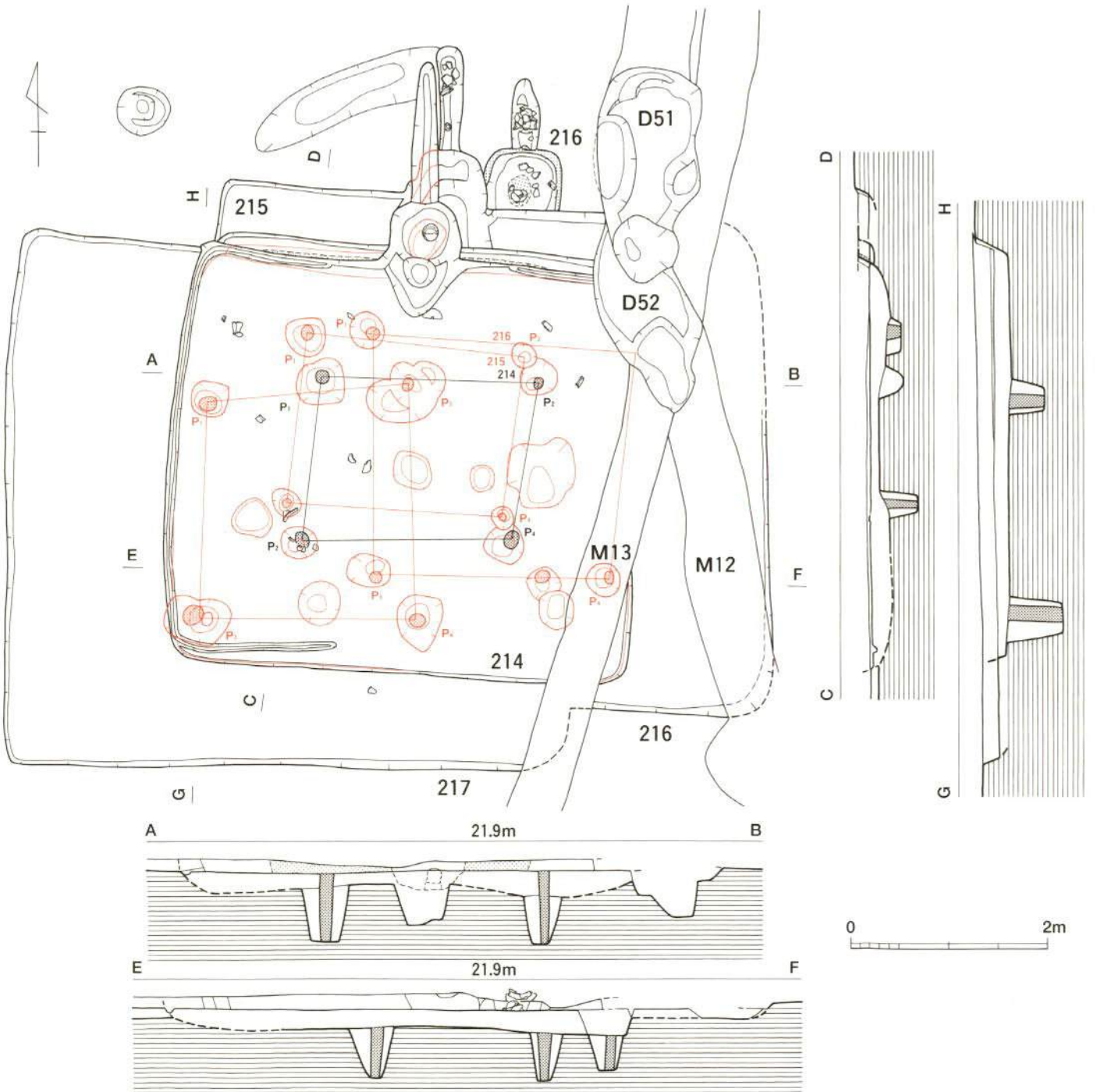
粘土を貼付した壁面はカマド西側で1.15ｍの長さに、同東側で0.65ｍに達し、カマド両袖の端部より始まっている。粘土の貼付状況は第216号カマド実測図の土層図に図示しているが、粘土の厚さは５㎝程を測る。旧住居の壁から15㎝内側にこの化粧壁が位置しており、埋め土の崩落を防止するための所作であり工夫と考えるのが妥当ではなかろうか。確認した場所以外にも存在した可能性を持つが、西壁に関しては略同じ場所を壁面としているので存在しなかったかもしれない。

床面は略水平な貼床である。主柱穴の配置は少し歪つな長方形の平面形となり、柱間隔は1.65ｍ～2.2ｍを測る。床面下層で掘り込みを検出しているが、不注意により図化していない。

旧住居は北壁側で15㎝程広くなり、南壁側では南西隅が略同位置となり、東に進むに従い広くなっていたのであろう。一方、床面の高さは新旧住居とも同レベルである。主柱穴は該当する柱穴が他に存在しないので重複したと考えている。

カマド（図版９・10、第５図）　北壁に付設した突出型カマドである。竪穴部より50㎝程突出し、幅が70㎝程の掘り方となる。壁体の遺存状況は悪く、竪穴部内にも両袖の痕が認められない。火床面は貼床面よりも20㎝弱も低くなり、支脚上部が床面より上方となる。支脚は土師器甕を逆位で転用しているが、甕の内部に土を充填して強化を図っている。この支脚は火床面より５㎝～10㎝の嵩上げをしているが、甕及び内部の土と火床面を粘土で接合してより安定化することを図ったのであろう。

火床面より22㎝上方に煙道口の下端があり、煙道口の位置は支脚の中心より30㎝外側となる。



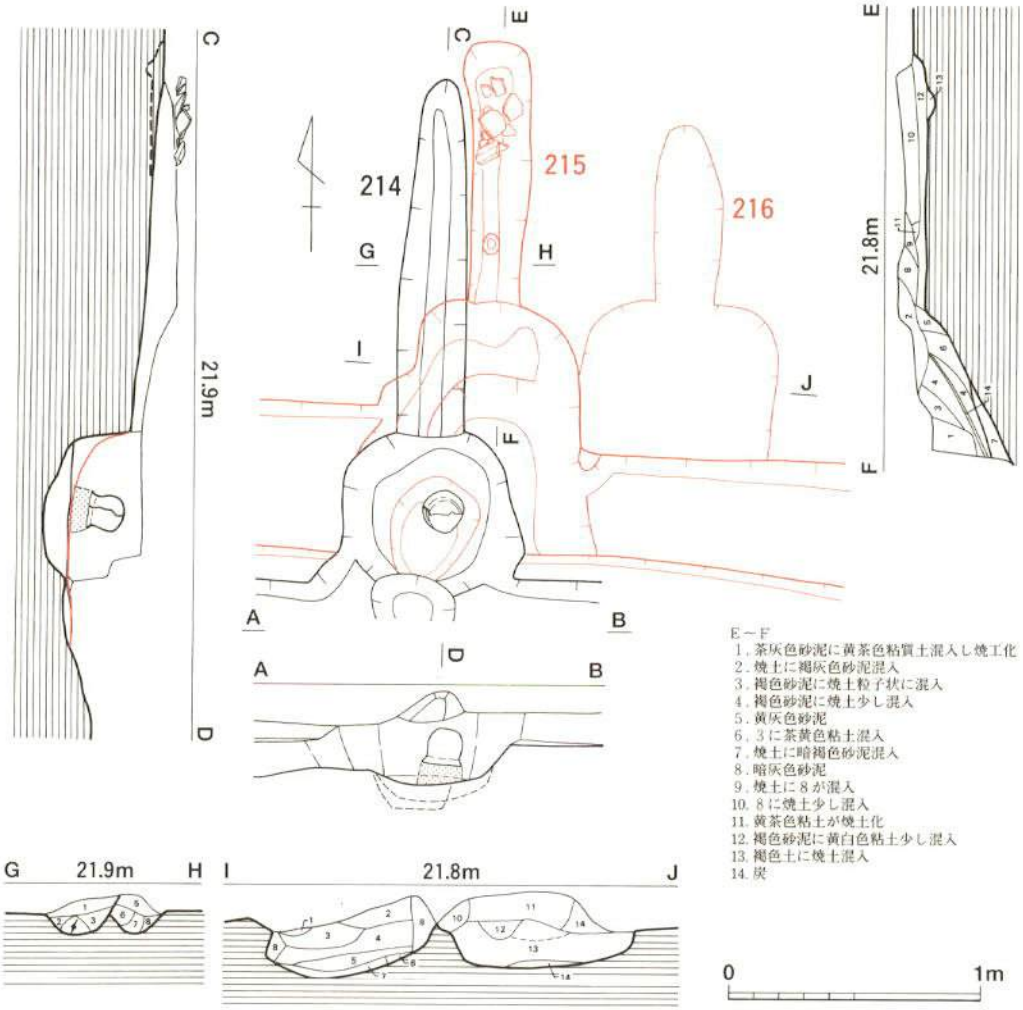
第4図　214～217号竪穴住居跡実測図（1/60）

煙道は1.42mの長さで直線に伸びており、検出面での幅は最大で27cmを測り、深さも最大で13cmを計測した。

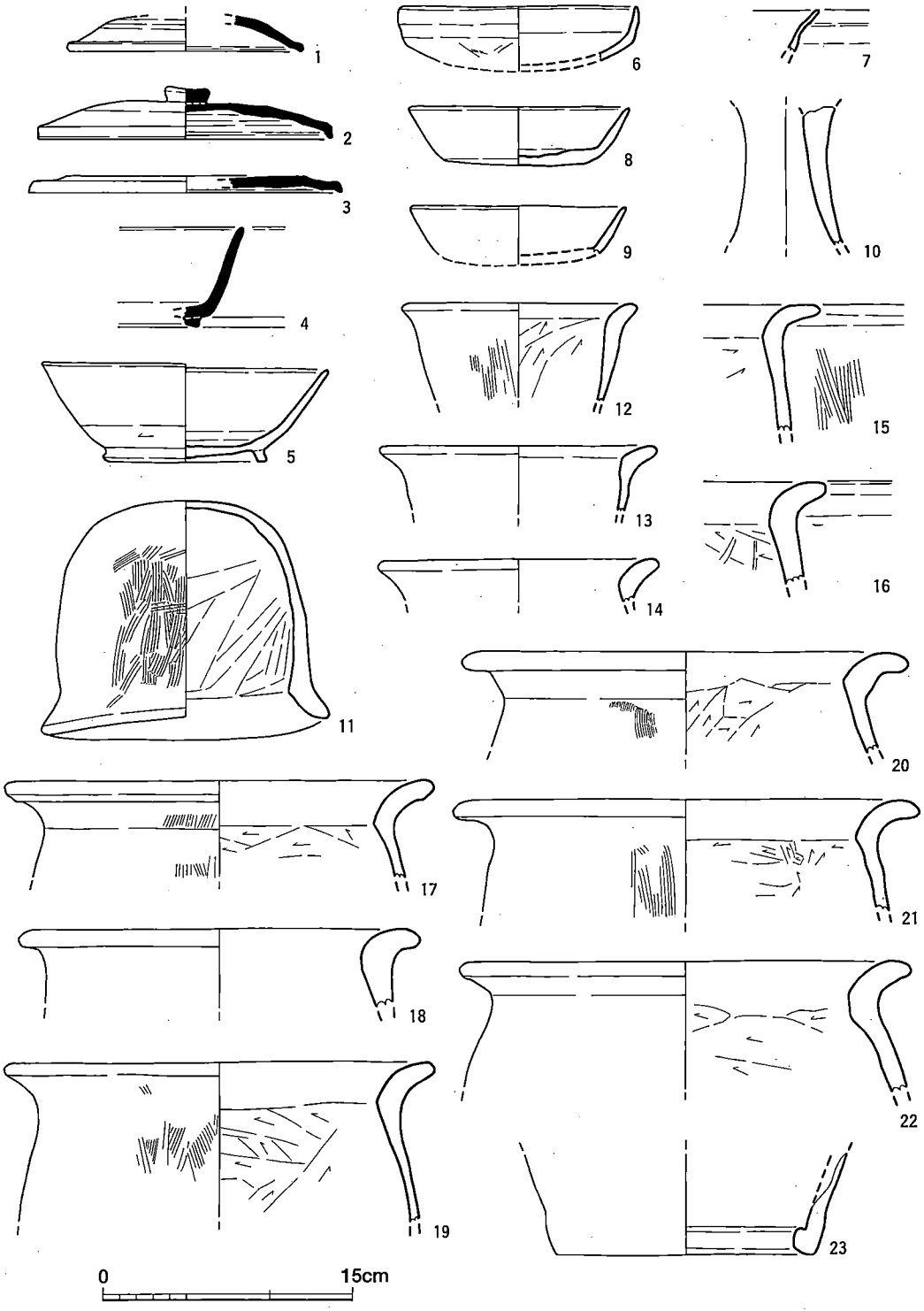
出土遺物

11はカマド支脚である。床面上もしくは床面近くで出土した品は、9と10・21がP_3周辺で、15が主柱間エリアで、16が北西隅付近で、17と18がP_2周辺で、2と3がカマド周辺である。5はカマド内より出土した。8・14・19・23が埋土よりの出土品で、他は貼床及び床下層より出土した。1～5は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版48、第6図）　1～3は坏蓋だが、個々天井部のつくりを異にする。4と5は高台付きの坏身で、口唇部が僅かに外反する。6～9は坏であるが、7は鉢かもしれない。10は高坏の柱部片である。23は甑の底部片。その他は甕であるが、12は鉢とすべき品かもしれない。



第5図　214・215号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第6図　214号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

215号竪穴住居跡（図版８・９、第４図）

214号住居に大半以上が削平を受け、北壁側が僅かに遺存する住居跡である。北東隅部も土拡等に切られているが、遺存する辺長は3.9ｍを測る。北壁の中央部にカマドを付設した場合は、4.5ｍ前後の辺長に復原される。216号住居を切っている。壁面は急勾配に立ち上がり、最大で15㎝の壁高を測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。床面は厚さ５㎝程の貼床で、床面上から地山面までの厚さが13㎝前後を測る。主柱穴は214号住居内で検出した。柱間隔が1.65ｍ～2.2ｍを測り、平面形態は長方形を呈す。

カマド（第５図）　北壁に付設した突出型カマドで、214号住居のカマドに大半以上が削平されている。壁穴部から50㎝前後突出する掘り方となり、厚さ10㎝程の粘土を掘り方に貼付しつつ積み上げて壁体としている。火床面に支脚は遺存せず、抜き取られたのか削平されたのかは不明となる。煙道は1.03ｍ遺存しているが、先端部に深さ４㎝程の浅い窪みが存することから、本来の長さで遺存しているのかもしれない。煙道口の下端は火床面の最深部より28㎝の高さとなるが、火床面中央部より緩やかな勾配で順次高くなる。煙道先端近くで出土した土師器甕片は床面より10㎝程上方となるので、煙道の補強材に転用された品と考えるよりも、煙出し口に付随した品で、それが崩落した状態と考えるのが妥当であろう。

出土遺物

僅かしか遺存しない床面から５・６・20・23・24・27の６点が出土し、25が煙道部の品であり、４が埋土中から出土した。その他の品に関しては埋土よりの出土品ではあるが、検出時の品も一部含まれているので、周辺部の品が混入している可能性を否定することは出来ない。１～17は須恵器、その他は土師器である。

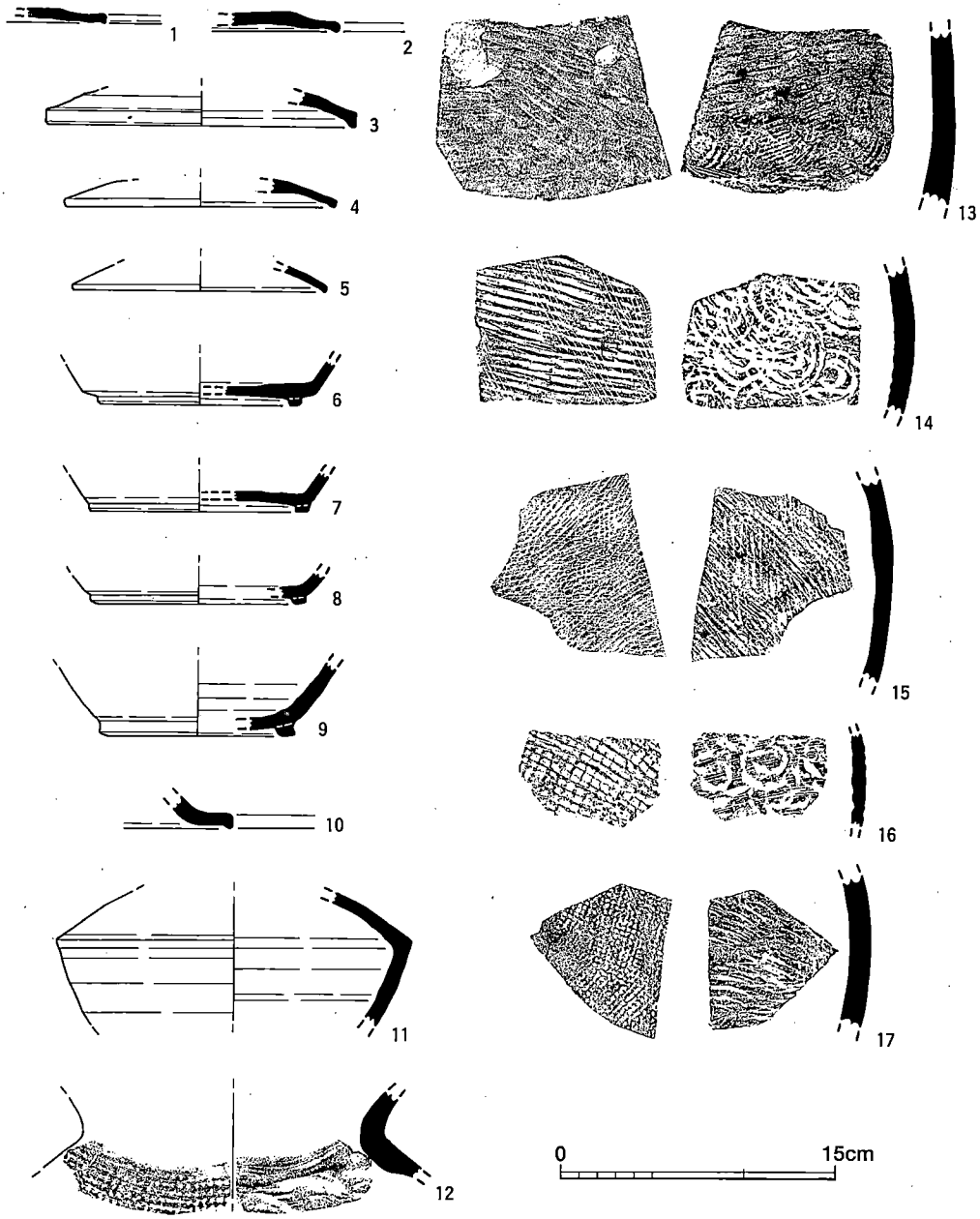
土　器（図版48、第７・８図）　１～５は坏蓋片で、６～９が坏身である。10は小片だが高坏の脚部であろう。11は長頸壷の胴部で、肩が張りシャープな陵を有す。その他は甕片である。18～21は精良な品の坏で、21のみが口縁部で少し屈曲する。22が高坏の柱部である。23～27は甕で、25は外面にススが付着している。

瓦（図版72、第185図）　覆土中から瓦片が１点出土している。詳細については後述する。

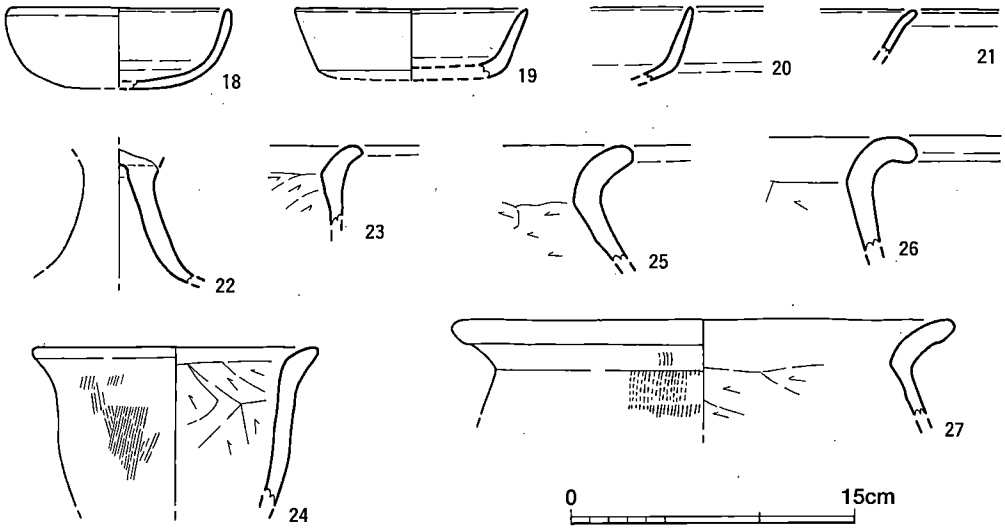
216号竪穴住居跡（図版８・９、第４回）

214・215号住居等に削平されており、南東側の一部とカマドや主柱穴で住居跡と判断された。南壁も僅かに遺存しているが、217号住居との新旧関係は重複する部分が新しい溝に切られて不詳となる。５㎝程の壁高を測り、やや緩やかな立ち上がりの壁面で、壁面下に壁小溝を設けていない。壁穴部は南北の辺長が最大で5.1ｍとなり、大型規模に属すかもしれない。床面は10㎝程の貼床であるが、詳細な点については不明である。

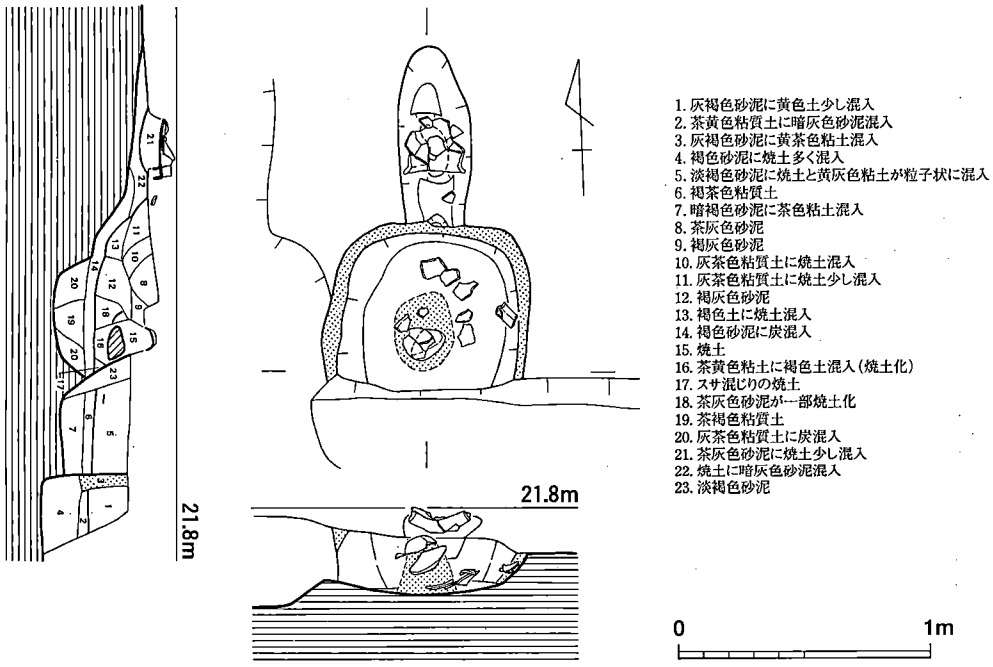
主柱穴は214号住居内で検出されたが、P_2については土坑に削平されたと考えている。柱間



第７図　215号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第8図　215号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）



第9図　216号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

隔ガ2.4m、2.5mを測り、推定される竪穴部の規模とつりあいが取れる。

カマド（図版10、第9図）　北壁中央部に付設されたと考えられる突出型カマドである。突出部の一部も215号住居に削平されているようで、奥行で62cm、80cmの幅の掘り方が残ってい

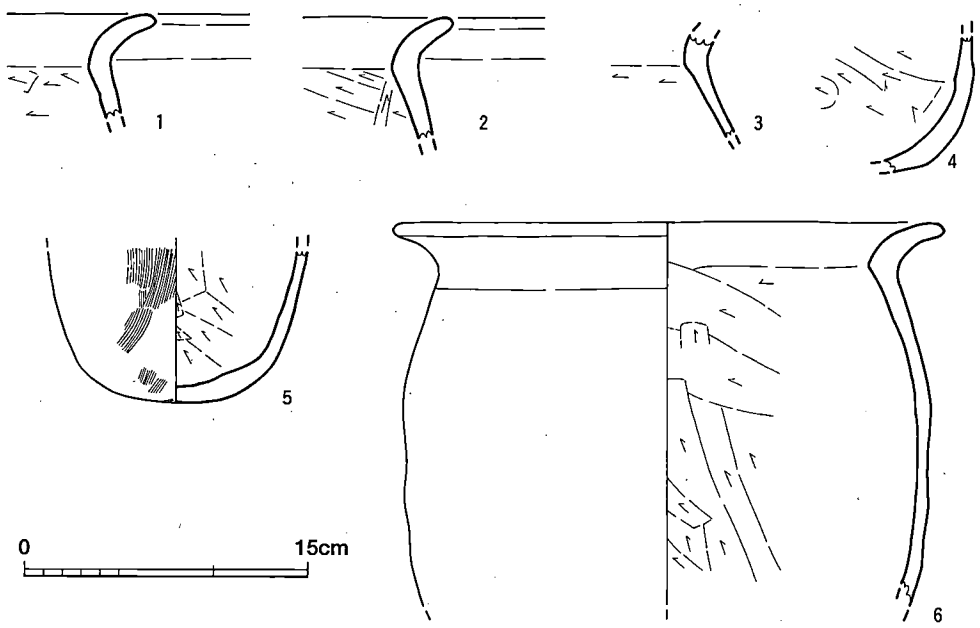
る。壁体は掘り方に貼付して積み上げており、約５㎝の厚みで、20㎝前後の高さが遺存する。

火床面は地山面より５㎝～15㎝上方で、埋土に焼土や炭化物が混入しており改修された可能性を持つ。しかし、当初の築造時における地山整形を行う際混入したとも考えられ、改修された可能性があるに止めたい。支脚は火床面の中央部に位置する。甕を逆位で使用しているが、底部付近と甕内に充填していた粘土が残る。通有の甕の大きさだと５㎝程嵩上げして固定したことになる。煙道は検出面で70㎝程残り、最大幅で27㎝を測る。煙道口の下端は火床面より18㎝上方に位置している。この煙道口より22㎝外側に土師器の甕を検出したが、底部を穿孔した甕を煙道の補強材として置いたものであろう。

出土遺物

１～５はカマド内からの出土品であり、６が煙道部の補強材に転用されたと考えられる品。１～３と５は同一固体であろうか。５が支脚として転用されていた品である。

土　器（第10図）　６点とも甕である。１～３と５は胎土等が類似した小型の品であり、上述した様に支脚に転用されたのであろうか。６は頸部内径が21.2㎝、下端の内径が24.7㎝を測る。



第10図　216号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

217号竪穴住居跡（図版８・９、第４図）

214号住居に北東側が大きく削平を受けており、西南部のみ旧態を止めているが、西壁の辺長が5.45ｍを測り、大型規模の住居と推定される。壁面はやや急勾配に立ち上がり、15㎝程の

壁高を測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。遺存する床面では、南側が僅かに低くなるものの、ほぼ水平に近い貼床である。

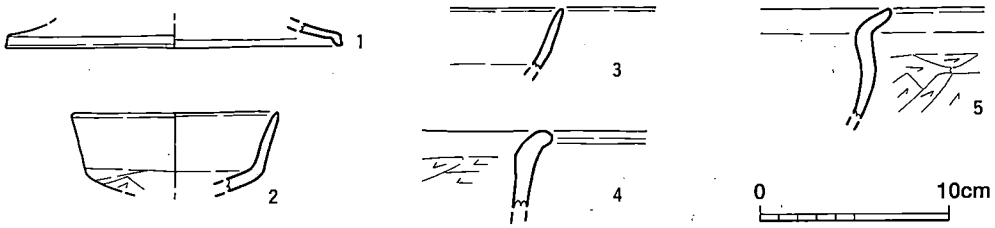
主柱穴は214号住居内で検出したが、柱間隔は2.1m～2.4mを測り、少し長方形気味の平面形態となる配置である。検出面での柱痕の径は12cm～17cmを測った。

カマドは遺存する壁面付近になく、切り合う他の3棟と同じ北壁中央部に付設されていたと推測される。床面下層の遺構は図化していないので不詳となる。

出土遺物

第4図に2点図示しているが、1が南側の床面上より、2が北西隅付近の埋土中より出土した。3は床面下層からの出土品で、他の2点は床面上で出土した。1は須恵器、他は土師器である。

土　器（第11図）　1は坏蓋の口縁部の小片で、端部を少し外反気味に仕上げている。2は少し小振りの坏で、底部外面はヘラケズリを施す。3も小片だが坏であろう。4と5も小片で、鉢の5は体部外面がヘラケズリで、他はナデとヨコナデの調整である。



第11図　217号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

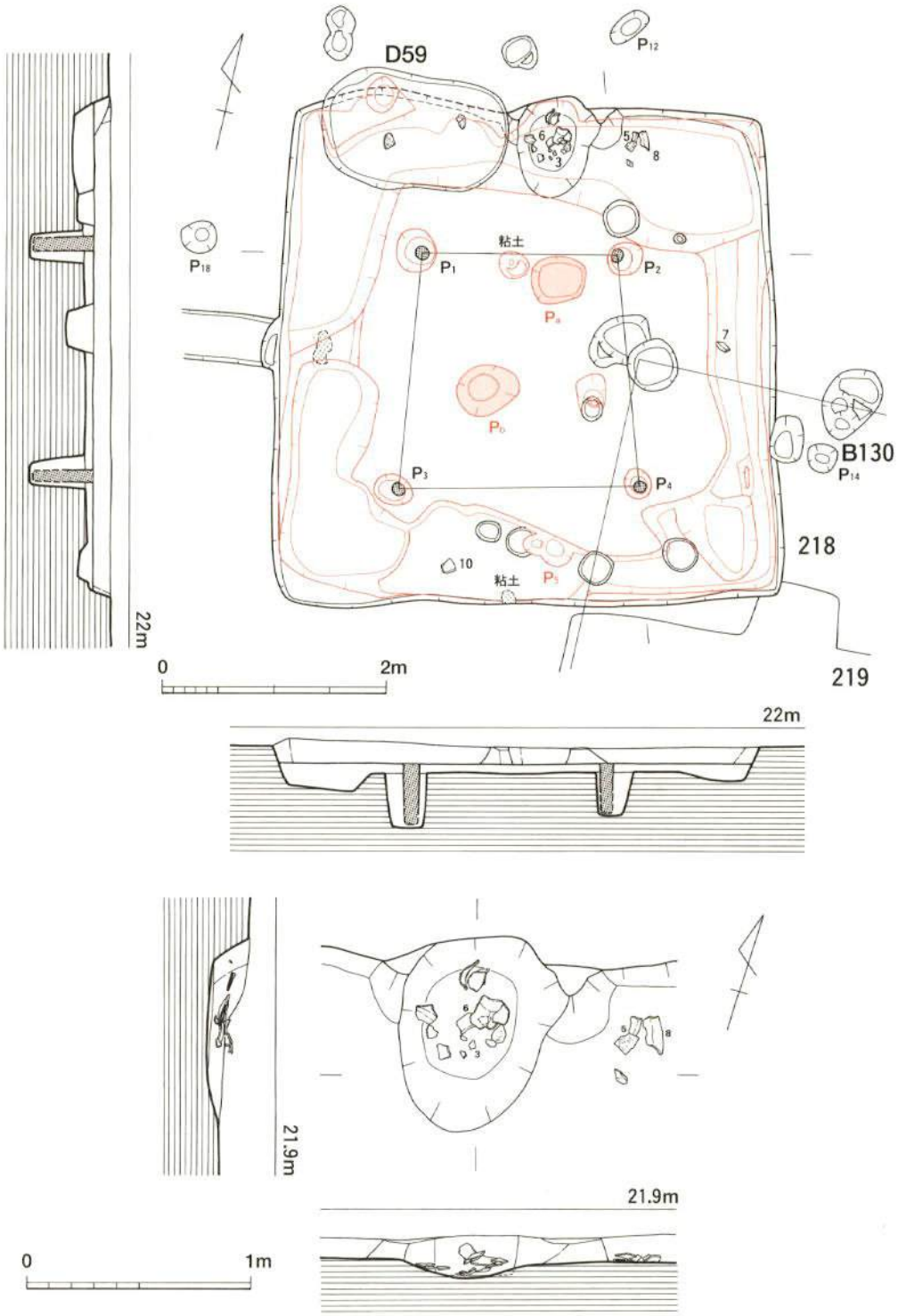
218号竪穴住居跡（図版11、第12図）

調査区の最も西側に位置する住居跡で、竪穴部の南東隅を130号建物に、北東隅を59号土坑に切られ、南東部に位置する130号住居のカマドの一部を切る。

竪穴部のプランは台形に近い隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；4.2m、東壁;4.35m、南壁；4.4m、西壁；4.35mを測る通常の規模のものである。壁高は比較的遺存状態の良い西壁で20cmを測る。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

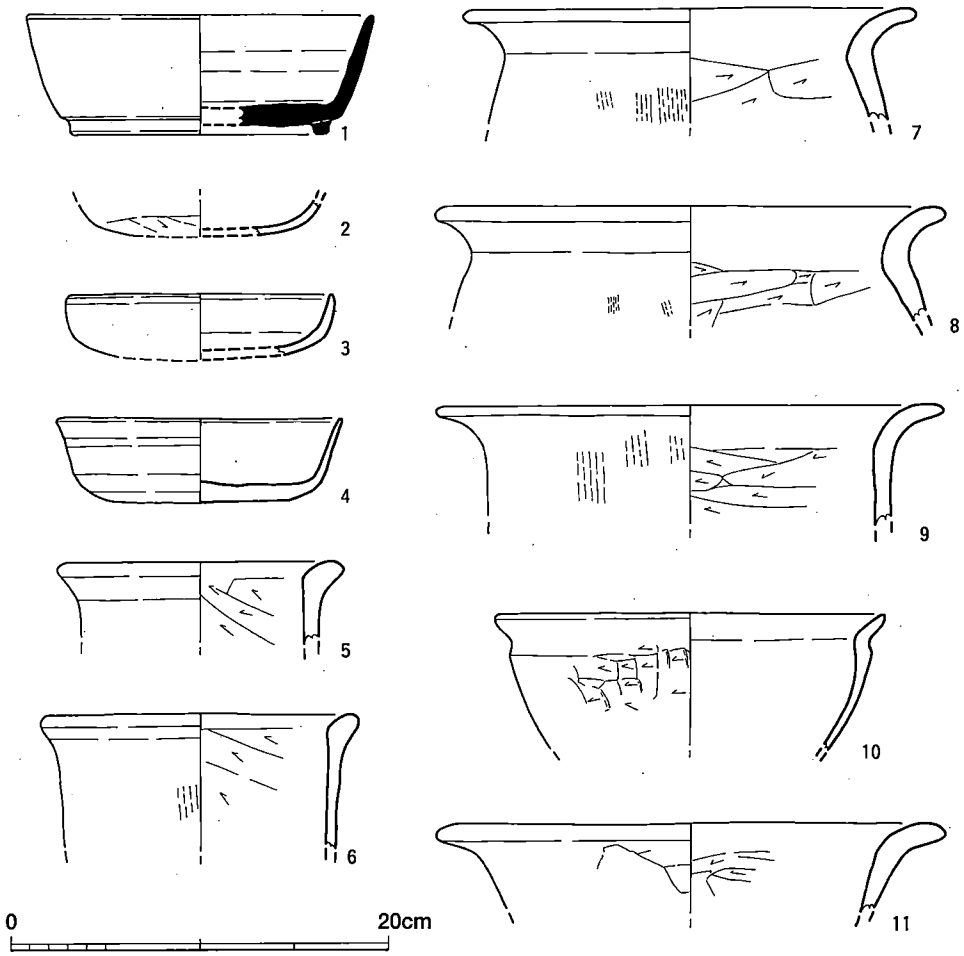
床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。主柱の配置は竪穴部のプランと同様に台形を呈し、各主柱を結んだ線は対応する壁とほぼ平行である。壁小溝は検出していない。

貼床下層の遺構については、中央土坑はないが、周壁に添って掘り込みが廻り、北西部を除いた他の隅角部は一段深く掘り込まれ、壁隅土坑的である。また、貼床下層のP_a（長径；51cm、短径；46cm、深さ；25cm）及びP_b（長径；57cm、短径；45cm、深さ；22cm）の二つのピットの埋土には焼土が多量に含まれていた。この二つのピットは生活面における柱穴ではなく、本住居に伴う可能性があるものの、その性格は不詳である



第12図　218号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

カマド（図版12、第12図）　北壁のほぼ中央に設置されている。壁から25cm突出し、支脚を検出していないが、その位置は竪穴部内に収まる。袖部の遺存状態が悪く、両袖部とも、壁から10cm～15cmの範囲しか残っていなかった。なお、袖部は粘土及び黒褐色土等で造り付けられたものである。

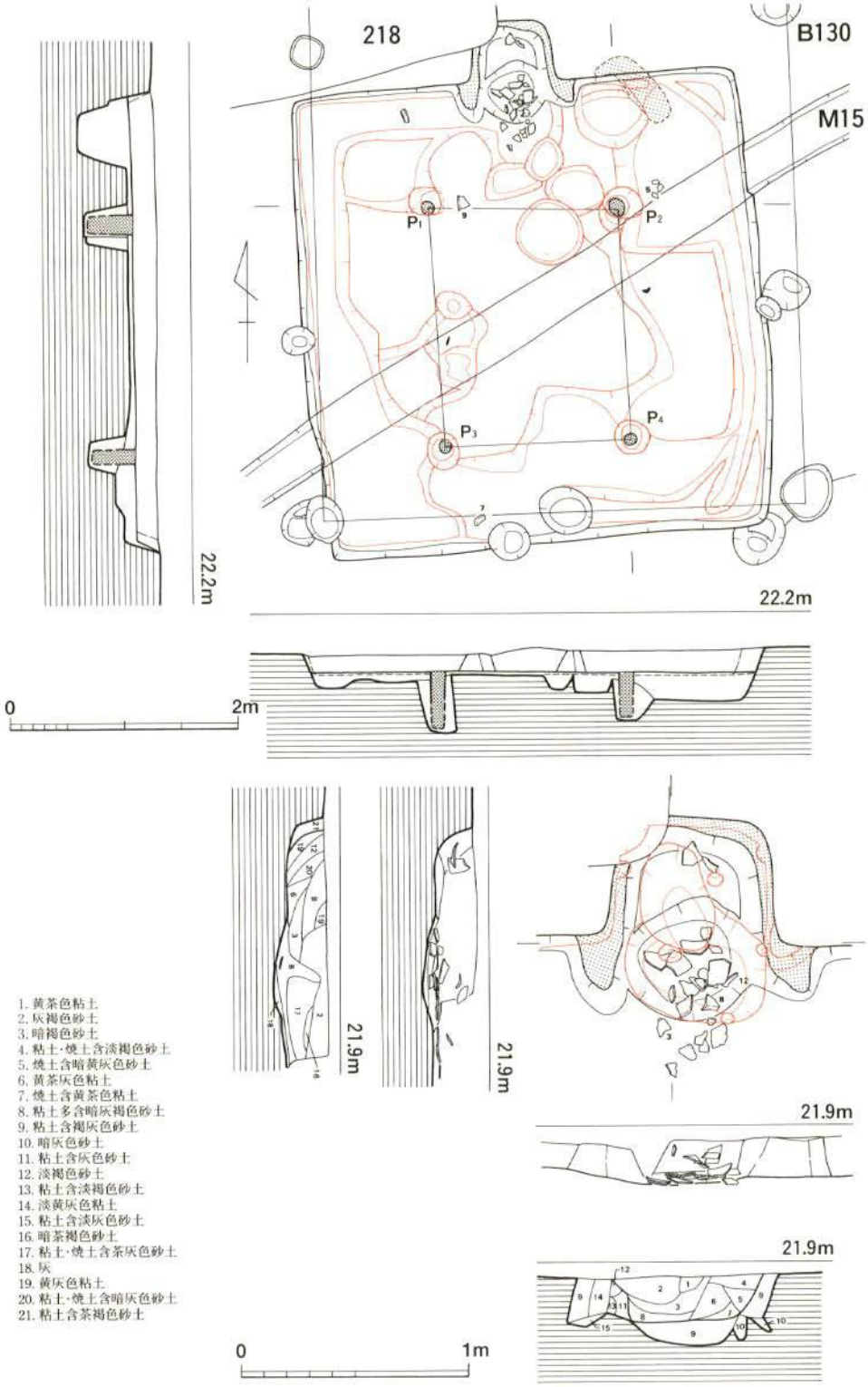


第13図　218号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。3・5・6・8はカマド内及び右袖部の外、7・10は床面、1・4・9は覆土中、2・11は貼床下層において検出した。1は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版48、第13図）　1は口径18.6cm、器高6.3cmに復原される坏である。焼成は良好で緑灰色を呈する。2・3は底部外面に静止ヘラケズリを施した坏で、色調は共に橙褐色を基調とする。4は口径15.2cm、器高4.4cmを測る坏で、体部最下位の幅1cm強の範囲はヘラケ



第14図　219号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

ズリを施している。焼成は良好で淡茶色を呈する。7～9の甕は口径24cm～27cmに復原される。外面の刷毛目は風化により一部に遺存するのみである。く字形の口縁を有する鉢10は、口径20.8cm、現存高7.2cmに復原される。頸部の一部を含めてその下位は横方向の静止ヘラケズリを施している。焼成良好で橙褐色を呈する。11は通常見られる鉢である。底部を欠くが丸底である。

219号竪穴住居跡（図版12、第14図）

218号住居の南東に位置する住居跡で、竪穴部の南及び西壁を130号建物の柱穴に、カマドの一部を218号住居に切られる。また、中央部分を東西に走る幅1m程の現代溝に切られる。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；3.75m、東壁；3.95m、南壁；3.8m、西壁；4mを測る。北壁のほぼ中央にカマドを設置する。

床面は北から南へ向かってやや傾斜するもののほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。貼床面下に検出した主柱穴は、径35cm～40cm、深40cm前後である。壁小溝は検出していない。貼床下層の遺構については、中央土坑はないが、掘り込みが廻り、北東隅に壁隅土坑を検出した。

カマド（図版12、第14図）　北壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。突出部は隅円方形の掘り方で、幅71cm、先端が竪穴部から50cm突出する。突出部の周壁に幅5cm～8cmの粘土を貼り付けている。両袖部とも竪穴部内に延び、高さ15cm前後、長さ15cm～20cmの範囲が残っていた。火床面は住居の床面より5cm程低い。支脚は検出しておらず、住居の廃棄時に除去されたものであろう。

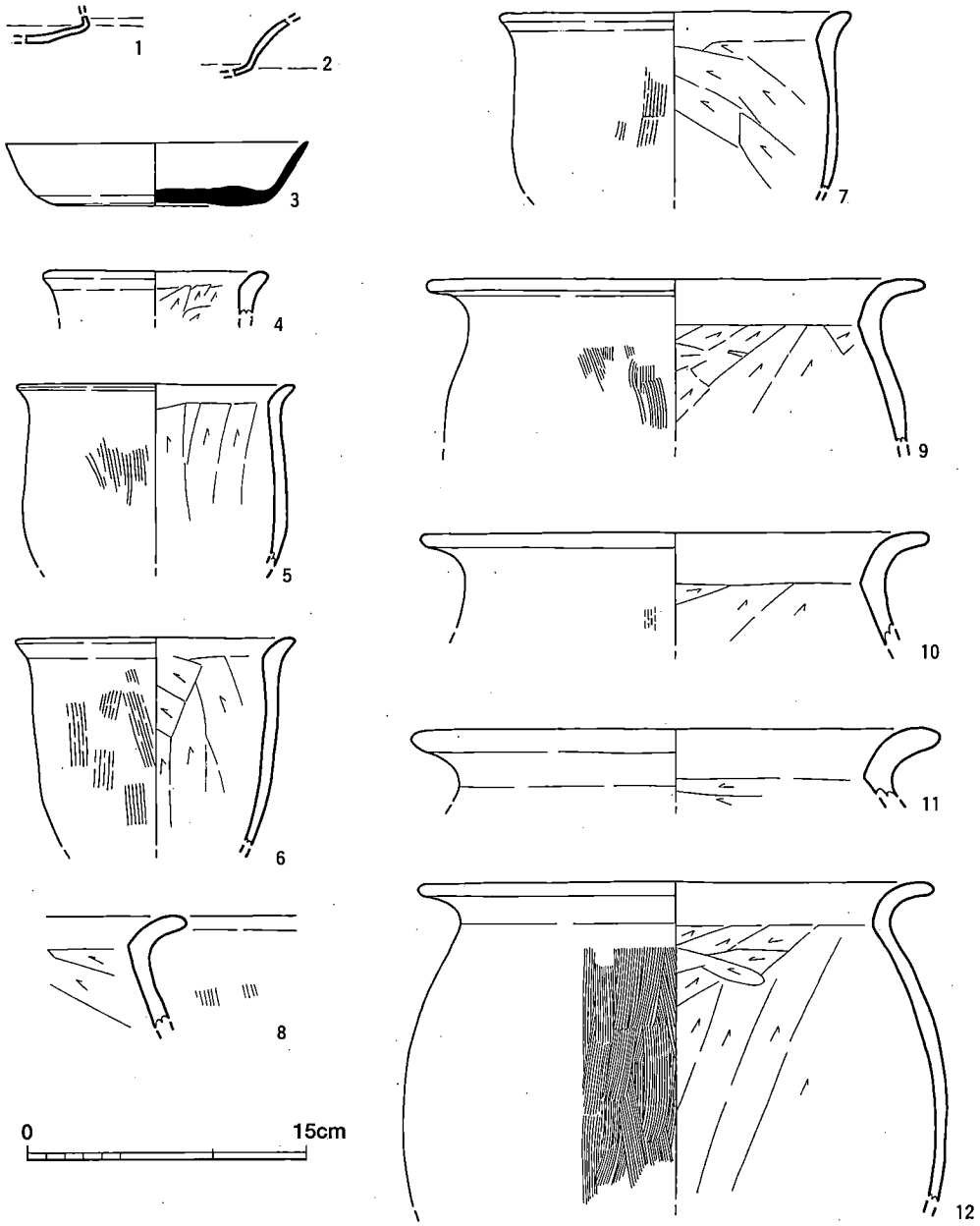
出土遺物

土師器・須恵器が出土している。3・8・10・12はカマド内、5・7・9は床面、6は覆土中、1・2・11は貼床下層において検出した。3は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第15図）　1・2は坏の小片である。焼成は良好で橙褐色を呈する。3は口径15.2cm、器高3.4cmを測る坏身で、焼成不良で白黄色を呈する。4～7は口径12cm～19cmの小型の甕で、通常は支脚として使用されることが多い。8～12の甕は口径28cm前後に復原される。12を除き外面の刷毛目は風化して一部が遺存するのみである。8～12の甕は焼成良好で橙褐色～褐色を呈する。

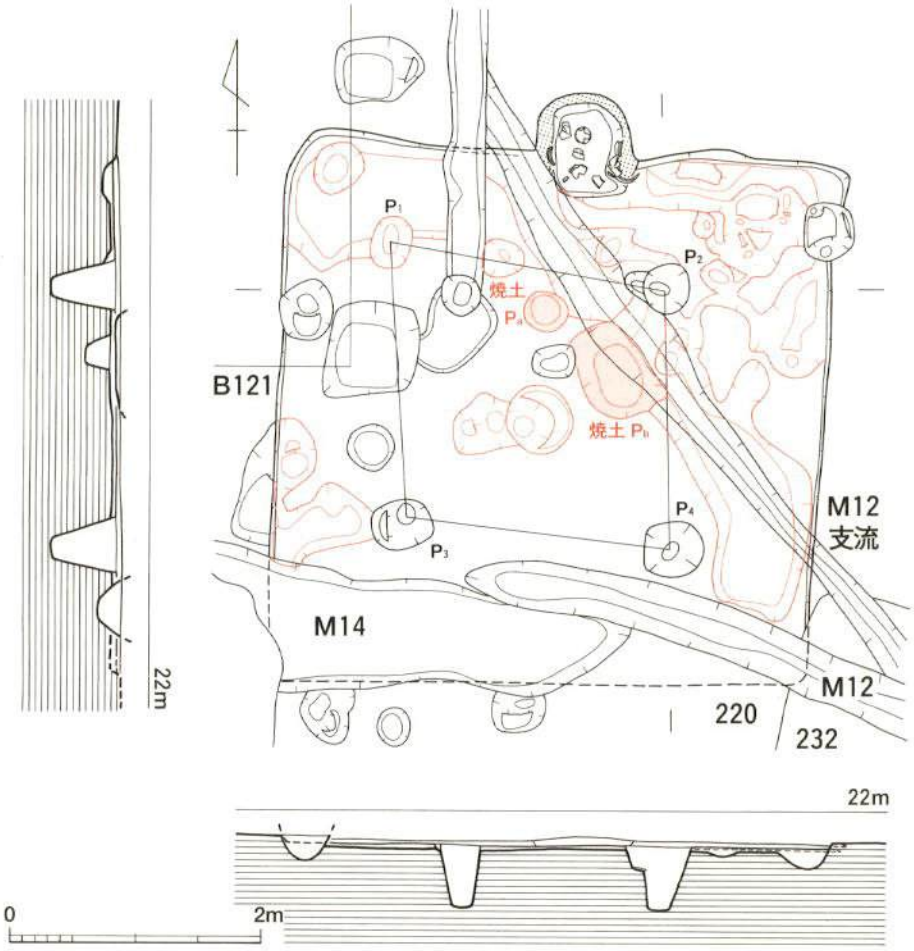
220号竪穴住居跡（図版13・14、第16図）

219号住居の東に位置する住居跡である。竪穴部は、南壁を溝12・14号に切られ、北西部は121号建物と、南東隅は232号住居と重複する。さらに、12号溝支流がカマド左袖から竪穴部の東壁を斜交して切り、北壁を南北溝が切っている。このように、本住居は後世の遺構に切り刻まれている。



第15図　219号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；4.35m、東壁；4m程、西壁；4.3m程南壁は不明であるが、通常の規模のものである。壁は遺存状態が悪く2～3cmを測るのみである。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

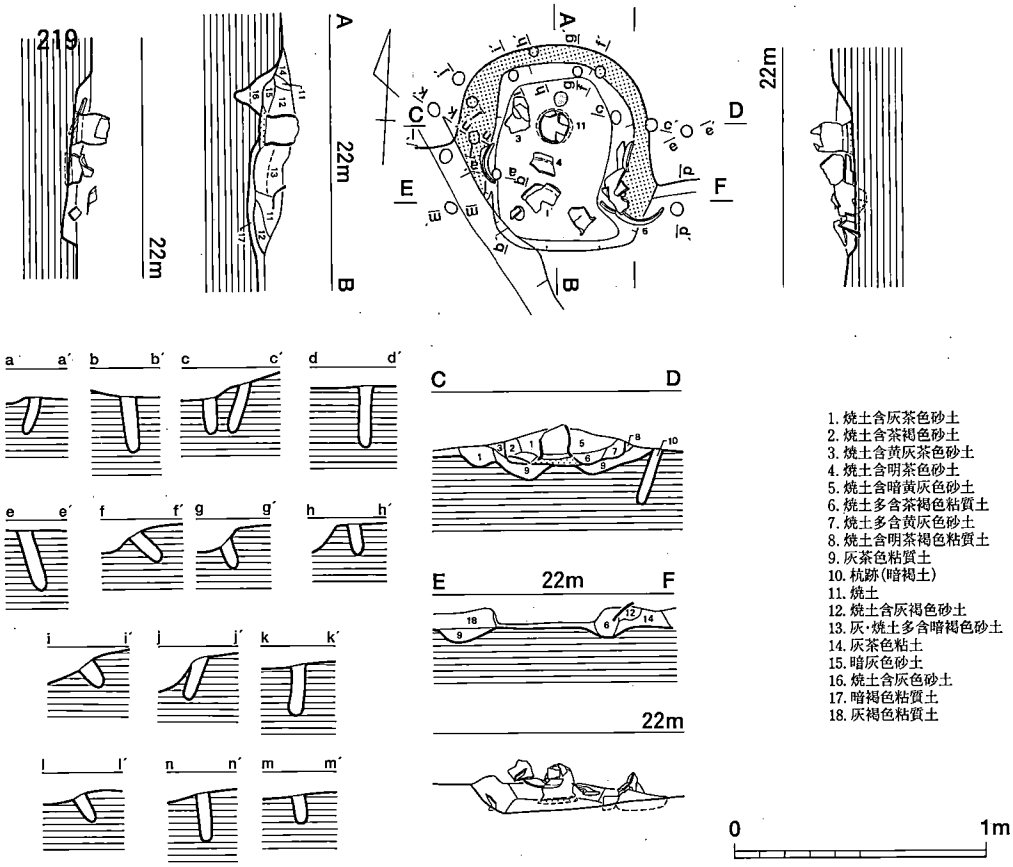


第16図　220号竪穴住居跡実測図（1/60）

床面は北から南へやや傾斜するもののほぼ平坦で、主柱穴（P_1～P_4）を検出した。主柱穴は、径30cm～50cm、深さ50cm前後である。壁小溝は検出していない。

貼床下層の遺構については、中央土坑及び壁隅土坑は掘られていない。掘り込みを明確に検出したのは北壁際だけである。218号住居と同様に、貼床下層に焼土を多量に含む二つのピットP_a（長径；35cm、短径；32cm、深さ10cm）、P_b（長径；80cm、短径；54cm、深さ８cm）を検出した。

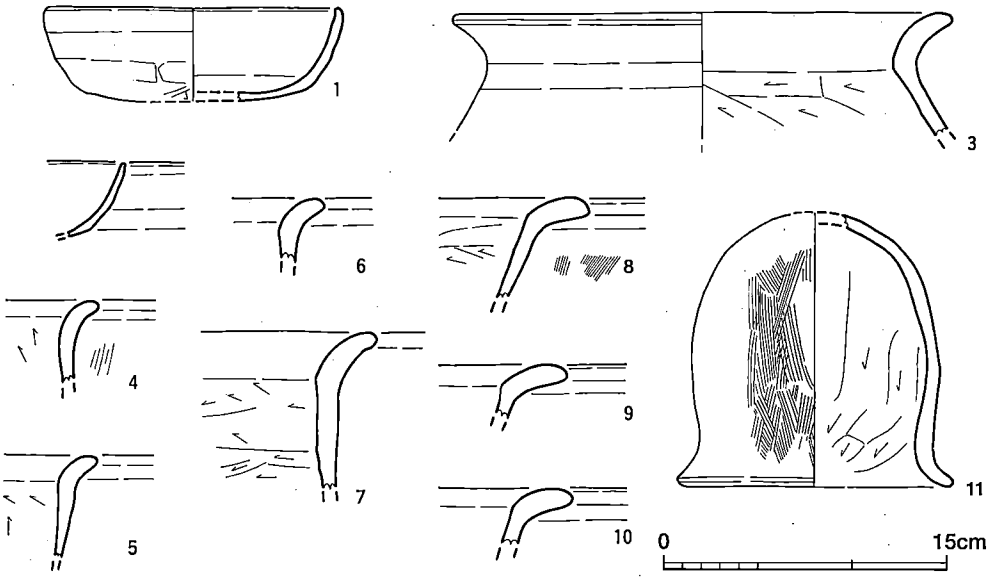
カマド（図版13・14、第17図）　北壁のほぼ中央に設置さた突出型のカマドである。突出部は隅円方形～円形の掘り方で、幅78cm、先端が竪穴部から右袖側を基準に55cm突出する。突出部の周壁に幅７cm～15cmの粘土を貼り付けている。両袖部とも竪穴部内に伸びる。左袖においては不明だが、右袖の前端は割った甕の胴部を用いて補強し、左右の壁も同様に補強している。



第17図　220号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

袖部は、上述の右袖の前端の甕までで、それ以上は長くならないことは、後述する小ピットの位置関係からも首肯されよう。

また、カマドの壁体～天井部を造るに際し、その芯とした植物性補強材（竹又は樹木）の痕跡の小ピット検出した。ピットの並びは不揃いだが、カマドの外側、内側にほぼ対に配されている。確認した16個のこれらのピットは径４～５㎝、深さはカマドとの位置関係に左右されることなく検出面から11㎝～25㎝を測る。これらのピットは掘られたものか、部材を打ち込んだものか不明であるが、垂直に穿たれたピットは少なく、カマドの内側のピットはカマドの中心側に傾斜し、カマドの外側のピットは同じく外側に傾斜する傾向にある。火床面は住居の床面より５㎝程低い。支脚はカマドのほぼ中央、掘り方の先端部上端から32㎝内側の部分を中心に小型甕を倒立してセットし支脚としている。支脚下の地山は３㎝程高く掘り残され、その上に厚さ２㎝程の粘土を円形に敷き、小型甕をセットしている。



第18図　220号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器が出土しているが図示できるのは土師器である。1・4・5はカマド内、3はカマド左壁に補強のために使用された甕、11は支脚である。2・6・8～10はカマド埋土中から出土した。

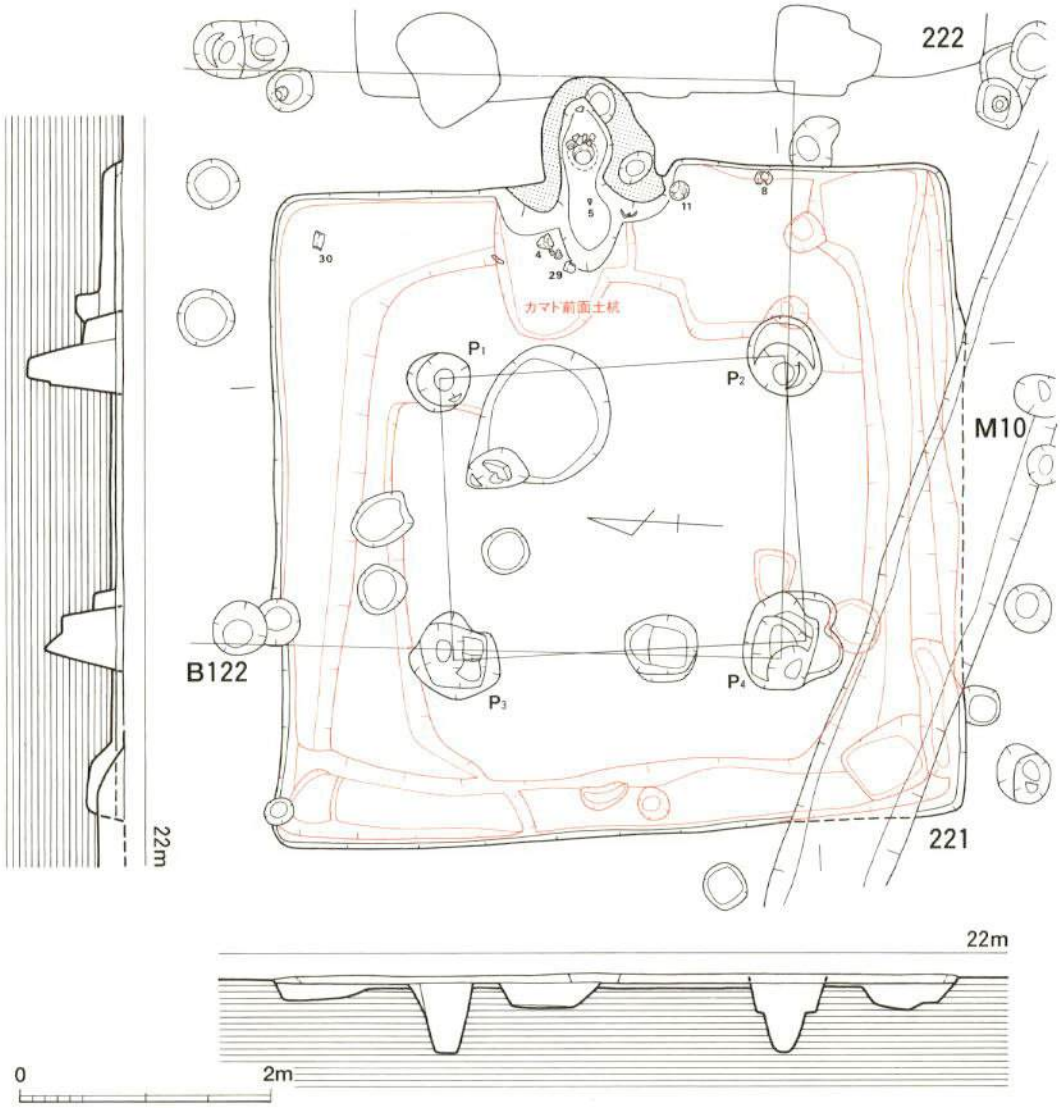
土　器（図版48、第18図）　1・2は坏の小片で、1は口径15.8cm、器高6cmに復原される。ともに焼成は良好で淡茶褐色を呈する。3は口径26.6cmに復原される甕で、焼成は良好で茶褐色を呈する。4～6は通常は支脚として使用されることが多い小型甕の破片である。7は甑の破片である。焼成良好で淡茶褐色を呈する。8～10は鉢の破片である。焼成は良好で、橙褐色～茶褐色を呈する。

221号竪穴住居跡（図15版、第19図）

220号住居の東に位置する住居跡で、竪穴部の南壁を10号溝に切られ、主柱穴P_2～P_4が122号建物の柱穴に切られる。カマドが、東接する222号住居をわずかに切っている。しかし、竪穴部のプランを窺うに支障はない。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、東壁；5.25m、南壁；5.16m、西壁；5.5m、北壁；5.16mを測る大型のものである。壁高は遺存状態が悪く10cm程度である。東壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

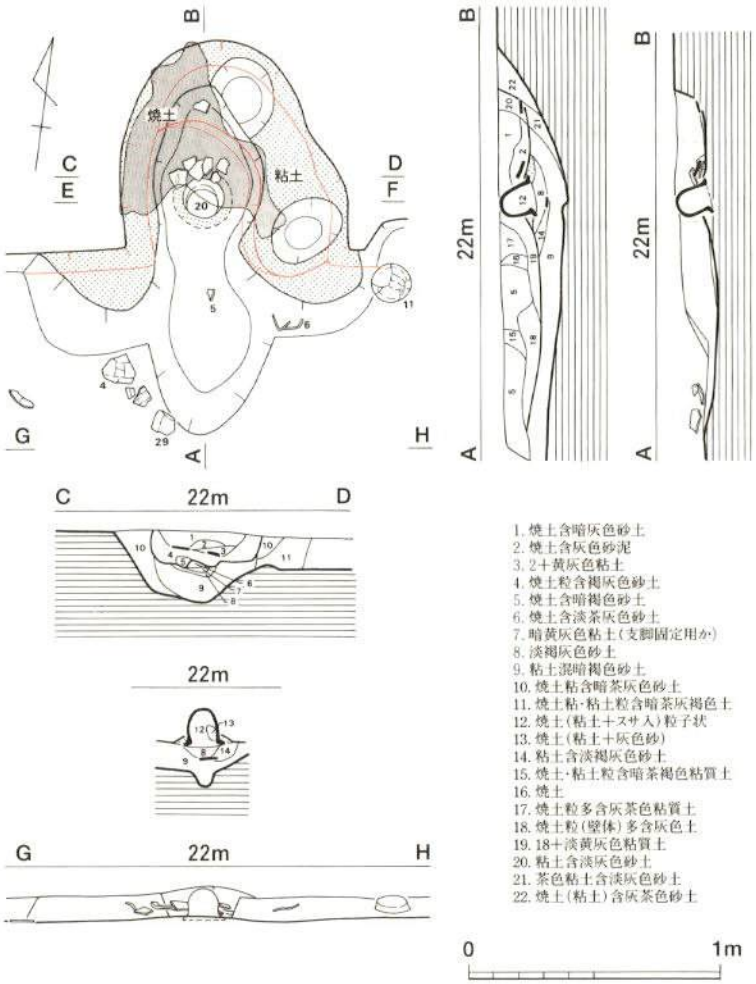
床面はほぼ平坦で、主柱穴（P_1～P_4）を検出した。主柱穴P_2～P_4は、122号建物の柱穴P_4・P_6・P_7とほぼ完全に重複して切られている。



第19図　221号竪穴住居跡実測図（1/60）

貼床下層の遺構については、中央土坑はない。周壁に添って幅の狭い掘り込みが廻る。南西隅に小規模ながら壁隅土坑と思われる遺構を検出した。

カマド（図版15、第20図）北壁のほぼ中央に設置さた突出型のカマドである。突出部は略長円形の掘り方で、最大幅89㎝、先端が竪穴部から81㎝突出する。突出部の周壁に幅10㎝～45㎝の粘土を貼り付けている。両袖部とも竪穴部内に伸び、高さ10㎝前後、壁から20㎝前後までが残っていた。火床面は住居の床面より５㎝ほど低い。支脚は、小型甕を倒立して、カマド掘り

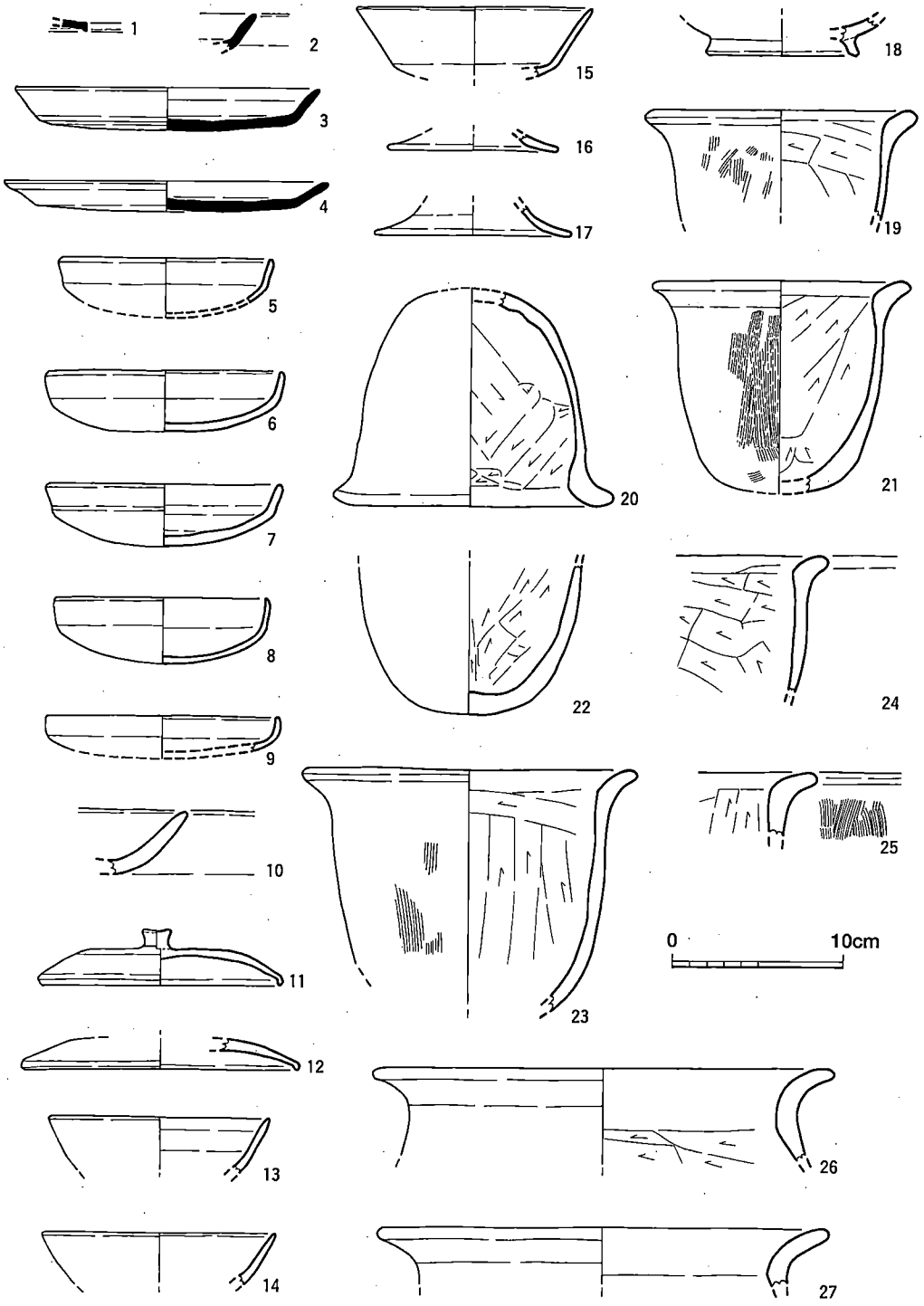


第20図　221号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

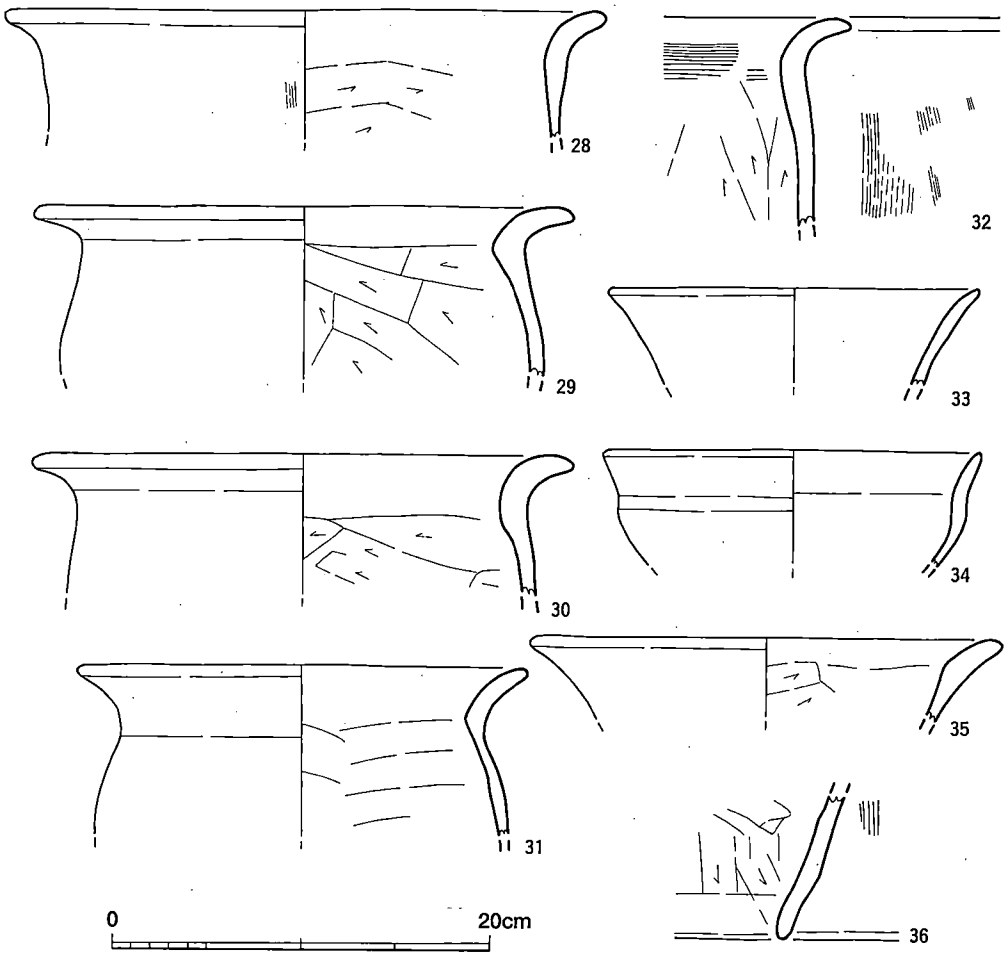
方先端上端から62cmのところを中心に、粘土の上にセットしている。縦断面によると、最終の火床面より、支脚のセット面が3cm～5cm程下にあり、甕の口縁部が埋まっている。

出土遺物

土師器、須恵器及び焼塩土器が多量に出土している。4・5・6・12・29・31はカマド内、8・11は床面、19・24・25・30・32はカマド前面土坑埋土中、1・2・3・7・9・10・14・18・22・26・28・34・35は覆土中、13・15・16・21・33・36は貼床下層において検出した。17はP_1埋土中から、27はP_3・P_4間のピットから検出した。なお、20は支脚である。23は南壁際の床面下層の掘り込みに検出した。1～4は須恵器、その他は土師器である。23は本住居に伴う。



第21図　221号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）

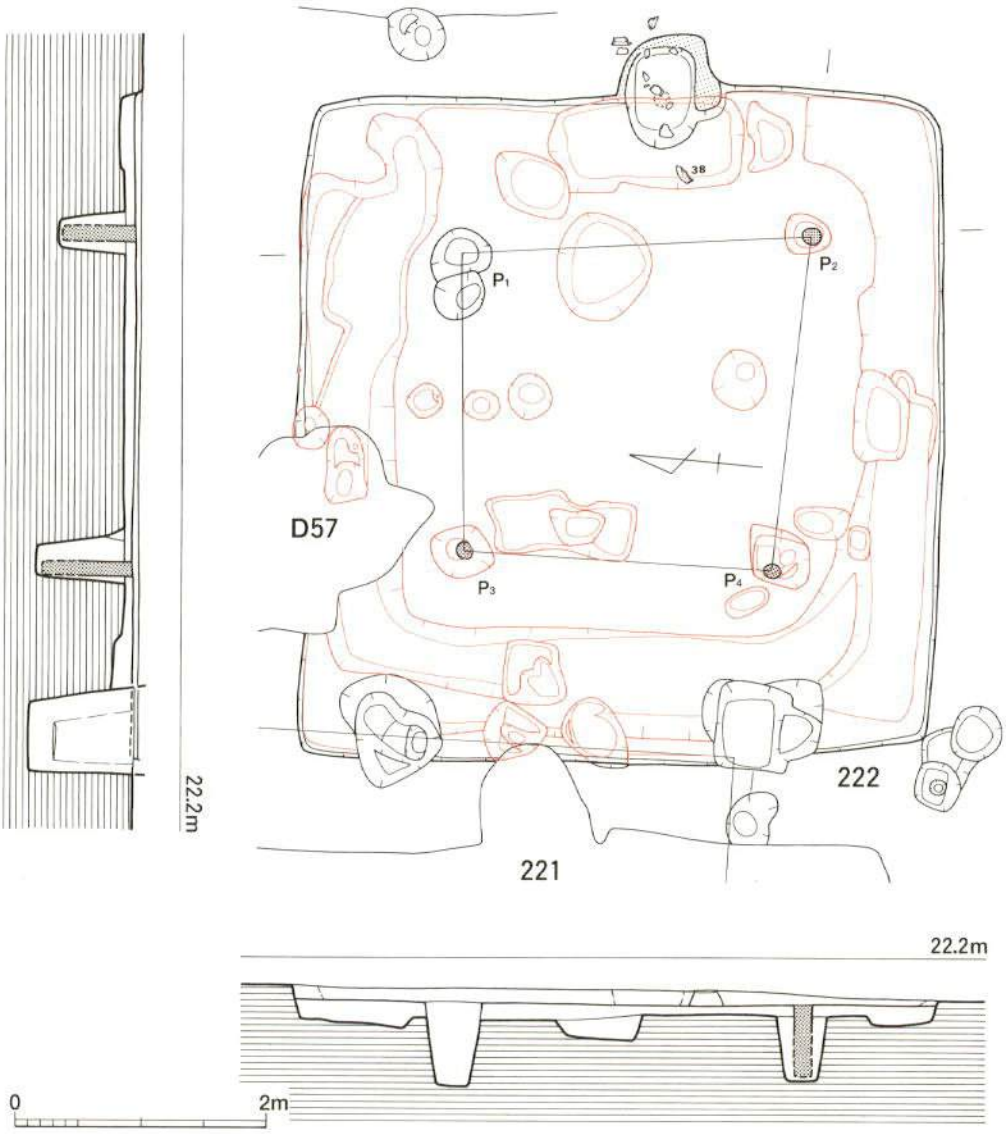


第22図　221号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

土　器（図版49、第21・22図）１は坏蓋の小片である。焼成は良好にして硬質で灰色～淡灰色を呈する。２～４は皿で、３は口径18cm、器高2.5cm、４は口径19.2cm、器高1.8cmに復原できる。ともに、焼成は甘く、緑灰色～灰白色を呈する。５～10は坏で、大型の破片資料10を除き、口径12.6cm～13.9cmに復原される。ともに橙褐色を呈する。11・12は坏蓋で、11は口径14.4cm、器高3.3cmに復原される。12の復原口径は16.4cmである。ともに焼成良好で橙褐色を基調とする。13・14・18は坏で18は高台部分の破片である。15は高坏の坏部かと思われ、16・17は高坏の脚部である。これらは、焼成が良好で橙褐色を基調とする。19～25は小型の甕で、20は支脚である。他の小型甕も本村落では通常は支脚に供されるものである。22は口径16.6cm、器高12.7cmを測る。内面のヘラケズリが著しく、口縁部に比べて体部の器壁は薄い。26・27・29～31は通常の甕の破片資料で、口径23.4cm～28.8cm程に図上復原される。28・32・36は甑の破片資

料である。28は口径32cmに復原される。33は器種が不明ながら、34・35は鉢である。34はく字形の口縁の鉢で、口径20.2cm、現存高6cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。35は通常多く見られる鉢で、口径25cm程に復原される。

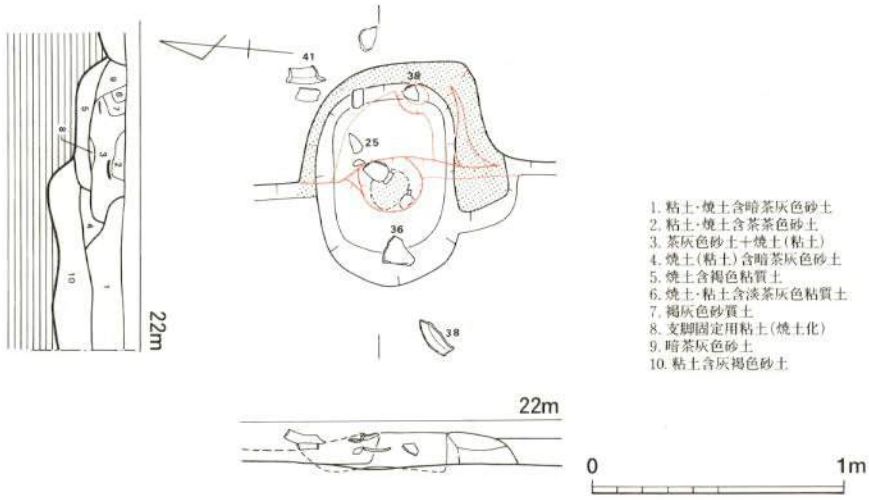
焼塩土器（図版67、第181図）　覆土中から4点出土している。詳細は後述する。



第23図　222号竪穴住居跡実測図（1/60）

222号竪穴住居跡（図15版、第23図）

221号住居の東に位置する住居跡で、竪穴部の北壁を57号土坑に切られ、西壁を122号建物の



第24図　222号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

柱穴P_5・P_8に、西接する221号住居のカマドに切られる。しかし、竪穴部のプランを窺うに支障はない。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、東壁；4.62m、南壁；4.92m、西壁；4.9m、北壁；5.21mを測る大型のものである。壁高は遺存状態が悪く10cm弱である。東壁の中央南寄りに突出型のカマドを設置する。

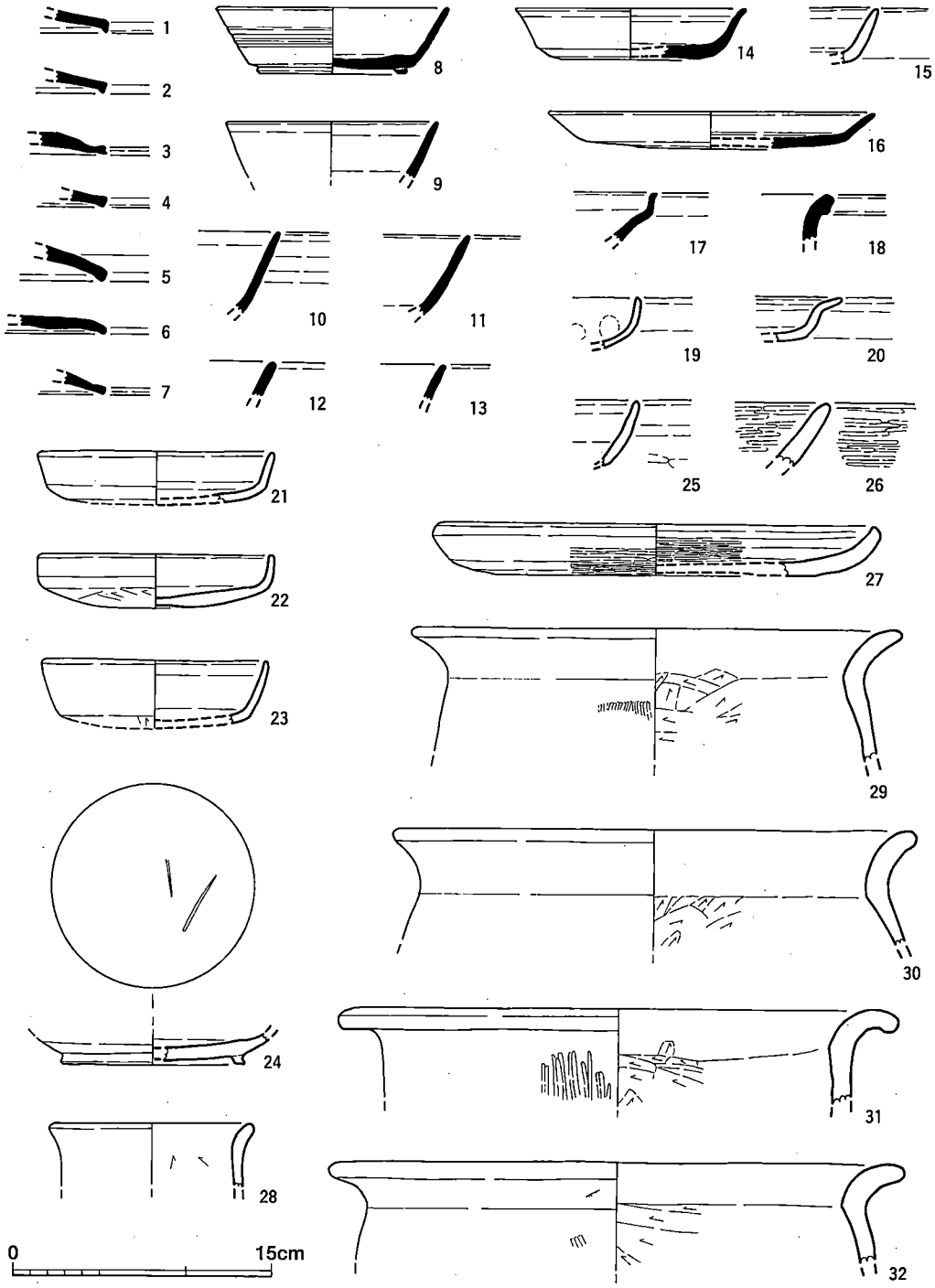
床面はほぼ平坦であるが、主中間エリアがやや低くなっている。主柱痕（P_2～P_4）を検出したが、P_1は柱痕を確認できず、主柱穴のみを検出した。

貼床下層の遺構については、中央土坑はないが、周壁に沿って掘り込みが廻る。カマドの火床前面の下層に、上端で長軸161cm、短軸71cm、深さ10cm程の長方形の土坑が掘られている。壁隅土坑に類したものであろうかと推測される。

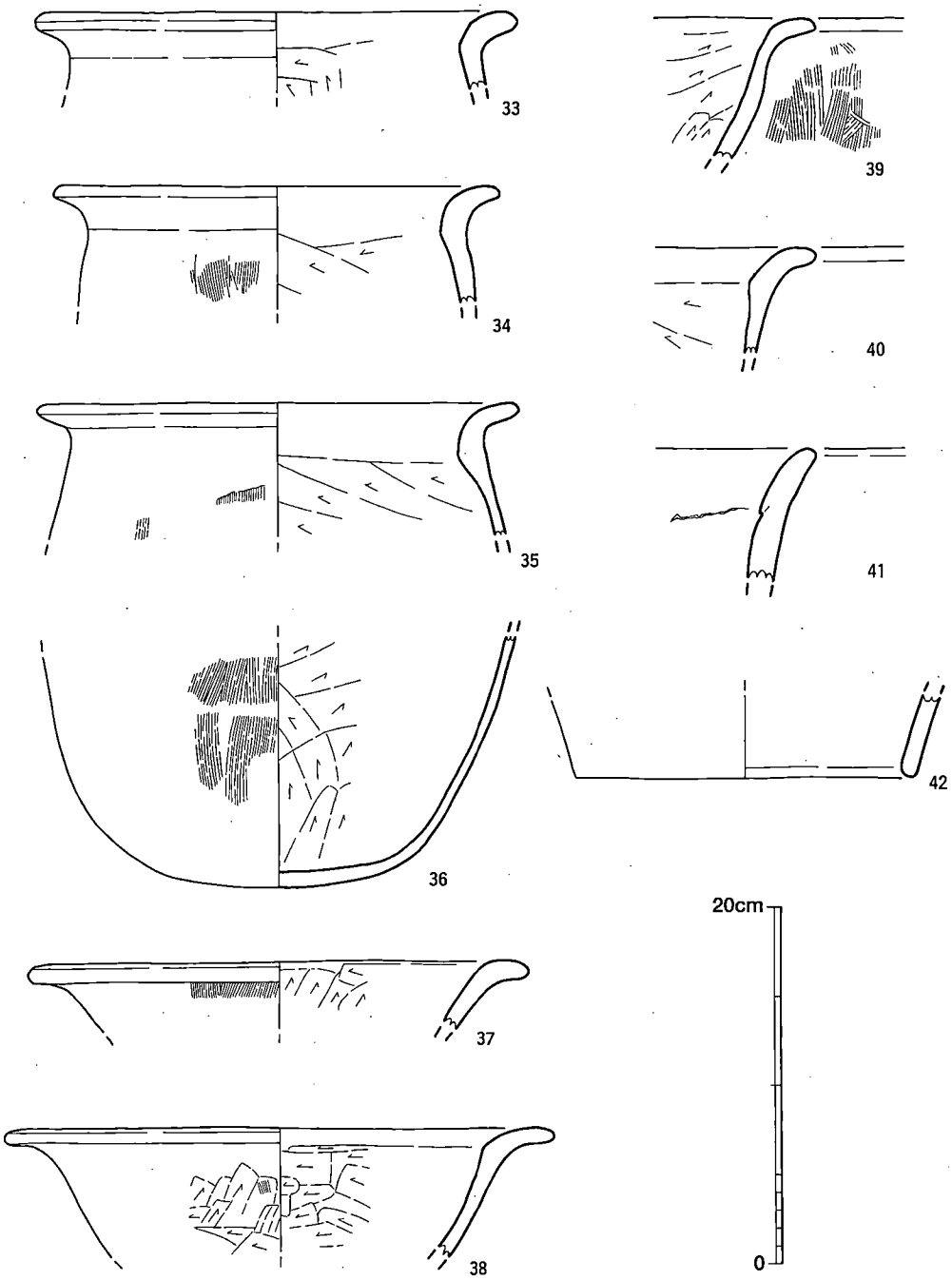
カマド（第24図）　東壁のほぼ中央南寄りに設置さた突出型のカマドである。突出部は略隅円方形の掘り方で、最大幅80cm、先端が竪穴部からほぼ40cm突出する。突出部の周壁に幅10cm～20cm程の粘土を貼り付けている。左袖部は破壊されているが、右袖部は竪穴部内に伸び、高さ13cm前後、壁から20cm前後までが残っていた。支脚は、検出していないが、小型甕をセットした粘土を検出した。それは、カマド掘り方先端上端から50cmのところを中心にした部分である。支脚は、住居廃棄時に、取りはずされたものであろう。なお、カマドの外に図示した土師器3点は50号土坑に伴うものである。

出土遺物

土師器、須恵器、焼塩土器及び鉄製品が出土している。12・16・19・25・38・41はカマド内、37・39はカマド前面土坑埋土中、3・6・8・13・14・17・18・20・24・26・27・28・30・32



第25図　222号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第26図　222号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

・33・34・36・42は覆土中、1・2・4・5・7・10・11・15・21・23・29・35・42は貼床下層、32はP_2から検出した。1～18は須恵器、その他は土師器である。先述のように、カマドの外に図示した土師器3点は50号土坑に伴うものである。

土　器（図版49、第25・26図）　1～7は坏蓋小片である。焼成は良好にして硬質で灰色～淡灰色を呈する。8～11は坏身で、8は口径13.6cm、器高3.9cm、9は口径12.2cmに復原できる。4点ともに、焼成は良好で灰色を呈する。12・13は小片のため器形が不明だが坏身か皿であろう。14～16は皿である。14は口径13.4cm、器高2.9cm、16は口径19cm、器高2.1cmに復原される。ともに焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。17・18は甕の小片である。19～25は坏で、21は口径13.8cm、器高3cm、22は同じく13.4cm、3cm、23も13.2cm、3.7cmに復原される。高台の付く24は内底面にヘラ記号がある。25は外面下半にヘラミガキを施す。これらは総じて焼成良好で、淡褐色～橙褐色を呈する。26は小片のため器形が不詳であるが、浅い鉢状のものであろう。内外面とも丁寧なヘラミガキを施した精製土器である。表面は化粧土を施したようであり、橙色を呈する。27は口径25.6cm、器高2.9cmに復原される皿である。内外面には丁寧なヘラミガキを施し、焼成は良好で、内面は暗褐色、外面は橙色を呈する。29～36は大型の甕破片資料である。口径24cm～33cm前後に復原される。ともに橙褐色を呈する。37・39・40は鉢の破片資料である。37は口径28cm、38は同じく30.6cmに復原される。焼成良好で淡橙褐色を呈する。40・41・42は甑の破片資料である。褐色を基調とするが、火を受けて黄変している。

焼塩土器（図版67、第181図）　覆土から5点出土している。詳細は後述する。

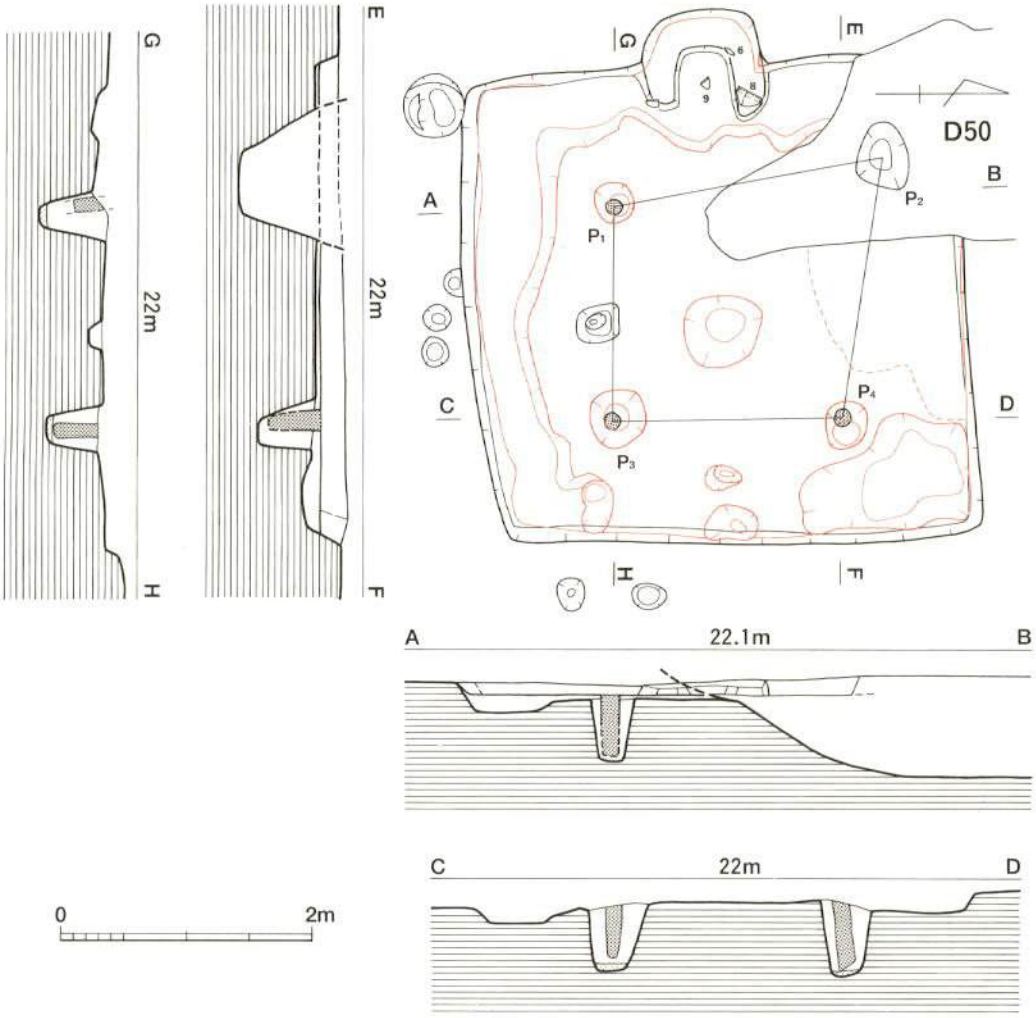
鉄製品（図版75、第187図）　覆土から、刀子片3点、釘かと思われる破片1点の計4点出土している。詳細は後述する。

223号竪穴住居跡（図版15、第27図）　222号住居の東に位置し、竪穴部の北西隅を57号土坑に切られている。

竪穴部のプランは台形に近い隅円方形を呈し、各壁の長さは、東壁；3.77m、南壁3.65mで、57号土坑に切られた西壁；3.25m、北壁；2.55m分が残る。やや小型の規模のものである。壁高は比較的遺存状態の良い北壁で20cmを測る。西壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1・P_3・P_4）を検出した。P_2は57号土坑に切られているため、主柱穴のみを検出した。主柱の配置は竪穴部のプランに整合せず、いびつである。竪小溝は検出していない。

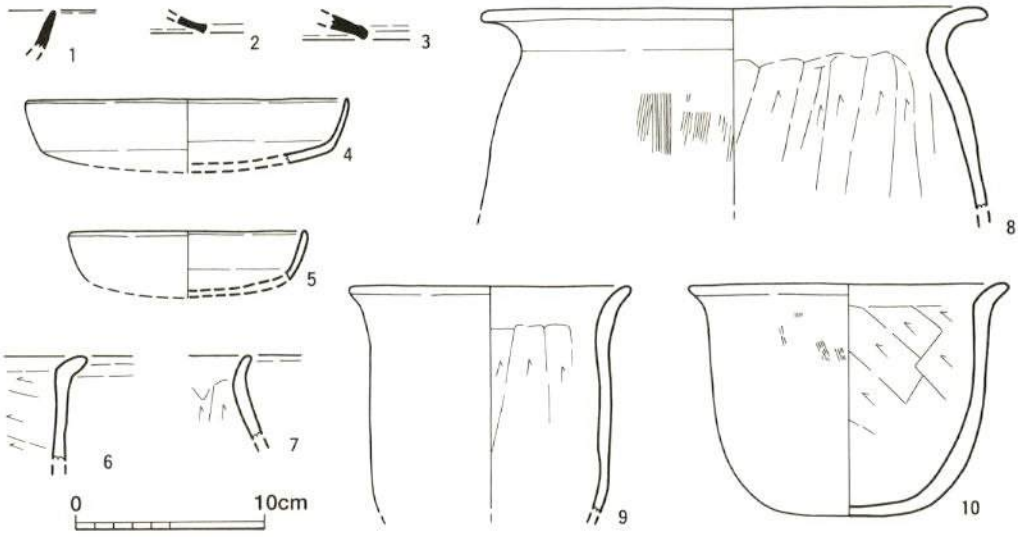
貼床下層の遺構については、通常見られる中央土坑ではないが、中央に径65cm前後、深さ5cm程の浅いくぼみがある。西・南壁に添って掘り込みが廻り、北東隅に壁隅土坑がある。北壁際に浅い掘り込み状の遺構を検出し、この部分は径3cm前後の浅い小ピットが密集しており、緩やかにくぼんでいる。また、カマド対面の東壁中央に、直径40cm、短径25cm、深さ19cm程の



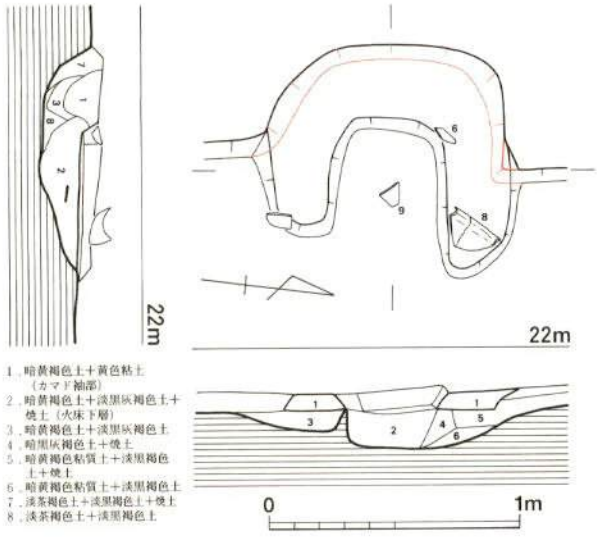
第27図　223号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド対面土坑を検出した。

カマド（第29図）　西壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。掘り方は不整形な隅円方形を呈する。掘り方先端は右袖側を基準に計測すれば竪穴部から50cm突出する。壁体は粘質土や黒褐色土により構築され、残りの良い右袖部は壁から35cmの範囲が残っている。火床は、奥行き60cm、幅40cm程で、住居の床面よりやや低い。セットされた状態での支脚を検出していない。小型甕の破片がカマド内（9）、同じく外（10）から出土しており、住居の廃棄時に取りはずされたものであろう。その位置は竪穴部内に収まる。袖部の遺存状態が悪く、両袖部とも、壁から10cm～15cmの範囲しか残っていなかった。なお、袖部は粘土及び黒褐色土等で



第28図　223号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第29図　223号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

造り付けられたものである。

出土遺物

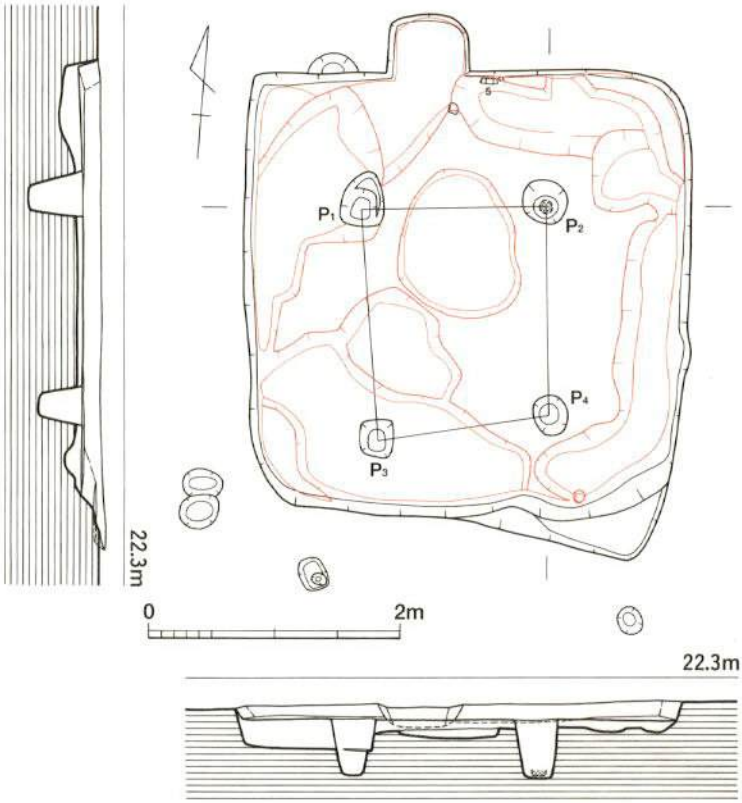
土師器、須恵器が出土している。9はカマド内、6・8は右袖上、2・3・5・7は右袖部の外、1・10はカマドの外、4は覆土中において検出した。1～3は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版49、第28図）

1は小片のため不詳であるが、坏か皿であろう。2・3は坏蓋の小片である。1は焼成不良であるが、2・3は硬質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。4・5は坏小片である。6は甑片である。7・9・10は小型の甕で、9は口径15㎝、現在高12㎝、10は同じく17㎝、12.2㎝に復原される。ともに、焼成良好で橙褐色を呈する。8は口径27㎝に復原される大型の甕である。焼成良好で茶褐色を呈する。

224号竪穴住居跡（図版16、第30図）

223号住居の北東に位置する。



第30図　224号竪穴住居跡実測図（1/60）

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；3.33m、東壁；3.23m、南壁；3m、西壁3.3mで、小型に属する。壁高は比較的遺存状態の良い東壁で15cmを測る。北壁の中央からやや西寄りに突出型のカマドを設置する。

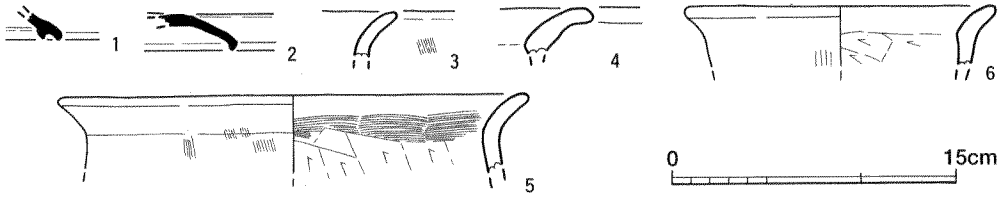
床面はほぼ平坦である。P_2を除き主柱はすでに抜かれており主柱穴（P_1・P_3・P_4）を検出した。壁小溝は検出していない。

貼床下層において、掘り込み、中央土坑、北西隅に壁隅土坑を検出した。掘り込みの幅は一定せず、他の住居と比較してかなり不整形である。また、南東隅を除く竪穴部の隅角部の床面下層の地山は掘り残されて、段がついている。

カマド　北壁の中央やや西寄りに設置された突出型のカマドである。掘り方は隅円方形を呈する。掘り方先端は竪穴部から50cm突出する。袖や壁体は遺存しない。支脚は遺存せず、取りはずされたものであろう。

出土遺物

土師器、須恵器及び土製品が出土している。5はカマド右側の床面上、その他は覆土中から



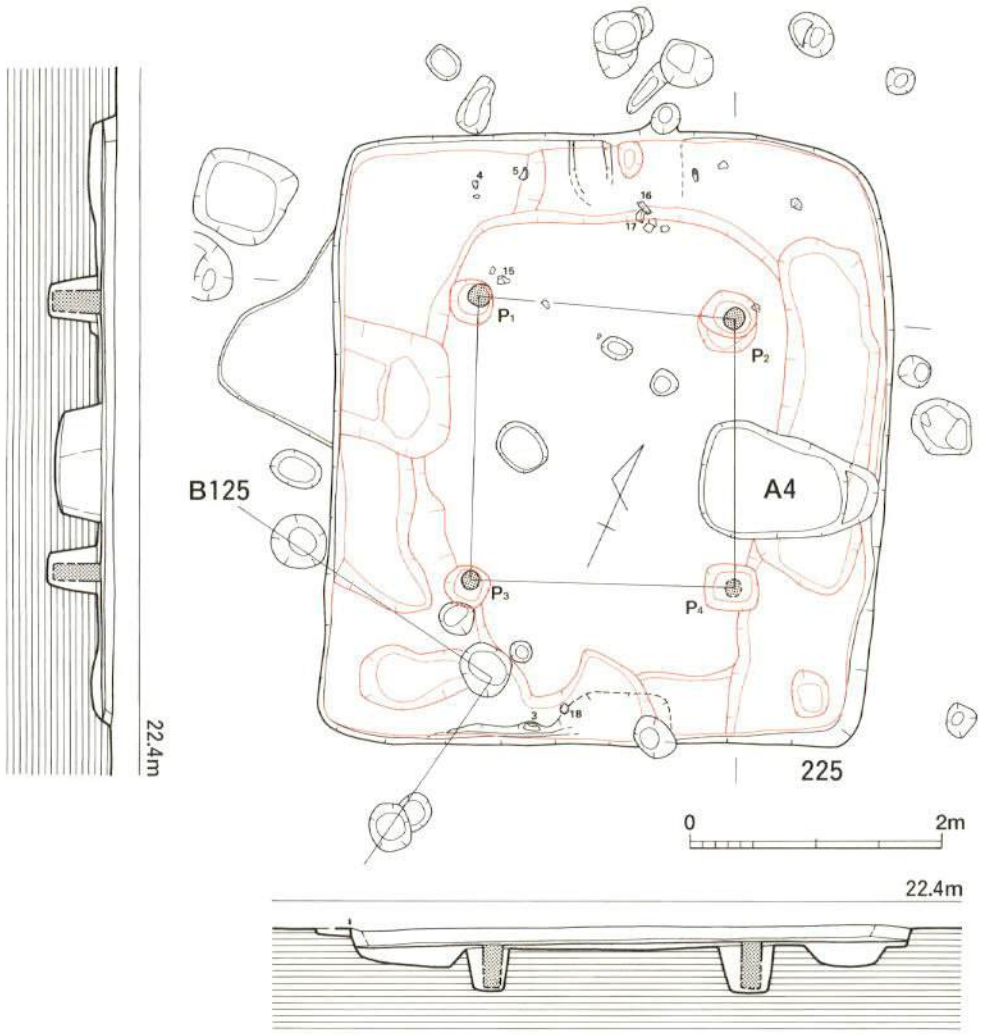
第31図　224号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土した。1・2は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版49、第31図）　1・2は坏蓋の小片である。焼成良好で硬質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。3～6は甕で6は支脚に使用される小型品である。5は口径24.4cm、6は16.6cmに復原される。ともに、焼成良好で橙褐色を呈するが、5の外面は煤が付着して黒色を呈する。

土製品（図版73、第186図）覆土から仏具かと思われる土製品が1点出土している。詳細は後述する。

調査風景

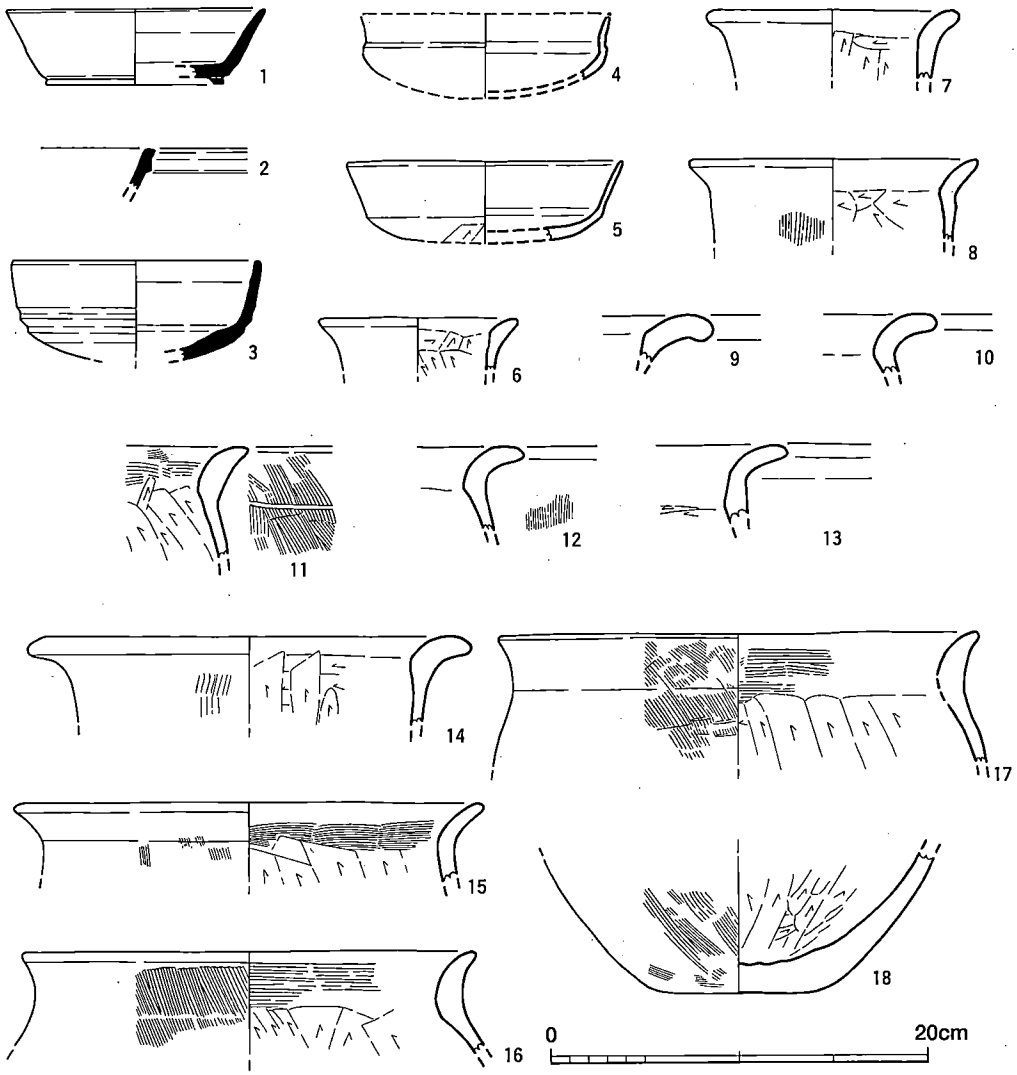


第32図　225号竪穴住居跡実測図（1/60）

225号竪穴住居跡（図版17、第32図）

224号住居の南東に位置する。南西部は125号建物に切られ、東壁際においておとし穴（A 4）を切っている。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；4 m、東壁；4.58m、南壁；4.18 m、西壁4.54mで、普通の規模に属する。壁高は比較的遺存状態の良い北壁で11cmを測る。北壁のほぼ中央にカマドを設置する。



第33図　225号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

床面はほぼ平坦である。主柱痕（P_1～P_4）を検出した。壁小溝は検出していない。

貼床下層において、掘り込みを検出した。中央土坑はなく、西壁際のほぼ中央に土坑を検出した。また、本住居以前の遺構であるが、先述のように、おとし穴（A 4）を検出した。

カマド　北壁のほぼ中央にカマドの痕跡を検出した。竪穴部から突出する掘り方はなく、突出型のカマドではない。左袖部の一部と焼土面のみが遺存する。支脚も取りはずされており、住居廃棄時に、カマドを壊したのであろうか。

出土遺物

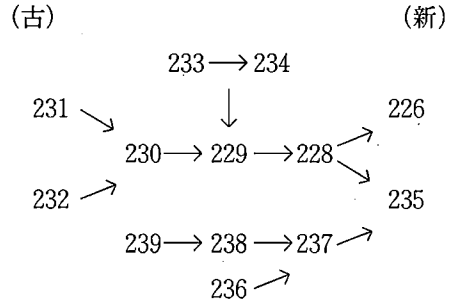
土師器、須恵器が出土している。4・5はカマド左側、16・17はカマド前面、15はP_1の横、3・18は南壁際の各々床面上において、その他は覆土中から検出した。1～3は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版50、第33図）　1は坏身で、口径13.7cm、器高4cmに復原される。2は甕の口縁部小片である。3は高坏の坏部であろうと思われる。口径13.2cmに復原される。これらの須恵器は焼成良好で硬質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。4・5は坏の小片で淡橙褐色を呈する。6～8は支脚に使用される小型の甕である。6は口径10.6cm、7は13.4cm、8は15.3cmに復原される。ともに、焼成良好で淡橙褐色～茶褐色を呈する。9～18は大型の甕で最小の14は口径23.6cm、最大の17は同25.6cmである。淡橙褐色～茶褐色を呈するが15は外面に煤が付着し、黒色を呈する。

【226・228～239号竪穴住居跡の新旧関係一覧】

約170㎡の範囲において、13軒の竪穴住居跡が切り合っていた。特に、228～235号住居の切り合いは複雑であり、切り合い関係の確認途中に覆土中の土器を取り上げたため、どの住居に帰属するのかが不明な土器等が存在する。これらは、226・228～235住居出土として一括して取り上げている。よって、これらの土器は、235号住居の説明の後に説明することとする。

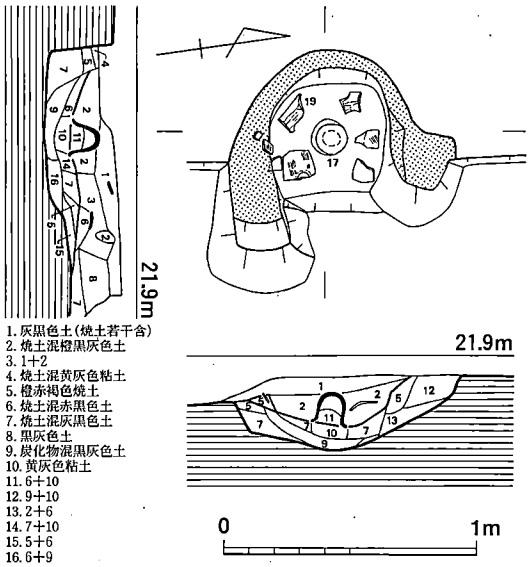
なお、竪穴住居跡の切り合い関係は、現場における観察と図面上の主柱穴配置とから、下記のように整理した。



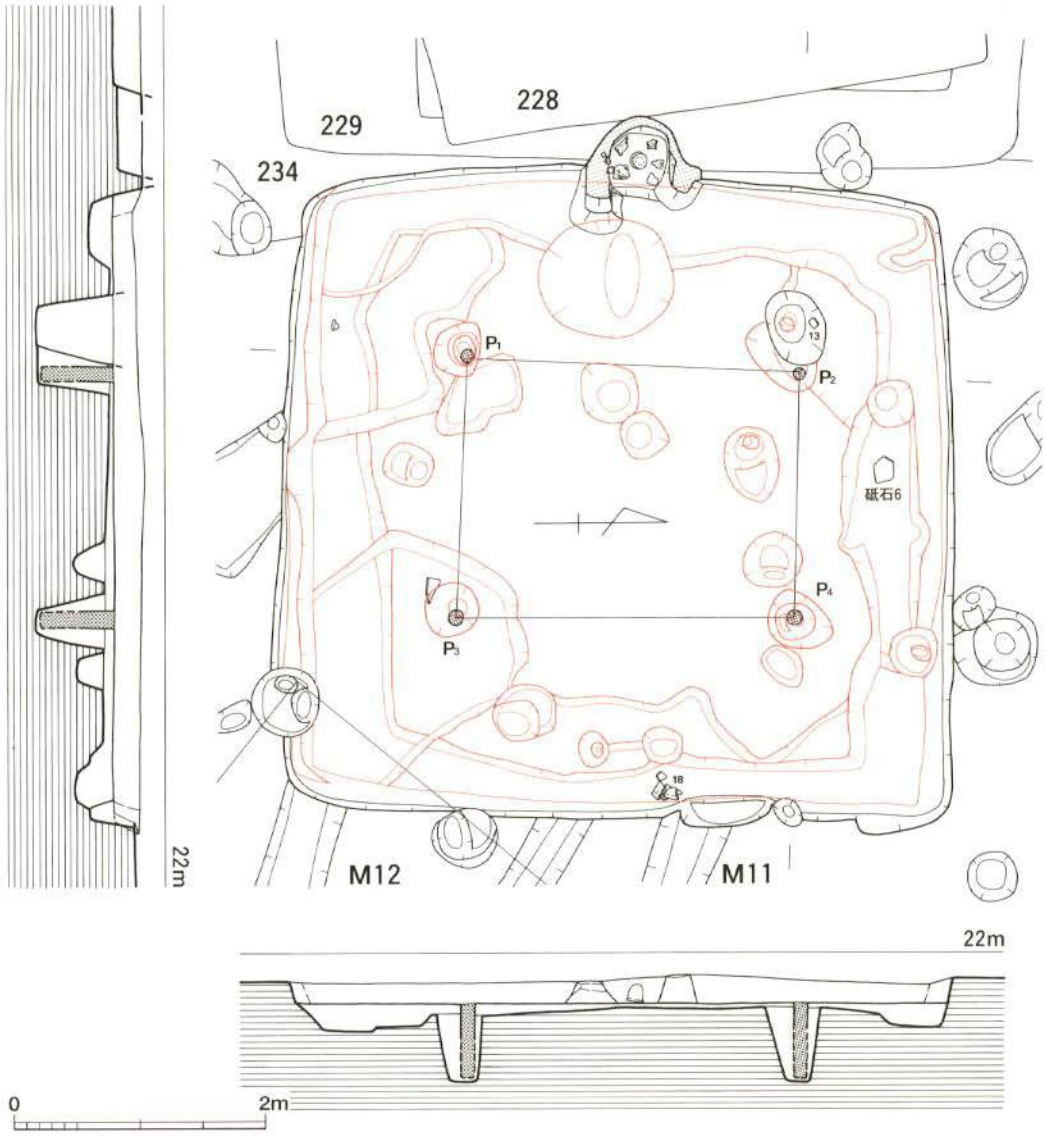
226号竪穴住居跡（図18版、第35図）

221号住居の南に位置する住居跡で、11・12号溝が竪穴部を斜断し、南東隅角部を126号建物から切られている。また、西側の228・229・234号住居を切っている。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁



第34図　226号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

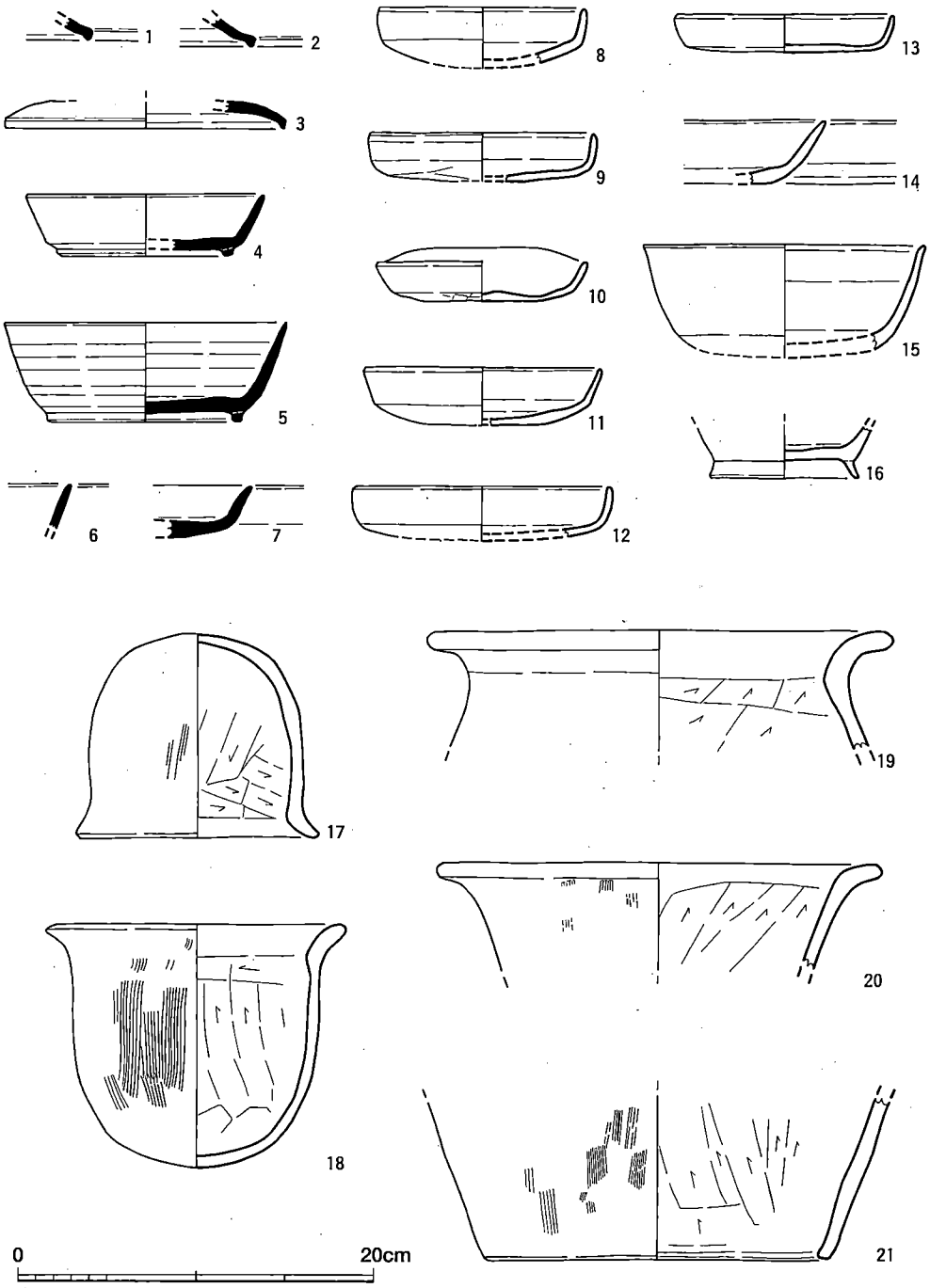


第35図　226号竪穴住居跡実測図（1/60）

の長さは、西壁；4.93m、北壁；4.8m、東壁；5.2m、南壁；4.72mを測る大型のものである。細かく見れば、各壁のプランは緩やかな弧を描く。壁高の遺存状態は比較的良く最も残りの良い北壁で23cmである。西壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面は、ほぼ平坦で水平である。主柱痕（P_1～P_4）を検出した。

貼床下層の遺構については、中央土坑はないが、周壁に沿って掘り込みが廻る。カマドの火床前面の下層に、上端で長軸108cm、短軸93cm、深さ20cm程の長円形の土坑が掘られている。



第36図　226号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

壁隅土坑に類したものであろうかと推測される。

カマド　（図版18、第34図）　西壁のほぼ中央に設置さた突出型のカマドである。突出部は略円形の掘り方で、最大幅87cm、先端が竪穴部からほぼ47cm突出する。突出部の周壁に幅７cm～17cm程の粘土を貼り付けている。両袖部は竪穴部内に伸び、高さ15cm前後、壁から左袖は50cm前後までが残っていた。支脚は小型甕をセットし、それは、カマド掘り方先端の上端から35cmのところを中心にした部分である。

出土遺物

土師器、須恵器、転用硯、焼塩土器、鉄製品、石製品が出土している。３・５・８・16・19・20はカマド内、13・18は床面、１・２・４・６・７・９・10・11・14・15・21は覆土中、12は貼床下層において検出した。１～７は須恵器、その他は土師器である。また、覆土中から転用硯が出土している。

土　器（図版50、第36図）　１～３は坏蓋小片である。焼成は良好にして硬質で灰色～淡灰色を呈する。４・５は坏身で、４は口径13.4cm、器高3.5cm、９は口径15.8cm、器高5.5cmに復原できる。６は小片のため不詳だが、坏身か皿であろう。７は皿の小片である。７点ともに、焼成は良好、不良はあるが、灰色を基調とし、緑灰色～茶灰色を呈する。８～14は坏である。いずれも小片で図上復原している。いずれも焼成良好で、淡褐色～橙褐色を呈する。15は口径15.8cm、器高6.3cm程に復原される。焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。16は高台が付く椀小片である。17・18は小型の甕で、17はカマドの支脚である。17は口径12.4cm、器高11.3cm、18は同じく16.3cm、13.7cmである。ともに、焼成良好で橙褐色～褐色を呈するが、17の外面は煤が付着し、黒色を呈する。19は大型の甕破片資料である。口径25cmに復原される。20・21は甑の破片資料である。これら３点はともに焼成良好で、淡橙褐色～褐色を呈するが、19外面には煤が付着しており、黒色を呈する。

転用硯（図版64、第75図）　須恵器の坏蓋を転用したもので、内面が異常に摩滅している。詳細は、転用硯の項において後述する。

焼塩土器（図版67、第181図）　覆土から２点出土している。詳細は後述する。

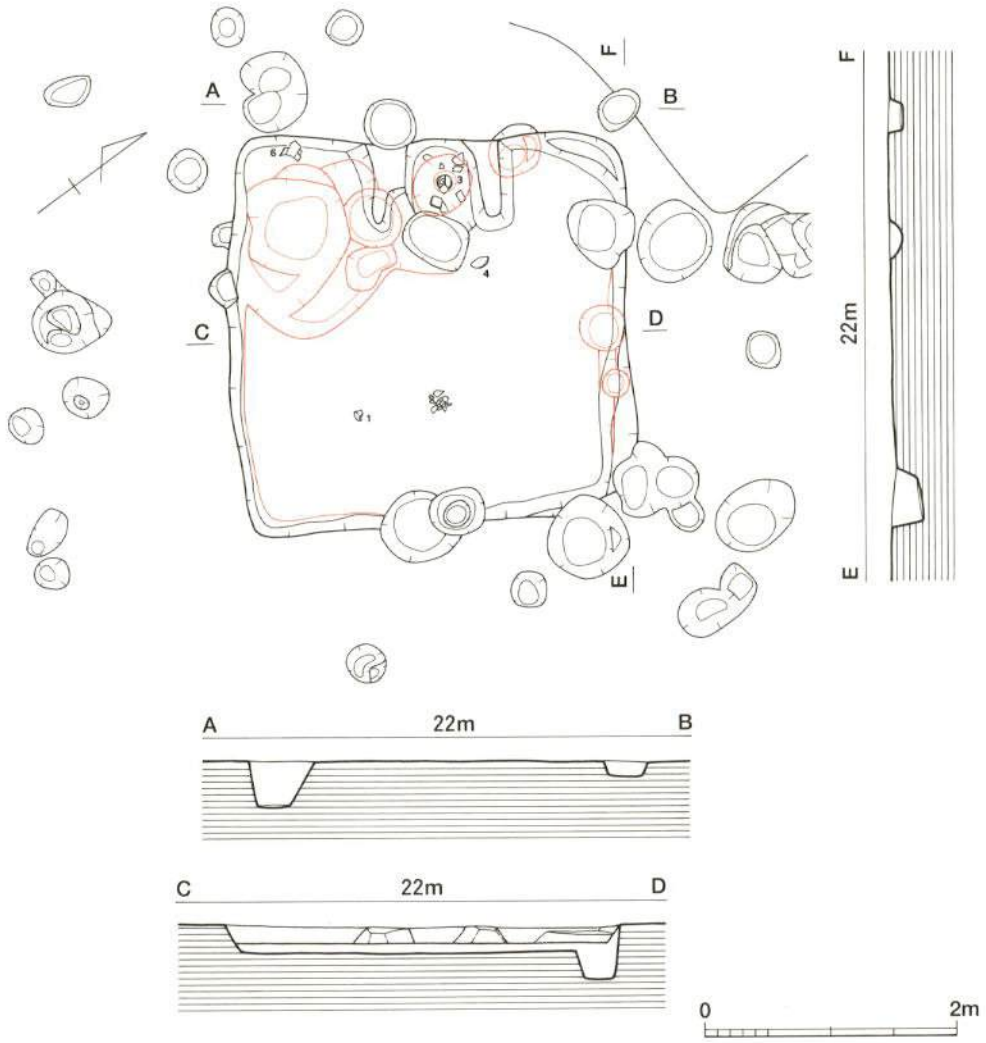
鉄製品（図版75、第187図）　覆土から釘片かと思われるもの１点が出土している。詳細は後述する。

石製品（図版74、第189図）　北壁際の床面に検出した砥石である。詳細は後述する。

227号竪穴住居跡（図版19、第37図）

226号住居の南西に位置し、234号住居にほぼ南接する。北東部を、129号建物に切られる。

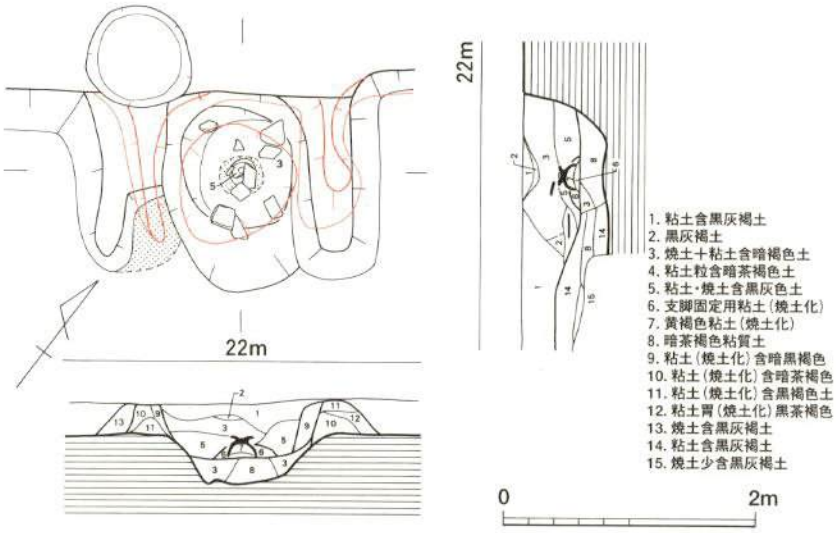
竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、西壁；2.93ｍ、北壁；2.75ｍ、東壁；3.2ｍ、南壁3.1ｍで、本村落においては小型に属する。壁高は比較的遺存状態の良い西壁で13cm



第37図　227号竪穴住居跡実測図（1/60）

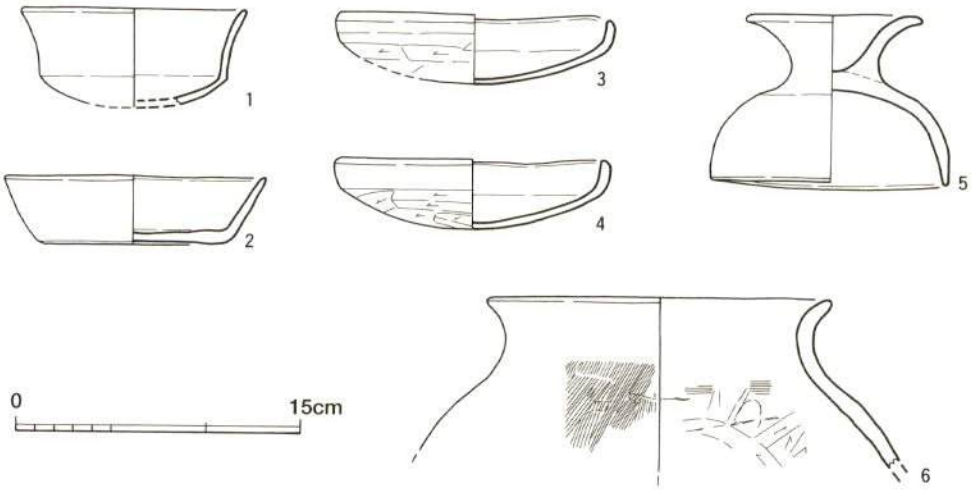
を測る。西壁の中央のほぼ中央にカマドを設置する。床面はほぼ平坦である。主柱痕（または、主柱穴）については、通常見られる竪穴住居跡のようには検出できなかった。本竪穴部は今回報告する事例の中でも最も小型の部類に属し、このタイプの竪穴部の主柱は竪穴部内に存在しないことがままあり、後述する242号住居においても同様である。このことは、主柱を竪穴部内に建てなかったことを示し、ひいては、竪穴部の規模＝竪穴住居の規模ではないことを示唆しているのではなかろうかと思われる事例である。

貼床下層においては、通常見られる掘り込み・中央土坑・壁隅土坑等は存在しなかったが、北西隅付近の床面下層だけには、大小のピットが検出された。



第38図　227号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

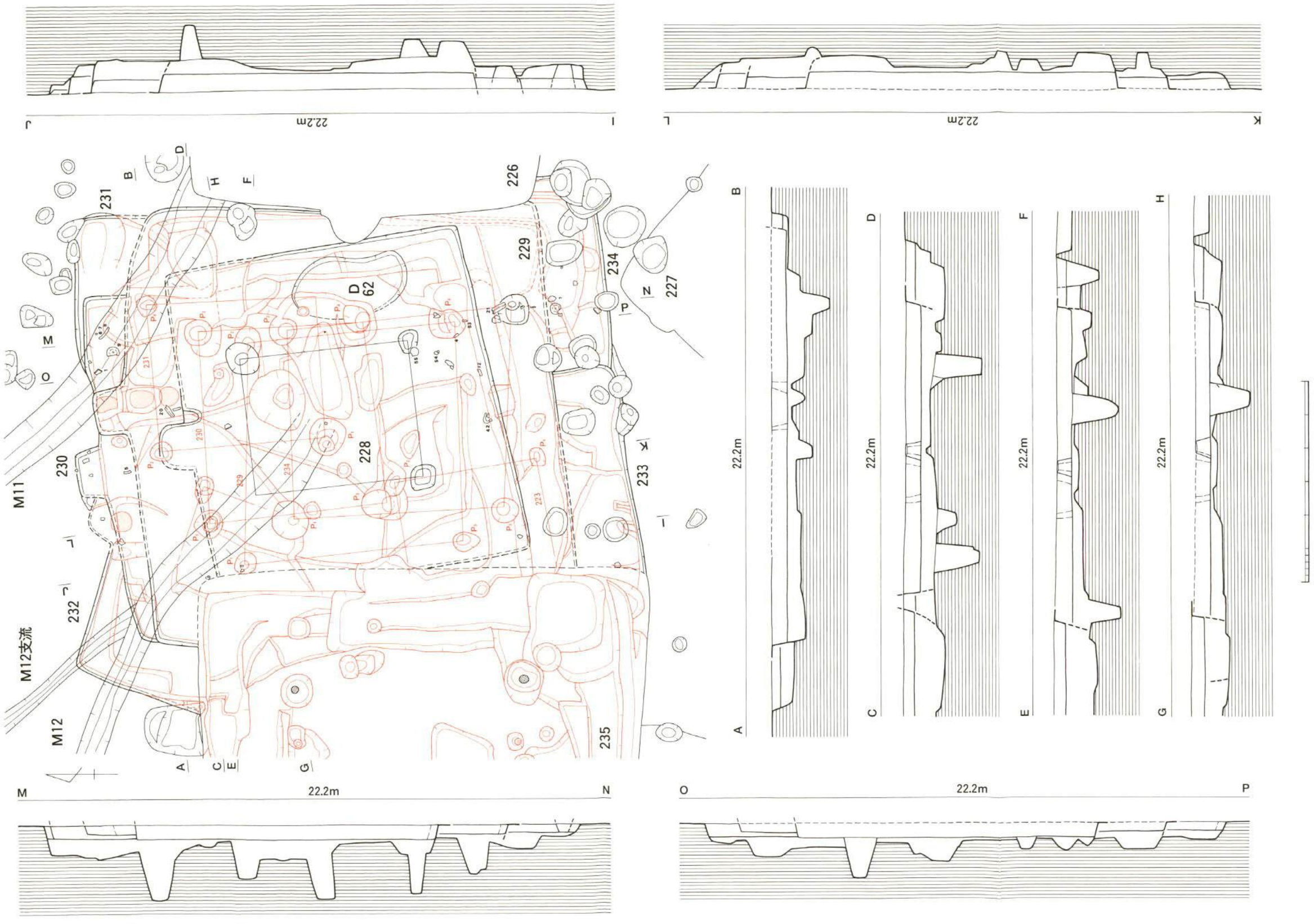
カマド（図版19、第38図）　西壁の中央のほぼ中央に設置されている。両袖の遺存状態は比較的良好で、壁から70cm程まで残っていた。支脚は脚台付の椀を倒立させて設置し、粘土を椀部の周囲に貼って支脚を固定する。また、支脚をセットする前に、粘土を支脚の椀部の口径に合わせて高さ２cm程の台状に作り、それに、支脚をセットしている。支脚の中心部は、カマドの奥壁上端からほぼ30cmの位置にある。



第39図　227号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。3・5はカマド内、1・4・6は床面上、2は貼床下層から出



第40図　228～234号竪穴住居跡実測図（1/60）

土した。なお、第37図に図示した土器以外の、小片のため図化できない土器は掲載していない。

土　器（図版50、第39図）　1～4は坏である。口径・器高は、1；12cm・5cm、2；13.7cm・3.7cm、3；14.9cm・3.7cm、4；14.1cm・3.8cmに復原される。焼成良好、1は白黄茶色、2は橙褐色、3は暗茶褐色、4は橙褐色を呈する。5は、支脚に使われた脚台付の椀で、椀部口径12.4cm、脚裾部径9.4cm、器高9.3cmを測る。焼成良好で橙褐色を呈する。6は、口径18.4cm、現存高9cmに復原される甕である。焼成良好で暗茶褐色を呈する。

228号竪穴住居跡（図版20、第40図）

226号住居の西に位置する住居跡で、竪穴部の西壁を235号住居の同東壁に、同東壁側は、62号土坑及び226号住居のカマドに切られ、浅いながらも12号溝に斜断して切られる。また、230～233号住居を切っている。

竪穴部のプランは隅円方形を呈する。西壁の大半を235号住居に切られるが各壁の長さは、北壁；4.55m十、東壁；4.92m、南壁；4.93m、西壁；1.6m十を測る中規模のものである。壁高は比較的遺存状態が良く20cm強である。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦である。主柱穴（P_2～P_4）を検出した。P_1は確認できなかった。

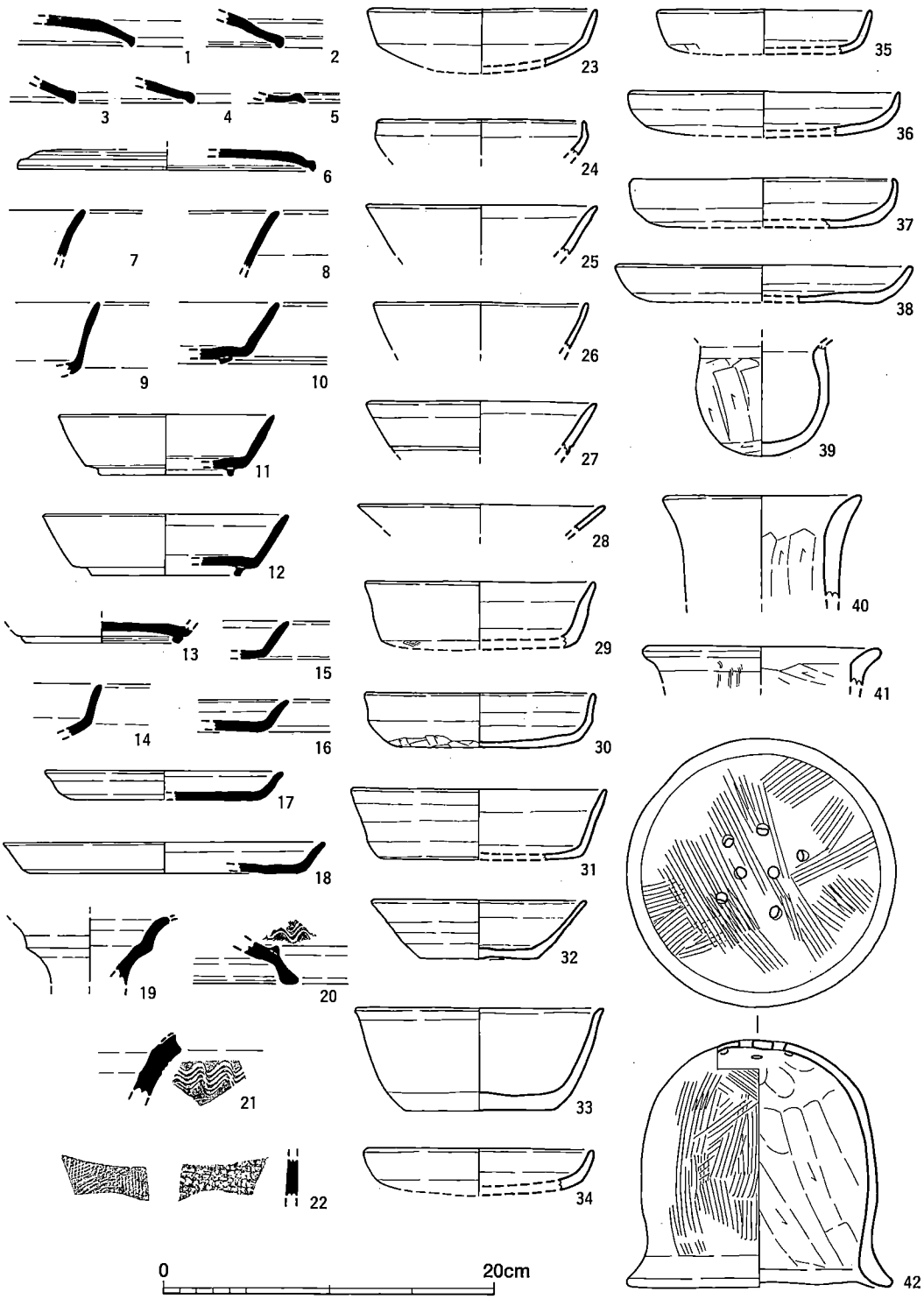
貼床下層の遺構については、中央土坑等は検出できなかった。

カマド　東壁のほぼ中央南寄りに設置さた突出型のカマドである。突出部は略隅円方形の掘り方で、最大幅72cm、先端が竪穴部からほぼ40cm突出する。左袖部は破壊されているが、右袖部は竪穴部内に伸び、壁から25cm前後までが残っていた。支脚は、住居廃棄時に、取りはずされたものであろう。

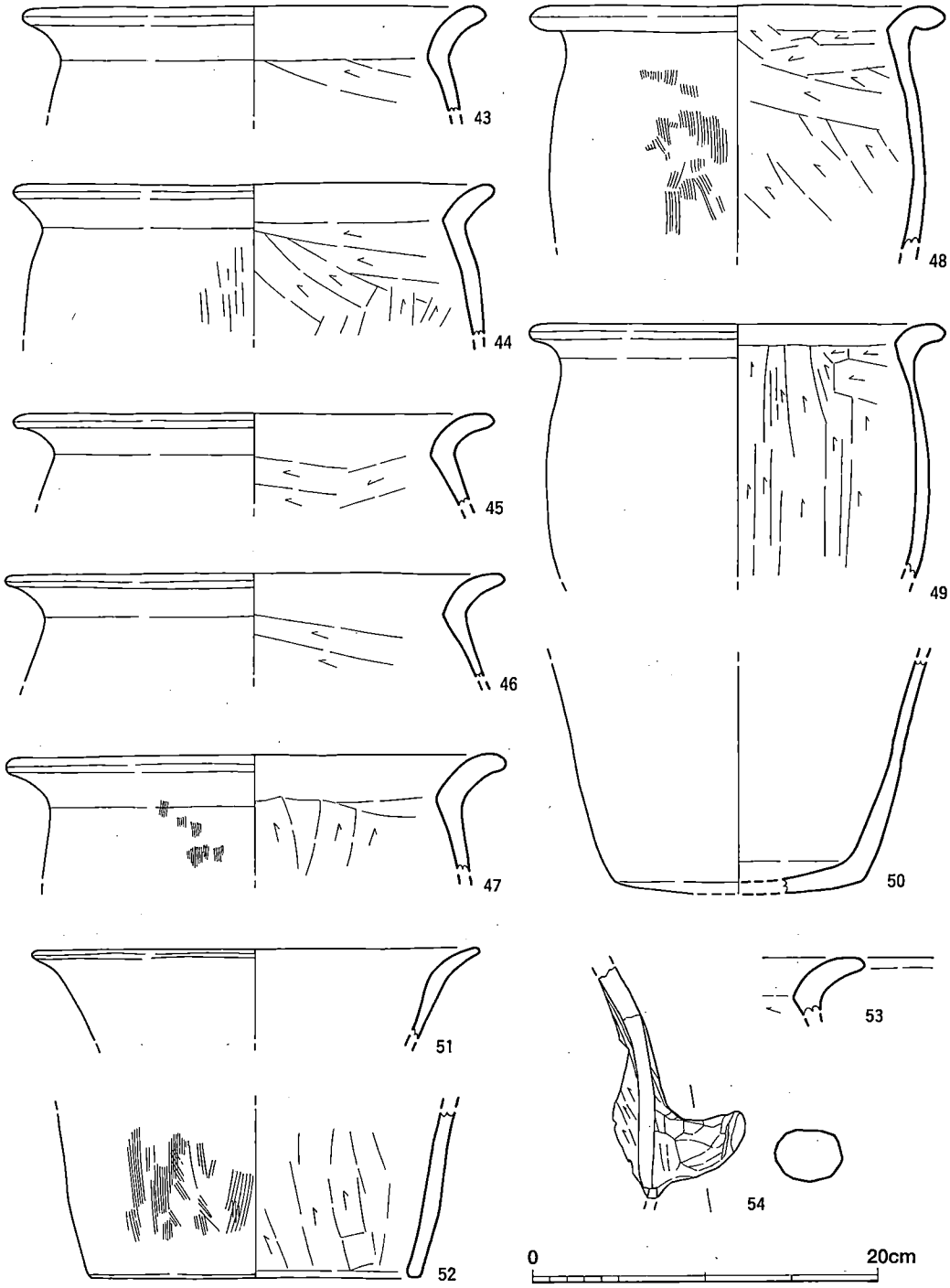
出土遺物

土師器、須恵器、墨書土器、転用硯及び焼塩土器が出土している。43・44・48はカマド周辺、1～10・12・14・16・18・20・22・29・30・34・35・37～40・42・45・46・50～53は床面、11・13・15・17・19・21・23～28・31～33・36・41・47・49・50は覆土検出した。1～22は須恵器、その他は土師器である。出土状態から判断して、これらの出土品は混入したもので、住居に伴うと思われるものはない。

土　器（図版50、第41・42図）　1～6は坏蓋小片である。焼成は良好にして硬質で灰色～淡灰色を呈する。7～13は高台を有する坏身で、11は口径13cm、器高3.6cm、12は口径14.6cm、器高3.7cmに復原できる。7点ともに、焼成は良好で灰色を呈する。14は小片で器形が不詳だが、坏であろう。14～18は皿で、17は口径14.2cm、器高1.8cm、18は同19.1cm、1.9cmに復原される。19は壷、20は脚台、21・22は甕である。ともに焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。22～33は坏の破片ですべて反転復原図である。23は口径13.8cm、器高3.5cm、同じく29は13.8cm、3.9cm、30は13.8cm、3.3cm、31は15cm、4.2cm、32は13cm、3.6cm、33は14.8cm、6.1cmに復原される。33はやや深く鉢状を呈する。これらは総じて焼成良好で、黄褐色～橙褐色を呈する。



第41図　228号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第42図　228号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

34～38は皿の破片資料である。最大の38は、口径17.6cm、器高2.2cmに復原される。これらの皿は焼成は良好で橙色を呈する。39は小型の甕で残存高6.7cm2、胴部最大径８cmを測る。焼成良好で橙褐色を呈する。40・41は通常は支脚に使用される小型の甕である。42は本来は甑で支脚に転用された後、廃棄されたものである。口径16.2cm、器高14.7cmを測る。底部には７個の孔を穿つ。焼成良好で橙褐色を呈する。43～50・53は大型の甕破片資料である。口径22cm～28cm前後に復原される。50は底部であるが平底に近く、本遺跡では出土例が少ない。ともに橙褐色を呈する。51・52・54は甑の破片資料である。焼成良好で橙褐色～茶褐色を呈する。

墨書土器（図版63、第173図）　主柱穴P_4の抜き跡の西側の肩に墨書土器（坏；土師器）を検出しているが、詳細は墨書土器の項において後述する。

転用硯（第175図）　覆土から出土した。詳細は後述する。

焼塩土器（図版67、第181図）　覆土から出土した。詳細は後述する。

229号竪穴住居跡（図版20、第40図）

西壁を235号住居に、中央部を228号住居に大きく切られ、230～234号住居を切る。しかし竪穴部の規模はおおよそ知ることができる。

本住居に関係して９軒（226・228～235号住居）の竪穴部の切り合い関係に整理したが、調査当時は10数軒の切り合い関係にあると判断していた。ここでは、遺構検出時に確認した東壁・北西隅壁、カマドの位置、整理時の柱配置の検討から、調査当時の壁のラインとは多少異なった竪穴部のプランを、ひとつの復原案として提示した。

竪穴部のプランは、隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；6.45ｍ、東壁；5.7ｍを測り、南壁：5.5ｍ十、西壁６ｍ前後で、大型の規模に属する。壁高は20cm程である。主柱穴はP_1～P_4で、主柱は当然のことながら抜かれていた。カマドは北壁に設置された突出型のカマドである。

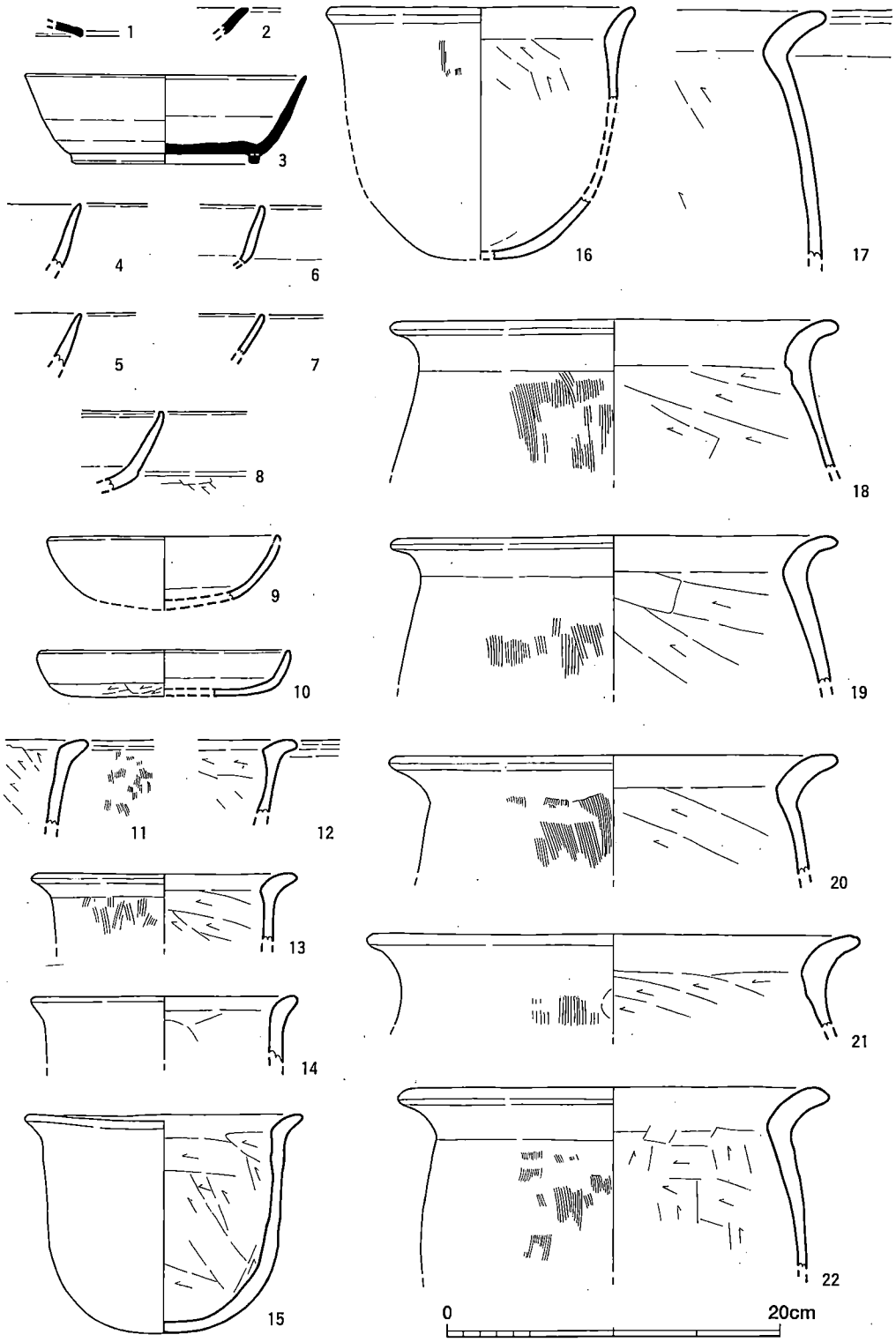
本住居に伴う貼床下層の遺構は、多数の住居が切り合っているため複雑であり、また、竪穴部との位置的な関係から見ても、掘り込み以外は存在しないと思われる。

カマド　北壁の中央からやや東寄りに位置する突出型のカマドである。掘り方は隅円方形を呈すると思われる。掘り方は先端が竪穴部から45cm程突出し、幅は70cm程度である。遺構検出時に焼土が存在したことから、カマドであろうと判断したが、プラン等を明確に把握できなかったため、個別図は作成していない。

出土遺物

須恵器、土師器及び鉄製品が出土している。19・20はカマド内、１～14・16・22はカマド周辺、15・17・20・21は床面、８は貼床下層、９・14は覆土中から出土した。なお、１～３は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版51、第43図）　１は坏蓋、２は皿の小片である。３は坏身で、口径17cm、器高



第43図　229号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

5.3cmに復原される。3点とも焼成良好で、灰色を呈する。4～9は坏の小片で、9は口径13.6cm、器高4.4cmに復原される。ともに焼成良好で、橙褐色～褐色を呈する。10は皿で、口径15cm、器高2.8cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。11～16は、通常はカマドの支脚として使用される小型の甕である。15は、口径16.5cm、器高12.9cm、16は同18.2cm、器高15cm強に復原される。6点とも焼成良好で、褐色～暗褐色を呈する。17～22は大型の甕で、口径25cm前後～28cmである。焼成良好で橙褐色～黄褐色を呈する。

鉄製品（図版75、第187図）　カマドの埋土から検出した釘かと思われる破片である。詳細は後述する。

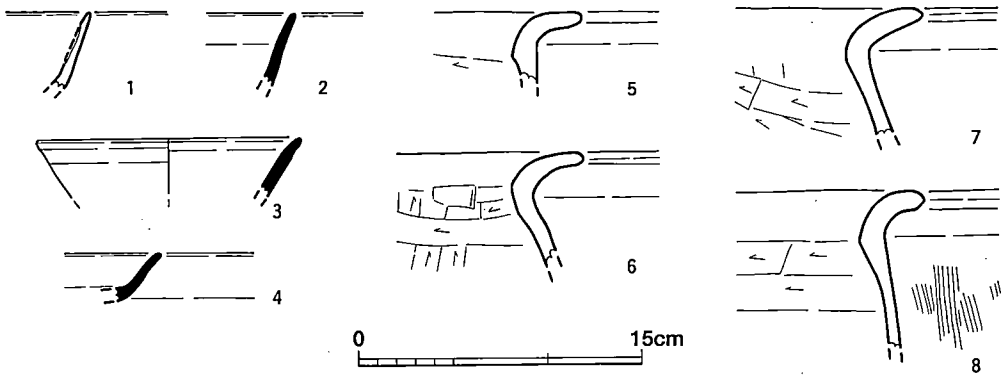
230号竪穴住居跡（図版20、第40図）

残存する北壁を除き、228・289・235号住居に大きく切られ、231・232号住居を切る。竪穴部の規模は、主柱穴（P_1～P_4）からおよそ推測できる。

北壁を残して他の壁は切られているため、竪穴部の北壁長；5.15mのみ分かるが、他の壁の長さは不明である。しかし、主柱穴の配置具合から、各壁長5m程の竪穴部であったろうと推測され、本村落では大型の規模に属する。壁高は16cm程である。主柱穴はP_1～P_4で、主柱は当然のことながら抜かれていた。カマドは北壁に設置された突出型のカマドである。

本住居に伴う貼床下層の遺構は、多数の住居が切り合っているため複雑であり、また、竪穴部との位置的な関係から見て、わずかに残る掘り込みがある。

カマド　北壁のほぼ中央に位置する突出型のカマドである。掘り方は台形を呈する。掘り方は先端が竪穴部から40cm程突出し、最大幅は80cm程度である。遺構検出時に焼土が存在したことから、カマドであろうと判断したが、プラン等を明確に把握できなかったため、個別図は作成していない。



第44図　230号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

須恵器、土師器、転用硯及び鉄製品が出土している。5はカマド前面、1・6～8は竪穴部

北東隅床面、2～4は覆土中から出土した。2～4は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第44図）　1は坏身の小片で、焼成良好で淡橙褐色を呈する。2・3は坏身の小片である。2点とも焼成良好で、灰色を呈する。4は皿の小片で焼成良好で、灰色を呈する。5～8は大型の甕片である。焼成良好で橙褐色を呈する。

転用硯（図版64、第175図）　北東隅床面から転用硯を検出した。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　覆土から、釘かと思われる破片を検出した。詳細は後述する。

231号竪穴住居跡（図版20、第40図）

残存する北東隅壁を除き、228～230号住居に大きく切られる。竪穴部の規模は、主柱穴（P_1～P_4）からおよそ推測できる。

北東隅壁を残して他の壁は切られているため、壁の長さは不明である。しかし、主柱穴の配置具合から、各壁長4.5m程の竪穴部であったろうと推測され、本村落では中規模に属する。壁高は20cm程である。主柱穴はP_1～P_4で、主柱は当然のことながら抜かれていた。カマドは確認していないが、北壁以外の壁に設置されていたと思われる。東壁側は切り合い関係の幅がごく狭いことから、東壁にカマドが設置されていれば痕跡が残るはずである。その痕跡が認められないことから、西壁に設置された可能性が高い。なお、本村落においては、南壁にカマドを設置する例はない。

本住居に伴う貼床下層の遺構は、多数の住居が切り合っているため複雑であり、不詳である。

出土遺物　土師器片が出土しているが、図示できる資料はない。

232号竪穴住居跡（図版20、第40図）

残存する北東西壁～カマドを除き、228～230・235号住居に大きく切られる。

竪穴部は、北西隅壁を残して他の壁は切られているため、壁の長さは不明である。主柱穴は不明ながらも、一応、P_2を提示した。カマドの配置具合から、多少の不安はあるが、これ以外には想定の仕様がない。あるいは、後述する242号住居のように、竪穴部外に想定する必要があるかも知れない。北壁は高さ10cm程残存し、突出型のカマドが設置されている。

カマド　北壁に設置された突出型のカマドで、東半部を230号住居のカマドに切られる。掘り方のプランは台形を呈するようである。

出土遺物　土師器等の小破片が出土しているが、図示できるものではない。

233号竪穴住居跡（図版20、第40図）

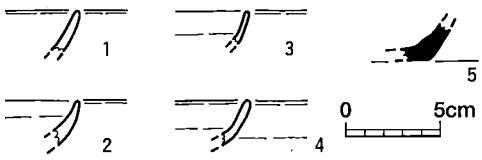
北部及び西部を、228・229・235住居に大きく切られ、東壁は、234号住居を切っている。

竪穴部は、南隅壁を残して他の壁は切られているため、壁の長さは不明である。主柱穴は不

明ながらも、一応、P_2・P_4を提示した。P_1・P_3は、235住居の方に延びるであろうが、確認していない。このように竪穴部が大きく切られているため、カマド等については不明である。

出土遺物

図示できたのは、いずれも覆土中から検出した小片である。5は須恵器で、他は土師器である。



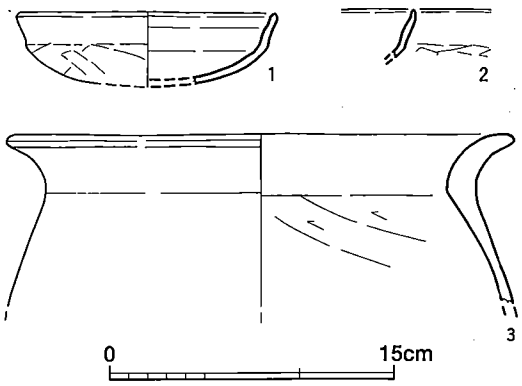
第45図　233号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土　器（第45図）　図示した5点はいずれも小片で、坏や皿類であろう。1～4は焼成良好で橙褐色を基調とする。5は坏身または皿の底部片である。生焼けで、灰色を呈する。

234号竪穴住居跡（図版20、第40図）

南壁の東半部を除き、226・228・229・233・235住居に大きく切られている。

竪穴部は、南壁の東半部を残して他の壁は切られているため、壁の長さは不明である。主柱穴は不明ながらも、P_1～P_4と思われる。このように竪穴部が大きく切られているため、カマド等については不明である。



第46図　234号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

図示できたのは焼塩土器、及び土師器3点で床面に検出した小片である。ただし、本住居に伴う確証はない。

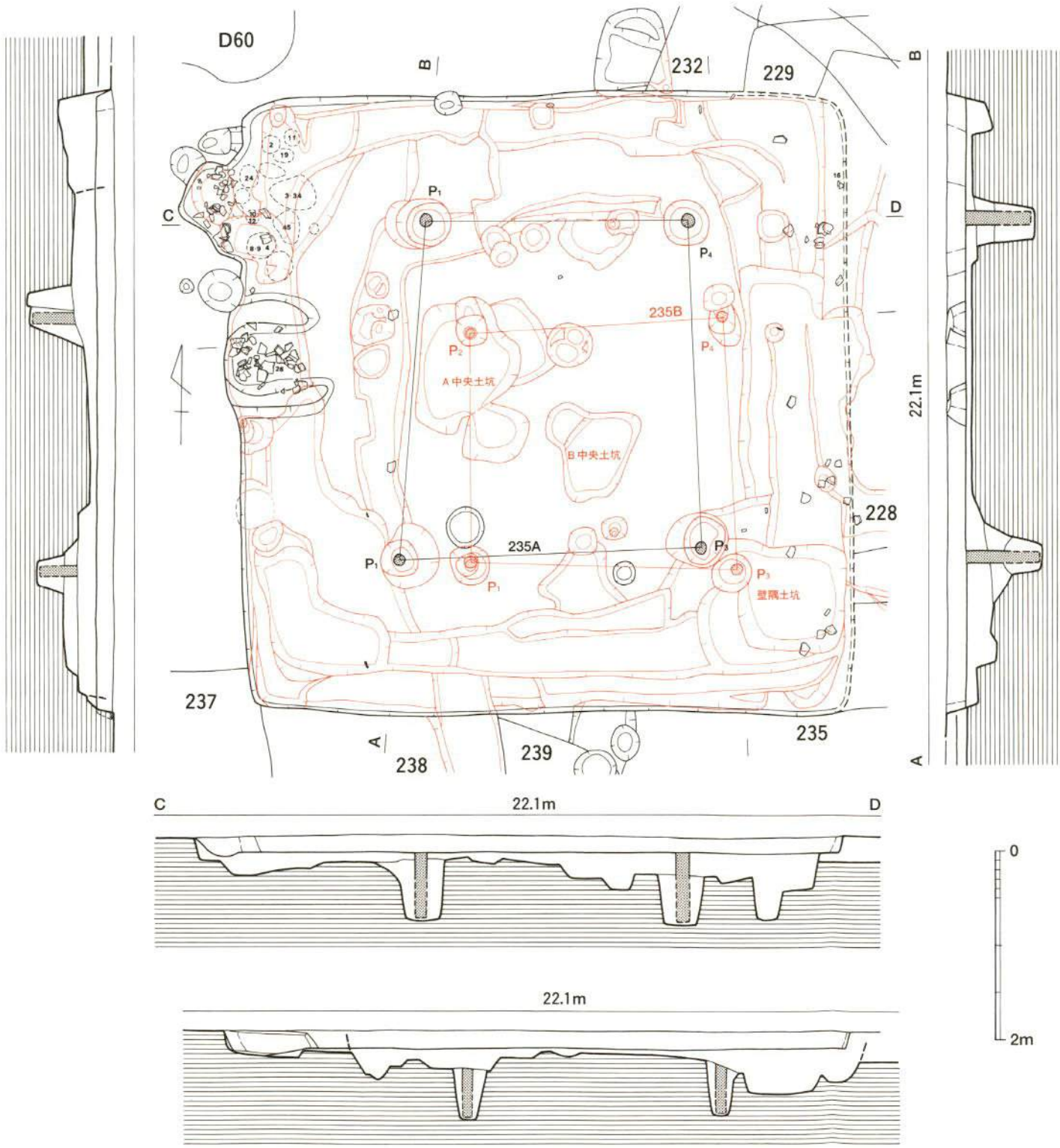
土　器（第46図）　1・2は坏の破片資料である。1は口径13.8㎝、器高4㎝程に復原される。いずれも、焼成良好で橙褐色を呈する。3大型の甕で口径26.2㎝に復原される。焼成良好で橙色を呈する。

焼塩土器（図版67、第181図）　覆土から1点検出した。詳細は後述する。

235A・B号竪穴住居跡（図版20・21、第47図）

226～234号住居を含めた9軒の切り合い関係にある住居群のうち最も西に位置する住居跡で、228～234・237～239号住居を切る。さらに、235A住居に切られて、その下に235B号住居がすっぽりとおさまっている。

235A号住居は、竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、西壁；6.3m、北壁；6.3m、東壁；6.4m、南壁；6.27mを測る大型のものである。壁高の遺存状態は比較的良く、最も残りの良い北壁で20㎝である。西壁のほぼ中央北寄りにカマドを設置し、その右、すなわち、北西隅角部近くに土坑状の遺構を検出した。



第47図　235A・B号竪穴住居跡実測図（1/60）

床面は、ほぼ平坦で水平である。主柱痕（P_1～P_4）を検出した。

貼床下層の遺構については、掘り込み・中央土坑、南西及び南東隅に壁隅土坑を検出した。235Ｂ号住居は、235Ａ号住居と方位はほとんど変わらずに建てられており、東壁を共有するかのように重複している。その他の壁は、下層遺構の掘り込みの廻りかたから、235Ａ号住居の各壁との位置関係を見ると、およそ南壁；30cm、西壁；120cm、北壁120cm程それぞれ内側の位置にある。このことより、235Ｂ号住居の竪穴部は一辺５ｍ前後の隅円方形のプランを呈するものと推測される。カマドの位置は不明である。

床面下層に主柱穴（P_1～P_4）を検出したが、各々、主柱痕を残していた。主柱は抜き取られることなく、切り取られたものであろう。貼床下層の遺構として通常見られる、掘り込み・中央土坑、南東隅に壁隅土坑を検出した。

235Ａ号住居カマド（図21版、第48図）

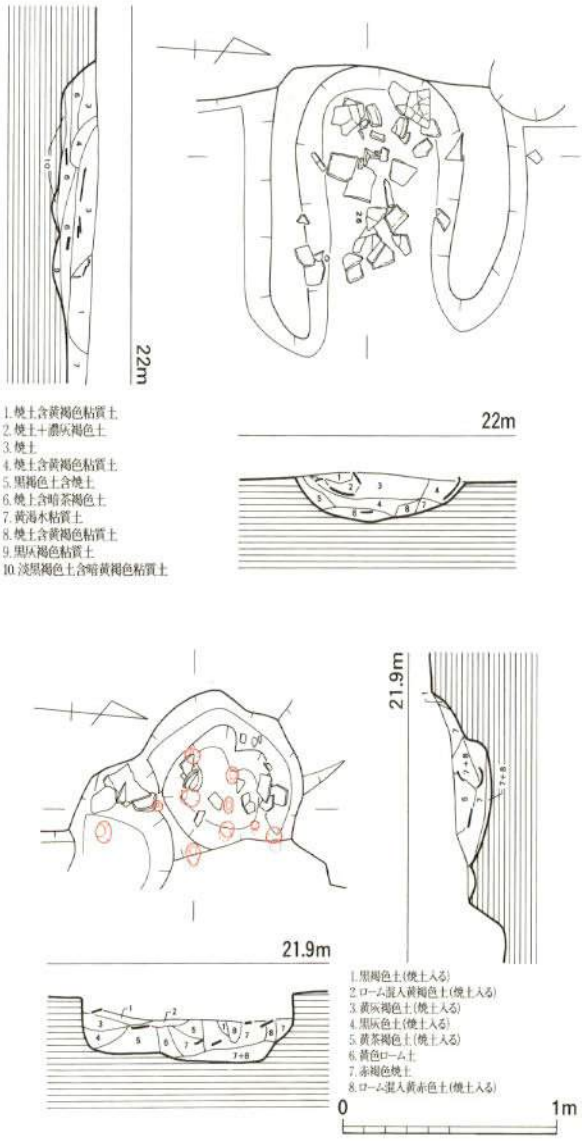
西壁のほぼ北寄り中央に設置さたカマドである。奥壁は、竪穴部から10cm程突出しする。両袖部は、左袖；１ｍ、右袖；0.8ｍが遺存する。遺存する袖部の高さは床面から10cm前後である。火床は幅50cm前後、奥行き１ｍ程で、住居床面より２～３cm低い程度である。支脚は検出されず、住居の廃棄時に取りはずされたものであろう。

235Ａ号住居カマド横土坑（第48図）

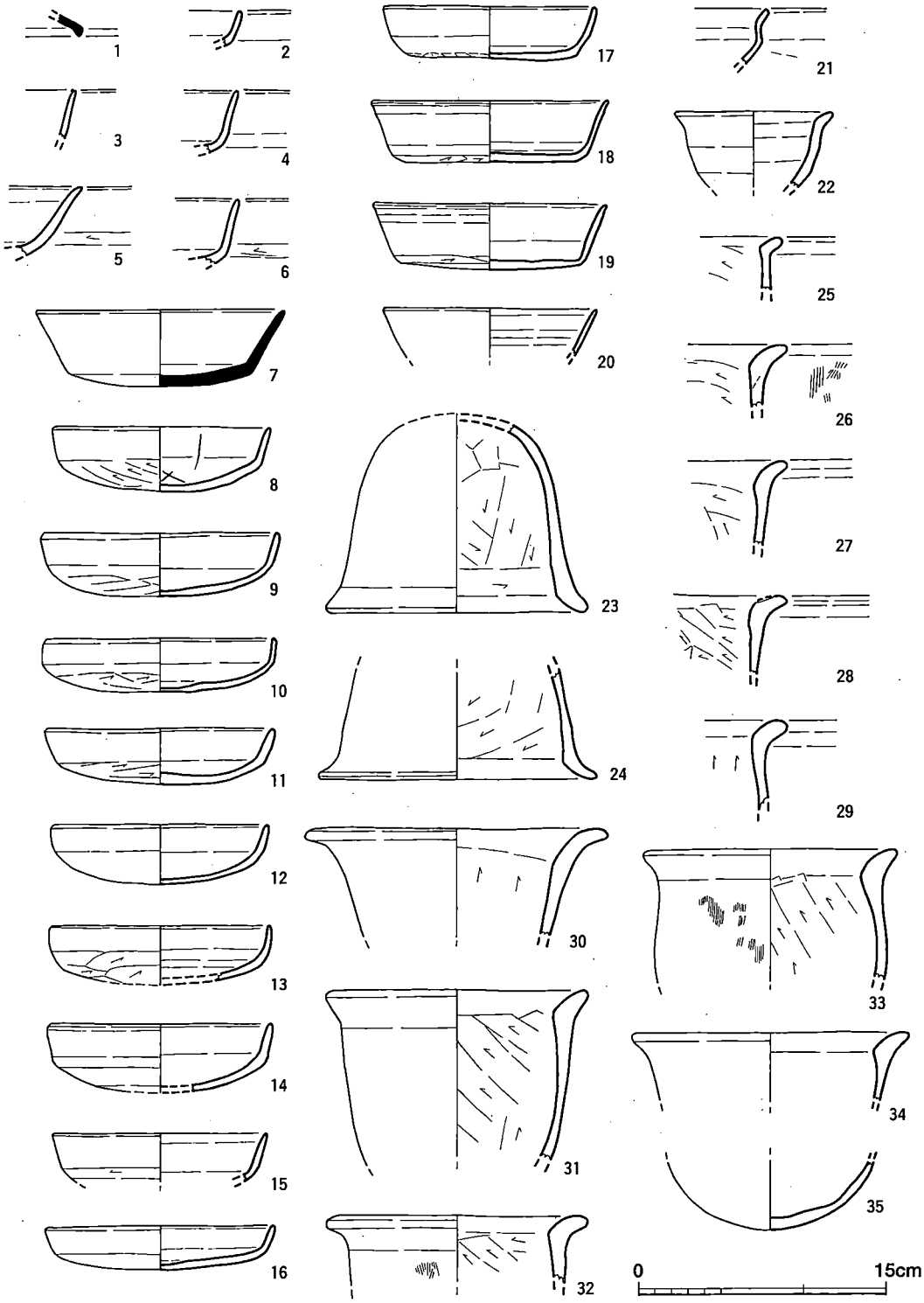
竪穴部の西壁から突出する形で設置された土坑で、生活時にはカマドとの何らかの関係があったと推測する。プランは不整円形で、上端で南北径78cm、東西径65cm、深さは壁から30cm程である。埋土中には、炭を含まないが、焼土を含む。カマドの補足的な役割を果たしたものであろうか。

出土遺物

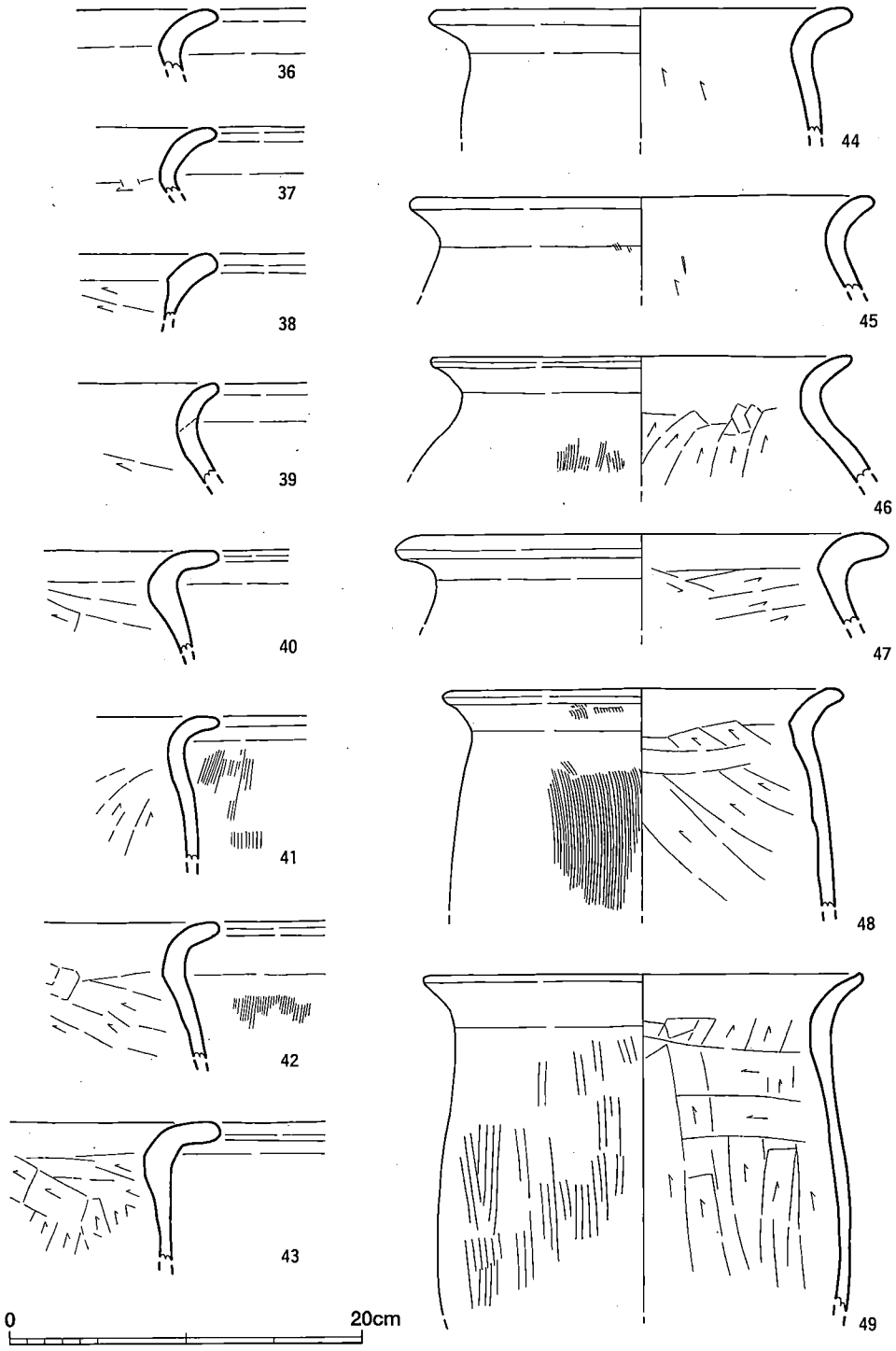
235Ａ号住居の下層から出土したものは、235Ｂ号住居と関係するものを含むが、調



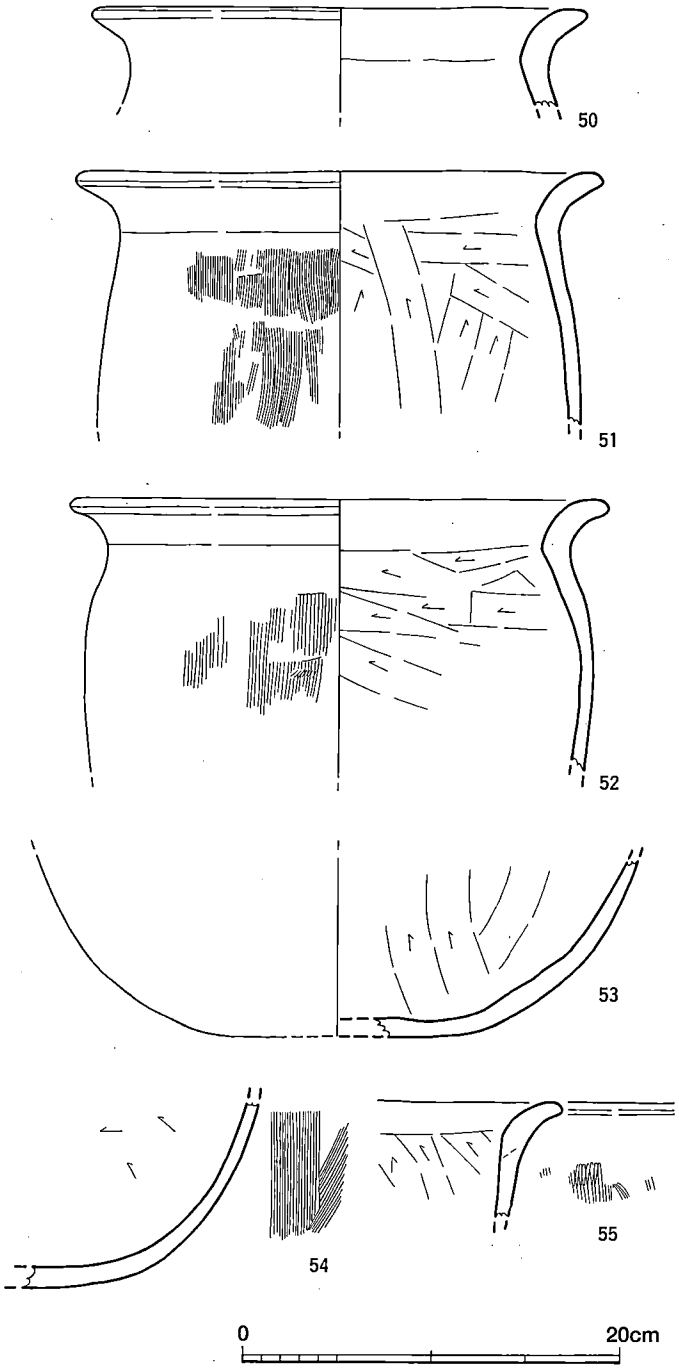
第48図　235カマド・カマド横土坑実測図（1/30）



第49図　235号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第50図　235号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）



第51図　235号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/4）

査中は235Ａしか念頭になかったので、以下、235Ａ号住居出土品として説明する。なお、本住居からは、土師器、須恵器、墨書土器、焼塩土器、土製品及び鉄製品が出土している。１・５・６・７・17・21・22・28・30・32・37・38・40・42・47・49は覆土中、16・18は床面、４・15・23・41・50はカマド内、35・39・52はカマド周辺、27・31・44・46・48・53・55はカマド壁体内、２・３・８・９・11～14・19・20・24・34・36・51・54はカマド横土坑内、29貼床下層において検出した。１・７は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版51、第49～51図）　１は坏蓋小片である。焼成は良好にして硬質で灰色～淡灰色を呈する。７は坏身で、口径15.2cm、器高4.6cmに復原される。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。２～６は皿及び坏の小片である。８～20は坏である。口径・器高は、８；13.3cm・3.9cm、９；14.6cm・3.9cm、10；14.3cm・3.2cm、11；14cm・3.4cm、

12；13.3cm・3.7cm、16；13.7cm・2.6cm、17；13cm・2.3cm、18；14.5cm・3.8cm、19；14.2cm・4cmに復原される。これらは総じて焼成良好で、橙褐色～灰橙褐色を呈する。21は小片であるが、本村落では類例の少ない器形を呈する鉢である。焼成良好で橙褐色を呈する。22は口径9.6cm、現存高4.6cmを測る甕である。焼成良好で濃灰色を呈する。23～35は通常は支脚に使用される小型の甕である。口径は15cm前後で、23は器高12cm程に復原される。焼成は良好で橙褐色～茶褐色を呈するが、二次加熱のためややもろい。36～54は大型の甕である。口径22cm～28cmに復原される。55は甑の破片資料である。総じて焼成良好で、橙褐色～暗茶褐色を呈する。

墨書土器（図版63、第173図）　覆土から検出した。詳細は墨書土器の項で説明する。

焼塩土器（図版68、第181図）　覆土から検出した。詳細は後述する。

土製品（図版73、第186図）　覆土から検出した紡錘車である。詳細は後述する。

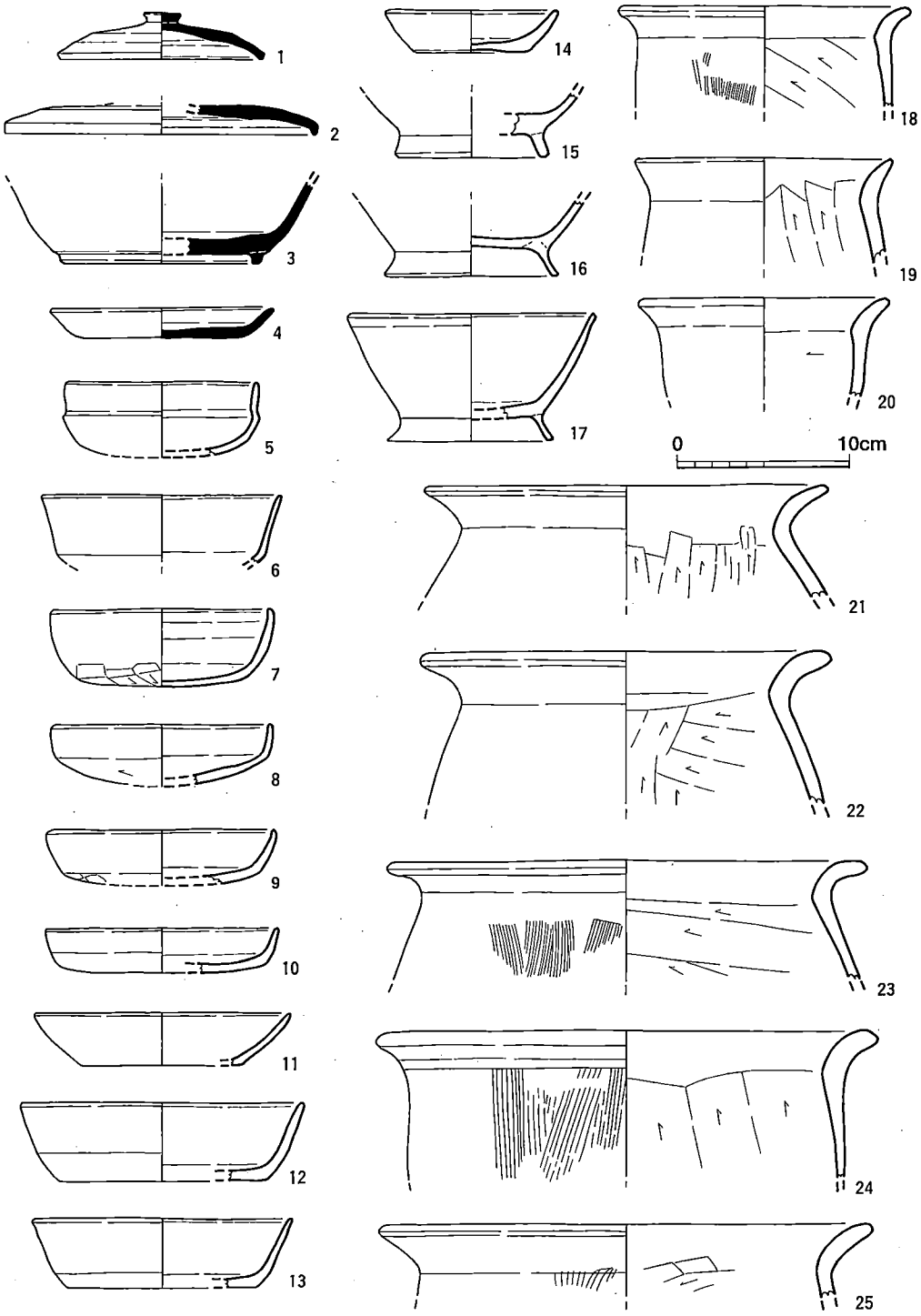
鉄製品（図版75、第187図）　カマド埋土から出土した。釘の破片であろうと思われる。詳細は後述する。

【226・228～235号竪穴住居跡出土土遺物】

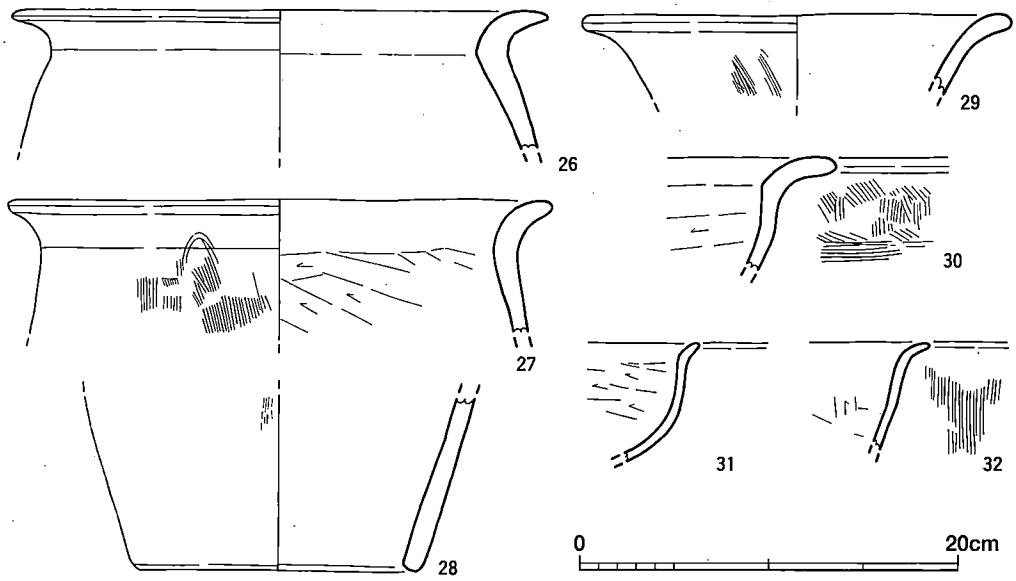
切り合い関係が不明な時点で取り上げた遺物を以下に説明する。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄製品等である。

土　器（第52・53図）　須恵器４個体（１～４）、土師器28個体（５～32）について図示した。１・２は坏蓋で、１は口径11.7cm、器高2.7cm、であり、２は口径18cmに復原される。３は大振りな坏身である。４は口径12.8cm、器高1.7cmに復原される皿である。３は軟質だが他は焼成良好にして硬質で、灰色を呈する。５～14は坏である。いずれも反転復原図であり、口径・器高は、５；11.2cm・４・４cm、７；12.6cm・6.5cm、12；16.4cm・4.6cm、14；9.6cm・2.5cmである。焼成は良好で橙褐色～淡茶褐色を呈する。15～17は埦である。17は口径14.2cm、器高7.3cmに復原される。焼成良好で淡橙褐色～橙褐色を呈する。18～20は通常は支脚に使用される小型の甕である。各々の復原口径は、18；17cm、19；14.8cm、20：14.1cmである。焼成良好で、二次的に火を受けて変色し、灰黄褐色を呈する。21～23・25～27は大型の甕で、復原口径は21；23cm、23；28cm、27；29cmである。焼成良好で橙褐色～褐色を対する。24・28は甑片で、24は口径28cmに復原される。焼成は良好で橙褐色～黄褐色を呈する。29～31は鉢片である。32は器形が判然としないが鉢であろうか。これらは、焼成は良好で橙褐色～黄褐色を呈する。

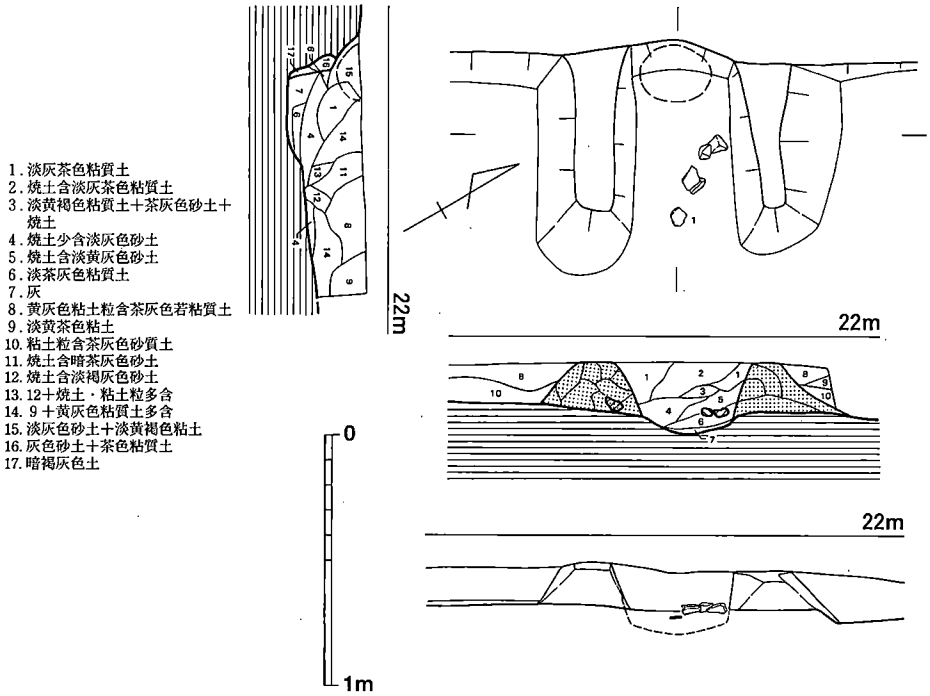
鉄製品（図版75、第187図）　６点出土している。刀子２点、鉄鏃１点、釘と思われる破片２点及び不明鉄製品１点を検出している。詳細は後述する。



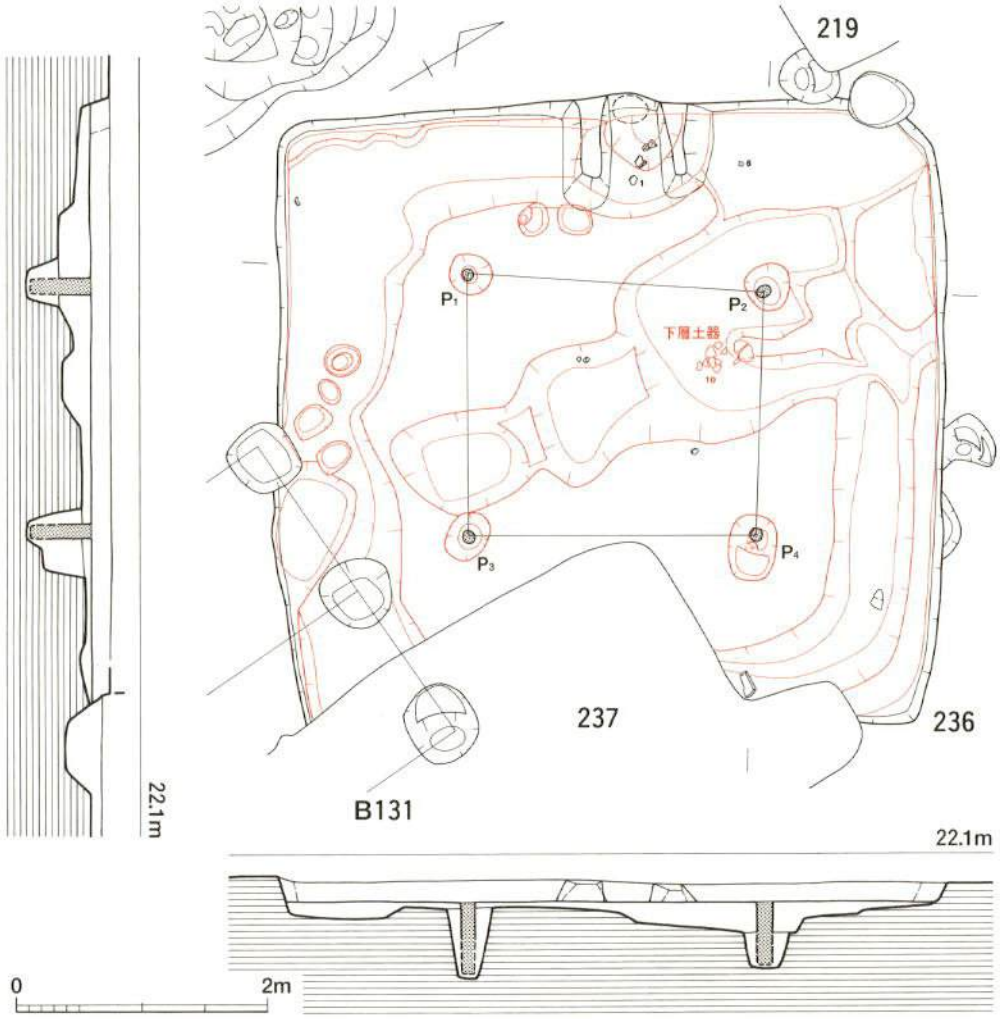
第52図　226・228～235号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第53図　226・228～235号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）



第54図　236号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第55図　236号竪穴住居跡実測図（1/60）

236号竪穴住居跡（図版22、第55図）

235号住居の西に位置し、竪穴部の南壁を237号住居に、北西隅を130号建物に、南東隅を131号建物に切られている。

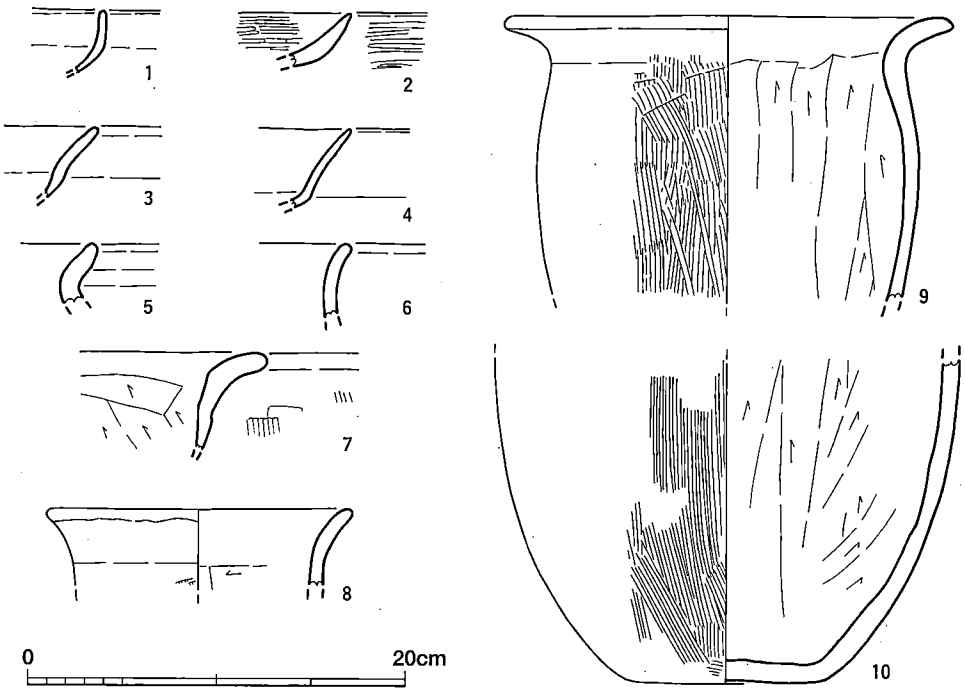
竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、西壁；5ｍ、北壁；4.64ｍ、南壁；4.72ｍ＋で、東壁は4.8ｍ程度でやや大型のものである。壁高は比較的遺存状態の良い西壁で15㎝を測る。西壁のほぼ中央にカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。各主柱を結んだ線は対応する壁とほぼ平行である。壁小溝は検出していない。

貼床下層の遺構については、通常の中央土坑ではないが三連の土坑があり、周壁に添って掘

り込みが廻る。

カマド（図版22、第54図）　北壁のほぼ中央に設置されている。奥壁に煙出しの一部かと思われる径30cm程の痕跡を検出した。両袖部の遺存状態は比較的良く、右袖は75cm、左袖は88cmの範囲が残っていた。袖部は粘土及び黒褐色土等で造り付けられたものである。支脚は遺存せず、住居廃棄時に取りはずされたものであろう。



第56図　236号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。1はカマド内、6・10は床面、2～5・7・8は覆土中、9は貼床下層において検出した。すべて土師器である。

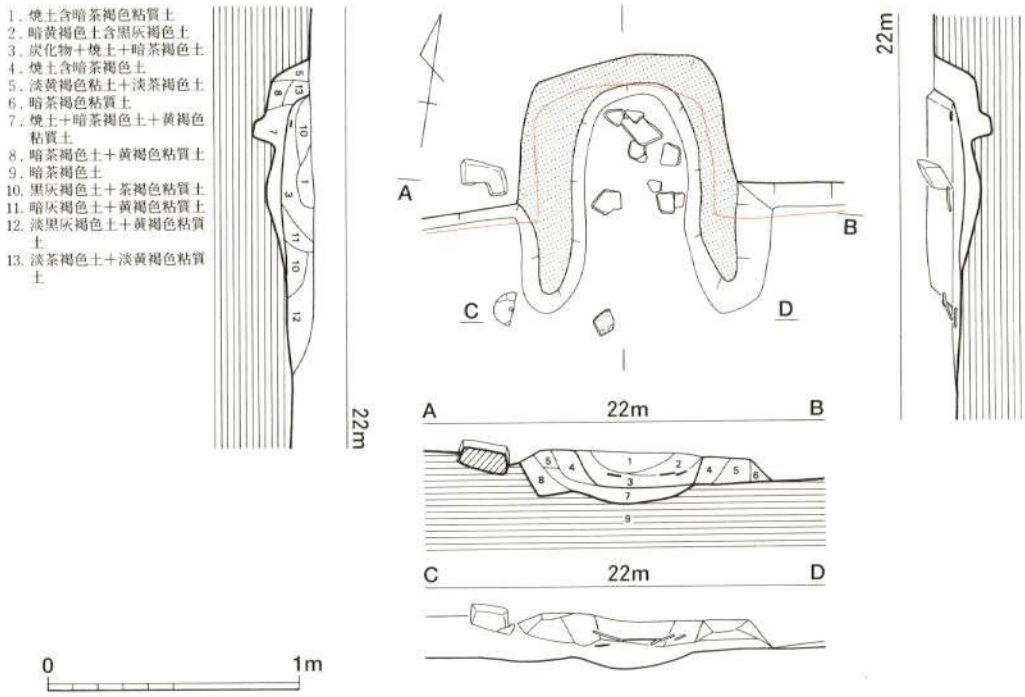
土　器　（図版51、第56図）　1は坏、2は皿、3・4は高坏である。2は内外面をヘラミガキした良質なもので、暗い黄灰褐色を呈する。5・8は支脚に使用される小型甕で、8は口径16.3cmに復原される。7・8は甑片である。9・10は大型の甕で、9は口径22cmに復原される。これらの土器は焼成良好で橙褐色を基調とし、9は暗茶褐色を呈する

237号竪穴住居跡（図版23、第57図）

236号住居の南東に位置し、竪穴部の北東隅を235号住居にわずかに切られ、東壁を64号土坑及び12号土壙墓に、南西隅を131号建物に切られ、236・238・239号住居を切る。

竪穴部のプランは隅円方形を呈し、各壁の長さは、北壁；４ｍ程、東壁；3.4ｍ、南壁；4.15ｍ、西壁；3.48ｍを測る。残りの良い西壁で、壁高10cm程である。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。壁小溝は検出していない。貼床下層の遺構については、掘り込みが廻り、P_3寄りに中央土坑を検出した。



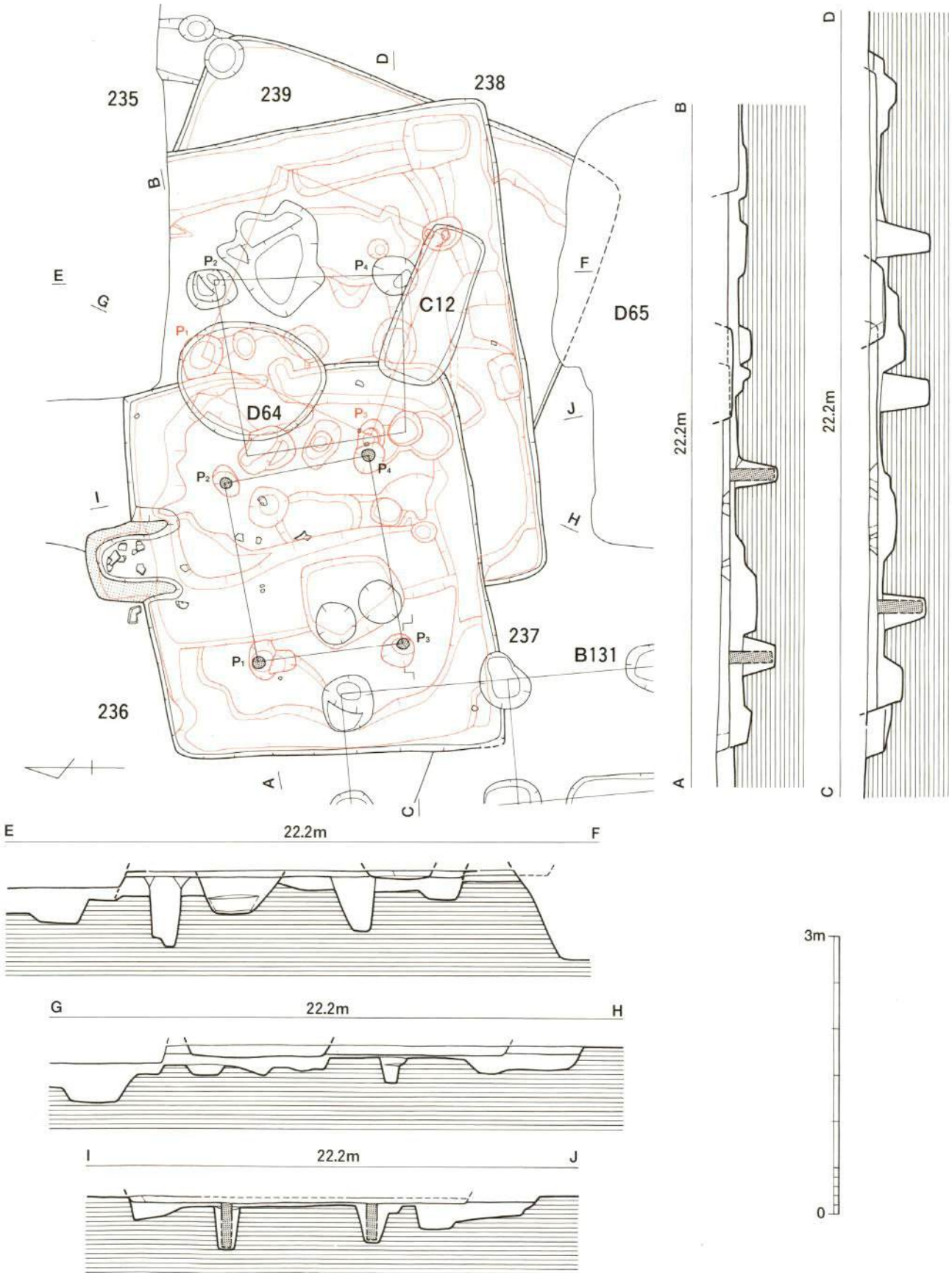
第58図　237号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版23、第58図）　北壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。突出部は隅円方形の掘り方で、幅88cm、先端が竪穴部から50cm突出する。突出部の周壁に幅10cm～20cmの粘土を貼り付けている。両袖部とも竪穴部内に延び、高さ10cm前後、長さ40cm程が残っていた。火床面は住居の床面より５cm程低い。支脚は検出していないが、カマド内に長さ12cm、幅８cm、厚さ６cm程の石があり、この石が支脚であった可能性がある。いずれにせよ、原位置を保ってはおらず、住居の廃棄時にはずされたたものであろう。

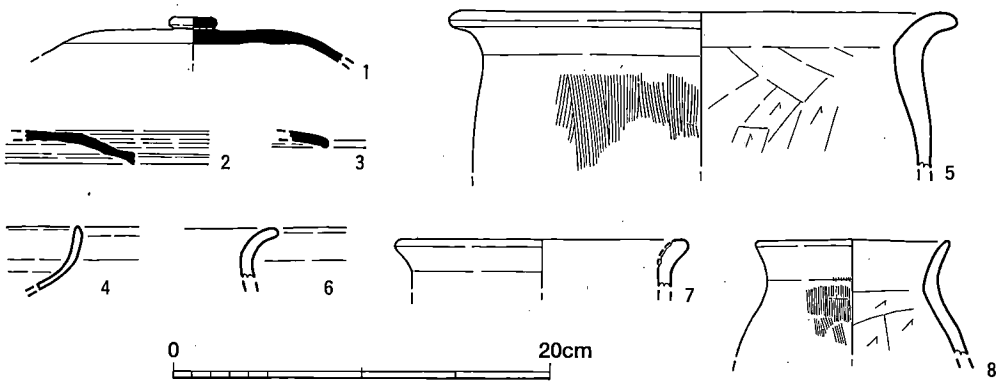
出土遺物

土師器・須恵器が出土している。１はカマド前面、５は床面、２～４・８は覆土中、６・７は貼床下層において検出した。１～３は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第59図）　１～３は坏蓋である。１・３焼成は良好で橙褐色を呈する。２は焼成が



第57図　237～239号竪穴住居跡実測図（1/60）



第59図　237号竪穴住居跡実測図（1/60）

やや不良で緑灰色を呈する。4は坏片である。5・7・8は小型の甕で、支脚に使用されることが多い。口径は、7；15.6cm、8；10.3cmに復原される。焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。5は大型の甕で、口径26cmに復元される。焼成良好で淡橙褐色を呈する。

238号竪穴住居跡（図版24、第57図）

236号住居の東に位置し、竪穴部は235・237号住居、64号土坑及び12号土壙墓に大きく切られ、239号住居を切る。遺構検出時は2軒の住居と考えていたが、主柱穴配置から1軒の住居と判断し、合わせて238号住居として報告する。

竪穴部のプランは、東西に幅広い隅円方形を呈し、計測可能な各壁の長さは、東壁；3.4m十、南壁；5.14mを測る。壁高は10cm前後が遺存する。カマドは遺存しないが、北壁に設置されていたと考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、上述の遺構に大きく切られるため床面遺構の遺存状態は良くない。床面に検出した主柱穴はP_2・P_4で、P_1・P_3は237号住居の貼床下層に検出した。なお、壁小溝は検出していない。

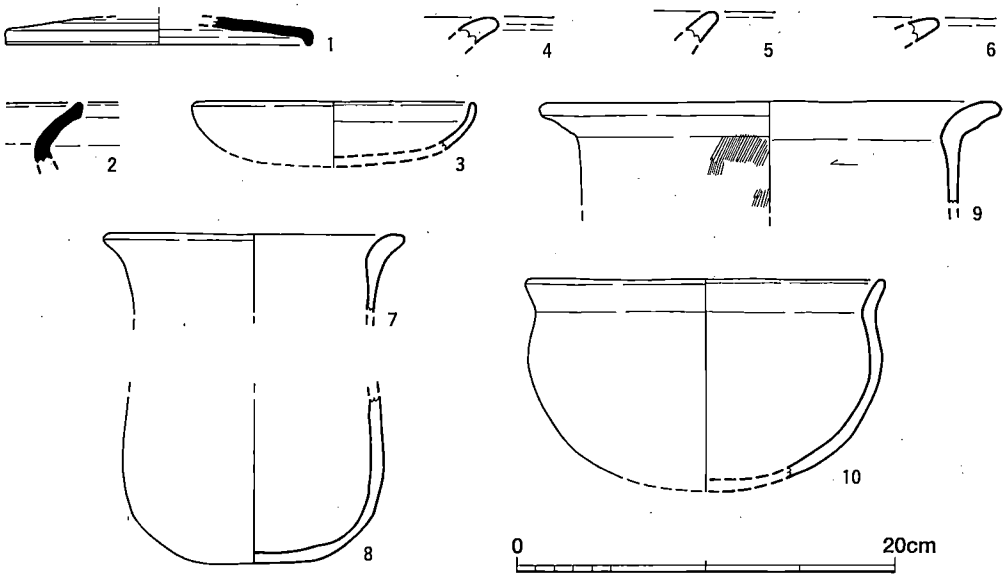
貼床下層の遺構については、掘り込みが廻る。南東隅に、長軸70cm、短軸52cm、深さ15cm前後の小規模な土坑状遺構があり、壁隅土坑かと推測する。

カマド　遺存しないが、北壁に設置されていたと思われる。

出土遺物

土師器・須恵器が出土している。10は床面、1・2・7～9は覆土中、3～6は貼床下層において検出した。1・2は須恵器、他は土師器である。住居に伴うものはない。

土　器（図版51、第60図）　1は坏蓋で、口径16cmに復原される。焼成は良好で灰色を呈する。2は甕片で、焼成良好で灰茶褐色を呈する。3は坏片で橙褐色を呈する。4～6は甕の口唇部片である。7・8は支脚に使用されることが多い小型の甕である。同一個体の可能性があ



第60図　238号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

る。口径は15.6cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。9は大型の甕で、口径23cmに復原される。焼成良好で淡いこげ茶色～灰黄褐色を呈する。10は口径18.8cm、器高11cm強に復原される鉢である。焼成良好で淡橙褐色を呈する。

239号竪穴住居跡（図版24、第57図）

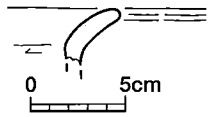
237・238号住居の東に位置し、竪穴部は235・237・238号住居、64・65号土坑及び12号土壙墓に大きく切られているため、竪穴部の遺存状態は極めて悪い。

竪穴部のプランは隅円方形を呈するようである。遺存する東壁長は4.5m程である。壁高は5cm前後である。カマドは遺存しないが、北壁あるいは西壁に設置されていたと考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、他の遺構に大きく切られるため床面遺構の遺存状態は悪い。主柱穴（P_1・P_3・P_4）は237・238号住居の貼床下層に検出したが、P_2は238号住居の掘り込みに削平されているため、遺存しない。なお、壁小溝は検出していない。

貼床下層の遺構については、南東部に掘り込みを検出したにとどまる。

カマド　遺存しないが、北壁あるいは西壁に設置されていたと考えられる。



第61図
239号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

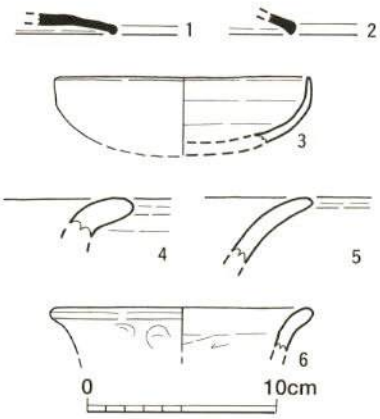
土師器・須恵器が出土しているが図示できるのは、甕の小片1点である。

土　器（第61図）　甕片で、焼成は良好で淡橙褐色を呈する。

【237～239号竪穴住居跡出土遺物】（第62図）

竪穴部の切り合い関係を確認する時点で取り上げたものや、床面下に検出したものである。須恵器、土師器が出土している。1・2は須恵器、他は土師器である。

土　器（第62図）　1・2は坏蓋の小片で、焼成良好で灰色を呈する。3は口径13.4cm、器高4cm程に復原される坏である。遺存状態が悪く内外面は摩滅している。4は大型甕片、5は甑片、6は小型甕片である。6は支脚に使われることが多い。

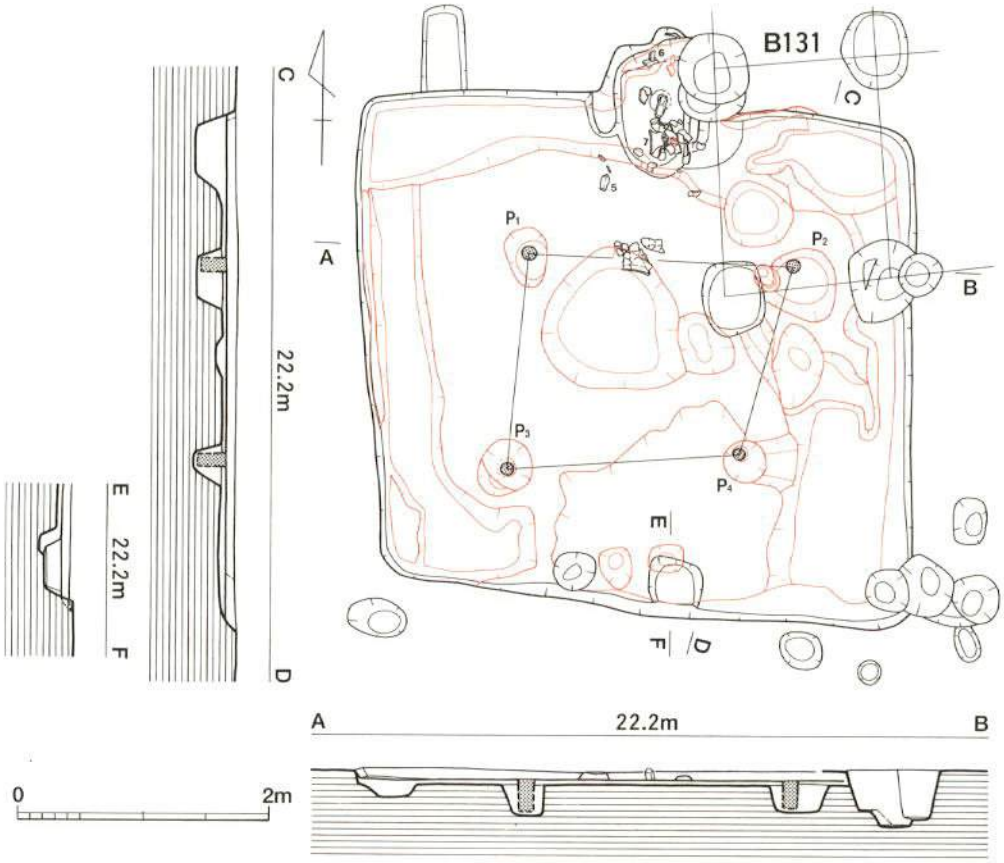


第62図　237～239号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

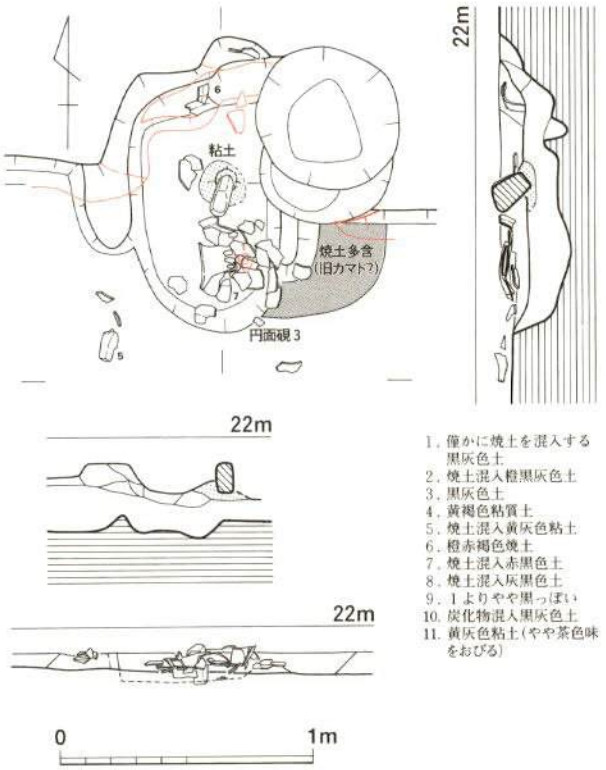
240号竪穴住居跡（図版24、第63図）

236号住居の南に位置する住居跡で、北東部を131号建物に切られる。

竪穴部のプランは、やや東西に幅広の隅円方形を呈する。各壁の長さは、北壁；4.28m、東



第63図　240号竪穴住居跡実測図（1/60）



第64図　240号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

壁；3.88m、南壁；4.18m、西壁；3.71mを測る通常の規模のものである。壁の遺存状態は悪く、壁高は8㎝前後である。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。主柱の配置は竪穴部の平面形とほぼ相似形を呈することが多いが、本住居の場合はP_2が東にずれている。壁小溝は検出していない。

貼床下層の遺構については、明確な中央土坑及び掘り込みを検出した。なお、北東隅に壁隅土坑状の遺構がある。

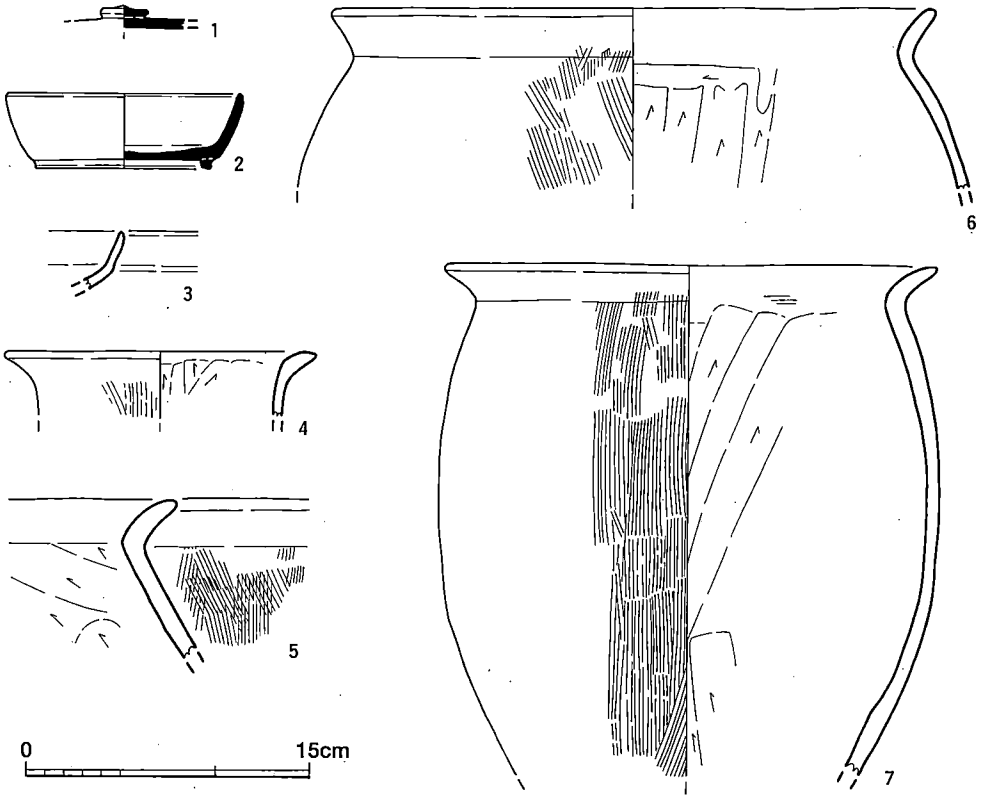
カマド（図版25、第64図）

北壁のほぼ中央に設置され、右(東)半部は、131号建物の柱穴に切られる。また、右袖部の右(東)側に焼土等を多く含む部分があり、カマドの造り替えがあった可能性がある。すなわち、図示したカマドは二代目のカマドの可能性がある。さて、二代目と推測するカマドの掘り方は隅円方形を呈する。煙道部が一部遺存するため、掘り方奥壁の中央部が一部突出したように見える。煙道を含めない掘り方の先端は壁から約35㎝突出する。石製支脚を検出したが、支脚をそなえつけるため、奥壁の下端から約30㎝の位置を中心に、径18㎝、深さ5㎝程の穴を掘り、支脚の基礎部は粘土で固めて安定を図っている。なお、火床面は住居の床面より8㎝程低い。

出土遺物

土師器、須恵器及び円面硯が出土している。1はカマド火床下層、3～7はカマド内、5はカマド前面、2は覆土中において検出した。1・2は須恵器、その他は土師器である。なお、本住居に伴うものは7である。

土　器（第65図）　1は坏蓋の破片である。焼成は良好で灰色を呈する。2は口径12.6㎝、器高4㎝に復原される坏身である。焼成は良好で灰色を呈する。3は坏片。4は小型の甕で口径16.6㎝に復原される。色調は共に橙褐色を基調とする。4～7は大型の甕で6は口径32㎝、7は口径；26.1㎝、現存高26.7㎝に復原される。焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。



第65図　240号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

円面硯（図版63、第174図）　カマド前面の床面に検出した脚部の小破片である。詳細は後述する。

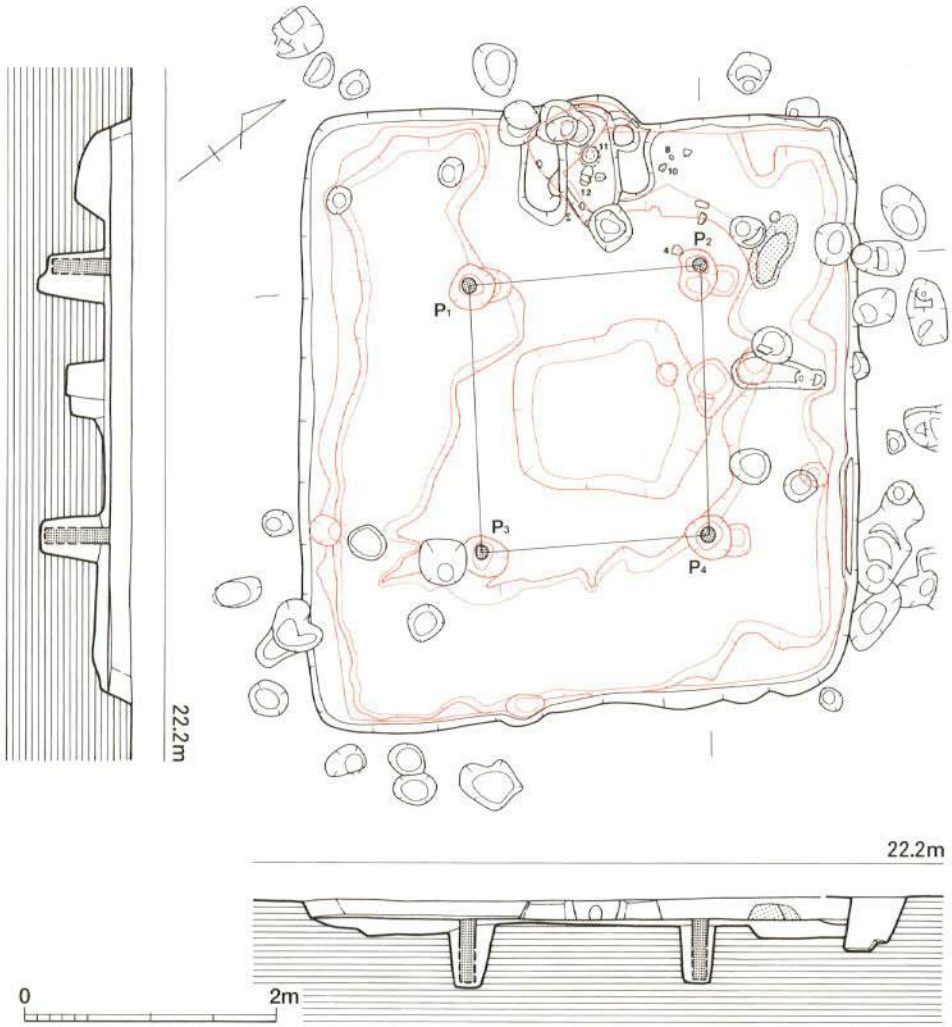
241号竪穴住居跡（図版25、第66図）

240号住居の南に位置する住居跡で、他の顕著な遺構との切り合い関係はない。

竪穴部のプランは、やや不整形な隅円方形を呈する。各壁の長さは、西壁；4.1m、北壁；4.4m、東壁；4.15m、南壁；4.73mを測る通常の規模のものである。壁の遺存状態は良く、壁高は20cm前後である。西壁のほぼ中央に、わずかに突出するカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。P_2と壁の間の床面に、粘土塊を検出したが、廃棄されたものか、本住居に伴う何らかの構造物に関係するものかは不明である。壁小溝は検出していない。

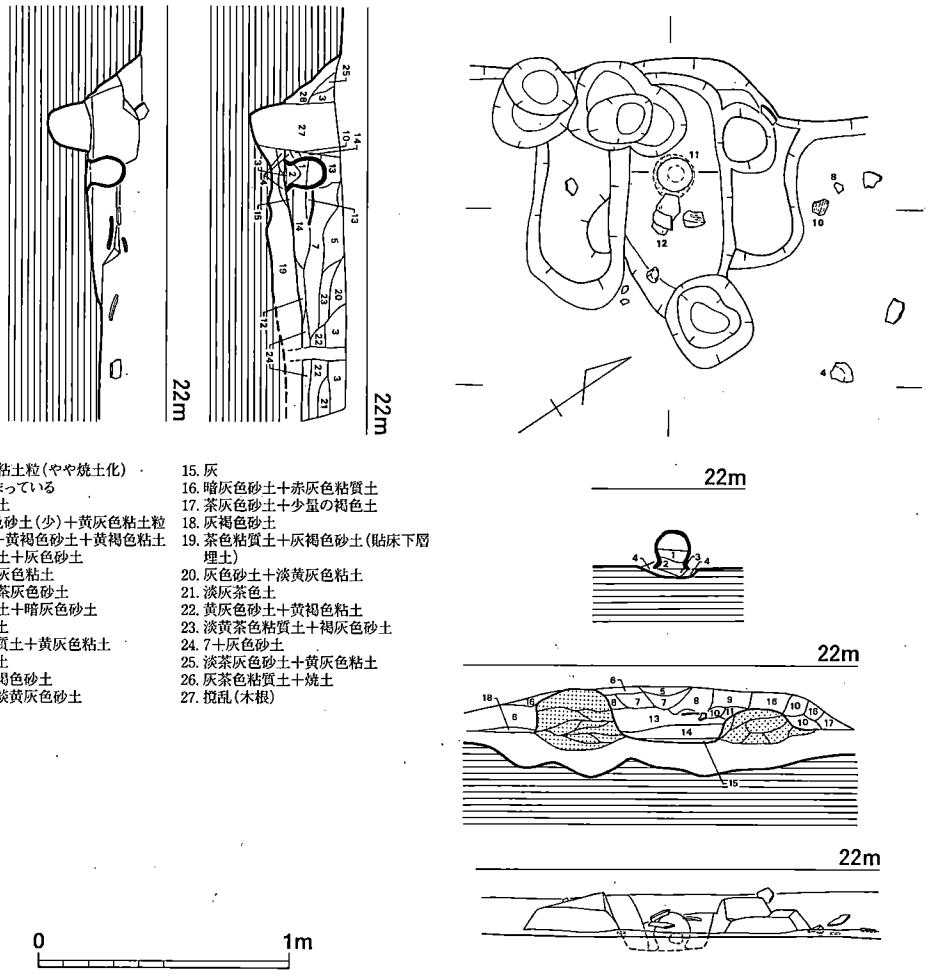
貼床下層の遺構については、明確な中央土坑及び掘り込みを検出した。なお、①主柱穴P_1・P_2・P_4は各々対となって東に位置するピットを切っていること、②掘り込みの壁際に地山



第66図　241号竪穴住居跡実測図（1/60）

の平坦部があることから、わずかではあるが、本住居は規模を拡張して建て替えられたものであろうと考えられる。

カマド（図26版、第67図）　西壁のほぼ中央に設置され、５個のピットに切られるが、およその規模は分かり、また、幸いなことに支脚が原位置に遺存していた。カマドはやや突出し、掘り方の先端は竪穴部から20cm程突出している。袖部は、右袖部が長さ53cm、幅30cm前後、高さ10cm弱、左袖部が同じく90cm、35cm前後、15cm程が遺存していた。支脚を備えつけるため、奥壁の下端から約35cmの位置を中心に、径13cm～15cm、深さ３cm程の穴を掘り、支脚の基礎部は粘土で固めて安定を図っている。支脚の内部にも土を詰めているが上半分は空洞であった。



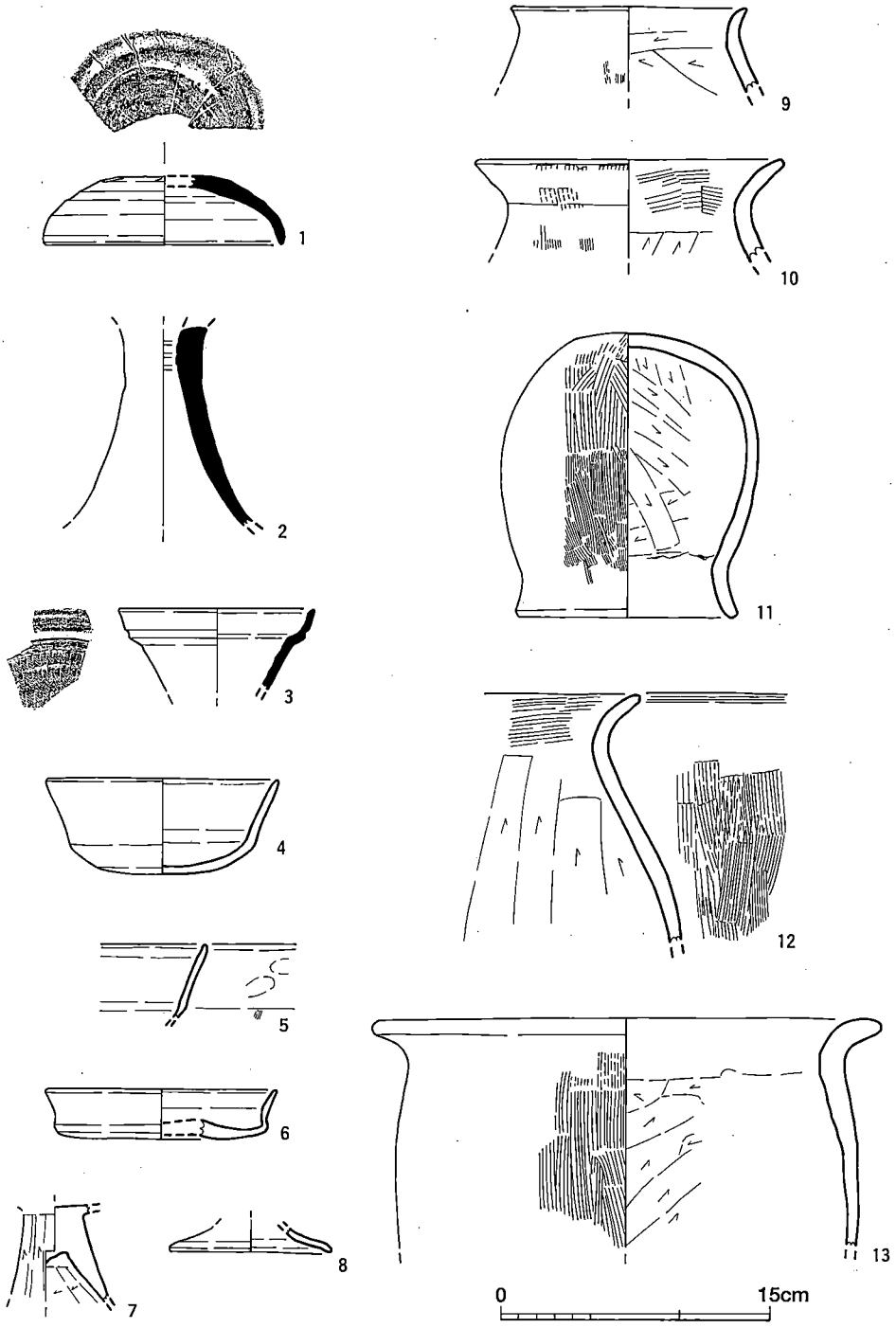
第67図　241号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

なお、火床面は奥行き80cm、幅35cm程で、住居の床面より７cm程低い。

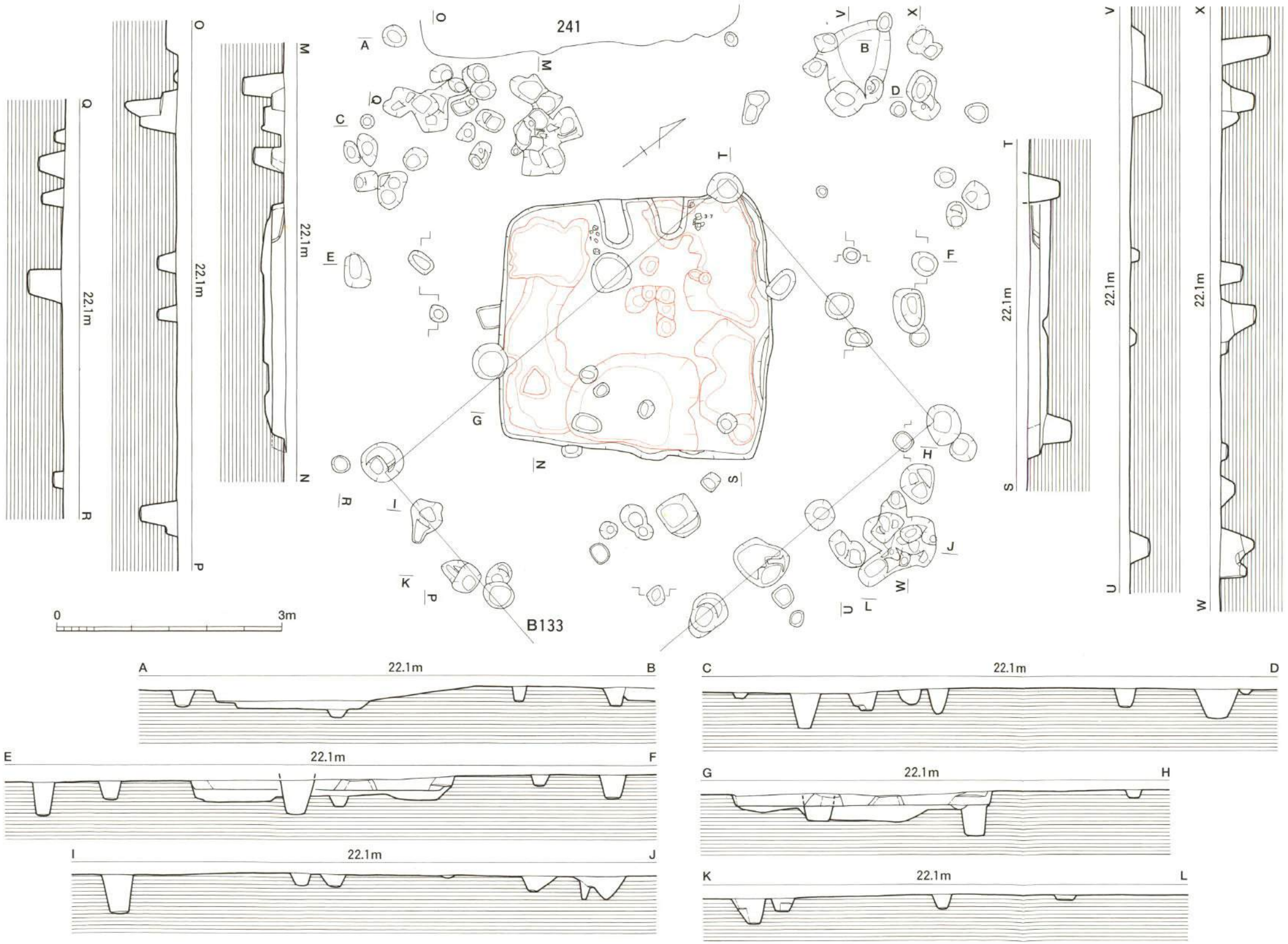
出土遺物

土師器、須恵器が出土している。11・12はカマド内で11は支脚、４・８・10はカマド周辺、１～３・５～７・９は覆土中において検出した。１～３は須恵器、その他は土師器である。なお、本住居に伴うものは11である。

土　器（図版51、第68図）　１坏蓋の破片である。口径13.5cm、器高3.8cmに復原される。２は高坏、３は甕の小片である。これら３点とも焼成は良好で灰色を基調とする。４～６は坏で、口径・器高は、４；13.1cm・5.8cm、６；13cm・2.8cmに復原される。焼成は良好で橙褐色を呈する。７・８は高坏片。９～11は小型の甕で11はカマドにセットされていた。11は完形品



第68図　241号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第69図　242号竪穴住居跡実測図（1/60）

で、口径12.5㎝、器高15.8㎝である。9は橙褐色、10・11は橙褐色を基調とするが、火を受けた部分はこげ茶色を呈する。12・13は大型の甕で、13は口径28.6㎝、現存高137㎝に復原される。焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。

242号竪穴住居跡（図版27、第69図）

241号住居の南西に位置する住居跡で、133号建物に切られる。

竪穴部のプランは、やや不整形な隅円方形を呈する。各壁の長さは、カマドを西にして、西壁；3.25m、北壁；3.48m、東壁；3.37m、南壁；3mを測る小規模なものである。壁の遺存状態は比較的良く、壁高は15㎝前後である。西壁のほぼ中央にカマドを設置する。

床面はほぼ平坦である。通常見られる主柱穴（P_1～P_4）は床面においても、貼床下層においても検出できなかった。よって、竪穴部外に主柱穴の存在を考える必要があり、①竪穴部壁から1～1.2m程外側に想定する案、②同じく2m前後外側に想定する案の二案について説明する。

①竪穴部の対角線の延長線上に位置するP1・P2・P3・P4を主柱穴と考える案である。P1～P2間を除き各主柱穴間のほぼ中央にはP5・P6・P7の補助柱穴と考えられるピットが存在する。見方を変えれば、相対する竪穴部壁のほぼ中心を結ぶ線上にP5・P6・P7が位置している。各主柱穴間の距離は、P1～P2；5.55m、P3～P4；5.55m、P1～P3；5.25m、P2～P4；6mである。また、P5はP1から2.6m、P6はP2から3.2m、P7はP3から2.75mの距離に位置する。これらの柱配置は整然としており、計画性が高い。竪穴部の貼床下層のP8は、主柱穴に囲まれた中心部からややカマド側にずれるが、場合によれば棟持柱の柱穴の可能性もある。主柱穴に囲まれた部分の面積は31.126㎡で、竪穴部の面積11.78㎡のほぼ3倍である。

②①案のほぼ1m外側に並ぶピット、図で、A－B、K－L、Q－R、W－Xの線上に位置するピットを使い、柱穴を捜した。主柱穴P1・P2に相当するP1'・P2'はあるが、P3・P4に相当するP3'・P4'が存在しない。補助柱穴と考えられるピットは、上記の線上に無いわけではないが、竪穴部との位置関係が①案のようには整然としてはいない。

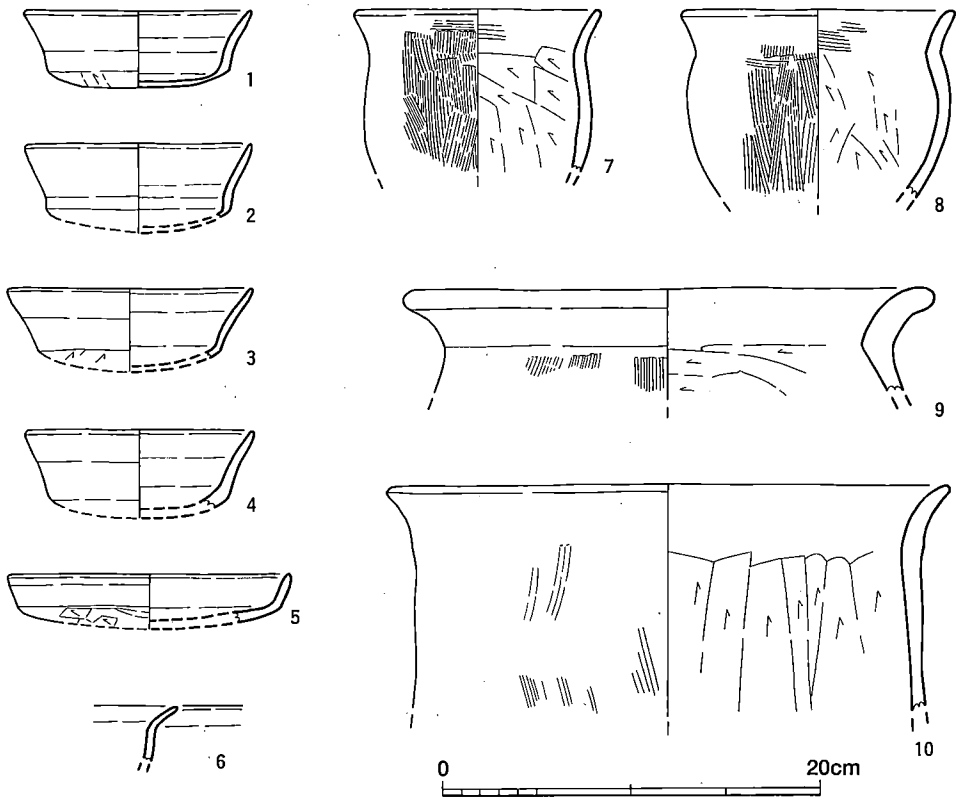
以上のことから、本住居は①案により建てられたものであろうと考える。

竪穴部の貼床下層遺構は、通常の住居とは異なり、土坑が連接したような形で壁際に掘り込みがある。特にカマド対面壁際は上端で長軸1.8m、短軸1.2m、深さ20㎝程の土坑状に掘られている。中央土坑は存在しない。

カマド　西壁のほぼ中央に設置されている。支脚は遺存せず、取りはずされたと思われる。

出土遺物

土師器、須恵器及び石製品が出土している。土器のうち、図示できるのは土師器だけである。1・3・7はカマド左右の床面、8はカマド内部埋土下層、5・9・10は覆土、2・4・6は貼床下層から出土した。



第70図　242号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

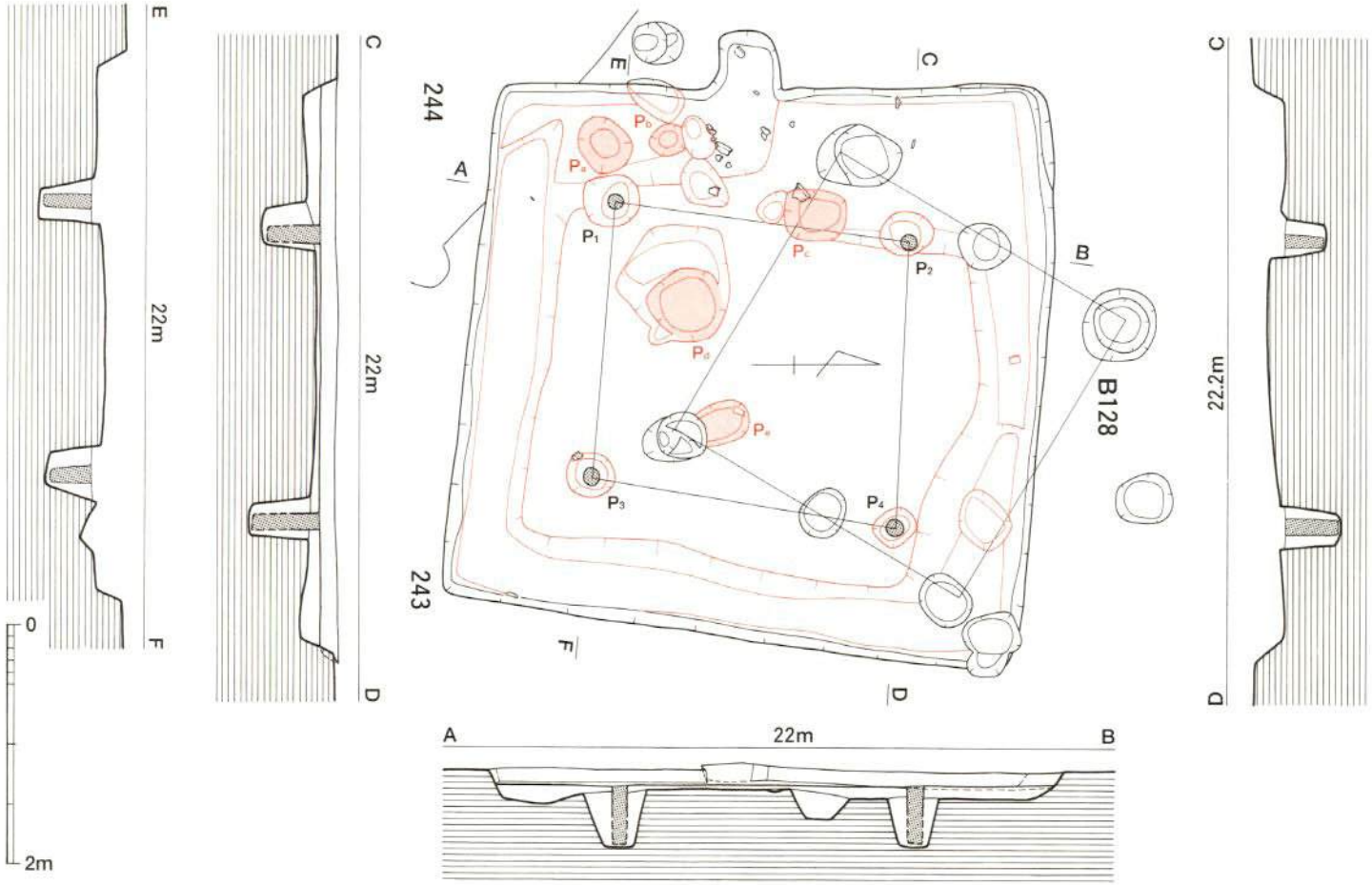
土　器（図版52、第70図）　1～4は坏で、口径・器高は、1；12.1cm・4.1cm、2；12cm・4.7cm、3；13cm・4.4cm、4；12.1cm・4.5cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。5は皿で、口径15cm、器高2.6cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。6は鉢か甕であろう。7・8は小型の甕で、支脚に使用されることが多い。口径は、7；13.2cm、8；14.6cmである。橙褐色～暗茶褐色を呈する。9は大型の甕、10は甑で、口径は9；27.2cm、10；29.5cmに復原される。焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。

石製品（図74版、第189図）　貼床下層の埋土中に検出した敲石状のものである。詳細は後述する。

243号竪穴住居跡（図版27、第71図）

226号住居の南に位置し、竪穴部の北半部は128号建物に切られ、南西隅は224号住居・127号建物を切る。東には、54・55号土坑が存在する。

竪穴部のプランはほぼ隅円方形を呈し、各壁の長さは、西壁；4.45m、北壁；4.9m、東壁

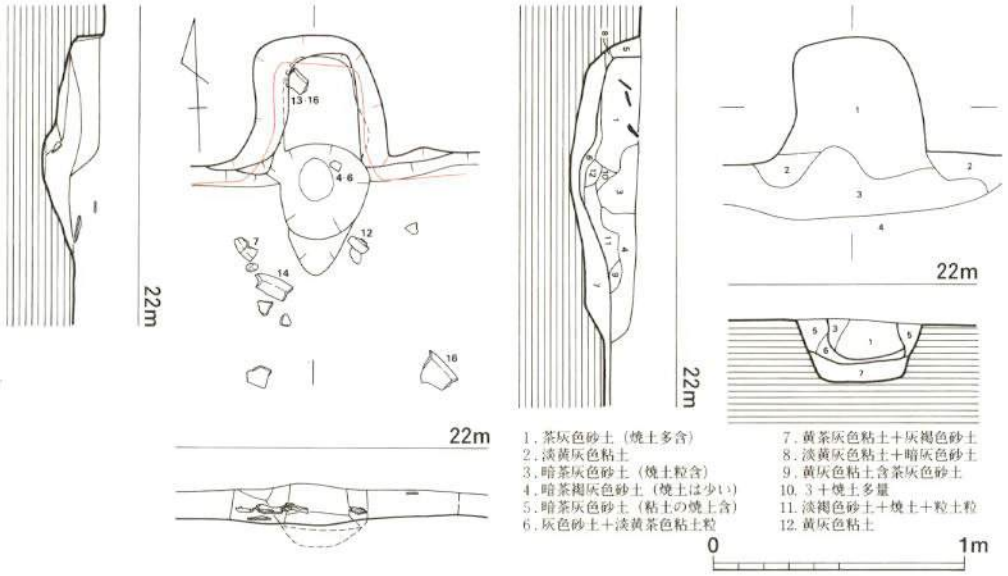


第71図　243号竪穴住居跡実測図（1/60）

；4.73m、南壁4.25mを測り、本村落では通常の規模のものである。壁高は10cm前後を測る。西壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦で、主柱痕（P_1～P_4）を検出した。

貼床下層の遺構については、中央土坑はなく掘り込みが廻る。また、埋土に焼土を含むピット（P_a・P_b・P_c・P_d・P_e）を検出した。P_eは128号建物の柱穴に切られている。本住居の竪穴部の外にあるピットの埋土からは焼土は検出されておらず、本竪穴部内に納まるピット埋土のみから焼土が検出されるが、これらピットは遺構としてのまとまりがなく、竪穴部との関係は明確にしがたい。



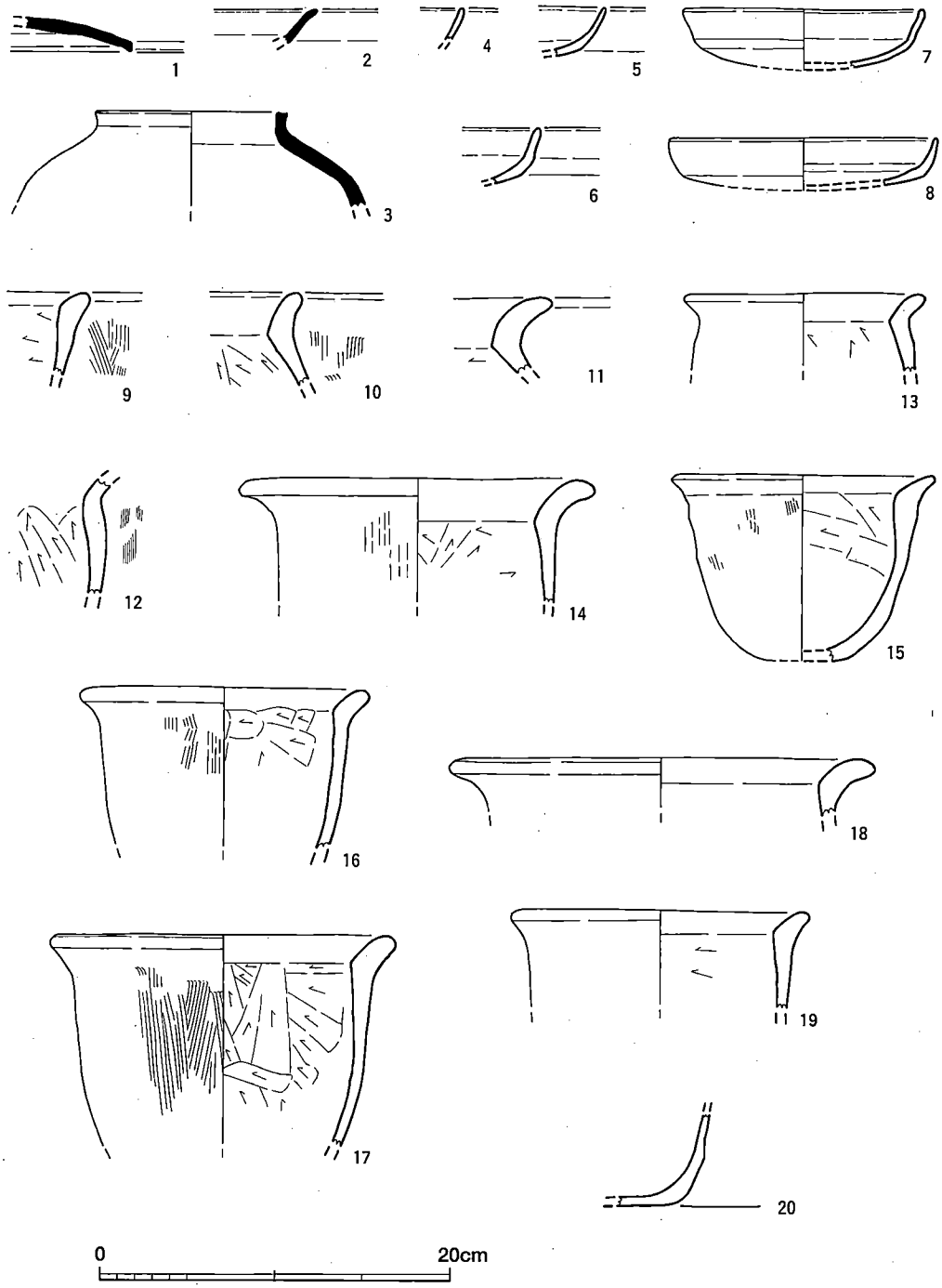
第72図　243号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版28、第72図）　西壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。掘り方は不整形な隅円方形を呈し、先端は竪穴部から50cm程突出し、幅は50cm前後である。プラン検出時の状態は、突出部には焼土を多く含む灰茶褐色土、両袖部の壁際は淡黄灰色粘土、掘り方前面には焼土粒を含む暗茶灰色土を検出した（第72図の右側の図）。カマド本体は、周壁に幅10cm程の粘質土を貼り付けて壁体とする。火床は奥行き45cm、幅30cm程である。支脚は遺存せず、住居廃棄時に取りはずされたものであろう。

出土遺物

土師器、須恵器、鉄製品が出土している。2・4・6・10はカマド内、7・12・14・16はカマド周辺、11・15・20は覆土中、3・8・13・17・19は貼床下層において検出した。なお、1～3は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第73図）　1は坏蓋、2は皿の小片。3は口径11cmの短頸壺である。焼成良好で硬



第73図　243号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

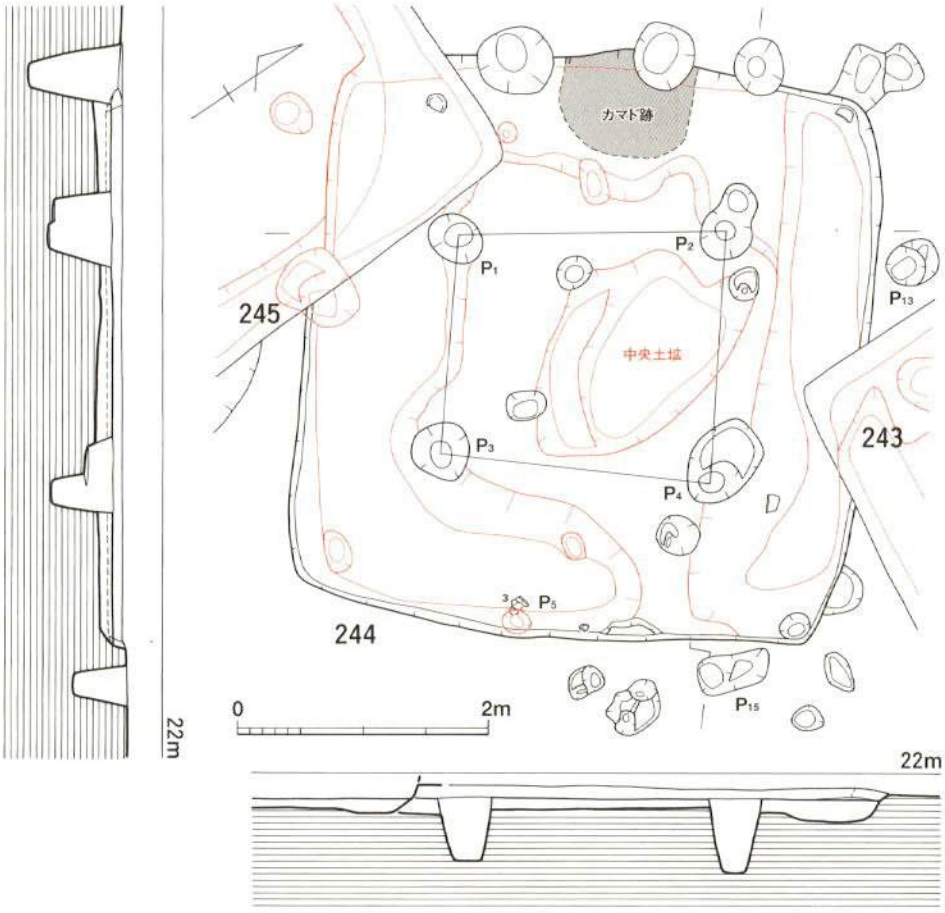
質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。4～8は坏小片である。7は口径13.4cm、器高3.6cm、8は同じく15.2cm、3cmに復原される。茶褐色～暗茶褐色を呈する。9～20は甕で、11・18を除き多くは支脚に使われることが多い小型品である。比較的残りのよい15は、口径15cm、器高10.5cmに復原される。茶褐色～橙褐色を呈する。

鉄製品（図版75、第187図）　カマドの左に検出した刀子の茎片である。詳細は後述する。

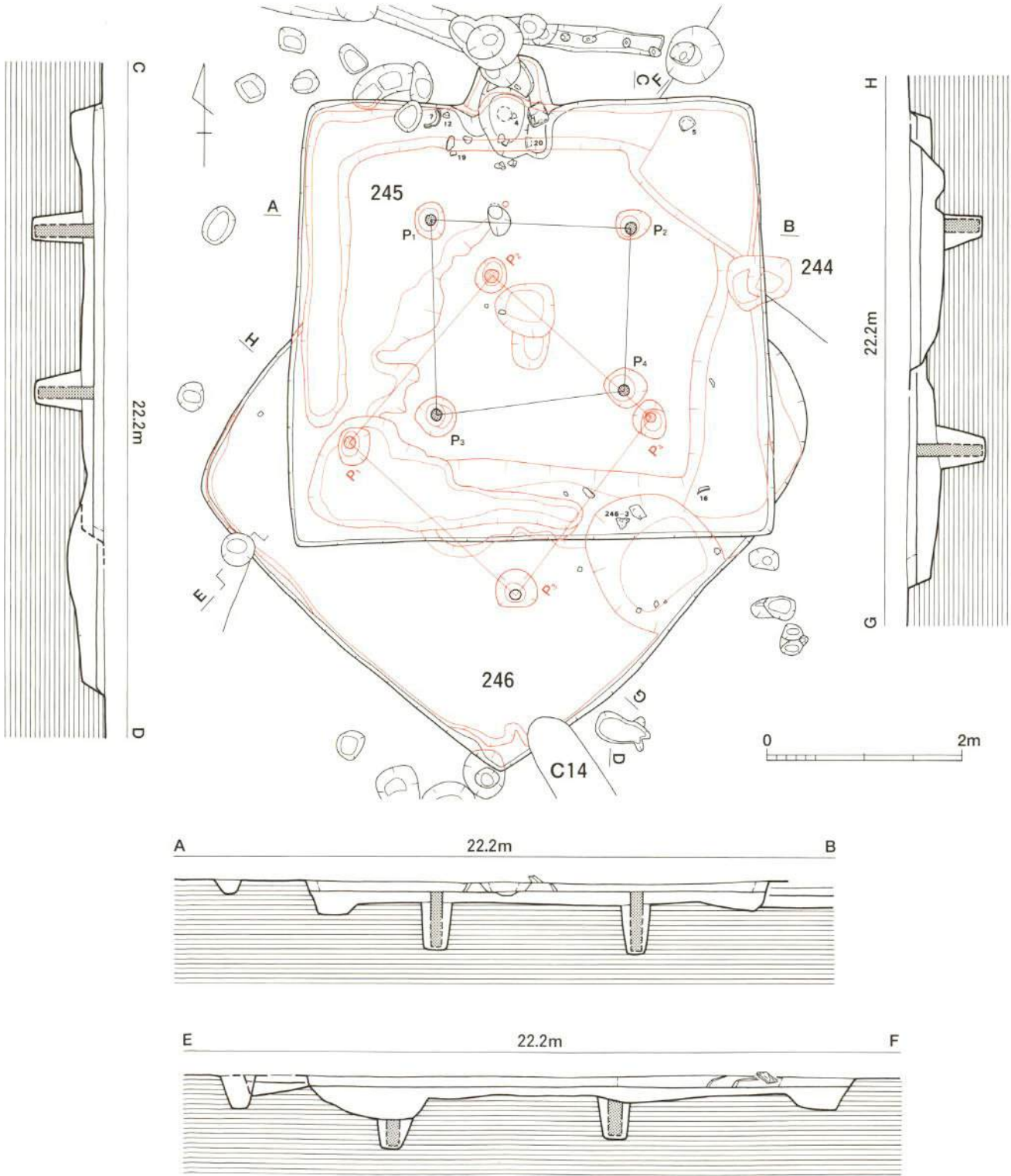
244号竪穴住居跡（図版28、第74図）

243号住居の西に位置し、東壁の一部を243号住居に、西壁の北半部を245号住居に切られる。しかし、西壁北半部の竪穴部のプランは、245号住居の貼床下層に遺存していた。

竪穴部のプランはほぼ隅円方形を呈し、各壁の長さは、西壁；4.2m、北壁；4.31m、東壁；4.1m、南壁4.1mを測り、本村落では通常の規模のものである。壁高は10cmに満たない。西



第74図　244号竪穴住居跡実測図（1/60）

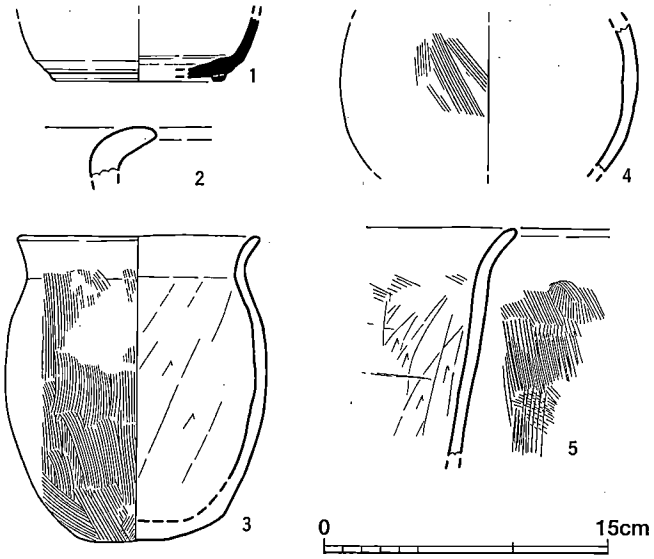


第76図　245・246号竪穴住居跡実測図（1/60）

壁のほぼ中央にカマドを設置するが、遺存状態は悪く、袖部は残っていなかった。

床面はほぼ平坦である。主柱は抜かれており、主柱穴（P_1～P_4）を検出した。

貼床下層の遺構については、中央土坑と掘り込みを検出した。P_5とともに、カマド対面壁の両隅に小ピットを検出している（一方は貼床面に検出）。



第75図　244号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

カマド　西壁中央部にカマドの痕跡を検出した。検出時点にすでに壊れており、袖部は残っていなかった。住居の廃棄時に、支脚を取りはずし、意識的に壊した可能性が高い。

出土遺物

土師器、須恵器及び石製品が出土している。1・2・5と4の破片の一部がカマド内、3は床面、4は覆土中及び貼床下層において検出した破片が接合したものである。1は須恵器、その他は土師器である。3は本住居に伴うものではなく、当竪穴部に廃棄されたか、埋土に混入したものである。

土　器（図版52、第75図）　1の坏身は、焼成良好で硬質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。2は甕小片である。3は口径12.9㎝、器高16.1㎝、8に復原される小型の甕で、支脚に使用されるていたようで、褐色～黒茶褐色を呈する。4は壷であろう。焼成良好で暗茶褐色を呈する。5は甑片であり、焼成良好で茶褐色を呈する。

石製品（図版74、第189図）　貼床下層の埋土中から出土した砥石である。詳細は後述する。

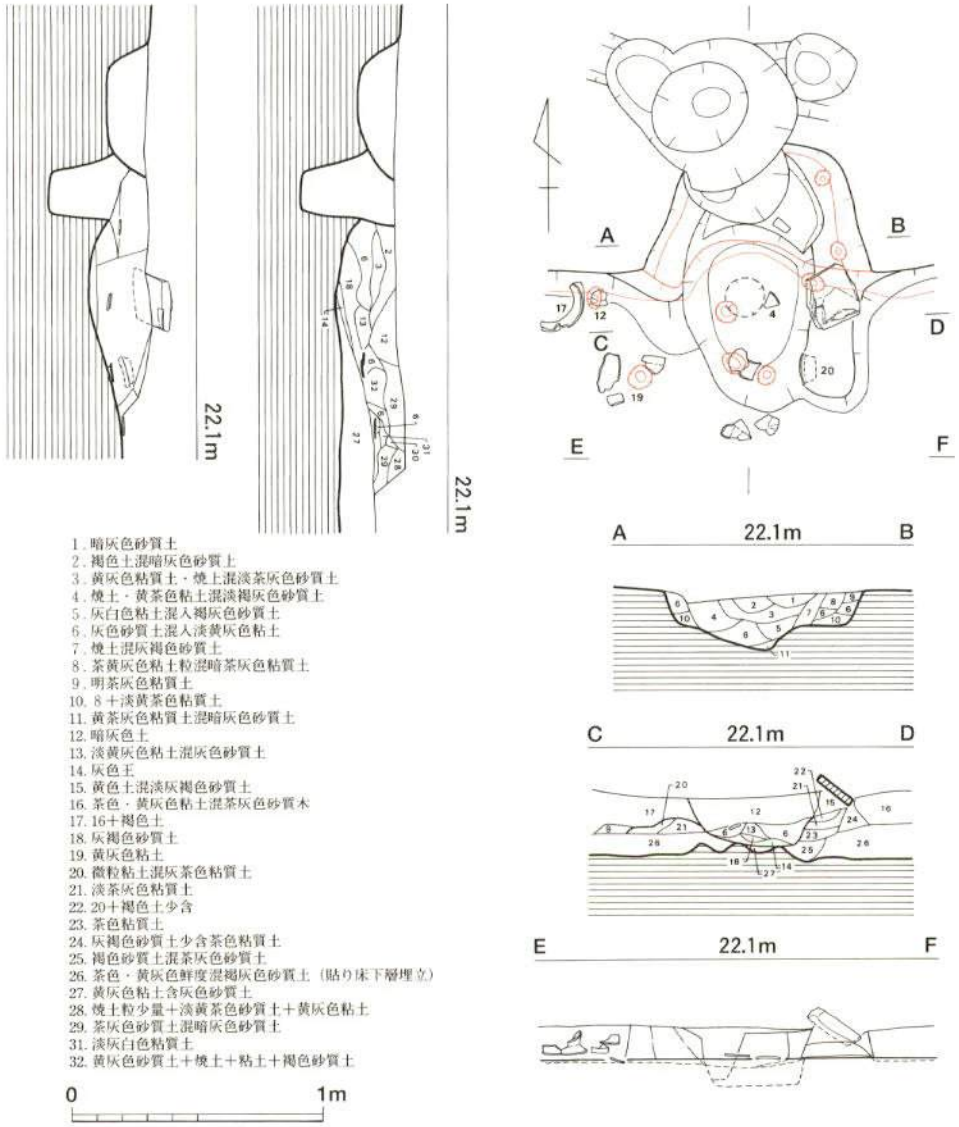
245号竪穴住居跡　（図版28、第76図）

244号住居の西に位置し、244・246号住居を切っている。

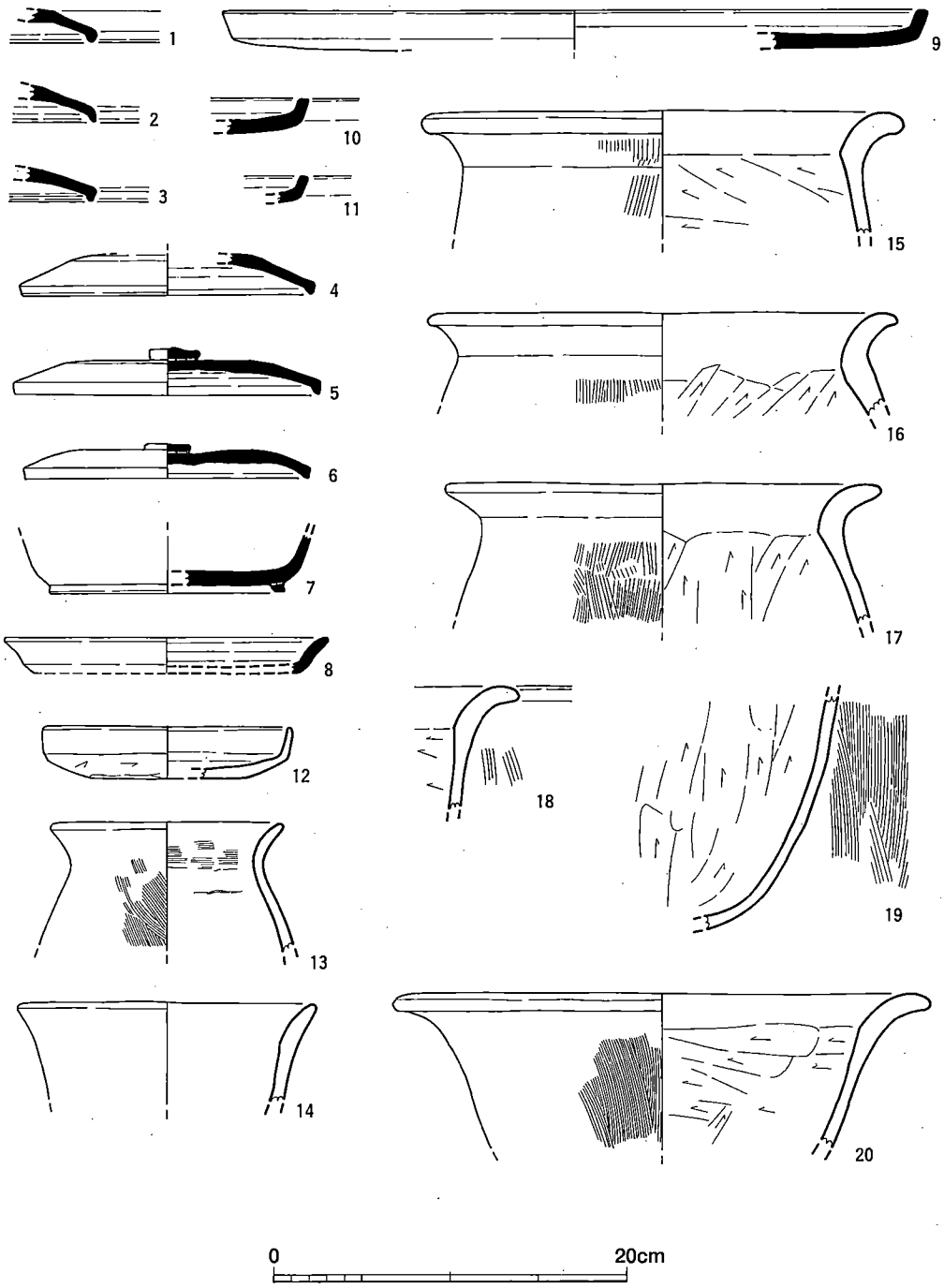
竪穴部のプランは整った隅円方形を呈し、壁のラインは直線的である。各壁の長さは、北壁；4.54m、東壁；4.42m、南壁；4.4m、西壁4.55mを測り、本村落では通常の規模のものである。壁高は10㎝前後である。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。

床面はほぼ平坦である。主柱痕（P_1～P_4）を検出した。

貼床下層の遺構については、掘り込みを検出した。明確な中央土坑は検出していないが、本来中央土坑があるべき位置に柱穴より大きいピットを検出した。このピットは東西径61cm、南北径56cm、深さは地山面から最大で30cm（主柱穴底面より20cm浅い）であり、本竪穴部の完全な中心部に位置している。このピットは貼床面では検出されず、同下層に確認したものであることから、本住居の建ち上げに必要な役割を果たしたと仮定することが許されるならば、屋根を架けるまでには必要であり、その後取りはずされたものであろうと推測する。



第77図　245号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第78図　245号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

カマド（図版29、第77図）　北壁中央部に検出した突出型のカマドである。掘り方は隅円台形を呈し、掘り方の北西部は後世のピットにより壊されている。掘り方の先端は竪穴部から45㎝程突出し、最大幅90㎝で、奥壁部での最小幅は55㎝程度であろう。袖部長については、右袖が56㎝、左袖が32㎝遺存していた。また、右袖において、片岩（通称；柿原石）の板石がカマドの内側に傾斜した状態で検出した。カマド壁体の構造に伴うか否かは明らかにしがたい。火床面は奥行き90㎝弱、幅50㎝前後で、住居床面から10㎝弱低い。支脚は検出していないが、それがセットされた部分は竪穴部内（火床の奥から55㎝を中心にした部分；竪穴部内に10㎝）に位置してやや窪んでいる。住居の廃棄に際して、カマドの支脚を取りはずす行為は、当時の一連の生活様式の中で、重要な要素であったのであろう。

出土遺物

土師器、須恵器、焼塩土器、鉄製品及び石製品が出土している。4がカマド内、12·17·19·20はカマド周辺、4·5·13は床面、1はP_1埋土、2·3·6～10·15は覆土中、18は貼床下層において検出した。1～9は須恵器、その他は土師器である。ただし、本住居に伴う確証のあるものはない。

土　器（図版52、第79図）　1～6は坏蓋で、5は口径18.2㎝、器高2㎝、6は同じく15.8㎝、2㎝に復原される。これらはおおむね焼成良好で硬質に焼き上がっており、淡灰色～灰色を呈する。7は坏身小片、8は高坏小片である。12は坏で口径13.8㎝、器高3㎝程に復原される。13は小型甕で、口径12.6㎝に復原される。14・18は甑片である。15～17・19は大型の甕である。口径は23㎝～25㎝で、焼成良好で橙褐色を基調とする。20は鉢で、口径28㎝に復原され、焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。

焼塩土器（図版68、第181図）　覆土から4点出土した。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　覆土から釘と思われる破片1点が出土した。詳細は後述する。

石製品（図版74、第189図）　貼床下層から砥石が1点が出土した。詳細は後述する。

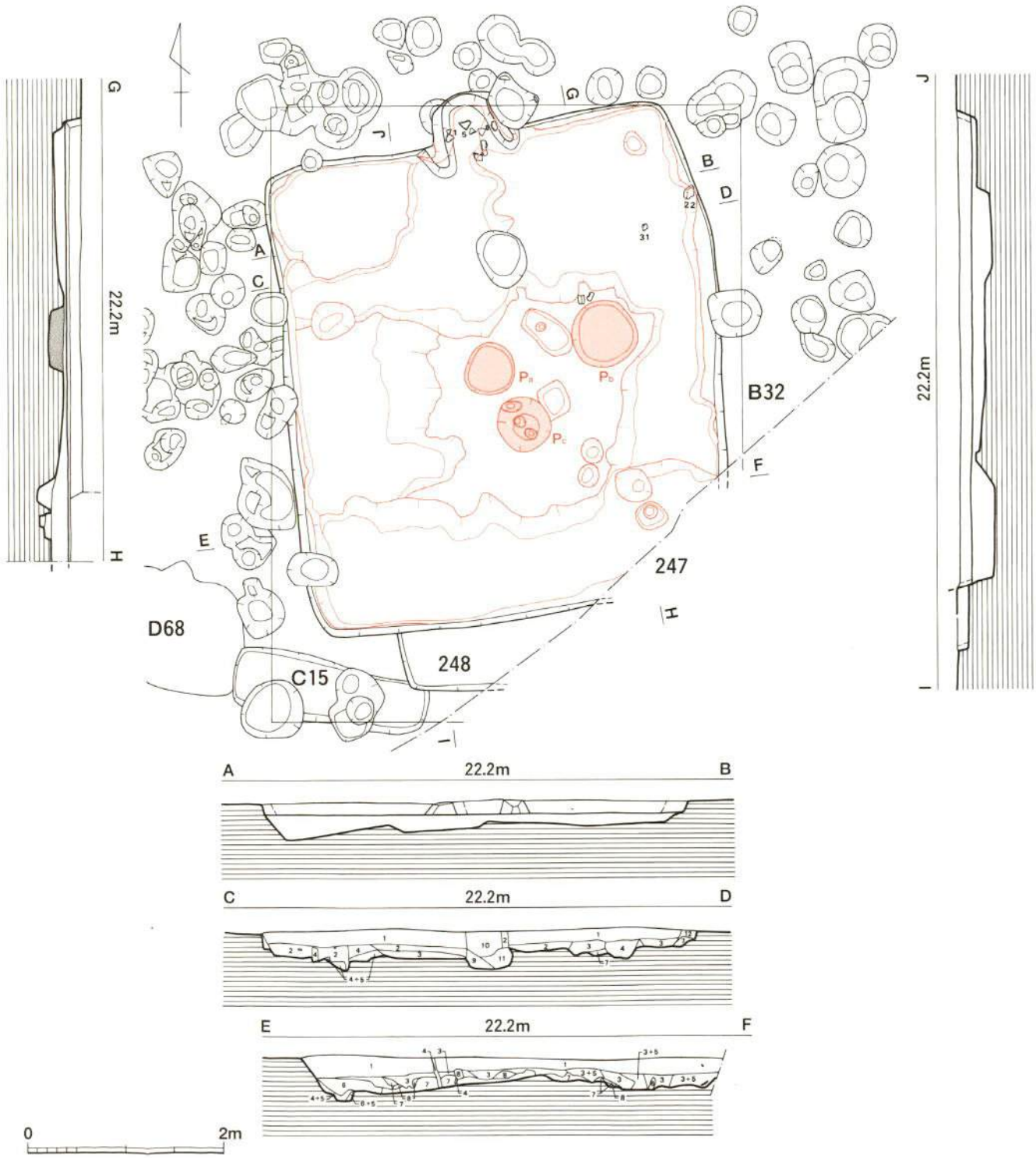
246号竪穴住居跡（図版28、第76図）

245号住居の西に位置し、245号住居、13・14号土壙墓に大きく切られる。

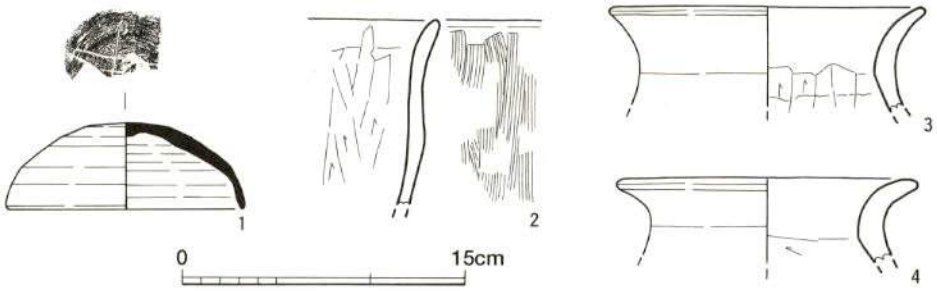
竪穴部は、245号住居に大きく切られるため正確を期し難いが、隅円方形を呈すると考えられる。壁のラインはやや弧を描く。遺存する壁の長さは、東壁；5m弱、南壁；4.28mで、西・北壁とも4.5m前後と推定される。本村落では通常の規模のものである。壁高は10㎝弱である。カマドの位置は不明ながら、本村落の通常の事例から、西または北壁に設置したと思われる。

床面はほぼ平坦である。主柱痕（P_1～P_4）を検出した。245号住居に切られながら、その下層にに検出した主柱穴内に主柱痕が遺存したことは、柱を抜かずに切り取ったためであろう。

貼床下層の遺構については、東壁中央際に土坑を検出した。この規模の土坑は本来は中央土坑として、主柱間エリア内の下層に検出されるべきものである。



第80図　247・248号竪穴住居跡実測図（1/60）



第79図　246号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

カマド　本村落の住居においては、カマドは、西または北壁に設置するため、本住居も同様であったと思われる。

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。２・４は覆土中、１・３は貼床下層において検出した。１は須恵器、他は土師器である。

土　器（第79図）　１は坏蓋で口径12.5㎝、器高4.5㎝に復原される。焼成良好で灰色を呈する。２は甑小片である。３・４は小型甕で、支脚に使われることが多い。２～４とも焼成良好で、橙褐色～暗褐色を呈する。

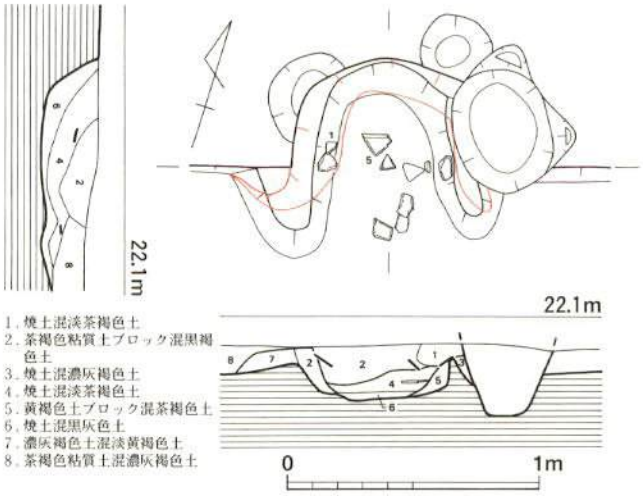
247号竪穴住居跡（図版29、第80図）

246号住居の西に位置し、132号建物に切られ、248号住居を切る。南東隅が調査区外に延びる。

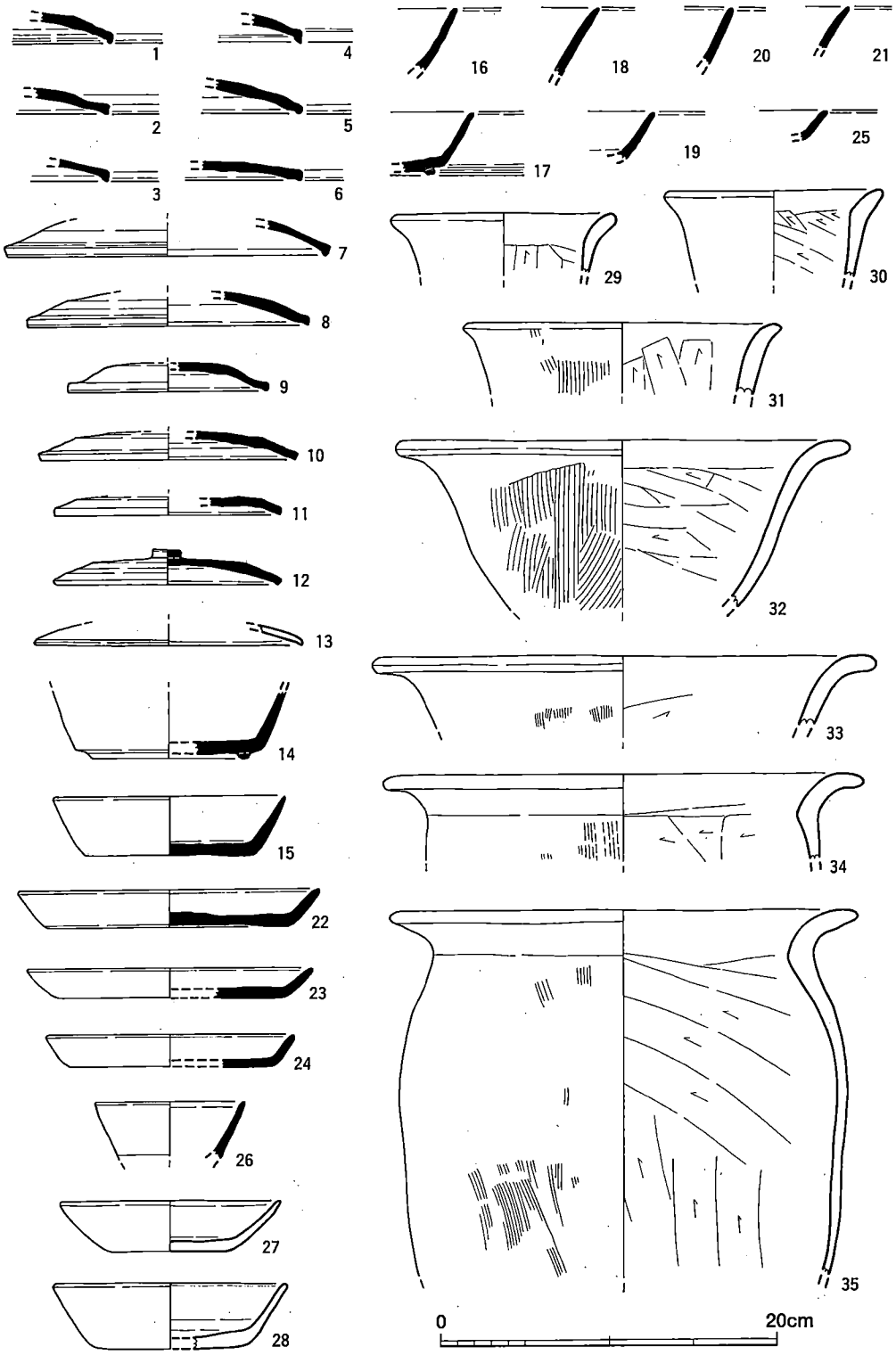
竪穴部は不整形な隅円方形を呈する。壁の長さは、北壁；4.1ｍ、東壁；3.75ｍ＋、南壁2.7ｍ＋、西壁；4.71ｍである。本村落では通常の規模のものである。壁高は10㎝前後である。北壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置している。

床面はほぼ平坦である。本村落で通常見られる主柱穴は検出できなかった。

貼床下層の遺構については、掘り込みを検出した。中央土坑は存在しないが、主柱間エリア内に相当する範囲に焼土を含むピット（P_a・P_b・P_c）を検出した。検出面での各々の規模と深さはP_a；50㎝×52㎝：深さ



第81図　247号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第82図　247号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

14cm、P_b；62cm×69cm：深さ18cm、P_c；56cm×56cm：深さ15cm程である。P_aは竪穴部の完全な中心部に位置するが、P_b・P_cは中心部からそれぞれ東及び南にややずれている。これらのピットの性格については、あきらかにし難い。

カマド（図版30、第81図）　北壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。数個のピットと重複するが、掘り方のプランはおよそ窺え、略円形を呈する。掘り方の先端は竪穴部から43cm突出し、最大幅は80cmを超えるようである。袖部は30cm前後が遺存する。支脚は遺存せず、住居廃棄時に取りはずされたものであろう。

出土遺物

土師器、須恵器及び鉄製品が出土している。1～3・25はカマド、15・22・29・31・33・35は床面、8・13・16・19・30・34は貼床下層、その他は覆土から検出した。1～12・14～26は須恵器、他は土師器である。なお、貼床下層出土の土器の一部は、248号住居の貼床下層に含まれる可能性がある。

土　器（図版52、第82図）　1～12は坏蓋で12は口径13.2cm、器高2.1cmに復原される。焼成良好で灰色～青灰色を呈する。14～21は坏身で15は高台がつかない。15は口径13.8cm、器高3.5cmに復原される。焼成良好で灰色を呈する。22～25は皿で22は口径18cm、器高2.2cmに復原される。26は壷の口縁部であろう。13は坏蓋で全体に磨滅している。29・30は小型の甕片で、支脚に使われることが多い。31は甑の小片である。32・33は鉢、34・35は大型の甕である。土師器はともに焼成良好で、橙褐色～暗褐色を呈する。

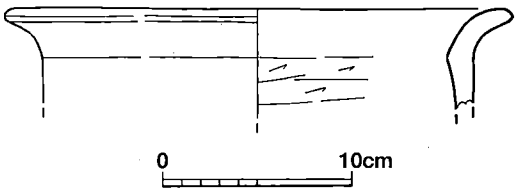
鉄製品（図版75、第187図）　覆土から鎌の破片と思われる破片が1点出土している。詳細は後述する。

248号竪穴住居跡（第80図）

247号住居の南に位置し、同住居に大きく切られている。また、132号建物にも切られ、15号土壙墓を切る。東半部は調査区外に延びる。247号住居と同様に、主柱穴は確認できず、本住居の詳細は不明である。

出土遺物

須恵器、土師器片が出土しているが図示できるのは1点である。なお、247号住居の貼床下層出土の土器の一部は、本住居貼床下層に含まれる可能性がある。



第83図　248号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土　器（第83図）　覆土から出土した大型の甕片である。口径26.2cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。

【249～258号竪穴住居跡の新旧関係一覧】

これから説明する部分では、249～258号住居の計10件が切り合っている。切り合い関係を示せば以下のようである。下の新旧関係のうち、249・251・258号住居は互いに切り合ってないので、これらの新旧は不明である。

（古）　　（新）

250⟶257⟶256⟶254⟶253⟶252⟶258

↘249　　↘251

249号竪穴住居跡（図版30、第85図）

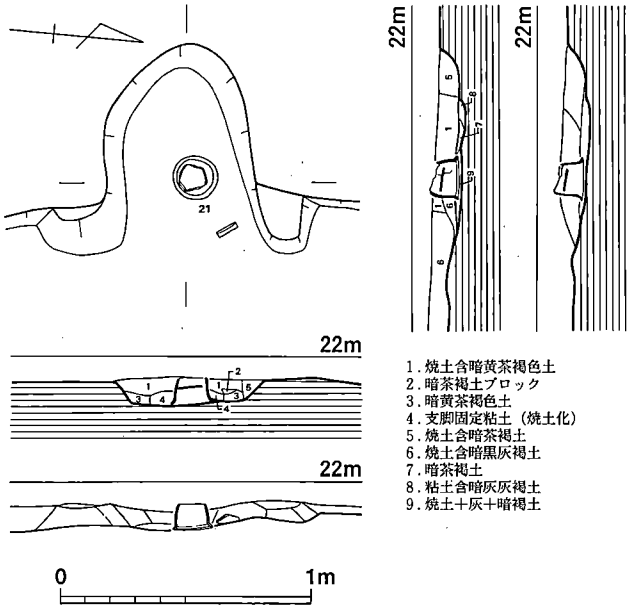
247号住居の西に位置し、250号住居を切る。

竪穴部は、カマドに対して横広の隅円方形を呈する。壁の長さは、西壁；2.68m、北壁；2.5m、東壁2.87m、南壁；2.58mで、本村落では小型に属する。壁高は5cm前後である。西壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置している。

床面はほぼ平坦である。本村落で通常見られる主柱穴は検出できなかった。なお、本住居の床面は、250号住居の床面よりも高いので、250号住居のカマドのプランが残っていた。

貼床下層に、土坑2基（中央土坑A・B）を検出した。掘り込みは検出していない。東壁際は地山を一部掘り残し、段がついている。

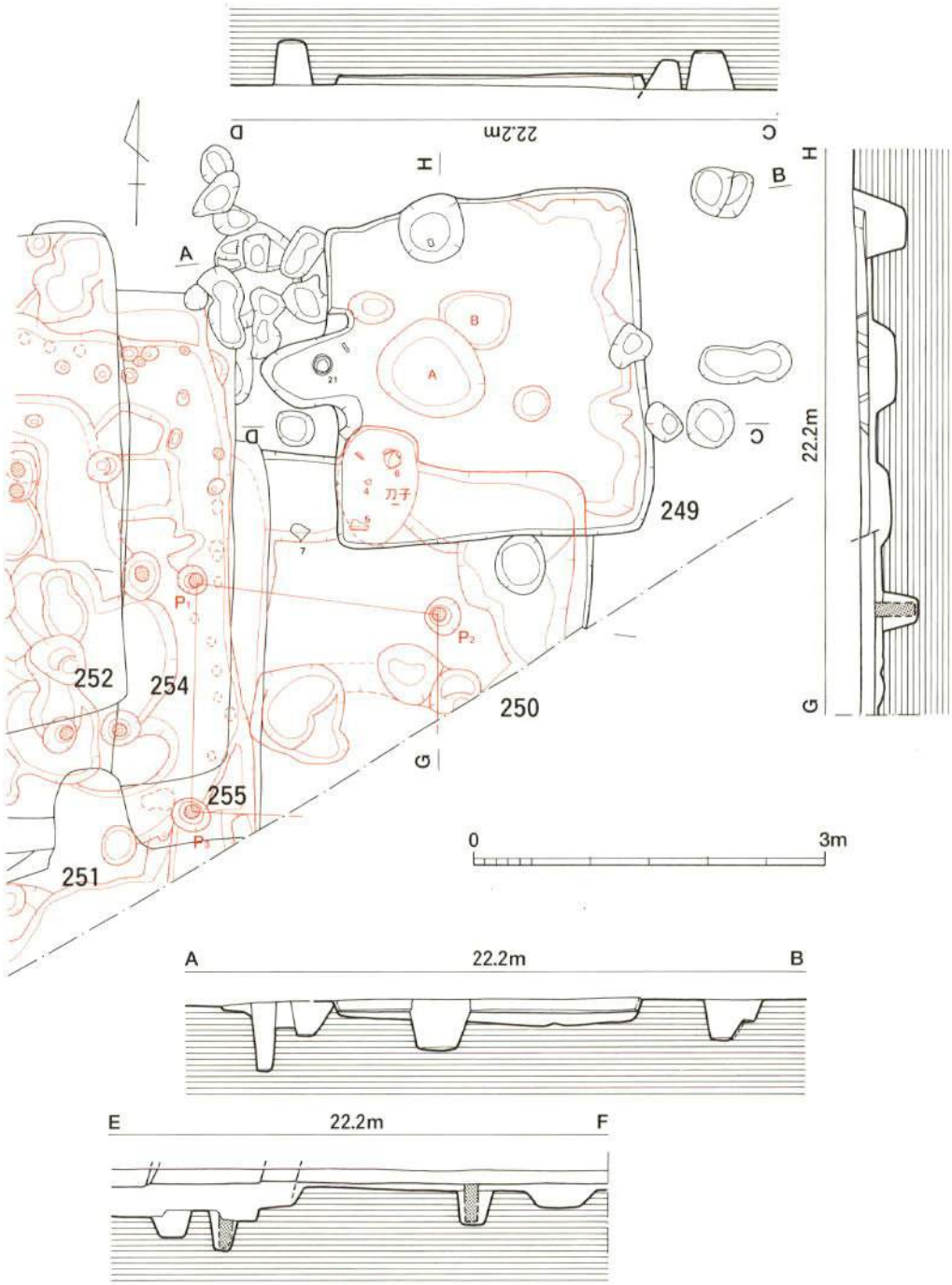
カマド（図31版、第84図）　北壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。掘り方のプランは略長円形を呈する。掘り方の先端は竪穴部から60cm前後突出し、最大幅は60cm程である。袖部は20cm前後が遺存する。支脚は、火床の奥から42cmを中心にした部分にセットされていた。火床は住居床面よりやや低い。



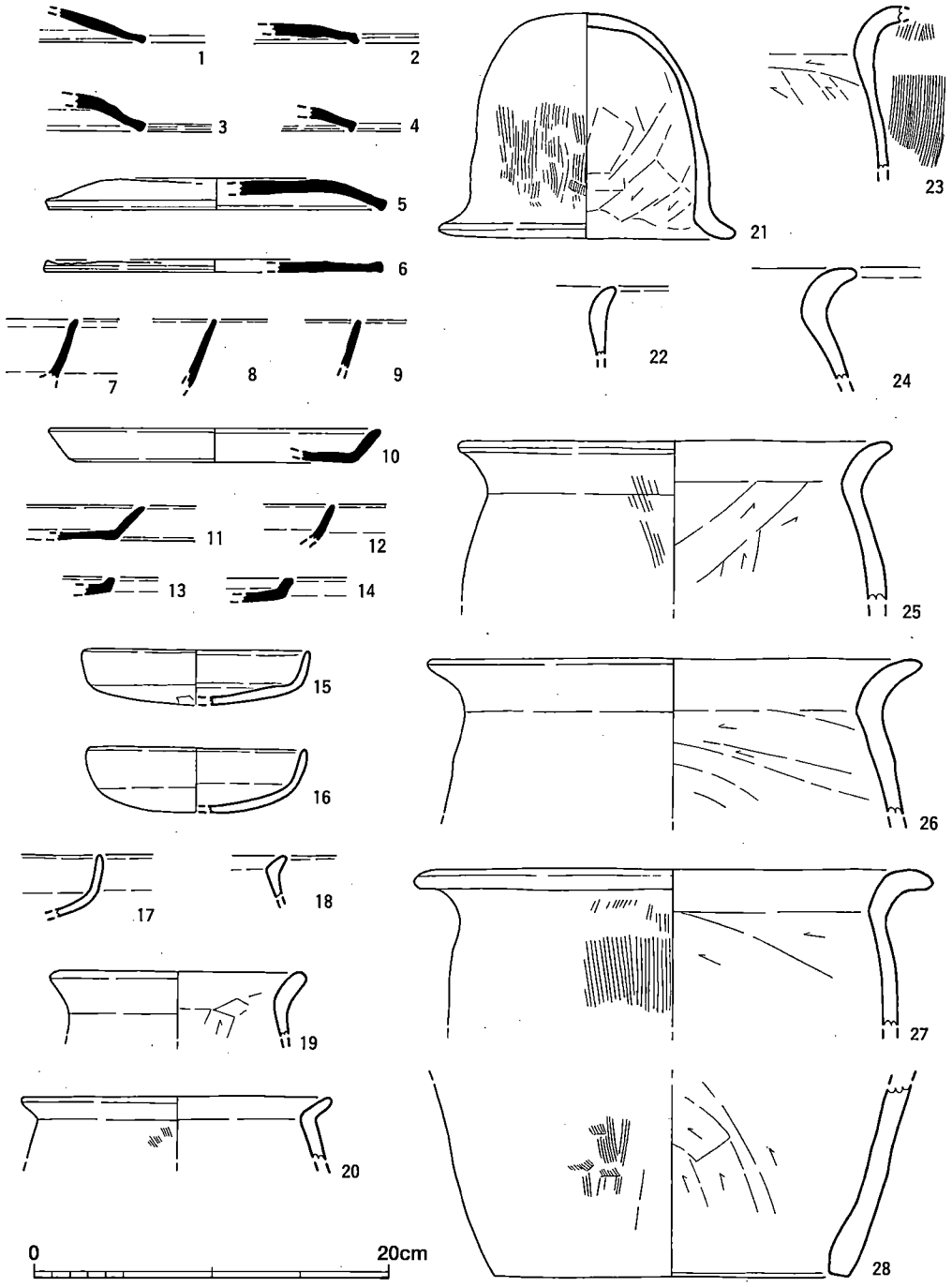
第84図　249号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物

土師器、須恵器及び瓦が出土している。1・6・9・11・12・17・18・20・22・23・27はカマド、26は貼床下層、その他は覆土から検出した。1～14は須恵器、他は土師器である。21は支脚である。



第85図　249・250号竪穴住居跡実測図（1/60）



第86図　249号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土　器（図版52、第86図）　1～6は坏蓋で、口径の復原値は、5；18.8cm、6；19cmである。7～9は坏身、10～12皿、13・14は高坏の小片である。これらの須恵器は焼成良好で淡灰色～灰色を呈する。15～17は坏で、口径・器高の復原値は、15；12.6cm・3cm、16；10.3cm、3.6cmである。焼成良好で黄茶色を基調とする。18～22は小型の甕片で、支脚に使われることが多い。21は支脚で、口径16.7cm、器高12.7cmである。23～27は大型の甕、28は甑である。土師器はともに焼成良好で、橙褐色～暗褐色を呈する。

瓦（図版72、第185図）　覆土から丸瓦片2点が出土した。詳細は後述する。

250号竪穴住居跡（第85図）

249号住居の南に位置し、249・251～257号住居に大きく切られる。また、南東部は調査区外に延びる。

竪穴部は隅円方形を呈するようである。遺存する壁高は5cm前後である。カマドは突出型で北壁に設置されているが、柱配置から判断して、北壁の中央ではなく、やや東に寄った位置に設置されているようである。

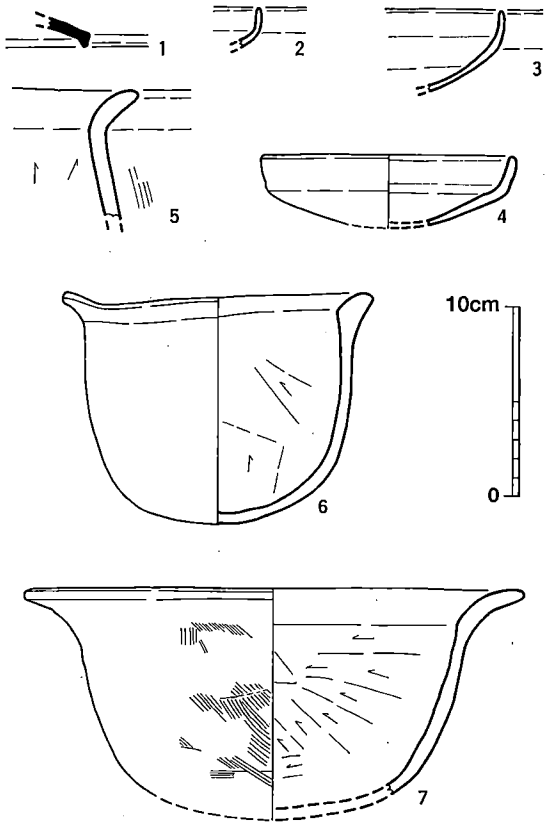
床面はほぼ平坦である。主柱痕P_2を検出した。主柱穴は調査区外のP_4を除き、確認した。柱配置が東西に広いので、本住居の竪穴部のプランは東西にやや広い可能性がある。

貼床下層には中央土坑を検出した。

カマド　北壁のほぼ中央よりやや東寄りに設置された突出型のカマドである。掘り方のプランは円形を呈する。掘り方の先端は竪穴部から20cm前後突出し、最大幅は65cm程である。袖部は、149号住居に削平されているため遺存しない。支脚が原位置をはずれ、転倒した状態で出土した。

出土遺物

土師器、須恵器及び鉄製品が出土している。4～6はカマド、1・7は床面、2・3は貼床下層の中央土坑から検出した。1は須恵器、他は土師器で

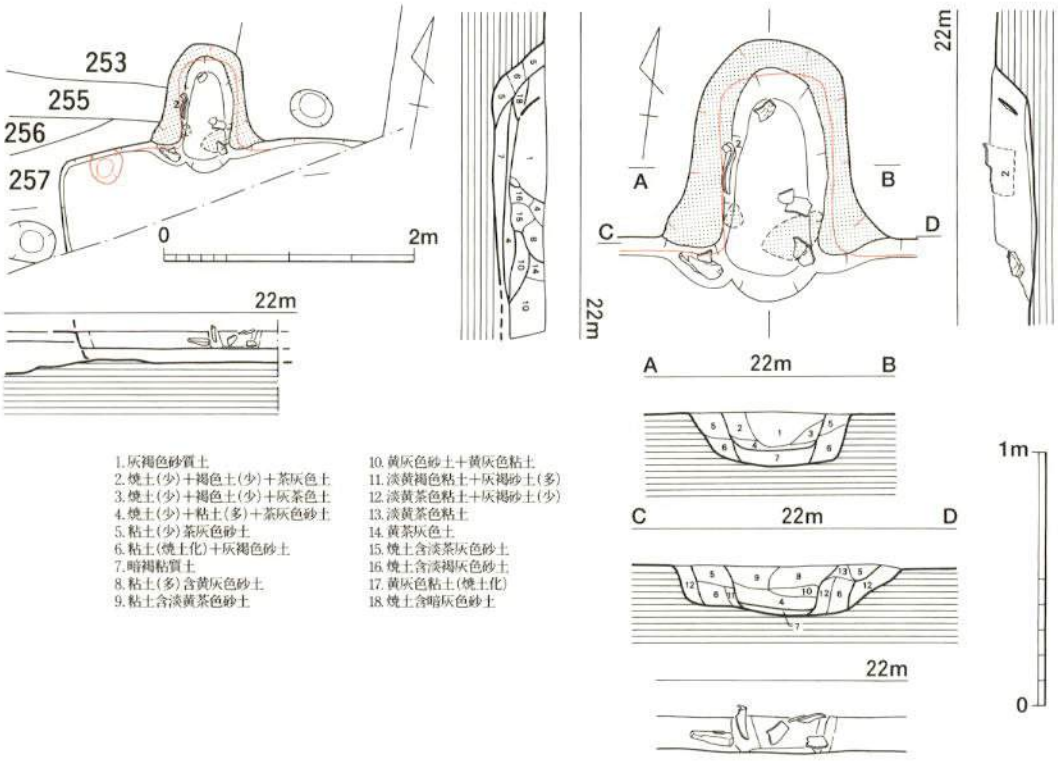


第87図　250号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

ある。6は、原位置をはずれて検出した支脚である。

土　器（図版52、第87図）　1は坏蓋片である。焼成良好で灰黄色を呈する。2～4は坏身で、4は口径；13.2cm、器高；3.9cmに復原される。5は大型甕片である。6は口径16.4cm、器高13.2cmの支脚である。7は口径24.6cm、器高12.3cmに復原される鉢である。これらの土師器は焼成良好で橙褐色～茶褐色を呈する。

鉄製品（図版75、第187図）　カマドから検出した刀子片である。詳細は後述する。



第88図　251号竪穴住居跡・カマド実測図（1/30）

251号竪穴住居跡（第88図）

250号住居の西に位置し、254～257号住居を切り、竪穴部の大半は調査区外に延びる。

竪穴部は隅円方形を呈するようである。遺存する壁高は10cm前後である。カマドは突出型で北壁に設置されている。竪穴部は、大半が調査区外に延びるため、詳細は不明である。

カマド（図版31、第88図）　北壁に設置された突出型のカマドである。掘り方のプランは長円形を呈する。周壁に10cm～20cmの厚さの粘土を貼っている。掘り方の先端は竪穴部から80cm前後突出し、最大幅は90cm程である。袖部はわずかに遺存する。内部にカマド本体の粘土が落

下している。甕の破片が散乱するが、支脚は遺存せず、取りはずされたようである。

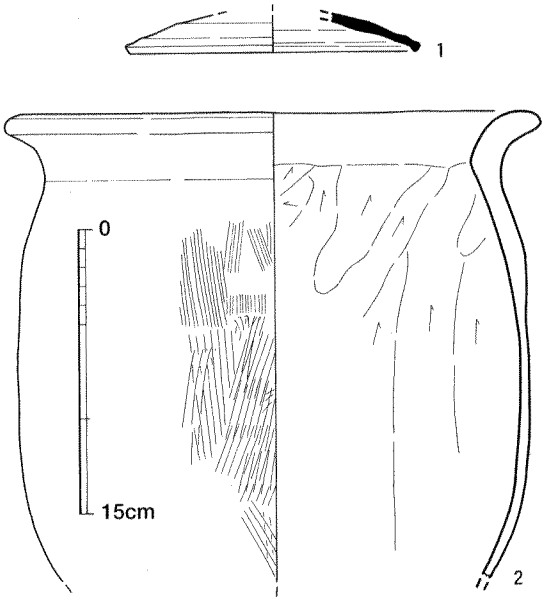
出土遺物

土師器、須恵器、焼塩土器が出土している。図示した土器はカマドから検出した。1は須恵器、2は土師器である。

土　器（第89図）　1は坏蓋片である。焼成良好で灰黄色を呈する。2は口径；26cmに復原される大型甕片である。焼成良好で橙褐色～暗黄茶褐色を呈する。

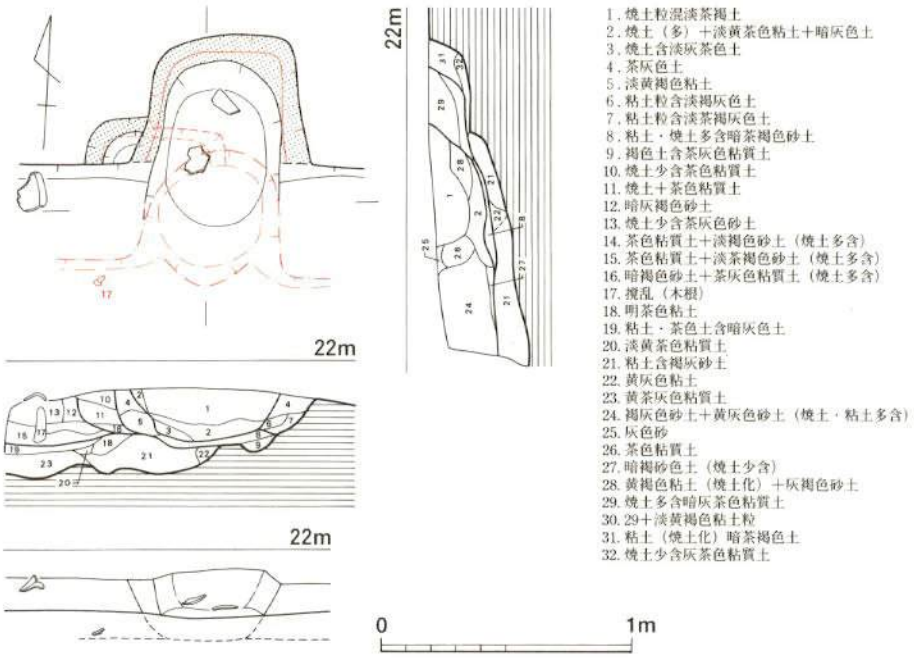
焼塩土器（図版68、第181図）

覆土から1点検出した。詳細は後述する。



第89図　251号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

調査風景



第91図　252号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

252号竪穴住居跡（第90図）

251号住居の北に位置し、258号住居に切られ、250・253～257号住居を切る。

竪穴部は、南北に長く不整形な隅円方形を呈する。壁の長さは、北壁；3.57ｍ、東壁；3.9ｍ、南壁3.8ｍ程、西壁；4.35ｍ程である。本村落では通常の規模のものである。遺存する壁高は15㎝前後である。北壁の東寄りに突出型のカマドを設置している。

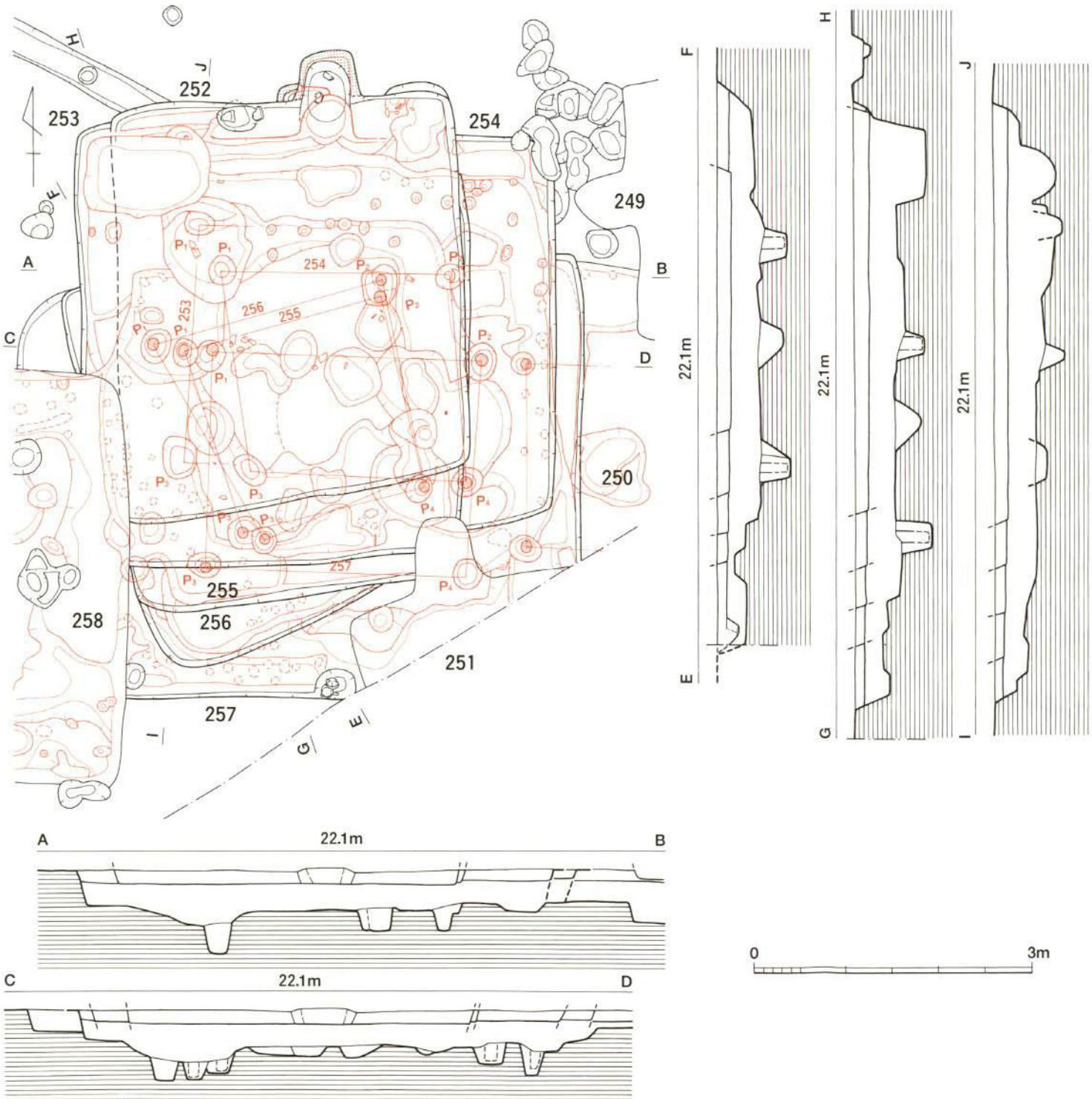
床面はほぼ平坦である。主柱穴は確認できなかった。

貼床下層の遺構については、中央土坑は存在しない。数件の住居が切り合っているため、下層遺構も明確にしがたい。

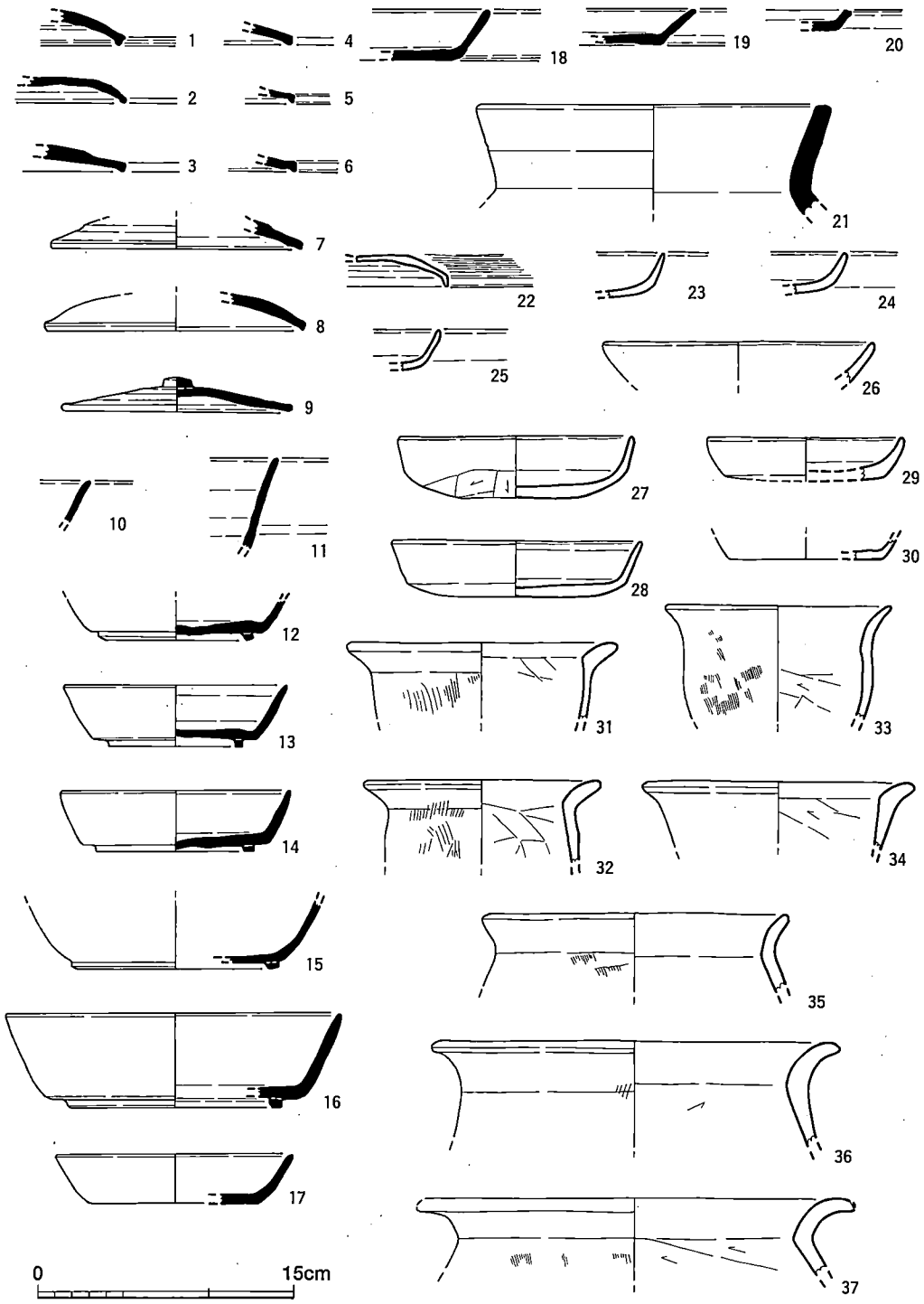
カマド（図版32、第91図）　北壁の東寄りに設置された突出型のカマドで、253・254号住居のカマドを切っている。掘り方のプランは、隅円方形を呈する。掘り方の先端は竪穴部から50㎝程突出し、最大幅は72㎝を測る。周壁に幅10㎝前後の粘土を貼りつける。支脚は遺存せず、住居廃棄時に取りはずされたものであろう。なお、カマドは造り替えられたようである。平面図は当初のものである。

出土遺物

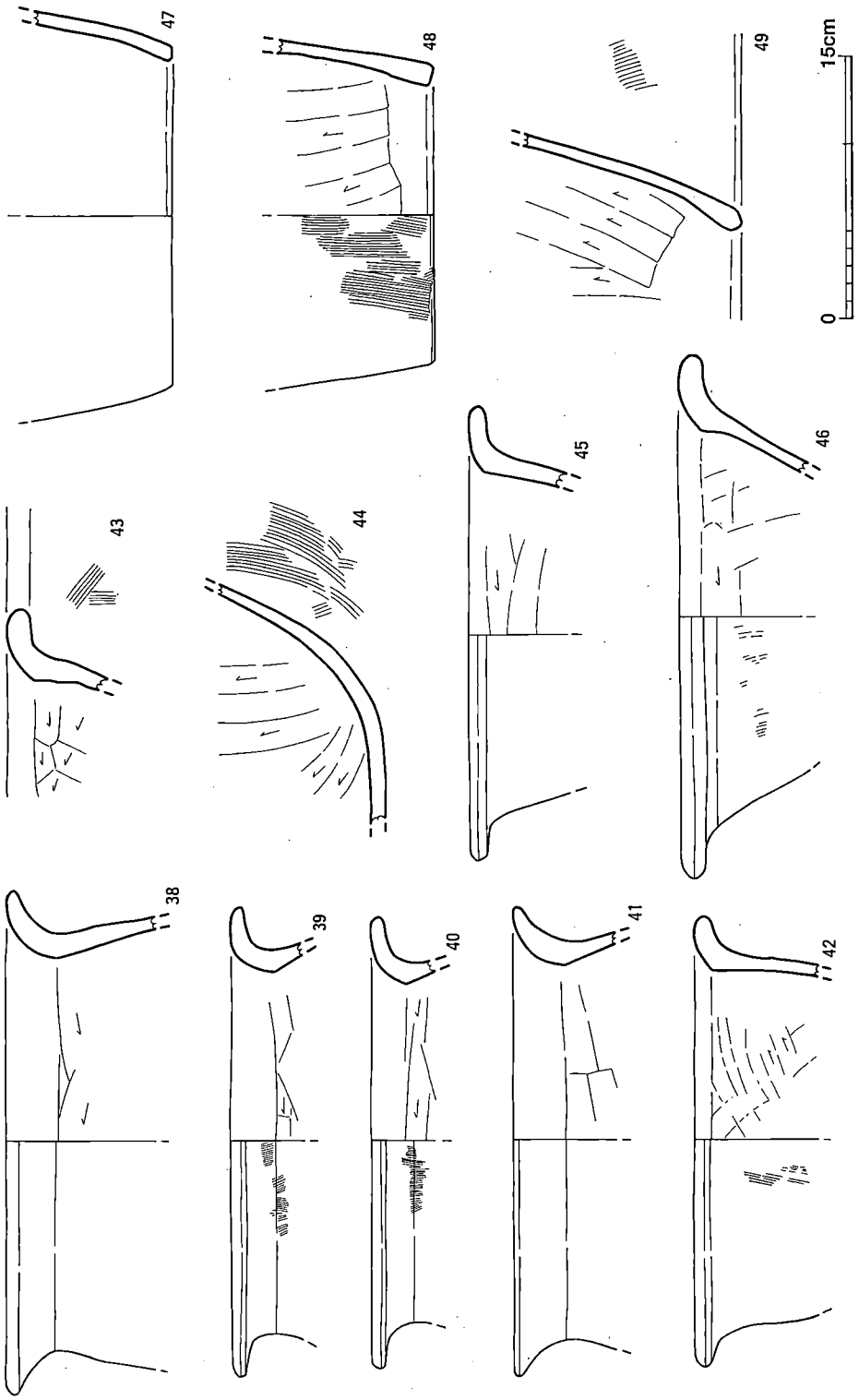
土師器、須恵器、焼塩土器、鉄製品及び石製品が出土している。本住居出土品として図示しているが、この部分は住居が多数切り合っており、他の住居に属するものも含んでいる可能性



第90図　252～257号竪穴住居跡実測図（1/60）



第92図　252号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



第93図　252号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

を否定できない。17・35は床面、1・3・8・9・24～27・31・32・38・41・42・46・49は床面下層、その他は覆土中から検出した。

土　器（図版52、第92・93図）　1～9は坏蓋で、9は口径13.2cm、器高2cmに復原される。これらは焼成良好で灰色を基調とし、淡灰色～緑灰色を呈する。10～18は坏身で15は高台がつくものとつかないものがある。口径·器高の復原値は、13；13cm·3.6cm、14；13.4cm·3.5cm、16；19.6cm·5.6cm、17；13.8cm·2.9cmである。焼成良好で灰色を基調とし、淡灰色·灰色·緑灰色を呈する。19は皿片、20は高坏片で、焼成良好で淡灰色～淡緑灰色を呈する。21は壷の破片で、口径20.3cm、現存高6.4cmを測る。焼成良好で緑灰色を呈する。22は蓋で外面はヘラ磨きを施す。焼成良好で白茶黄色を呈する。23～25は皿片、26～30は坏である。口径·器高の復原値は、27；13.6cm·3.6cm、28；14.6cm·3.3cmである。これらは焼成良好で黄褐色～橙褐色を呈する。31～35は小型の甕で通常は支脚に使用されるものである。復原口径は33；13cm～35；17.4cmである。焼成良好で黄灰色～橙褐色を呈するが、32は煤が付着し一部黒色を呈する。36～42·44は大型の甕片で、復原口径は23cm～27cmである。これらは焼成良好で橙褐色を基調とするが、36は煤が付着し黒色を呈する。43·45·46は鉢片で、46は口径30cmを測る。焼成良好で茶褐色～黒色を呈する。47～49は甑の底部片である。橙褐色を基調とするが、48・49は一部に黒色を呈する。

焼塩土器（図版68、第181図）　覆土から1点検出した。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　床面及び貼床下層から、刀子1点、鉄鏃3点、釘と思われる破片4点、不明品2点の計10点が出土している。詳細は後述する。

石製品（図版74、第189図）　覆土から砥石が1点出土している。詳細は後述する。

253号竪穴住居跡（第90図）

252号住居にほぼ重なった状態で西側に位置する。252・258号住居に切られ、250・254～257号住居を切る。遺存する部分はごくわずかであるため、竪穴部の詳細は不明に近い。

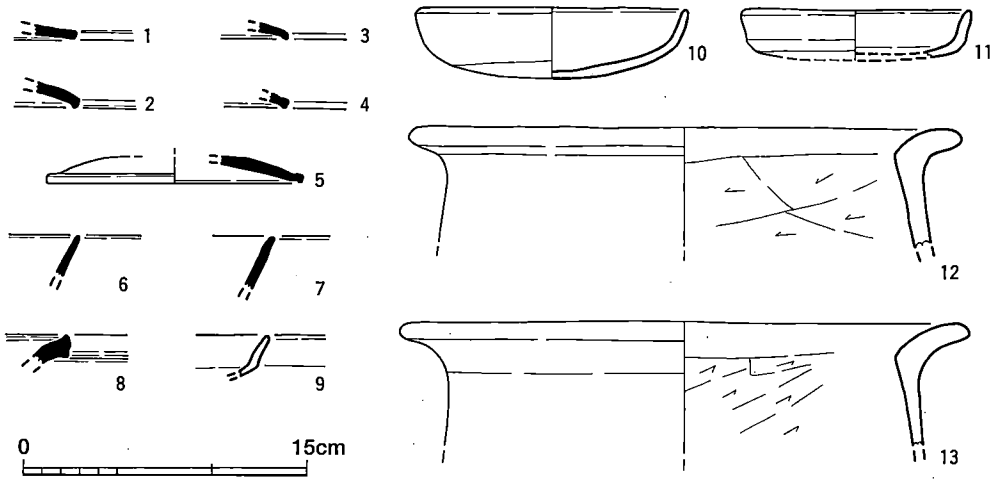
竪穴部は、隅円方形を呈すると思われる。遺存する壁高は13cm前後である。北壁に突出型のカマドを設置し、252号住居のカマドに切られる。

床面下層に主柱穴P_1・P_3は検出したが、P_2・P_4は確認できなかった。貼床下層の遺構については、中央土坑は存在しないようであるが、北西隅に壁隅土坑を検出した。

カマド　北壁に設置された突出型のカマドで、252号住居のカマドに切られる。掘り方のプランは、隅円方形を呈するようである。掘り方の先端は竪穴部から少なくとも35cm程突出し、最大幅は100cm程を測る。

出土遺物

土師器、須恵器、転用硯及び鉄製品が出土している。1・2・5・7・9～12は覆土、その他は貼床下層から出土した。1～8は須恵器、他は土師器である。



第94図　253号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土　器（図版52、第94図）　1～5は坏蓋で、5は口径13.4cmに復原される。これらは焼成良好で灰色を基調とし、淡灰色～緑灰色を呈する。6・7は坏身片で、焼成良好で灰色～淡灰色を呈する。8は甕片で、焼成良好で暗灰色を呈する。9～11は皿で、10は口径14.2cm、器高3.7cmを測る。焼成良好で橙褐色を呈する。12・13は大型の甕片で、復原口径は28cm前後である。焼成良好で橙褐色を呈する。

転用硯（図版64、第175図）　覆土中から転用硯の破片が1点出土している。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　覆土中から釘かと思われる破片が1点出土している。詳細は後述する。

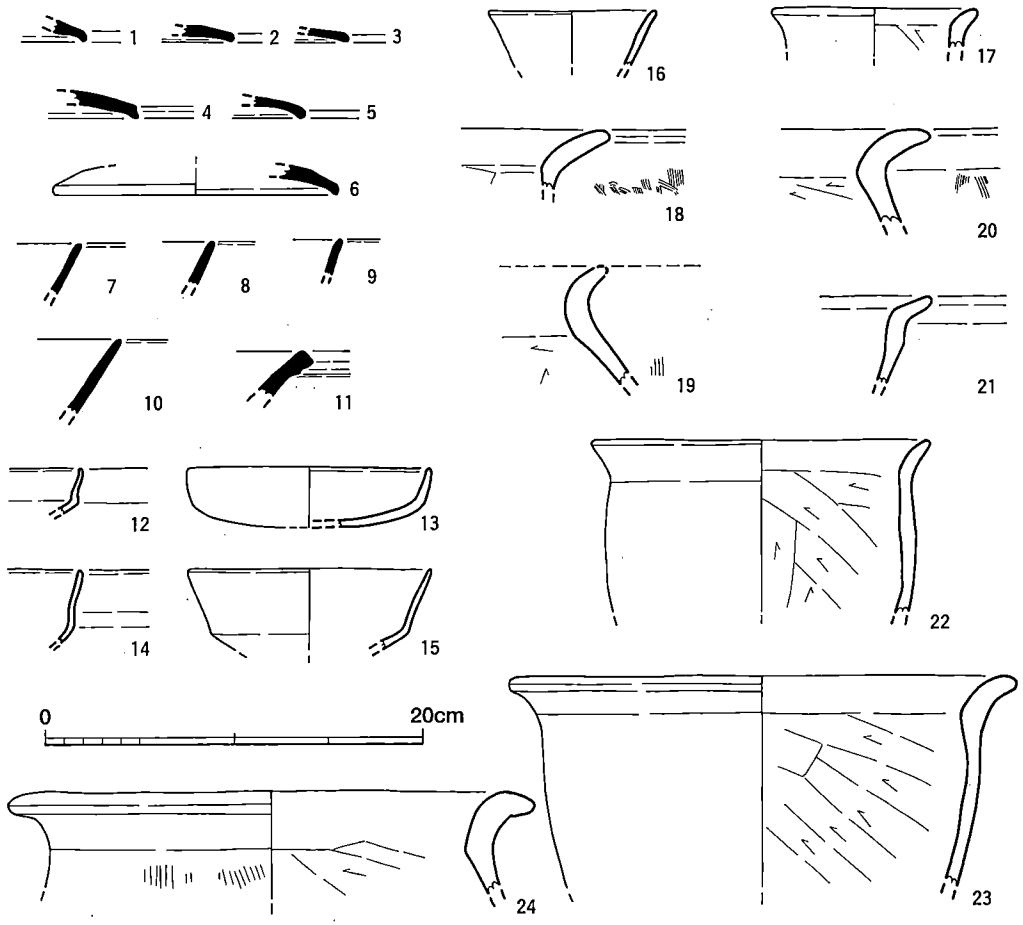
254号竪穴住居跡（第90図）

252号住居にほぼ重なった状態で東側に位置する。252・253号住居に切られ、250・255～257号住居を切る。東壁を除き、遺存する竪穴部はごくわずかである。

竪穴部は、隅円方形を呈すると思われる。遺存する壁高は12cm前後である。252・253住居の下層において、北壁から突出するカマドの痕跡を検出した。

床面下層に主柱穴P_1～P_4を検出した。その他の遺構については、切り合いが激しいため不明である。

カマド　北壁に設置された突出型のカマドで、252・235号住居に切られる。掘り方のプランは、隅円方形を呈するようである。掘り方の先端は竪穴部から少なくとも50cm程突出し、最大幅は60cm程を測る。



第95図　254号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器、焼塩土器、鉄製品が出土している。1・4～7・10・13・16・18～23は覆土、その他は貼床下層から出土した。1～11は須恵器、他は土師器である。

土　器（第95図）　1～6は坏蓋で、6は口径15cmに復原される。これらは焼成良好で灰色を基調とし、淡灰色～緑灰色を呈する。7～10は坏身片で、焼成良好で灰色～淡灰色を呈する。11は甕片で、焼成良好で暗灰色を呈する。12・13・14は坏で、13は口径12.8cm、器高3.1cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。15は高坏の坏部であろう。16は小片なので器形がはっきりしない。17は小型の甕で、通常は支脚に使用される。18・19・20・22・23・24は大型の甕片で、焼成良好で橙褐色を呈する。21は鉢であろう。焼成良好で褐色を呈する。

焼塩土器（図版68、第181図）　覆土中から焼塩土器の破片が2点出土している。詳細は後述する。

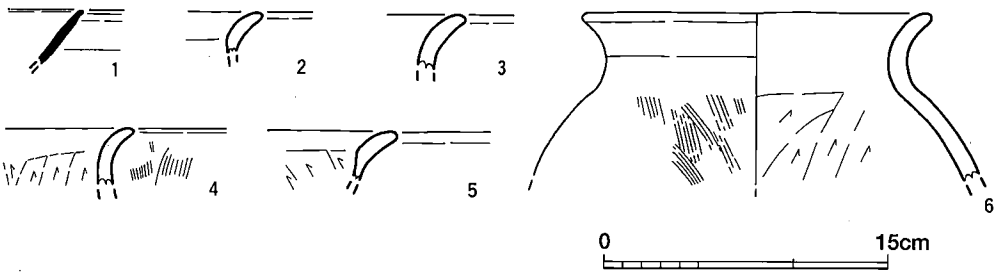
鉄製品（図版75、第187図）　覆土中から釘かと思われる破片が１点出土している。詳細は後述する。

255号竪穴住居跡（第90図）

251・252～254・258号住居に大きく切られ、256・257号住居を切る。遺存する部分はごくわずかであるため、竪穴部の詳細は不明に近い。

竪穴部は、隅円方形を呈すると思われる。遺存する壁高は12cm前後である。カマドは痕跡すら遺存しないので、位置は不明である。

床面下層に主柱穴P_1～P_4を検出した。その他の貼床下層の遺構については、切り合いが激しいため不明である。



第96図　255号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器、手捏土器び焼塩土器が出土している。図示したものは、すべて覆土から出土した。１は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第96図）　１は坏身片である。２は小型の甕、３・４は甑、５は鉢であろう。いずれも小破片であるが、焼成良好で橙褐色～橙茶褐色を呈する。６は中型の甕片で、復原口径は18cm前後である。焼成良好で橙褐色を呈する。

手捏土器（図版73、第186図）　覆土中から手捏土器の破片が１点出土している。詳細は後述する。

焼塩土器（図版68、第182図）　覆土中から焼塩土器の破片が１点出土している。詳細は後述する。

256号竪穴住居跡（第90図）

251・252～255・258号住居大きく切られ、257号住居を切る。遺存する部分はごくわずかであるため、竪穴部の詳細は不明に近い。

竪穴部は、隅円方形を呈すると思われる。遺存する壁高は10cm前後である。カマドは痕跡す

ら遺存しないので、位置は不明である。

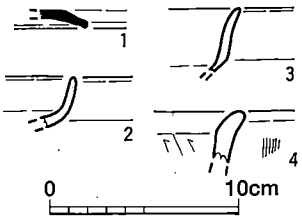
床面下層に主柱穴P_1～P_4を検出した。その他の貼床下層の遺構については、切り合いが激しいため不明である。

出土遺物

土師器、須恵器及び焼塩土器が出土している。図示したものは、すべて覆土から出土した。1は須恵器、その他は土師器である。

土　器（第97図）　1は坏蓋片である。2は坏、3は坏か高坏、4は小型甕であろう。いずれも小破片であるが、焼成良好で、1は灰色、他は橙褐色～橙茶褐色を呈する。

焼塩土器（図版68、第182図）　覆土中から焼塩土器の破片が1点出土している。詳細は後述する。



第97図　256号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

257号竪穴住居跡（第90図）

251・252～256・258号住居に大きく切られ、250住居を切る。遺存する部分はわずかである。

竪穴部のプランは、遺存する東壁、南壁及び主柱穴の配置から、隅円方形を呈する。遺存する壁高は10cm前後である。南壁の中央と思われる部分にカマド対面土坑を検出した。貼床面から掘り込まれた掘り方は東西幅45cm、南北幅30cm程の半円形を呈し、深さは15cm程である。中には土師器の坏2点が遺存していた。本土坑の位置から判断して、カマドは北壁に設置されていたと考えられる。

床面下層に主柱穴P_1～P_4を検出した。その他の貼床下層の遺構については、切り合いが激しいため不明の部分を多く残すが、南壁際に掘り込みを検出した。

出土遺物

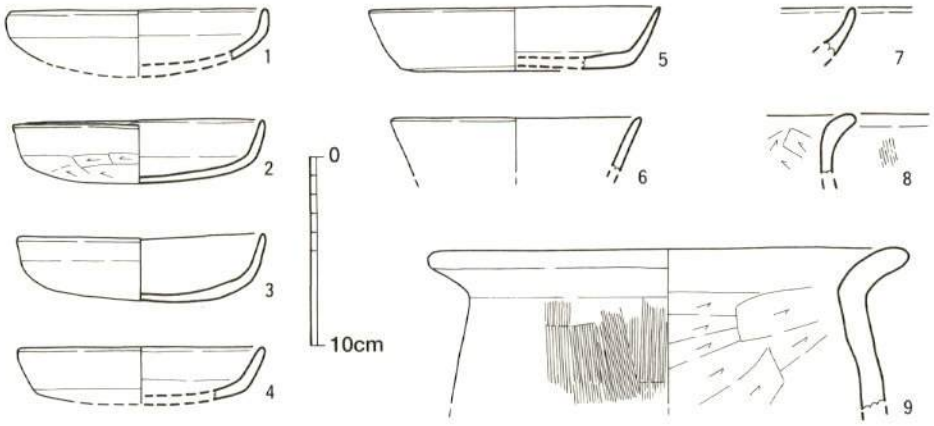
土師器、須恵器、土錘、焼塩土器及び鉄製品が出土している。土器のうち、図示できるのは土師器だけである。2・3・9はカマド対面土坑、4・5は覆土、その他は貼床下層から出土した。9は混入品である。本住居に伴うものは、2・3の坏2点である。

土　器（図版52、第98図）　1～5は坏である。2は口径13.1cm、器高3.3cm、3も同じく12.9cm、3.6cmを測る。ともに胎土には雲母片や微砂粒を含み焼成良好で橙褐色を呈する。6・7は深めの坏か椀の破片である。いずれも小破片であるが、焼成良好で橙褐色～橙茶褐色を呈する。8は小型、9は大型の甕で、9は口径24.1cmに復原される。ともに橙褐色をていするが、9は外面の一部に煤が付着し、黒色を呈する部分がある。

土　錘（図版73、第186図）　覆土中から1点出土している。詳細は後述する。

焼塩土器（図版68、第182図）　覆土中から破片が2点出土している。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　南壁の西、258住居の竪穴部壁際のピットから釘かと思われる

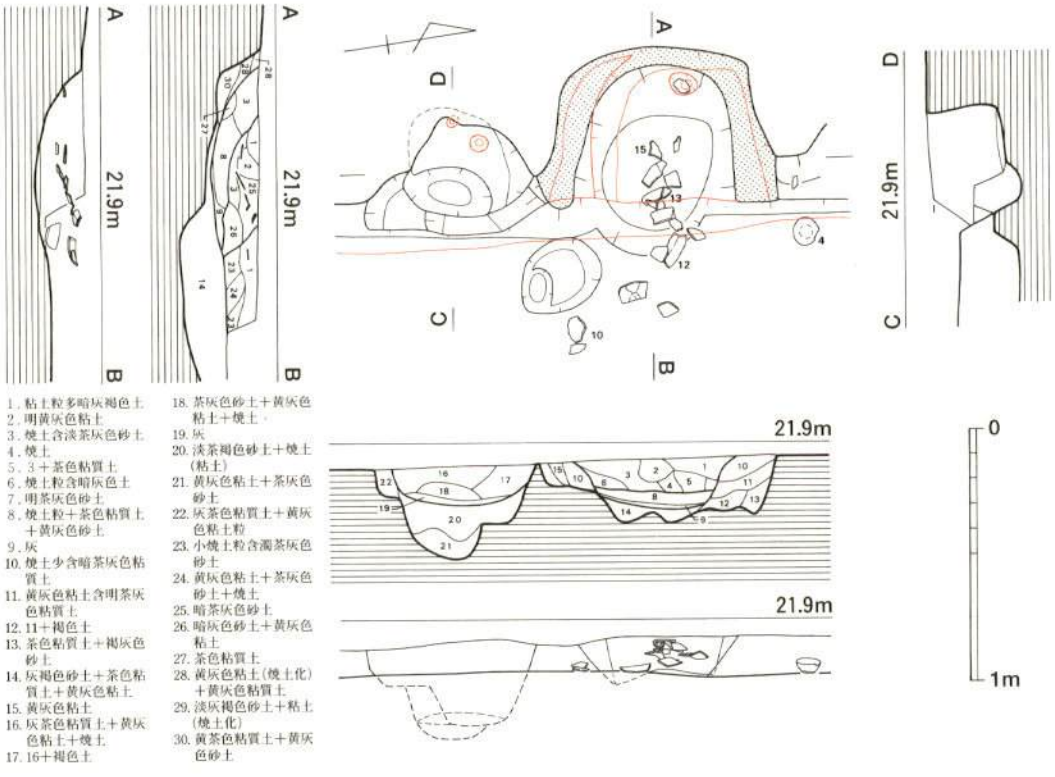


第98図　257号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

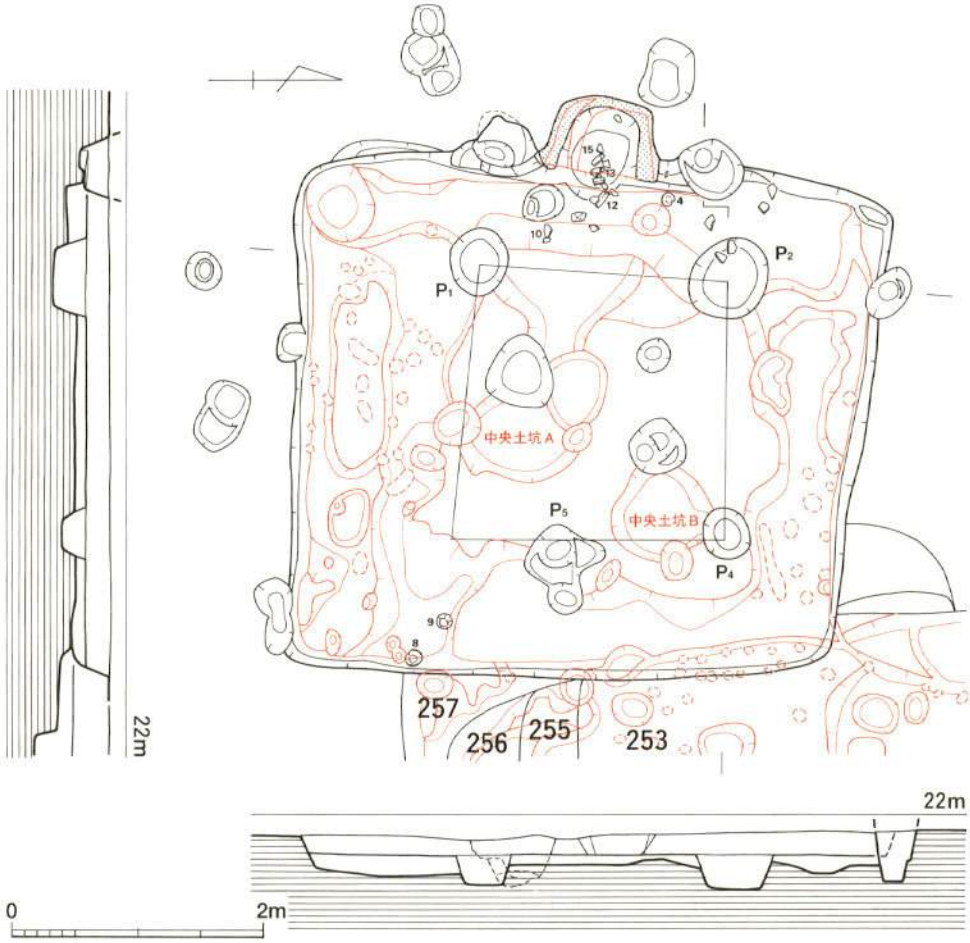
破片が１点出土している。詳細は後述する。

258号竪穴住居跡（第100図）

調査区の最西南部に位置する住居で、東接する住居をすべて切っている。



第99図　258号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

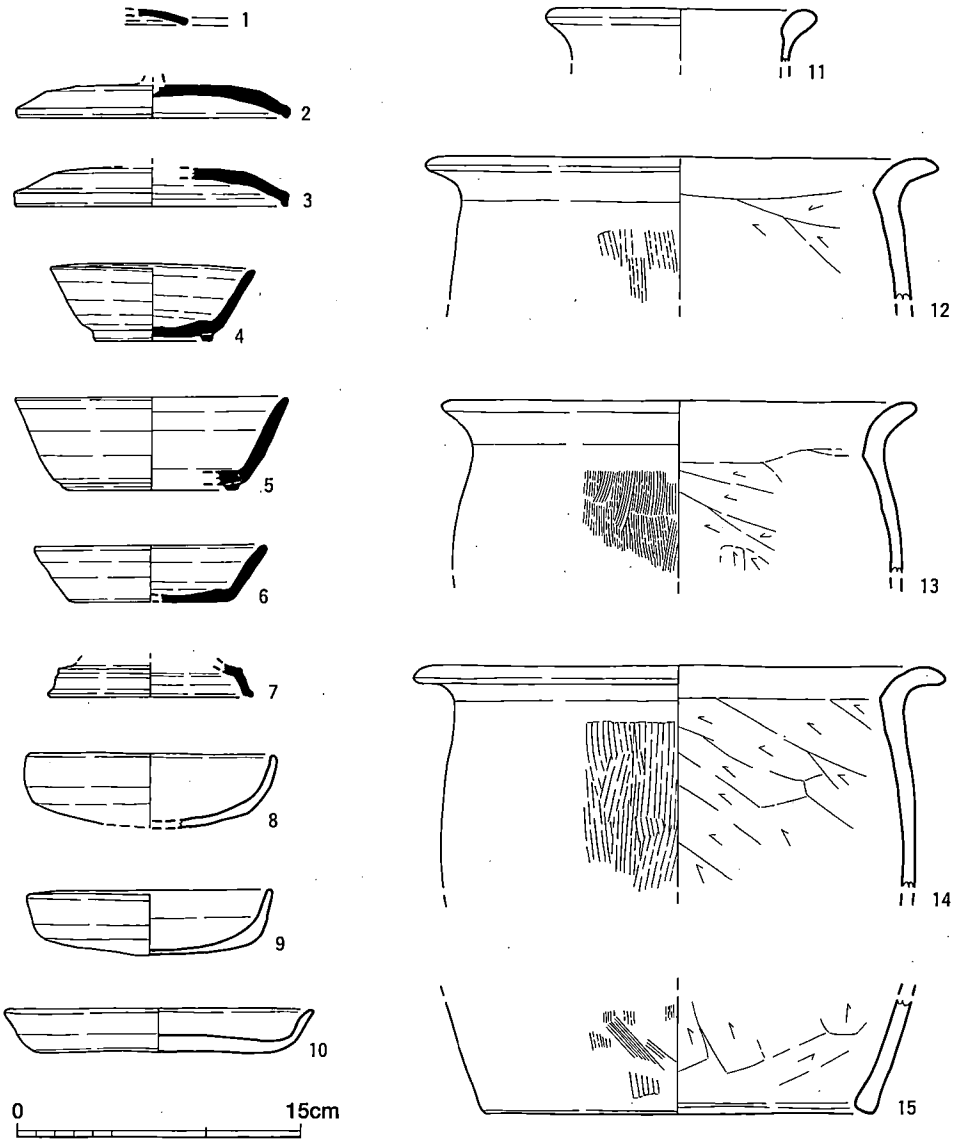


第100図　258号竪穴住居跡実測図（1/60）

竪穴部のプランは、南北に幅広い不整形な隅円方形を呈する。各壁の長さは、西壁；4.68m、北壁；3.55m、東壁；4.3m、南壁3.9mを測り、本村落では通常の規模である。壁高は15cm～18cmを測る。西壁のほぼ中央に突出型のカマドを設置する。その左（南）に接して、西壁に掘り込んだ袋状の土坑があり、内底面には、カマドと同様に焼土面（層）を検出した。

床面はほぼ平坦である。主柱痕はすでに抜かれており、主柱穴（P_1・P_2・P_4）を検出したが、P_3は地山面においても検出できなかった。なお、P_5を床面上に検出したように図示している。P_5は、通常は貼床下層において検出されるものであるが、調査当時の遺構確認に従っている。

貼床下層の遺構については、明確な掘り込みを検出した。普通見られる中央土坑はないが、主柱穴エリア内に二つの土坑（中央土坑A・B）が存在する。やや、躊躇するが、この二つの



第101図　258号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土坑を中央土坑と推定する。また、南西隅に主柱穴と同規模のピットがある。この浅いピットは南西隅にきれいに納まっており、壁隅土坑とするに躊躇するが、それに近い性格のものであったろうと推測する。

カマド（図版32、第99図）　西壁のほぼ中央に設置された突出型のカマドである。掘り方は不整形な隅円方形で、先端は竪穴部から60cm程突出し、幅は90cmをやや超える。周壁には幅10cm程の粘土を貼り付ける。袖部は遺存しない。支脚は遺存せず、住居の廃棄時に取りはずされ

ているようである。火床面は住居床面よりやや低い程度である。

このカマドの南に、西壁に掘り込んだ袋状の土坑がある。カマドとの間には、遺存しないがカマド左袖部の存在を示唆するスペースはある。完掘後の観察によれば、本遺構は先に存在したピットを切っている。掘り方の規模は、壁際で幅70cm、奥行き50cm、二段掘りの深さは、住居床面から、一段目は深さ6cm、二段目は同19cmである。なお、埋土中に厚さ2cm～3cmの焼土面（層）を確認した。この遺構からは顕著な遺物を検出していない。

出土遺物　土師器、須恵器及び焼塩土器が出土している。13・15はカマド内、4・10・12はカマド周辺の床面、8・9は南壁際の床面、1～3・5～7・11は覆土中、14は貼床下層において検出した。なお、1～7は須恵器、その他は土師器である。

土　器（図版53、第101図）　1～3は坏蓋で復原口径は、2・3とも14.6cmである。4～6は坏で、6は高台がつかない。4は口径10.1cm、器高5.1cmを測り、5・6の口径・器高の復原値は、5；14.6cm・4.8cm、6；12.3cm・3cmである。7は脚台の小片である。これらの須恵器はおおむね焼成良好で、灰色～緑灰色を呈する。8・9は坏で、9は口径13.1cm、器高3.5cmを測り、8は同じく13.3cm、4cmに復原される。10の皿は口径16.4cm、器高2.3cmに復原される。これらの坏・皿は、焼成良好で橙褐色を呈する。11は口径14.4cmに復原される小型の甕で、通常は支脚に使用される。12～14は大型の甕である。これらの甕は焼成良好で、橙褐色を基調とするが、11・12・13は火を受けて茶褐色～暗茶褐色を呈する。15は甑である。暗灰黄褐色～暗黄茶褐色する。

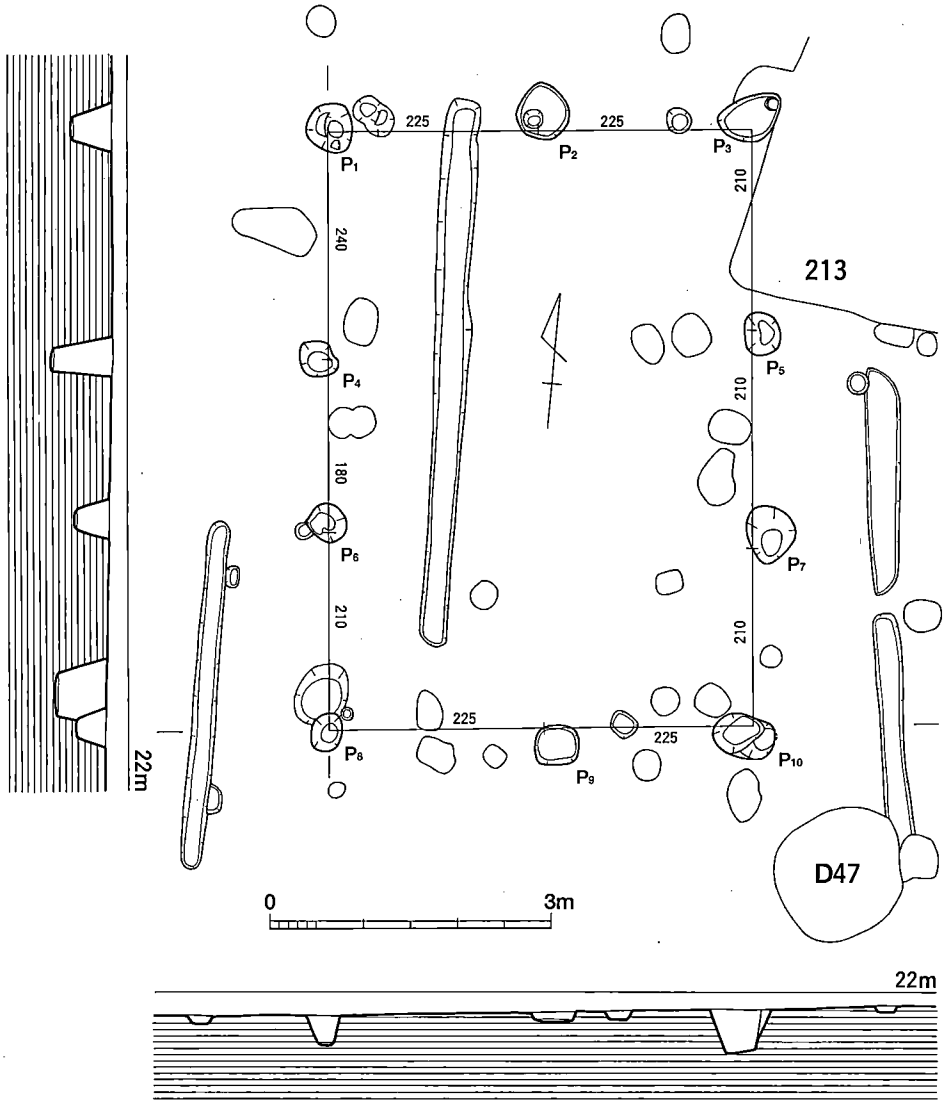
焼塩土器（図版68、第182図）　覆土中から破片が2点出土している。詳細については後述する。

2　掘立柱建物跡

今回報告する掘立柱建物跡は、112号建物～133号建物の計22棟である。宮原遺跡の場合、今回報告する部分に、しっかりとした南北棟の建物が整然と並び、計画的に配置された状態を窺うことができる。また、柱の設置時や柱を抜いた後に、土師器坏を埋置する例があり、建設時や建物撤去に際してのマツリの存在を知ることができる。

なお、図面上の操作なので若干の誤差があるが、以下、便宜上1尺≒30cmとして記述する。よって、坪数をメートル法に換算した場合に、㎡表示の数字は本来の坪面積（1坪≒3.33㎡）よりも少なめの計算値になることを、あらかじめお断りしておく。

また、柱痕を検出した場合は、トランシットにより心々距離を計測している。図では計測方向を一点鎖線で、計測値の数字を明朝体で表示している。



第102図　112号掘立柱建物跡実測図（1/80）

112号掘立柱建物跡　B112（図版33、第102図）

昨年報告した213号住居の西に位置し、P3が同住居のカマドを切っている。主軸をN－6°－Wに置く南北棟の建物である。P2・P9は柱筋から外側に外れるので棟持柱の掘り方と考えられ、1×3間の建物だと考える。規模は梁間15尺（4.5m）、桁行21尺（6.3m）である。面積は、8.75坪（28.35㎡）である。

北東隅のP3埋土から、土師器坏4個をきれいに重ねて置いた状態で検出した。213号住居の

遺構検出時には、カマドに伴うものであり、住居廃棄時に支脚を取りはずした後にカマドに供えたものであろうと考えた。しかし、カマドの調査を進める過程で、ピットがカマドを切っていることが分かり、住居とは別の遺構（掘立柱建物）に伴うものであろうと判断した。上から２段目までの土器は、視認可能な遺構検出面より浮いた状態で検出した。柱痕は遺存せず、柱を抜いた後に埋置したものである。

出土遺物（第106図）

土師器、須恵器が出土している。出土位置と出土品の関係は、P1-2、P3-4・5・6、P6-1・3である。１～３は須恵器、４～６は土師器である。１は坏蓋、２は坏身、３は皿である。４～６は坏で、各々の口径・器高は、４；13.2cm・3.6cm、５；13.7cm・3.9cm、６；14.1cm・3.9cmである。これらの坏は焼成良好で橙褐色～淡茶褐色を呈する。なお、上記の土師器坏は４点出土しているが、不幸なことに最下段の坏が行方不明であり、図示できない。

113号掘立柱建物跡　B113（図33版、第103図）

112号建物の南東に2.5m離れて位置し、主軸をN-4°-Wに置く南北棟の建物である。P2・P9は柱筋から外側にやや外れるので棟持柱の掘り方と考えられ、１×３間の建物だと考える。規模は梁間12尺（3.6m）、桁行18尺（5.4m）である。桁行方向の柱間寸法は６尺（1.8m）等間である。面積は，６坪（19.44㎡）である。なお、P11は、棟持柱の掘り方（P2・P9）の中間（９尺の位置）にあり、建て物内部で棟を支えた柱の掘り方であろうと考えられる。掘り方底面の標高は21.5mでP2・P9のそれと差はほとんどない。

出土遺物（第106図）

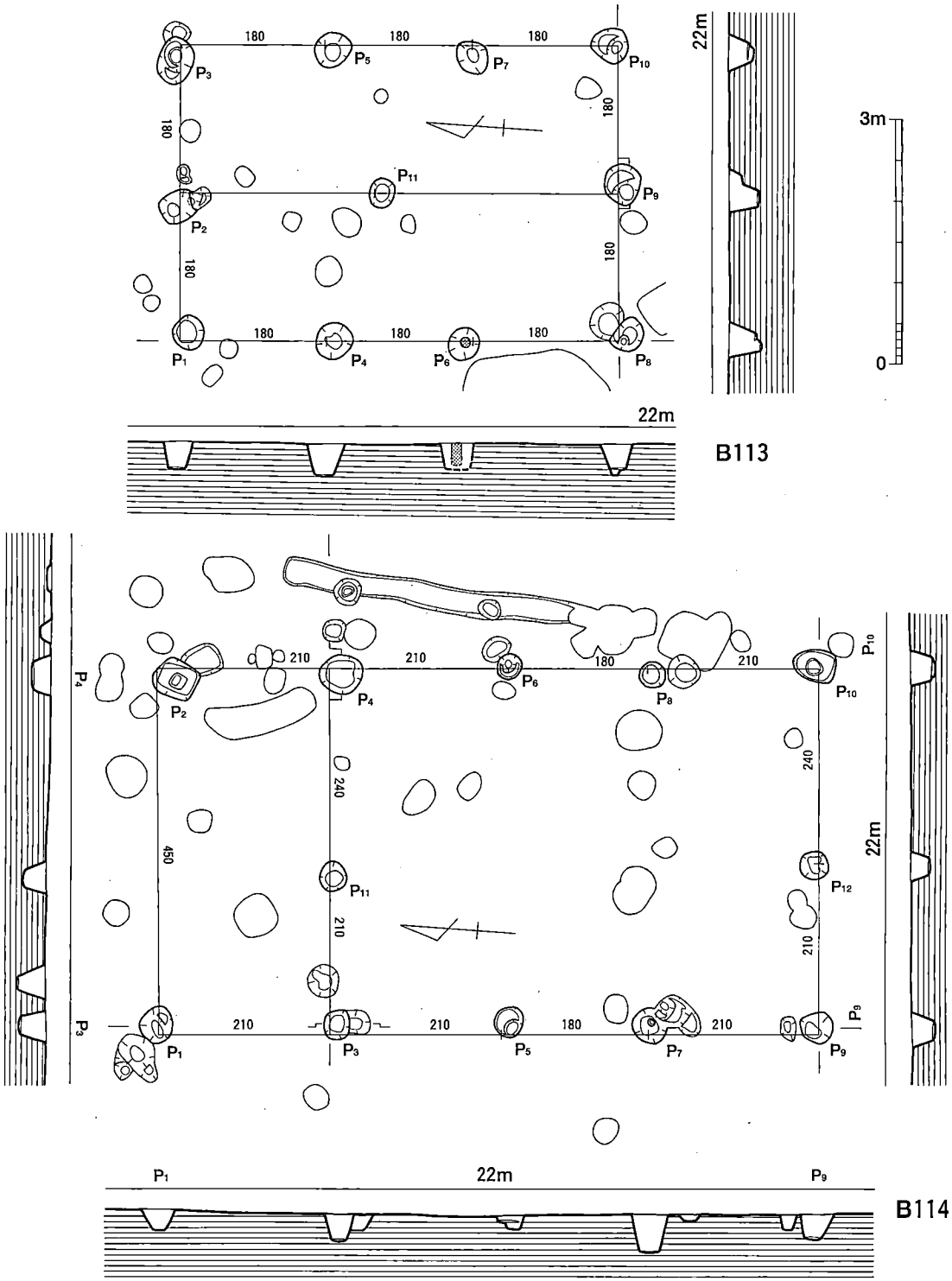
土師器、須恵器が出土している。出土位置と出土品の関係は、P1-1・3、P4-4、P10-5、2は出土柱穴を特定できない。５以外はすべて須恵器である。１は坏蓋、２・３は坏身、４は脚台裾部、５は甕か鉢であろう。

114号掘立柱建物跡　B114（図33版、第103図）

113号建物の西に３m離れてほぼ平行に位置し、主軸をN-6°-Wに置く南北棟の建物である。P1～P10を使い、２×３間の建物だと考えることが順当だと思われる。一方、東西の側柱列の北側延長線上に各々７尺離れてP11、P12があり、このピットの存在も捨て難いので、一応、二案を提示した。

前者の場合、規模は梁間15尺（4.5m）、桁行20尺（６m）である。桁行方向の柱間寸法は南から７尺（2.1m）、６尺（1.8m）、７尺である。梁行方向の柱間寸法は西から７尺、８尺(2.4m）である。面積は、8.33坪（27㎡）である。

後者の場合、北妻側にP2に相当するピットがない点である。可能性の問題として提示した



第103図　113・114号掘立柱建物跡実測図（1/80）

案であり、成立する可能性は薄いと考えられる。

出土遺物（第106図）

土師器が出土している。６はＰ3から出土した甑の破片である。焼成良好で茶褐色を呈する。その他の土器は出土柱穴を特定できない。

115号掘立柱建物跡　B115（図34版、第104図）

112～124号建物とは、48号土坑を挟んで西側に位置する一連の建物の内の１棟である。ここでは、４棟の建物が重複している。

本建物は、主軸をＮ-85°-Ｅに置く東西棟の建物である。北西部分は調査区外に延び、Ｐ6は118号建物の柱穴Ｐ3に切られている。Ｐ2は柱筋に乗るが、Ｐ9はやや外れているので、両者を棟持柱掘り方とすることに疑問が残る。よって、本建物は２×３間の建物だと考える。規模は梁間16尺(4.8ｍ)、桁行22尺(6.6ｍ)である。桁行方向の柱間寸法は西から７尺(2.1ｍ)、７尺、８尺(2.4ｍ)、棟行方向の柱間寸法は８尺等間である。面積は約9.8坪（31.68㎡）である。

出土遺物（第106図）

土師器が出土している。２はＰ1、１はＰ3から出土した小型の甕片である。焼成良好で橙褐色～白黄茶色を呈する。

116号掘立柱建物跡　B116（図版34、第104図）

115号建物の西半部と重複し、大半が調査区外に延びる。南北棟と想定して図示しているが、積極的な根拠はない。東の側柱列から主軸は、Ｎ-３°-Ｅと推定する。梁間は16尺（4.8ｍ）で柱間寸法は８尺（2.4ｍ)等間である。桁行は、２×３間の建物だと想定し、調査区外の柱間寸法が８尺だとすれば、22尺（6.6ｍ）で、115号建物と同一規模となる。

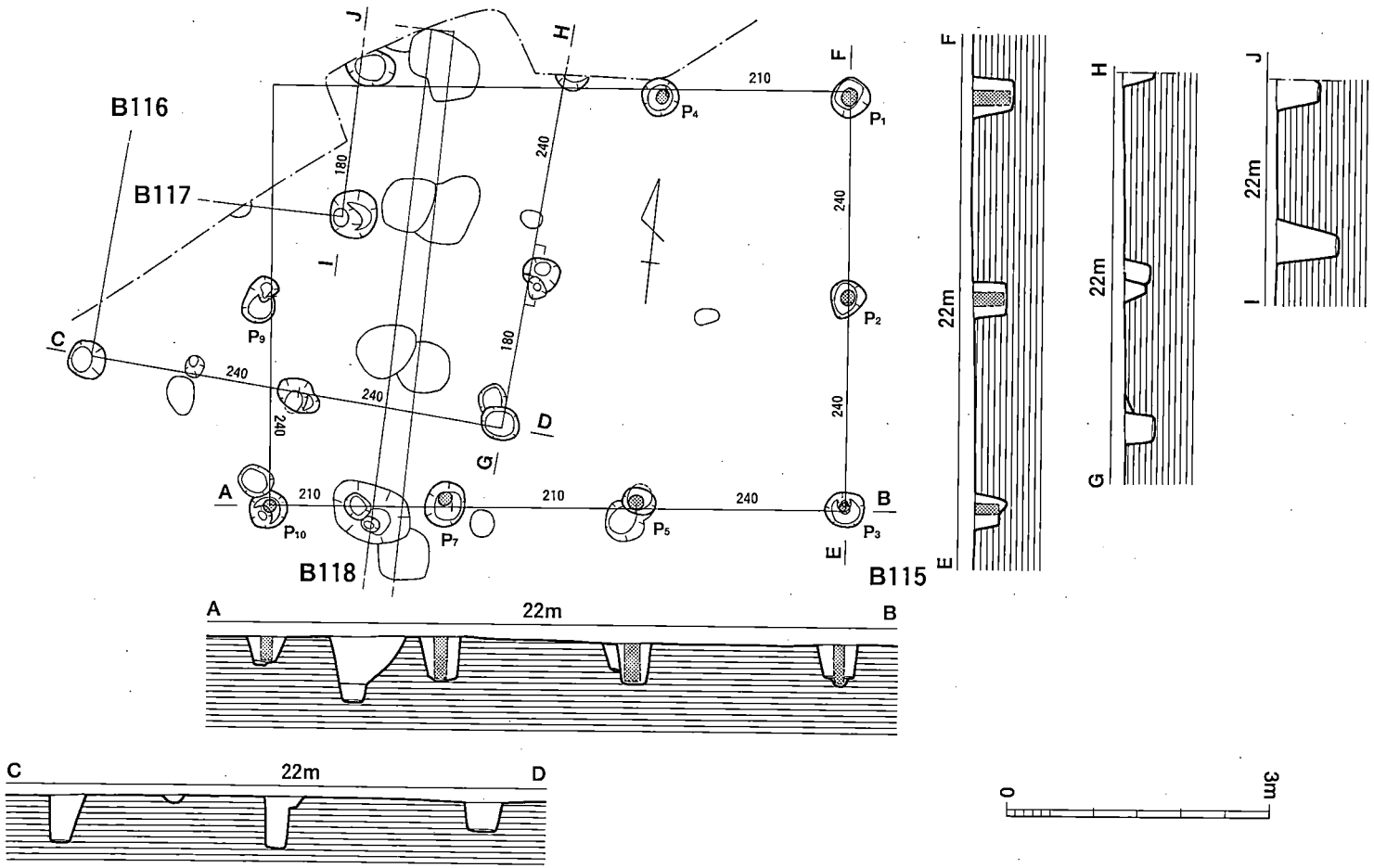
117号掘立柱建物跡　B117（図34版、第104図）

しっかりとしたピットが南北に７尺（2.1ｍ)の間隔で並ぶので、確証はないが、建物跡と推定した。建物とした場合、南西隅を除き主要な部分が調査区外に延びることとなる。

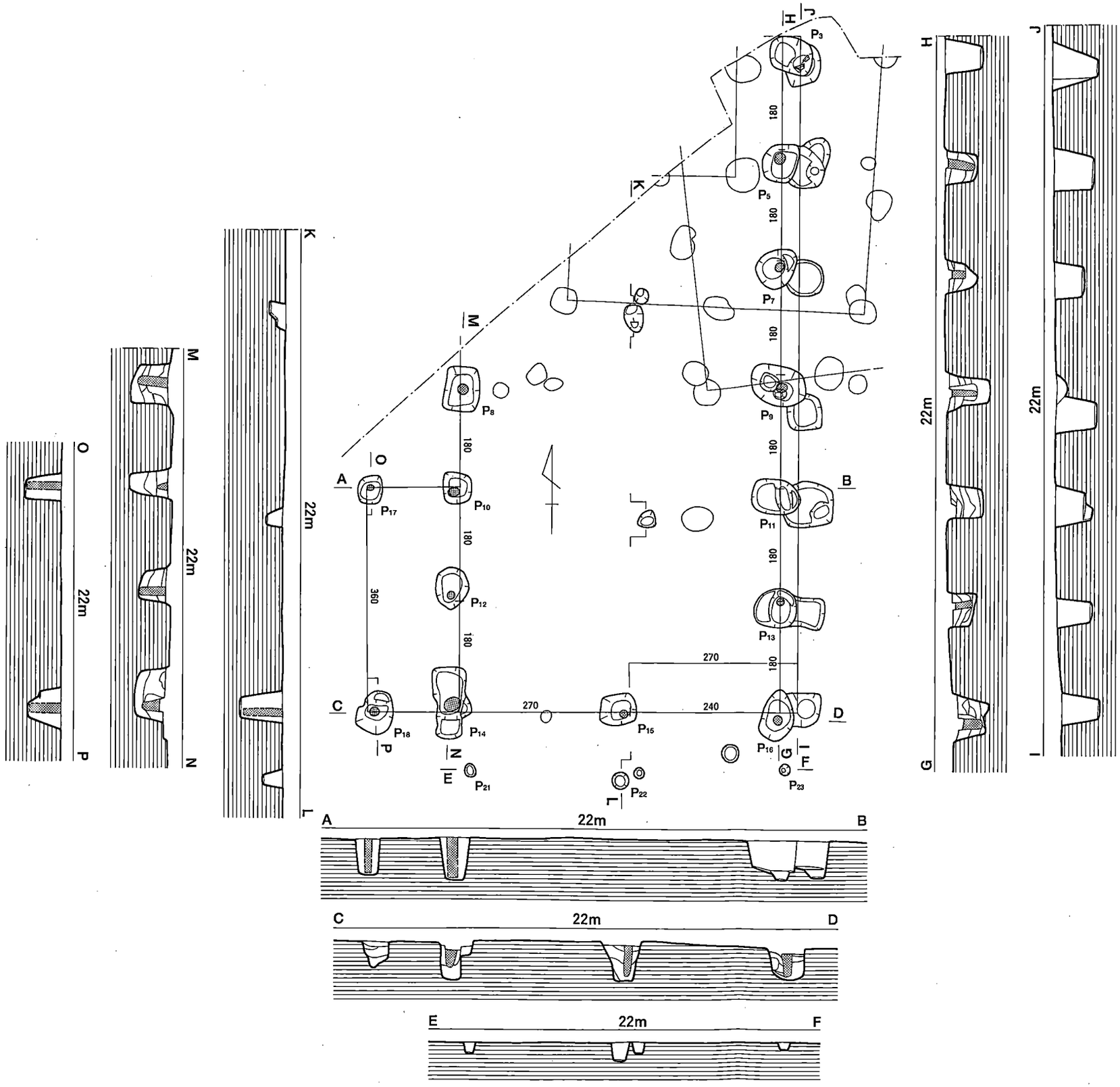
118号掘立柱建物跡　B118（図33～35、第105図）

118号建物の南～南東側には、主軸方位にややずれがあるものの、しっかりとした柱穴に柱痕を残す建物が整然と並ぶ。すなわち、118号～121号建物がそれであり、やや南に位置する131号建物もこのグループに含めることができるかもしれない。

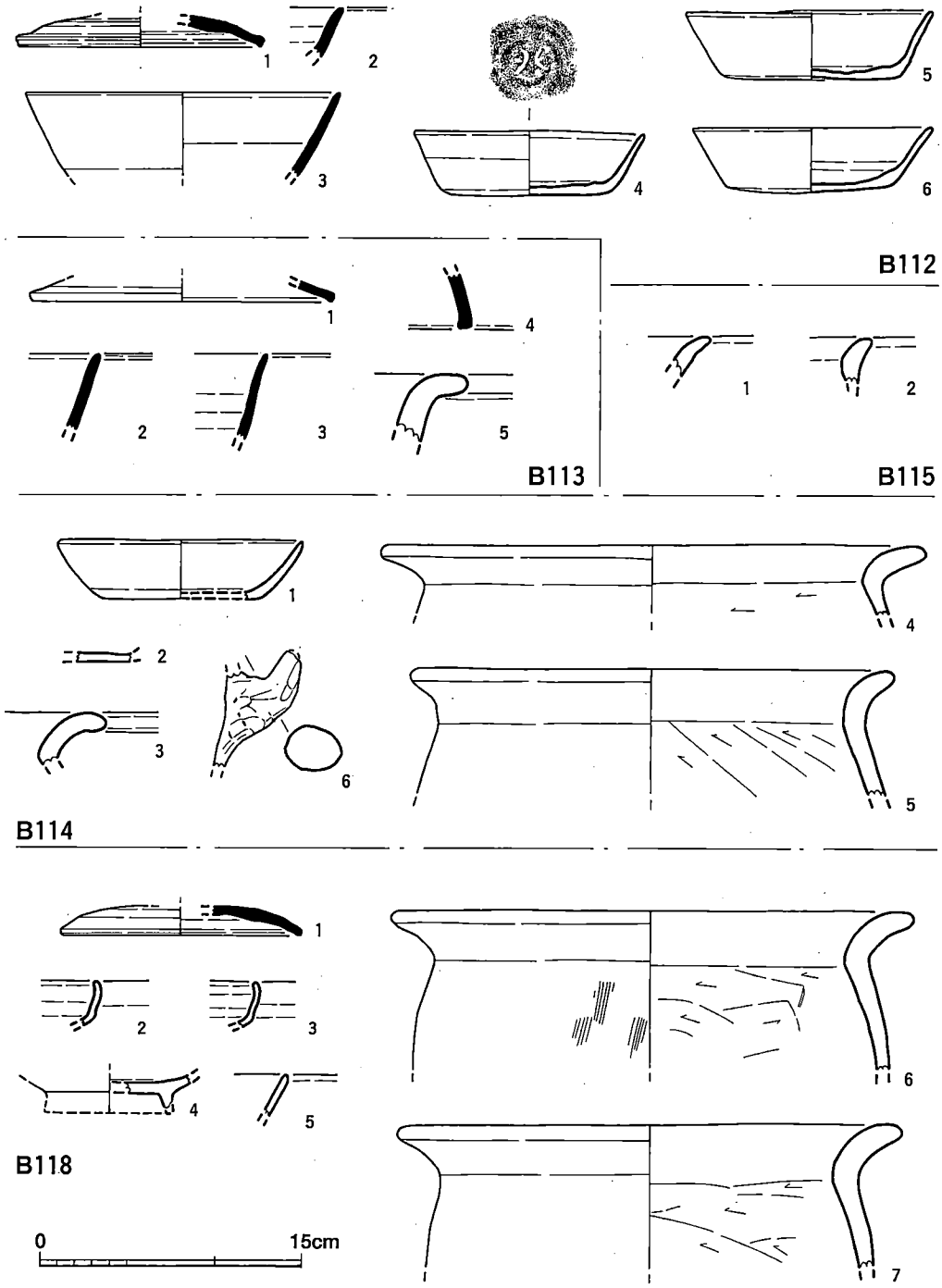
118号建物は、上記建物群の中では、最も大型の中心的な建物である。柱穴も大型で、長軸あるいは長辺が１ｍを超えるものが多くある。南北棟の建物で、北及び北西部分が調査区外に



第104図　115～117号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第105図　118号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第106図　112～115・118号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）

延びる。図上では、主軸をほぼ南北におき、東西へのぶれは認められない。建物はP3の柱穴よりも北に延びないという仮定の上で、規模の説明をする。

2×6間の建物である。東側柱列の柱穴は東西に一対の状態で検出した。西の柱穴（P3・P5・P7・P9・P11・P12・P15）が各々東の柱穴（P3'・P5'・P7'・P9'・P11'・P12'・P15'）を切り、古い東の柱穴には柱痕が残っていなかった。よって、梁間は当初18尺（5.4m）、改築後17尺（5.1m）に縮小されたと思われ、桁行は30尺（9m）である。棟行方向の柱間寸法は当初は9尺等間、改築後は東側を1尺縮めて8尺に縮小される。桁行方向の柱間寸法は6尺等間である。面積は、18坪（48.6㎡）から、17坪（45.9㎡）に縮小されている。

次に、P3～P15の柱穴以外の、すなわち、P16以下の柱穴についても、配置関係、規模及び柱痕の遺存することから、本建物と何らかの関係があったと思われる。

P16～P18は棟持柱かと思われる柱穴である。しかし、柱筋が通らず、柱間寸法に統一性がないので確証はない。

P19・P18・P20は、建物の妻側柱列と平行に3尺（90㎝）の位置で、各々、P13-P19、P14-P18、P15-P20と対になる位置にある。P18は上述のように、棟持柱の柱穴の可能性を残すが、他の柱穴は建設時の所産とすれば、他の側柱列にはこのようなものが見られないためその可能性は薄く、やはり、本建物の補助柱的な柱穴であろうと推測する。

P21・P22は、西側柱列と平行に5尺（1.5m）の位置で、各々，P10-P21、P13-P22と対になる位置にある。P21～P22の柱間寸法は12尺（3.6m）である。掘り方の規模は側柱列に見劣りせず、柱痕も遺存している。この柱穴が更に北に延びれば、建物に廂がつくことになろう。柱穴がこの二つだけならば、建物に付随する何らかの施設であろう。

出土遺物（第106·110図）

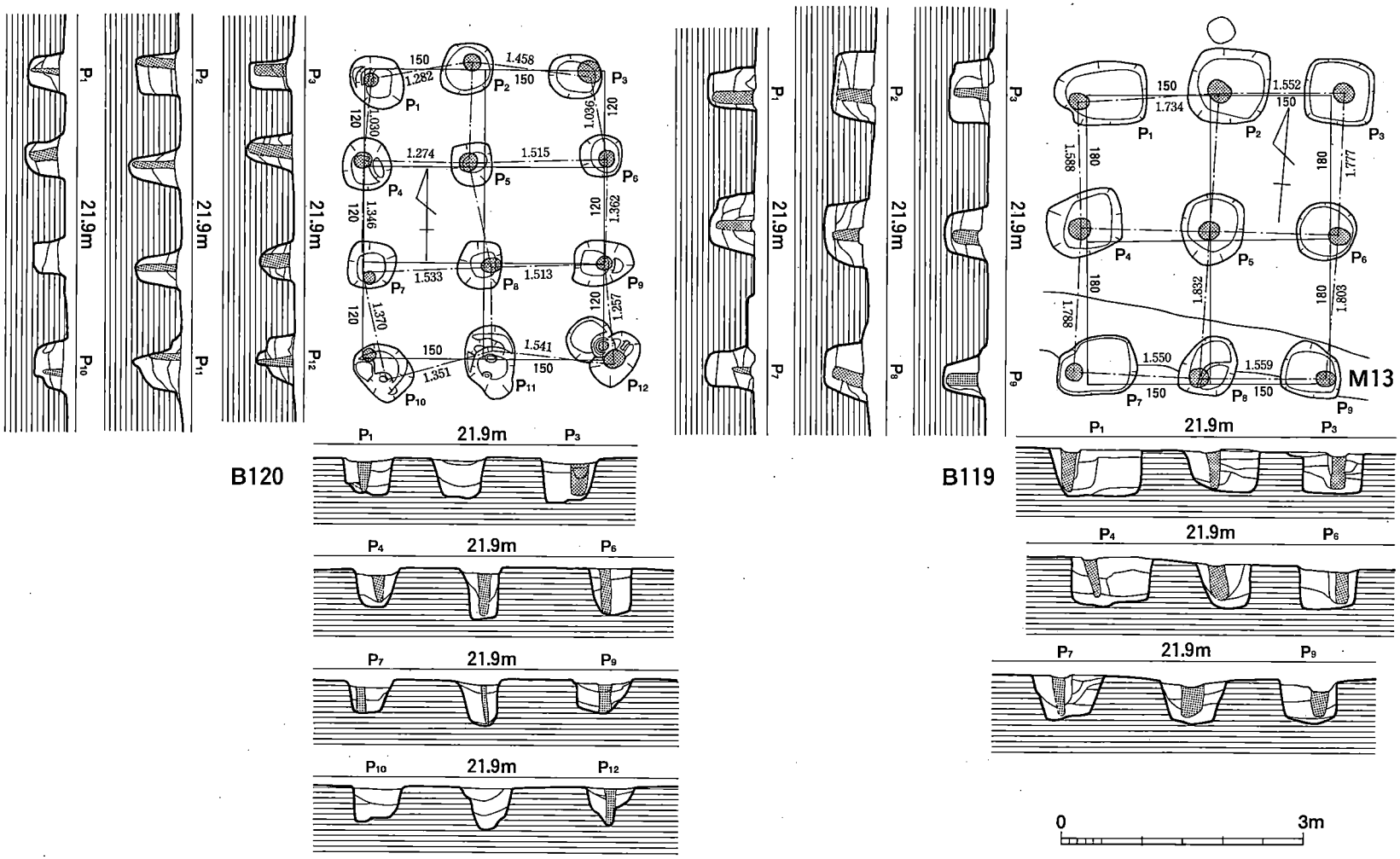
土師器、須恵器が出土している。出土位置と出土品の関係は、P3'-6·7、P7'-4、P10'-1·5、P13-2·3·8·9、P15'-10である。1は須恵器の坏蓋である。2·3は坏、4は椀、5は埦か坏の破片、6～10は甕である。1は焼成良好で灰色を呈する。2以下の土師器は焼成良好で、茶褐色～橙褐色を呈する。

119号掘立柱建物跡　B119（図版33・35、第107図）

118号建物の南に8尺(2.4m)前後離れて位置する。総柱の建物で、主軸をN-6°-Wに置く南北棟の倉庫である。柱穴は、長辺あるいは長軸が0.8m～1m程の大型の掘り方で、深さも遺構検出面から0.6m以上を測り、しっかりとしたものである。柱を据えるに先立ち、柱穴の底に5㎝～10㎝の粘土を敷いて固め、その上に柱を建てる。すべての柱穴に柱痕を検出した。

2×2間の建物で、規模は梁間10尺（3m）、桁行12尺（3.6m）である。柱間寸法は、桁行方向6尺（1.8m）等間、梁行方向5尺（1.5m）等間である。面積は、3.3坪(10.8㎡)である。

なお、柱痕の心々距離をトランシットで計測し、図では一点鎖線で表示し、距離は明朝体の



第107図　119・120号掘立柱建物跡実測図（1/80）

数字で示している。

出土遺物（第110図）

土師器が２点出土している。１はＰ1、２はＰ7から出土した。ともに小型の甕片である。

120号掘立柱建物跡　B120（図版33・35・36、第107図）

119号建物の南に６尺（1.8ｍ）離れて位置する。総柱の建物で、南北棟の倉庫である。図上では、主軸をほぼ南北におき、東西へのぶれは認められない。柱穴は、119号建物よりやや小さいがしっかりとしたもので、Ｐ11を除き柱痕を検出した。柱の据え方は、119号建物と同様に、柱穴の底に粘土を敷いて固め、その上に柱を建てる。

２×３間の建物で、規模は梁間10尺（３ｍ）、桁行12尺（3.6ｍ）である。柱間寸法は、桁行方向４尺（1.2ｍ）等間、梁行方向５尺（1.5ｍ）等間である。面積は、3.3坪（10.8㎡）である。なお、柱痕の心々距離をトランシットで計測し、図では一点鎖線で表示し、距離は明朝体の数字で示している。

出土遺物（第110図）

土師器が出土し、４点を図示した。出土位置と出土品の関係は、Ｐ5-2、Ｐ8-3、Ｐ11-1、Ｐ12-4である。１は高坏、2･3は甕、4は小片で不詳である。ともに焼成良好で淡橙褐色～橙褐色を呈する。

121号掘立柱建物跡　B121（図版33・37・38、第108図）

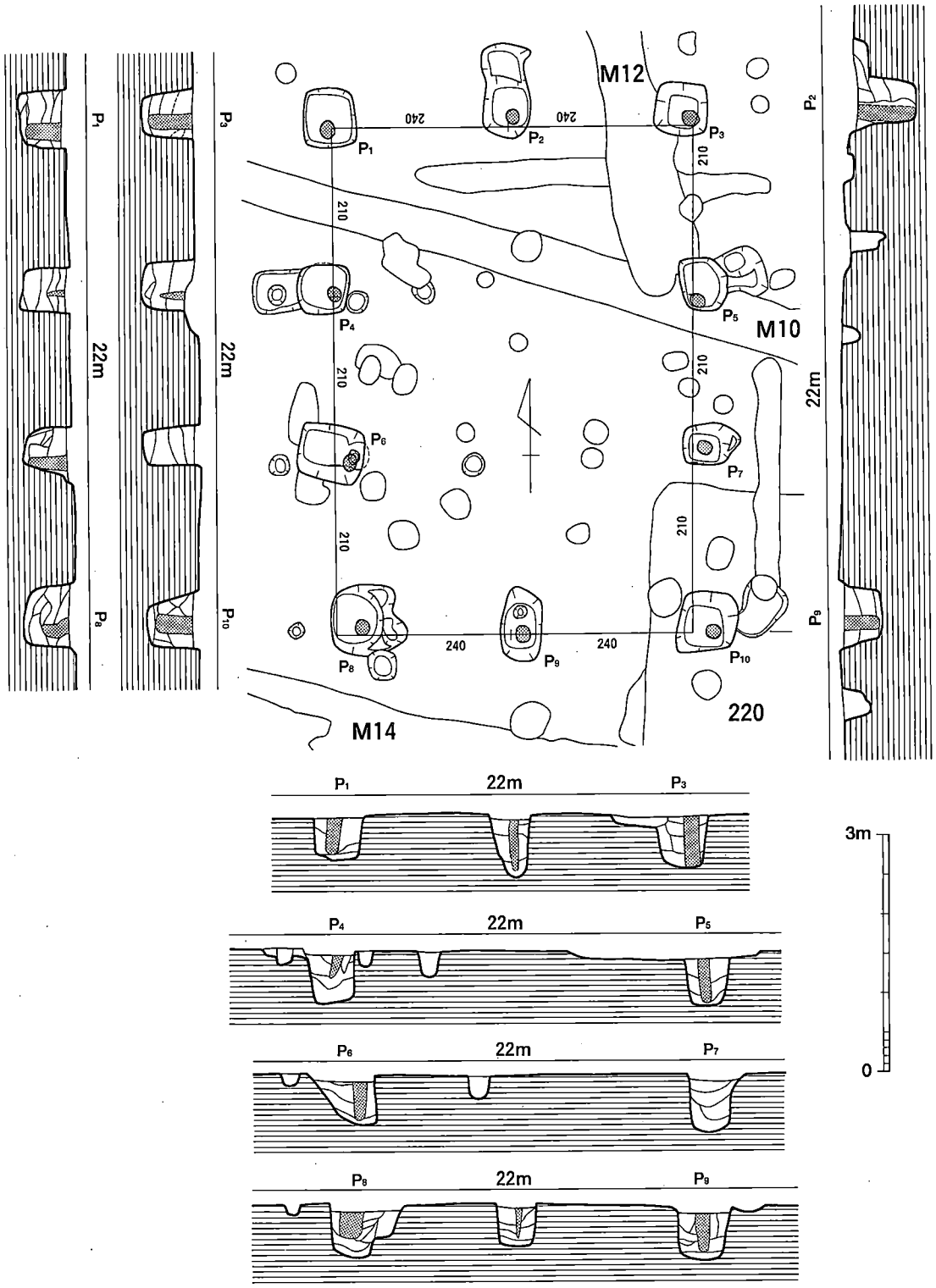
120号建物の東、114号建物の南西に位置し、220号住居を切り、10・12号溝と重複する。図上では、主軸をほぼ南北におき、東西へのぶれは認められない。柱穴は略隅円方形を呈し、一辺の長さは60㎝～80㎝程、深さは70㎝～80㎝程で、柱痕を検出した。柱の据え方は、柱穴の底に粘土を敷いて固め、その上に柱を建てる。２×３間の南北棟の建物で、規模は梁間16尺（4.8ｍ）、桁行21尺（6.3ｍ）である。柱間寸法は、桁行方向７尺（2.1ｍ）等間、梁行方向８尺（2.4ｍ）等間である。面積は、9.33坪（29.28㎡）である。

出土遺物（第110図）

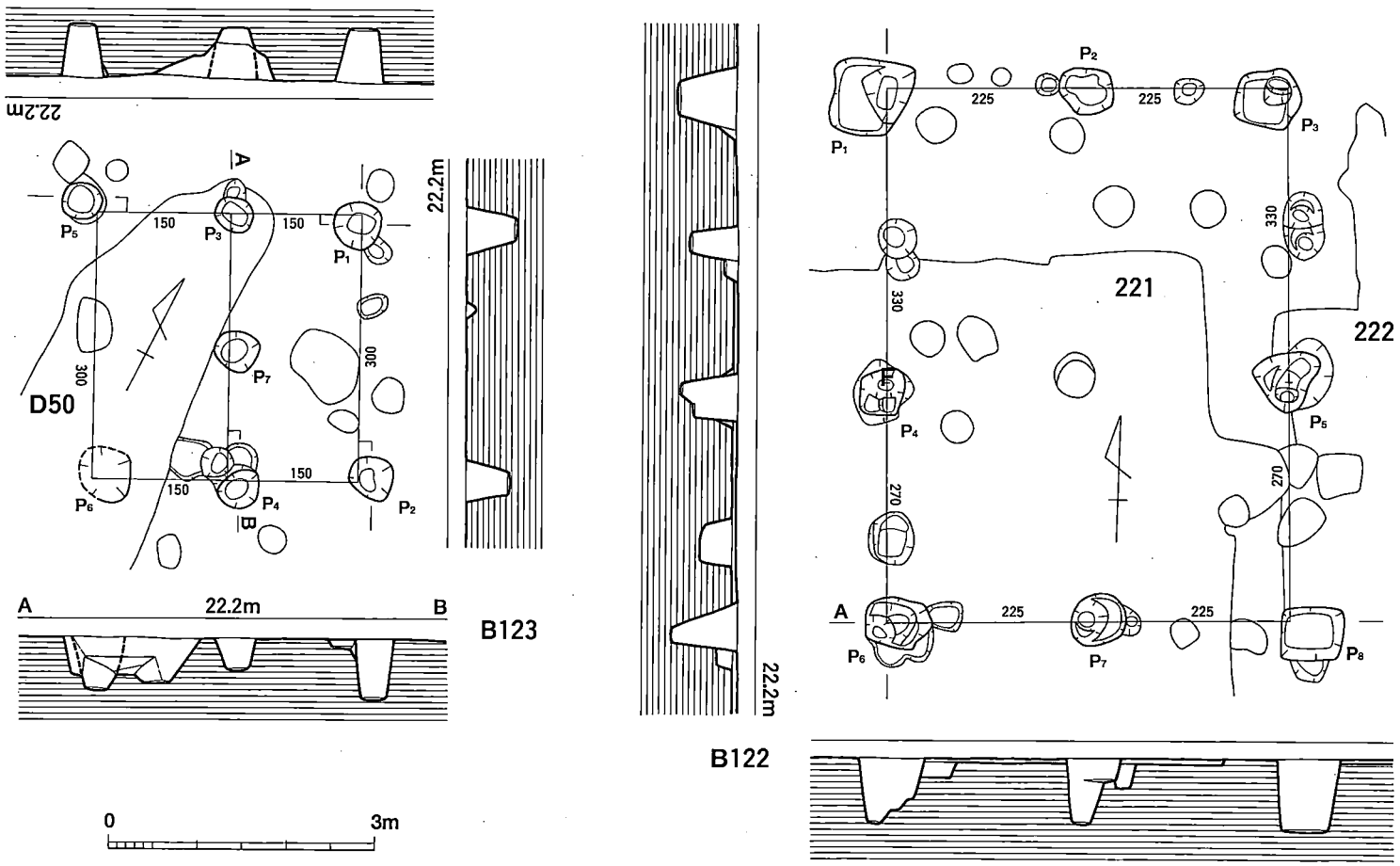
土師器、須恵器が出土している。出土位置と出土品の関係は、Ｐ3-2、Ｐ4-11、Ｐ5-1・3・6～10・12～14、Ｐ7-5、4は出土柱穴を特定できない。１・２とも須恵器の坏で、２は口径18.1㎝、器高5.3㎝に復原される。ともに焼成良好で灰色を呈する。３は皿、６は坏、８・14は甑、７・９～13は甕、４・５は小片のため不明である。ともに焼成良好で、３・６は淡褐色～淡橙褐色、甕・甑は暗褐色～淡褐色を基調とする。

122号掘立柱建物跡　B122（図版15・39、第109図）

121号建物の東ほぼ10ｍに位置し、221・222号住居を切る。特に、Ｐ4・Ｐ6・Ｐ7は、221号



第108図　121号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第109図　122・123号掘立柱建物跡実測図（1/80）

住居の主柱穴と完全に重複し、切っている。主軸をN－3°-Wに置く南北棟の建物である。柱穴は略隅円方形～不整円形を呈し、一辺（径）の長さは60cm～80cm程、深さは70cm～80cm程である。2×3間の建物で、規模は梁間15尺（4.5m）、桁行20尺（6m）である。柱間寸法は、桁行方向の北柱間（P1～P4・P3～P5間）は11尺（3.3m）、南柱間（P4～P6・P5～P8）は9尺（2.7m）であり、梁行方向7.5尺（2.25m）等間である。面積は、8.33坪(27㎡)である。

123号掘立柱建物跡　B123（第109図）

122号建物のおよそ5m東に位置し、50号土坑に切られる。主軸をN-63°-Eに置く、1×2間の東西棟の倉庫で、中央にP7の柱穴を配する。規模・プランは梁間・桁行とも10尺（3m）の正方形で、柱間寸法は、桁行方向5尺（1.5m）等間である。面積は2.78坪（9㎡）である。

124号掘立柱建物跡　B124（図版39、第111図）

123号建物の南東、224号住居のすぐ南に位置する。主軸をN-93°-Eに置く東西棟の倉庫である。1×2間の建物で、規模は、梁間6尺(1.8m)、桁行9尺(2.7m)である。柱間寸法は、桁行方向は4.5尺(1.35m)等間である。面積は、2.5坪(8.1㎡)である。柱痕は遺存しなかった。

125号掘立柱建物跡　B125（図版40、第111図）

124号建物の南東3m程に位置し、225号住居を切っている。主軸をN-94°-Eに置く、1×2間の東西棟の建物である。総柱の建物ではなく、規模が小さいことから倉庫の可能性も否定できないが、小規模な居屋か納屋であろうと推測する。規模は、梁間9尺（2.7m）、桁行12尺（3.6m）である。柱間寸法は、梁行方向は5尺(1.5m)・4尺(1.2m)で、東西妻側の柱間寸法は相互に非対象である。桁行寸法は6尺（1.8m）等間である。面積は、3坪(9.72㎡)である。

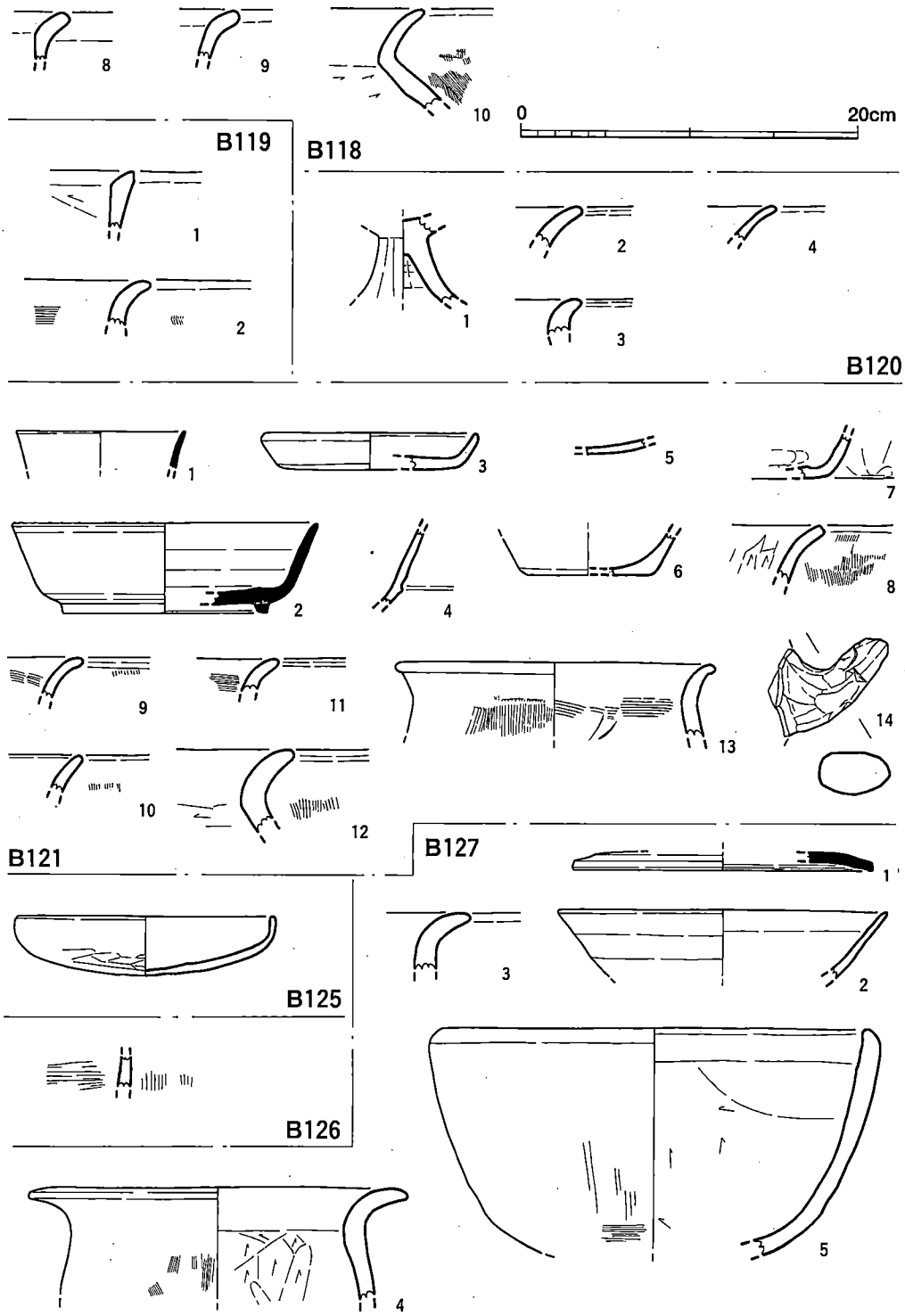
なお、本建物の南に逆L字形の溝がある。検出面では、幅30cm程、深さは最深部で10cmである。思わせ振りに、本建物と等間隔の位置に廻るが、伴うか否かは不明である。

出土遺物（第110図）

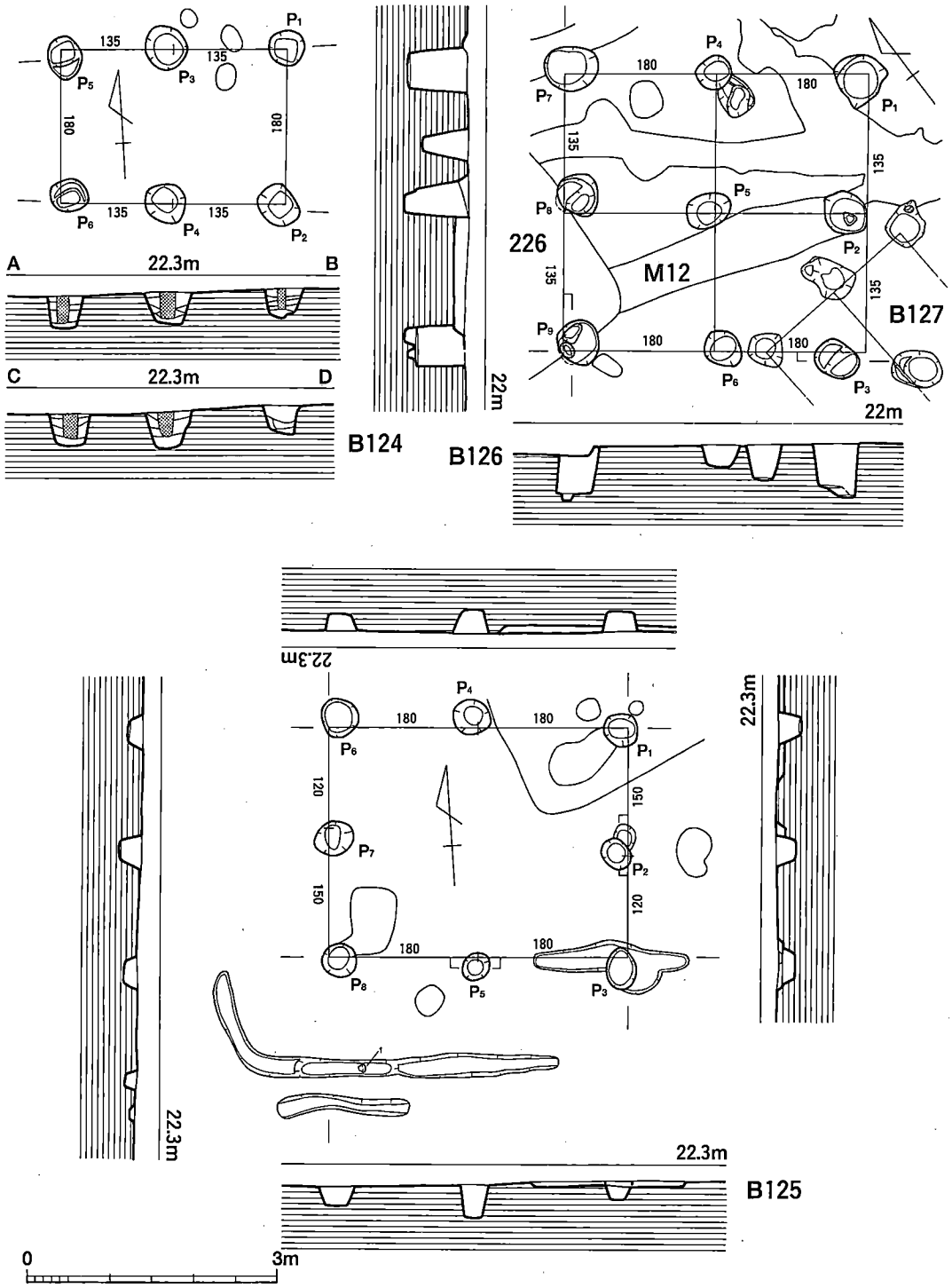
上記の溝から検出した土師器を図示している。口径15.6cm、器高3.6cmに復原される。焼成良好で、内面は橙褐色、外面は茶褐色を呈する。

126号掘立柱建物跡　B126（第111図）

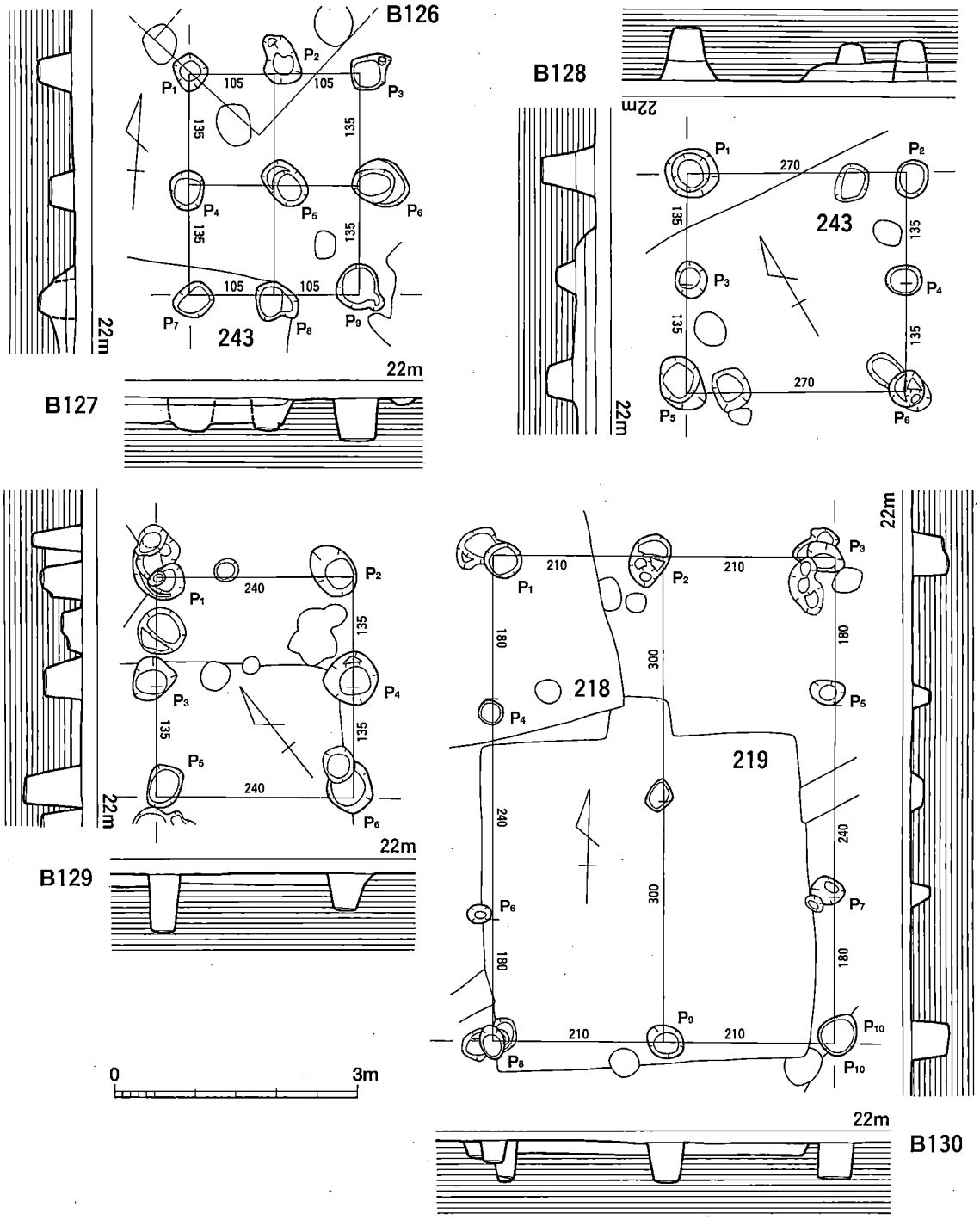
122号建物の南東に位置し、226号住居を切り、127号建物、11・12号溝と重複する。2×2間の総柱の建物で、主軸をN-53°-Wに置く北西～東南棟の倉庫棟である。規模は、梁間11尺（3.3m）、桁行12尺（3.6m）である。柱間寸法は、梁行方向5.5尺（1.65m）等間、桁行方向6尺（1.8m）等間である。面積は3.67坪（11.88㎡）である。



第110図　118～121・125～127号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）



第111図　124～126号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第112図　127～130号掘立柱建物跡実測図（1/80）

出土遺物（第110図）

１はＰ7から出土した土師器の甕片である。

127号掘立柱建物跡　B127（第112図）

126・128号建物と重複し、243号住居を切る。２×２間の総柱の建物で、主軸をＮ－４°－Ｗに置く南北棟の倉庫である。規模は梁間７尺(2.1ｍ)、桁行９尺（2.7ｍ）である。柱間寸法は、梁行方向3.5尺(1.05ｍ)等間、桁行方向4.5尺(1.35ｍ)等間である。面積は1.75坪(5.67㎡)である。

出土遺物（第110図）

須恵器、土師器が出土している。出土位置と出土品の関係は、Ｐ1-1、Ｐ3-2、Ｐ4-3･4、Ｐ6-5である。１は須恵器の坏蓋で、口径17.8㎝に復原される。焼成良好で灰色を呈する。２は土師器の埦で、口径19.2㎝に復原される。３・４は甕で、３は口径22.6㎝に復原される。焼成良好で、２は黄褐色、４は暗黄茶褐色を呈する。５は口径26.9㎝、器高15㎝前後に復原される鉢である。焼成良好で、内面は白黄茶色、外面は橙褐色を呈する。

128号掘立柱建物跡　B128（第112図）

127号建物と重複し、243号住居を切る。１×２間の建物で、主軸をＮ-30°-Ｅに置く東西棟の建物である。倉庫棟であろうと推測する。規模は、梁間・桁行とも９尺（2.7ｍ）である。柱間寸法は、桁行方向4.5尺（1.35ｍ）等間である。面積は2.25坪（7.29㎡）である。

129号掘立柱建物跡　B129（第112図）

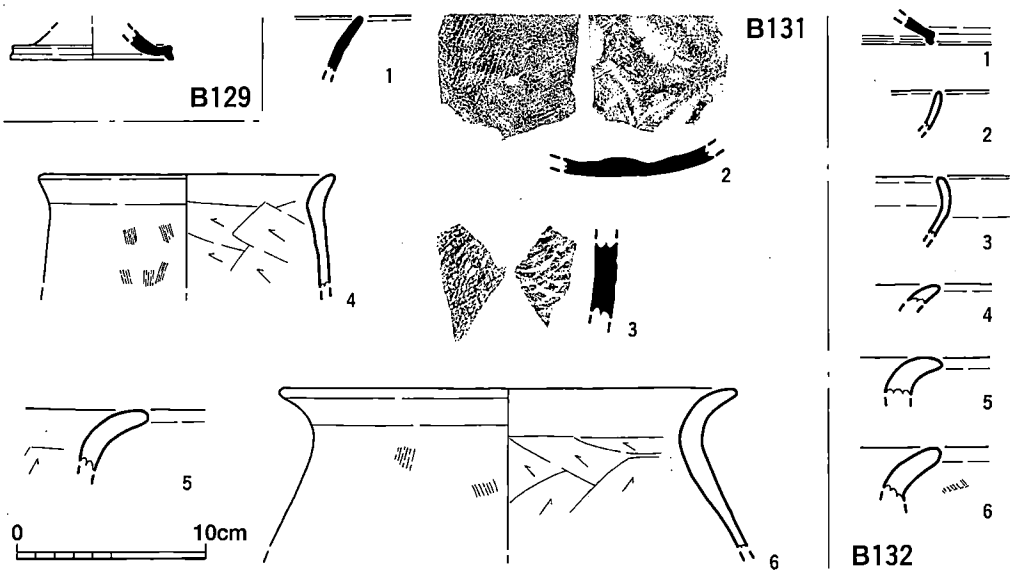
128号建物の北西に３ｍ離れて位置する。１×２間の建物で、主軸をＮ-40°-Ｅに置く東西棟の建物である。倉庫棟であろうと推測する。規模は、梁間、８尺（2.4ｍ）、桁行９尺（2.7ｍ）である。桁行方向の柱間寸法は、4.5尺（1.35ｍ）等間である。面積は２坪（6.48㎡）である。

出土遺物（第113図）

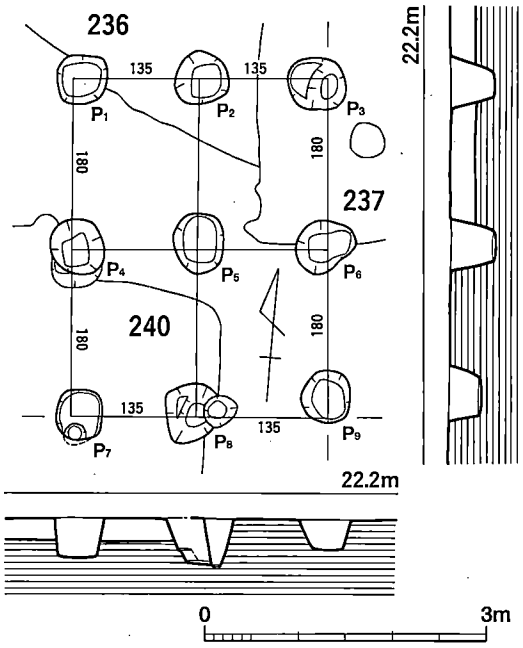
１は本建物とは直接的には関係しないが、Ｐ1北側のピットから出土した須恵器の高坏片である。裾部径8.6㎝。焼成良好で、淡灰色を呈する。

130号掘立柱建物跡　B130（第112図）

120号建物の約４ｍ南東、121号建物の３ｍ西に位置し、218・219・236号住居を切る。２×３間の建物で、主軸をＮ-１°-Ｗに置く南北棟の建物である。Ｐ11は、Ｐ２・Ｐ９から10尺（３ｍ）等間の位置にあり、屋内の棟持柱の柱穴であろう。規模は、梁間14尺（4.2ｍ）、桁行20尺（６ｍ）である。柱間寸法は、梁行方向は７尺（2.1ｍ）等間、桁行方向は北から６尺（1.8ｍ）、８尺（2.4ｍ）、６尺で、中央の柱間寸法が２尺（60㎝）広い。面積は7.78坪（25.2㎡）である。



第113図　129・131・132号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）



第114図　131号掘立柱建物跡実測図（1/80）

131号掘立柱建物跡　B131（図版40、第114図）

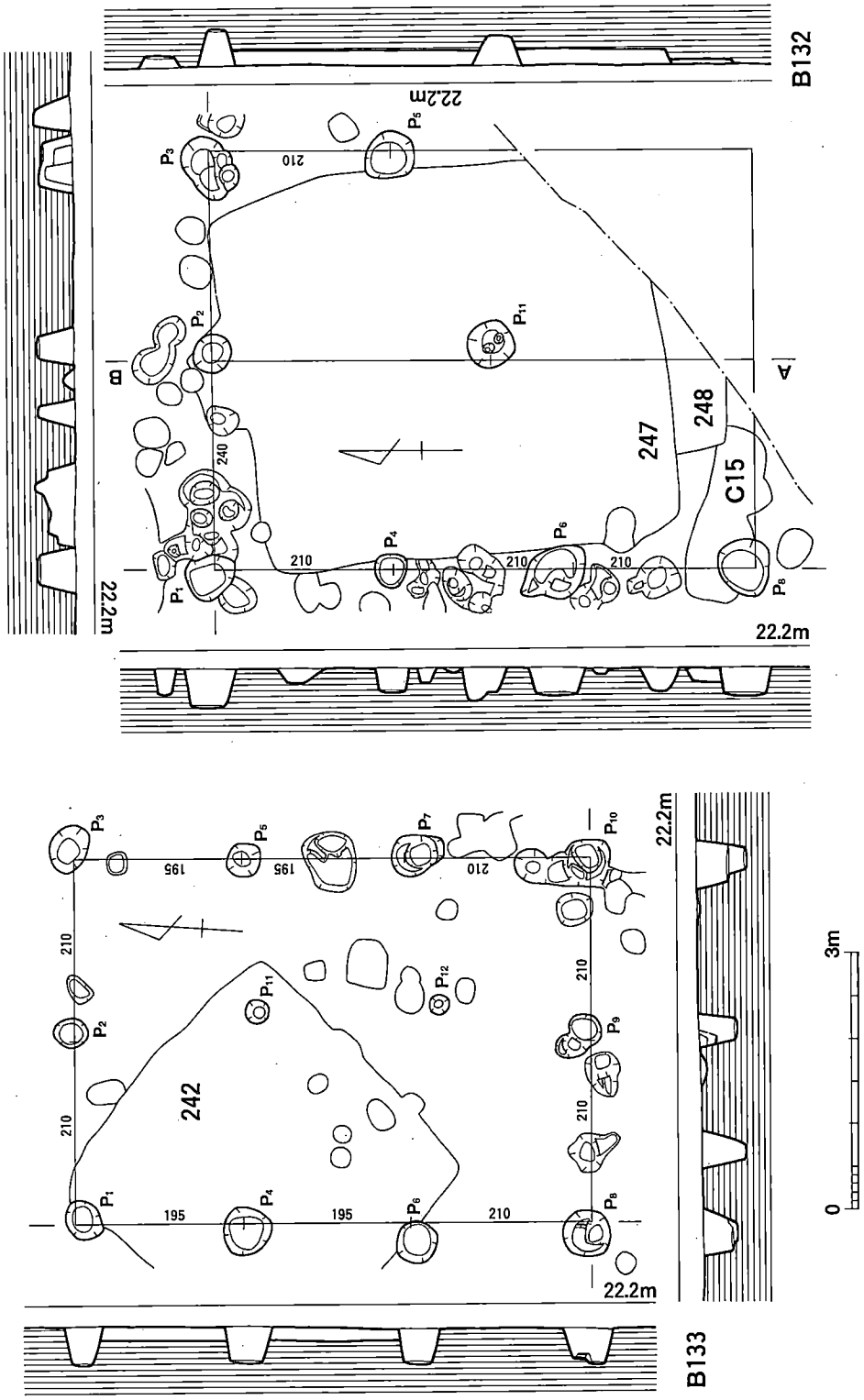
130号建物の南5.5m程に位置し、236・237・240号住居を切る。2×2間の総柱の建物で倉庫棟である。主軸方位をN-4°-Wに置く南北棟の建物である。規模は、梁間9尺(2.7m)、桁12尺（3.6m）である。柱間寸法は、梁行方向は4.5尺(1.35m)等間、桁行方向は6尺(1.8m)等間である。面積は3坪(9.72㎡)である。

出土遺物（第113図）

須恵器、土師器が出土している。出土位置と出土品の関係は、P4-4・6、P5-2・3、P7-1、P9-5である。1は坏身、2・3は甕片である。これらの須恵器は焼成良好で灰色を呈し、3の外面は淡黒灰色を呈する。4～6は甕で、4は口径15.7cm。6は24.3cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。

132号掘立柱建物跡　B132（第115図）

247・248号住居の竪穴部をすっぽりと取り囲むような形で建てられ、これらの住居及び15号



第115図　132・133号掘立柱建物跡実測図（1/80）

土壙墓を切っている。南～南東隅が調査区外に延びるが、118号建物を例外とすれば、居屋建物は２×３間のものが通常な在り方をしているので、本建物の桁柱列はＰ8が南限の可能性が高いと推測する。しかし、梁間が他の建物より広いことを考慮すれば、南に更に１間増える可能性もあるが、一応、２×３間の規模の建物として説明する。

主軸方位を真南北に置く南北棟の建物である。Ｐ11は、Ｐ2・Ｐ9から10.5尺（3.15ｍ）等間の位置にあり、屋内の棟持柱の柱穴かと思われ、そのように図示している。しかし、このピットの確認状況が曖昧であり、247号住居の下層遺構である可能性もあり、本建物に伴うか否かは即断し難い。規模は、梁間16尺（4.8ｍ）、桁21尺（6.3ｍ）である。柱間寸法は、梁行方向は８尺（2.4ｍ）等間、桁行方向は７尺（2.1ｍ）等間である。面積は9.33坪(30.24㎡)である。

出土遺物（第113図）

須恵器、土師器が出土している。出土位置と出土品の関係は、Ｐ1-1～5、Ｐ8-6である。１は須恵器の坏蓋で、焼成良好で灰色を呈する。２は坏、３は鉢、４～６は甕である。焼成良好で淡茶褐色～茶褐色を呈する。

133号掘立柱建物跡　B133（第115図）

132号建物の西２ｍ程に位置し、242号住居を切っている。主軸をＮ-４°-Ｗに置く、２×３間の南北棟の建物である。Ｐ11・Ｐ12は、Ｐ2とＰ9を結ぶ線から東にややずれるが、屋内の補助柱穴ではないかと推測する。規模は、梁間14尺（4.2ｍ）、桁20尺（６ｍ）である。柱間寸法は、梁行方向は７尺(2.1ｍ）等間、桁行方向は北から、6.5尺（1.95ｍ）、6.5尺、７尺（2.1ｍ）で、南の柱間寸法が５寸（15㎝）広い。面積は7.78坪（25.2㎡）である。

３　土　坑

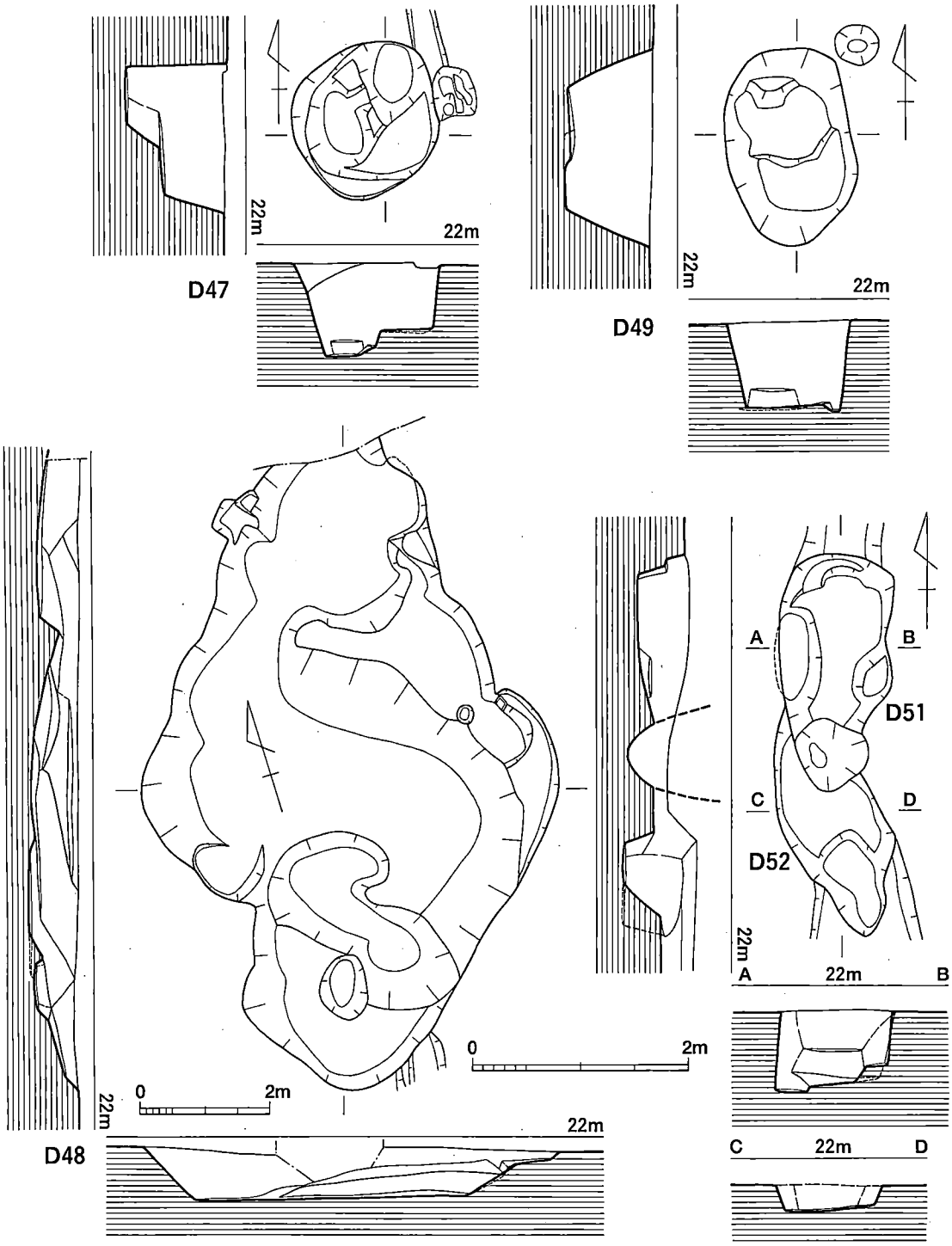
47～68号土坑、22基を報告する。これらの土坑は、掘立柱建物の住人のごみ捨て場の性格を有したであろう土坑もあり、相互の位置関係と出土品は極めて重要である。そのため、既報の47号土坑を再度報告する。よって、以下の説明は掘立柱建物との関係を中心に記述する。

47号土坑　D47（第116図）

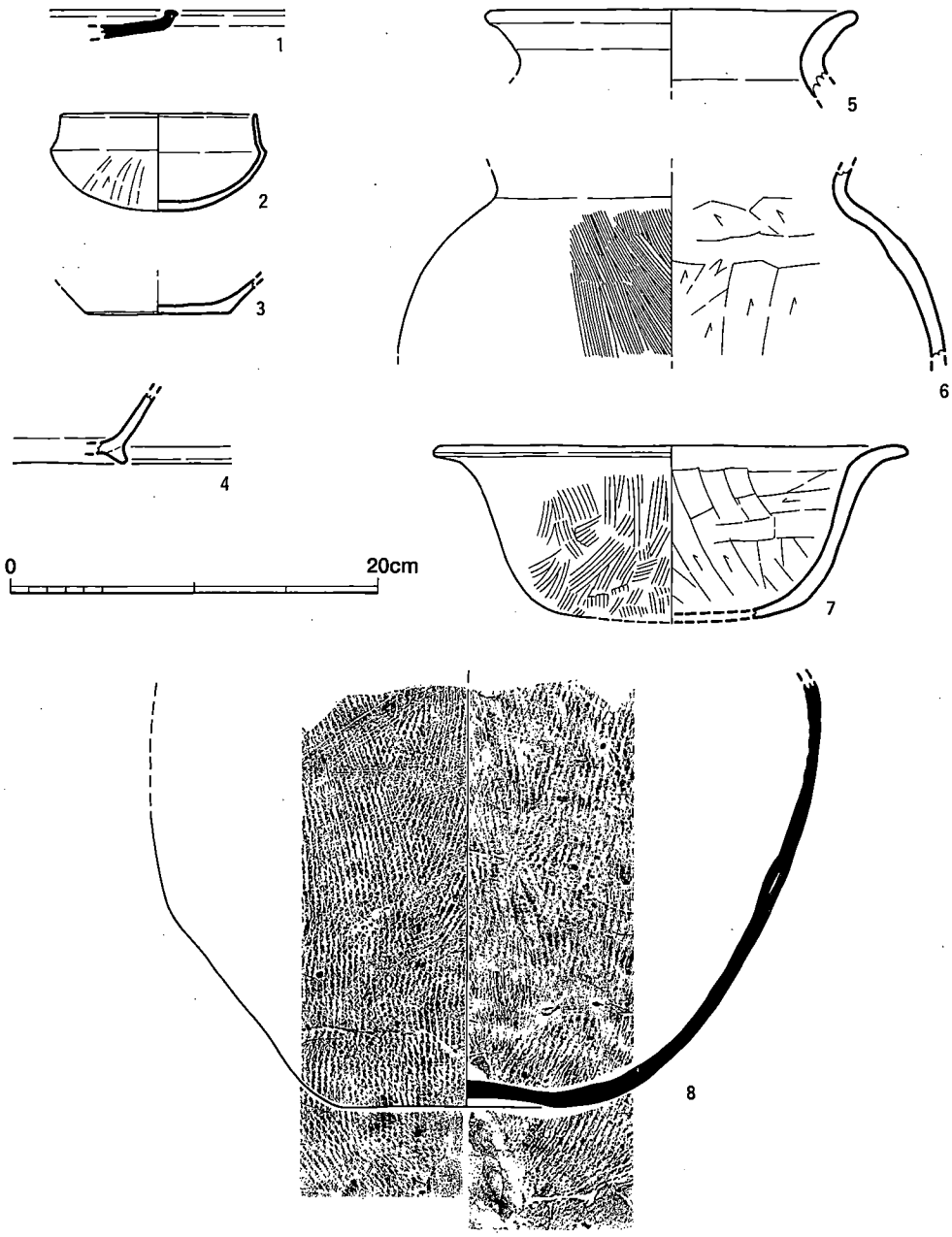
112号及び113号建物の間に位置する。プランは円形を呈し、規模は、南北径1.46ｍ、西径1.38ｍ、深さは最深部で、0.92ｍで小規模な土坑である。ほぼ直に掘られており、北東側が一段深くなっている。

出土遺物

須恵器、土師器が出土している。須恵器の甕８は49号土坑から出土した破片と相互に接合し



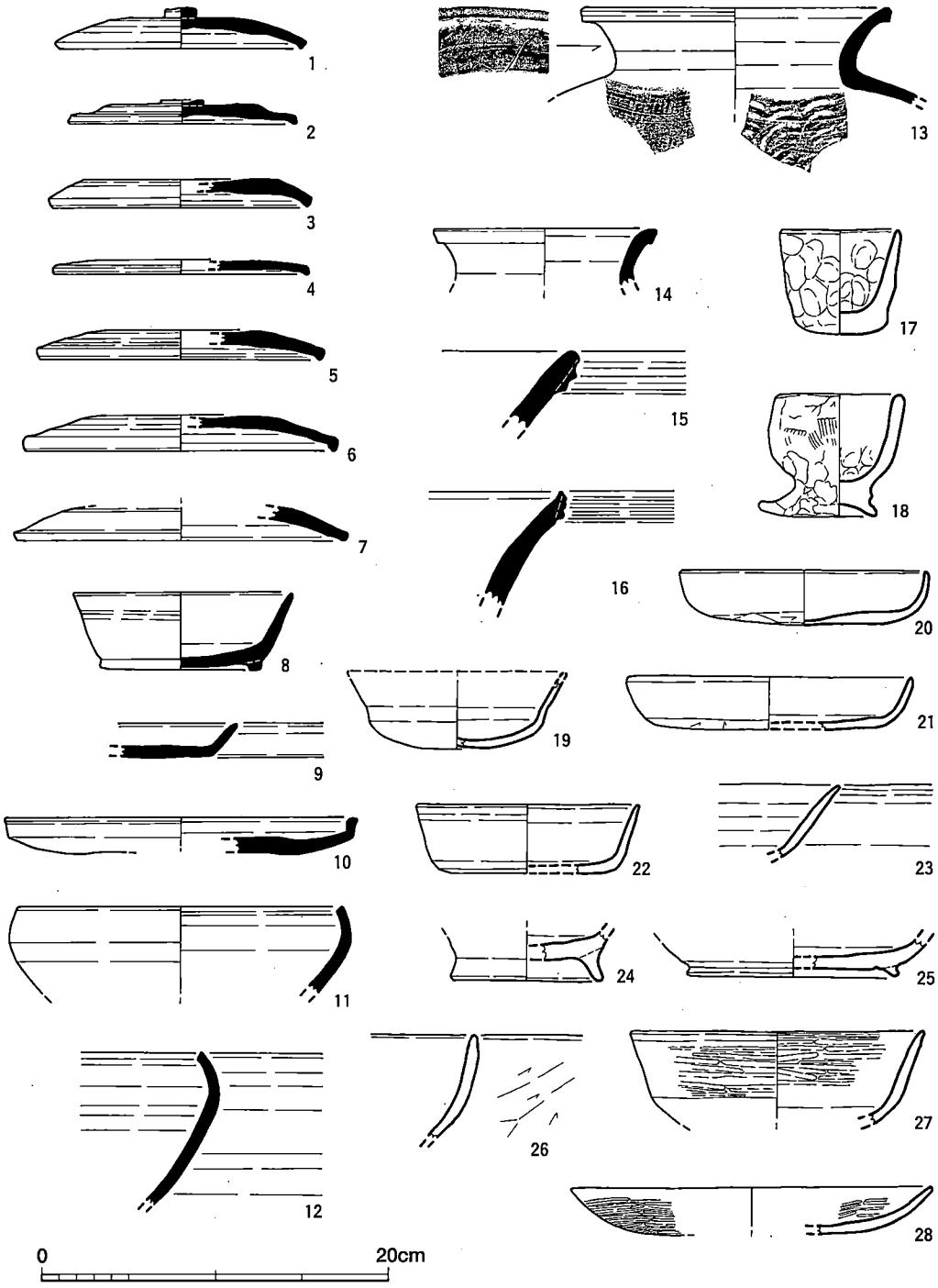
第116図　47～49・51・52号土坑実測図（1/60、48；1/100）



第117図　47号土坑出土土器実測図（1/4）

ている。

土　器（図版53、第117図）　1は高坏の小片で、焼成良好で緑灰色を呈する。2・3は坏



第118図　48号土坑出土土器実測図①（1/4）

で、２は口径10.8cm、器高5.2cmを測る。胎土は精製され、焼成良好で橙褐色を呈する。４は高台付の甕であろう。５・６は甕である。７の鉢は口径26cm、器高9.6cmに復原される。焼成良好で橙褐色～黄褐色を呈する。８は胴部最大径36.5cm、現存高23.2cmを測る。焼成良好で内面は淡えび茶色、外面は茶褐色を呈する。

48号土坑　D48（第116図）

118号建物と112号建物の間にある不整形なプランを呈する大型の土坑である。一部が北側調査区外に延びるがほぼ全形を窺うことができる。長軸は10ｍ程、最大幅6.45ｍ、深さは最深部で1.5ｍである。本土坑は複数の土坑の集合体であるが、各々個別の掘り方を検出できなかったため、ひとつの土坑として報告する。

以下に説明する出土品から、本土坑は128号建物と関係がありそうで、おそらく、建物の廃絶時の不用品を廃棄したゴミ捨て場だと推測する。

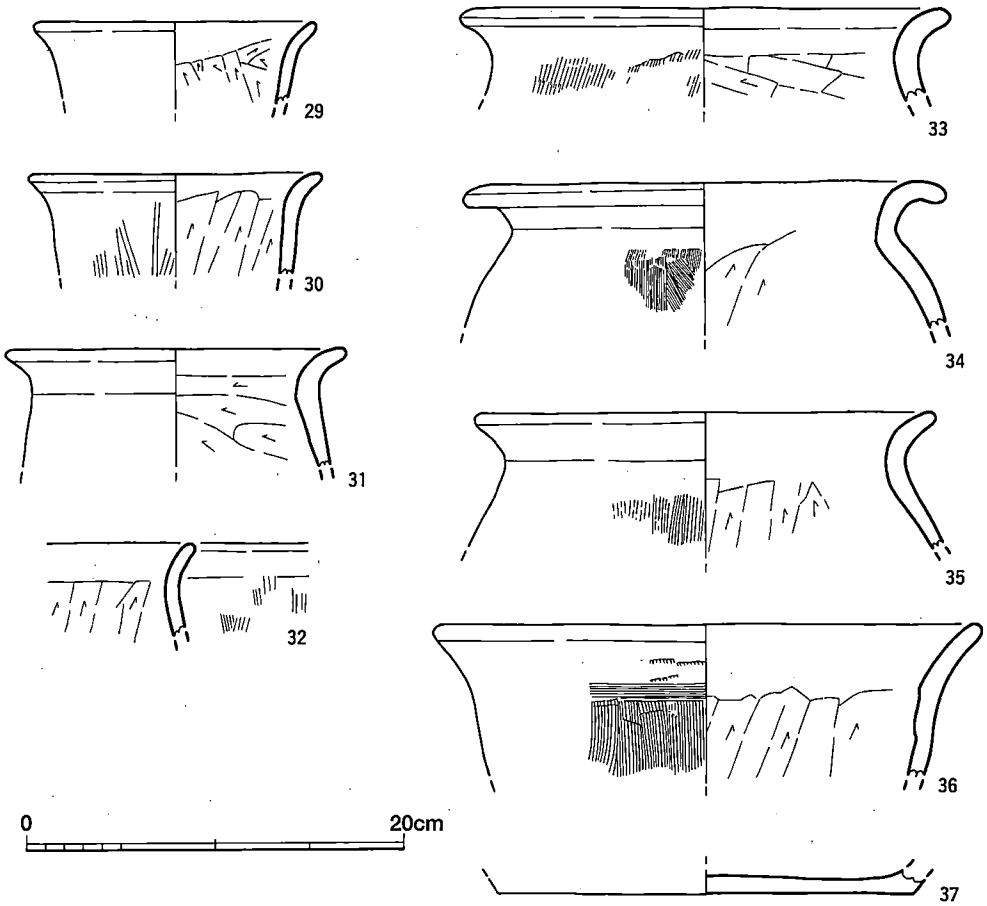
出土遺物

須恵器、土師器が多量に出土し、各々の器種も多彩である。また、砥石と土製品が出土している。層位毎に取り上げていないので出土した層位は不明である。これらの土器のうち、鉢27と皿28の胎土は極めて精選されたもので、内外面には丁寧なヘラミガキを施しており、通常の村落において使用されるものとは異質である。本村落遺跡では、円面硯、転用硯、墨書土器、刻印土器や銙帯等が出土しており、この二つの土器は、官衙と交渉をする人物の存在を示す資料のひとつであろう。

土　器（図版53、第118・119図）　須恵器は16点図示し、坏蓋（１～７）、坏身（８）、皿（９）、高坏（10）、鉢（11・12）、壷（14）、甕（13・15・16）と８種類の器種があり、レヴェルの高い飲食に使用されたであろう土器（10～12）がある。須恵器のうち、残存状態の良い物の口径・器高は、１；14.6cm・2.4cm、２；13.2cm・1.3cm、８；12.8cm・4.4cm、13；18cm、14；13cmに復原される。これらは、総じて焼成良好で、灰色～暗灰色を呈するが、15は軟質で灰黄褐色を呈する。土師器は21点図示し、手捏土器（17・18）、皿（20・21・28）、坏（19・22）、埦（23～25）、鉢（26・27）、小型甕（29～31）、大型甕（33～35）、甑（32・36）、器種不明（37）と多くの器種がある。須恵器と同様に質の高い土器（27・28・37）がある。残存状態の良い物の口径・器高は、17；7cm・６cm、18；7.4cm・７cmである。その他は同じく、20；14.4cm・3.1cm、27；17cm、28；21cm・2.8cmに復原される。小型の甕は口径15cm～18cm、大型の甕は口径24.5cm～26cmである。これらは総じて焼成良好である。色調は褐色～橙褐色を呈する物が多いが、33・35・36は煤を受けており、外側は黒褐色～暗灰色を呈する。なお、37は淡橙褐色である。

土製品（図版73、第186図）　手捏のスプーン状のものである。詳細は後述する。

石製品（図版74、第189図）　砥石が１点出土している。詳細は後述する。



第119図　48号土坑出土土器実測図②（1/4）

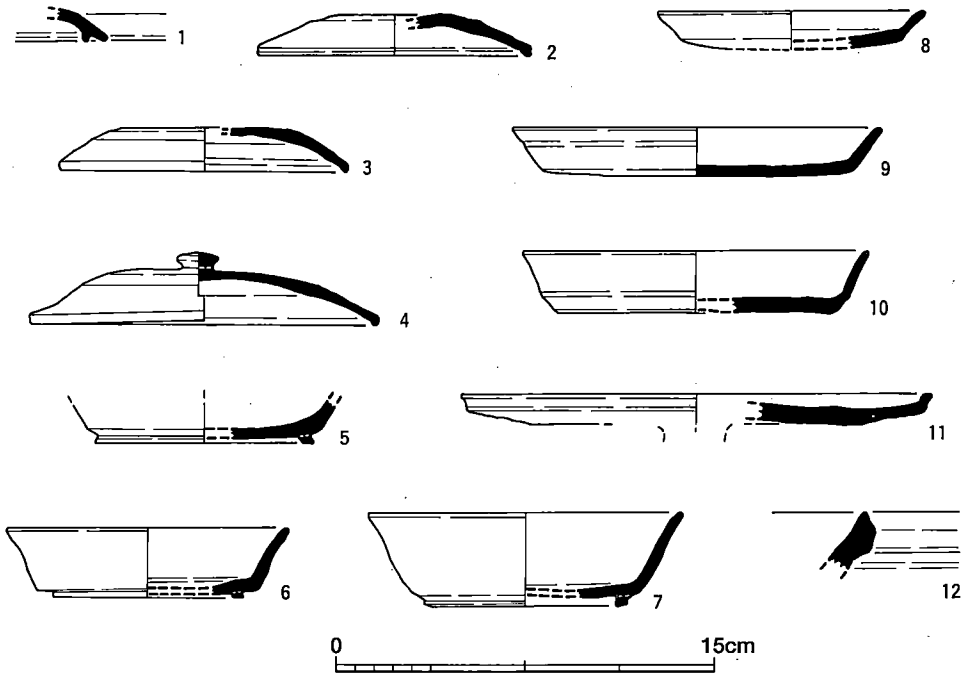
49号土坑　D49　（第116図）

113号建物と114号建物の間にある楕円形のプランを呈する土坑である。規模は長軸1.8m、短軸1.15m、深さは最深部で0.8mを測る。ほぼ垂直に掘られている。底面には段がつき、南側が低くなっているが、床面は平坦な状態である。

出土遺物

須恵器、土師器が多量に出土しているが、特に重要な出土品は円面硯及び転用硯である。硯の存在は言うまでもなく文字を書く人の存在を示唆するものであり、宮原遺跡として報告するこの村落の歴史的な価値を示す資料である。須恵器、土師器を問わず、坏・埦類の出土量が多い。

土　器（図版53、第120・121図）　図示した須恵器は13点で、坏蓋（1～4）、坏身（5～7）、皿（8～10）、高坏(11)、甕(12)である。残存状態の良い物の口径・器高は、4；18.4cm・3.8cm、6；15cm・3.7cm、7；16.8cm・5cm、9；19.6cm・2.6cm、11；25cmに復原される。総じて焼



第120図　49号土坑出土土器実測図①（1/4）

成良好であり、灰色～を基調とするが、2・10・11・12は黒灰色を呈する。土師器は坏(13～21)、埦(22)、小型甕(26～33)、大型甕（24・25）である。残存状態の良い物の口径・器高は、18；14.3cm・3.8cm、19；14.4cm・3.7cm、20；14.9cm・3.9cm、33；15.4cm・14.6cmに復原される。焼成良好で橙褐色を基調とするが、支脚に使用される例の多い33は火を受けて変色している。

円面硯（図版63、第174図）　埋土中から出土した小片で、海の部分は遺存せず、脚部の一部である。詳細は後述する。

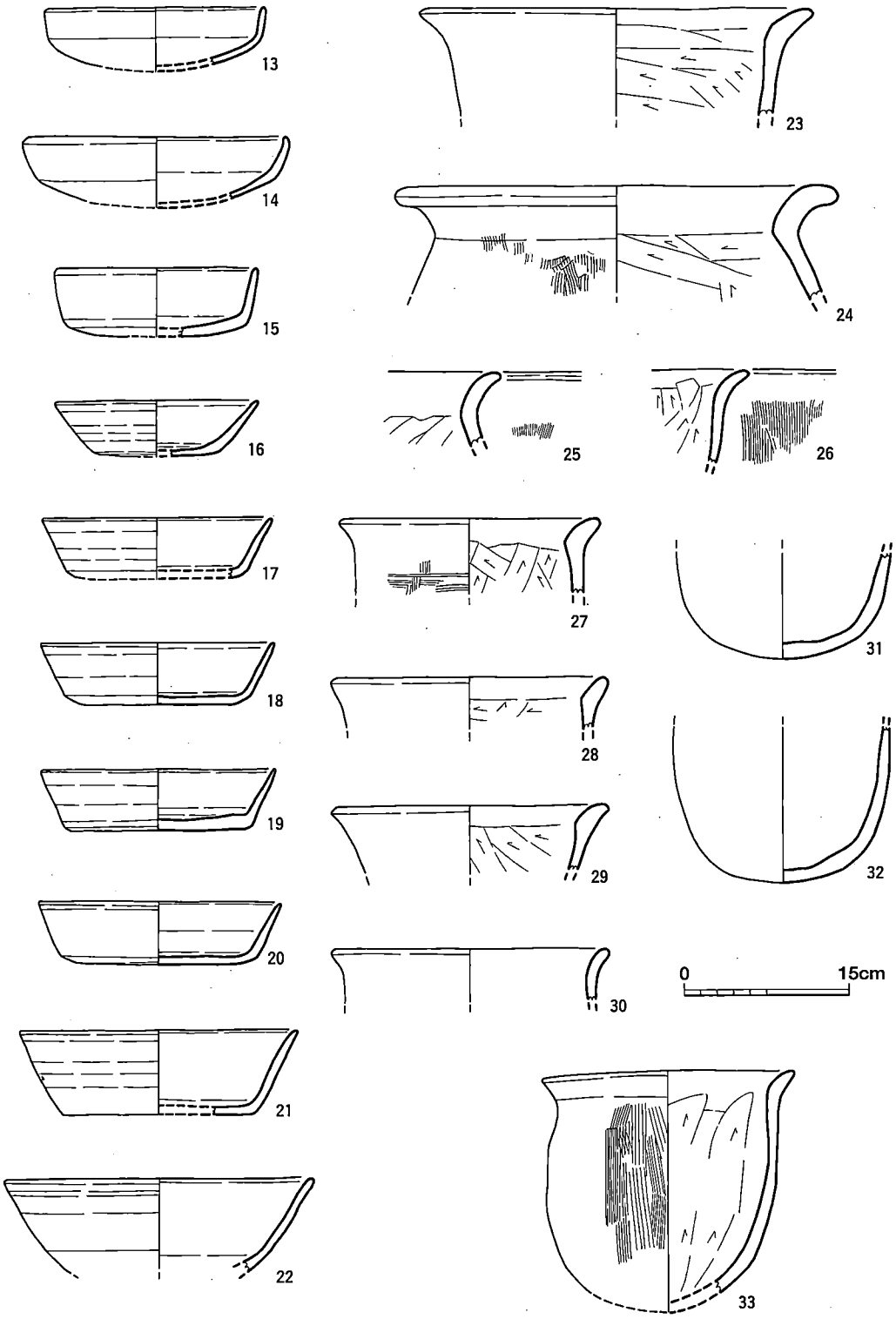
転用硯（第175図）　埋土中から出土した破片資料である。皿の内底面を使用している。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　刀子2点が出土している。詳細は後述する。

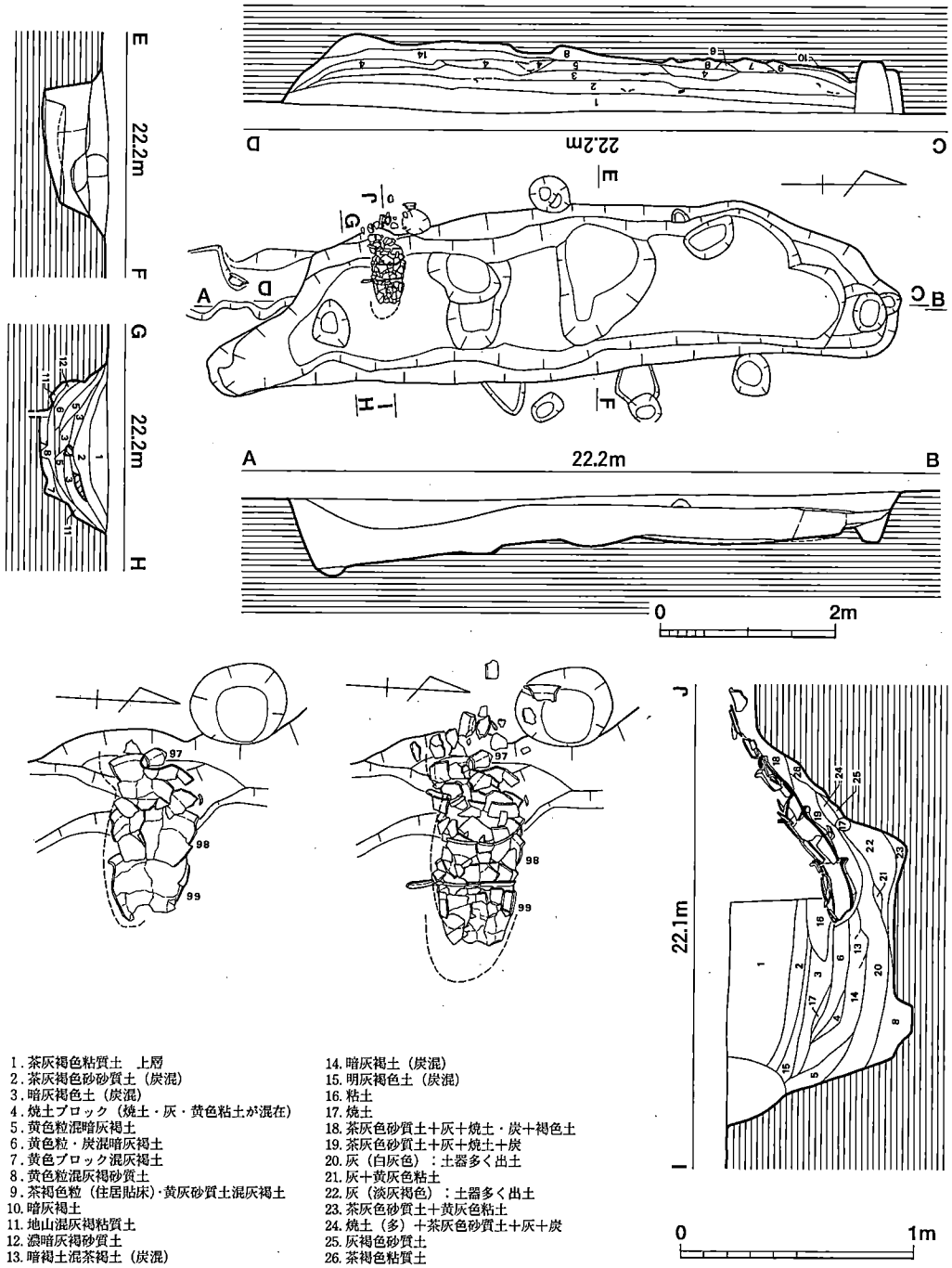
50号土坑　D50（図版41・42、第122図）

123号建物と重複し、122号建物の東5m～6mの位置に掘り込まれた南北に長い土坑である。北5mの位置には昨年報告した109・110号建物があり、こちらの建物と関係が深い土坑であろうと推測する。

南北長8m程、東西最大幅2m程、深さは最深部で0.7m程である。この土坑と西接する222号住居のカマドの延長線上に、本土坑南部に連接状態で検出した甕が、あたかも煙道のように、



第121図　49号土坑出土土器実測図②（1/4）



1. 茶灰褐色粘質土　上層
2. 茶灰褐色砂砂質土（炭混）
3. 暗灰褐色土（炭混）
4. 焼土ブロック（焼土・灰・黄色粘土が混在）
5. 黄色粒混暗灰褐土
6. 黄色粒・炭混暗灰褐土
7. 黄色ブロック混灰褐土
8. 黄色粒混灰褐砂質土
9. 茶褐色粒（住居貼床）・黄灰砂質土混灰褐土
10. 暗灰褐土
11. 地山混灰褐粘質土
12. 濃暗灰褐砂質土
13. 暗褐土混茶褐土（炭混）
14. 暗灰褐土（炭混）
15. 明灰褐色土（炭混）
16. 粘土
17. 焼土
18. 茶灰色砂質土＋灰＋焼土・炭＋褐色土
19. 茶灰色砂質土＋灰＋焼土＋炭
20. 灰（白灰色）：土器多く出土
21. 灰＋黄灰色粘土
22. 灰（淡灰褐色）：土器多く出土
23. 茶灰色砂質土＋黄灰色粘土
24. 焼土（多）＋茶灰色砂質土＋灰＋炭
25. 灰褐色砂質土
26. 茶褐色粘質土

第122図　50号土坑（1/80）・土器出土状態（1/30）実測図

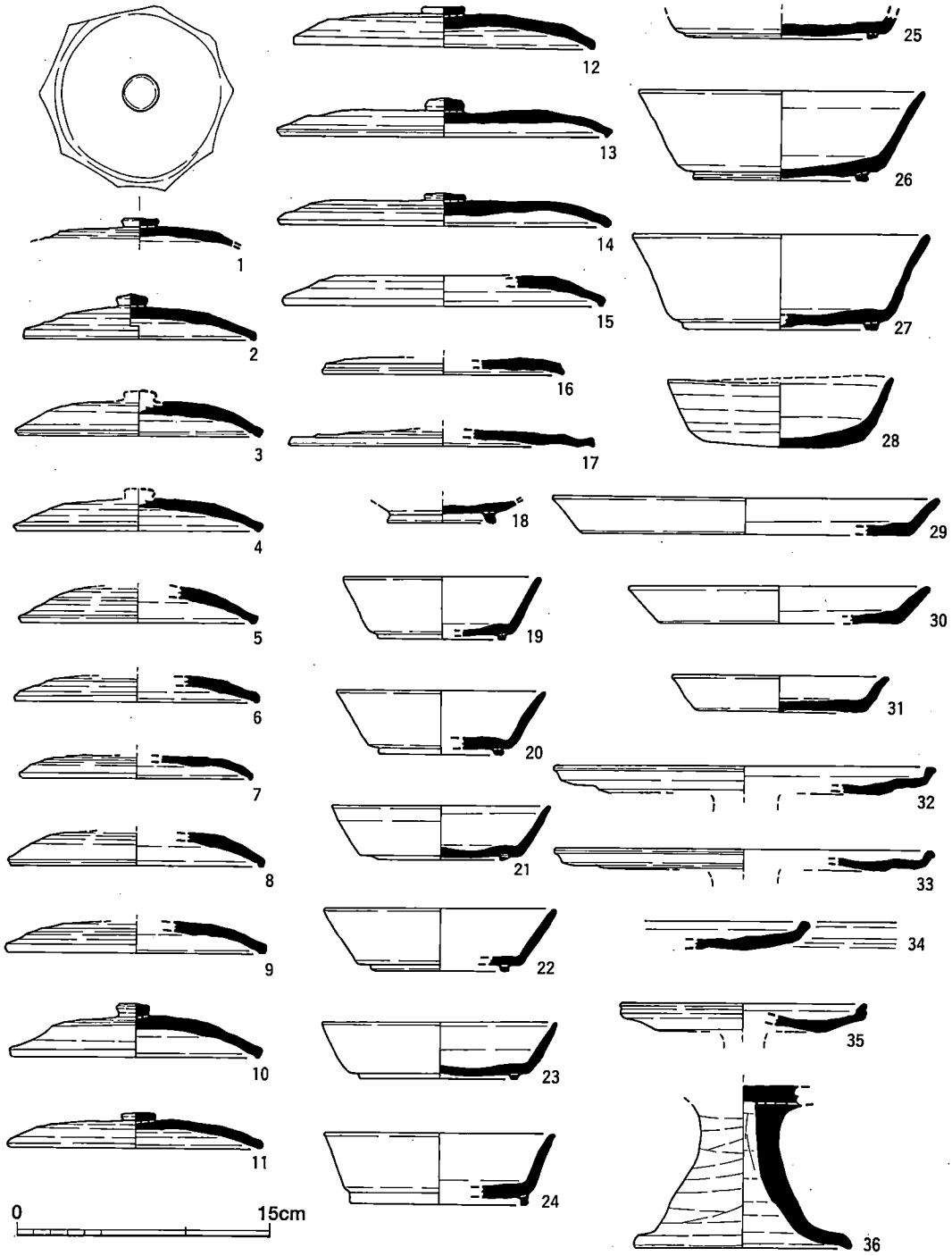
うまい具合に存在している。しかし、カマドの側から見れば、3個の甕は先の方（底部）に向かって低くなっているので、222号住居のカマドの煙道とは考えにくい。よって、両者の関係は極めて薄いと判断したので、連接する甕は本土坑に直接伴うものとして図示し、報告する。

この連接した甕は、土坑の南部の西側に検出した。図では、三個の甕が各々下部の甕の口縁部に底部を差し込むような状態で検出した。しかし、これは最上部の甕が乱れた状態で検出されたため、本来は四個の甕が連接していたものと推測する。この甕群は、土坑の地山面には接しておらず、埋土中に設置されたように見受けられる。また、その際の掘り方かと思われる僅かな痕跡が認められる。土層図から判断すると、この土坑の埋没が自然的か否かは別にして、底面から最低30cm～40cm埋まった時点で、この甕群は設置されたであろうと推測する。

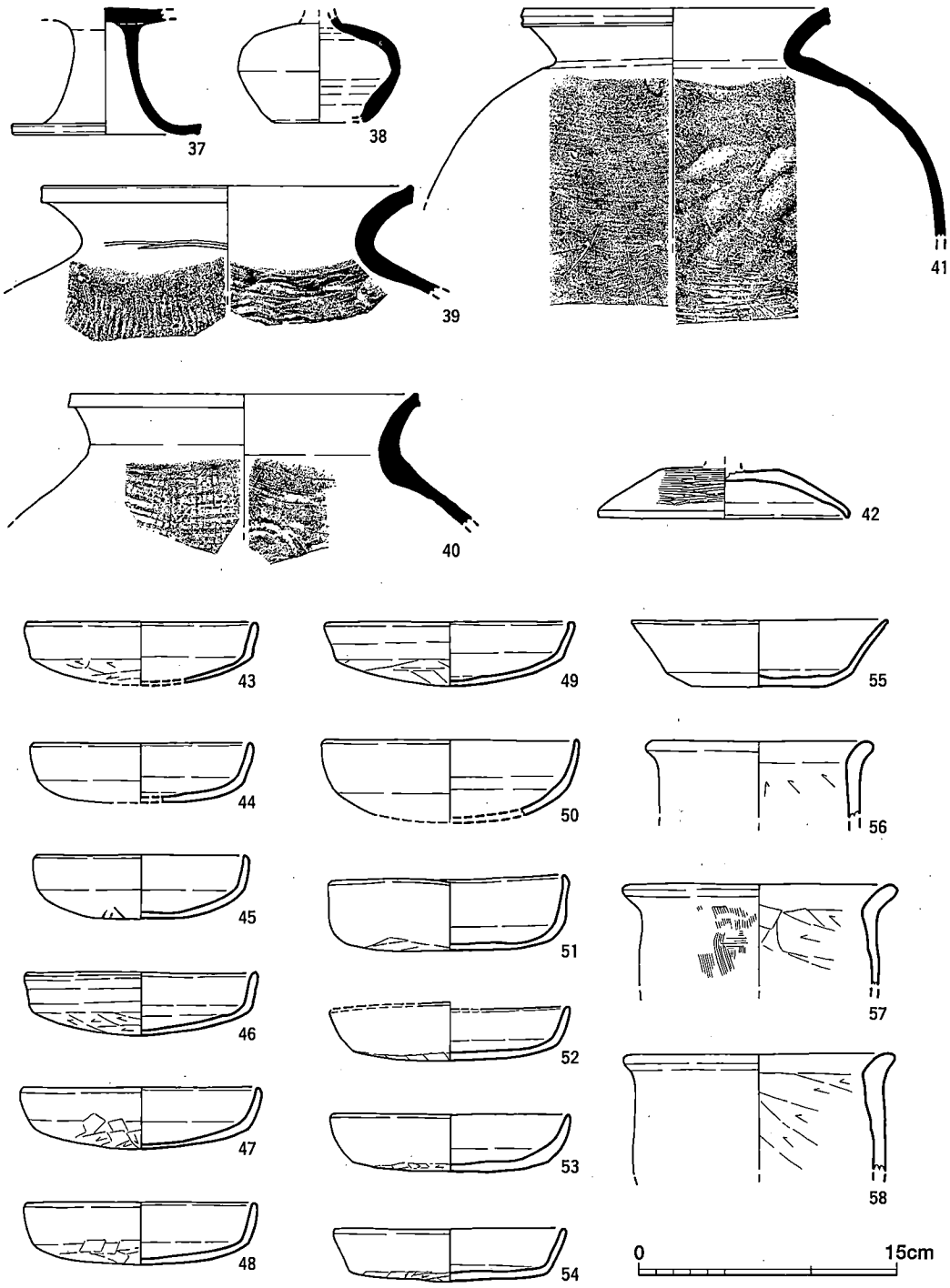
出土遺物

極めて多量の須恵器、土師器が出土している。他に、土製品、焼塩土器、刻印土器、墨書土器、転用硯が出土している。器種、量とも豊富で、質の高い土器も含まれる。坏蓋42、壷110及び器種を特定できないが108・109は、精選された粘土を使用して丁寧に作られ、ヘラミガキによる調整を施している。普通の村落における日常生活では使用されない物である。

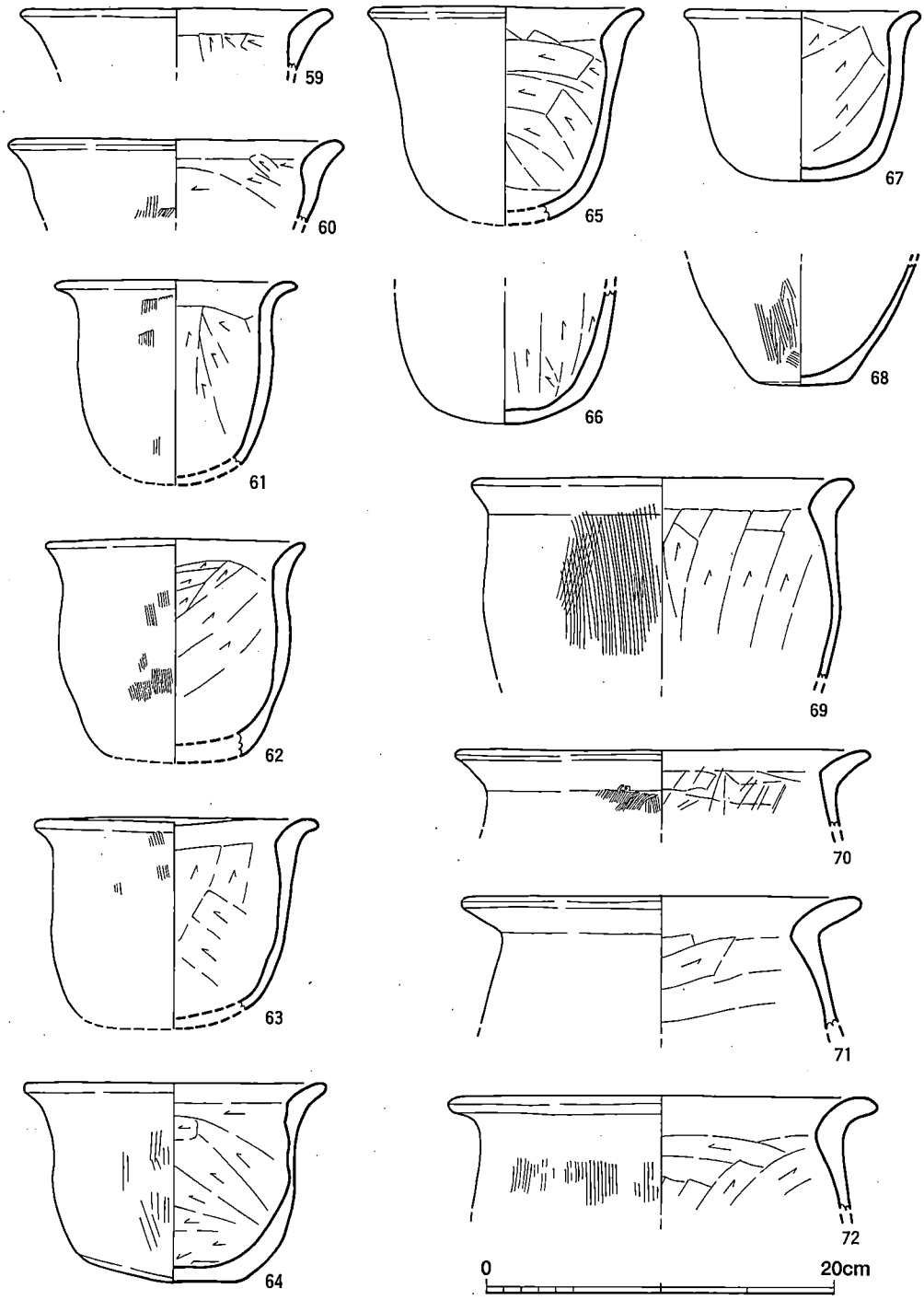
土　器（図版54・55、第123～130図）　須恵器は41点図示した。坏蓋（1～17）、坏身（18～28）、皿（29～30）、高坏（32～37）、壷（38）、甕（39～41）である。坏蓋1は、土坑南部の下層から出土したもので、口縁部を含めた周縁部を打ち欠き、稜を九つ作っている。直径は11.5cm前後である。焼成良好で、灰色を呈する。各須恵器の残存状態が良い物の口径・器高は、2；13.8cm・2.7cm、11；15.2cm・2.1cmであり、12；18cm・2.4cm、21；13cm・3.2cm、26；16.8cm・5.3cmである。これらは総じて焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。土師器は72点図示した。坏蓋（42）、坏（43～54）、小型甕（56～68）、大型甕（69～101）、鉢（102～106）、甑（107）、壷（110）、移動式カマド（112・113）で、108は鉢か椀、109は壷か甕、111は鉢であろうか。42は土坑南半部の上層から出土した。口径14.5cm、残存高2.9cmである。外面は丁寧にヘラミガキされ、器面は平滑である。胎土は精製され、焼成良好で、内面は黄褐色、外面は淡黄褐色を呈する。43～55は口径12cm～15cmで、焼成良好で橙褐色～暗褐色を呈する。56～68は支脚に使用されることが多い甕である。69～106の甕とともに、総じて焼成良好で、橙褐色を基調とするが、火や煤を受け、赤褐色、黒色に変色したものも含まれる。大型の甕のうち、97～99は先に説明した、三連の甕である。97が上、98が中、99が下に使用されていた。97は口径25.5cmで、底部を欠くが器高は28.7cm程に復原される。98は口径27.3cm、器高30.7cmである。99は口径26.7cmで、器高は30cm程に復原される。これらは焼成良好で、橙褐色～黄褐色を呈する。102～106の鉢の内103は口径20.5cm、器高13cmに復原される。107は口径29cm、器高30.8cmに復原される甑で、焼成良好で橙褐色を呈する。108は口径25.6cm程に復原されるが、底部の形状が不明である。内外面に丁寧なヘラミガキの跡が残る。109も破片資料で、口縁部～体部上半部及び底部の形状が不明である。丁寧な作りで、



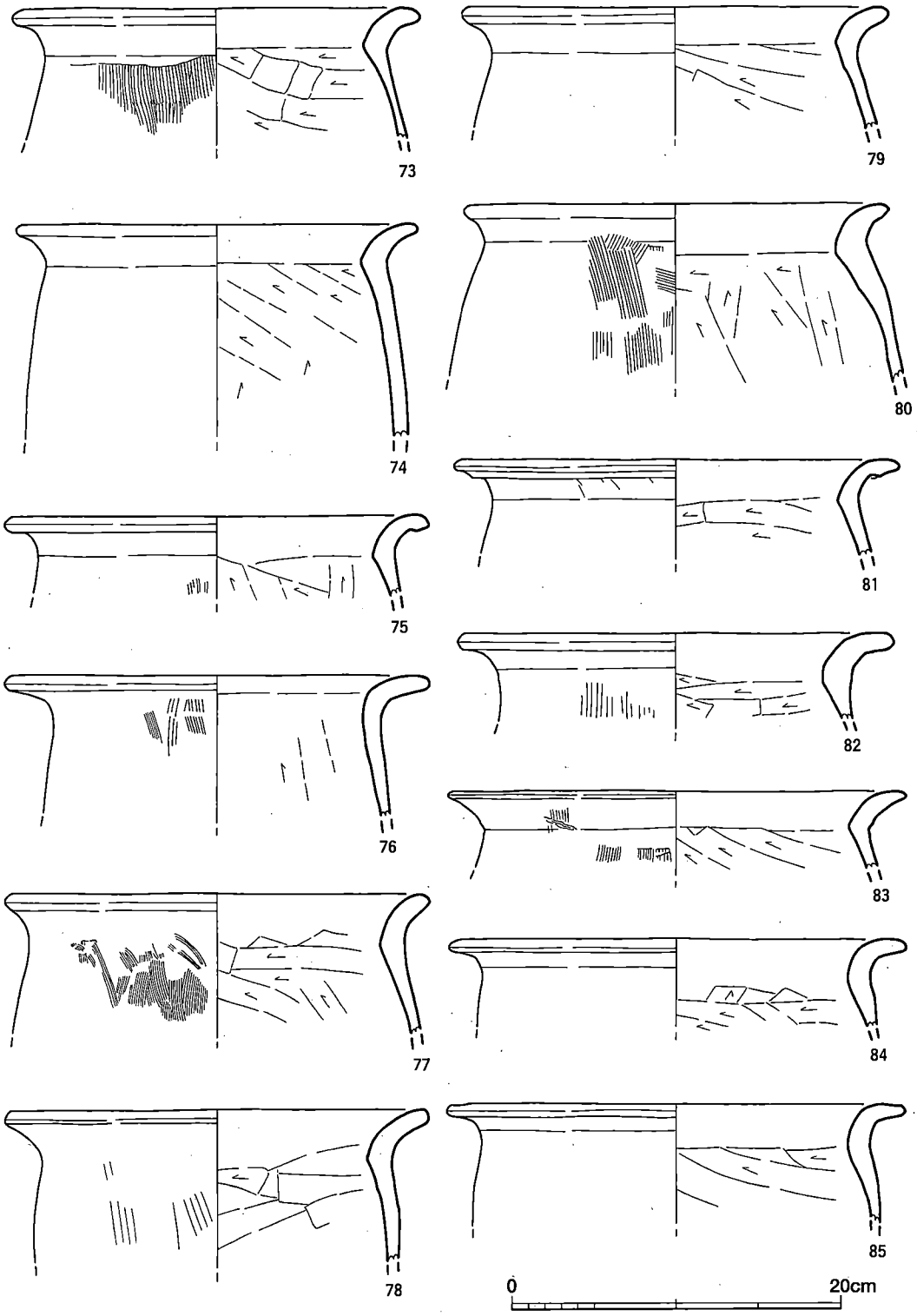
第123図　50号土坑出土土器実測図①（1/4）



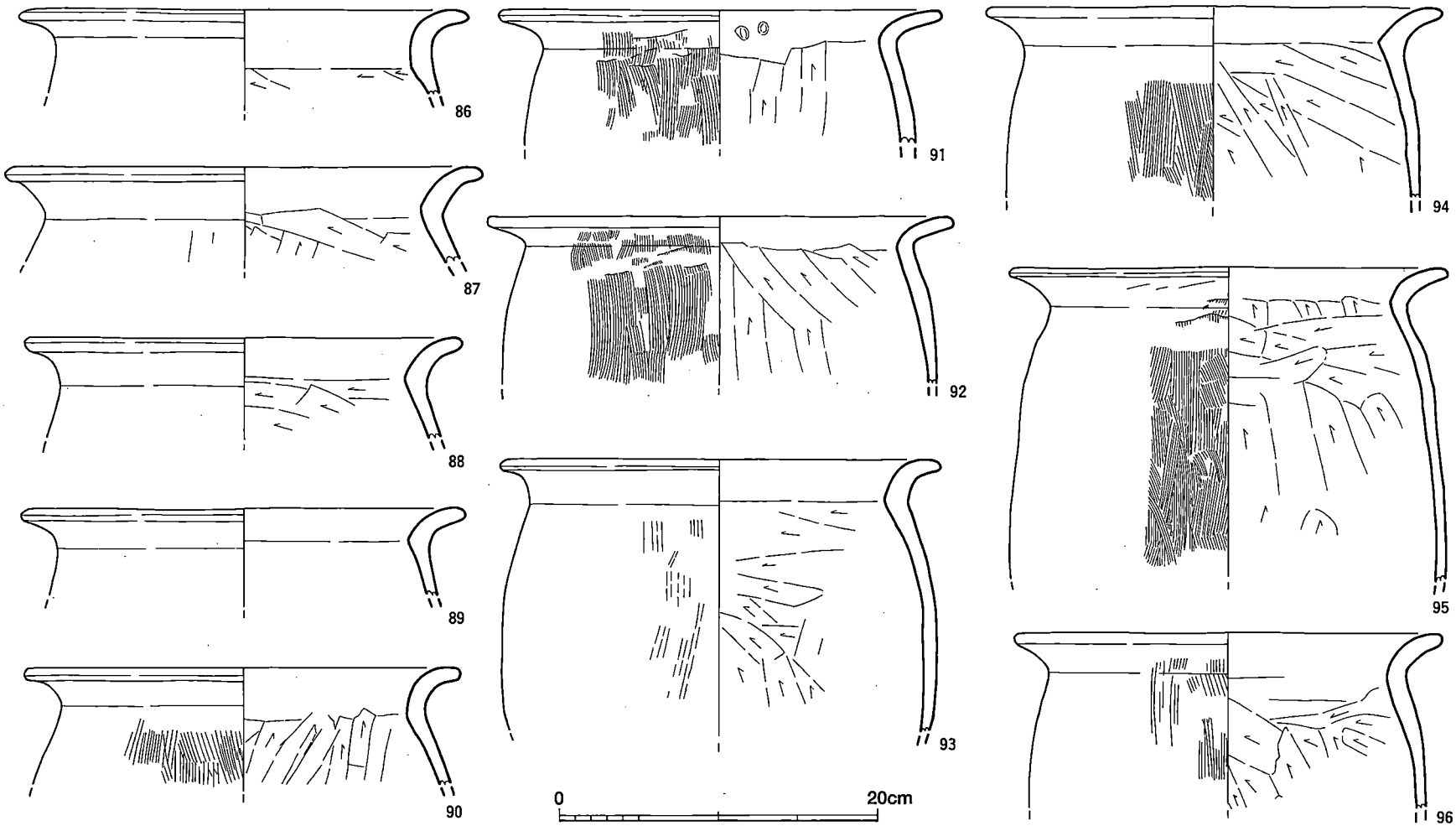
第124図　50号土坑出土土器実測図②（1/4）



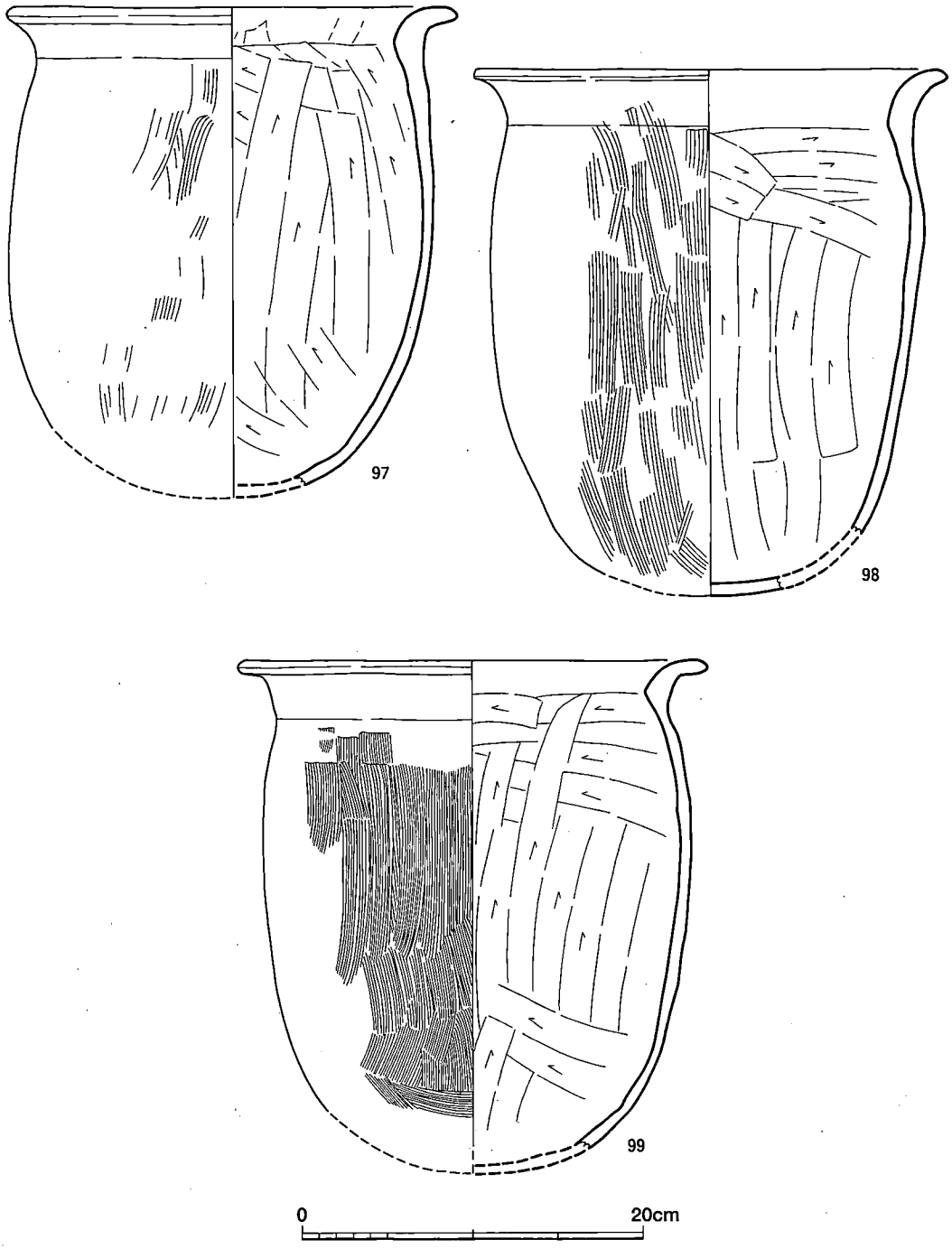
第125図　50号土坑出土土器実測図③（1/4）



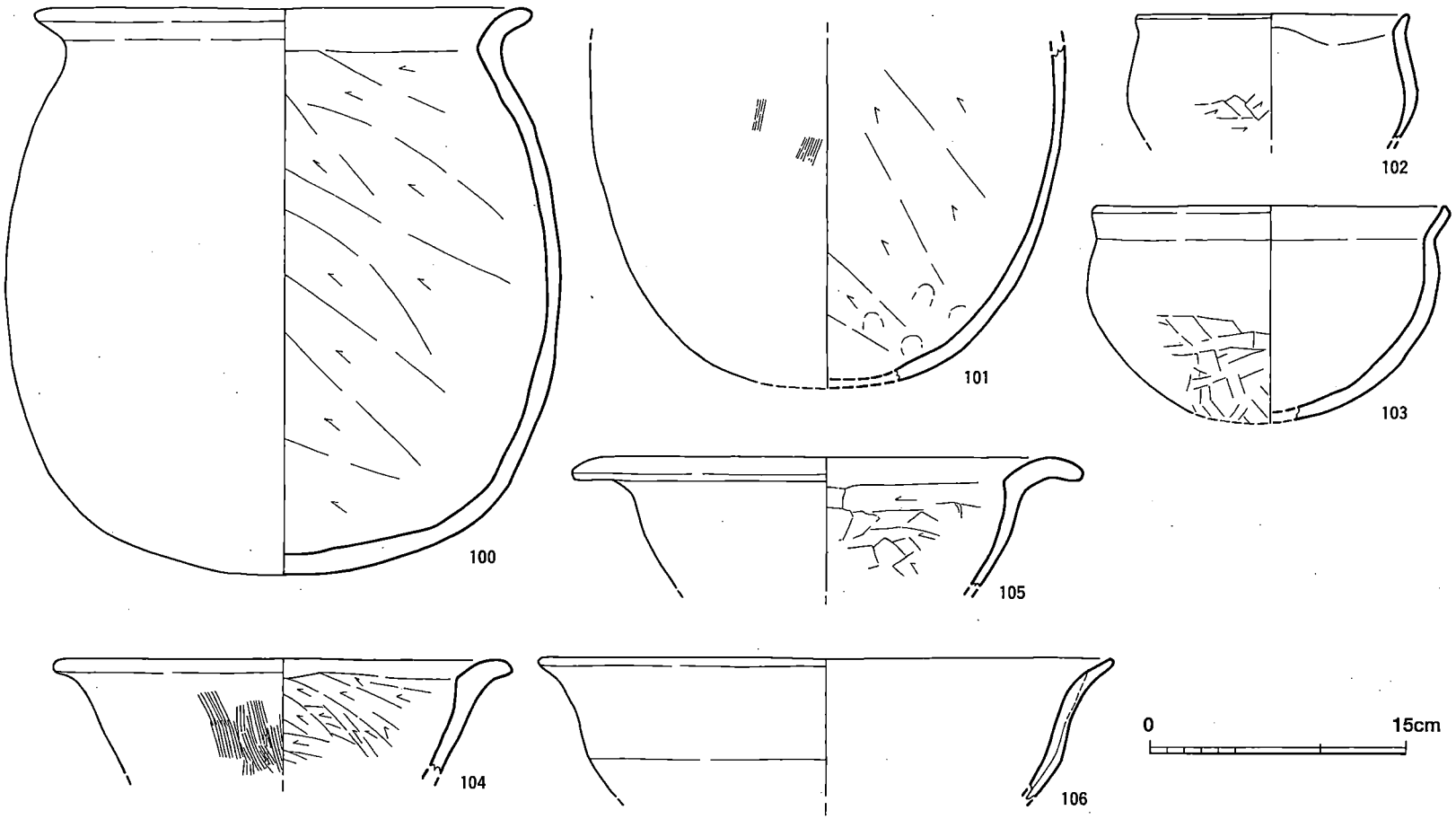
第126図　50号土坑出土土器実測図④（1/4）



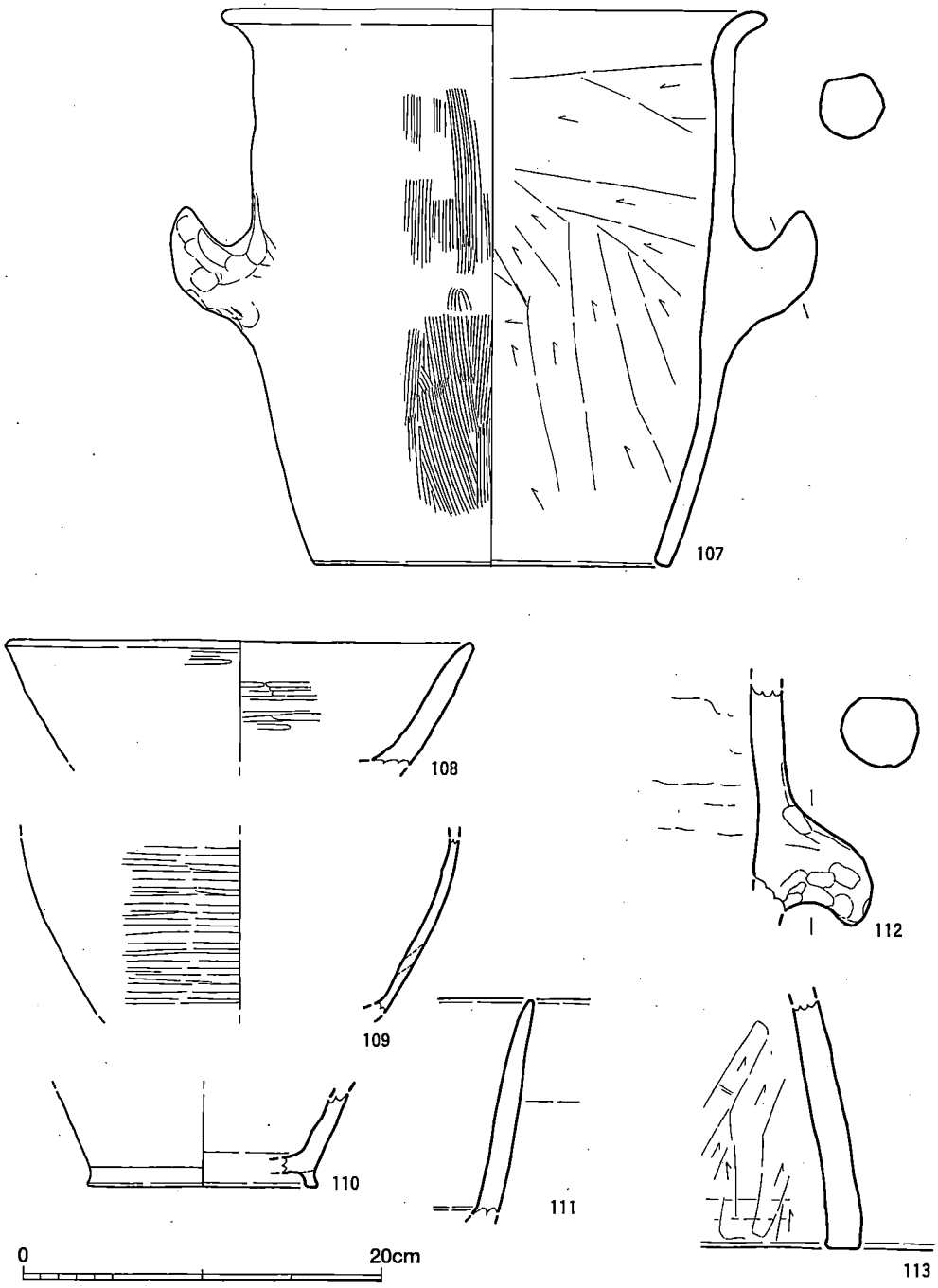
第127図　50号土坑出土土器実測図⑤（1/4）



第128図　50号土坑出土土器実測図⑥（1/4）



第129図　50号土坑出土土器実測図⑦（1/4）



第130図　50号土坑出土土器実測図⑧（1/4）

外面にヘラミガキを施す。この２点は精選された粘土を使用し、焼成良好で、108は白黄茶色、109は黄灰色～淡橙褐色を呈する。110・111は火や煤を受けたため変色している。112・113の移動式カマドは小片で全形を知りえない。ダイナミックな作りで、淡茶褐色～橙褐色を呈する。

墨書土器（図版63、第173図）　土坑南半部の埋土上層から出土した。土師器の皿で外底面に墨書がある。詳細は後述する。

転用硯（第176図）　埋土下層から４点出土している。坏蓋２点、皿２点である。詳細は後述する。

刻印土器（図版65、第180図）　土坑南半部の埋土下層から出土した坏の破片である。詳細は後述する。

焼塩土器（図版69・70、第182・183図）　埋土上層～下層から28点出土している。詳細は後述する。

土製品（図版73、第186図）　上層から土錘３点、仏具か思われる破片２点、下層から手捏の棒状の品１点が出土している。詳細は後述する。

51号土坑　D51（第116図）

48号土坑の南に掘られた土坑で、52号土坑、214～217号住居を切り、13号溝に切られる。南北に長い不整楕円形を呈し、南北径2.2ｍ、東西径１ｍ、深さ47cmである。

52号土坑　D52（第116図）

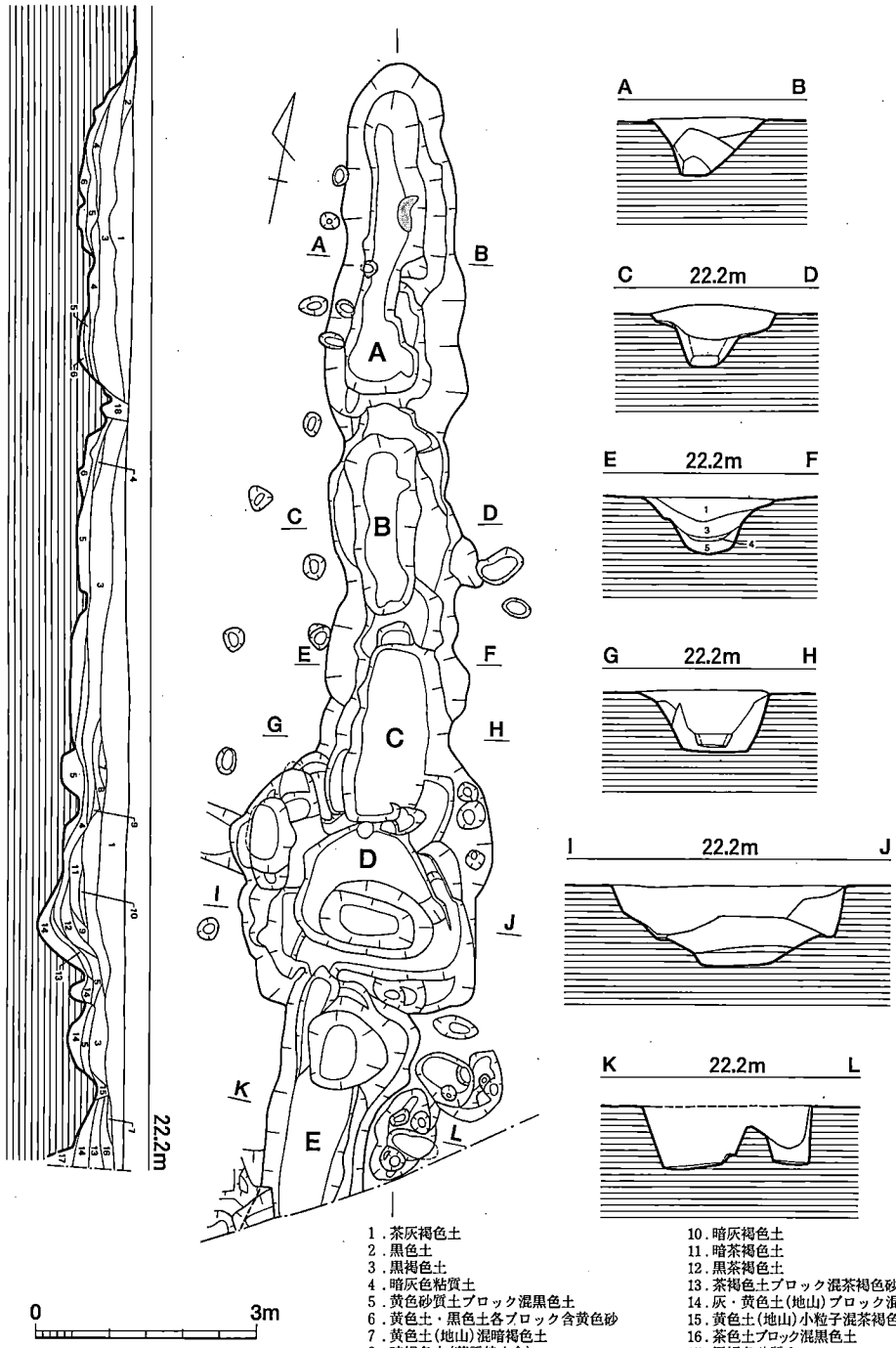
51号土坑に切られて、南に位置する。南北に長い不整楕円形を呈し、南北径2.25ｍ十、東西径0.9ｍ、深さ70cmである。

53号土坑　D53（図版43、第131図）

50号土坑の南東に位置する南北に長い土坑で、西の54号土坑を切っている。南部が調査区外に延び、現状南北長12.5ｍ、幅１～2.7ｍ、深さは80cm～120cm程である。倉庫棟を除き、直近には建物はないが、12～13ｍ東には昨年報告した建物群（95～100号）があり、北西10ｍには122号建物、北12ｍには昨年報告した109・110号建物がある。本土坑はこれらの建物との関係が考えられる。本土坑は、細かく見れば、五つの土坑（Ａ～Ｅ）が重複している。プランを検出した時点では、土坑の重複を示す切り合い関係を把握することができなかった。10cm程掘り下げた時点で、重複していることに気づき、各土坑ごとに遺物の取り上げを行った。よって、単に52号土坑として取り上げた遺物もあるため、今回は一括して報告している。

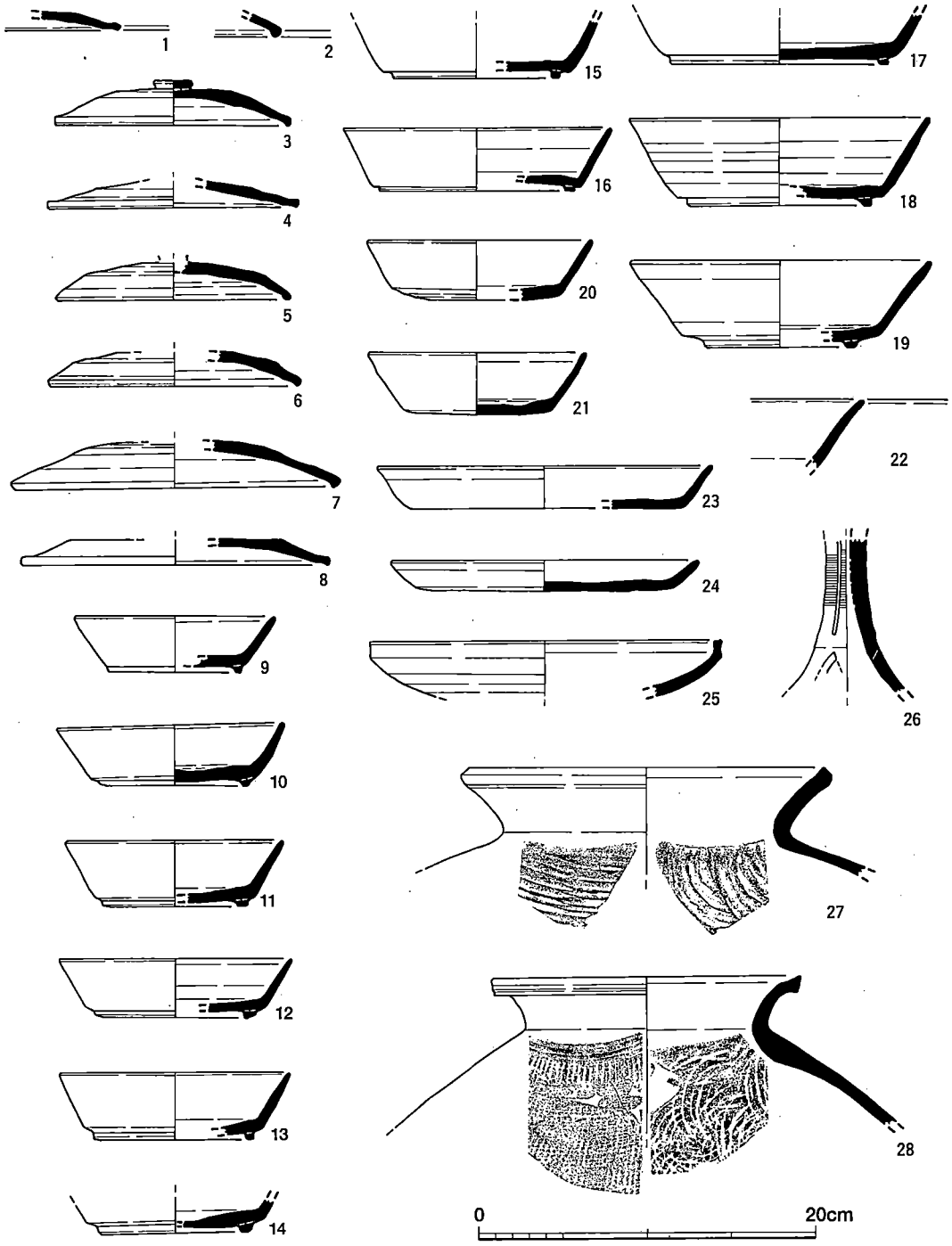
出土遺物

須恵器、土師器が多量に出土している。他に、転用硯、焼塩土器、土製品が出土している。

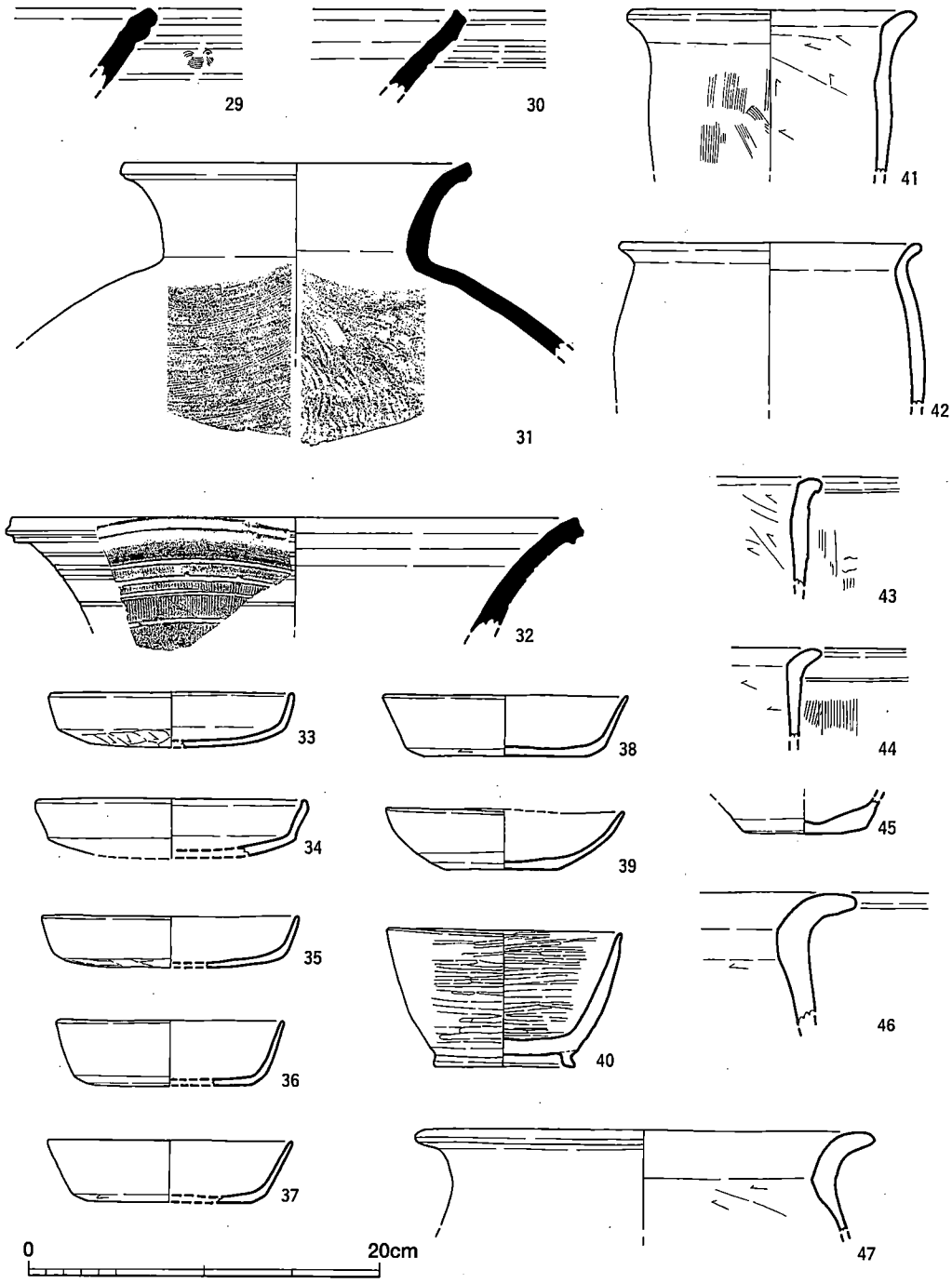


1．茶灰褐色土
2．黒色土
3．黒褐色土
4．暗灰色粘質土
5．黄色砂質土ブロック混黒色土
6．黄色土・黒色土各ブロック含黄色砂
7．黄色土(地山)混暗褐色土
8．暗褐色土(若干焼土含)
9．黒褐色粘質土
10．暗灰褐色土
11．暗茶褐色土
12．黒茶褐色土
13．茶褐色土ブロック混茶褐色砂質土
14．灰・黄色土(地山)ブロック混黒灰色砂質土
15．黄色土(地山)小粒子混茶褐色土
16．茶色土ブロック混黒色土
17．黒褐色砂質土
18．黄色土(地山)ブロック混黄褐色土

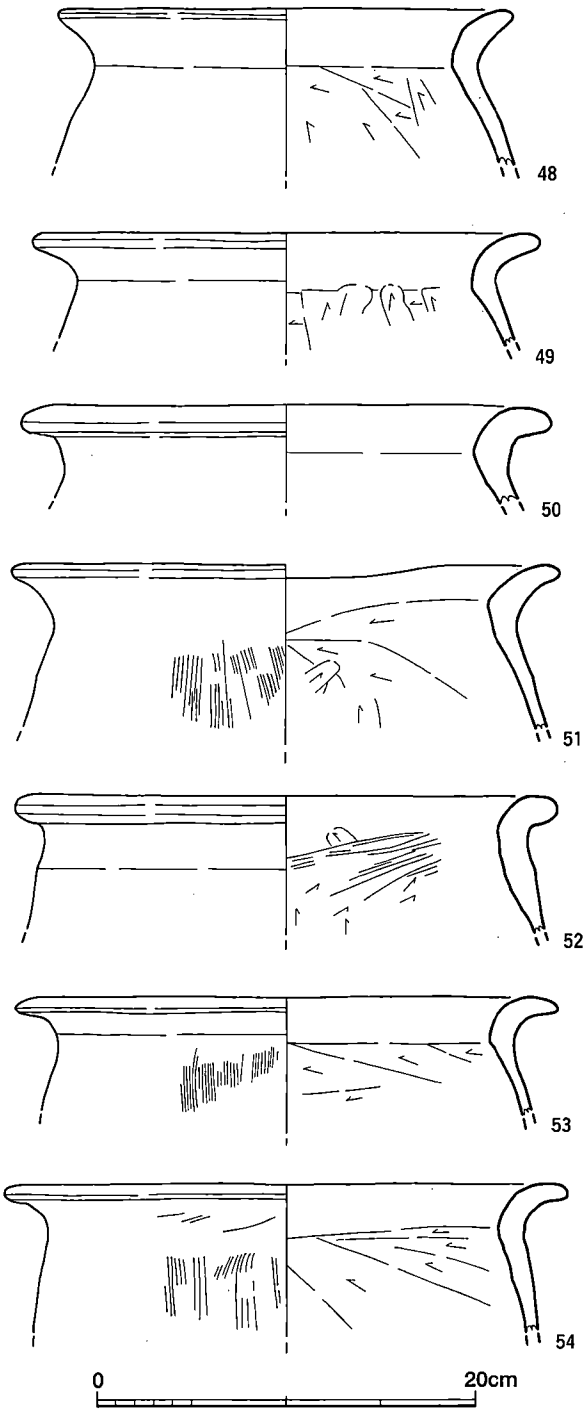
第131図　53号土坑実測図（1/100）



第132図　53号土坑出土土器実測図①（1/4）



第133図　53号土坑出土土器実測図②（1/4）



第134図　53号土坑出土土器実測図③（1/4）

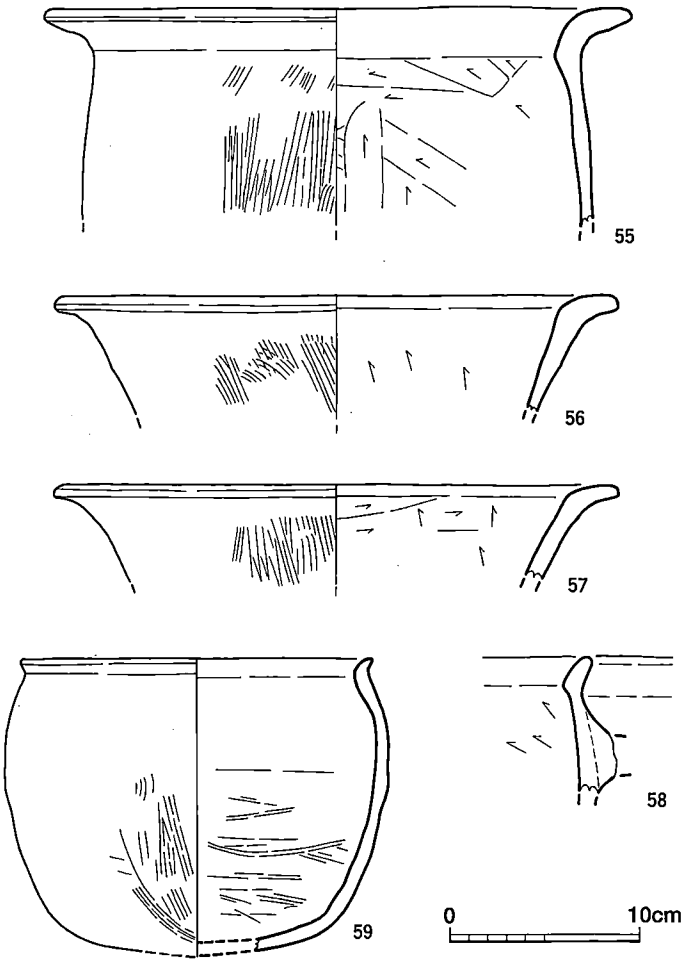
調査時には、B・Cの土坑をひとつのものとしていたが、須恵器、土師器を出土した土坑ごとに分けると以下のようになる。なお、上・下層の分層は床面近くのものを下層とし、それまでの出土品を上層として取り上げている。

・土坑A　(上層)6・19・39・55
　(下層)2・51
・土坑B・C　(上層)21・41・45・56
・土坑A～C　(上層)10・12・13・17・22・23・26・30・58
　(下層)4・38・41・43・54
・土坑D　(上層)5・7・9・24・49・50・57
　(下層)8・11・14・15・16・18・25・27・28・31・34・35・36・37・40・42・47・48・53・59
・土坑E　(上層)20・46・52
　(下層)3・32・33・44

※29は重複関係を把握する以前に取り上げたものである。

土　器（図版55・56、第132～135図）　須恵器は32点図示している。器種別に示すと、坏蓋(1～8)、坏身(9～22)、皿(23・24)、高坏(25・26)、甕(27～32)である。いずれも破片資料で、主要な物の復原口径・器高は、3；13.8cm・2.6cm、10；13.3cm・3.7cm、21；

12.8cm·3.6cm、19；17.8cm·5.1cm、24；18.2cm·1.8cm、25；20.8cm、28；18.2cm、40；32.2cmである。総じて焼成良好で、灰色～暗灰色を呈する。土師器は27点図示した。坏（33～39）、椀（40）、小型甕（41～45）、大型甕（46～55）、鉢（56・57）で、58は出土例が稀な甕、59は把手付の小型甕である。椀40は口径13.4cm、器高8cmで、内外面ともヘラミガキを施している。他の土師器とは異質で、質の高い製品である。焼成良好で淡橙色を呈する。残存状態の良い土師器の復原口径・器高は、33；13.8cm·3.1cm、38；13.8cm・3.4cm、39；13.4cm·3.5cm、41；16.6cm、59；29.2cm、56；30cm、58；18.8cm・15.5cmである。



第135図　53号土坑出土土器実測図④（1/4）

総じて焼成良好で濃淡の差はあるが橙褐色を基調とする。

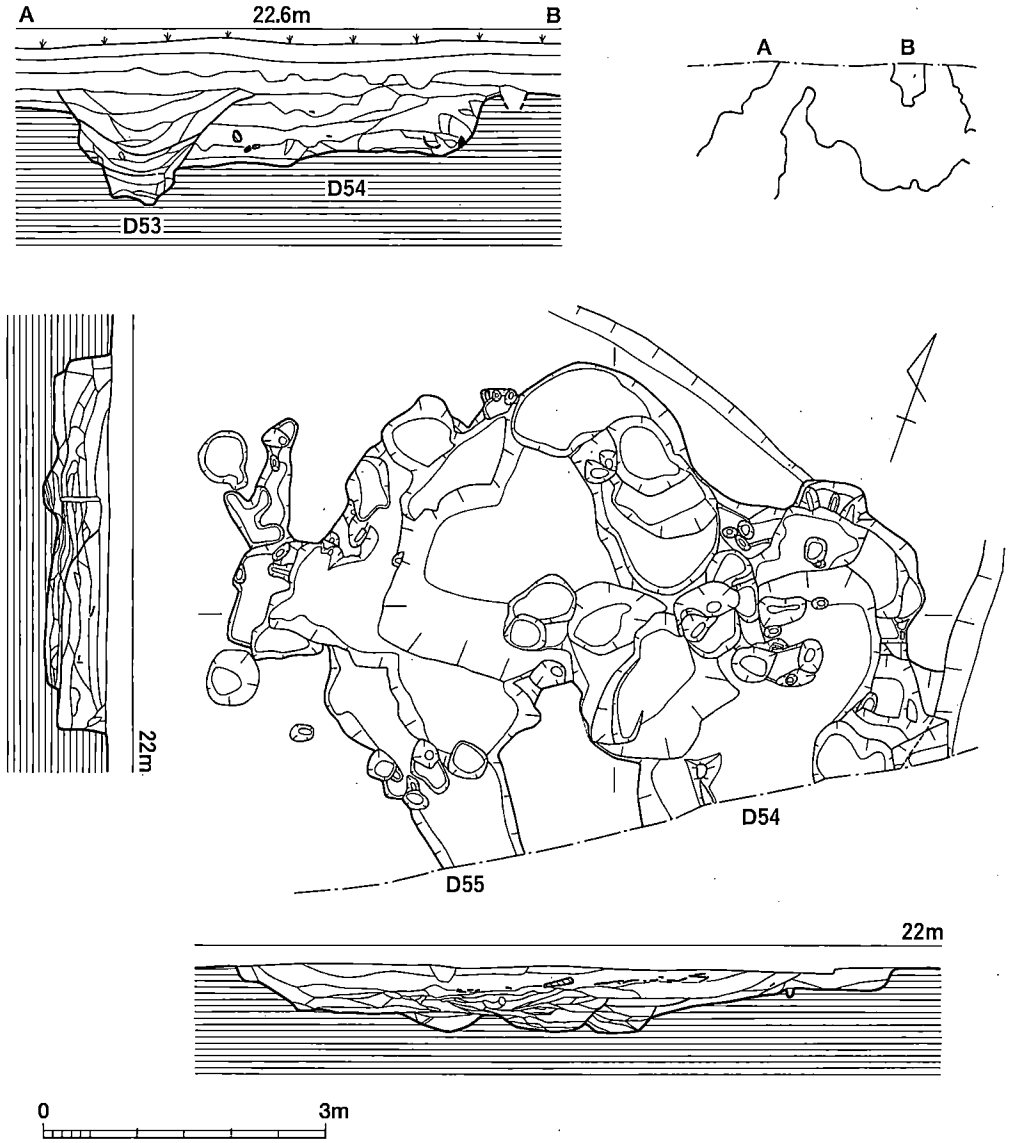
転用硯（図版64、第177図）　4点出土し、すべて坏蓋である。60はB・C上層から、61・62はD下層から、63はA上層から出土した。詳細は後述する。

焼塩土器（図版71、第184図）　5点出土している。詳細は後述する。

土製品（図版73、第186図）　上層で仏具かと思われる破片が1点出土している。

54号土坑　D54（図版44、第136図）

53号土坑の西に位置し、53号土坑に切られ、南西の55号土坑を切っている。本土坑もいくつかの土坑の集合体であるが、調査時点では、各土坑のプラン（切り合い関係）は把握できなかった。よって、ひとつの土坑として報告する。

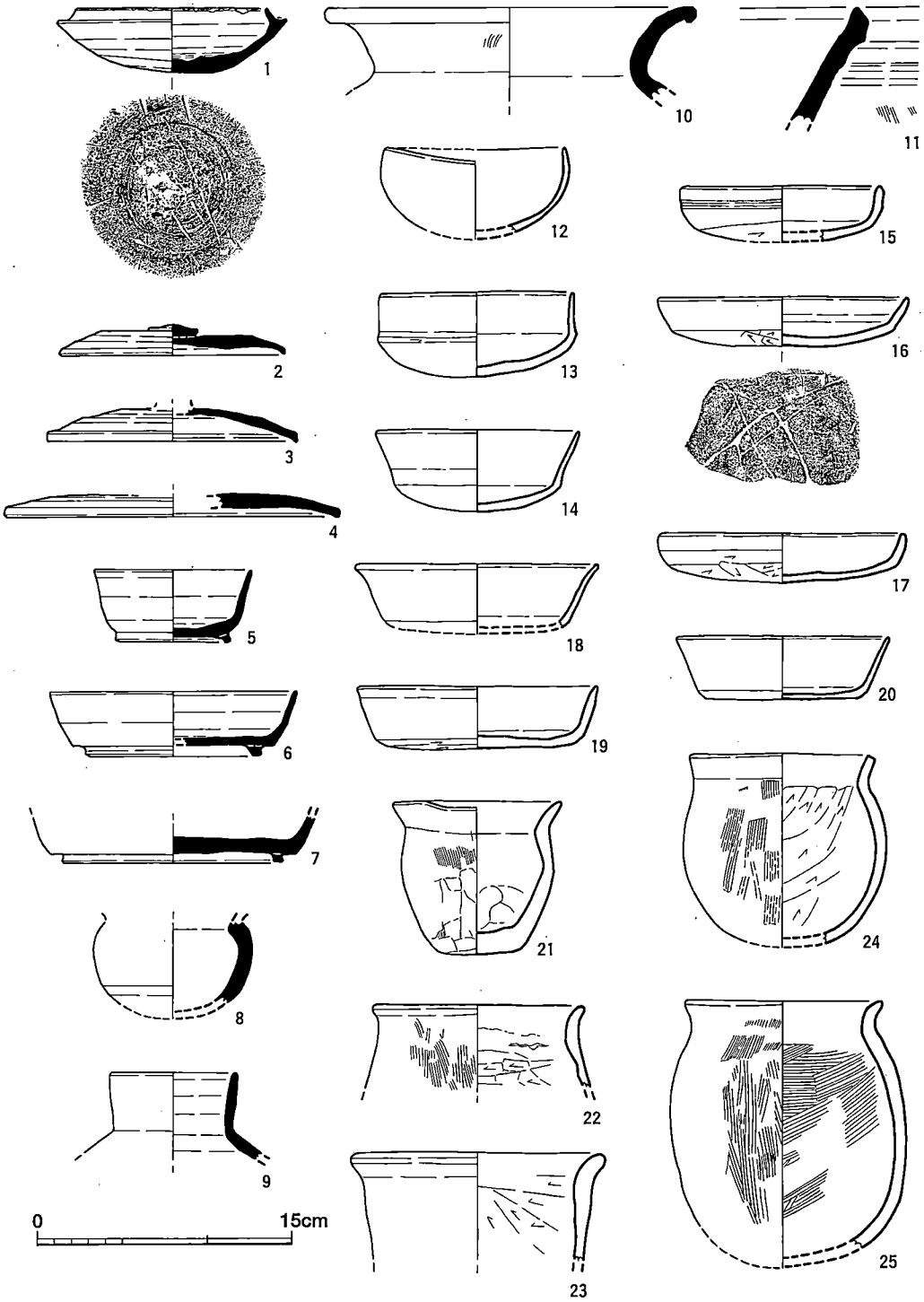


第136図　53～54号土坑土層図（上）、54・55号土坑実測図（1/80）

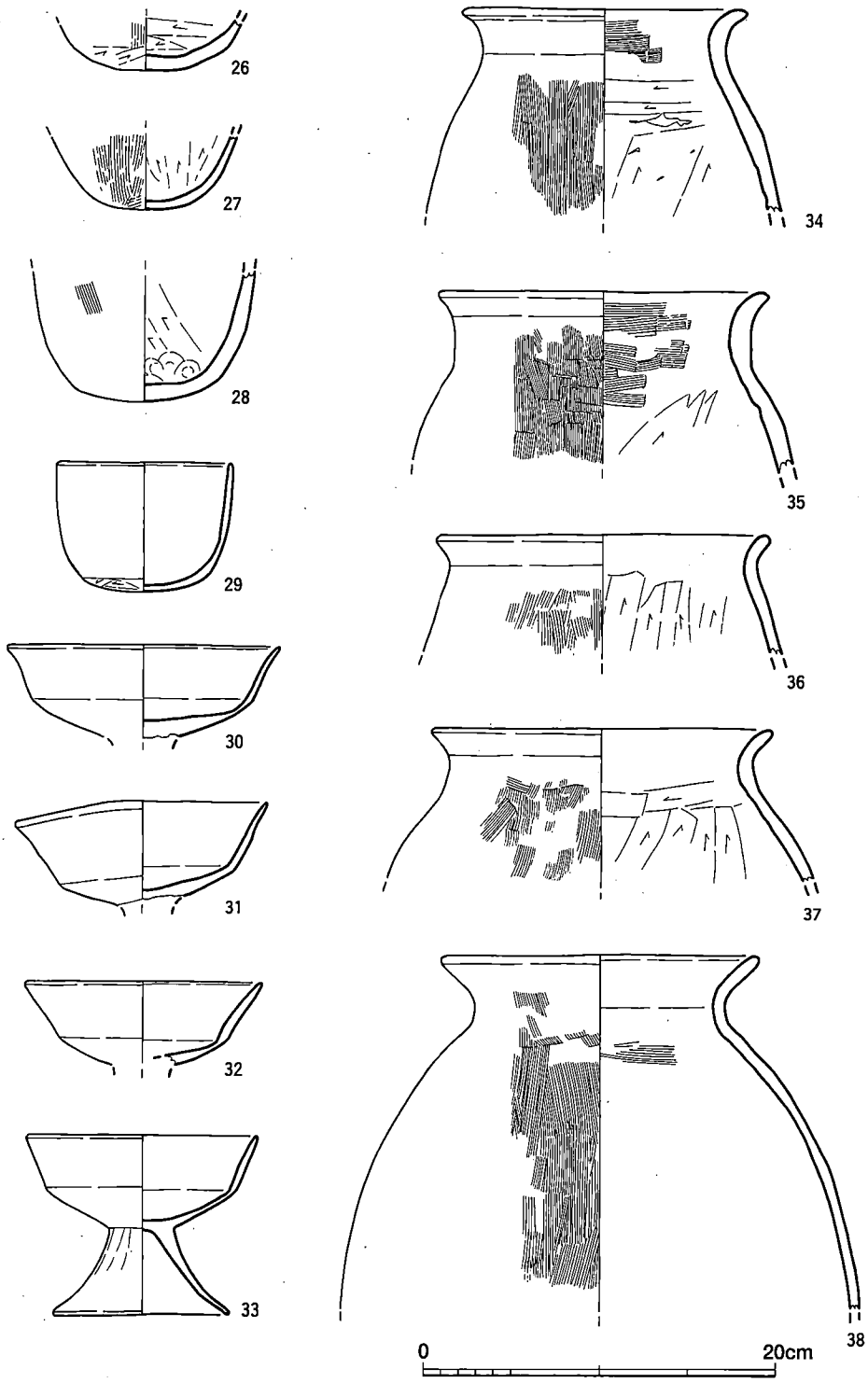
本土坑は東西に長い不整形を呈し、東西7.4m、南北5m程、深さ70cm程である。坑底には、ピットや少土坑の複雑な切り合いが見られる。土層断面では、53・53号土坑とも、遺構検出面より20cm程上層から掘り込まれている。また、坑底の土砂堆積状態は細かく分層でき、上層の自然堆積の状況とは対照的である。

出土遺物

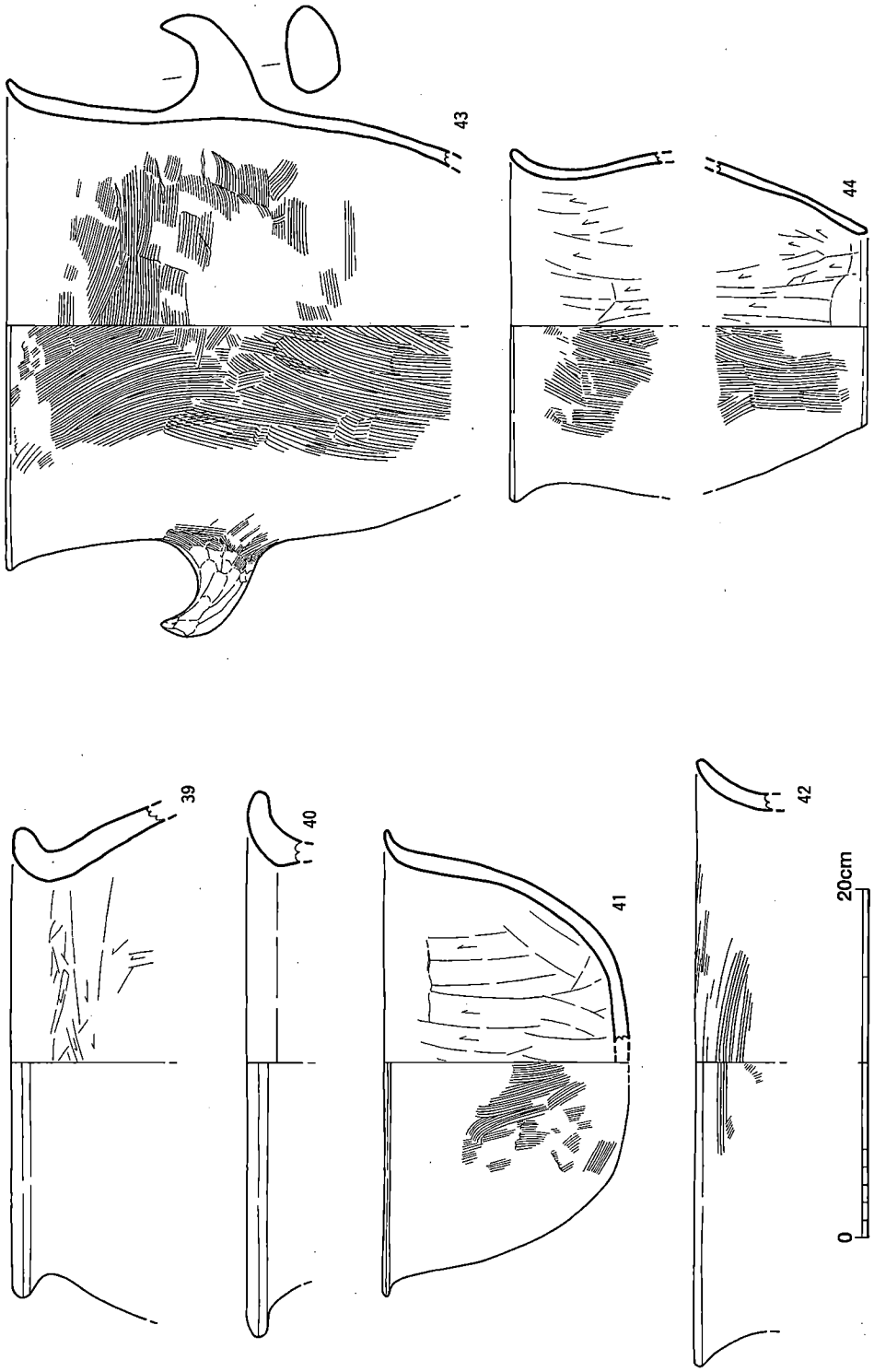
須恵器、土師器が多量に出土している。出土品には大きな時期差がある。土坑の集合体自体



第137図　54号土坑出土土器実測図①（1/4）



第138図　54号土坑出土土器実測図②（1/4）



第139図　54号土坑出土土器実測図③（1/4）

に時期差があるためである。他に焼塩土器が出土している。

土　器（図版57・58、第137～139図）　須恵器は11個体図示した。坏身（1・5～7）、坏蓋（2～4）、壷（8・9）、甕（10・11）である。1は6世紀末に近いころのもので、口唇部を細かく打ち欠いている。口径11.2cm、器高3.8cmのほぼ完形品である。残存状態の良い須恵器の器高・口径は、2；13.2cm・1.8cm、5；9.3cm・4.3cm、6；14.5cm・3.8cm、9；7.3cm、10；21.6cmである。総じて焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。土師器は33個体図示した。坏（12～20）、小型甕（21～28）、鉢（29・41）、高坏（30～33）、大型甕（34～40）、甑（42～44）である。残存状態の良い物の器高・口径は、13；11.4cm・4.9cm、14；12cm・4.8cm、19；14cm・3.7cm、16；14.6cm・2.9cm、17；14.1cm・2.9cm、20；12.4cm・3.7cm、24；10cm・11.3cm、25；11.7cm・15.6cm、29；9.6cm・7.2cm、33；13cm・10.1cm、41；26.4cm・14cmである。総じて焼成良好で、橙褐色を基調とするが、カマドで使用された22・26・27・28はこげ茶色～暗褐色を呈する。

焼塩土器（図版71、第184図）　2点出土している。詳細は後述する。

55号土坑　D55（第140図）

54号土坑の南西部に位置し、同土坑に北東側を切られている。南北長3m十、幅1m程、深さ15cm程である。図示する程の出土品はない。

56号土坑　D56（図版45、第140図）

122号建物の南東2～3mの位置に掘り込まれ、10号溝に切られている。南北に長軸をおく楕円形のプランを呈し、南北径2.8m、東西幅2.2m、深さ1mである。土砂の堆積状態は、大きく二層に分層した下層は細かく別れるが、上層は大雑把である。

出土遺物

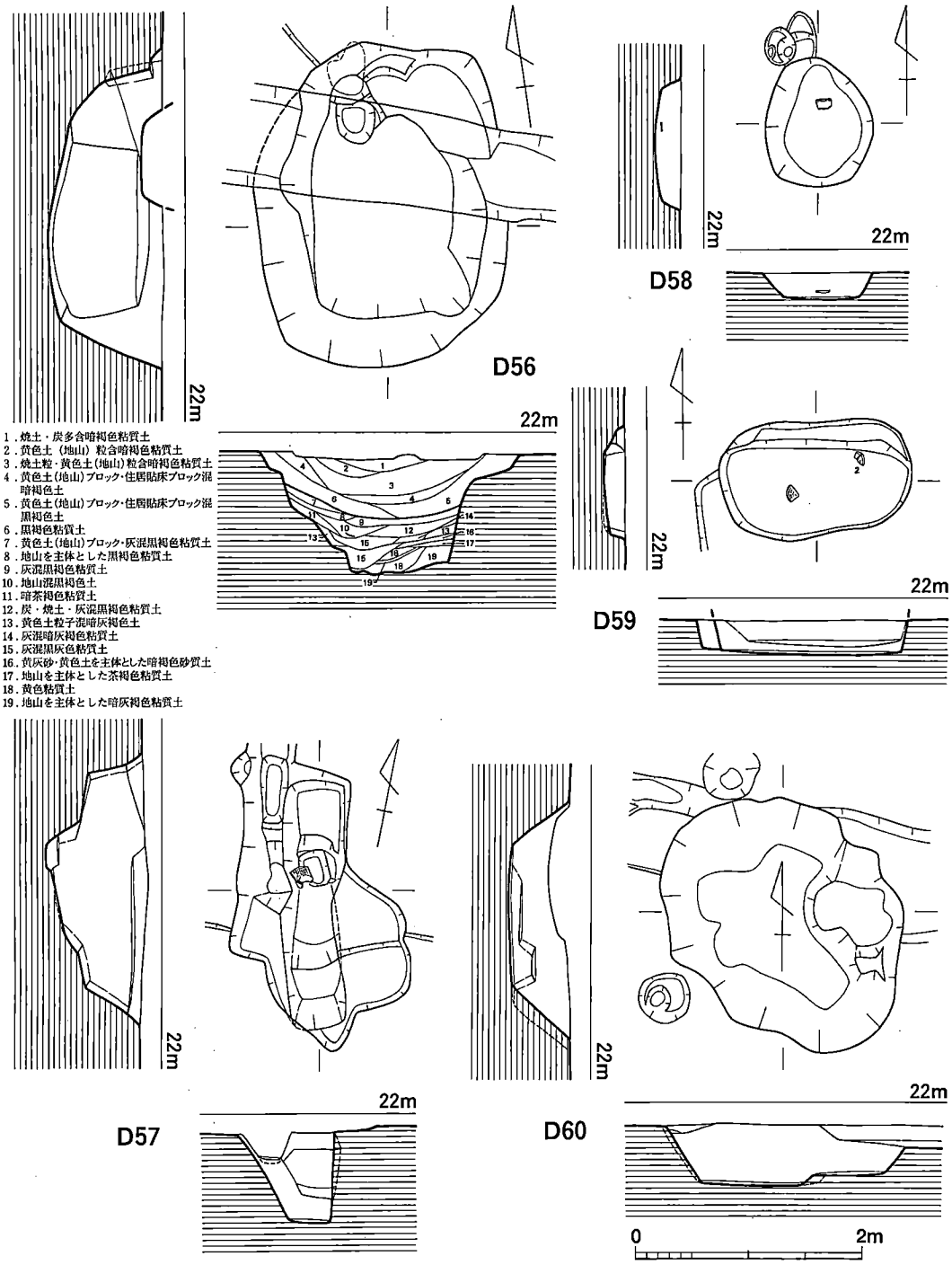
須恵器、土師器が出土している。4・8・13は下層から、他は上層から出土した。他に焼塩土器が出土している。

土　器（図版58、第141図）　須恵器は、坏蓋（1・2）、坏身（2～6）、脚台（7）の7点を図示した。口径・器高は、2；13.8cm・1.8cm、3；18cm・5.7cm、4；19cm・6.5cm、5；14.4cm・3.9cm、6；14.4cm・3.5cmである。焼成良好で灰色を基調とするが、3・4は茶灰色を呈する。土師器は、坏（8～9）、甕（11～14）、甑（15・16）の10点を図示した。口径・器高は、10；14.2cm・3.8cm、13；20.8cm、15；32.2cmに復原される。焼成良好で、橙褐色～黄褐色を呈する。

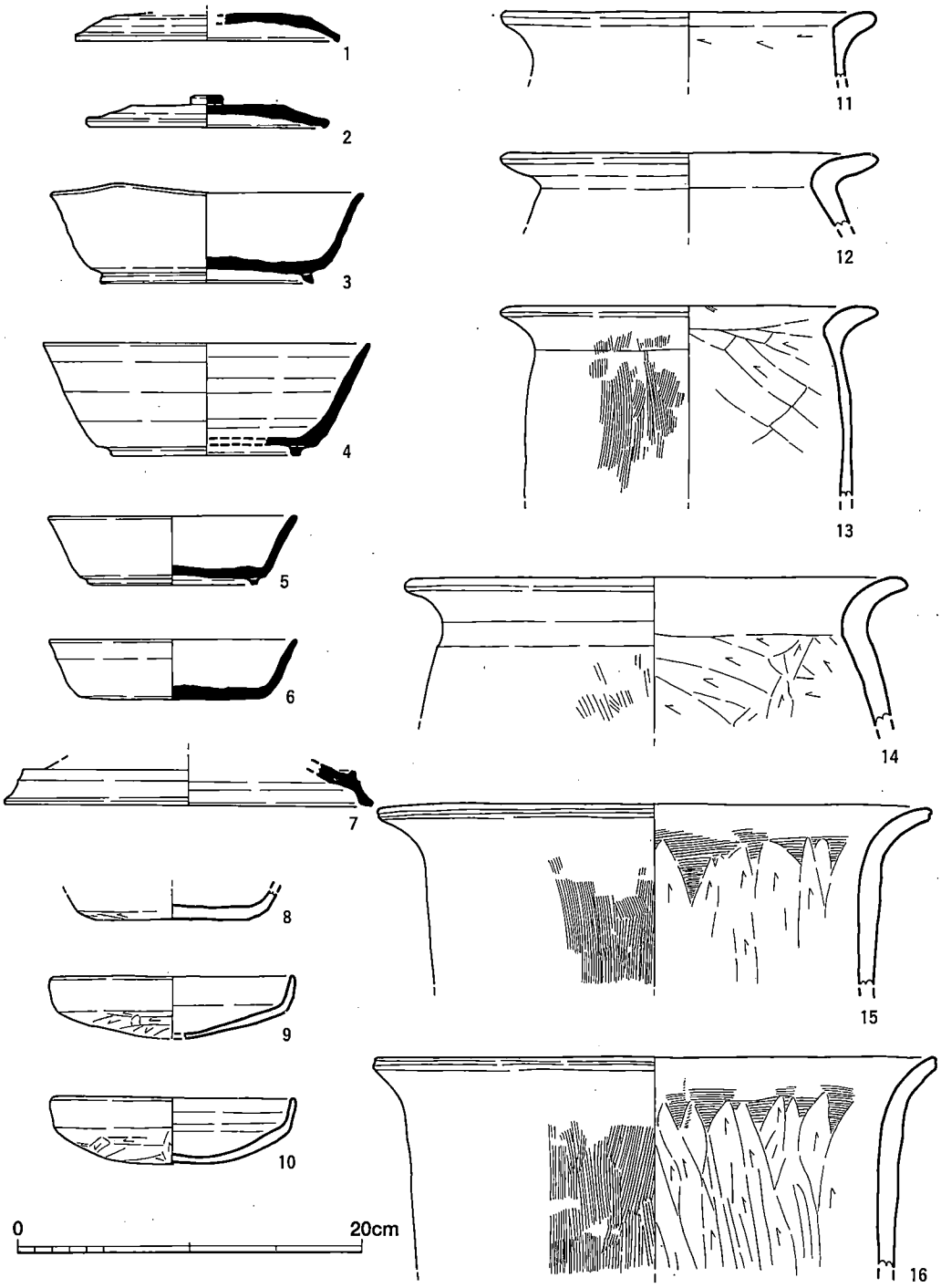
焼塩土器（図版71、第184図）　1点出土している。詳細は後述する。

57号土坑　D57（第140図）

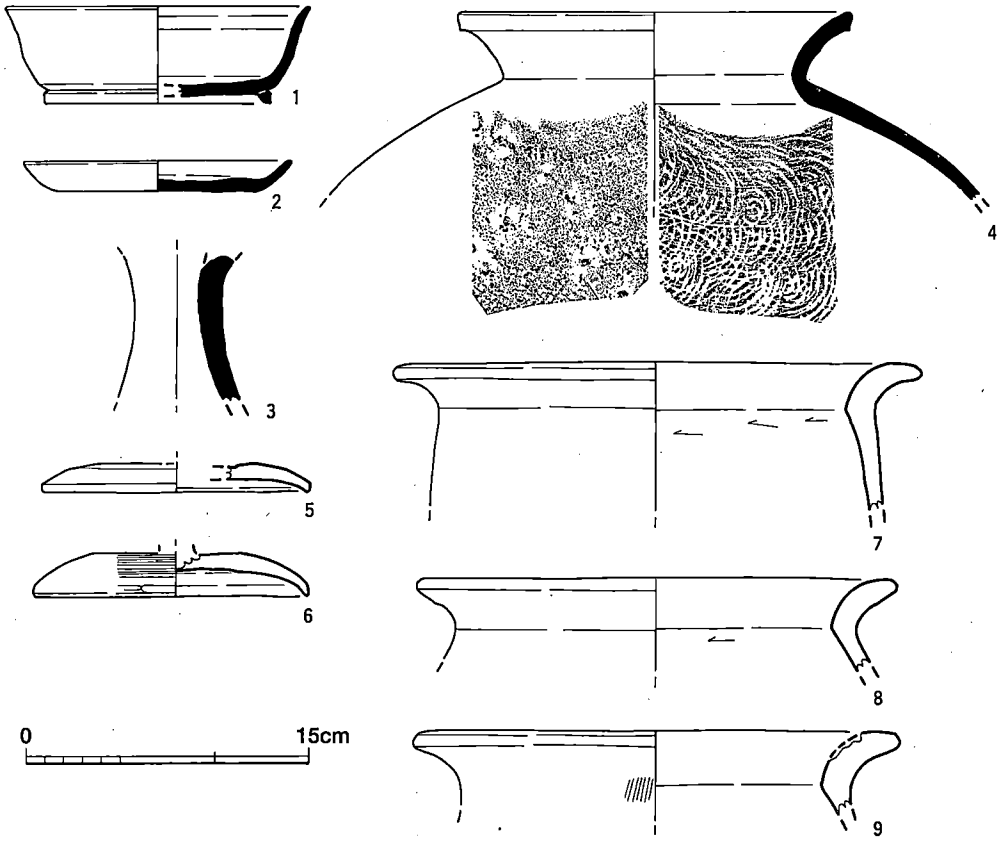
122号建物のすぐ東に位置する。複数の土坑が切り合っており、プランは不整形である。南



第140図　56～60号土坑実測図（1/60）



第141図　56号土坑出土土器実測図（1/4）



第142図　57号土坑出土土器実測図（1/4）

北長2.4m、東西幅1m程、深さ90cm程である。

出土遺物

須恵器、土師器が出土している。出土量は比較的少ない。他に焼塩土器が出土している。

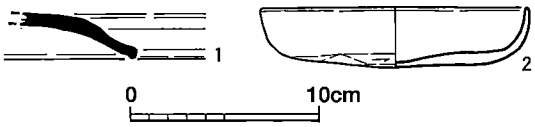
土　器（図版58、第142図）　須恵器は、坏身（1）、皿（2）、高坏（3）、甕（4）の4個体を図示した。口径・器高は、1；16.4cm・5.1cm、2；13.8cm・1.6cm、4；20.4cmである。焼成良好で灰色～紫灰色を呈する。土師器は、坏蓋（5・6）、甕（7～9）の5点を図示した。6は撮みを失うが、口径14.5cmに復原され、外面を丁寧にヘラミガキしている。焼成良好で淡黄茶色を呈する。甕は口径23～25cmで、橙褐色～茶褐色を呈する。

焼塩土器（図版71、第184図）　6点出土している。詳細は後述する。

58号土坑　D58（第140図）

121号建物の西にある。楕円形のプランで、南北長1.15m、東西幅1m程、深さ20cmである。

出土遺物



第143図　58・59号土坑出土土器実測図（1/4）

須恵器、土師器が出土している。出土量は少ない。

土　器（第143図）　1は須恵器の坏蓋片である。2は口径14.4cm、器高3.1cmを測る土師器皿である。焼成良好で橙色を呈する。

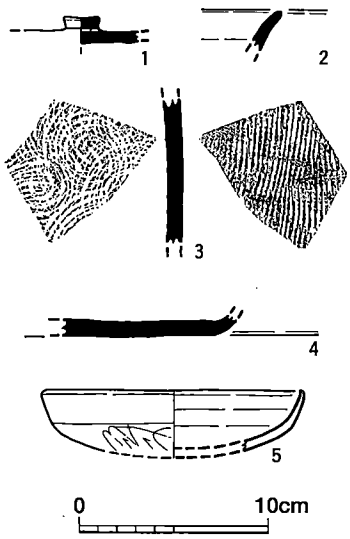
59号土坑　D59（第140図）

120号建物の南1.5mの位置にあり、218号住居の竪穴部を切っている。プランは楕円形で、東西長1.7m、南北幅80cm、深さ30cm程である。

出土遺物

須恵器、土師器が出土している。出土量は少ない。

土　器（第143図）　2は口径14.4cm、器高3.1cmを測る土師器皿である。焼成良好で橙色を呈する。



第144図　60号土坑出土土器実測図（1/4）

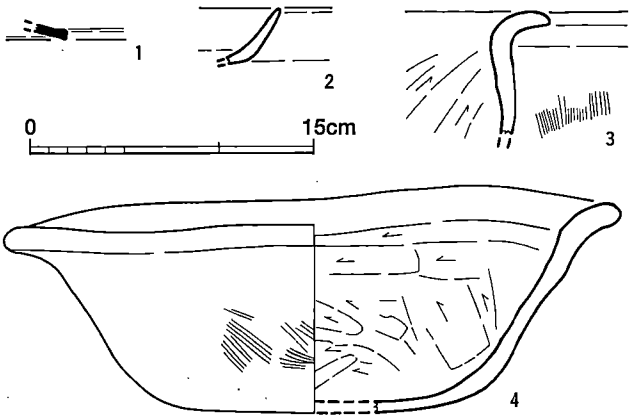
60号土坑　D60（第140図）

121号建物の南1m程の位置にある。不整楕円形のプランを呈する。長軸2.5m、短軸1.8m、深さ50cm程である。

出土遺物

土師器及び須恵器が出土している。出土量は比較的すくない。

土　器（第144図）　須恵器はいずれも小片で、1は坏蓋、2は坏身か皿、3は甕、4は皿状のものの底部である。5は口径14cm、器高3.5cm程に復原される土師器の坏である。



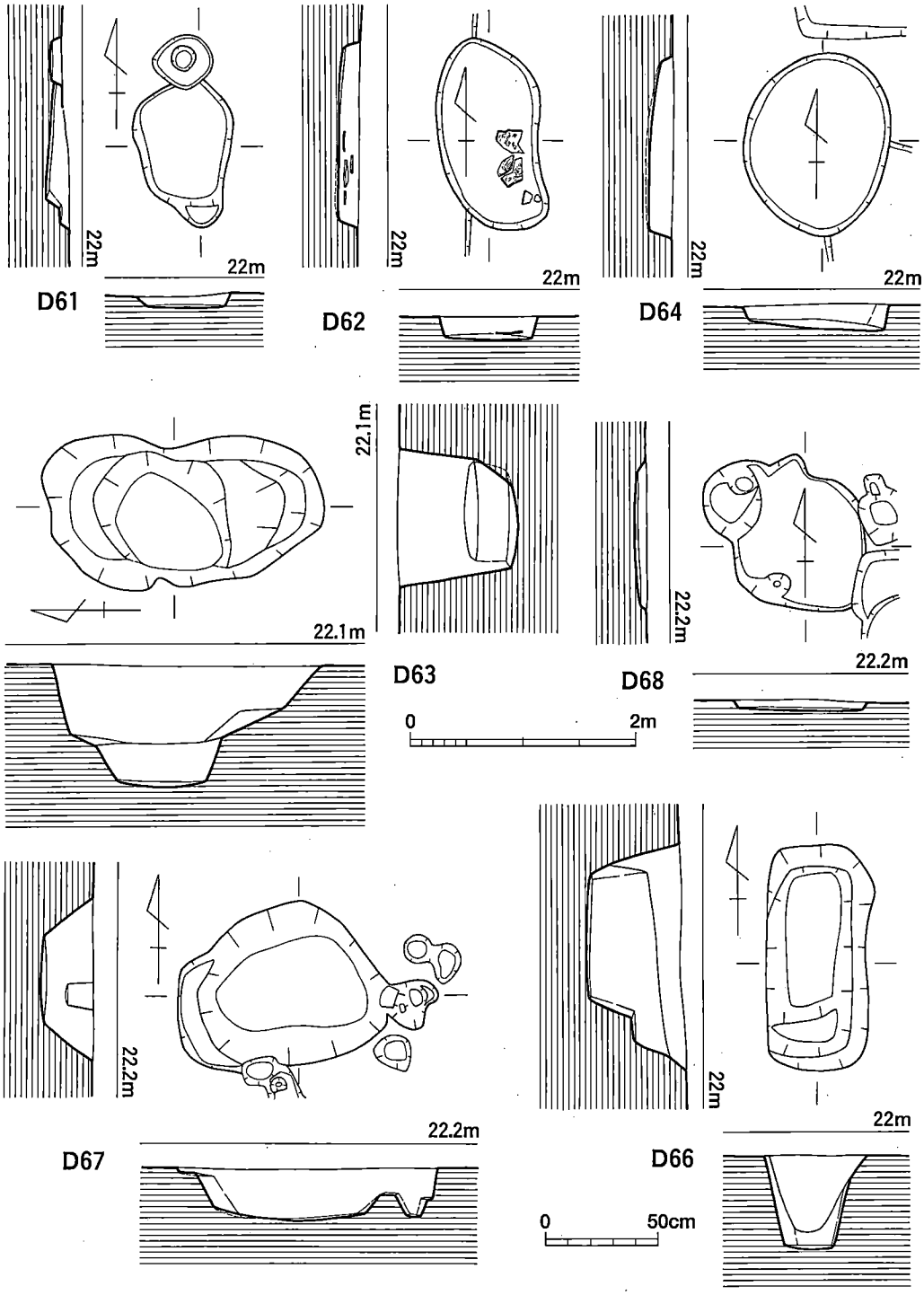
第145図　61号土坑出土土器実測図（1/4）

61号土坑　D61（第146図）

121号建物の南3m程に位置する小規模な土坑である。南北に長い楕円形を呈する。長さ1.1m、東西幅80cm、深さ20cm程である。

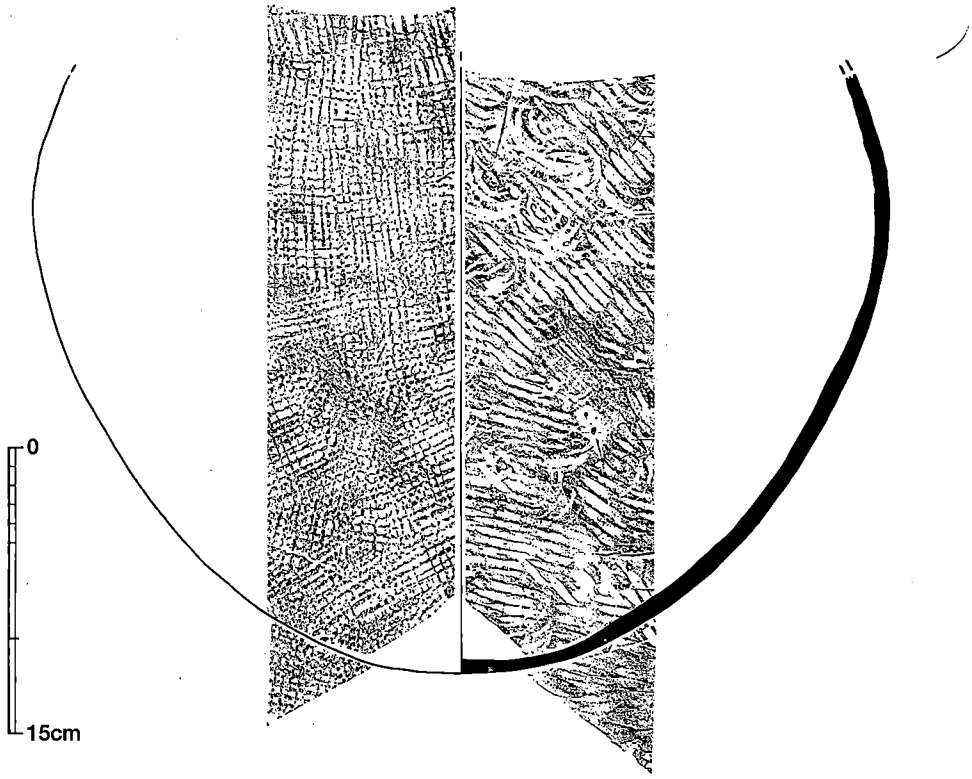
出土遺物

少量ながら、須恵器、土師器が出土している。



第146図　61～64・66～68号土坑実測図（1/60、66号は1/30）

土　器（図版58、第145図）　1は須恵器の坏蓋片である。2以下は土師器で、2は坏、3は甕片である。4は鉢で、口径31.6cm、器高11.8cmに復原される。焼成良好で、2は橙褐色、3・4は暗茶褐色を呈する。



第147図　62号土坑出土土器実測図（1/4）

62号土坑　D62（第146図）

122号建物の南7m程の位置にあり、228号住居の竪穴部を切っている。南北に長い楕円形を呈し、南北長1.7m、東西幅95cm、深さ20cm程である。

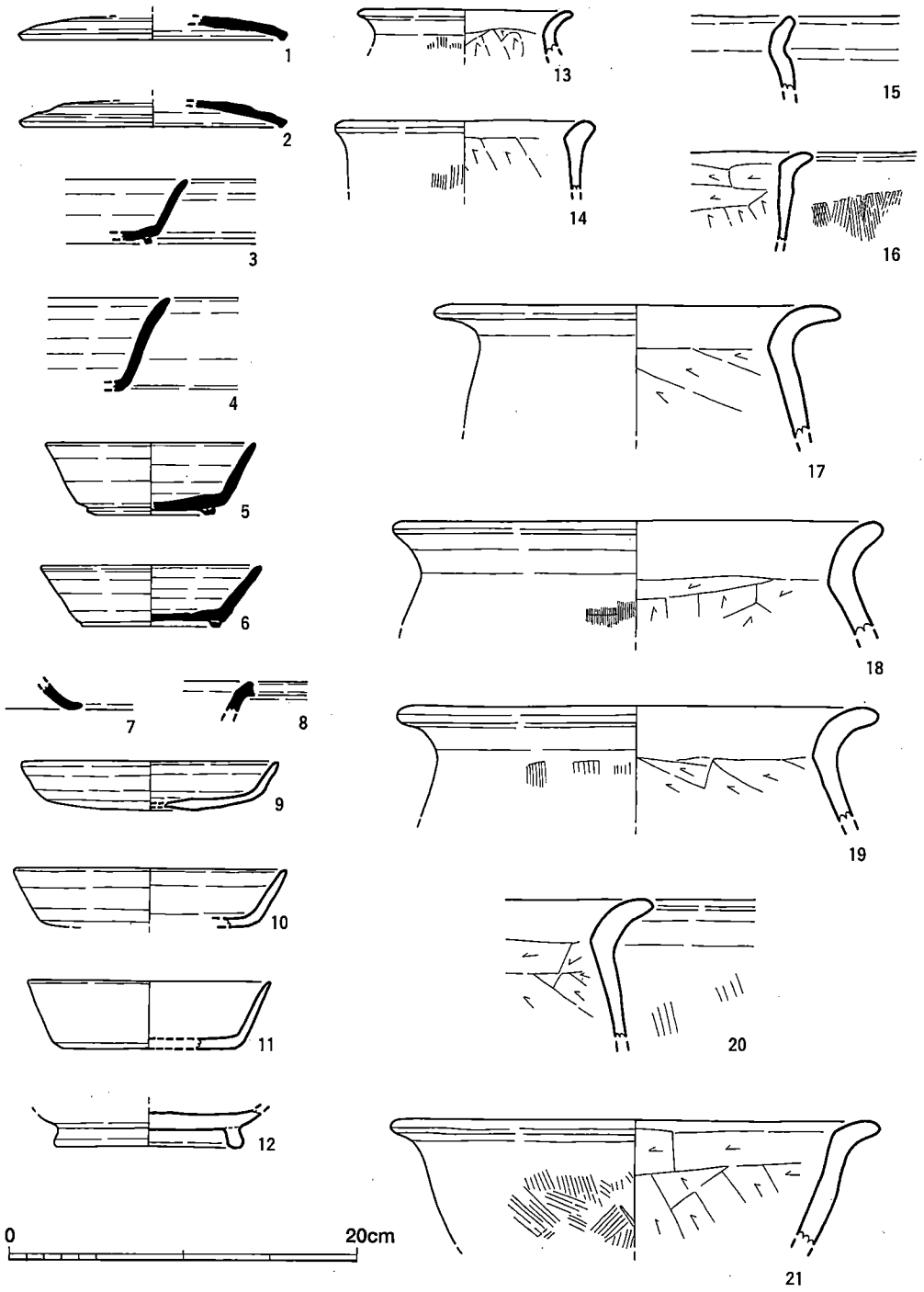
出土遺物

少量ながら、須恵器、土師器が出土している。図示できるのは、底面から出土した須恵器の甕1点である。

土　器（図版59、第147図）　胴部最大径45.4cm、現存高31.3cmの甕である。焼成良好で、内面は灰色、外面は淡灰紫色を呈する。

63号土坑　D63（図版45、第146図）

130号建物の南2.5mの位置にある。南北に長い楕円形を呈し、底面の中央は一段深くなって



第148図　63号土坑出土土器実測図（1/4）

いる。規模は南北長2.4m、東西幅1.3m、深さは一段目までが70cm、二段目までが1m強である。

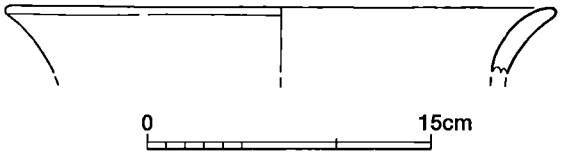
出土遺物

須恵器、土師器が出土している。他に、刻印土器、焼塩土器が出土している。

土　器（図版59、第148図）　須恵器を8個体図示した。坏蓋（1・2）、坏身（3～6）、高坏脚裾部（7）、甕（8）である。残存状態の良い物の口径・器高は、5；12.1cm・4.1cm、6；12.7cm・3.5cmである。焼成良好で灰色を基調とし、1・8は緑灰色、7は暗灰色を呈する。土師器は13個体図示した。坏(9～12)、小型甕(13～16)、大型甕(18～20)、鉢(21)である。12は内底面及び高台内側の外面に渦巻き状のヘラミガキを施している。極めて丁寧な作りであり、焼成良好で淡橙褐色を呈するが、外面は一部黒色を呈する。その他の坏は極小片であり、焼成良好で橙褐色を呈する。小型甕は支脚に使用されることが多い。13は火を受けて変色し、内面は暗灰色～黄灰色を呈し、外面は黄灰色を呈する。大型甕は火を受けた痕跡はなく、橙褐色を呈する。鉢21は、口径28.8cm、現存高7.2cmに復原される。焼成良好で橙褐色を呈する。

64号土坑　D64（第146図）

131号建物(倉庫棟)の東3m、121・133号建物の丁度中間に位置する。237号住居竪穴部の東壁を切る。南北に長い楕円形のプランである。南北長1.6m、東西幅1.3m、深さ30cm程である。



第149図　64号土坑出土土器実測図（1/4）

出土遺物

図示できる遺物は極少量である。

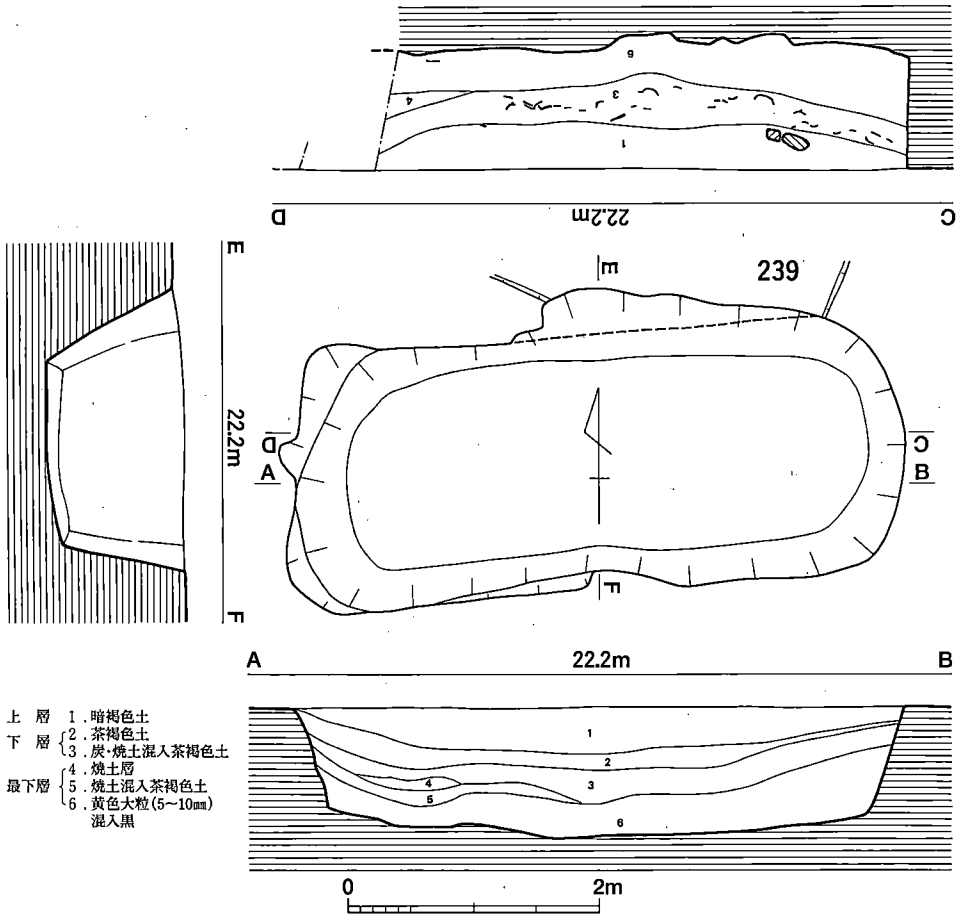
土　器（第149図）　土師器の甑の小片で、復原口径29cm弱である。焼成良好で白黄茶色を呈する。

65号土坑　D65（図版45、第150図）

133号建物の北5m程の位置に、ほぼ東西方向に掘られた土坑で、239号住居の竪穴部を切る。プランは東西に長い隅円長方形を呈する。東西長4.8m、南北幅2m程、深さ1m強である。土砂の堆積状態は、細かく分層できる状態ではなかった。

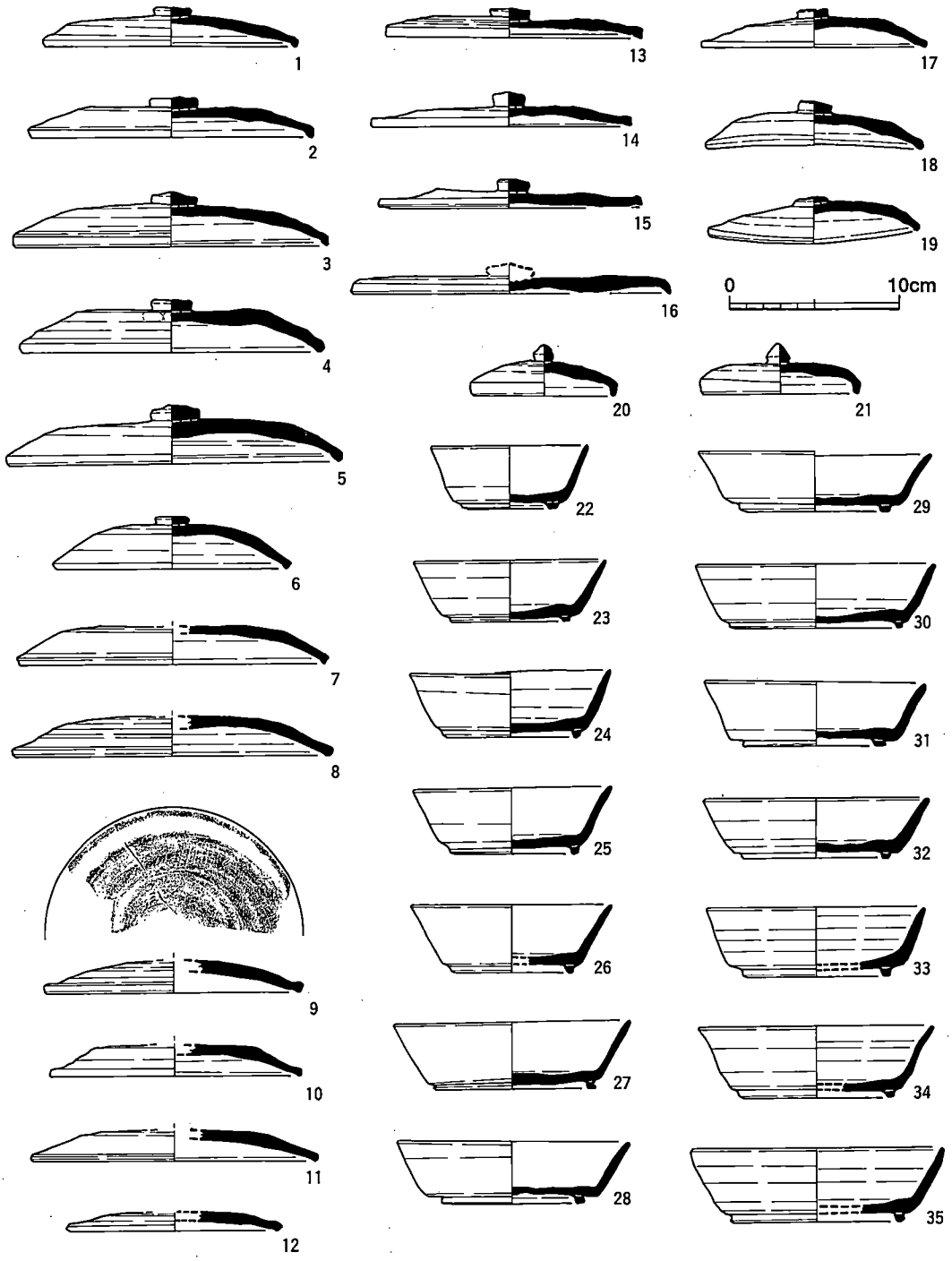
出土遺物

多量の須恵器、土師器が多量に出土し、その他には、転用硯、焼塩土器、鉄製品が出土している。本土坑の出土土器のなかに占める須恵器の割合は、他の土坑よりも高い。図示した土器は全体で84個体で、その内、須恵器は61個体である。須恵器の中でも飲食器の占める比率が高い。土師器も図示可能な出土品の内、飲食器がほぼ半数を占める。また、須恵器甕の出土量が多いことも注目に値する。この土坑の出土品は、良質な飲食器等を本土坑に廃棄できる社会的身分の高い人物の存在を暗示している。

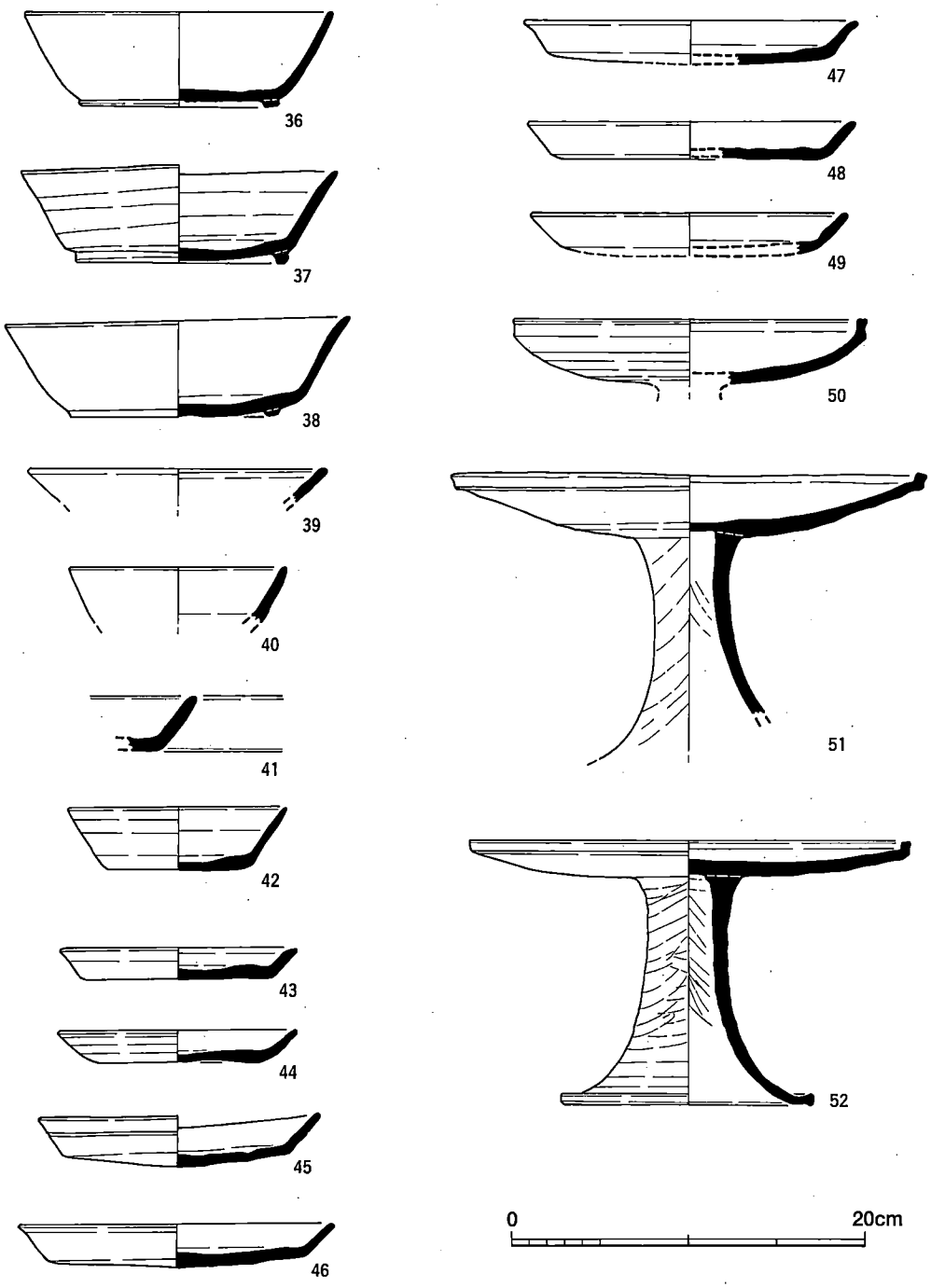


第150図 65号土坑実測図 (1/60)

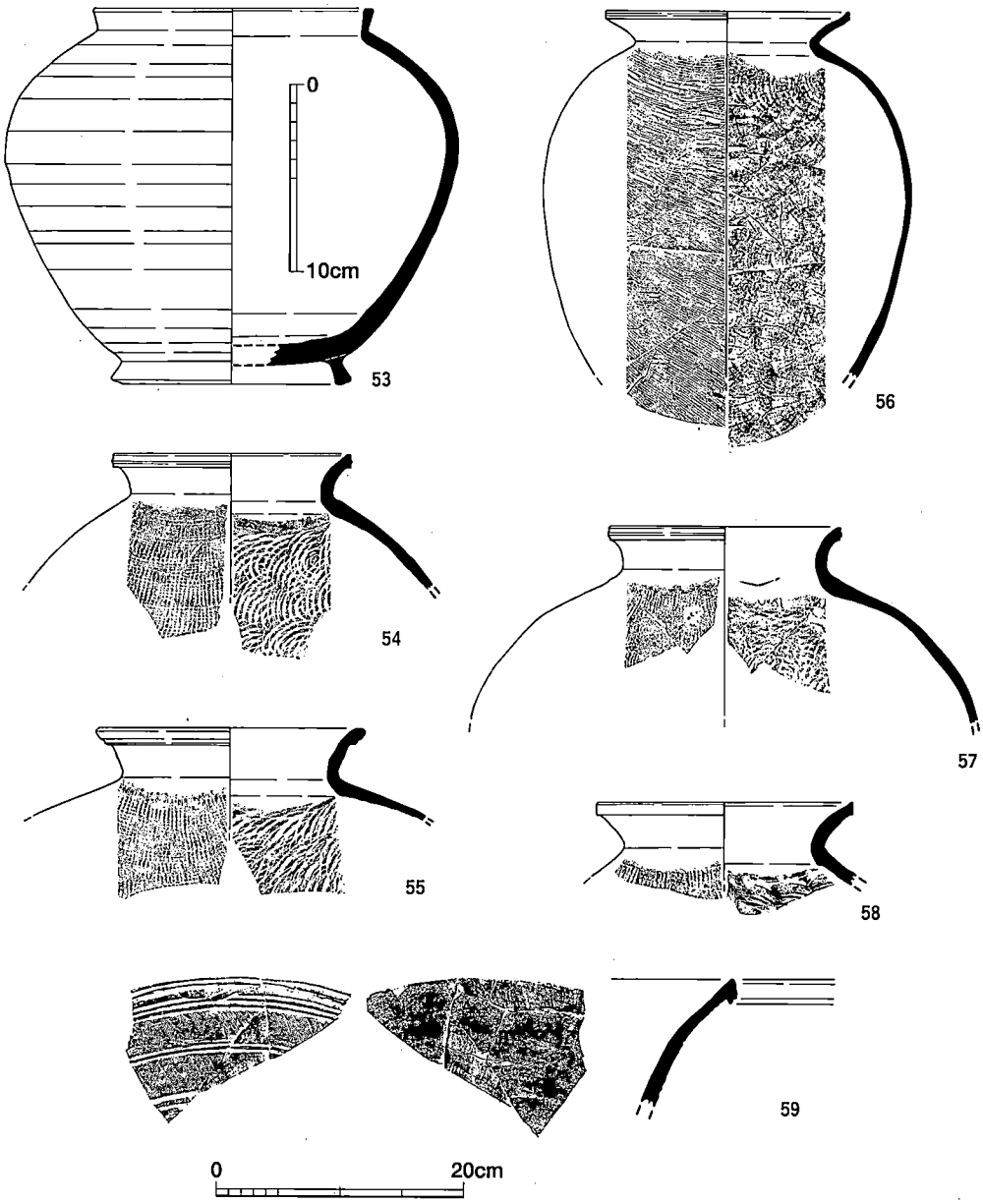
土 器 (図版59～61、第151～156図) 図示した須恵器は61個体である。坏蓋(1～19)、用途不明の蓋(20・21)、坏身(22～42)、皿(43～49・71)、高坏(50～52)、短頸壷(30)、甕(31～60)である。各器種ごとに残存状態の良い物の口径・器高等を以下列挙する。坏蓋は、1;19cm・2.8cm、5;19.7cm・3.5cm、15;15.6cm・1.7cm、16;19cm・1.7cm、18;12.8cm・2.8cmである。用途不明の蓋は20;8.4cm・3cm、21;9.4cm・3cmである。これらは焼成良好で、灰色を基調とする。坏身は、22;9.4cm・3.7cm、27;14cm・4cm、38;19.5cm・4.4cm、42;12.2cm・3.5cmである。皿は、43;13.5cm・1.9cm、46;17.6cm・2.5cmである。これらは、焼成良好で、灰色を基調とする。高坏52は口径25cm、器高15cmに復原される。高坏も焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。短頸壷53は口径15cm、器高20cm程に復原される。焼成は良好で、内面は淡橙色、外面は灰褐色を呈する。甕は大小の物が出土している。大甕60は口径51cm、胴部最大径73.8cm、器高89cm程である。焼成良好で灰色を基調とするが、部分的に青灰色～暗灰色を呈する。他の



第151図　65号土坑出土土器実測図①（1/4）

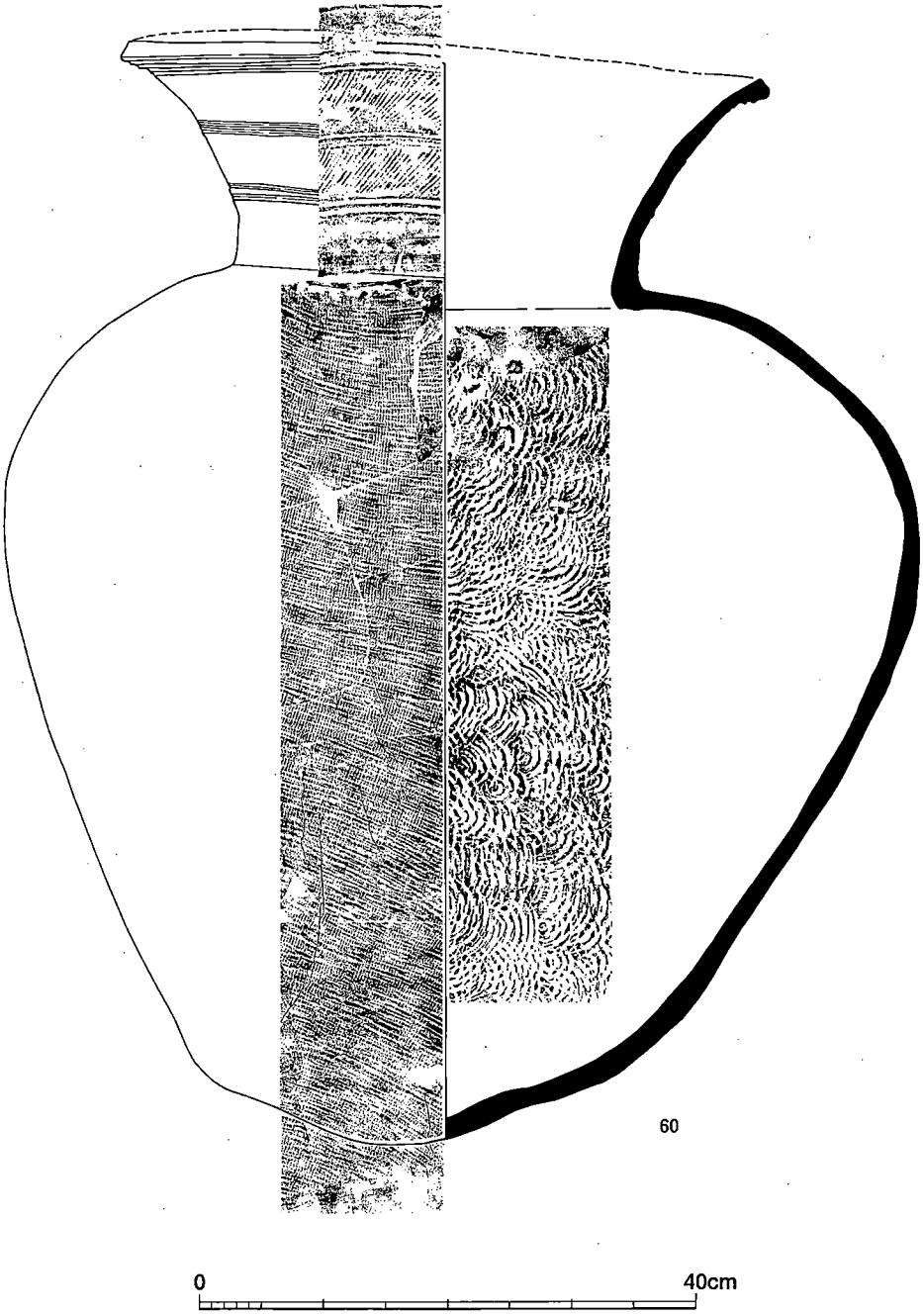


第152図　65号土坑出土土器実測図②（1/4）

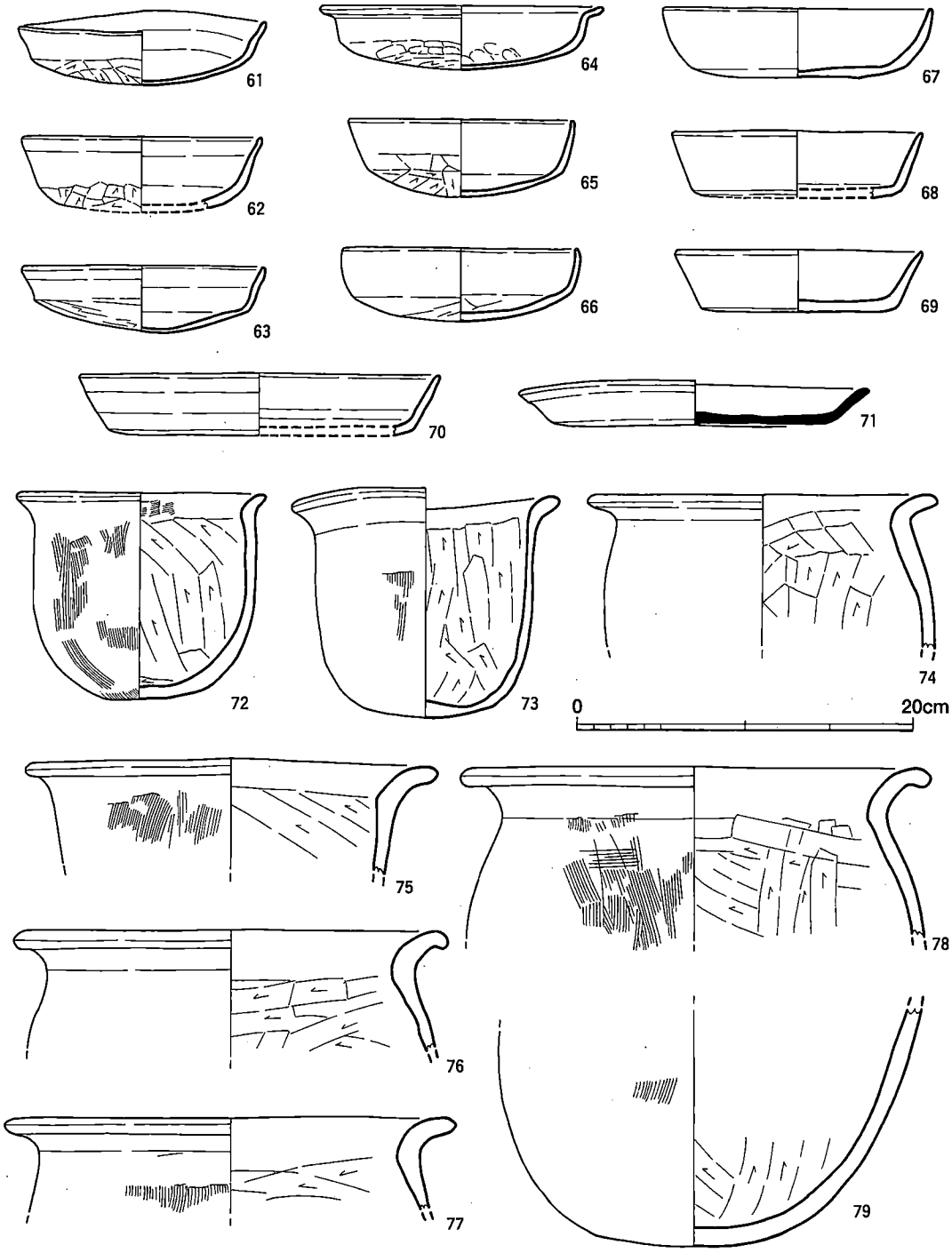


第153図　65号土坑出土土器実測図③（1/6、53；1/4）

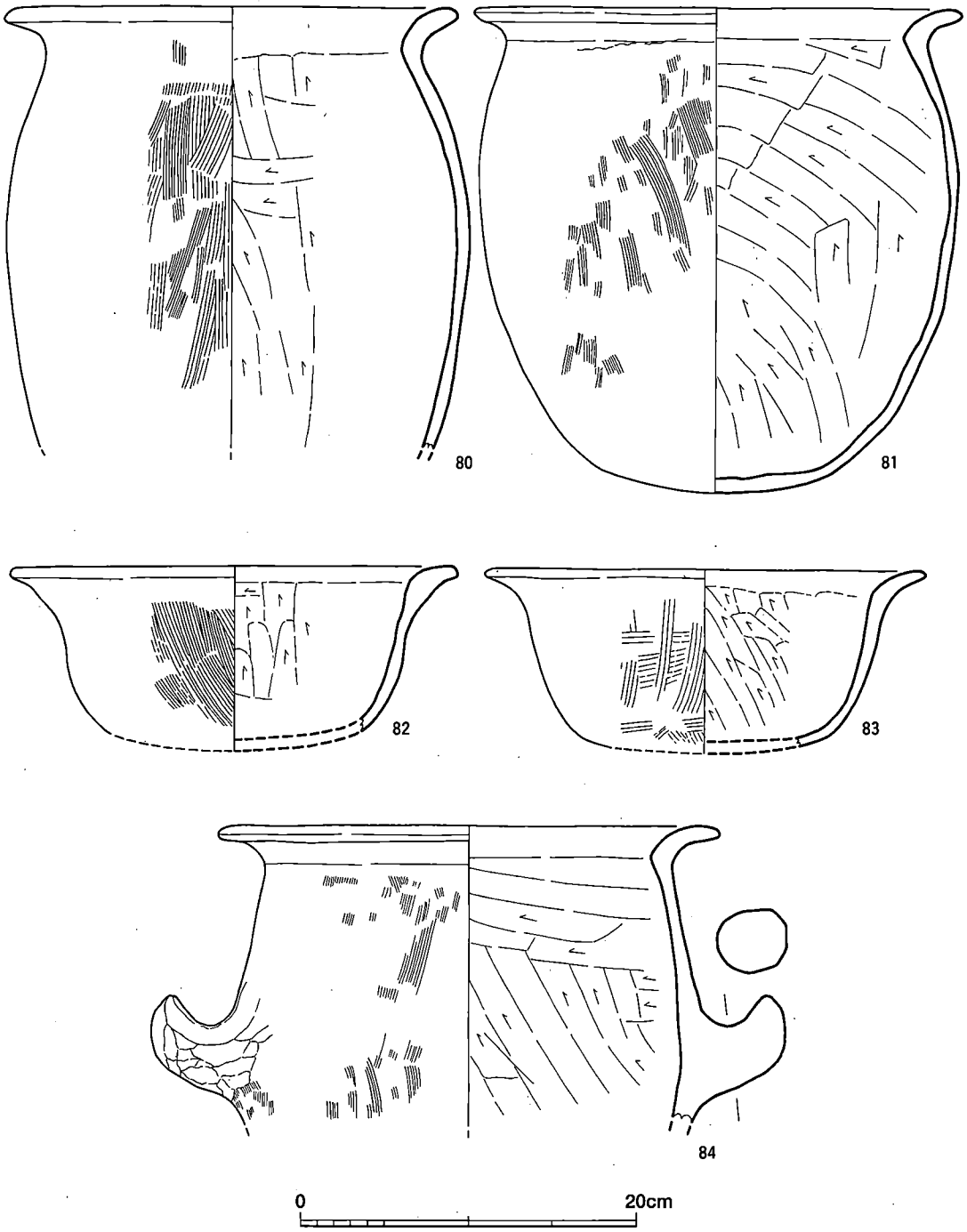
甕は甕60よりも小型品ばかりであるが、56は比較的残存状態が良く、口径19.6cm、残存高19.3cmに復原される。甕類は総じて焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。土師器は23個体図示した。坏(61～69)、皿(70)、小型甕(72・73)、大型甕(74～81)、鉢(82・83)、甑(84)である。これらのうち、残存状態の良い物の口径・器高は、61；14.8cm・4cm前後、64；16.8cm・3.7cm、66；14



第154図　65号土坑出土土器実測図④（1/6）



第155図　65号土坑出土土器実測図⑤（1/4）



第156図　65号土坑出土土器実測図⑥（1/4）

cm・4.3cm、67；15.8cm・4.1cm、69；14.6cm・3.6cm、72；14.4cm・12.2cm、73；15.2cm・13.1cm、81；28cm・28.8cm、83；26.4cm、84；27.4cmである。焼成良好で黄褐色～橙褐色を呈する。

転用硯（図版64、第178・179図）　埋土中から出土した。詳細は後述する。

焼塩土器（図版71、第184図）　埋土中から出土した。詳細は後述する。

鉄製品（図版75、第187図）　埋土中から釘が１本出土した。詳細は後述する。

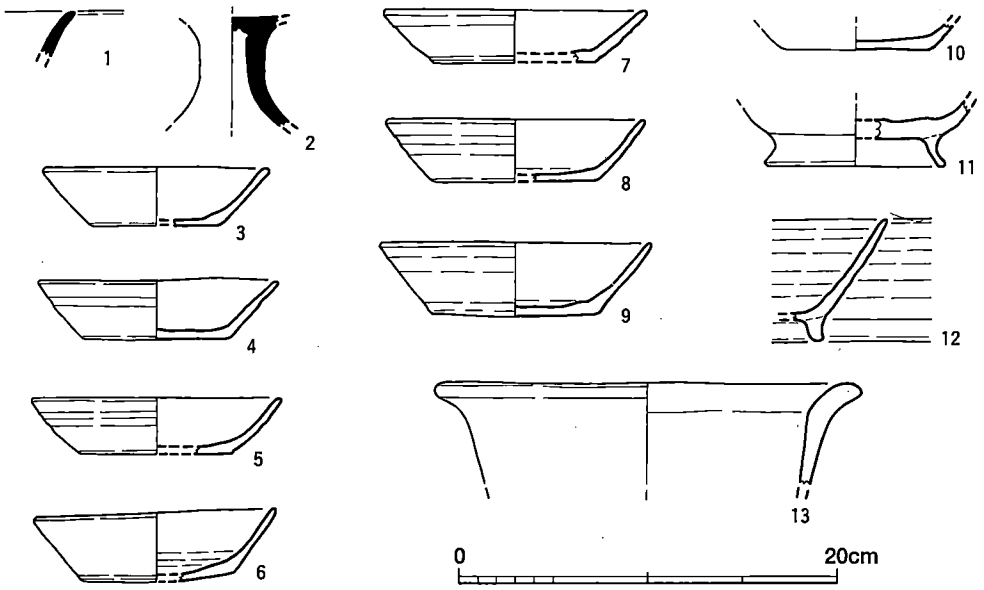
66号土坑　D66（第146図）

65号土坑の東５ｍの位置にある小規模な土坑である。南北に長い隅円長方形を呈し、南北長１ｍ、東西幅45cm、深さ40cm程である。

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。出土品目には飲食器が主体を占める。

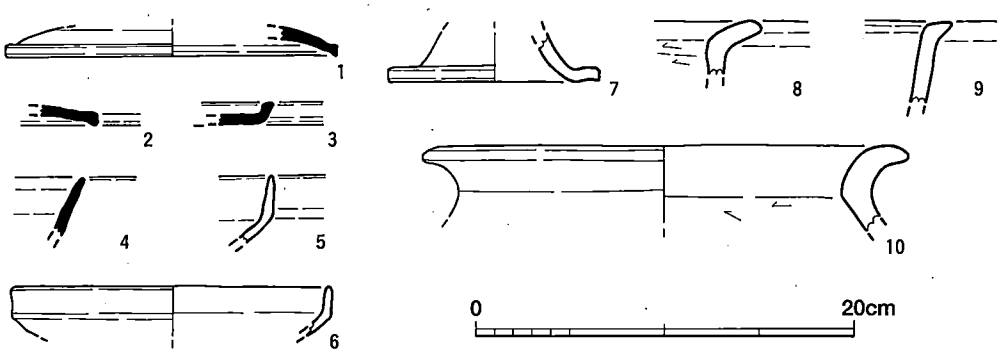
土　器（図版61、第157図）　須恵器は、坏身か皿（１）、高坏（２）、土師器は坏（３～10）、椀（11・12）、甕（13）である。器高・口径は、４；12.4cm・3.4cm、９；14cm・４cm、13；20.6cmに復原される。須恵器は共に焼成良好で、灰色を呈する。土師器も皆焼成良好で淡橙褐色～橙褐色を呈する。



第157図　66号土坑出土土器実測図（1/4）

67号土坑　D67（第146図）

133号建物の東１ｍ強に掘り込まれた、やや東西に長い不整円形の土坑である。東西長1.7ｍ、南北幅1.45ｍ、深さ48cm程である。



第158図　67号土坑出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。他に、瓦が出土している。

土　器（第158図）　須恵器は、坏蓋（1・2）、高坏（3）、坏身（4）、土師器は坏（5・6）、高坏（7）、甕（8～10）である。いずれも、小片である。

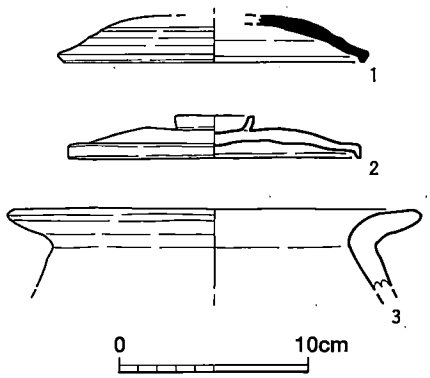
瓦（図版72、第185図）埋土から1点出土している。詳細は後述する。

68号土坑　D68（第146図）

133号建物の南2mに位置し、15号土壙墓に切られている。132号建物西側柱列と接しており、両者の併存は考えられない。

出土遺物

土師器、須恵器が出土している。他に、円面硯の破片が本土坑の南20cm程の遺構検出面から出土している。本土坑に伴う可能性が高いので、一応、68号土坑出土品として扱う。



第159図　68号土坑出土土器実測図（1/4）

土　器（第159図）　須恵器は坏蓋（1）、土師器は坏蓋（2）、甕（3）の3点を図示した。1は口径16.1cmに復原され、焼成良好で灰色を呈する。2は天井部に径4cmの環状撮みを張りつけ、口径15.6cm、器高2.3cmに復原される。焼成良好で、内外面は回転ナデ調整を施し、丁寧な作りである。焼成良好で硬質に焼き上がっており、内面はこげ茶色、外面は橙褐色を呈する。3は口径22cmに復原される。焼成良好で黄橙色を呈する。

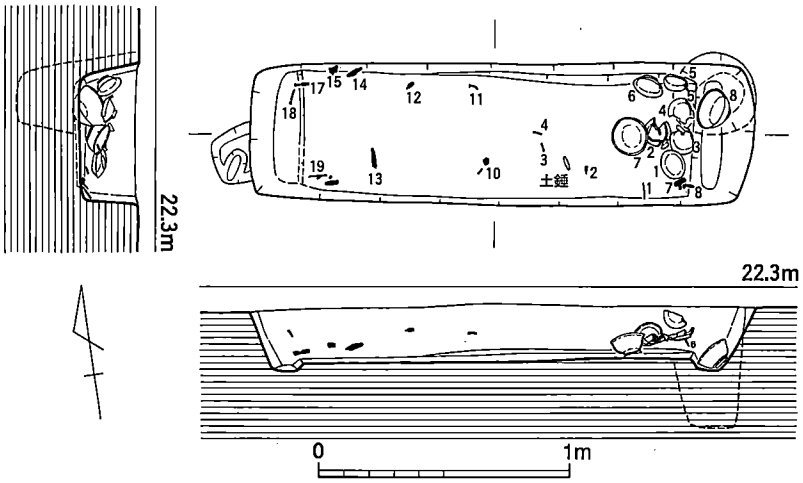
円面硯（図版63、第174図）　破片であるが、優品である。詳細は後述する。

4　土壙墓

10～15号の６基の土壙墓を報告する。中には、木棺墓（10号）が含まれるが、本項においては一括して説明することとする。

これらの土壙墓は、10号の供献土器や、他の土壙墓の埋土中に混入した前代の土器片から判断して、本村落が終焉した後に営まれたようである。分布は散漫であり、主軸方位に統一性は見られない。

10号土壙墓　C10（図版46、第160図）



第160図　10号土壙墓実測図（1/30）

本年度報告する調査区の最も東に位置する。主軸をN-99°-Eに置く木棺墓である。頭位は供献土器の出土状態と、東側の床面が少し高いことから判断して東側だと推定する。

墓壙の掘り方は検出面の上端で、主軸長２ｍ、幅55cｍ前後、深さ20～23cmである。床面は頭位と推定する東側が２cm高く、東西の小口に深さ５cm前後の溝を掘っている。

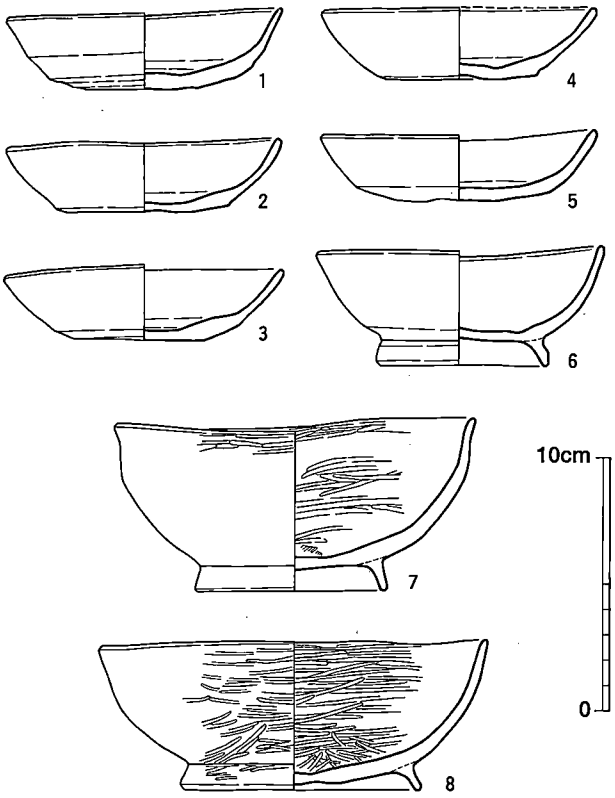
本木棺墓には、土師器椀３個体、坏５個体の計８個体の土器が供献されていた。その他に木製の供献品があったかも知れない。

出土遺物

椀３個体（内、黒色土器椀２個体）、坏５個体、釘20本、土錘１個が出土している。このうち、８個体の土師器は、木棺の蓋の、東側（頭位）の上に並べて置かれていたようで、腐食とともに棺内に落下した状態で検出した。釘は、足位側に多く出土している。土錘は、埋土中に混入したものであろう。

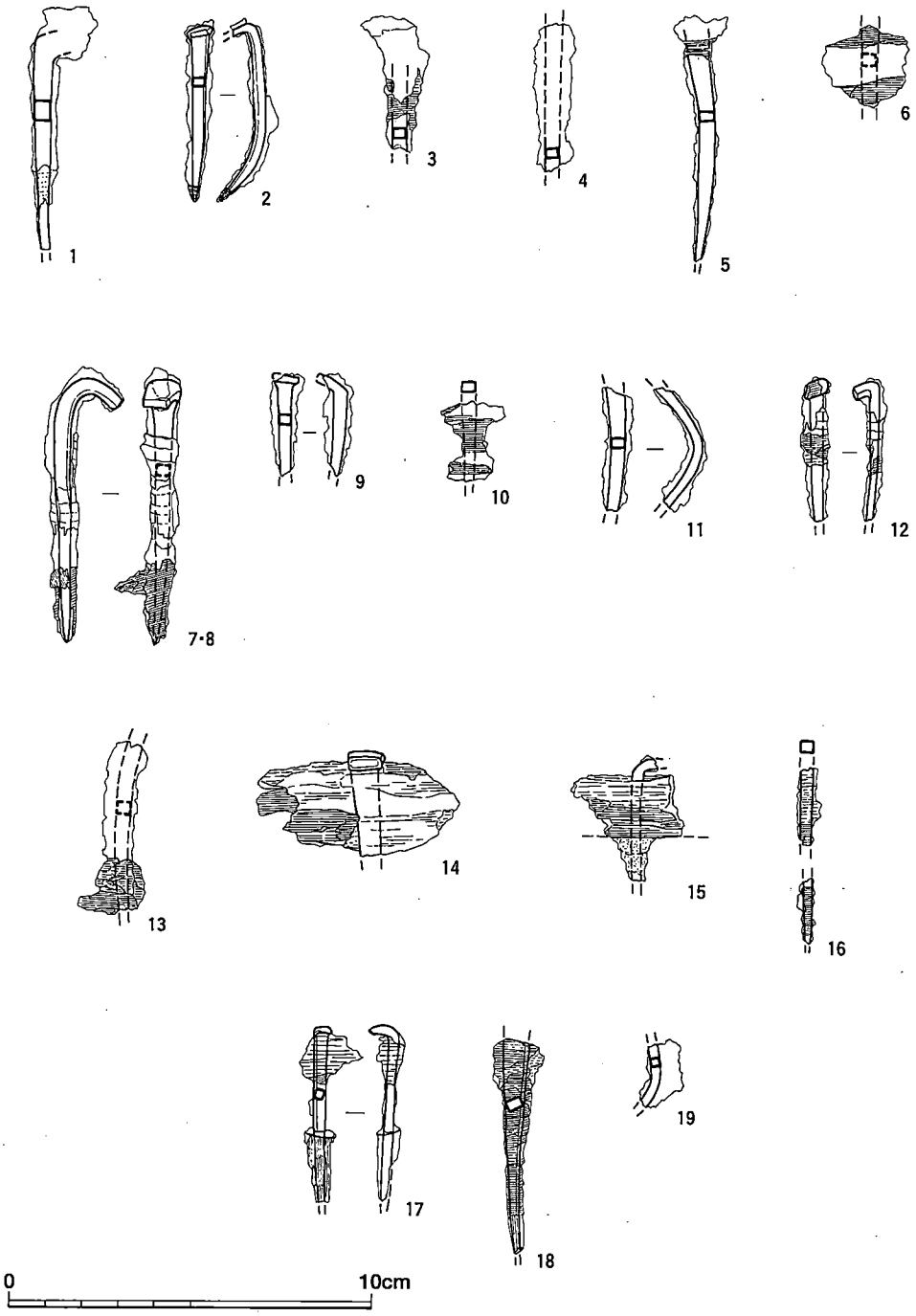
土　器（図版62、第161図）　１～５は坏である。いずれもヘラ切り底で、器形や作りが酷

似しており、法量にもあまり差はない。1は口径10.9cm、器高3.2cmを測り、焼成良好で内外面とも淡橙褐色を呈する。2は口径10.8cm、器高2.9cmを測り、焼成良好で内外面とも淡黄褐色～淡橙褐色を呈する。3は口径11cm、器高3cmを測り、焼成良好で淡橙褐色を呈するが、外底面は淡灰褐色である。4は口径10.8cm、器高2.8cmを測り、焼成良好で内外とも淡橙褐色を呈する。5は、口径10.8cm、器高2.8cmを測り、焼成良好で内面は淡黄色、外面は淡橙褐色を呈する。6は高台付埦で、口径11.2cm、器高4.7cmを測る。焼成良好で内外面とも淡い橙色を呈する。2・4～6の外底面には板状圧痕が見られる。7・8は黒色土器である。7は高台付埦で、体部は丸みがあり口縁部は外湾する。内面全体と口縁部外面には丁寧なヘラミガキを施す。焼成良好で、ヘラミガキの部分は黒色を呈し、外面の体部～底部は淡褐色を呈する。8の高台付埦は、口縁部は外湾せず直線的であり、外底面を除き全面にヘラミガキを施す点が7と異なる。焼成は良好で、内外面とも黒色を呈するが、外底面は暗灰色である。



第161図　10号土壙墓出土土器実測図（1/3）

鉄　釘（図版62、第162図）　20点出土しているが、内1点は銹だけなので図示していない。いずれも、鉄銹や棺材片の銹着により、形が不明な部分がある。2と7・8はほぼ完形品である。2は頭の先端を欠くがほぼ全形を知ることができる。足の断面は幅4㎜、厚さ3㎜程である。足の下半部が曲がっているが、伸ばせば全長53㎜ある。足の先端部に木質が銹着している。7・8は折れて別々に検出したものが接合したものである。頭の方が8、足の方を7として取り上げた。頭は、打たれて大きく曲がり、足は直で木質が銹着している。全長は73㎜、2より長い。17は木質の銹着具合から蓋の厚さが分かる。足の下半部は木目が縦位に、上半部は横位に走り、頭下端部から縦位木質の上端までは27㎜であり、頭上端まで打ち込まれたとして、蓋の厚さは3cm程である。他の釘の足に銹着した木質は、下半部でも横位に走るが17だけは例外

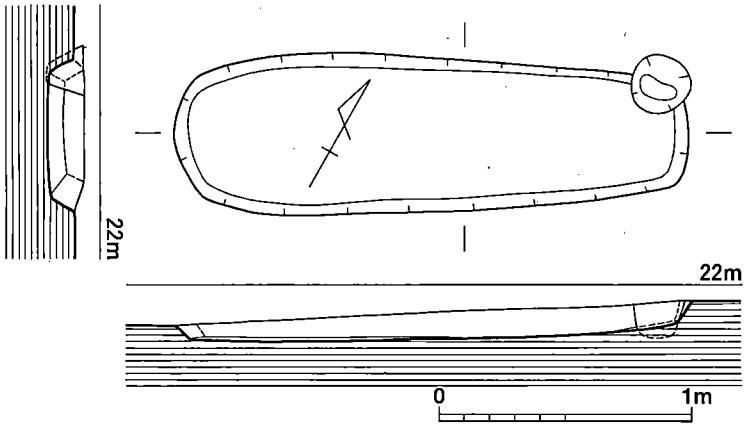


第162図　10号土壙墓出土鉄釘実測図（1/2）

である。蓋を留めた釘がここに報告する本数で全部であるのか不明であるが、棺の側板と小口板で用材の仕方が異なっていた可能性がある。また、先述した、比較的細くて短い2のタイプの釘と、7・8のようにやや長くて太いタイプの二者がある。それが、使用部位の違いによるものか否かについては、木質の銹着具合（木目が縦に走るか、横に走るか）に違いがないので不明である。

11号土壙墓　C11（第163図）

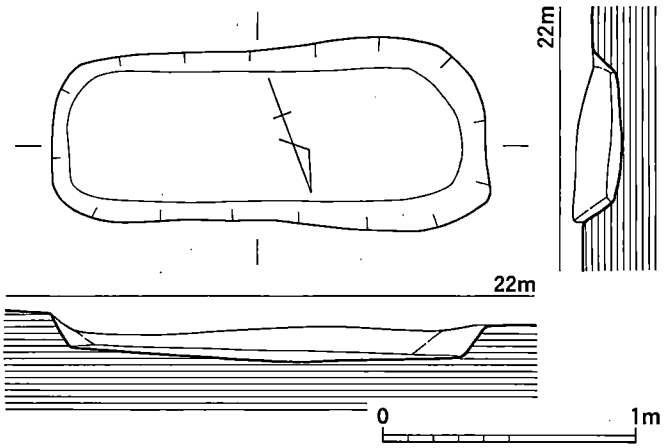
10号土壙墓の西13m程の位置に検出した、主軸をN-60°-Eに置く土壙墓である。プランは長楕円形を呈し、主軸長2.05m、幅は東側48cm、西側57cm、深さ10cm程である。床面は東側が高いので、東枕だと推定する。



第163図　11号土壙墓実測図（1/30）

12号土壙墓　C12（第164図）

11号土壙墓の南東27m程の位置で、237～239号住居を切って営まれている。主軸をN-110°-Eに置き、東側の床面が高いので東枕だと思われる。規模は、主軸長1.73m、幅は東の枕側で55cm、西側は73cmと広く、深さは10cm前後である。

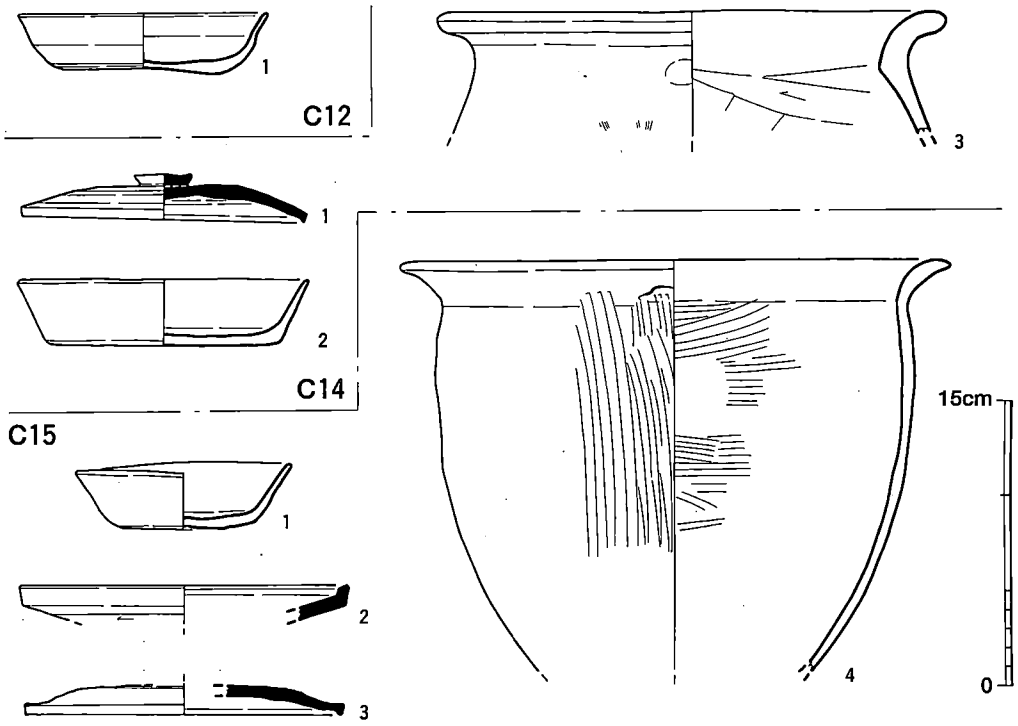


第164図　12号土壙墓実測図（1/30）

出土遺物

本土壙墓に直接伴う供献品ではないが、埋土中から出土した須恵器を図示した。

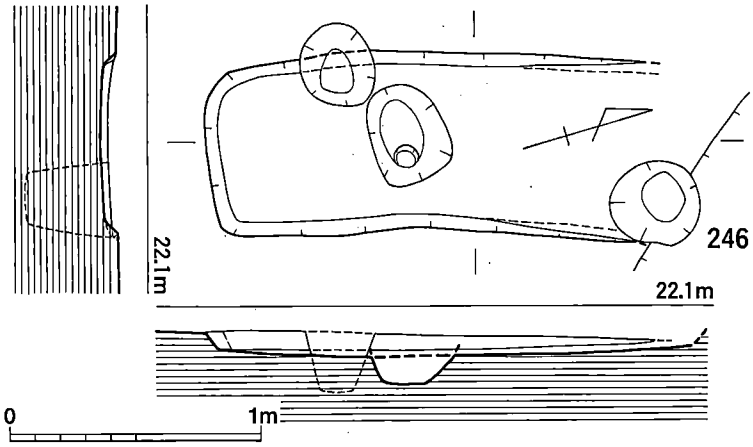
土　器（第165図）　1/4程を欠損するが口径13cm、器高3.2cmを測る須恵器坏である。焼成はやや軟質で、内面は黄灰色、外面は灰褐色を呈する。



第165図　12・14・15土壙墓出土土器実測図（1/4）

13号土壙墓　C13（第166図）

12号土壙墓の南東10ｍに位置し、246号住居と重複関係にある。しかし、住居側の床面が遺構検出面より浅いため切り合い関係を図化できない。土壙墓が住居を切っていると推測する。また、ピットも本土壙墓に切られている。本土壙墓主軸をはN-16°-Eに置き、北枕であろうと推測する。規模は、主軸長1.8＋ｍ、幅70cm前後、深さは遺存状態の良い部分で10cm程度である。



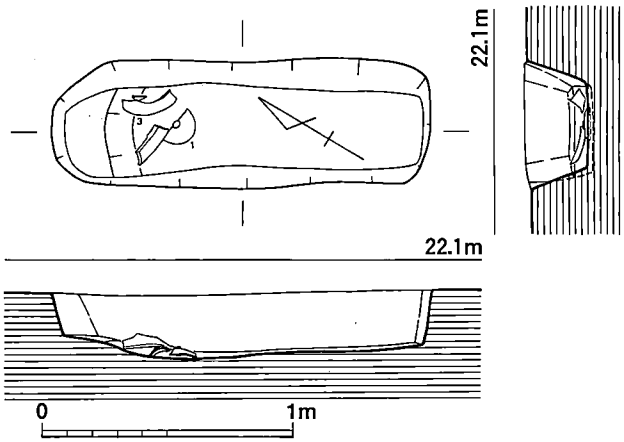
第166図　13号土壙墓実測図（1/30）

14号土壙墓　C14（第167図）

13号土壙墓の南東３ｍ程の位置に営まれ、246号住居竪穴部の南壁を切る。主軸をN-30°-Wに置き、床面が一階高い北側が頭位だと思われる。規模は、主軸長1.52ｍ、幅50cm程、深さは22～25cmである。

出土遺物

枕前面の床面から須恵器坏蓋・土師器甕の破片が出土している。供献土器ではい。



第167図　14号土壙墓実測図（1/30）

土　器（第165図）　１は口径14.9cm、器高2.6cmに復原される須恵器の坏蓋である。焼成良好で灰褐色を呈する。２は口径15cm、器高3.4cmに復原される土師器の坏である。焼成良好で暗黄茶褐色を呈する。３は口径25.8cmに復原される甕である。

15号土壙墓　C15（第168図）

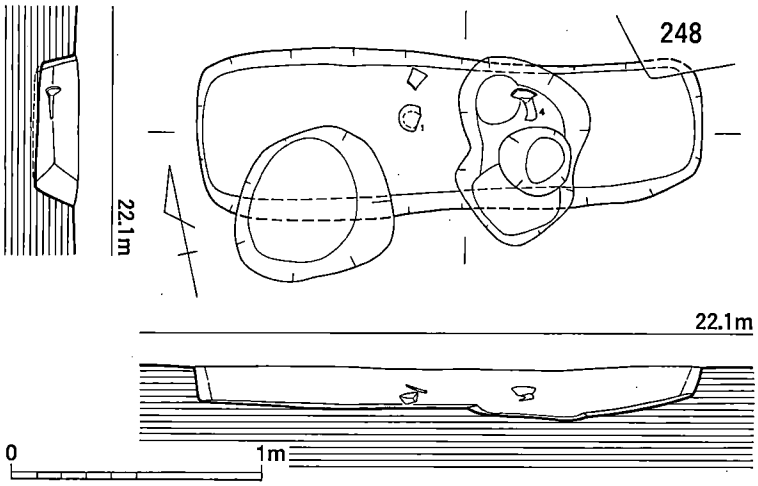
14号土壙墓の南西９ｍ程の位置に営まれている。調査時に切り合い関係を正確に把握できなかったので、新旧関係を逆に図示しているが、本土壙墓が、248号住居、132号建物、68号土坑を切っている。主軸をN-102°-Eに置き、床面の高い東側が枕位置だと推測する。規模は主軸長2.03ｍ、幅55～68cm、深さ15cmほどである。

出土遺物

須恵器、土師器が出土している。

土　器（第170図）

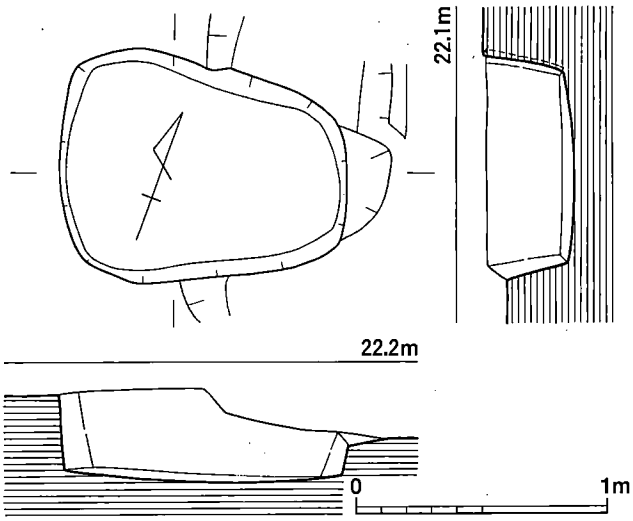
須恵器では坏身・高坏・坏蓋が出土した。焼成良好で灰色を基調とする。４の土師器甕は口径27.6cmに復原され、残存高は21.6cmである。焼成良好で、淡いこげ茶色を呈する。



第168図　15号土壙墓実測図（1/30）

5　おとし穴

宮原遺跡では、これまでに３基の落とし穴を報告している。今回報告分の１基を含めて４基であるが、南接する下浦宮原遺跡（甘木市教育委員会調査；註１）では15基が確認され、すぐ西の立野遺跡Ａ地区（註２）では14基を検出している。



第169図　４号おとし穴実測図（1/30）

４号おとし穴　Ｃ４（図版17、第169図）

225号住居の貼床下層に検出した。不整楕円形を呈し、東西軸長115㎝、南北幅60㎝～90㎝で、西側が広い。深さは38㎝で、大半が削平されていた。埋土は黒褐色土で、別掲の打製石鏃１個体を除き遺物は出土していない。

打製石鏃（図版75、第188図）

埋土中から１個体出土している。詳細は後述する。

註１　甘木市教育委員会　『下浦宮原遺跡』　1997
註２　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第５集　1984

6　溝

10号～20号溝を報告する。これら11条の溝は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑及び通路・柵列と推測するすべての遺構を切っている。上記各遺構の個別図等では、溝との切り合い関係を逆に図示しているが、個別遺構の細部を示すために、あえてそのようにした次第である。

なお、この溝の説明の中に含めていないが、今回報告地区の中央部には、幅0.5ｍ～１ｍ、長さ５ｍ前後の、東西または南北方向の小溝が存在する。これは、通路両側の溝ではなかろうかと考えているので、別項で後述する。

また、ここに説明する溝は、現代に近いものが含まれることをあらかじめお断りしておく。

10号溝　M10（付図２）

11・12号溝を切って、ほぼ東西方向に長く延びる溝で、西側は調査区外に延びる。東側は222号住居の南に位置する56号土坑を切り、さらに1.5ｍ東で収束する。この溝と重複する遺構はすべて溝に切られている。幅は１ｍ前後で、調査区内で確認できる長さは50ｍ程である。

出土遺物

土師器、須恵器、磁器が出土している。いずれも、重複する遺構や溝掘削時の表土等に含まれていたもので、埋まる時点で埋土中に含まれたものである。

土　器（第170図）　１～３の須恵器はいずれも小片である。４～５は土師器で、５は大型の坏身か盤状のものであろう。７・８は、近・現代の磁器である。

11号溝　M11（付図２）

12号溝と対になり、本調査区の中央部を南北に弧を描きながら走る溝である。12号溝は南北の調査区外に延びているが、本11号溝は10号溝と交差した後に北側４ｍの部分で消える。本来は、図示する遺構面よりも上層から掘り込まれており、さらに北側に延びる可能性がある。南側は53号土坑と重複し、図化していないが、この土坑を切りさらに延びている。図上での規模は、幅50㎝～70㎝、現存長25ｍ以上である。

出土遺物

この溝は、出土遺物の多い遺構を切るため、本溝に含まれる出土遺物も多い。特に注目される出土品は、大型の鉢かそれに類する器形の脚部（獣足）が１点出土している。ただし、この溝のどの部分から出土したか明確ではない。

土　器（第170図）　図示した９点の須恵器の内、１～５は坏蓋、６～９は坏身の小片である。焼成良好で灰色を呈する。10以下は土師器で、10は椀、11は皿、12～14は甕である。

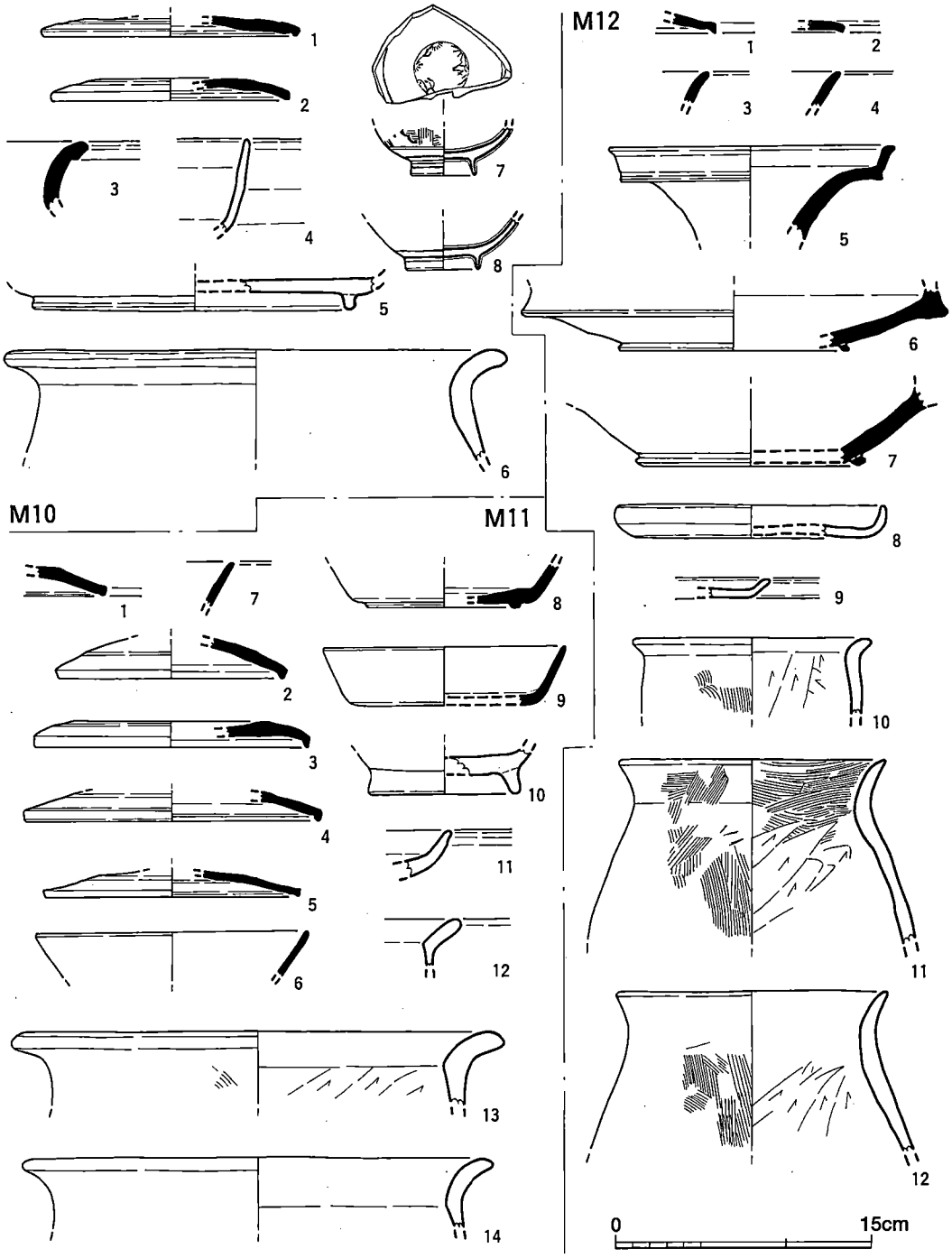
12号溝　M12（付図２）

11号溝と対になり、本調査区の中央部を南北に弧を描きながら走る溝で、南北の調査区外に延びている。11号溝との間は、幅2.5ｍ～2.7ｍの通路状になっている。北部では、48・51・52号土坑、214～217号住居を、中央部以南では、220・226・228～234号住居、54号土坑を切っている。図上での規模は、幅50㎝～１ｍ、現存長50ｍ以上である。

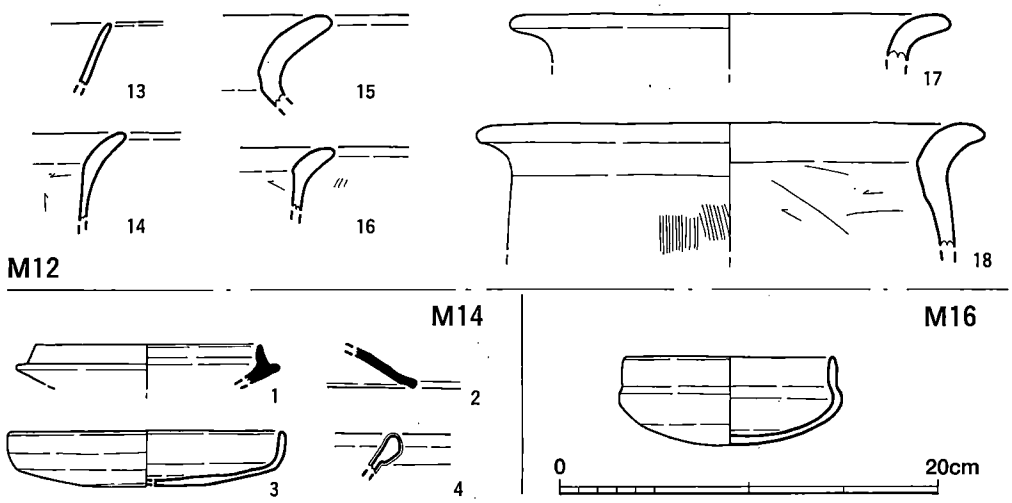
出土遺物

11号溝と同様な理由で出土遺物の量は比較的多い。出土品は須恵器及び土師器である。

土　器（第170・171図）　図示した須恵器は７点で、１・２は坏蓋、３・４は坏身か皿、５～７は壷である。特に、５～７の形態の壷は本遺跡では出土例が少ない。焼成良好で灰色を呈する。８・９は土師器の皿、10～12・15～18は甕、13は坏、14は甑の小片である。



第170図　10～12号溝出土土器実測図（1/4）



第171図　12・14・16号溝出土土器実測図（1/4）

13号溝　M13（付図２）

Ｌ字形を呈する溝で、東西に走る部分は、10号溝と平行に接するかのように走り、121号建物の北東で90°北に屈折している。東西溝は、119号建物を、南北溝は、214～217号住居・48・51・52号土坑を切っている。なお、51・52号土坑の部分で、12号溝と交差している。幅は、50～70cm程で、長さは、東西溝部分が24ｍ、南北溝部分が21ｍである。

14号溝　M14（付図２）

121号建物の南を東西に走る溝で、溝の東部は220号住居を切っている。幅１ｍ、長さ10ｍほどである。

出土遺物

須恵器、土師器、磁器が出土している。土器の出土量は少なく、いずれも小片である。

土　器（第171図）　１は坏身、２は坏蓋の小破片である。３は土師器の皿で口径14.8cm、器高2.9cmに復原される。４は白磁の碗である。須恵器、磁器はともに極小片である。

15号溝　M15（付図２）

14号溝と東端が重複し、切られている。また、溝の中央部は219号住居・130号建物を切っている。幅は50cm前後で、長さ15ｍ程のものである。

16号溝　M16（付図２）

120号建物から南に延びる溝で、南部が東側に屈折して17号溝を切っている。幅は50cm前後

で、長さは20ｍ程である。

出土遺物

ほぼ完形品の土師器坏のほかに若干の須恵器・土師器片が出土している。

土　器（第171図）　図示したのはほぼ完形の土師器坏である。口径11.2㎝、器高4.7㎝を測り、焼成良好で、白黄褐色を呈する。

17号溝　M17（付図２）

16号溝の南にあり、南北の部分が弓形に屈折する。北側は屈折部付近を16号溝に切られている。また、南の屈折部は柵列と推測する遺構を、南端部は250～257号住居を切っている。幅は30～50㎝と細く、長さは30ｍ以上である。

18号溝　M18（付図２）

16号溝の西側を走る溝である。幅は１～２ｍと広く、長さ33ｍを検出し、さらに、南側の調査区外に延びている。

19号溝　M19（付図２）

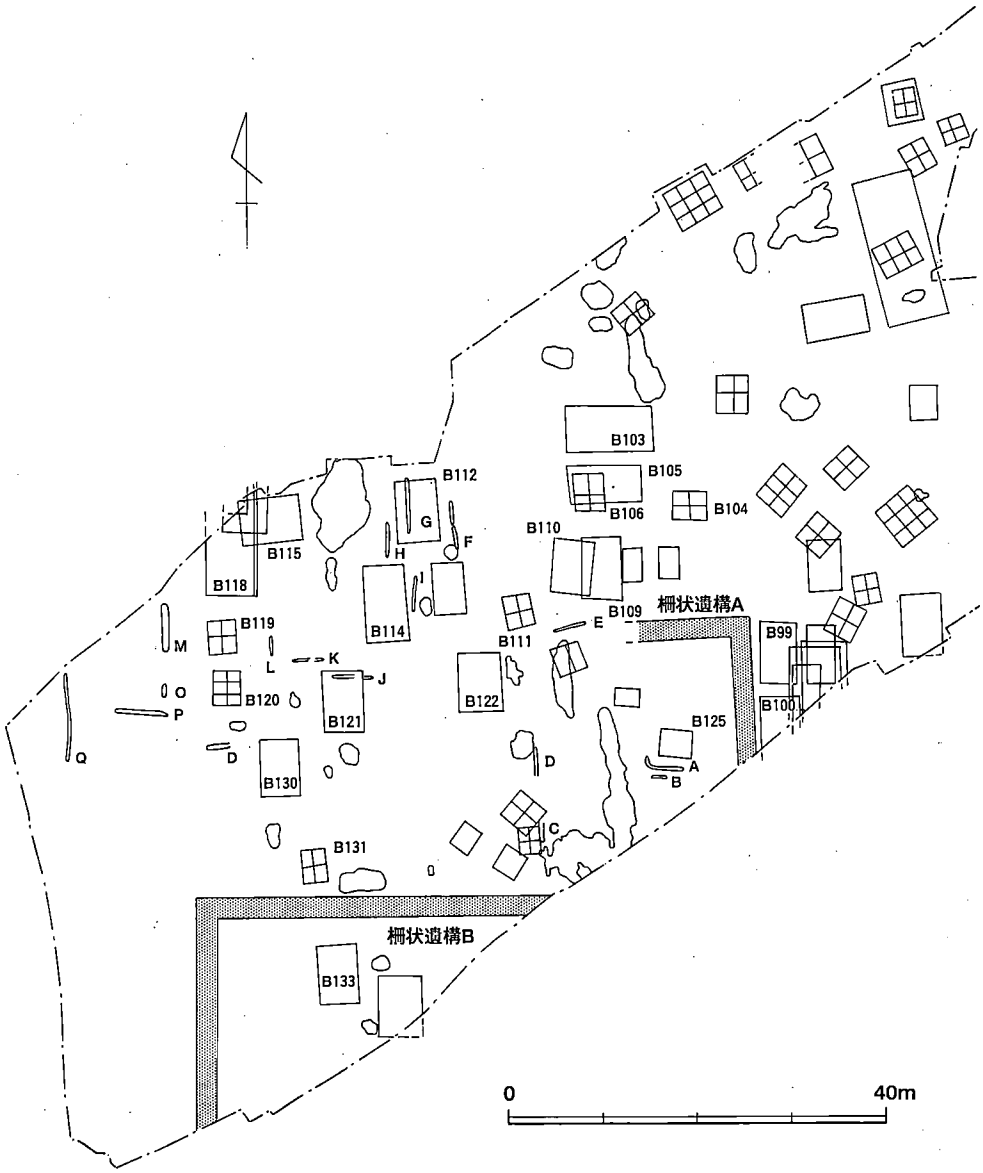
18号溝の西に、ほぼ平行に走る溝である。幅50～70㎝程で、長さは15ｍ程であるが、さらに南西の調査区外に延びている。

20号溝　M20（付図２）

溝としては、調査区の最西部にある。西側に屈折する南半部は、19号溝を切っている。幅１ｍ前後、長さは20ｍ程を検出したが、調査区外に延びている。

7　柵列・通路状遺構

柵列として報告する部分においては、明確に柵を構成する個々の柱穴を検出したわけではない。ただ、この部分には異常にピットが集中し、それらをトータルに見れば、何度も造り直した柵の柱穴群と思われ、柵であろう推測する次第である。また、柵Ｂの北側には、南北及び東西方向の小さな溝がある。これらは、１条の溝の場合は建物を区画する溝、また、対となる溝の場合は、その間が通路だと推測される。ただし、遺構検出面では図のように途切れているが、竪穴住居跡竪穴部の切り込み面は水田の床土直下からであることが土層的に確認されている（註１）ことから、この溝も同様であったであろうと推測される。



第172図　柵・通路状遺構及び掘立柱建物跡配置図（1/800）

柵状遺構　A・B　（第172図）

柵Aは、99·100号掘立柱建物跡の西に想定する柵である。図でアミをかぶせた部分にあるピット群には、図上の操作ではあるが、規則的な配列が認められるわけではない。東面（南北軸）の主軸は、真北から２～３°西にずれ、南北長14ｍ分を検出した。北面（東西軸）の柵は、北

東隅で西に直角に屈折して10m程まではピット群の存在を確認できているが、これより以西には、東西方向のピット群の走りは認められない。この柵状遺構は西に延長すれば、122号建物の北妻と重複し、121号建物の北妻のやや北を通る。柵Aと想定する内側で、建物の主軸が西に若干ずれて軸が合いそうな建物は、121・130・131・133号である。

柵Bは柵Aの南西に想定するもので、この範囲には不規則ではあるがピット群が密集する。調査の過程では、柱列等の柵を想定する意識はなかった。図上で判断して柵の可能性を想定する次第である。この柵Bは、西面（南北軸）の柵の主軸は真南北で、長さ24m程、北面（東西軸）は長さ37m程分を検出した。それ以上は、調査区外に延びている。柵Aと想定する内側にあり、主軸を同じくする建物は、247号である。

以上のように、柵A・Bを想定したが、調査区外に大きく延びるため、柵とそれに伴う遺構の存在は明確にはしえない。

通路状遺構（付図2・第172図）

柵Bの北側に、東西及び南北に走る途切れた小溝が存在するから通路等を想定した次第である。もちろん、調査当時は、このような意識はまったくなく、柵状遺構と同様に、図上操作からの発意である。説明の便宜上、これらの小溝にA～Qの番号を付したので、これにより、説明することとする。

小溝のあり方から、次のように分類される。

・2条で対となり、その間が通路と想定されるもの

A－B、F－G・IまたはG・I－H、J－K

M－P……次に説明する、118・119・120号建物への西からの通路

・建物に敷地を区画していると想定されるもの

H・K・L・M・N・O……118・119・120号建物を取り囲む

・対となる溝がなく一条で存在するもの

C・D……両溝は途切れているが、主軸と方位から同一の溝と思われる。

E……他の溝と方位がややずれる。

Q……本村落の西端を区切るとともに、118・119・120号建物の西側通路M－Pが、Qに達して南に曲がると思われる。

以上のことから、小溝の組み合わせにより、118・119・120号建物を中心にした通路や、敷地の区画を考えることができよう。

註1　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第46集　1997本文65頁・第55図参照。

8　出土遺物各説

墨書土器（図版63、第173図）

4点出土し、いずれも外底面に墨書されている。検出時には墨書土器だと認識していず、報告書作成時にそれと分かった。図の土器番号は、各遺構出土土器からの連番である。

55は228号住居の主柱穴P_4西肩の貼床面上に検出した土師器の坏である。本住居覆土から転用硯も出土しており、両者とも住居廃棄後に投棄されたものである。「主」と読める行書体の文字が、外底面の中心部からややずれた部分に書かれている。墨は薄れている。本土器は口縁部を半分ほど失うが、口径13.7cm、器高3.4cmを測る。底部は回転ヘラ削りを施している。胎土には雲母片や石英粒を含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。

56は235号住居の覆土から出土した須恵器の坏身である。外底面の中心部からややずれた部分に行書体で「寺」と書かれている。口縁部の大半を失い、口径12cm、器高4cm程に復原される。胎土に砂粒をあまり含まず精良であり、焼成良好で明灰茶褐色を呈する。

114は50号土坑から出土した。また、転用硯も出土している。本土器は土師器の皿で、外底面に解読不能の文字が書かれている。図は筆の運びを追いながら書き写したが、正確を期し難い。小片であり、口径20cm、器高3cm程に復原される。外底面は、ヘラ削りを行う。胎土に雲母・石英等の細砂粒を含み、焼成良好で暗茶褐色を呈する。

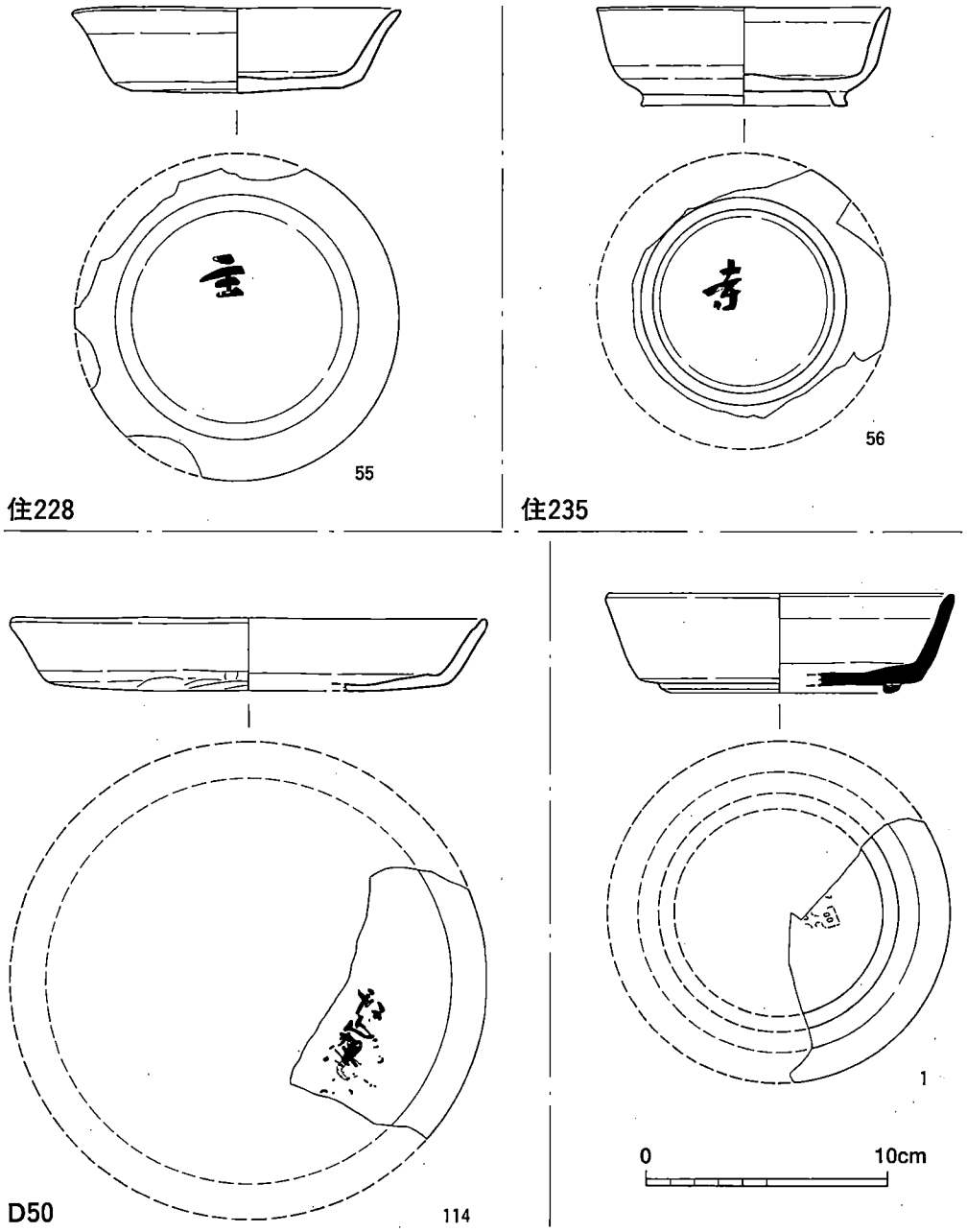
1はピットから出土した須恵器の坏身片である。外底面に、わずかに文字が読み取れるが、墨が薄れており不明である。図の文字は推定で書いたものである。口径14.3cm、器高4cm程に復原される。石英等の砂粒を多く含み、焼成良好で硬質であり、淡い灰色を呈する。

円面硯（図版63、第174図）

竪穴住居跡及び土坑から3点の小破片が出土している。

1は68号土坑のすぐ南の遺構検出面から出土したが、68号土坑に伴うものと思われる。海と陸の一部からこの部分の形状はおよそ窺えるが、脚部はごく一部しか残らず、裾部付近の形状は不明である。本品は、大振りの優品で丁寧でシャープな作りである。陸は中央部の径8.5cm範囲が2～3mmくぼみ、その周囲の幅2cm程は平坦で、周縁部は外傾する。陸の径は16.2cmに復原される。陸の周囲に幅1.5cm、深さ1.3cm程の海が廻る。海直下の外面には三角突帯を廻らす。脚部には方形の透し孔を配する。現存高は4.8cmである。胎土は細砂粒を少量含む程度で精良であり、焼成良好で、黄灰色を呈し、外面は灰をかぶり、一部黒灰色を呈する。よく使い込まれており、陸は摩滅している。

2は49号土坑から出土した脚部の破片である。本土坑からは転用硯も出土している。脚裾部は外反し、外径15.6cmに復原され、現存高4.5cmである。作りは1のようには丁寧ではない。



第173図　墨書土器実測図（1/3）

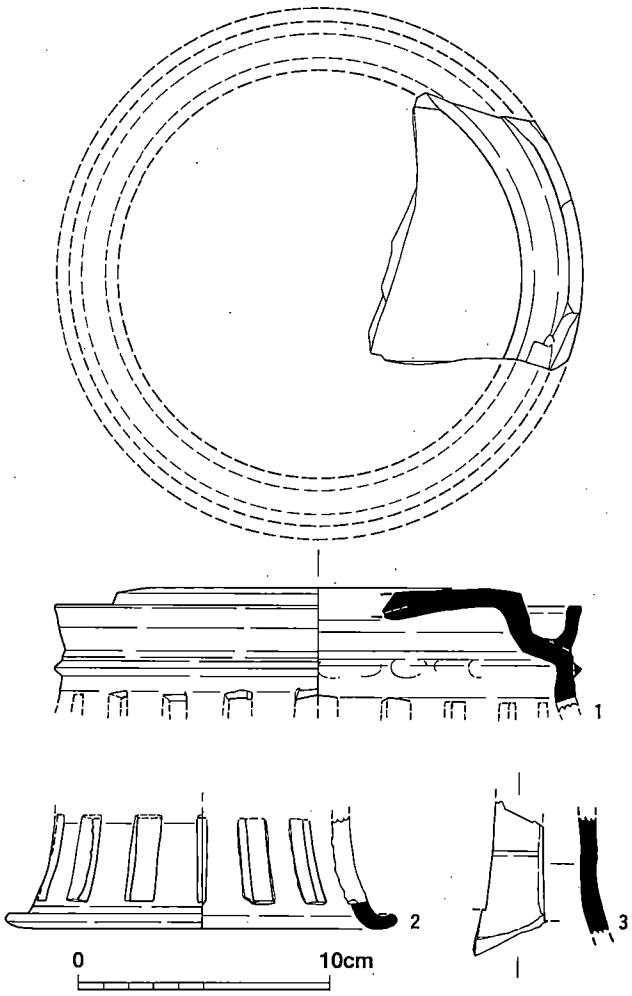
胎土は細砂粒を少量含む程度で精良であり、焼成良好で内外面には部分的に灰をかぶり、暗灰色を呈する。方形透し孔は12ケ所に配されるようである。

3は240号住居のカマド前面の貼床面に検出した小片である。1条の浅い沈線が廻る。破片

の両側面は方形透し孔に相当する。透し孔の下端部は左右で5㎜の高低差がある。胎土は前記2点と同様に精良であり、焼成良好で濃灰色を呈する。

転用硯（図版63・64、第175～179図）

竪穴住居跡や土坑から20個体出土している。特に、50号土坑から4個体、53号土坑から4個体、65号土坑から7個体と、3土坑から集中的に出土している。すべて須恵器で、器種的には、坏蓋17個体、皿3個体である。図の土器番号は、各遺構出土土器からの連判である。



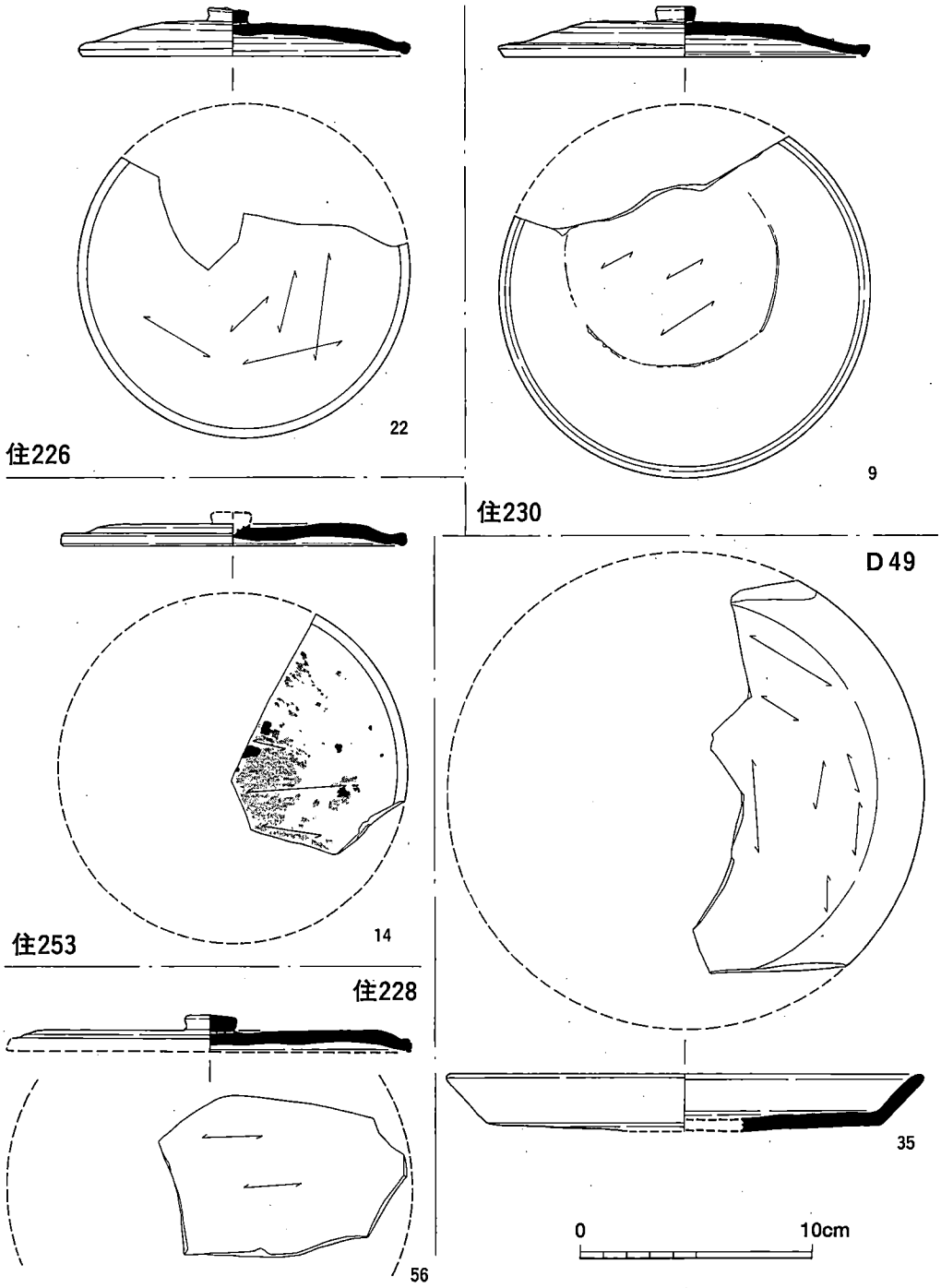
第174図　円面硯実測図（1/3）

22は226号住居の覆土から出土した坏蓋である。墨の付着は認められないが、内面には不定方向の擦過痕があり、平滑である。口径13.9㎝、器高2.1㎝である。胎土に大粒の石英粒を含み、焼成良好で灰黄褐色を呈する。

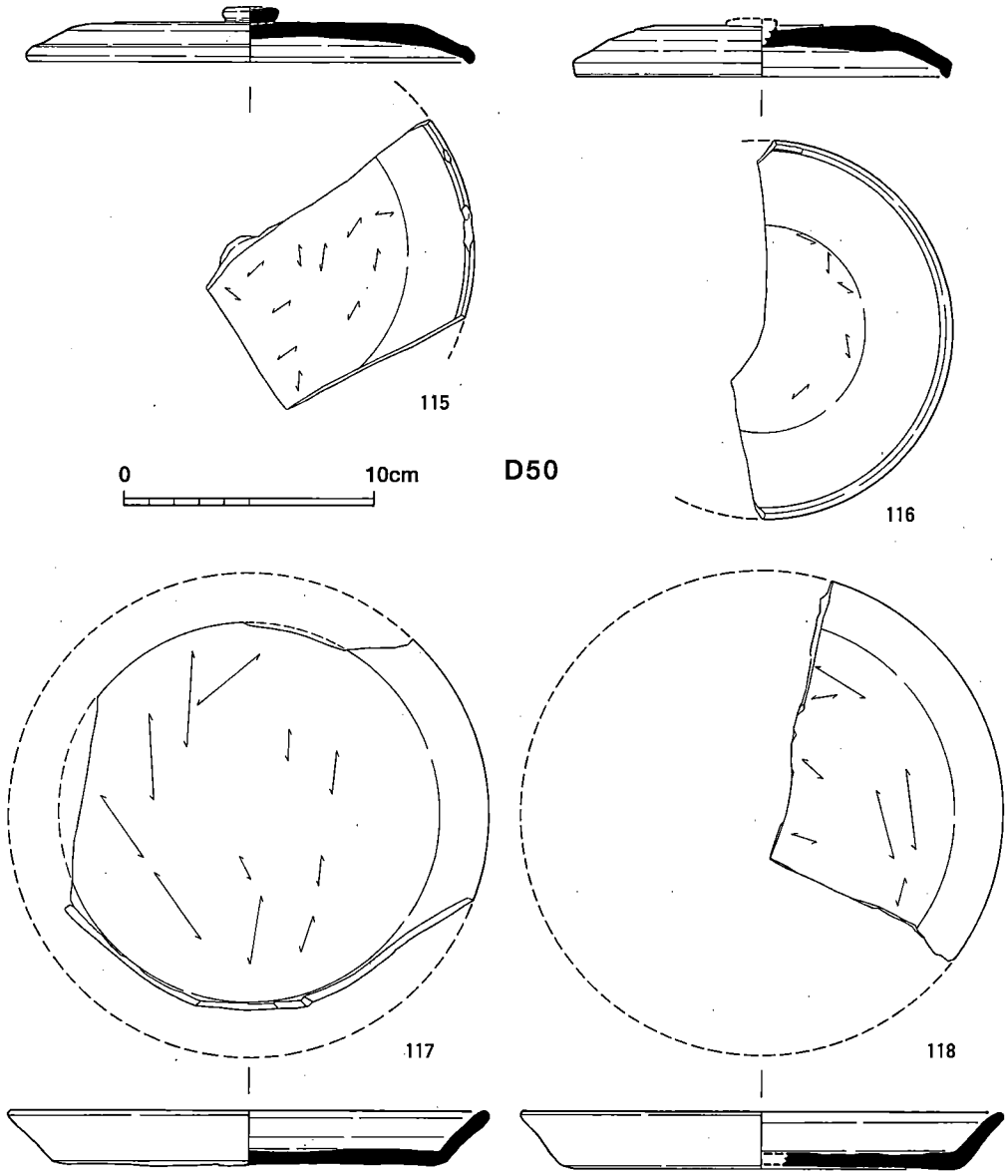
56は228号住居の覆土から出土した坏蓋の小片である。内面に擦過痕があり、平滑である。口径は17.4㎝程に復原され、器高は1.5㎝程である。胎土に微砂粒をわずかに含み、焼成良好で硬質であり、内外面とも緑灰色を呈する。

9は230号住居のカマド付近から出土した坏蓋である。内外面に重ね焼きの痕跡があり、他の土器の一部が焼きついている。内面のその内側を硯として使用しており、擦過痕があり、器面は平滑である。口径15.5㎝、器高1.6㎝である。胎土に微砂粒をわずかに含み、焼成良好で内面は灰色～黒灰色、外面は灰色を呈する。

14は253号住居の覆土から出土した坏蓋片である。内面に墨が多量に付着し、擦過痕が不定



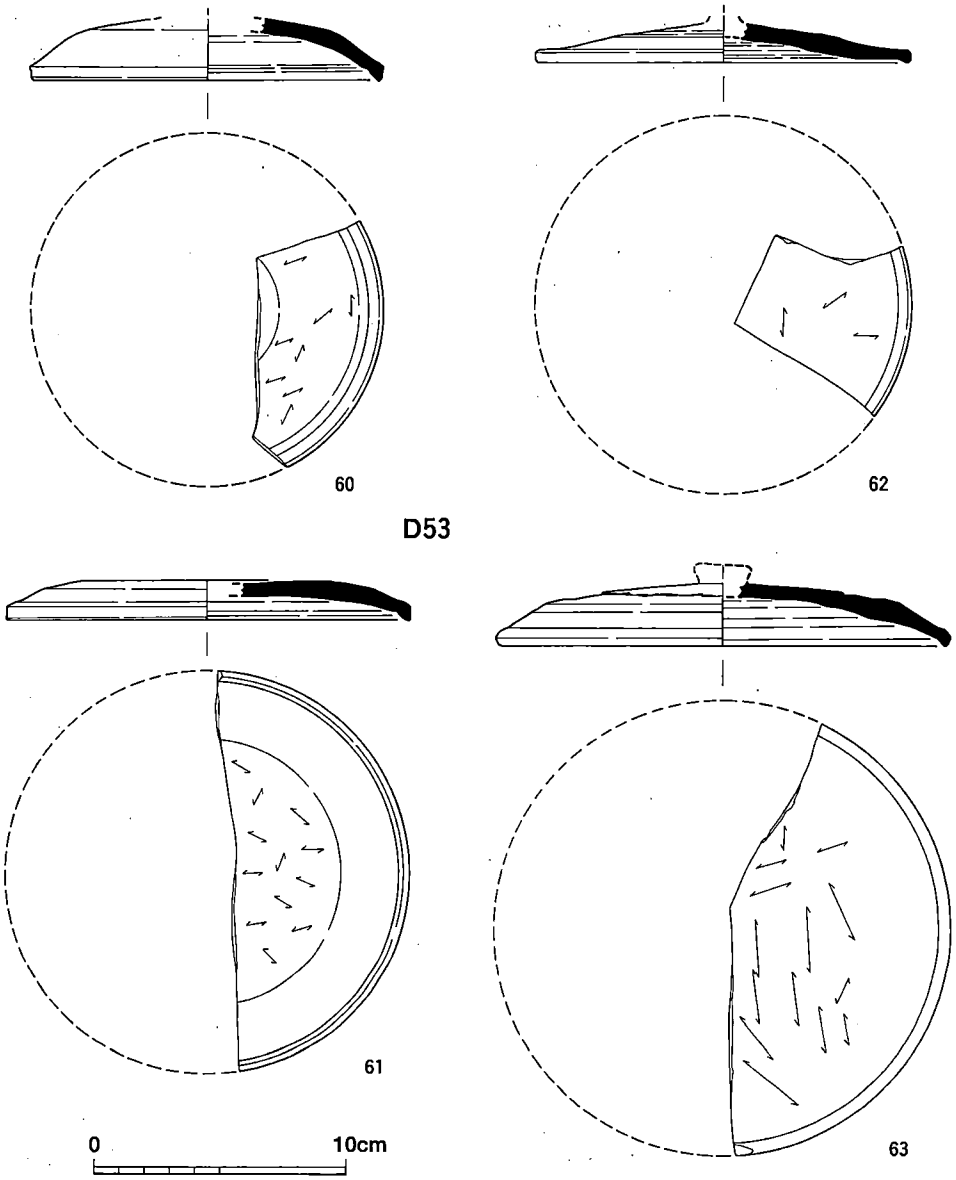
第175図　転用硯実測図①（1/3）



第176図　転用硯実測図②（1/3）

方向に走る。口径15cm程に復原される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を呈する。

35は49号土坑から出土した皿である。内底面に不定方向の擦過痕が多く見られ、平滑である。底部はヘラ切り底である。胎土には砂粒を少量含み、焼成良好で淡灰黄褐色を呈し、口縁部は黒灰色を呈する。

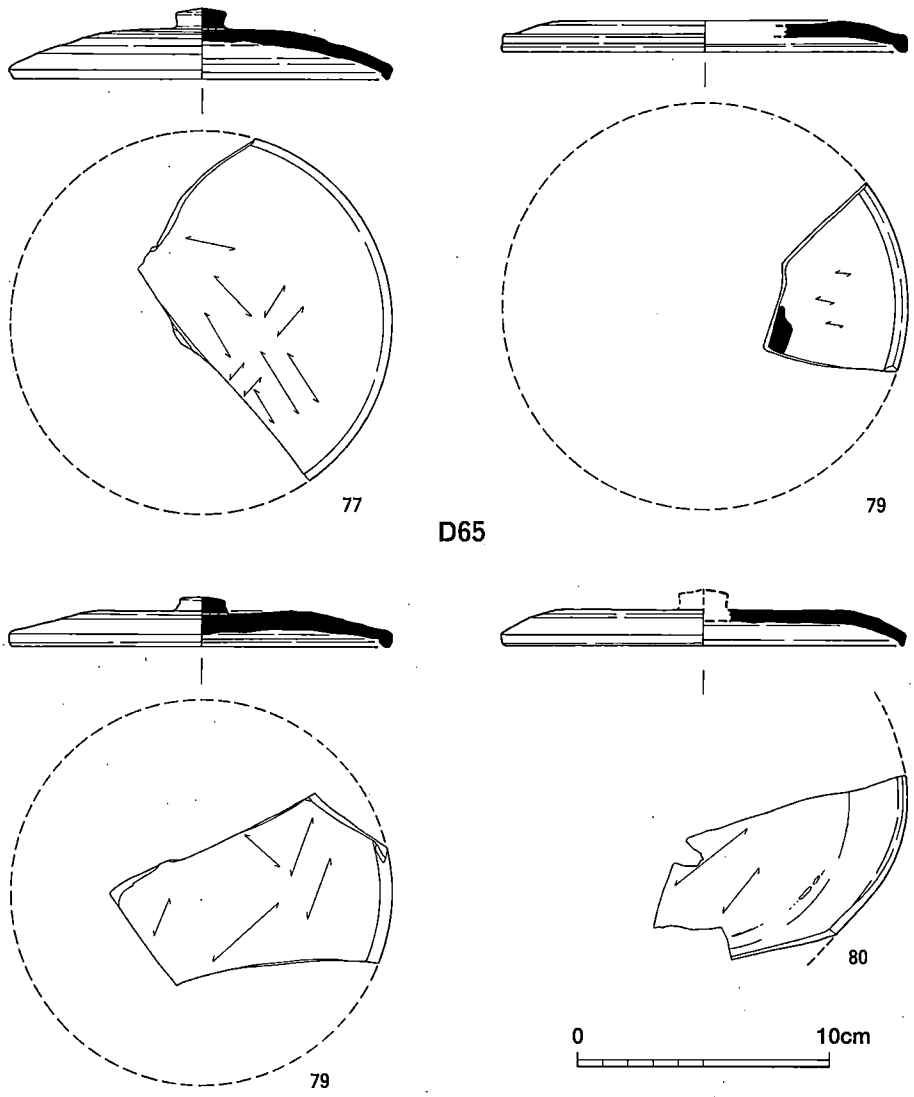


第177図　転用硯実測図③（1/3）

115～118は、50号土坑の下層埋土から出土した。115・116は坏蓋、117・118は皿である。

115は内面に不定方向の擦過痕が多く見られ、平滑である。口径19.5cm、器高2.2cmに復原される。胎土にわずかの砂粒を含み、焼成良好で淡灰褐色を呈する。

116は内面に不定方向の擦過痕が多く見られ、平滑である。口径は15.2cmに復原される。残

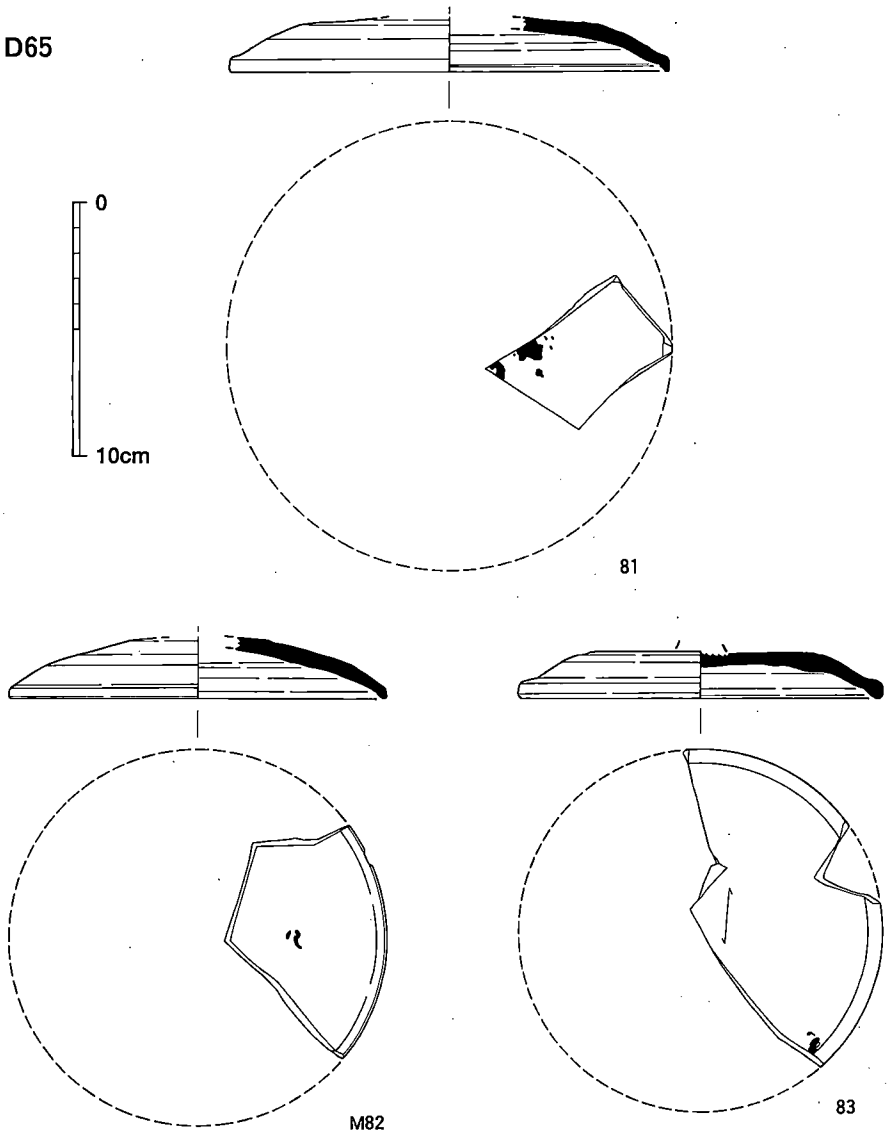


第178図　転用硯実測図④（1/3）

存存高は２㎝である。胎土には少量の砂粒を含み、焼成良好で黄色を帯びる灰色を呈する。

117は口縁部の大半を失うが底部はほぼ残る。内底面には不定方向の多くの擦過痕があり、器面は平滑である。底部はヘラ切り底で、ナデ調整を施す。口径は19.2㎝に復原され、器高は2.2㎝である。胎土には少量の石英粒等の細砂粒を含み、焼成良好で、黄灰褐色を呈し、口縁部は灰色である。

118は1/3程を残し、欠損する。内底面には不定方向の多くの擦過痕があり、器面は平滑である。底部はヘラ切り底で、板目の圧痕が残る。口径19㎝、器高2.3㎝に復原される。胎土に



第179図　転用硯実測図⑤（1/3）

少量の砂粒を含み、焼成良好で黄灰褐色を呈する。

60～63は53号土坑から出土した。60・63は埋土上層、61・62は下層から出土した。ともに、坏蓋の破片である。

60は、内面に不定方向の擦過痕が多く観察され、器面は平滑である。口径13.6cmに復原される。胎土に砂粒を含み、焼成良好にして硬質で、内外面とも灰色である。

61も内面に不定方向の擦過痕が多く観察され、器面は平滑である。口径16cmに復原される。

胎土に石英粒等を多く含み、焼成良好で内外面とも灰色～茶灰色を呈する。

62は小片で、内面に不定方向の擦過痕が多く観察され、器面は平滑である。口径14.8cmに復原される。胎土に砂粒を含み、焼成良好にして硬質で、内外面とも灰色である。

63も内面に不定方向の擦過痕が多く観察され、器面は平滑である。口径は18.2cmに復原される。胎土はわずかに砂粒を含む程度で精良であり、焼成良好で黄灰褐色を呈する。

77～83は65号土坑から出土した。80・81は埋土上層、77・78・79・82・83は下層から出土した。内４点に墨痕が残る。

77は内面に不定方向の擦過痕が観察され、器面は平滑である。口径は径15cm、器高2.8cm程に復原される。外面の周縁に幅1.5cm程の範囲は、灰をかぶり黒色に変色しており、重ね焼きしたことを示している。胎土に少量の微砂粒を含み、焼成良好で暗灰色を呈する。

78は撮みを残す小破片である。内面は不定方向の擦過痕が観察され、器面は平滑である。口径14.6cm、器高２cmに復原される。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成良好で灰色を呈する。

79は極めて小片であるが内面に墨痕を残す。内面は不定方向の擦過痕が観察され、器面は平滑である。口径は16cmに復原される。胎土は精良で微砂粒を僅かに含み、焼成良好で緑灰色～暗褐色を呈する。

80も小片で歪みがある。内面に重ね焼きの痕跡が残る。胎土には細砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を呈する。口径16cm程に復原される。

81は極小片であるが、口径17.7cm程に復原される。内面に墨痕が遺存する。胎土は精良であり、焼成は良好で堅緻にして、黄灰色を呈する。

82も81とほぼ同様である。墨痕が残るが墨書土器とは認定できず、転用硯の範疇で説明することとする。口径15cm程に復原される。胎土は精良であり、焼成良好で、内面は黄茶色、外面は淡灰色である。

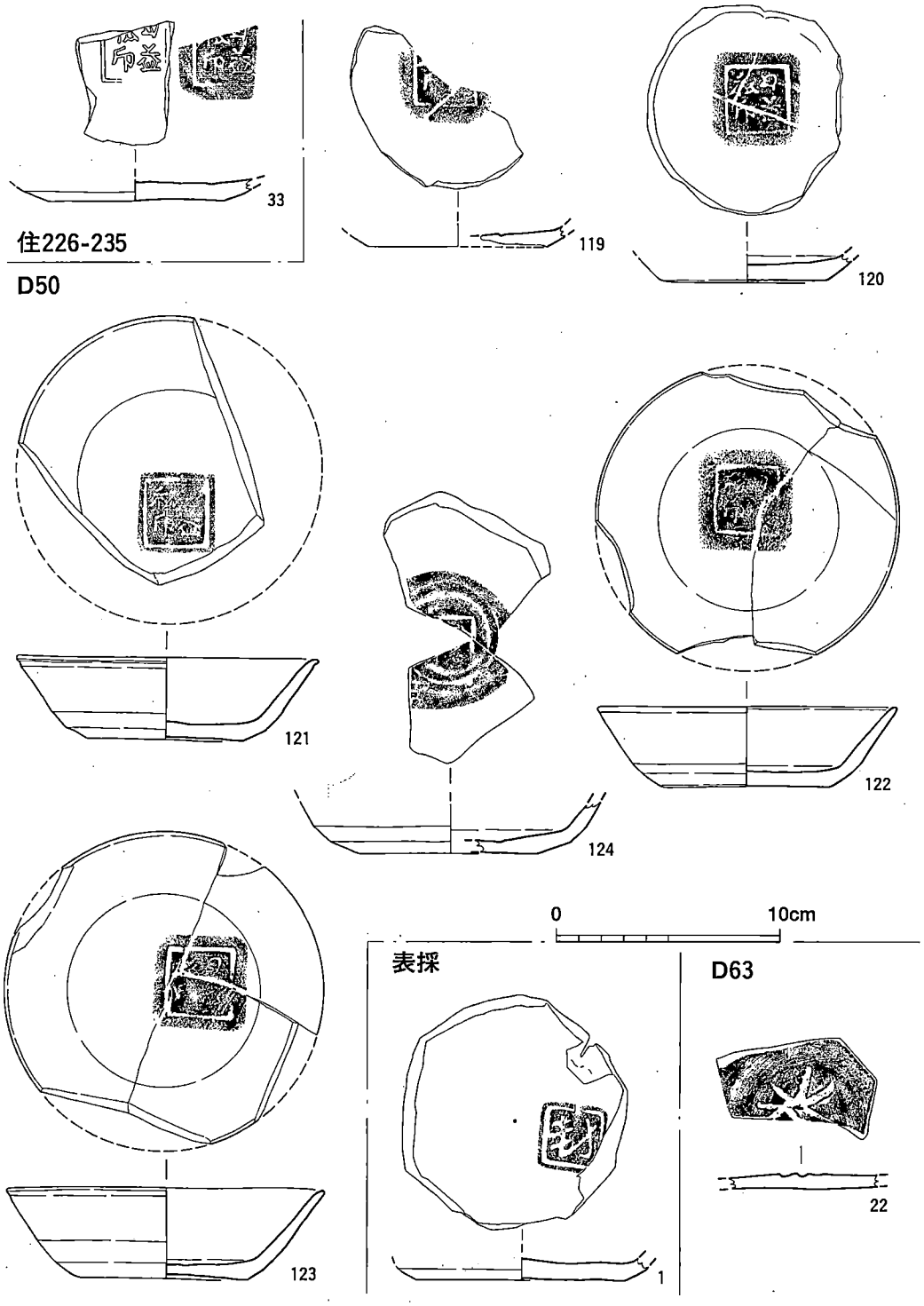
83も墨痕と思われる痕跡を口唇部付近に残す。不定方向の擦過痕があり、器面は平滑である。口径は14.3cm程に復原される。胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成良好で灰色を呈する。

刻印土器（図版65・66、第180図　住226～235－33、土50－119～124、１、22）

昨年度報告分に156・200号住居跡、29号土坑、１号井戸出土の押印のある土器と、35号土坑出土の「刻書土器」があった。今回は、さらに226～235号住居跡、50号土坑、採集品の押印された土器と63号土坑の刻印された土器とを報告する。

これらは昨年報告例と同様、硬質の土師器の坏か皿の内底面に残っているが、当然のことながら土器を成形したあと生乾きの時に施したものである。もとの印鑑の材質はやはり、印された枠・字体からみて銅、つまり銅印であったと思われる。

住226－235の33は226～235号住居跡一帯出土の坏で、外底部と体部下端は反時計回りの回転



第180図　刻印土器実測図（1/3）

ヘラケズリ、内底部はナデを施している。復原底径7.8㎝。刻印は内底面のほぼ中心にあり、「日益私印」の「日」と「私」の字が半分ほど欠けている。方形印面の内法は27.5㎜である。

土50－119～124は50号土坑の出土品で、いずれも坏であり、内底面に方形の「日益私印」の押印がある。この6個体はともに外底部と体部下半が反時計回りの回転ヘラケズリで、内底面はナデを施している。口縁から体部内外は回転ナデである。胎土は砂粒を含むが良質であり、焼成は良好。全体に淡い黄褐色で、橙黄色の部分もある。

119は底部の約1/3の破片で、外底面が剥離している。内底面のほぼ中央に刻印があり、「日」は完全に欠失し、「益」と「私」もごく一部しか残存しない。残存する底辺の一辺は29㎜を測る。復原底径8㎝。南半下層出土。

120も底部のみの破片で、「日益私印」の文字が最もよく読みとれる資料である。外面には化粧土を掛けている。底径7.3㎝。刻印の中心がほぼ土器の中心にあたる。印面は一辺29～31㎜の方形である。南半下層出土。

121は底部が9/10ほど、体部が3/7ほど残存する。刻印は完存するが、押印のあとにナデているため「日」の文字は全く見えない。この刻印は土器の中心にではなく偏って印されており、上辺の中央付近が土器の中心にあたる。印面は一辺が30～31㎜を測る。復原口径13.5㎝、底径7㎝、器高3.7㎝。下層出土。

122は口縁の一部を欠失し全体で約7/10ほどが残る。刻印は完存するが、押印のあとにナデているのと割れ目とであまり鮮明でなく、「益」の文字はほとんどわからない。この刻印は土器の中心にではなく偏って印されており、「印」と「益」の中間あたりが土器の中心になる。印面は一辺が29～32㎜を測る。復原口径13.4㎝、底径7.4㎝、器高3.6㎝。南半下層出土。

123は200号住居跡と50号土坑の出土品が接合したもので、昨年度でも報告したが再度掲示し説明しておく。ほぼ完形に復元できる個体で、口径14.4㎝、底径7.5㎝、器高4㎝。これも刻印は内底面の中心にはなく、「日益私印」の「印」の字の左枠外付近が土器の中心にあたる。印面は一辺30～32㎜を測る。やはり押印のあとにナデており、「日」字以外は読みとりにくい。50号土坑は南半下層からの出土である。

124も昨年度報告済みのもので、29号土坑と50号土坑の出土品が接合している。体部下端の回転ヘラケズリが強くなされていて丸みを持った立ち上がりになる。復元底径8㎝。破片のため「日益私印」の「私」の文字はなく、「日・印」もごく一部が見えるのみである。「益」字は残るがナデのためおぼろげである。これも刻印は内底面の中心にはなく、「日」の字の左下隅付近が土器の中心にあたるらしい。印面は右辺の一辺が32㎜である。50号土坑は下層出土で、29号土坑の破片は二次熱を受けている。

1は採集資料で、坏であろう。上述の例と同じく、外面は反時計回りの回転ヘラケズリ、内面はナデである。内底面に「封」の刻印があり、右下隅部分を欠失するが、ほぼよく残ってい

るとしてよい。この刻印は土器の中心からかなりはずれて押されており、土器の中心は刻印左片上方の左側にある（図の黒点）。印面は残存する二辺が26㎜と27㎜を測る。

22は63号土坑出土の坏か皿の破片で、内底面にイネ科と思われる植物の茎を用いて施した文字らしき記号がある。単なる刻みではなく、筆運びは文字を思わせるが、文字であったとしても何であるかわからない。外底面は反時計回りの回転ヘラケズリである。外面には化粧土を掛けている。

焼塩土器（図版67～71、第181～184図）

昨年度報告に比べて今回は量が多い。今年度報告に関する遺構からの出土総量は211点を数え、76点を図示した。とくに50号土坑からは81点もの破片が出土している。昨年度報告分は13点であったが、報告もれがあり、それについては「Ⅴ」に掲示する。宮原遺跡全体では260点という数量を得たが、本来はもっと多いであろう。

器形としては円筒形のものとすり鉢状のものとがあり、後者が圧倒的に多い。これらは等しく砂粒の多い胎土で、外面は指頭によるナデが施され、内面はナデのみのもの、布目痕があるもの、二枚貝腹縁による擦過痕があるもの、の３種類がある。基本的に黄橙色系の色調であるが、赤褐色～茶灰色をなすものもある。ほとんどが二次熱を受けているが、強い熱を受けたものが後者の赤茶色系の色調をなしているとみてよい。以下、遺構ごとに説明するが、全て破片資料であり、口径等の数値は復原値であって、なかにはやや不安なものもある。またとくに断らない限り二次熱を受けている。

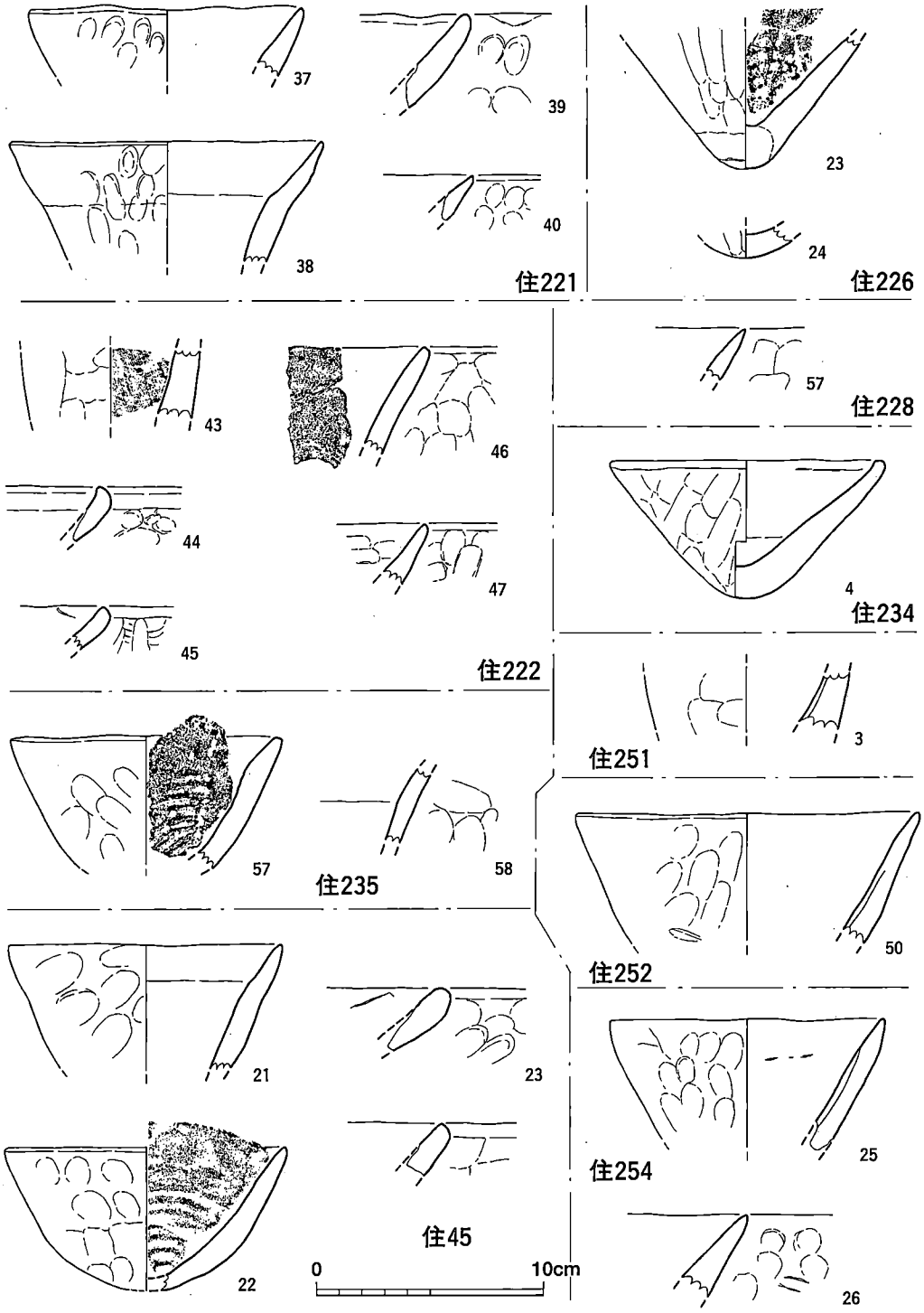
221号住居跡（37～40）　37は口唇部が尖り気味のもので、口径12㎝。38はかなり強い二次熱を受けており、口縁周辺は灰褐色に変色している。口径13.8㎝。下層出土。39は器壁の厚い資料で、これも強い二次熱を受け、外面口縁下には白っぽい析出物が付着している。床下層出土。40はあるいは37と同一個体かもしれない。カマド内出土。他に実測できない破片が７点ある。

222号住居跡（43～47）　43は復原径がやや小さい感もあるが、円筒形になるものであろう。最大径7.8㎝。内面には粗い布目痕がある。床面下層出土。44・45は口唇部が丸みを持つ。44は強い二次熱で器表がボロボロである。床下層出土。46の内面は二枚貝条痕ののちにナデを施している。床面下層出土。47の口唇はやや尖り気味である。他に実測できない破片が12点ある。

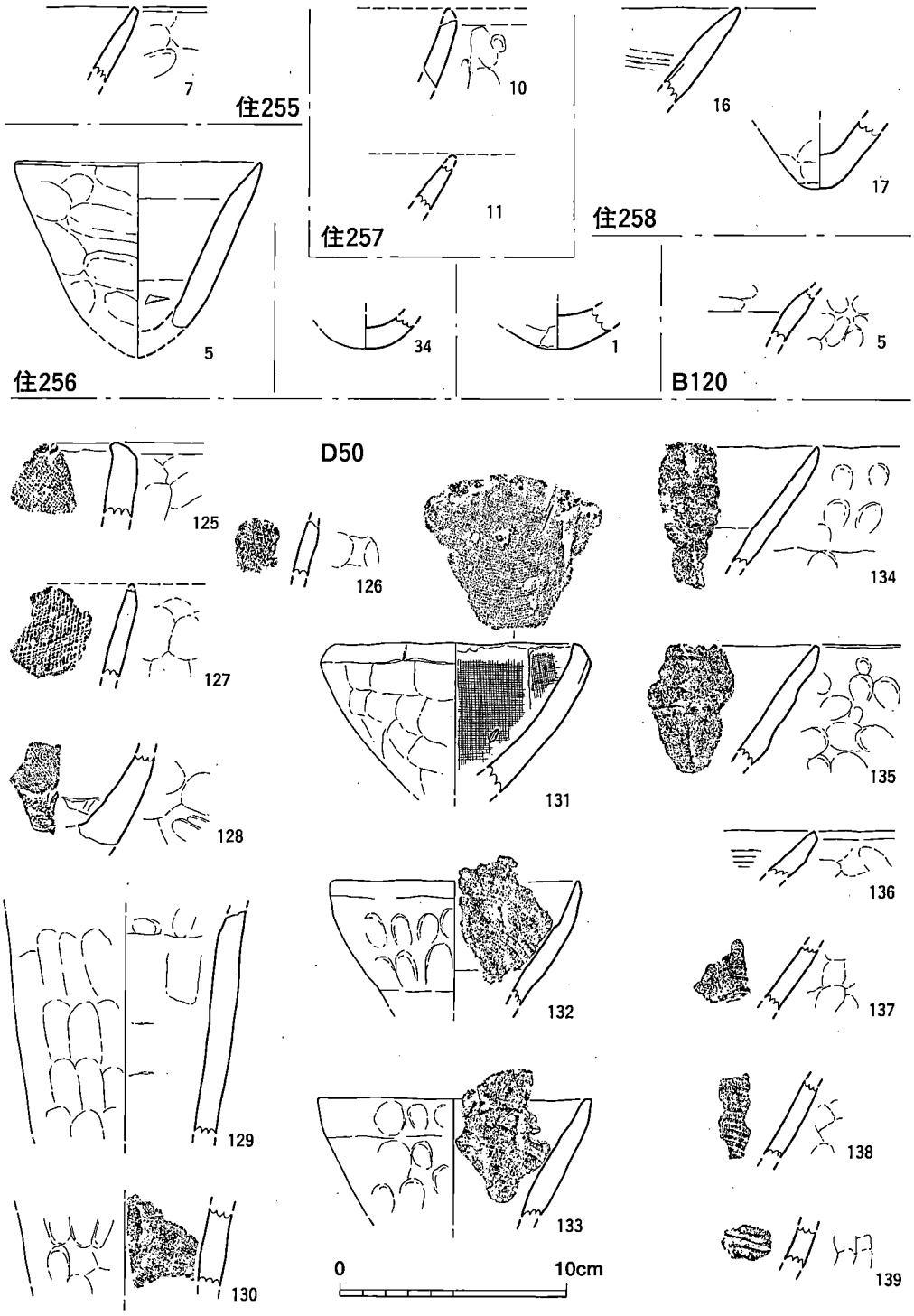
226号住居跡（23・24）　23は尖底気味の破片で、内面は二枚貝条痕ののちにナデを施している。カマド周辺出土。24の内面は布のようなものでナデを行っている。二次被熱は不明。他に実測できない破片が６点ある。

228号住居跡（57）　口唇部の尖った資料である。二次被熱は不明。他に実測できない破片が５点ある。

234号住居跡（４）　今回報告のなかでは最も残存度のよいもので約2/3が遺存する。口縁部



第181図　焼塩土器実測図①（1/3）



第182図　焼塩土器実測図②（1/3）

は内湾する所と、直線的に伸びる所、片口状の所とがあり、一定しない。赤茶色を呈するが、口縁付近で灰青褐色に、外底部付近で白黄色に変色した部分がある。口径12.2cm、器高6cm。他に実測できない破片が1点ある。

235号住居跡（57・58）　57は碗のような器形になる。内面下半は二枚貝の条痕ののちナデを施す。口径11.4cm。58は白っぽい破片である。他に実測できない破片が8点ある。

245号住居跡（21～24）　21は二次熱で赤変したところがある。口径12cm。22は碗形をなす。内面下半は二枚貝の条痕ののちナデを施す。これも二次熱で一部に赤変したところがある。口径12.2cm、器高6.2cm。埋土中、床面、カマド下層掘り込みから出土した破片が接合している。23・24は内面の器表が剥離している。24の内面は黒ずむ。他に実測できない破片が3点ある。

251号住居跡（3）　円筒形になる器形の底部に近い部分かと思われる。残存の最大径は9cm。

252号住居跡（50）　やや大きめに復原しているかもしれない。口径15cm。他に実測できない破片が8点ある。

254号住居跡（25・26）　ともに口唇部が尖る形状で、強い二次熱を受けている。25の口径は12cm。他に実測できない破片が1点ある。

255号住居跡（7）　口唇部に面を持つ破片である。他に実測できない破片が1点ある。

256号住居跡（5）　体部の器壁は厚いが、口唇部は尖る形状をなす。強い二次熱を受けている。口径は10.8cmで、器高は8.5cmほどになろう。

257号住居跡（10・11）　ともに口縁付近の破片であるが、端部を欠失する。他に実測できない破片が2点ある。

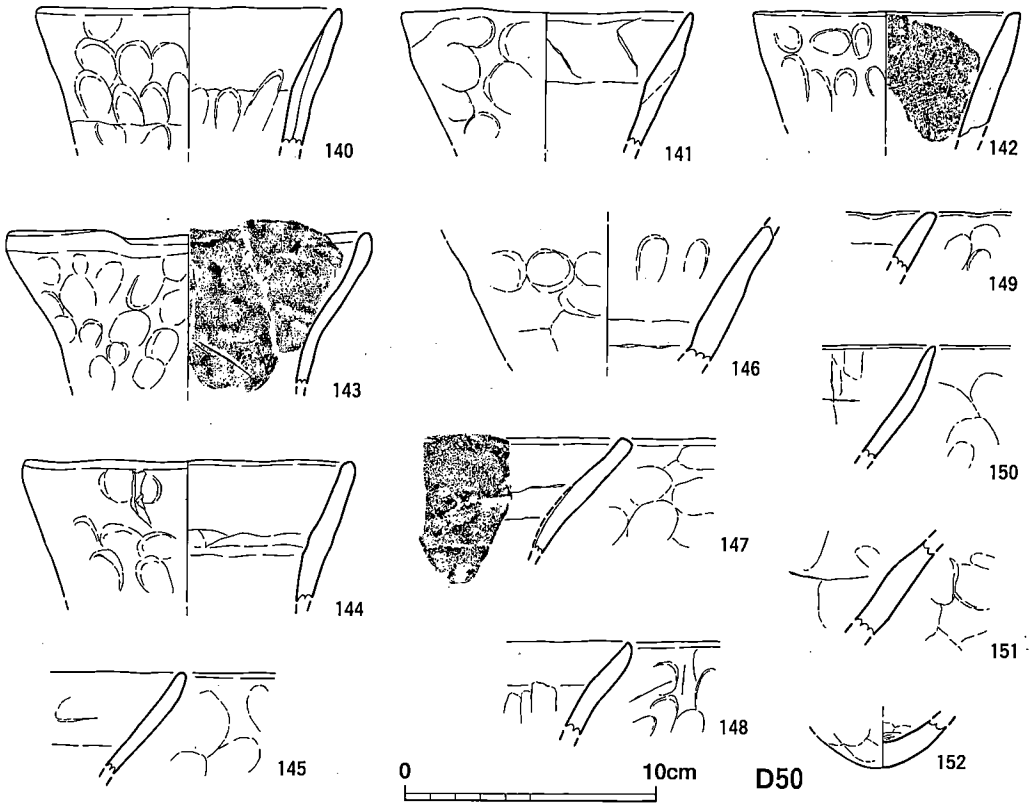
258号住居跡（16・17）　16の内面は擦過風のナデである。外面は器表が剥離している。17は16の底部かもしれない。外面に白い析出物が付着している。

226～235号住居跡（34）　丸底の器形であるが、器表はかなり磨滅している。どの住居に属していたかは不明である。他に実測できない破片が6点ある。

228～229号住居跡（1）　228号か229号のいずれかの住居跡に伴う資料である。色調は灰青褐色を呈し、須恵質と称してよいものである。

120号掘立柱建物跡（2）　P12から出土した。胴部片で、外面は二次熱で橙茶色に変色している。

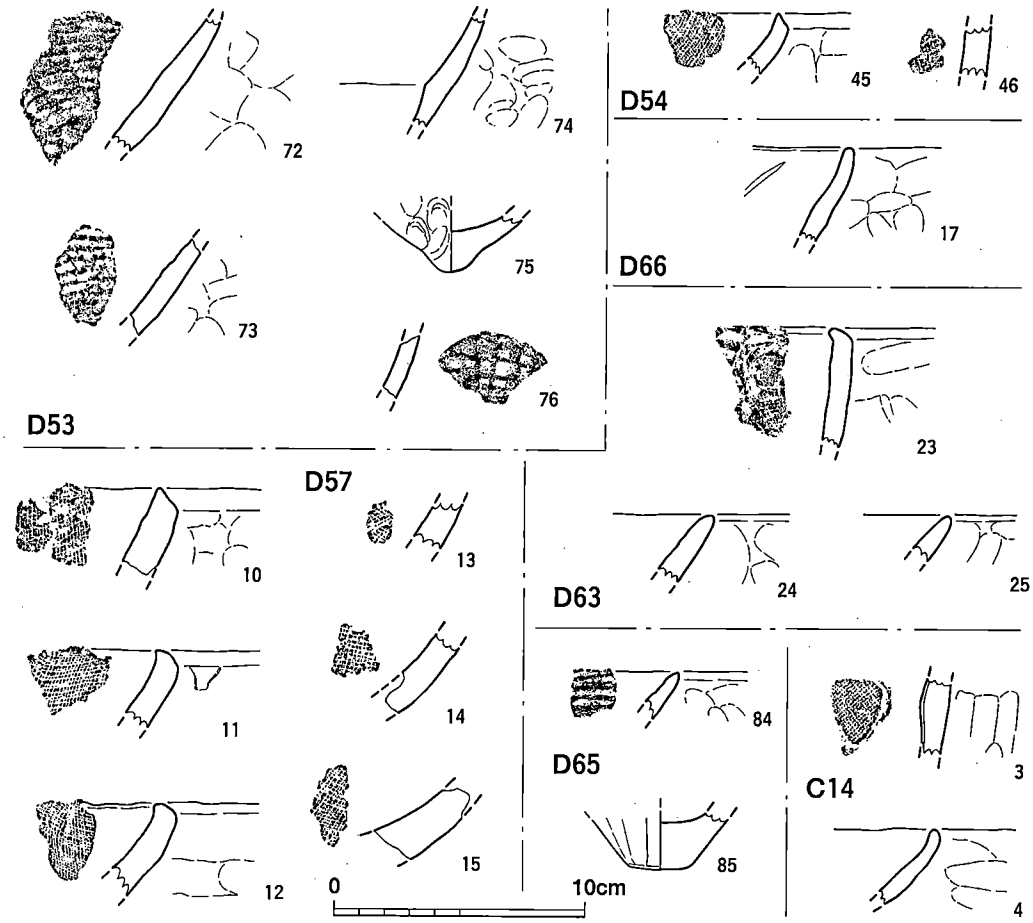
50号土坑（125～152）　125～130は円筒形をなす器形であろう。125～128の内面は布目痕がある。125は器壁が厚い。布目は1cmあたり9本を数える。口径は内径で6cmくらいかと思われる。126・127は器壁がやや薄い。126の布目は1cmあたり7～9本、127は7～8本を数える。127は白っぽい土器である。128は底部に近い部分で、布目は1cmあたり15～19本と細かい。129・130は内面に布目はないが、布か皮のようなものを使ってナデを行っている。129の最大径10.6cm、130は9.4cm。



第183図　焼塩土器実測図③（1/3）

131は器壁が厚く、内面には布目痕がよく残り、また籾圧痕がある。外面は一部にミガキに近い調整の所がある。口径10.5cm。132～139は内面に二枚貝の腹縁で擦過した条痕を見る資料である。条痕の上はナデを行っている。132は133・134とよく似た破片で、とくに134は同一個体かもしれない。口径10.6cm。133は口径12cm。135の外面は凹凸が著しい。137の内面は一部に布目が見えるが、これはナデの際に偶然に付いたものらしい。140～143・150の内面は布か皮のようなものでナデを行っている。140・141は強い二次熱を受けている。143の外表面は凹凸が著しい。147は内面の剥離面にも調整した痕跡がある。また二次熱で下半部は桃色に変色している。150の口縁周辺は強い熱で自然釉が掛かったような状態となり灰緑色を呈している。口径は140が12cm、141が11.6cm、142が10.6cm、143が14.4cm、144が13cm。以上は125・128・133・134・137・143・147・149・150が上層からの出土で、他は下層出土である。この50号土坑からは81点の破片が出土し、他に図示しえないものが53点あった。

53号土坑（72～76）　72・73の内面は二枚貝の腹縁で擦過した条痕がある。75の底部は乳頭状に突出している。76は外面に格子目タタキを施し、内面はケズリもしくはナデである。二次



第184図　焼塩土器実測図④（1/3）

熱を受けているが、通常の焼塩土器とは異なる。単なる土師器の甕かもしれないが、ここでは参考として掲図する。これらはいずれも下層からの出土である。他に3点の図示できない破片があった。

54号土坑（45・46）　ともに内面に布目痕を有する。45は50号土坑の131と同様の器形になろうかと思うが、器壁の厚みは異なる。布目は1㎝あたり10本を数える。46は円筒形になるものだろう。布目は粗い。ともに下層の出土。他にもう1点の図示しえない破片がある。

56号土坑（17）　胎土は砂っぽくザラザラしている。下層出土。他に2点の図示しえない破片がある。

57号土坑（10～15）　口縁3点、胴部片3点の6点を図示するが、口縁の形態に若干の差異はあるもののこれらは同一個体の破片と思われる。内面に布目痕を有し、よじれた所もあるので均一ではないが1㎝あたり9本前後を数える。

63号土坑（23～25） 23は内面にかなりよじれた粗い布目を有する。円筒形になるものだろう。24は内面が剥離している。25は24と同一個体の可能性もあるが、こちらの方がより風化している。全て下層。他に図示しえない破片が2点ある。

65号土坑（84・85） 84は内面に二枚貝条痕がある。85は二次被熱は不明。ともに最下層の出土。他に図示しえない破片が1点ある。

14号土壙墓［C14］（3・4） ともに上層からの出土。3は円筒形の器形になろう。内面に1㎝あたり9本の布目痕がある。二次被熱は不明。4は器表が剥離している。

以上のほかに230号住居跡1点、233号住居跡3点、247号住居跡6点、250号住居跡1点、253号住居跡1点の出土があるが、これらは図示できない。

瓦（図版72、第185図）

平瓦2点、丸瓦6点の計8点が出土している。出土位置が明確なものは、4（D67）、7（住249）、8（住215）の3点だけで、他は表採あるいは表土から出土したものである。

1の平瓦片は調査区中央部での表採品である。表面には目の細い布目が残り、裏面には肉太の正格子の叩きが残る。胎土に石英粒等の砂粒を少量含み、やや軟質に焼き上がり、黒灰色を呈する。

2は調査区北部の表土から出土した平瓦片である。1と同様に表面には目の細い布目が残り、裏面には肉太の正格子の叩きが残る。胎土に石英粒等の砂粒を少量含み、焼成良好で硬質であり、淡灰色を呈する。

3も調査区北部の表土から出土した丸瓦片である。カマドの煙道に使用されていたためか、二次加熱のため、表裏面はもろく、端部は赤変し、部分的に煤が付着している。胎土には大粒の砂粒が目立ち、淡茶灰色を呈する。

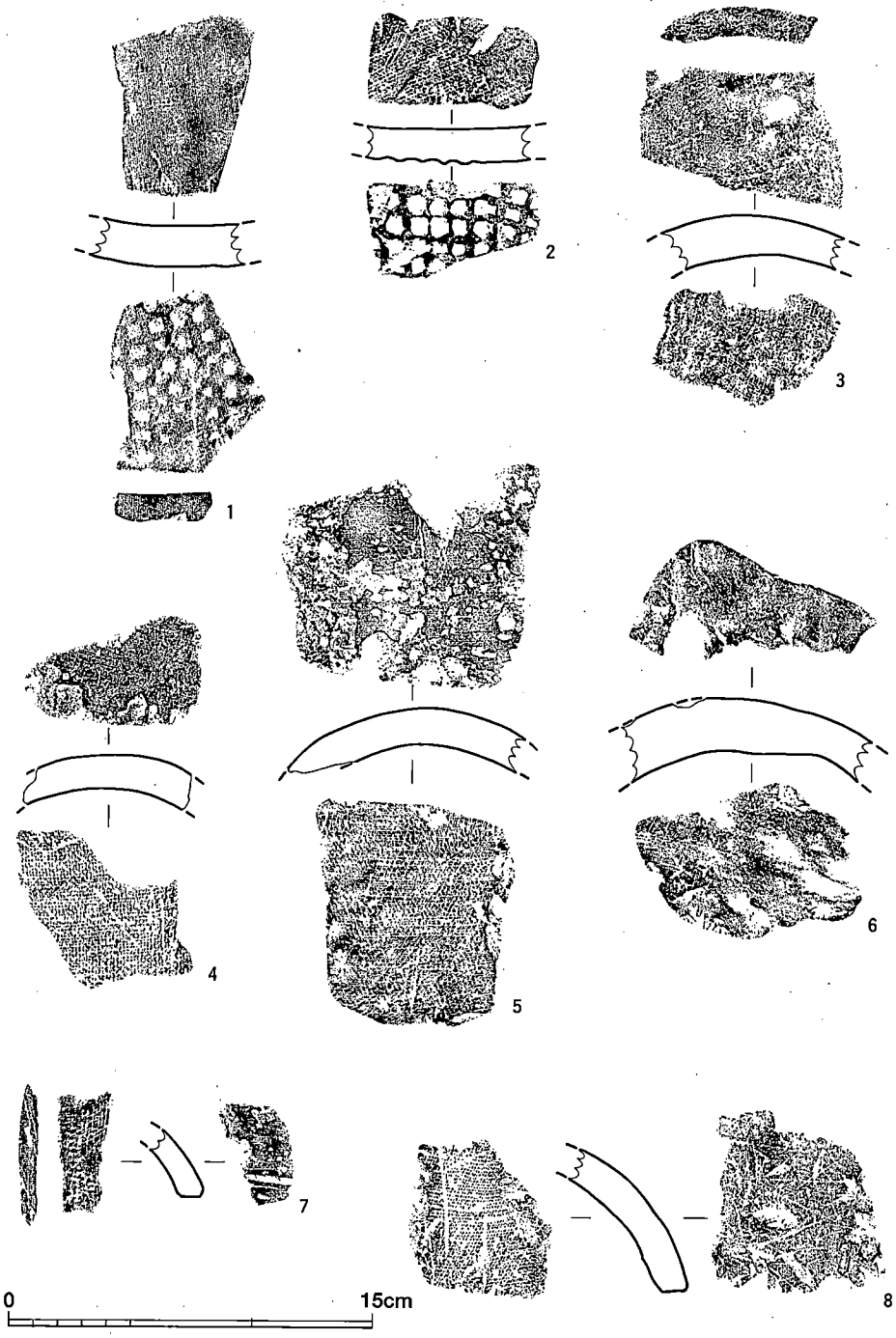
4は67号土坑から出土した丸瓦片である。3と同様にカマドの煙道に使用されていたためか、二次加熱のため、表裏面はもろく、赤変して表面に煤が付着している。胎土には大粒の砂粒が目立ち、淡茶灰色を呈する。

5は調査区南西部での表採品である。この丸瓦片も表裏面がもろく剥落している。カマドの煙道に使用されたものと思われる。胎土は極めて精緻で、灰白色を呈する。

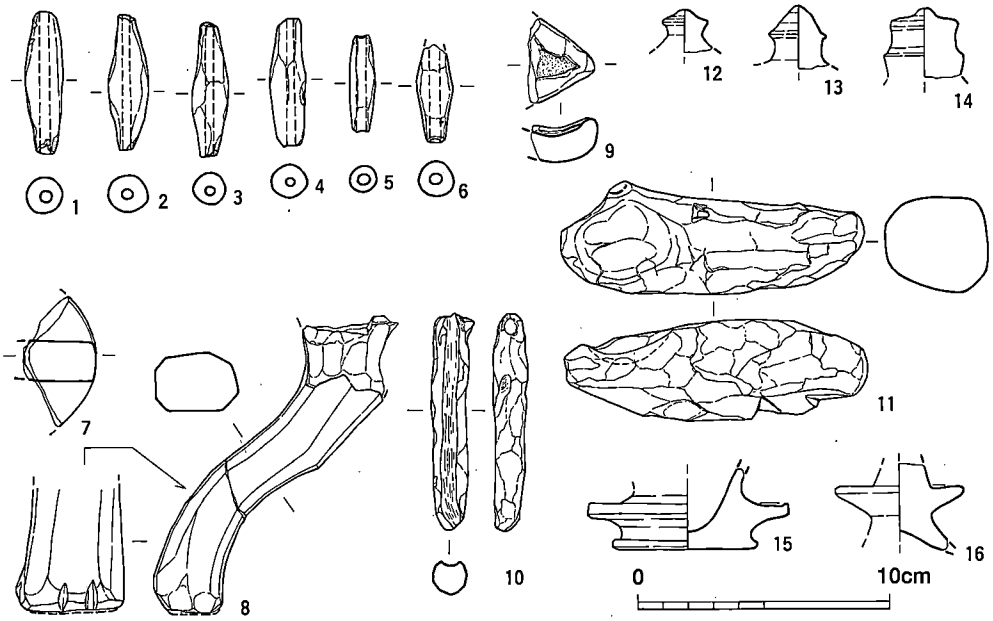
6は調査区北部の表土から出土した丸瓦片である。カマドの煙道に使用されていたようで、二次加熱のため、赤変して表面に煤が付着している。灰褐色を呈する。

7は249号住居の覆土からの出土品である。胎土は極めて精緻で、黒灰色を呈する。焼成が悪いためか、あるいは二次加熱のためか、軟質である。

8は215号住居の覆土からの出土品である。煤の付着はなく、もろくもないが、表裏面が剥落しており、カマドの煙道に使用されたものと思われる。



第185図　瓦実測図（1/3）



第186図　土製品実測図（1/3）

土製品（図版73、第186図）

16点図示しているが、各々が出土した遺構は次のとおりである。

・224号竪穴住居跡－16	・235号竪穴住居跡－７
・255号竪穴住居跡－９	・257号竪穴住居跡－１
・48号土坑－11	・50号土坑－２・３・５・10・13・14
・53号土坑－15	・10号土壙墓－４
・11号溝－８	・ピット－６・12

１～６の土錘は、本遺跡では通常見られる形状のもので、長さ4.5cm～5.5cm程である。表面は強いナデによる稜がある。総じて、胎土に微砂粒を含み、焼成良好で淡茶灰色～黒灰褐色を呈する。

７は透し孔を含めて過半を欠損する土製紡錘車である。現存部の幅2.8cm、厚さ1.6cmである。胎土に細砂粒を含み、焼成良好で淡橙褐色を呈する。

８は鉢状の器の脚部である。下端部はわずかに剥離するが、ほぼ旧状を保っている。ヘラによる二つの切り込みにより、３つの爪を表現する。脚部は全体にヘラ削り後、ヘラ磨きを施しており、器面は極めて平滑である。胎土には、１～２㎜の砂粒が若干目につくが極めて精良である。焼成も良好で、淡茶灰色を呈する。

９は把手であろうと思われる。端部は粘土を折り曲げて成形している。胎土は微砂粒を含み、焼成はやや甘く、明茶灰色を呈する。

10・11は手捏による土製品である。10は径14㎜、長さ88㎜程の棒状のもので、側面に幅６㎜前後、深さ１㎜程の凹線状の溝を作り、上端部側面には小さな突起をつまみ出している。胎土は精良で砂粒をあまり含まず、焼成良好で淡茶灰色を呈する。11はスプーン状のものである。長さ12.2㎝、最大径４㎝程で、図の左側は窪みを作り、右側の下面はヘラでダイナミックに粘土を切り取っている。胎土に石英を多く含み、焼成良好で赤褐色～淡茶灰色を呈する。

12～13は香炉の撮みであろう。撮みの稜の部分の径と現存高はそれぞれ、12；18㎜・17㎜、13；23㎜・25㎜、14は上段の径27㎜、下段の径32㎜、現存高28㎜である。胎土に砂粒が目につかず極めて精良である。焼成も良好でしっかりと焼き上がり、12は淡茶褐色、13は生地は淡茶灰色であるが表面に化粧土かと思われる明赤茶褐色の部分があり、14は淡茶色である。

15・16は灯明皿である。15は口縁部を欠くが、およその形状を窺うことができる。底部径5.8㎝、鍔部径8.1㎝、現存高3.2㎝である。16は鍔部径5.2㎝、現存高3.4㎝である。ともに、胎土に少量の砂粒を含み、焼成良好で、15は明茶褐色～白黄茶色、16は白黄茶色を呈する。

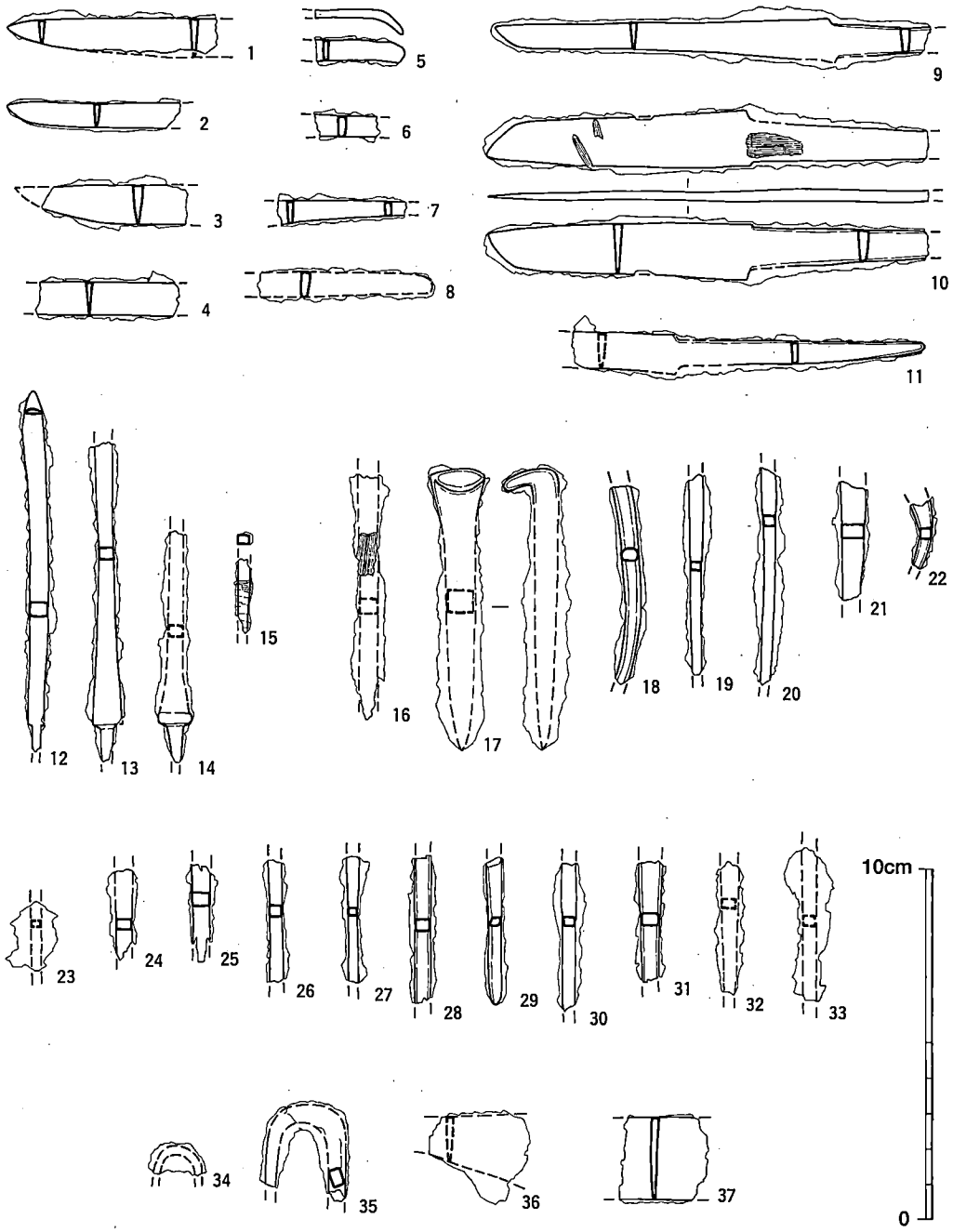
鉄製品（図版75、第187図）

37点図示している。各々を検出した遺構ごとに整理すると以下のとおりである。

- 221号竪穴住居跡－５
- 222号竪穴住居跡－３・６・26
- 226号竪穴住居跡－31
- 229号竪穴住居跡－25
- 230号竪穴住居跡－16
- 235号竪穴住居跡－33
- 243号竪穴住居跡－８
- 245号竪穴住居跡－27
- 247号竪穴住居跡－36
- 250号竪穴住居跡－２
- 252号竪穴住居跡－11・13・14・15・18・21・23・30・35
- 253号竪穴住居跡－20・29
- 254号竪穴住居跡－32
- 257号竪穴住居跡－19
- 226～235号竪穴住居跡－４・７・12・22・24・34
- 49号土坑－９・10
- 56号土坑－1
- 65号土坑－17

器種別には、刀子11点（１～11）、鏃４点（12～15）、釘18点（16～33）、鎌と思われる物２点（36・37）、用途不明品２点（34・35）である。

１～11の刀子は、刃部片（１～４）、茎片（５～８）、刃部～茎片（９～11）で完形品はない。ただし、９・10は刃部が、11は茎が完存する。１～８の残存長・幅は、１；６㎝・０・９㎝、２；５㎝・0.7㎝、３；4.2㎝・1.1㎝、４；4.1㎝・0.9㎝、５；3.1㎝・0.6㎝、６；1.9㎝・0.6㎝、７；3.6㎝・0.7㎝、８；５㎝・0.7㎝である。５は茎尻を折り曲げている。９は現存長12.4㎝、刃部長9.7㎝、茎の現存長2.7㎝ の両関の刀子である。刃部は研ぎべりし、幅はふくら部付近で７㎜、関部付近で12㎜程である。使い込まれた刀子である。10は現存長12.5㎝で、刃部長7.4㎝、幅1.4 ～1.6㎝、茎の現存長5.1㎝の両関の刀子である。片面の刃部には、藁が



第187図　鉄製品実測図（1/2）

銹着し、茎の部分に木柄の一部が銹着して残っている。11は現存長10cm、刃部長３cm、刃部幅１cm前後、茎長７cmの両関の刀子である。刃部は細く、使い込まれて研ぎべりしている。

12～15の鉄鏃は、破片資料ではあるが15を除き比較的遺存状態は良い。12は茎の大部分を欠くがおよその形状を窺うことができる。13～15も12と同様な形状のものであったと思われる。12は、現存長10.2cm、茎現存長0.7cmである。奈良時代の鉄鏃特有の形態を示している。13は現存長９cm、茎現存長１cmである。13も同様に6.5cm、１cmである。茎15は桜の皮が銹着する。

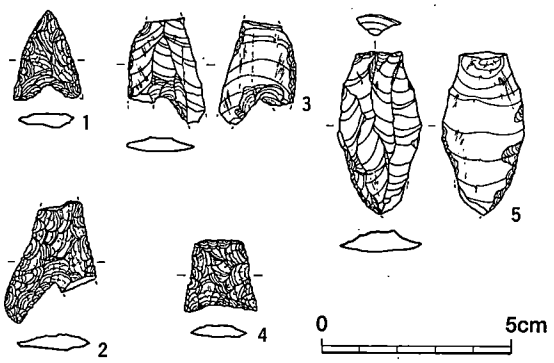
16～33の釘は足の太さによる大～小がある。17が完形品と思われる他は、破片である。17は銹がひどいため不明確ではあるが、全長８cm程で断面は矩形を呈する。他の釘の現存長は、16；７cm、18；5.5cm、19；5.7cm、20；6.2cm、21；3.4cm、22；1.9cm、23；1.8cm、24；2.6cm、25；2.9cm、26；3.5cm、27；3.6cm、28；4.2cm、29；4.3cm、30；4.2cm、31；3.5cm、32；3.8cm、33；4.4cmである。

33・34は破片であるが、残存部はU字形を呈する。34は銹がひどいので不明確だが、横幅14mm、35は23mmである。

36・37は小破片であり、鎌であろうと推定するものである。現存長・幅は、36；３cm・1.2～１・8cm、37；2.4cm・2.4cmである。

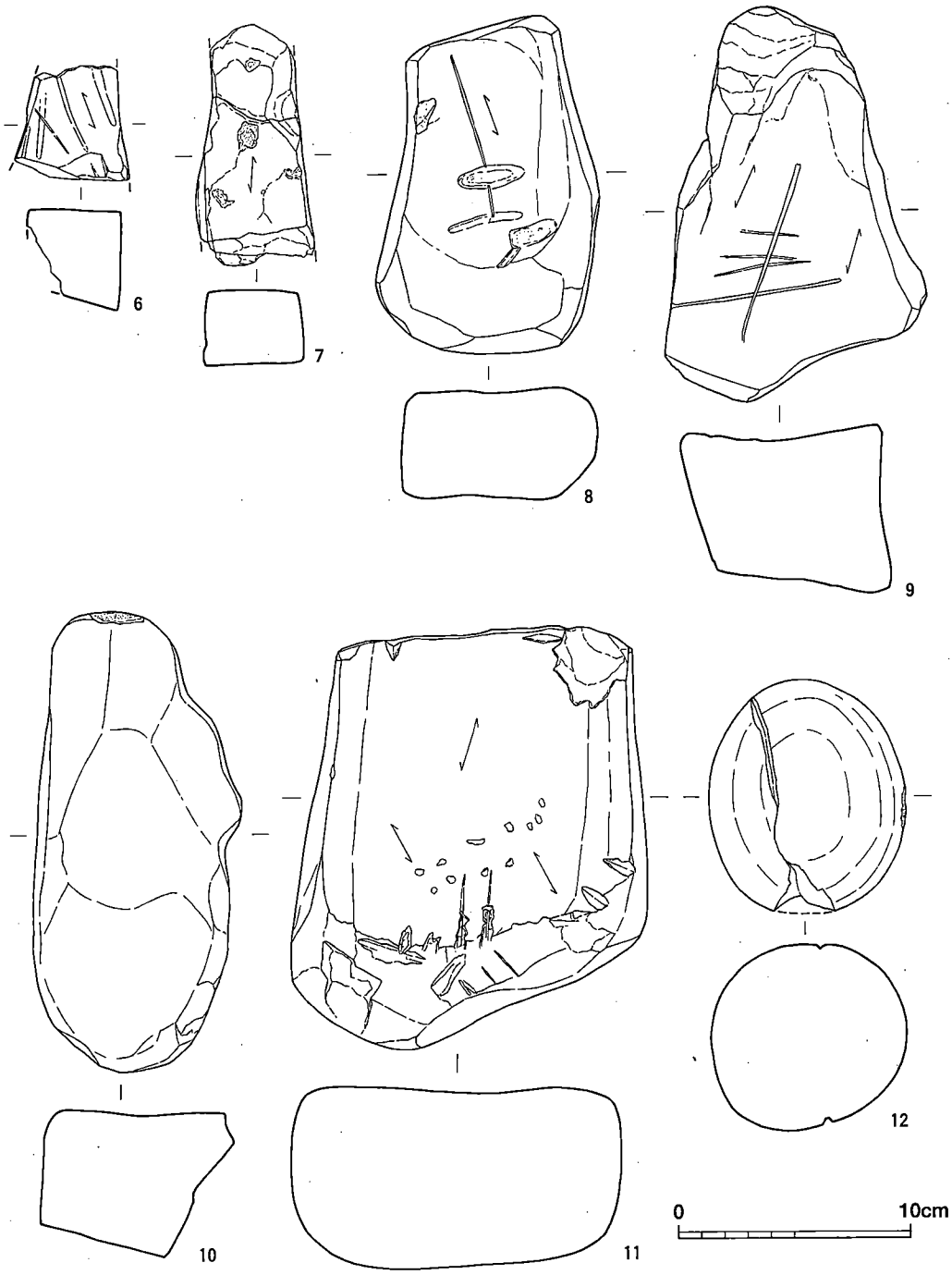
石製品（図版74･75、第188･189図）

１～３は凸基無基式の打製石鏃である。１は片脚端部を欠損するがほぼ完形品である。押圧剥離で薄く仕上げられる。長2.35cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重さ1.1ｇを測る。223号住居の貼床面に突き刺さった状態で出土した。２は深い抉りを持つ大型品で、先端部及び片脚を欠損する。残存長3.2cm、厚さ0.4cm、重さ2.4ｇを測る。225号住居の貼床下層で検出された４号おとし穴から出土した。３は縦長剥片の基部方向を脚部とする。片側縁にのみ細かな調整を加える。残存長2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.41cm、重さ２ｇである。４は石鏃の先端部を欠損した後に上部方向から細かい調整を加え、スクレーパーとして再利用している。長1.9cm、幅1.4～1.9cm、厚さ0.35cm、重さ1.1ｇを測る。211号住居の攪乱土中から出土した。５は縦長の刃器状剥片である。下端部に刃こぼれが観察される。長さ4.2cm、幅2.15cm、厚さ0.5cm、重さ5.6ｇを測る。226～235住居の埋土から出土した。石材は１・２・４が安山岩、３・５は漆黒良質の黒曜石製である。



第188図　石製品実測図①（1/2）

６～11は砥石である。６は245住居の覆土から出土した凝灰岩製の仕上砥である。４面とも



第189図　石製品実測図②（1/3）

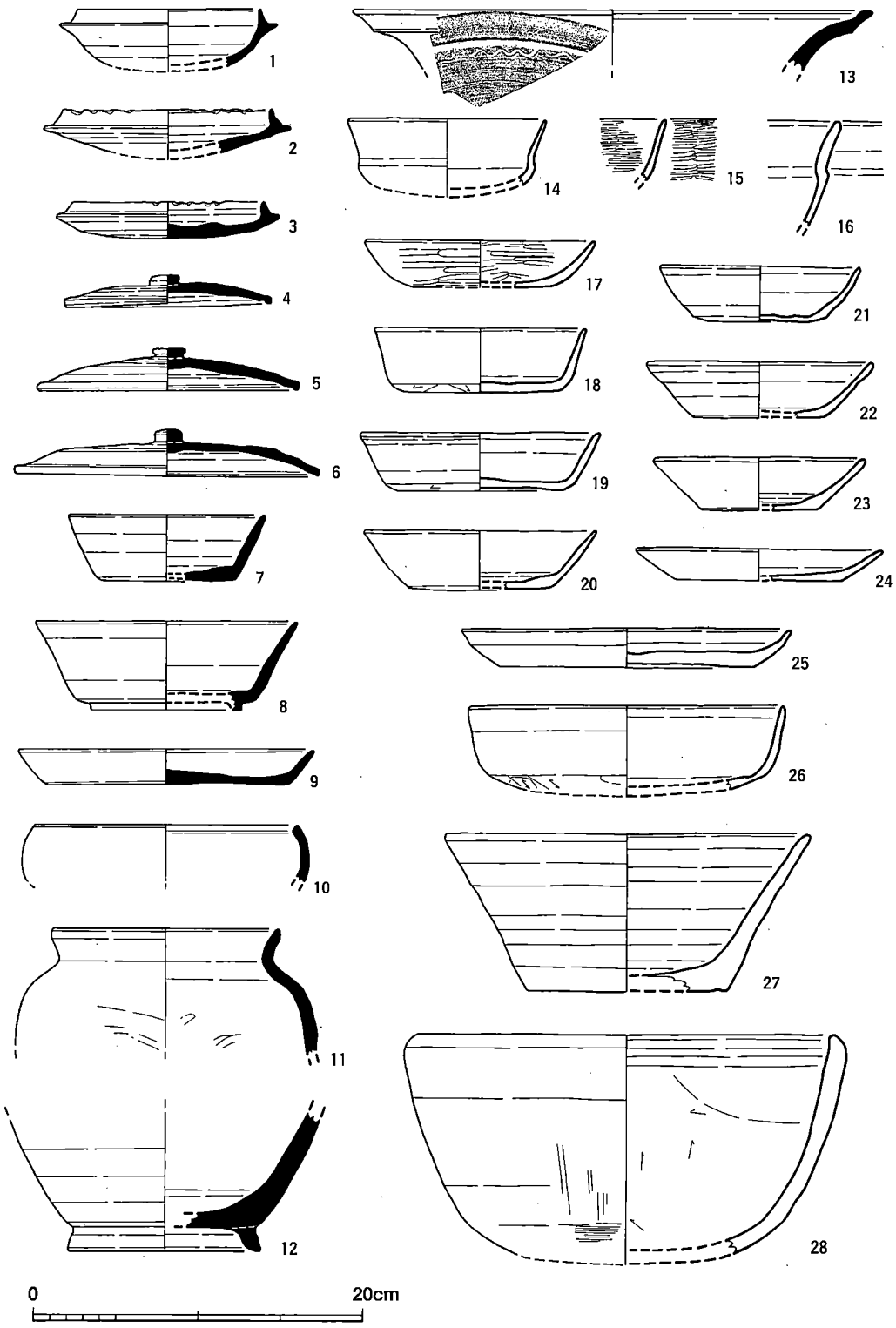
使用され、刃部を立てて研いだ細い溝が走る。7は252号住居の覆土から出土した凝灰岩製の仕上砥である。4面とも使用される。8は244号住居の貼床下層から出土した砂岩製の荒砥である。4面とも使用され、刃部を立てて研いだ細い溝が走る。9は14号土壙墓の埋土上層から出土した砂岩製の荒砥である。4面とも使用され、刃部を立てて研いだ溝が走る。10は砂岩製の荒砥である。カマドの支脚に転用されたようで、図の上部14.5cm程の範囲に、部分的に煤が付着している。11は砂岩製の荒砥である。12は叩石で、火を受けて、表面が赤色化している。

その他出土土器（図版66、第190・191図）

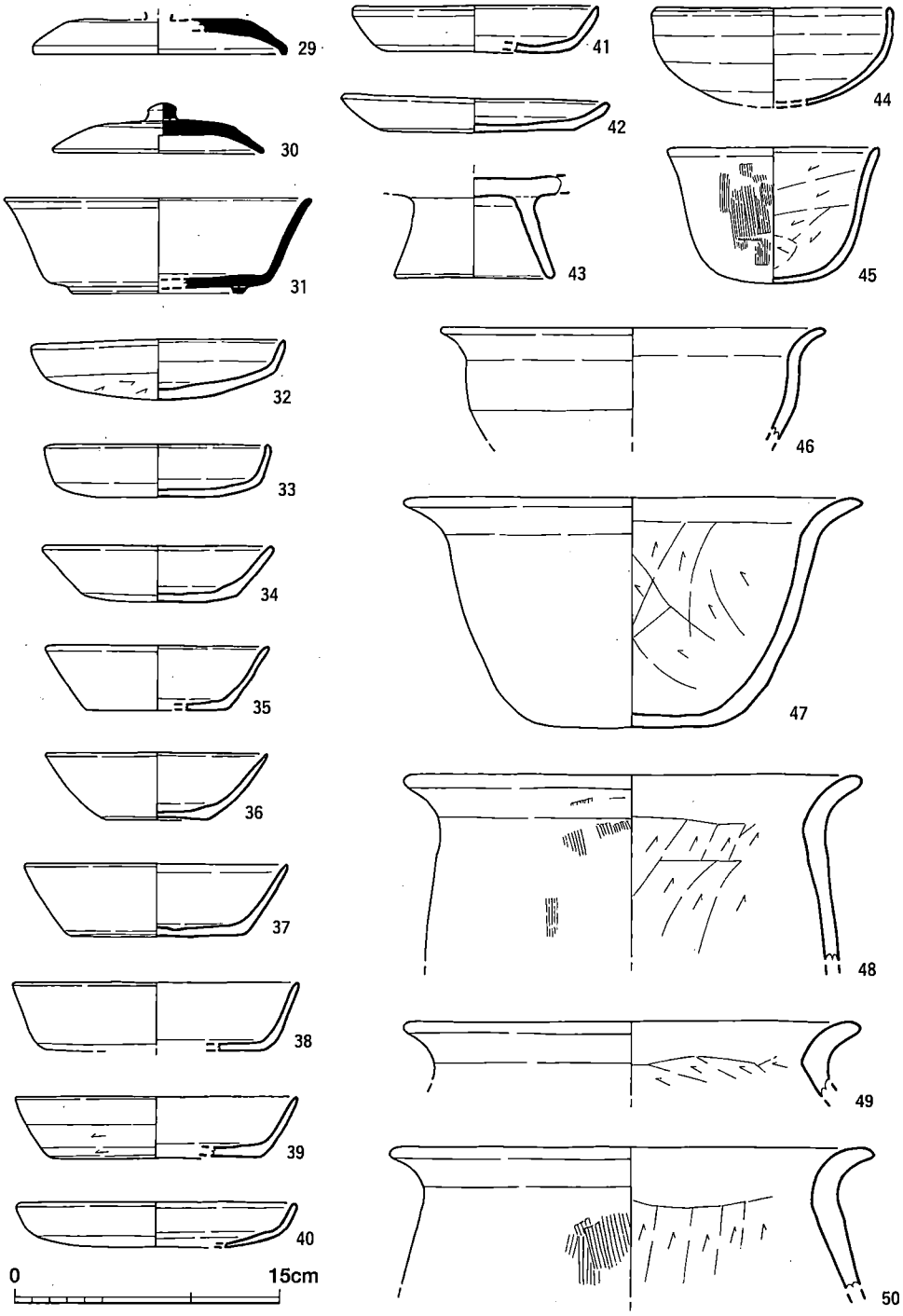
以下に説明する土器は、遺構としてまとまらないピットや、表土等からの出土品である。1～13・29～31は須恵器でその他は土師器である。

1～3・7・8・31の坏身のうち、2・3の口唇部は意識的に打ち欠かれている。口径・器高は、1；11.2cm・3.7cm、2；12.8cm・2.6cm、3；11.8cm・2.2cm、7；12cm・4cm、8；16cm・5.3cm、31；17.4cm・5.4cmに復原される。いずれも焼成良好で灰色を呈する。4～6・29・30は坏蓋である。口径・器高は、4；12.5cm・2cm、5；15.8cm・2cm、6；18.5cm・2.9cm、29；14.1cm・2cm、30；11.9cm・2.9cmに復原される。灰色～灰褐色を呈する。皿9は口径17.8cm、器高2.1cmに復原される。10は鉢の小片である。11は口径13.6cmに復原される甕、12は現存高8.6cmの壷破片である。13は口径47.8cmに復原される大型の甕である。

14・15・17～23・26・32～41・44は坏で、15は黒色土器である。遺存状態の良いものの口径・器高は、18；12.8cm・3.9cm、19；14.5cm・3.5cm、21；12.2cm・3.4cm、32；14.3cm・3.4cm、34；12.8cm・3.2cm、36；12.6cm・3.7cm、37；14.9cm・4.1cmに復原される。15・17は丁寧なヘラ磨きを施している。16・27・28・45～47は鉢である。口径・器高は、27；22.2cm・9.7cm、28；26.9cm・13.9cm、45；11.8cm・7.9cm、46；21.6cm、47；25.2cm・12.9cmに復原される。45は支脚に使用されることが多い器種である。24・25・42は皿である。口径・器高は、24；14.8cm・1.9cm、25；19.8cm・2.3cm、42；14.9cm・2.2cmに復原される。43は盤の脚台であろう。48～50は大型の甕である。



第190図　その他出土土器実測図①（1/4）



第191図　その他出土土器実測図②（1/4）

第3章　おわりに

今回は宮原遺跡の事実報告としては4冊目で、最終のものである。また、第11地点（立野遺跡・宮原遺跡）の最終報告を今年度に刊行し、掲載漏れの遺物の報告や、遺構の修正、若干のまとめを行う。したがって、この報告書では、事実報告のみにとどめている。

さて、今回の報告では、円面硯、香炉及び鉢か甕の獣足脚部等の新たな資料を追加することができ、転用硯・刻印土器・焼塩土器等の資料を補充することができた。これらの資料の示唆するところは、本村落の社会的な交流対象の広さを示すと同時に、地政学的な側面からの政治的側面をも暗示している。

また、今回報告分の118号建物を中心とした各建物群や、通路や敷地を区画すると推定される遺構の存在からも、かなりの地位にある人物の存在が推測される。大宰府、小郡官衙遺跡や下高橋官衙遺跡との交流が十分に想定されるところである。

このように、多くの重要な問題点をはらみながら、事実報告にせざるを得なかったのは編集者の責任である。上述の、最終報告で、少しでもその責任を果たせれば、と願う次第である。

最後に、例年のことながら、この報告書を刊行するにあたり、多くの皆様方の御協力をいただきました。その方々に心から感謝します。

第１表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) ㎡	主柱間エリア (S_1)	S_1/S %	たて(cm) C	たて(cm) D	よこ(cm) A	よこ(cm) B	a(cm) (P_1·P_2)	b(dm) (P_3·P_4)	c(cm) (P_1·P_3)	d(cm) (P_2·P_4)	P_1 c_1	P_1 a_1	P_2 d_1	P_2 a_2	P_3 c_2	P_3 b_1	P_4 d_2	P_4 b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P_5	下層土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備考	旧番号
214	8～10	4																					北	○					4	19						11·12
215	8～10	4																					北						17	10					丸瓦片１	13
216	8～10	4																					北	○						6						14
217	8～10	4																					北？							5						15·16
218	11	12	(N-13°-W)	19.660	3.947	20.0	439	431	424	441	177	215	210	209	131	117	120	130	98	108	102	118	北				○	○	1	10						6
219	12	14	(N-2°-W)	16.115	3.497	21.7	395	386	392	385	166	163	209	205	99	113	109	113	87	103	72	119	北					○	1	11						5
220	13·14	16	(N-0.5°-W)	18.353	4.461	24.3	42.5	411	435	427	221	211	217	204	78	83	100	131	130	104	107	112	北	○						11						30
221	15	19	(N-83°-E)	28.408	6.032	21.2	508	511	540	531	276	281	224	226	142	129	148	135	142	131	133	119	北	○				○	4	32					焼塩土器４	114
222	15	23	(N-88°-E)	26.743	6.547	24.5	516	528	503	502	278	246	236	266	117	124	112	101	163	127	150	129	東					○	13	29			4		焼塩土器５	113
223	15	27	(N-85°-W)	14.889	3.695	24.8	356	380	385	380	217	183	168	208	103	113	80	55	85	98	92	99	西					○	3	7						129
224	16	30	(N-7°-W)	12.012	2.553	21.3	335	338	345	332	149	137	185	164	100	88	105	108	50	92	69	103	北					○	2	4					土製仏具(？)１	101·109
225	17	32	(N-22°.5′-W)	20.849	4.605	22.1	471	472	438	425	206	216	225	211	122	112	139	120	124	108	117	106	北						3	15						102
226	18	35	(N-86°-W)	26.650	5.561	20.8	449	490	511	522	265	269	204	193	146	137	142	110	99	134	155	119	西	○				○	7	14			1	1	転用硯１、焼塩土器２	118
227	19	37	(N-51°.7′-W)	9.457																			西	○						6						119
228	20	40	(N-7°.5′-W)	(23.036)	(4.876)	(21.2)	457	443		492	(205)	205	(248)	249	(80)		91	132	129	131	103	156	東						22	32					墨書土器１、転用硯１、焼塩土器１	132·150、135の東側
229	20	40	(N-6°-W)	(38.843)	10.33	(26.6)	618	618	(646)	(601)	(331)	327	(323)	305	138	(117)	181	(198)	157	(104)	132	170	北						3	19			1			141·142、133·134の一部
230	20	40	(N-5°-W)	(27.387)	7.088	(25.9)	533	575	(621)	(523)	285	272	262	244	136	(155)	166	181	135	135	165	116	北						4	4			1		転用硯１	134の北側一部
231	20	40	(N-94°-W)		(5.347)	(439)	(461)	(461)	(460)	243	(249)	(211)	220	(106)	(130)	(115)	(88)	(122)	(108)	126	103															143
232	20	40		5.302＋																			北													133の北西隅
233	20	40		(2.893＋)										214							128								1	4						136·137·155
234	20	40	(N-4°-W)	2.565＋	5.103						28.3	300	309	330																3					焼塩土器１	144
235A	21	47	(N-91°.5′-W)	42.986	10.643	24.8	640	680	649	647	358	347	319	277	161	161	236	130	160	169	167	131	西					○	2	53			1		土製紡錘車１、墨書土器１、焼塩土器２	29·31·155、133·135·136の一部
235B	21	47	(N-91°-W)	(24.736)	6.901	(27.9)	(504)	(507)	(480)	(492)	243	264	280	268	(110)	(119)	(122)	(118)	(114)	(116)	(117)	(112)						○								
236	22	55	(N-59°.5′-W)	25.900	7.737	30.0	489	481	517	522	237	229	208	191	122	143	15	137	159	152	145	141	北					○		10						25
237	23	57	(N-9°-W)	15.031	3.302	22.0	353	355	406	416	197	206	158	159	101	97	98	112	95	113	98	97	北	○				○	3	5						26·151
238	24	57	(N-5°.5′-W)	22.838	3.406	14.9	425	417	524	523	197	169	169	201	124	190	105	137	129	180	111	174						○	2	8						27·138·139·152·153、28の一部
239	24	57	(N-22°.5′-E)	(20.355)	4.612	(20.7)	(447)	462	(445)	(445)	221	229	201	197	(88)	(100)	104	125	(158)	(83)	(164)	127								1						140·154、28の一部
240	24·25	63	(N-10°-E)	17.246	3.236	18.8	387	409	434	414	211	186	171	155	122	133	118	90	94	97	136	131	北	○				○	2	5					円面硯１	24
241	25·26	66	(N-55°-W)	20.563	3.989	19.4	471	445	427	429	187	179	213	214	128	125	111	115	130	136	120	114	西	○				○	3	10						22

第１表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) ㎡	主柱間エリア (S1)	S1/S %	たて (cm) C	たて (cm) D	よこ (cm) A	よこ (cm) B	a (cm) (P1·P2)	b (dm) (P3·P4)	c (cm) (P1·P3)	d (cm) (P2·P4)	P1 c1	P1 a1	P2 d1	P2 a2	P3 c2	P3 b1	P4 d2	P4 b2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P5	下層土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備考	旧番号
242	27	69	(N-51°.5′-W)	11.78																			西							10				1		23
243	27·28	71	(N-86°-W)	21.932	5.874	26.8	430	464	461	468	246	255	229	240	93	101	120	114	108	107	104	106	西						3	17			1			120
244	28	74	(N-52.5°-W)	19.725	3.976	20.2	436	438	434	437	212	212	174	200	136	108	115	114	126	110	123	115	西			○	○	○	1	4				1		121
245	28	76	(N-1.5°-E)	21.939	3.643	16.6	443	442	467	488	201	190	201	171	116	135	128	131	126	151	143	147	北						8	12			1	1	焼塩土器 4	122
246	28	76	(N-48°.5′-W)	24.198	5.069	20.9	481	476	492	516	223	232	234	216	113	151	110	118	134	148	150	136						○	1	3						123
247	29·30	80	(N-5°-W)	21.647																			北						26	9			1			124
248		80		1+																										1						125
249	30·31	85		7.645																			北	○				○	14	14					丸瓦片 2	146
250		85																					北	○				○	1	6			1			149
251	31	88		1.115+																			北						1	1					焼塩土器 1	148
252	32	90	(N-5°.5′-W)	(15.721)																			北						21	28			10	1	焼塩土器 1	145
253		90	(N-0°.5′-W)	(19.096)									255		(102)	126			105	(107)			北					○	8	5			2		転用硯 1	156
254		90	(N-5°.5′-W)	(18.015)	4.192	23.3	(424)	(415)	(422)	(417)	244	230	217	222	(126)	(73)	(147)	105	(81)	(102)	(46)	85	北						11	12	1		1		焼塩土器 2	147
255		90	(N-15°-W)	(16.839)	(4.322)	25.7	(366)	(382)	(440)	(455)	215	198	204	210	(87)	(105)	(88)	(120)	(77)	(125)	(84)	(132)							1	5	1				焼塩土器 1	157
256		90	(N-21°-W)	(17.805)	4.866	27.3	(423)	(378)	(435)	(448)	254	184	241	210	(85)	81	(77)	(100)	96	(148)	(91)	(116)							1	3					焼塩土器 1	158
257		90	(N-3°-E)	(24.114)	5.601	23.2	(480)	(482)	(498)	(499)	286	279	232	234	(115)	(107)	(117)	105	133	(98)	(131)	(122)				○				9		1	1		焼塩土器 2	159·160
258	32	100		18.294	4.41	24.1	393	381	455	428	199	218	219	202	71	139	77	117	103	121	102	89	西					○	7	8					焼塩土器 2	21

図　版

立野・宮原遺跡空中写真（西上空から）

宮原遺跡空中写真（北東上空から）

宮原遺跡A・D地区空中写真（北東上空から）

宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）

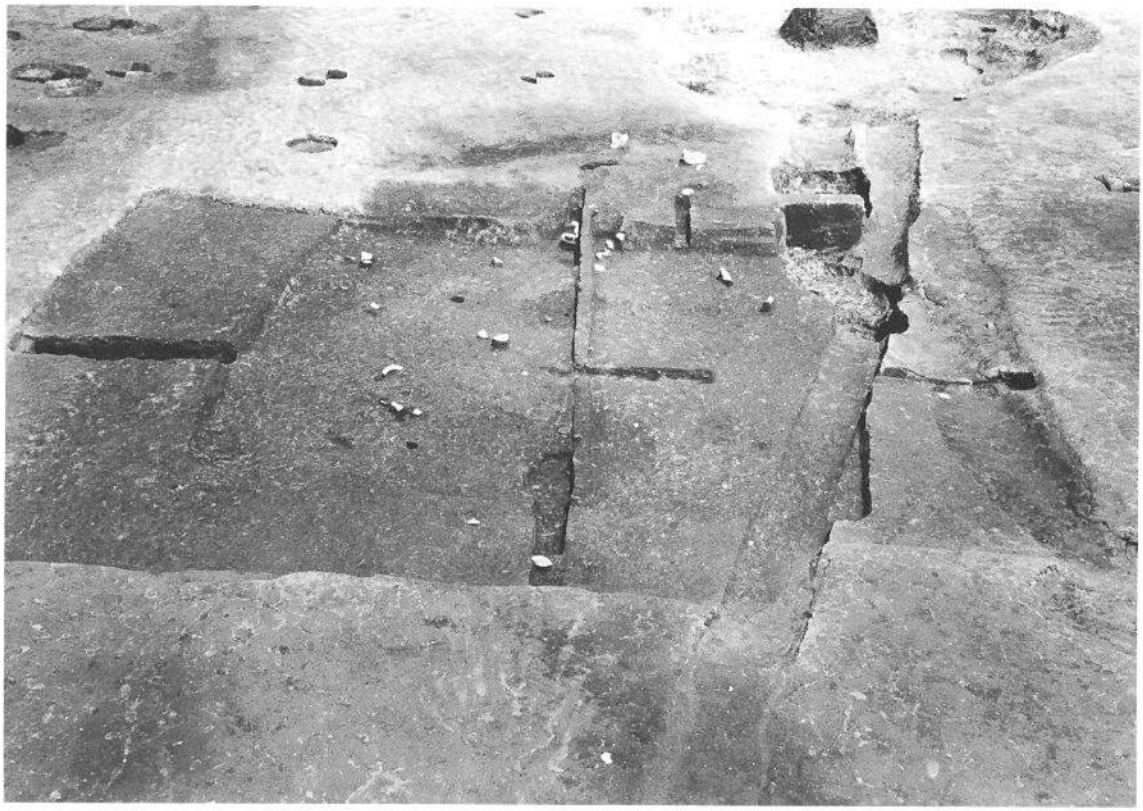
宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）

図版 5

宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）

宮原遺跡D地区空中写真（北西上空から）

214～217号竪穴住居跡（遺構検出中、南から）



214～217号竪穴住居跡（遺構検出中、南から）

214～217号竪穴住居跡（貼床除去後の状況、南から）

214号竪穴住居跡カマド（南から）

214号竪穴住居跡カマド（西から）

216号竪穴住居跡カマド（南から）

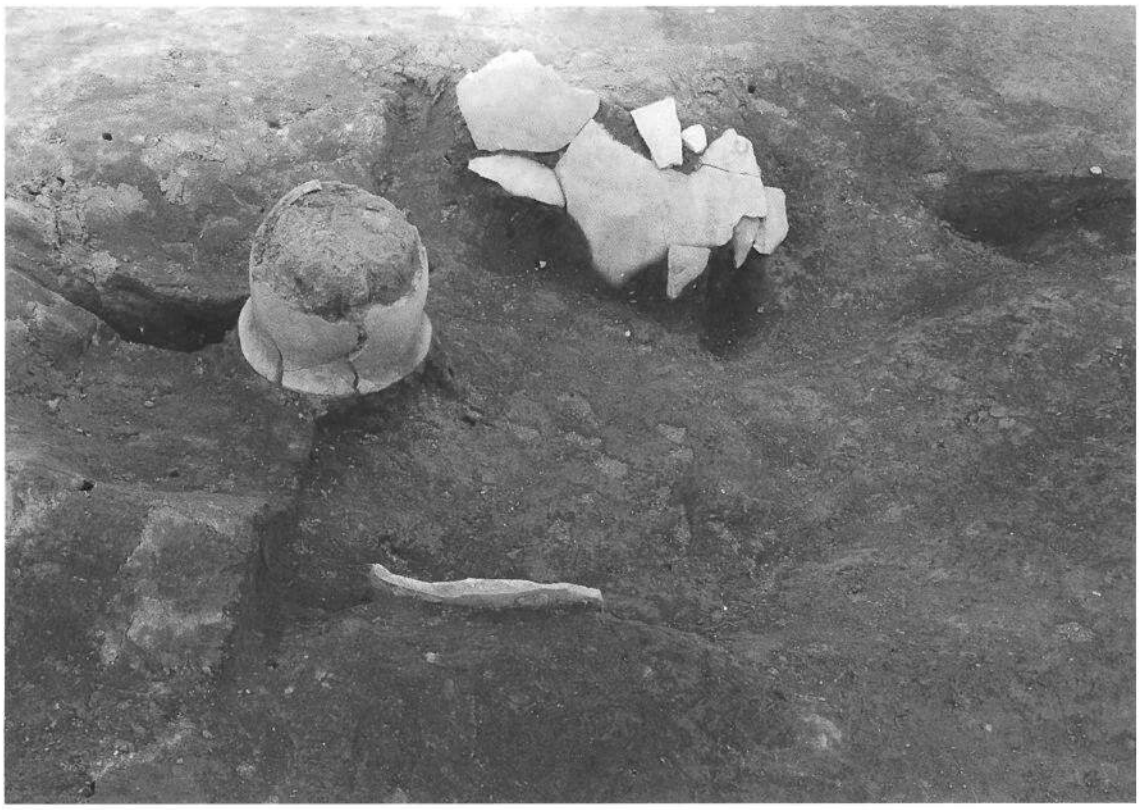
218号竪穴住居跡（西から）

218号竪穴住居跡カマド（南から）

219号竪穴住居跡（西から）

219号竪穴住居跡カマド（南から）

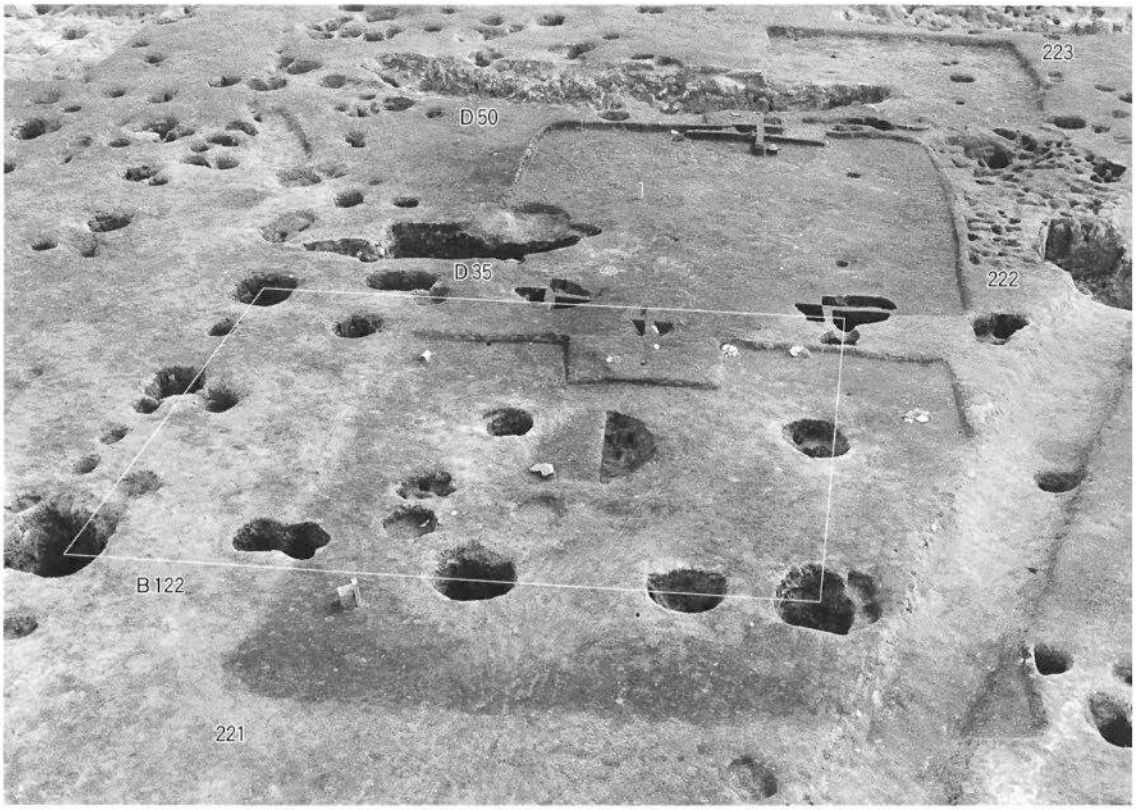
220号竪穴住居跡カマド①（検出時の状況、南から）



220号竪穴住居跡カマド②（壁体補強の土器、西から）

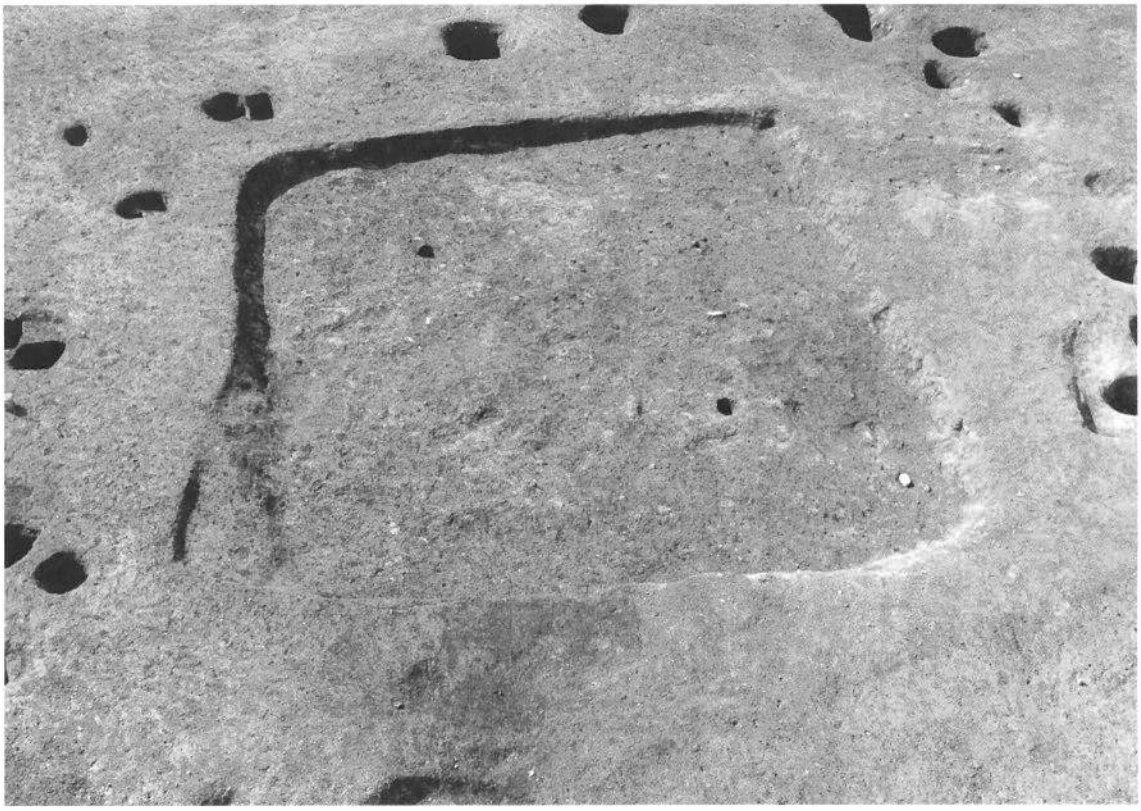
220号竪穴住居跡カマド③（支脚の断ち割り状況、南から）

220号竪穴住居跡カマド④（壁体の杭痕跡、南から）

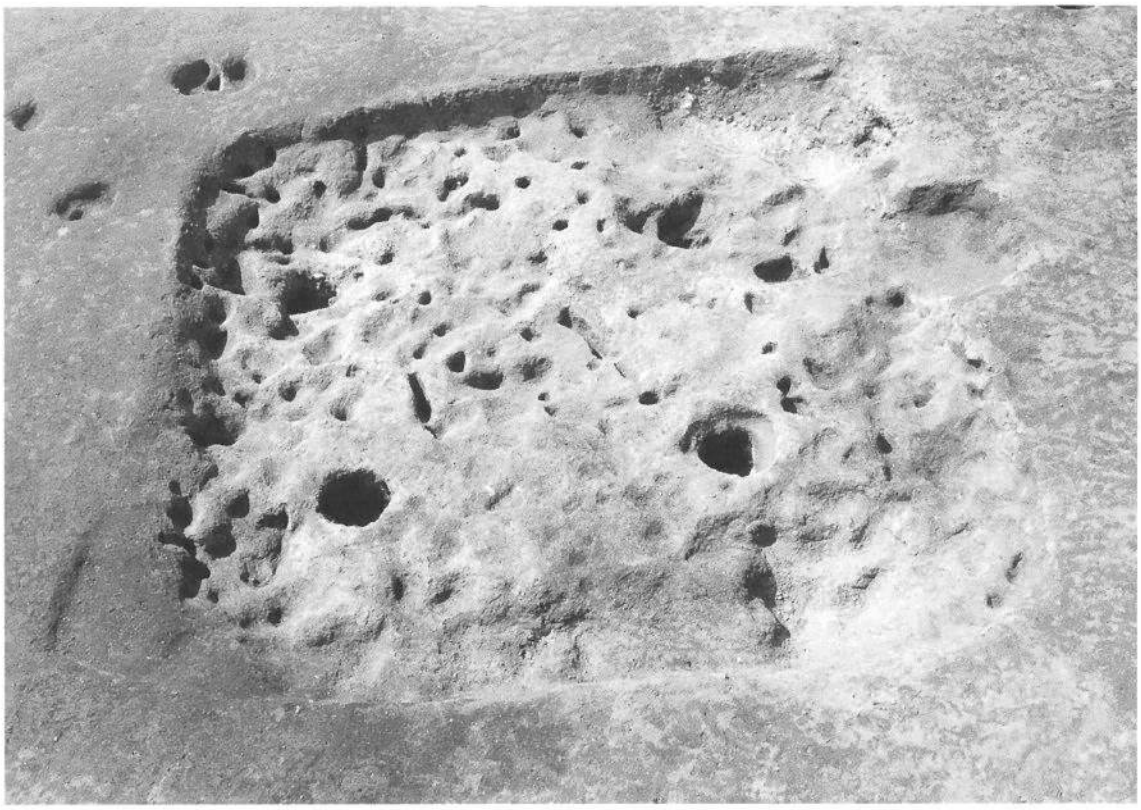


221～223号竪穴住居跡（西から）

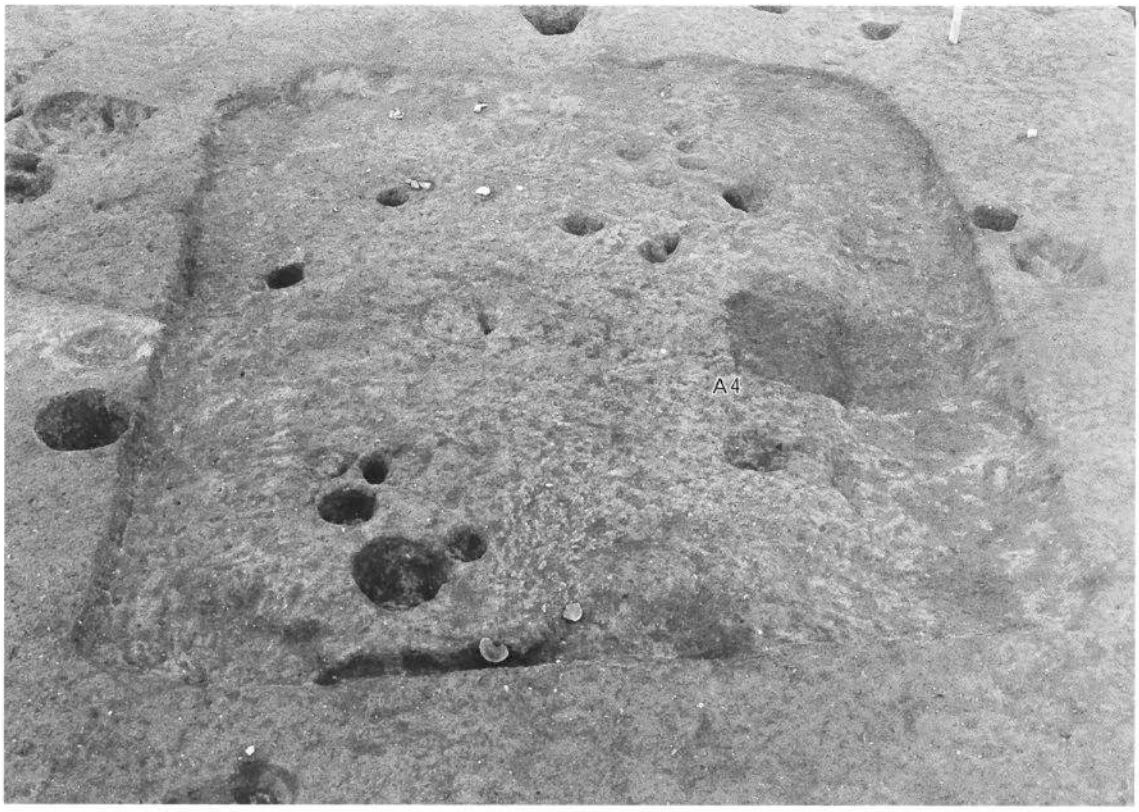
221号竪穴住居跡カマド（西から）



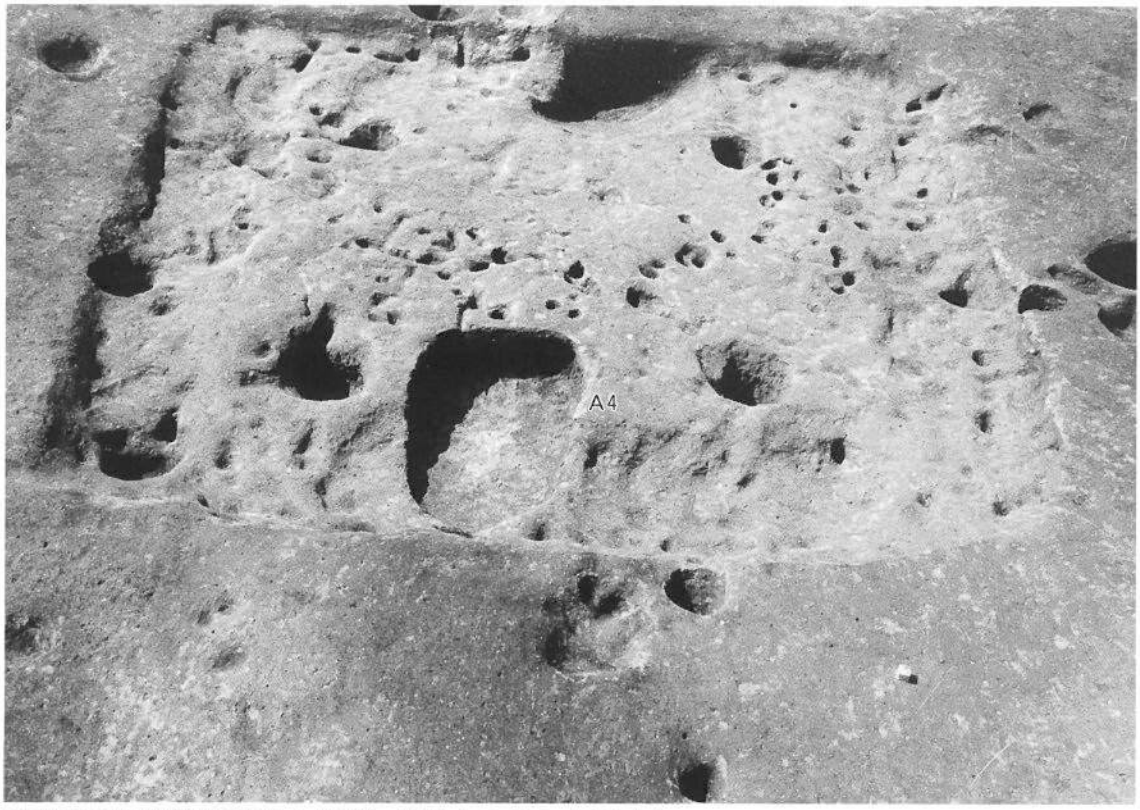
224号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）



224号竪穴住居跡貼床下層の状況（東から）



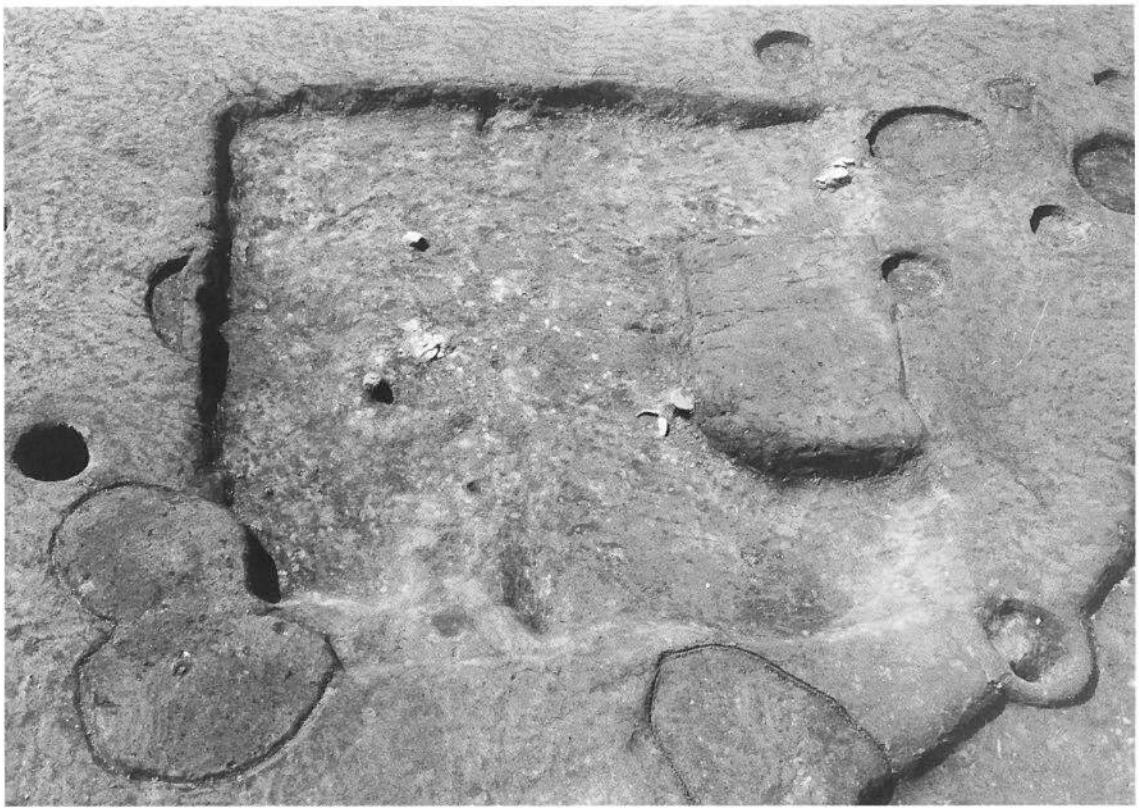
225号竪穴住居跡貼床面検出状況（南から）



225号竪穴住居跡貼床下層の状況と４号おとしあな（東から）

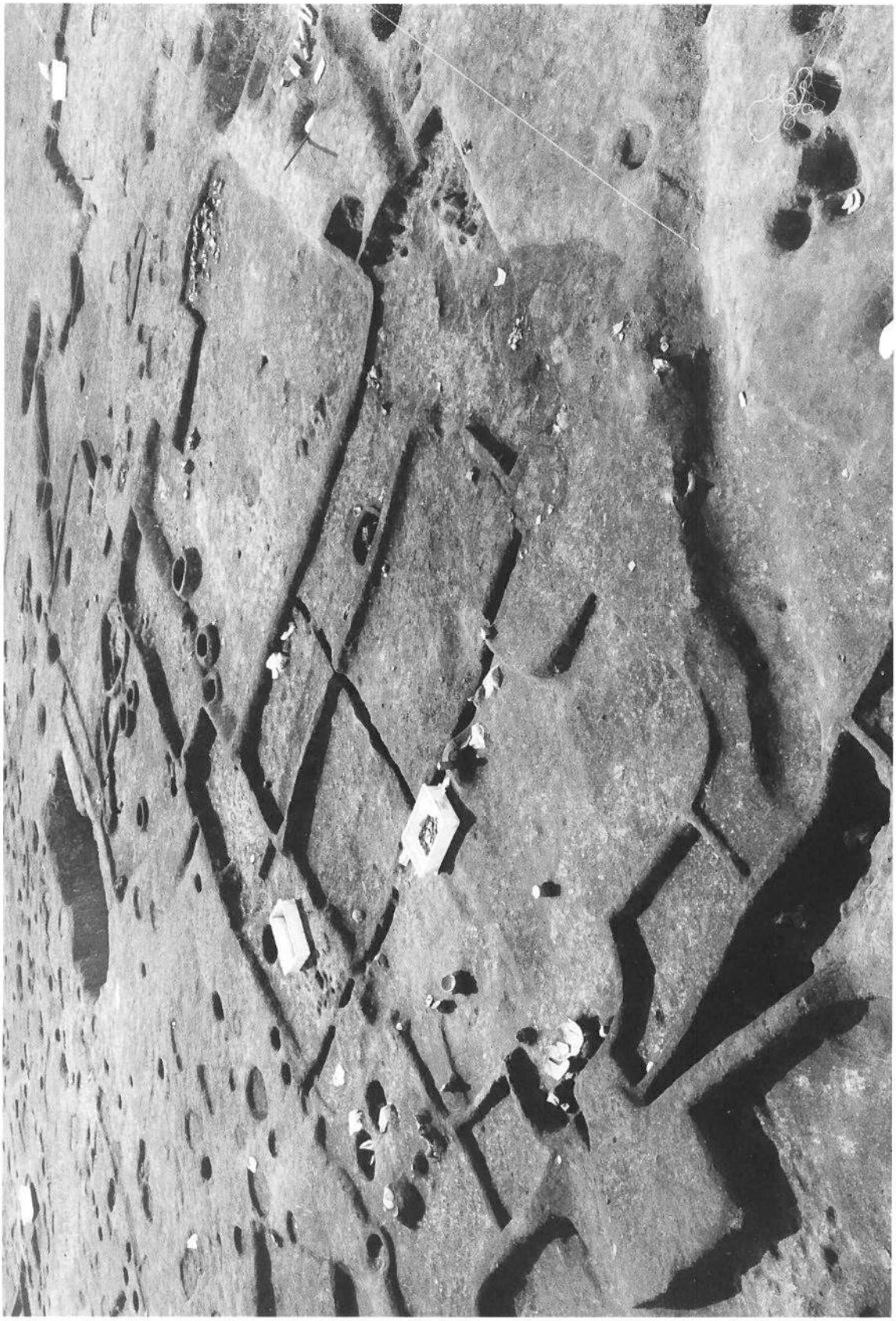
226号竪穴住居跡貼床面検出状況（北から）

226号竪穴住居跡カマド（東から）

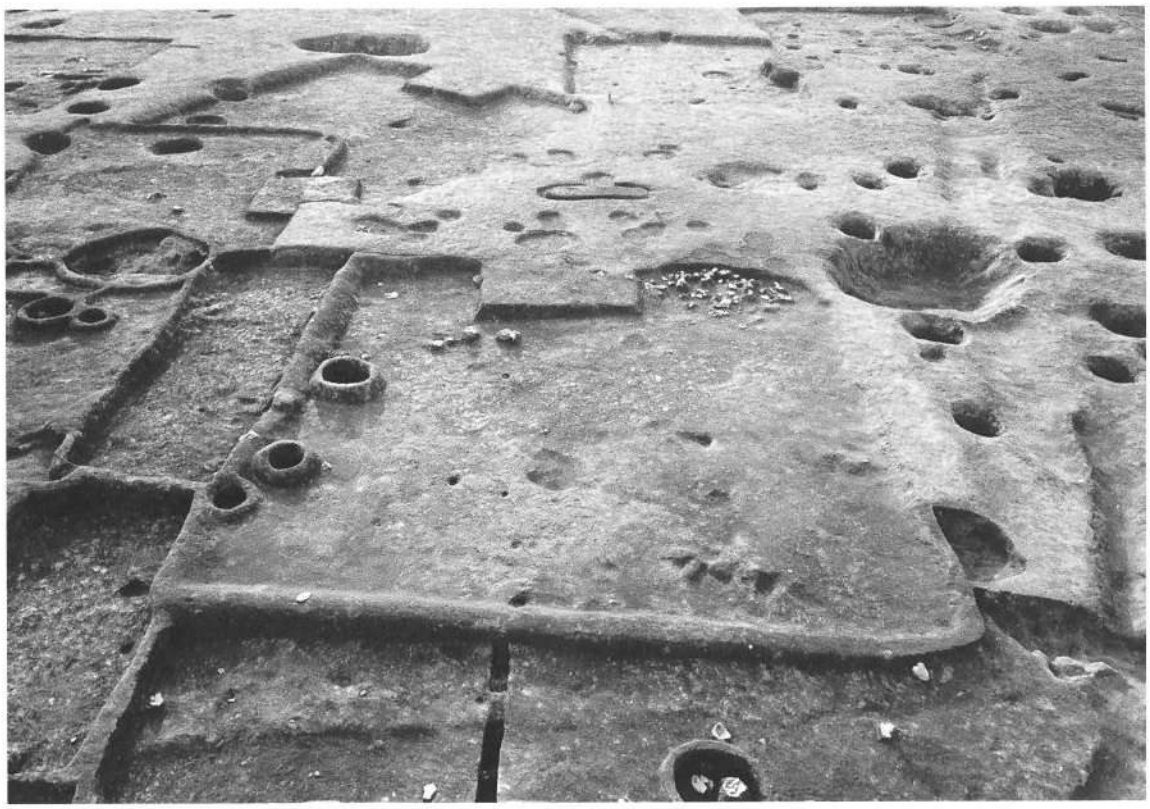


227号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）

227号竪穴住居跡カマド（南から）



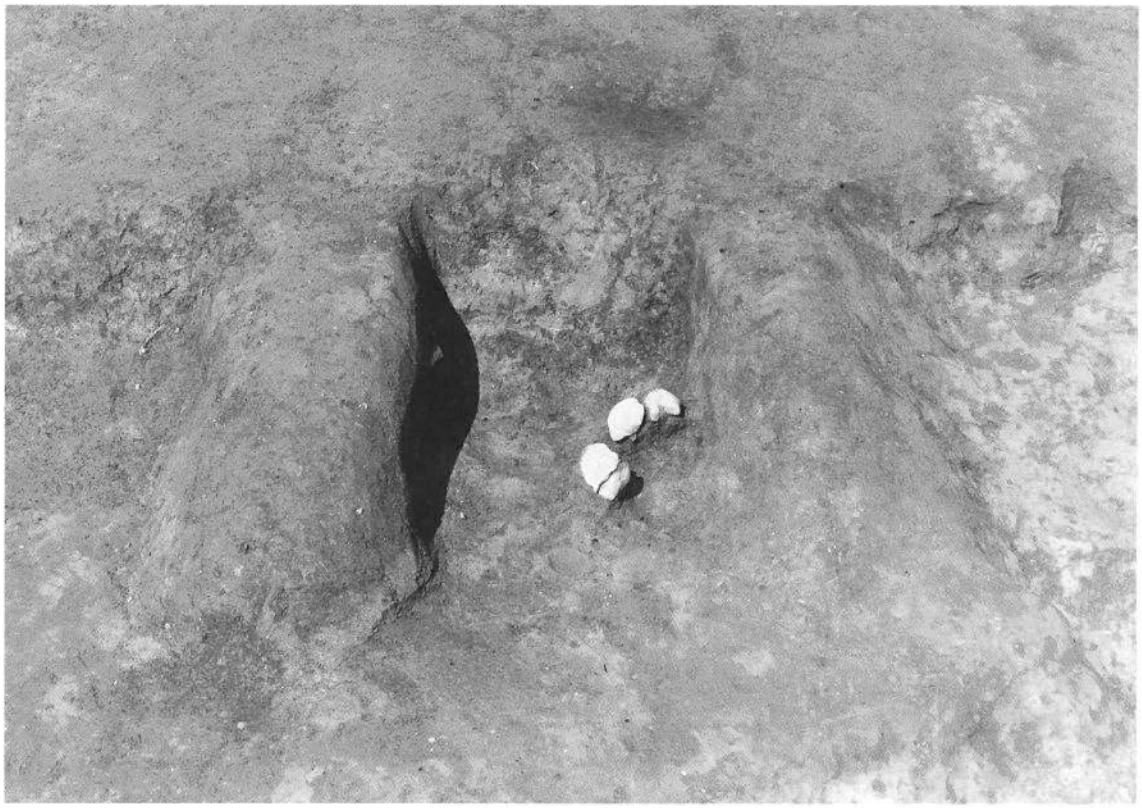
228～235号竪穴住居跡付近（北東から）



235号竪穴住居跡貼床面検出状況（東から）

235号竪穴住居跡カマド（東から）

236号竪穴住居跡貼床面検出状況（北東から）



236号竪穴住居跡カマド（南東から）

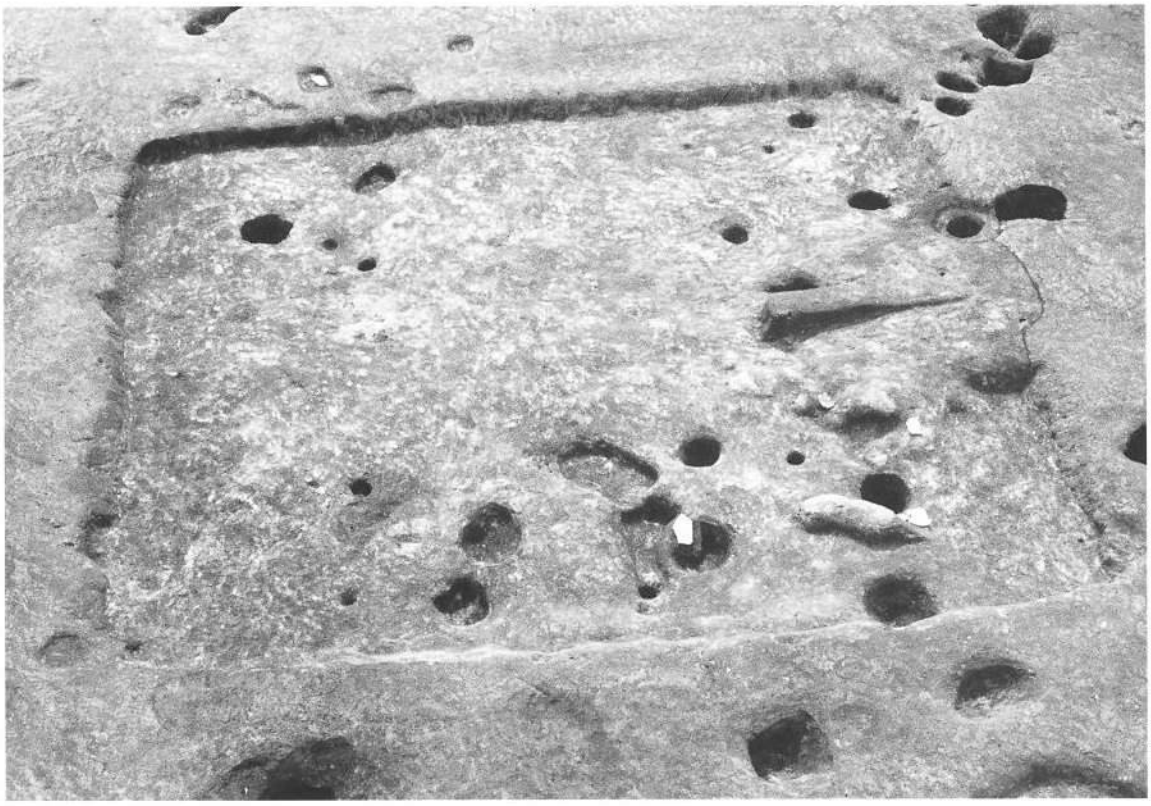
237号竪穴住居跡貼床面検出状況（北から）

237号竪穴住居跡カマド（南から）

238・239号竪穴住居跡（北から）

240号竪穴住居跡（西から）

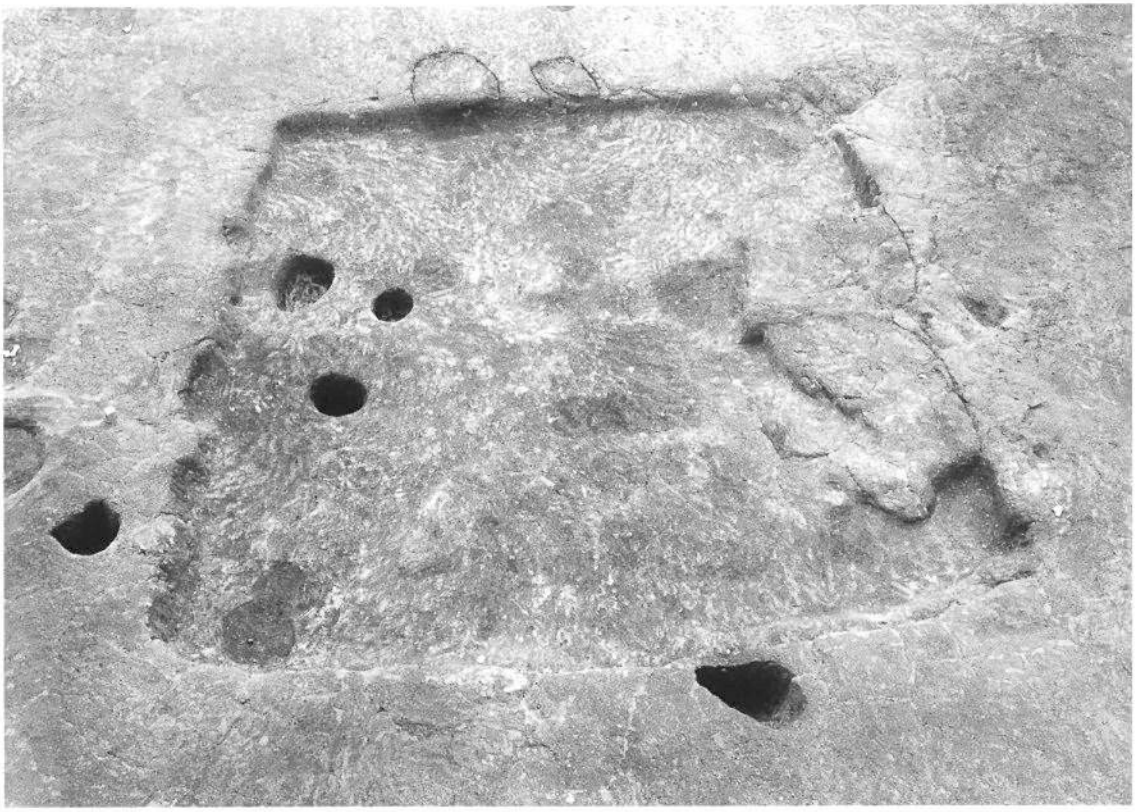
240号竪穴住居跡カマド（南から）



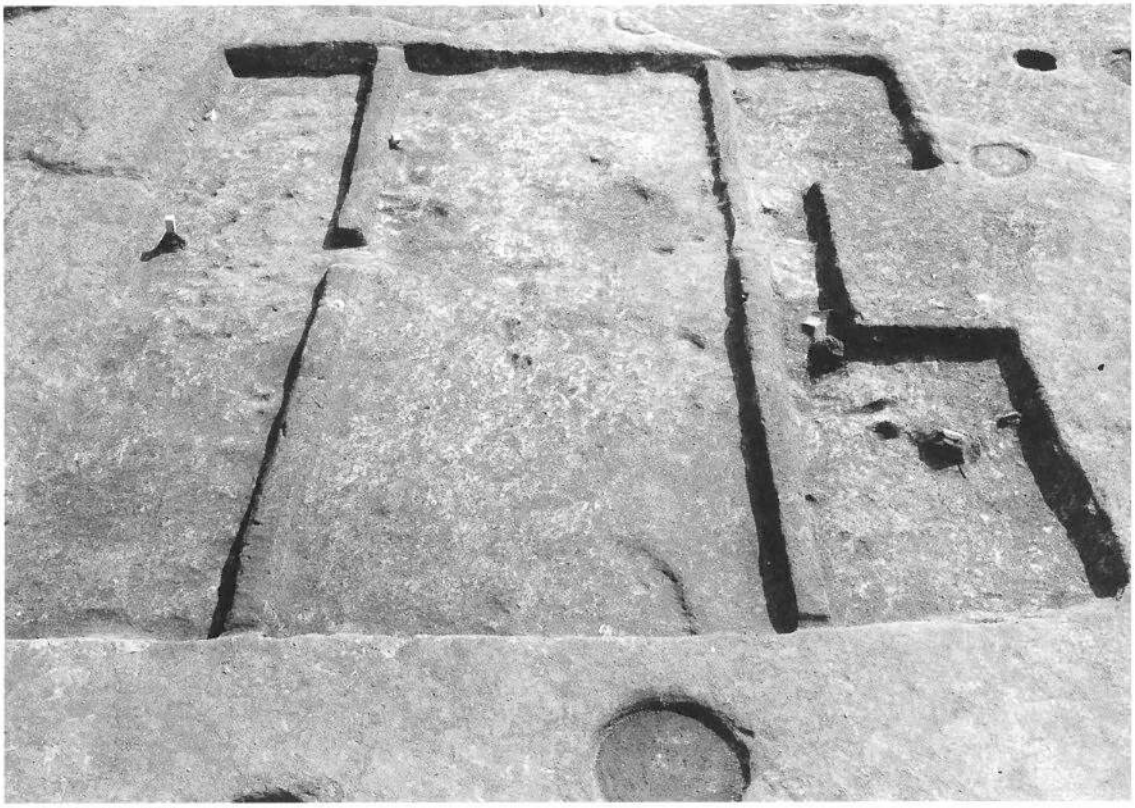
241号竪穴住居跡（東から）

241号竪穴住居跡カマド（南東から）

241号竪穴住居跡カマド支脚の断ち割り状況（南東から）



242号竪穴住居跡（北東から）

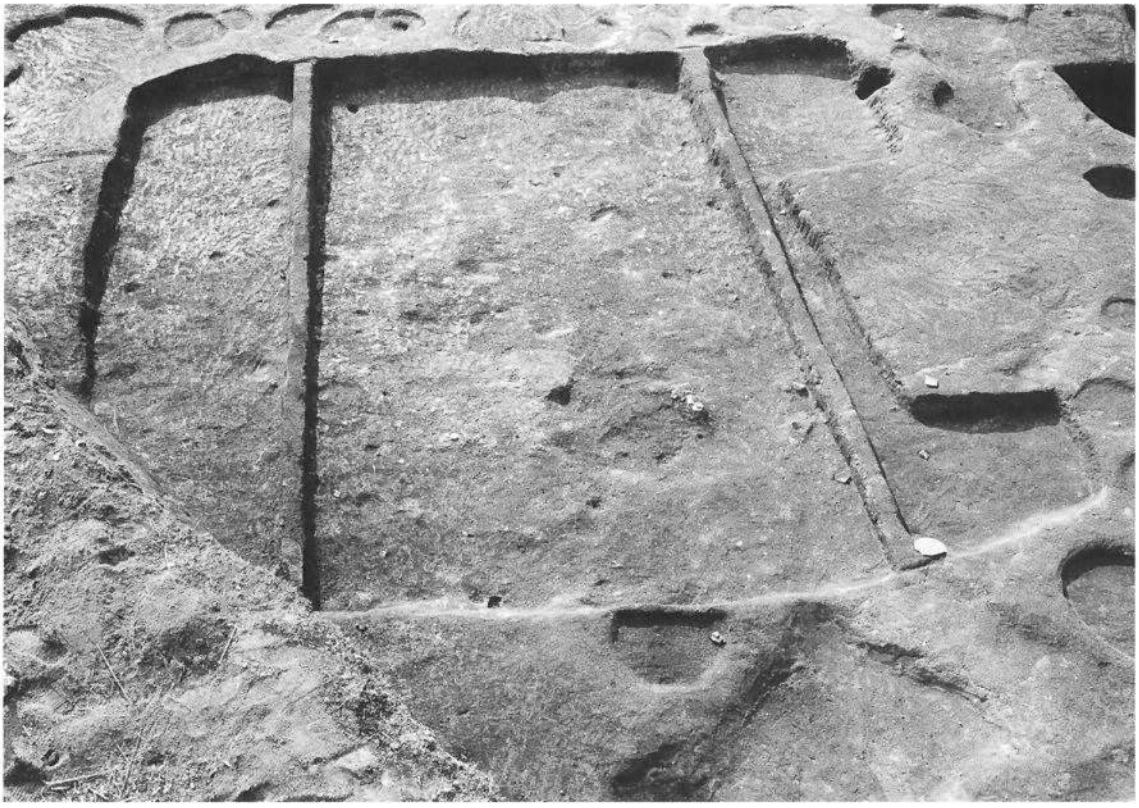


243号竪穴住居跡（北から）

243号竪穴住居跡カマド（東から）

244～246号竪穴住居跡（南西から）

245号竪穴住居跡カマド（南から）



247号竪穴住居跡（東から）

247号竪穴住居跡カマド（南から）

249号竪穴住居跡（北から）

249号竪穴住居跡カマド（東から）

251号竪穴住居跡カマド（南から）

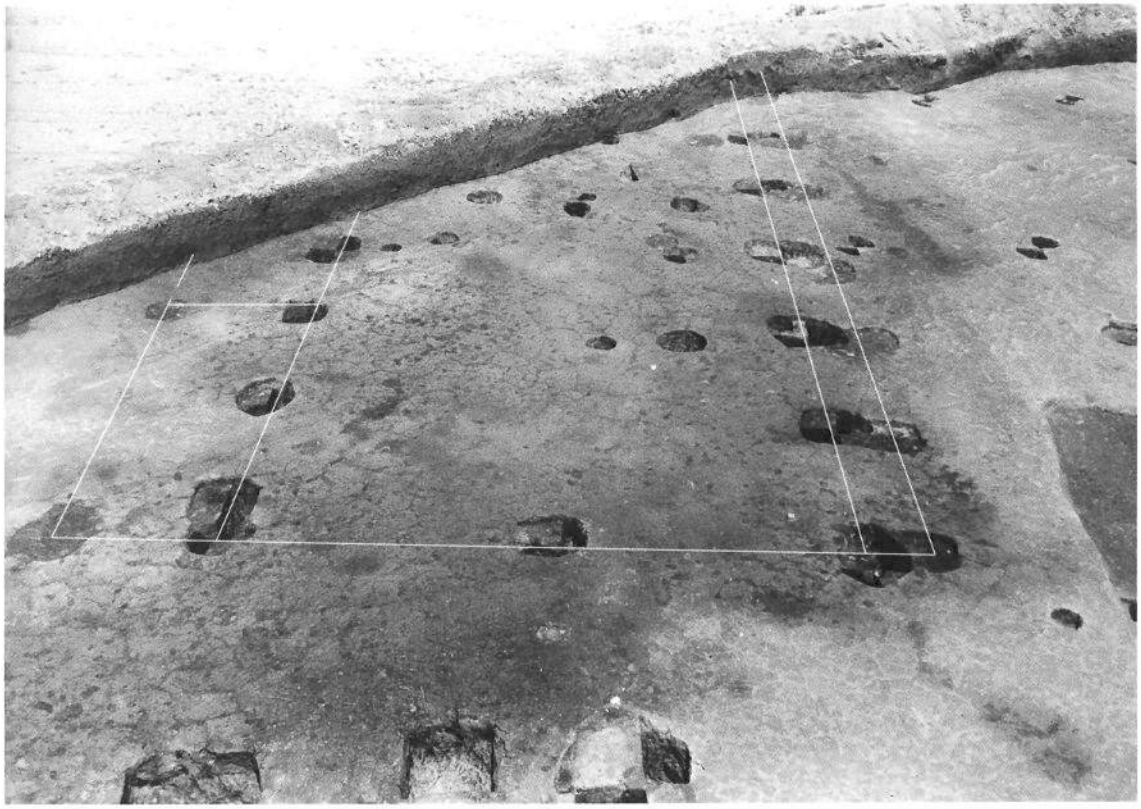
252号竪穴住居跡カマド（南から）

258号竪穴住居跡カマド（東から）

112号掘立柱建物跡Ｐ３土器出土状況（東から）

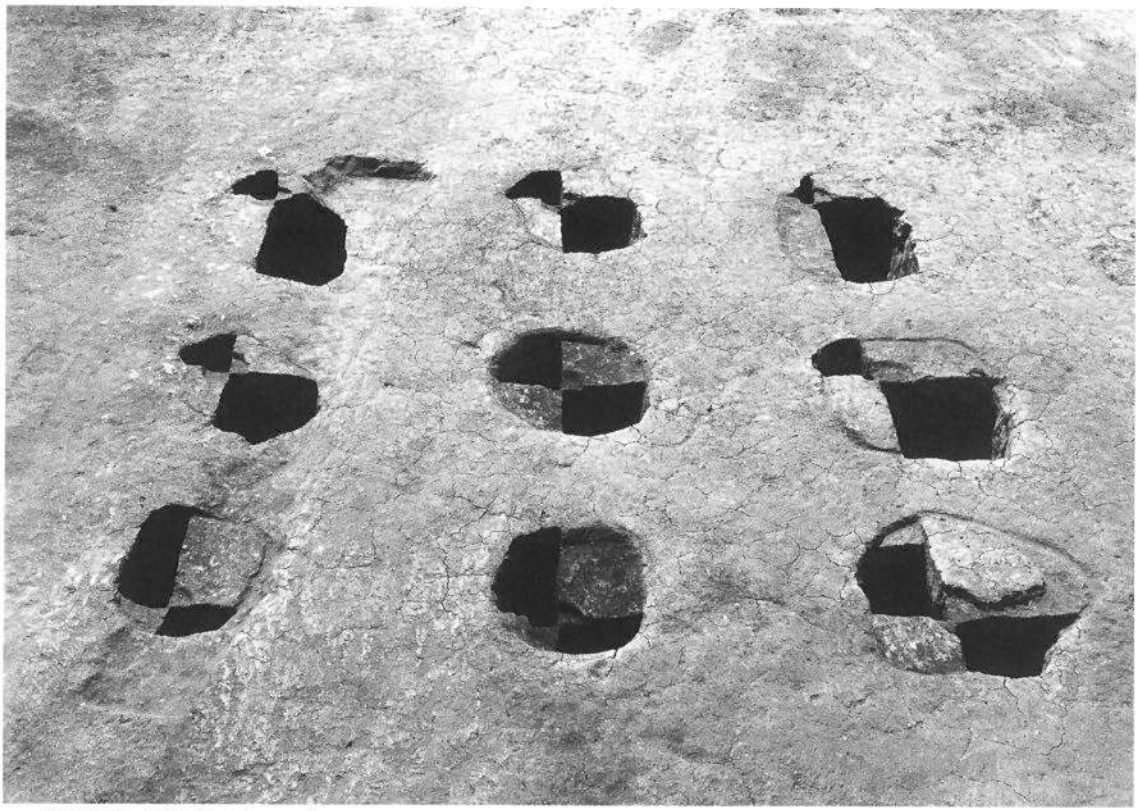
Ｄ区北西部の掘立柱建物跡（東から）

115～118号掘立柱建物跡（東から）

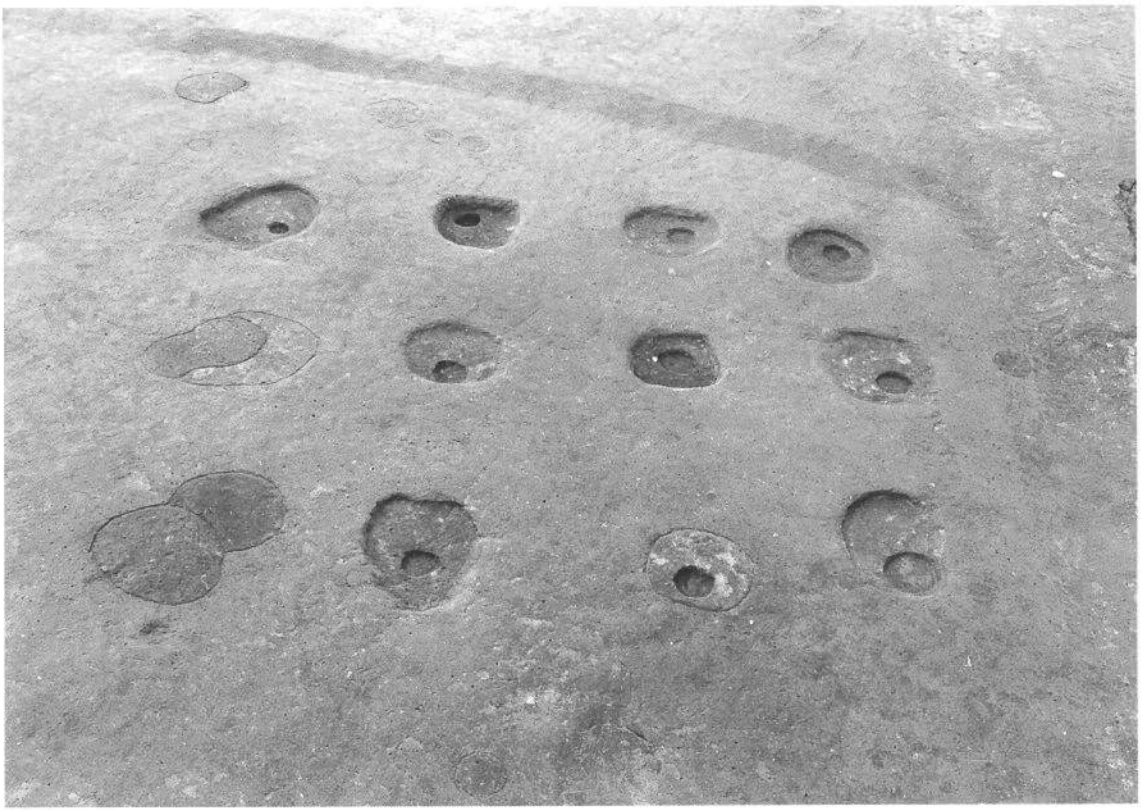


118号掘立柱建物跡（南から）

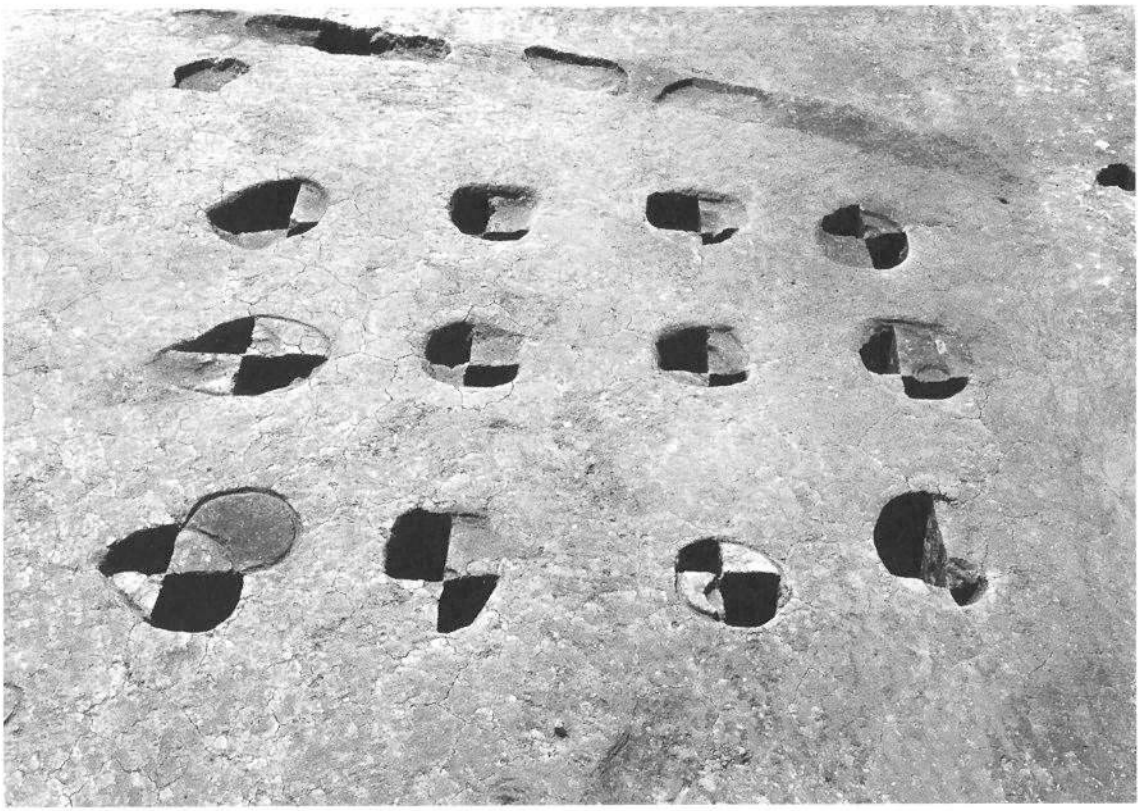
118～120号掘立柱建物跡（東から）



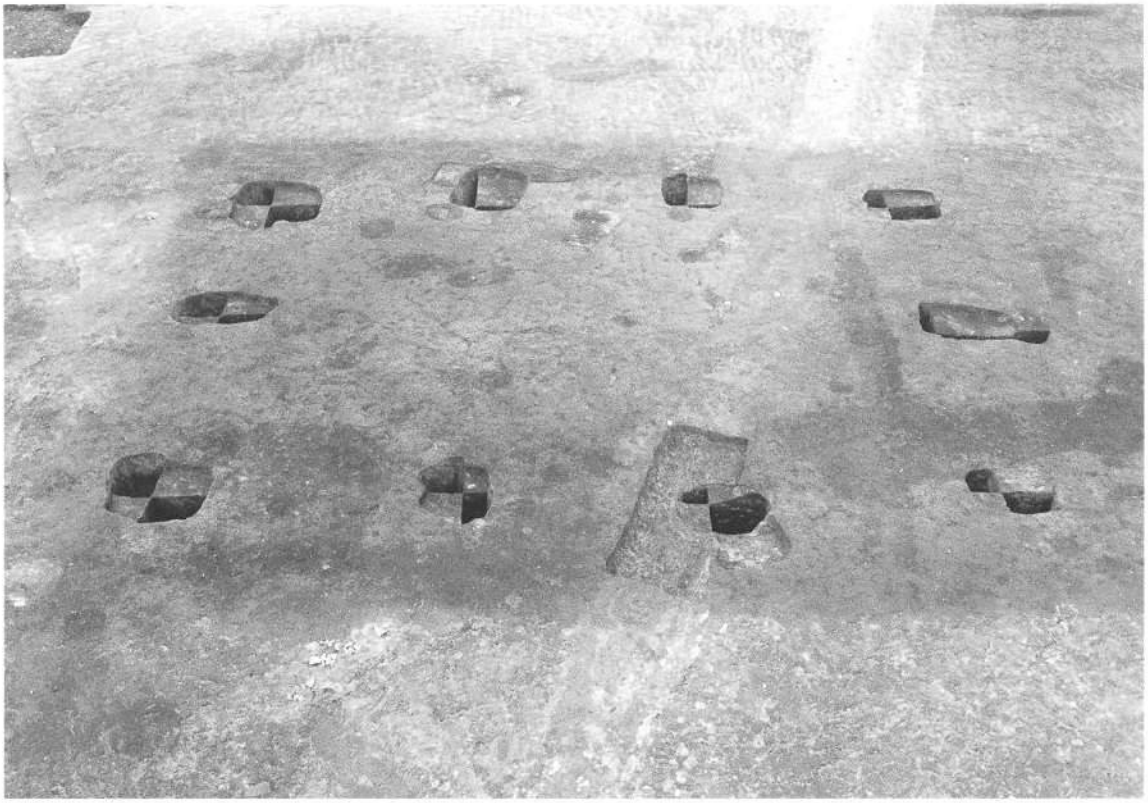
119号掘立柱建物跡（東から）



120号掘立柱建物跡検出状況（東から）



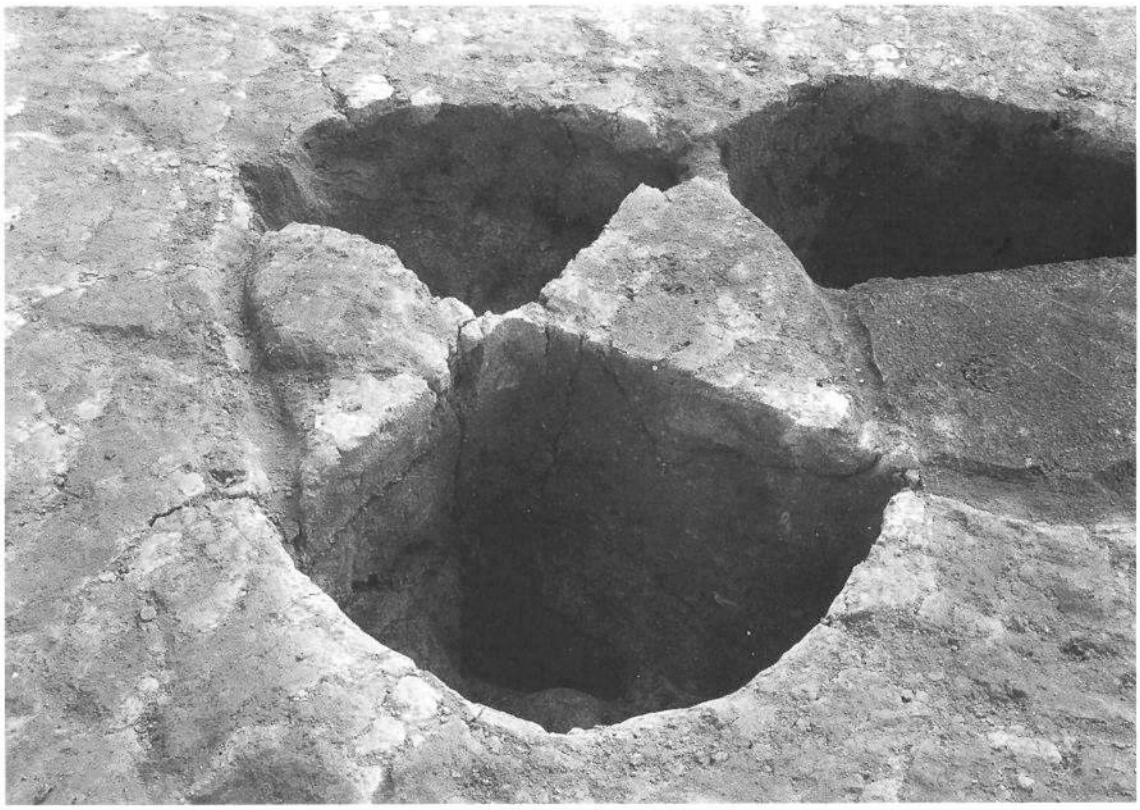
120号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（東から）



121号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（東から）

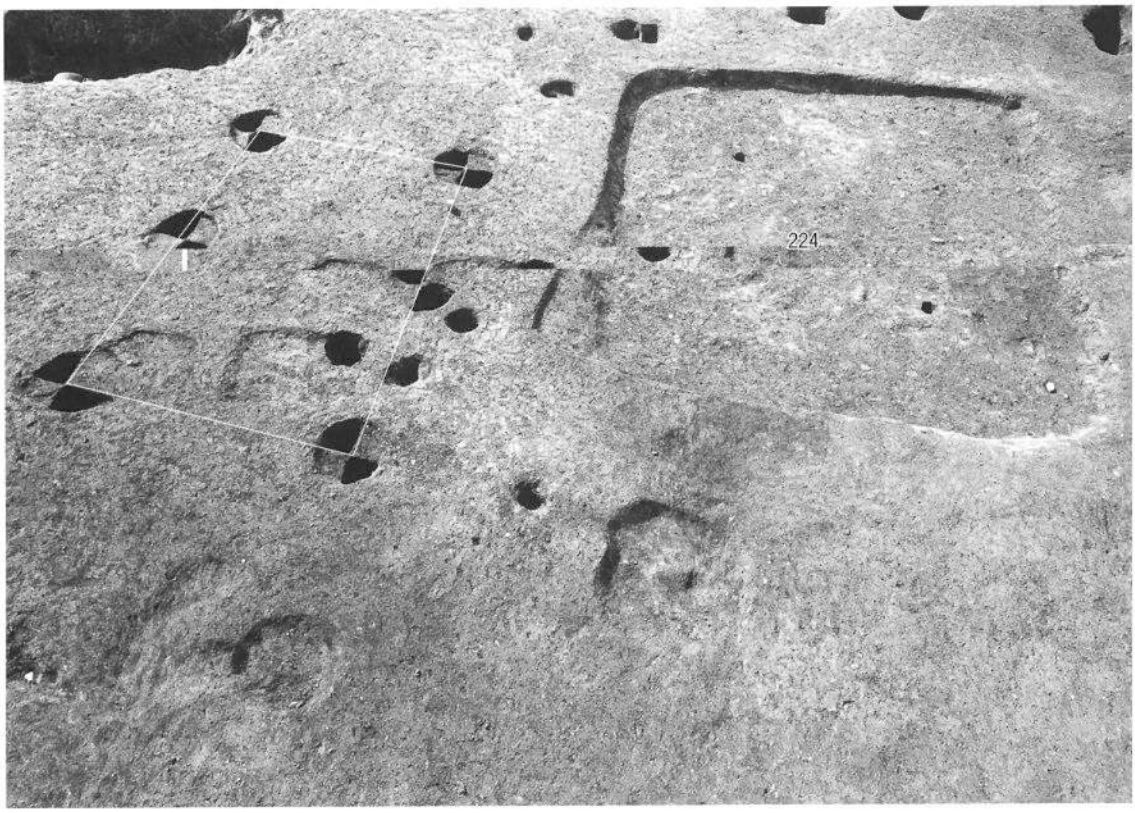
121号掘立柱建物跡Ｐ１

121号掘立柱建物跡Ｐ３

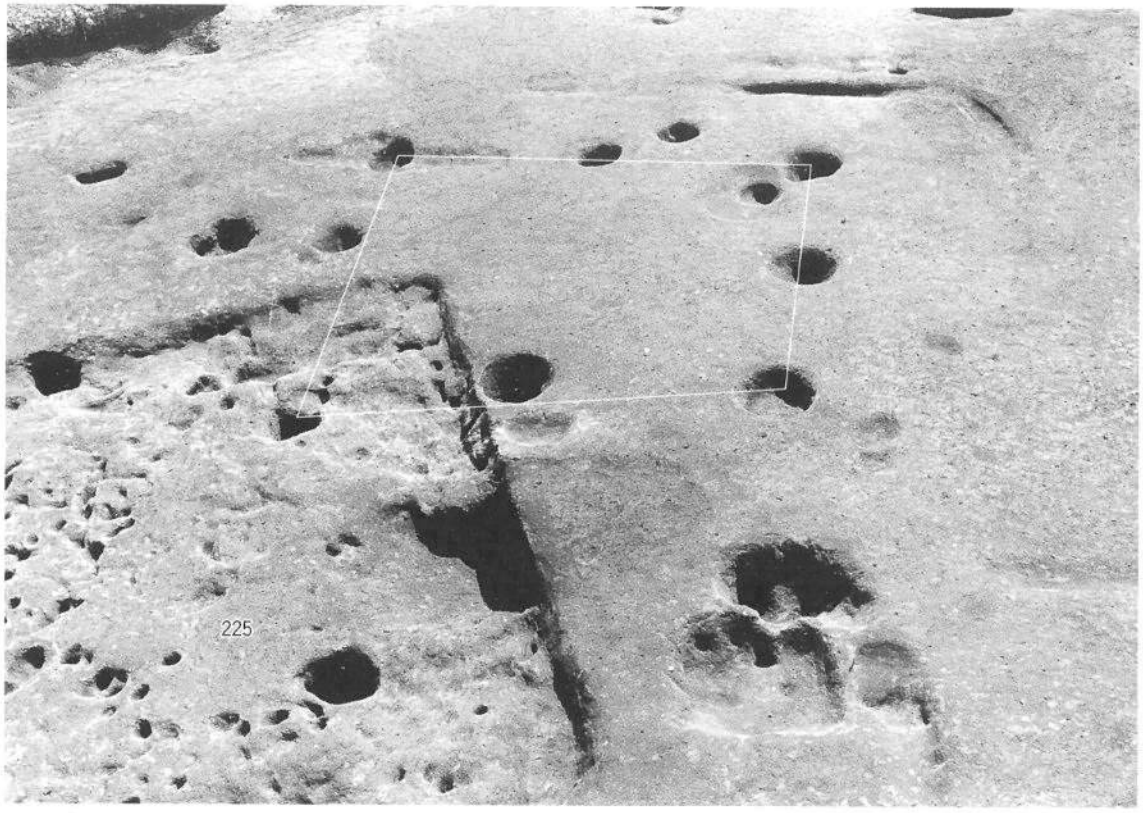


121号掘立柱建物跡Ｐ９

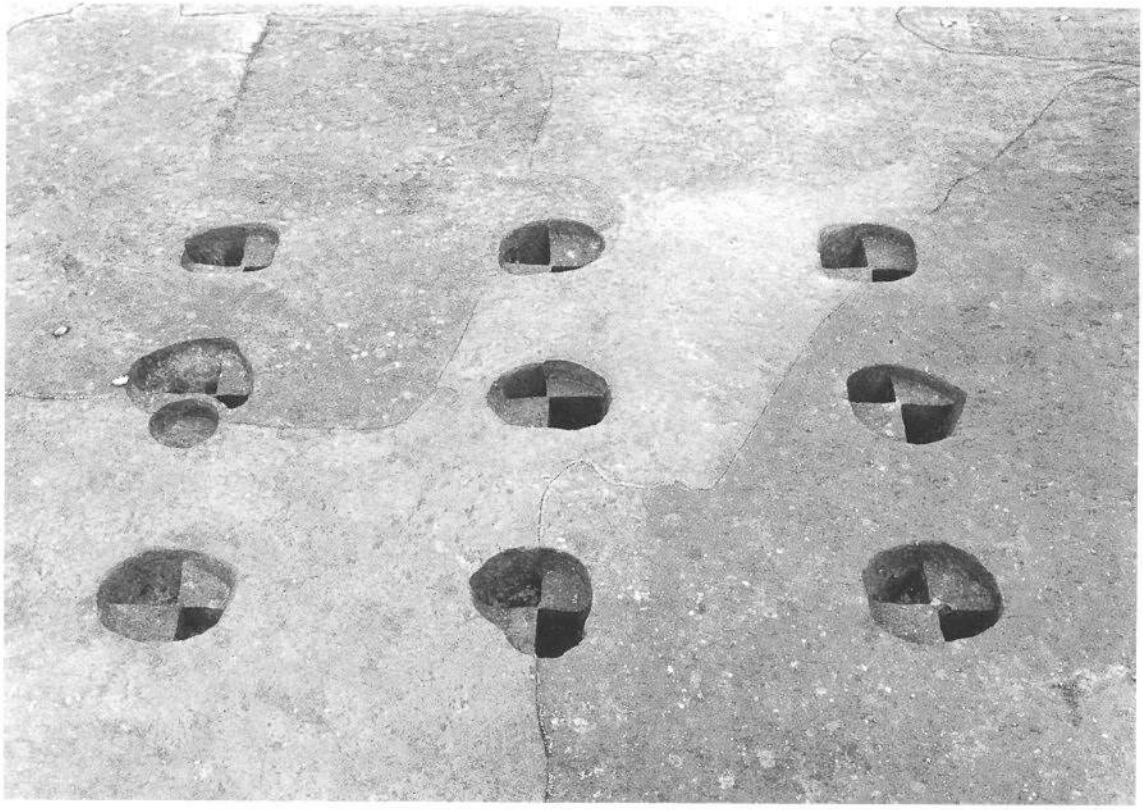
122号掘立柱建物跡（西から）



124号掘立柱建物跡（東から）

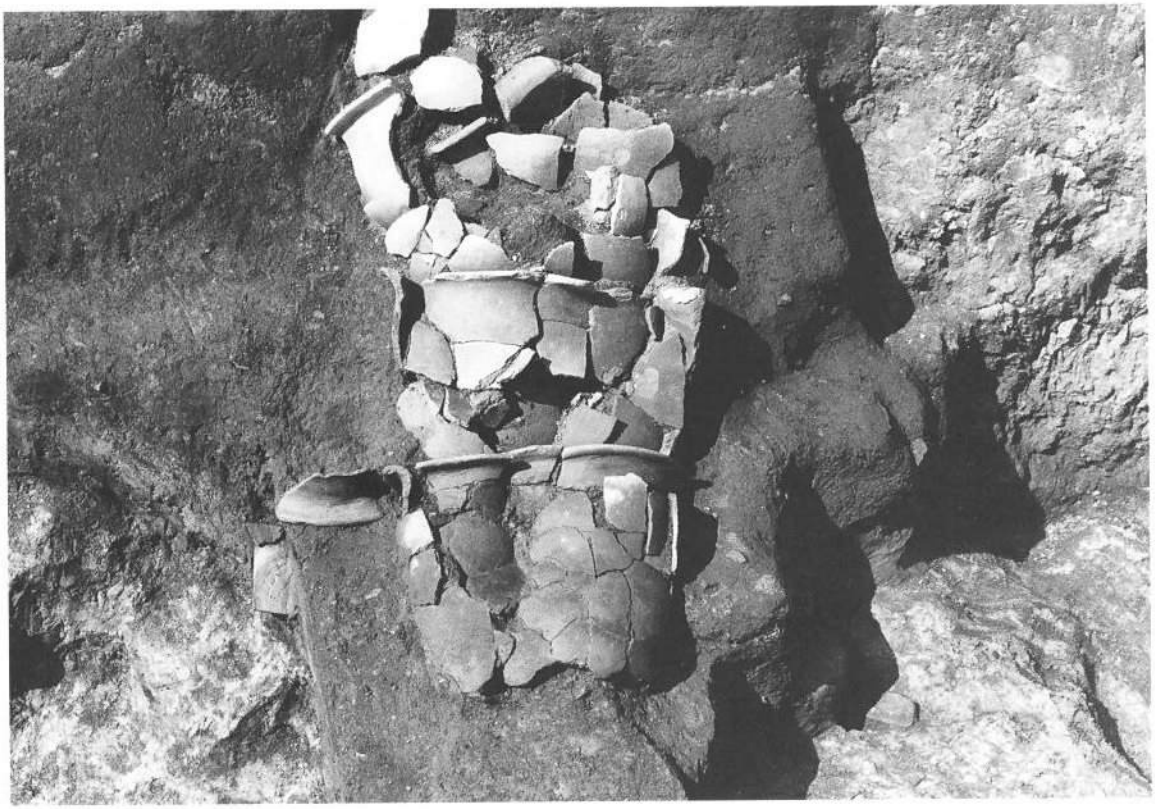


125号掘立柱建物跡（北から）

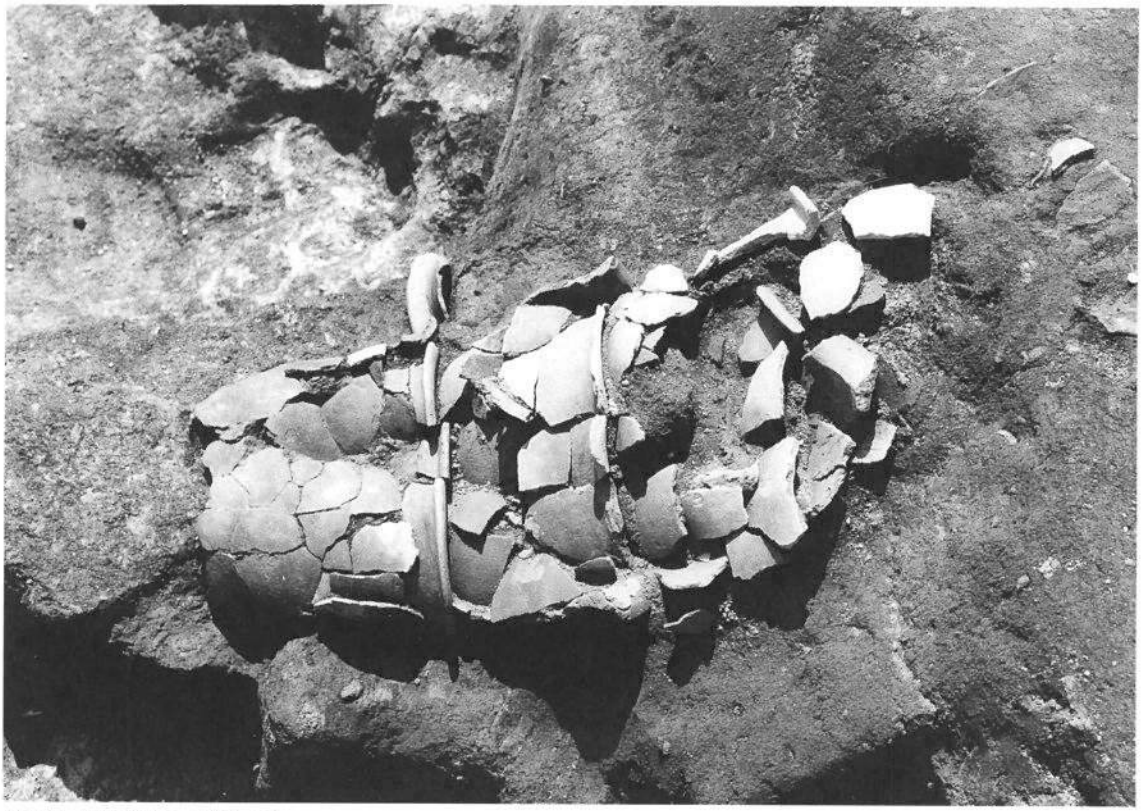


131号掘立柱建物跡柱穴の断ち割り状況（西から）

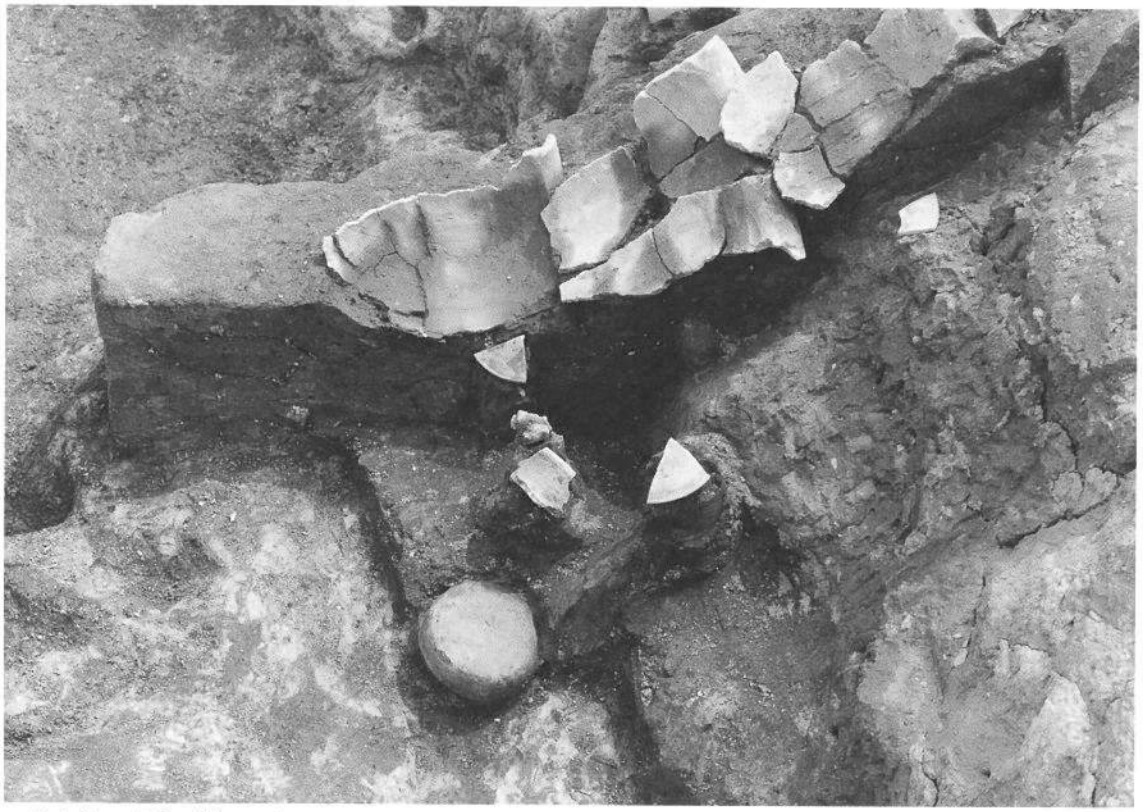
50号土坑の甕①（北から）



50号土坑の甕②（東から）



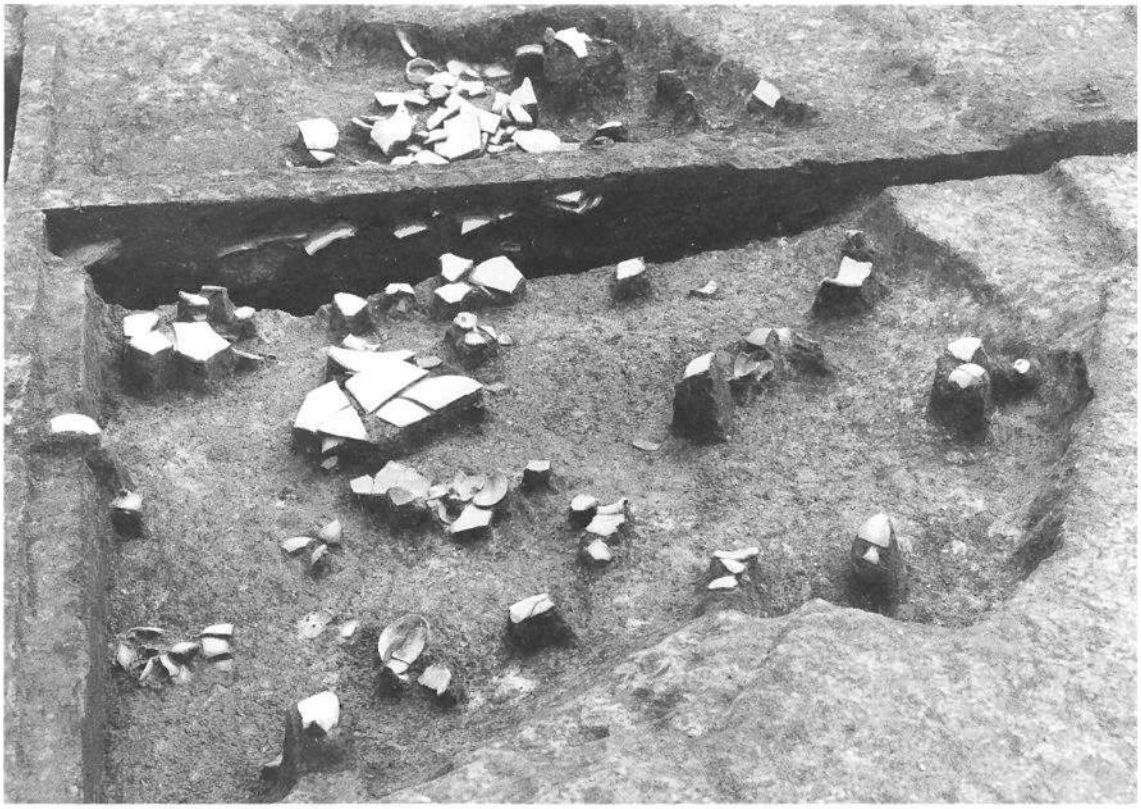
50号土坑の甕③（北から）



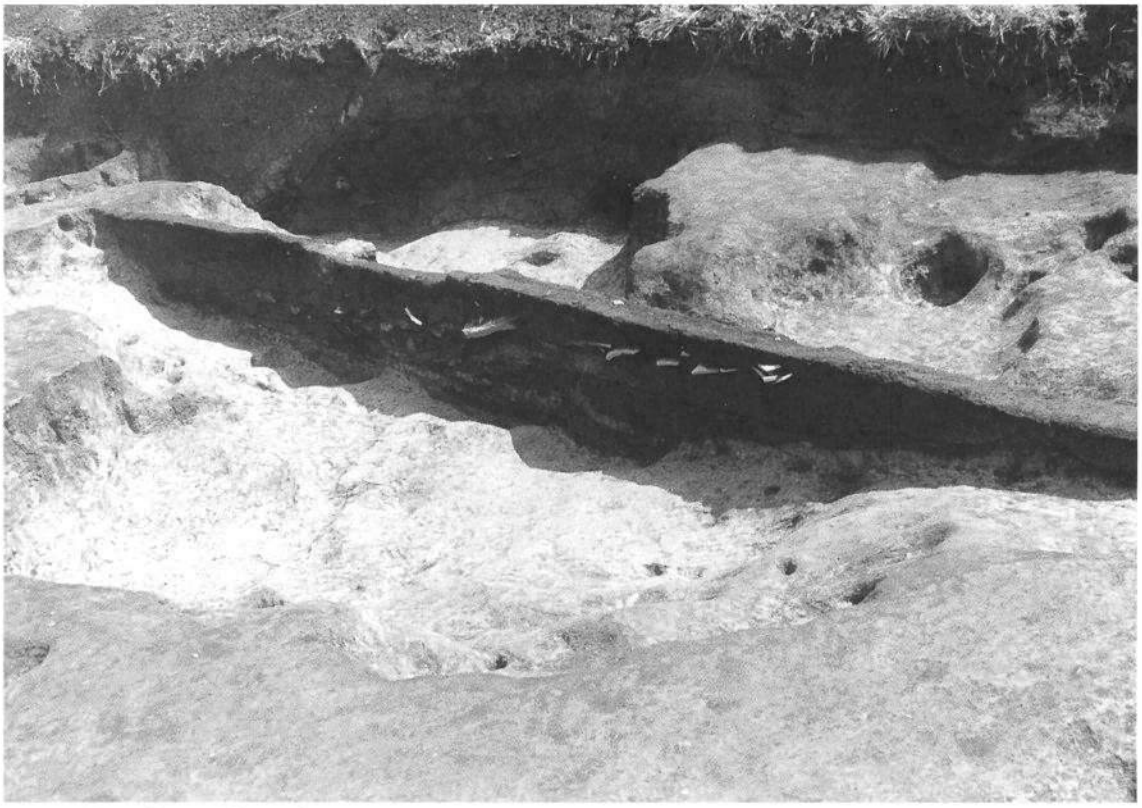
50号土坑の甕④（北から）

53号土坑土層断面（南から）

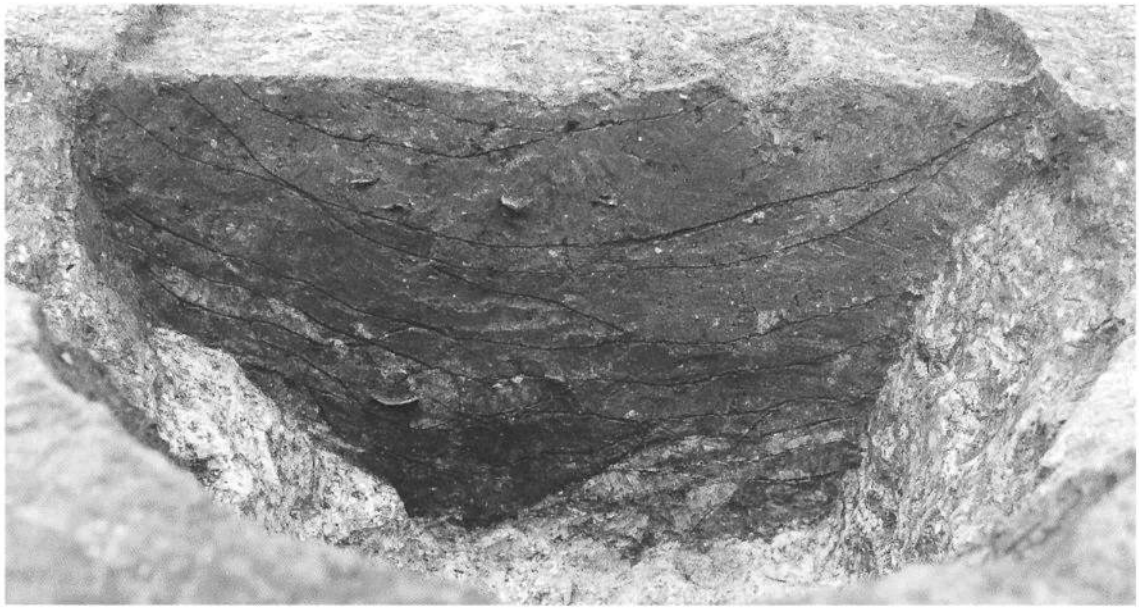
53号土坑北側の土器出土状態（南から）



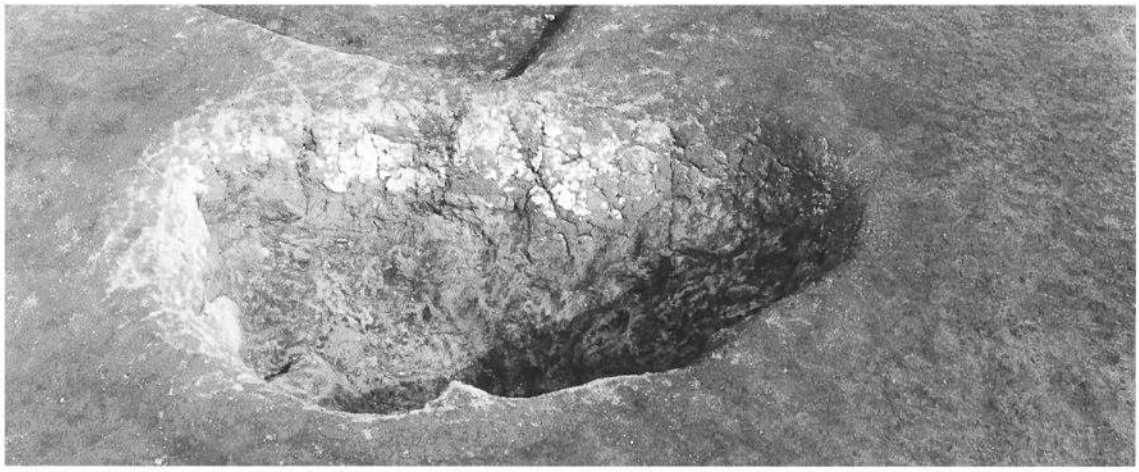
54号土坑土器出土状態（北から）



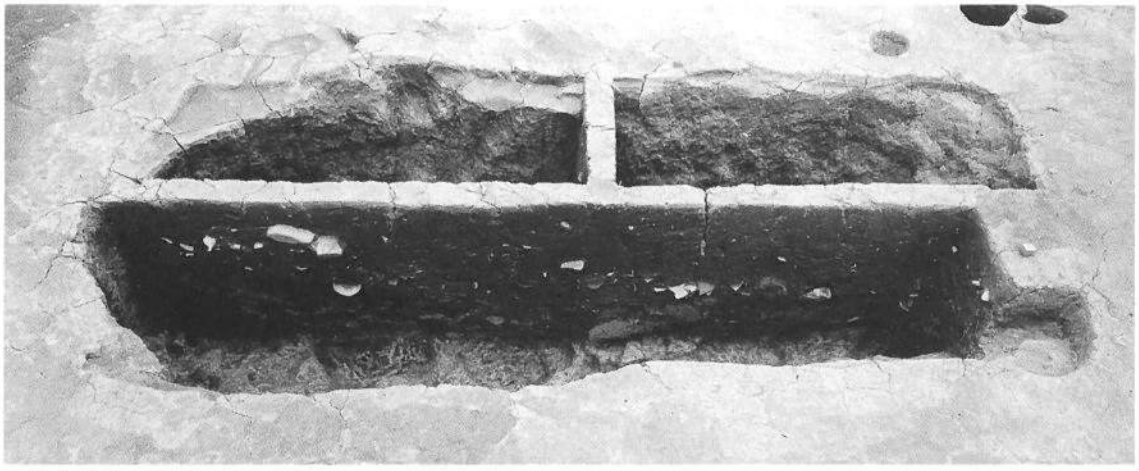
54号土坑土層断面（北から）



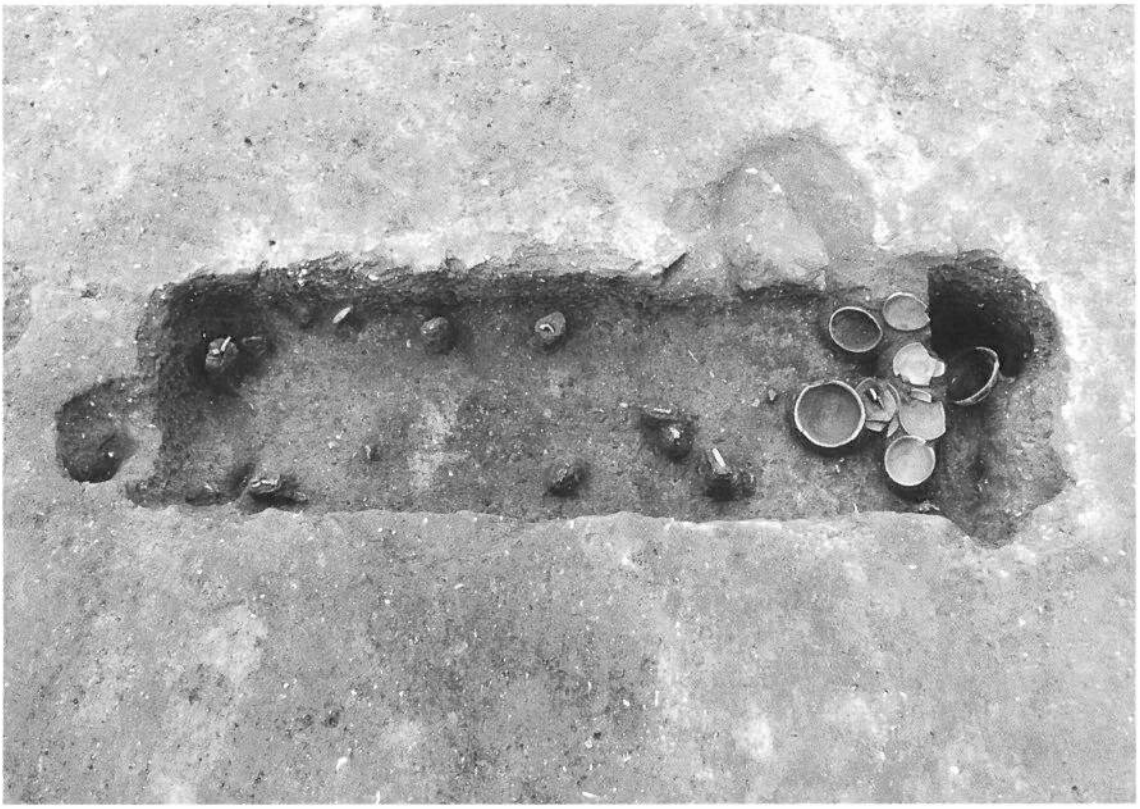
56号土坑土層断面（北から）



63号土坑（北から）



65号土坑土層断面（南から）



11号土壙墓（南から）

11号土壙墓土器出土状態（西から）

14号土壙墓（北東から）

15号土壙墓（北から）

214

2

5

8

11

215

18

216

5

218

1

4

6

220

1

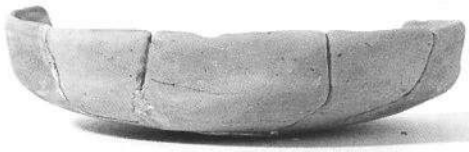
3

11

214～216・218・220号竪穴住居跡出土土器

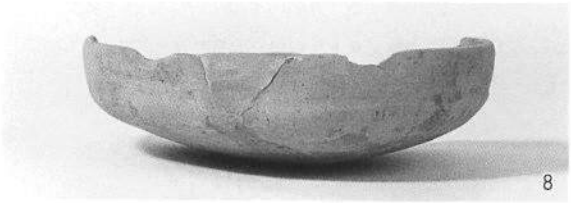
221

3

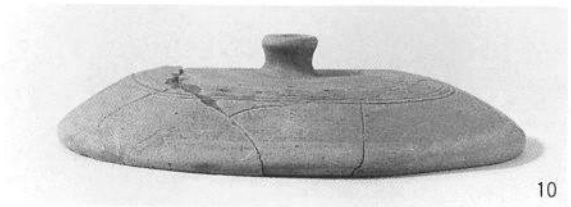


6

7



8

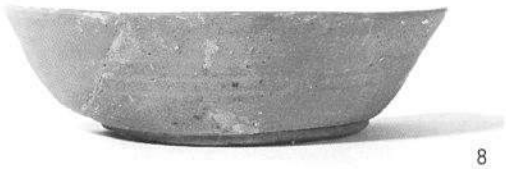


10

20

23

222



8

14

22

36

223

4

10

224

5

221～224号竪穴住居跡出土土器

225

3

226

4

8

17

18

227

5

228

6

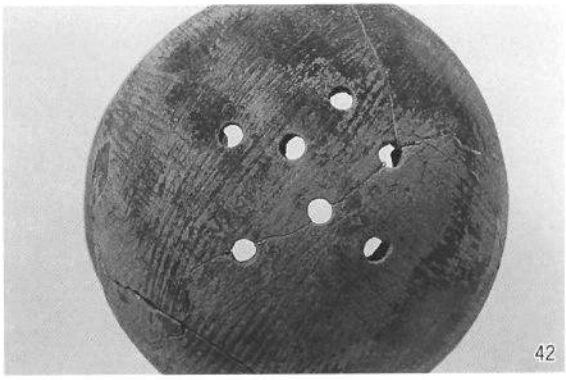
23

30

32

33

42


42

225～228号竪穴住居跡出土土器

229

15

236

10

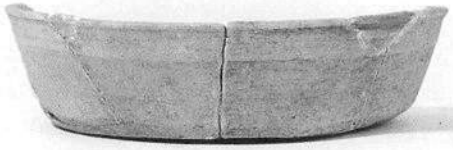
235

8

10

11

18



19

31

238

8

241

1

4

11

229・235・236・238・241号竪穴住居跡出土土器

242

1

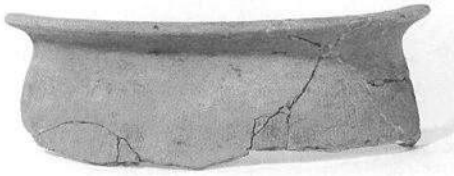
244

3

245

5

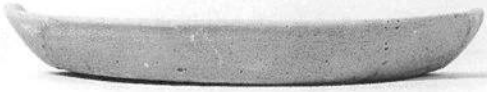
6



17

247

15



22

23

249

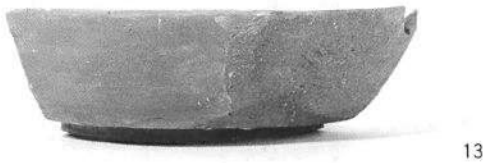
10

21

250

6

252



13

27

253

10

257

7

242・244・245・247・249・250・252・253・257号竪穴住居跡出土土器

258

3

4

8

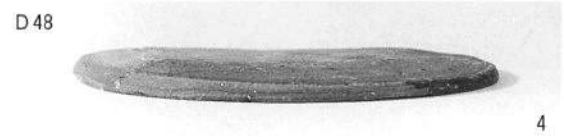
9

10

D 47

2

D 48


4

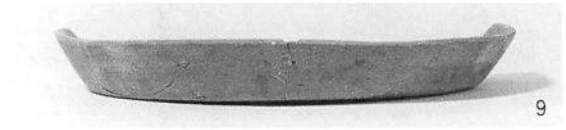
18

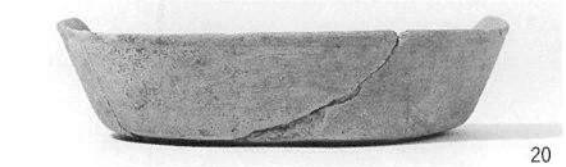
8

17

D 49

4

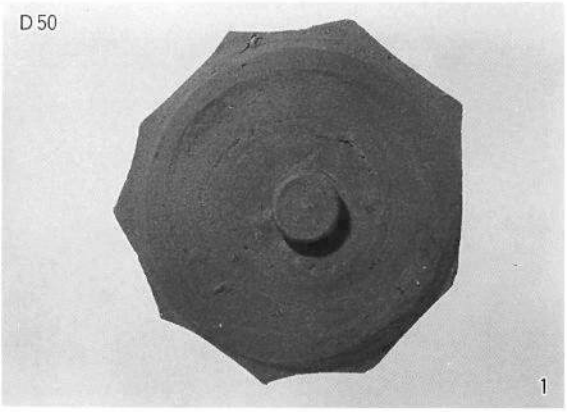

9


20

21

33

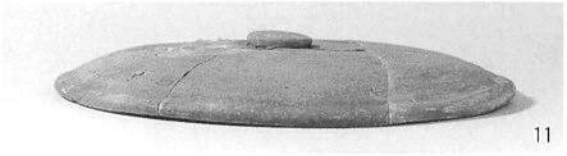
258竪穴住居跡、47～49号土坑出土土器



1

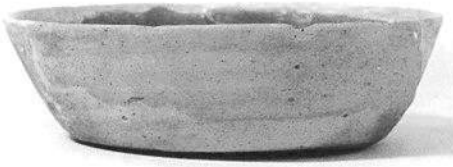
2

10


11

23

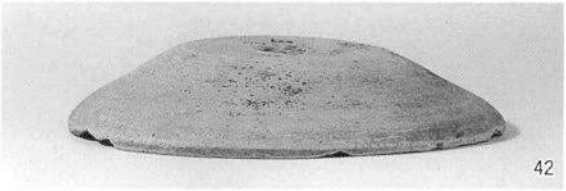
26


28

36

39

41

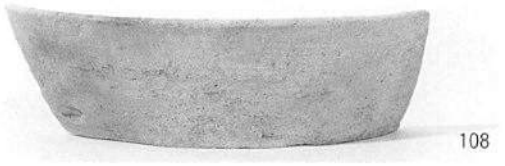

42

45

48

49

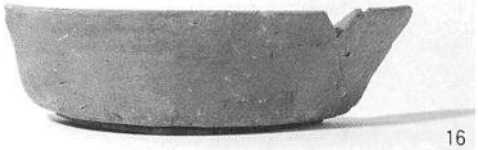
50号土坑出土土器

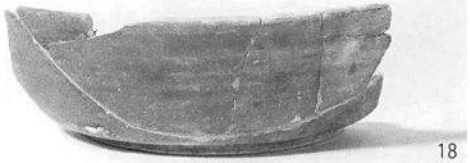


53

50・53号土坑出土土器

53


16

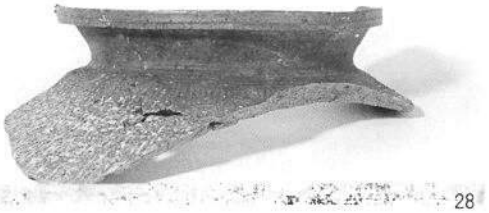

18

19

20

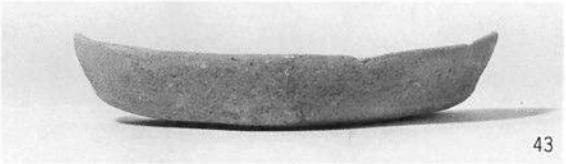
26

27


28

39

41


43

46

47

48

66

53号土坑出土土器

D54

1

2

5

12

13

14

17

19

21

24

25

29

30

54号土坑出土土器

D54

31

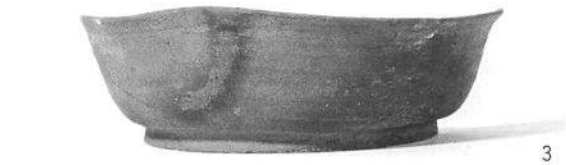
32

33

38

D56

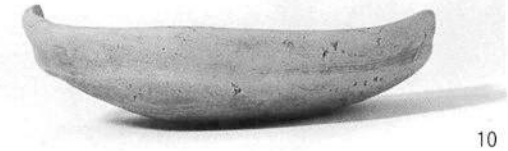
2


3

6

5

9


10

13

D57

1

4

6

D61

4

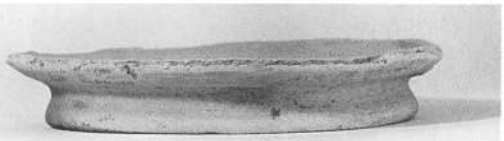
54・56・57・61号土坑出土土器

D62

D63

5

6



12

D65

1

2

3

5

11

13

14

15

17

18

19

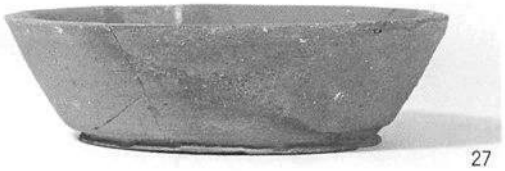
20

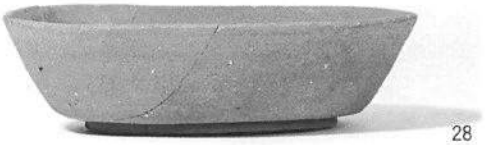
21

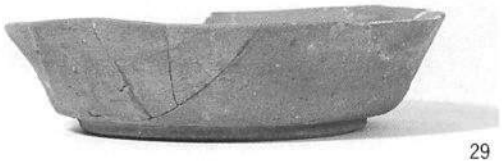
24

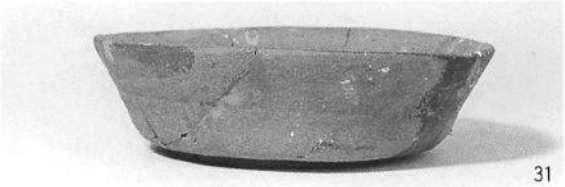
62・63・65号土坑出土土器

D65


27

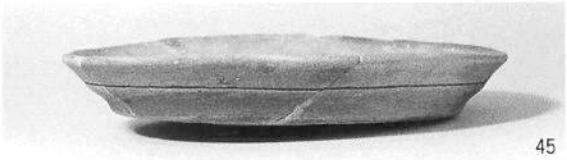

28


29


31

32

38


45

51

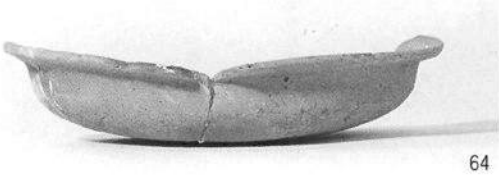
52

53

56

61

62


64

65号土坑出土土器

D65

66

71

72

73

74

79

78

80

81

82

D66

4

9

65・66号土坑出土土器

1

2

3

4

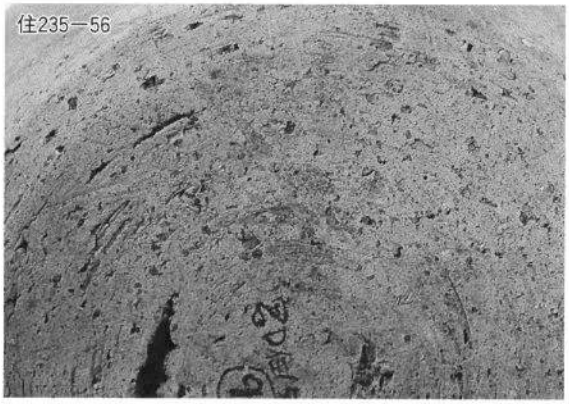
5

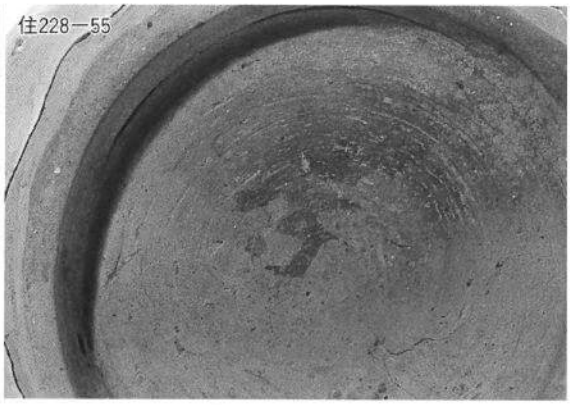
6

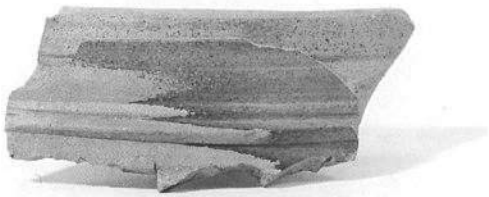
7

8

10号土壙墓出土の土器と鉄釘



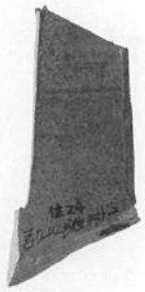




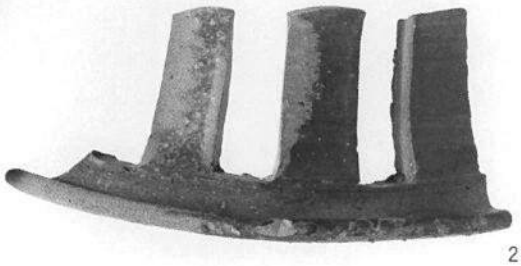
円面硯 1

墨書土器

1



3



2

円面硯

住226－22

D 53－63

住230－ 9

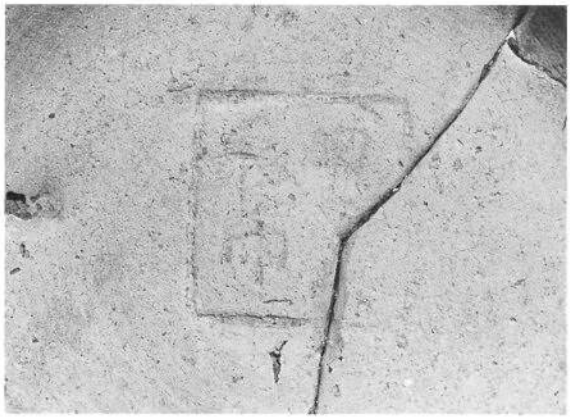
D 65－77

住253－14

D 65－78

転用硯

住226—235



33

D50

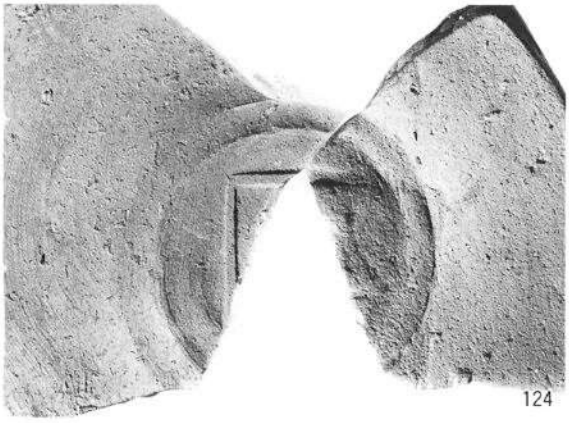
119

122

120

123

121

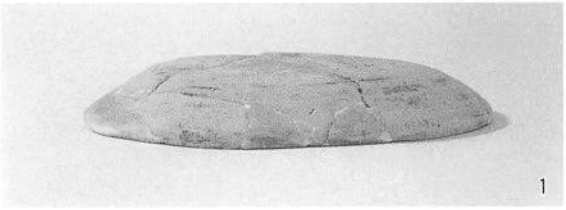


124

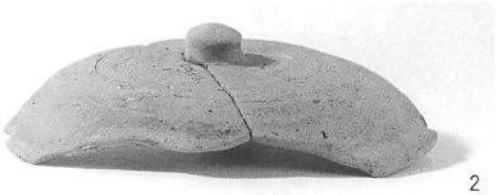
刻印土器

D63

22



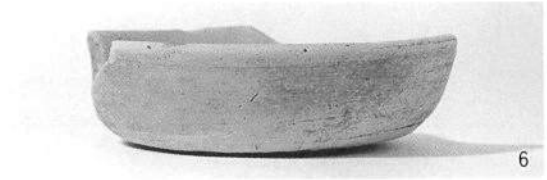
1



2

3

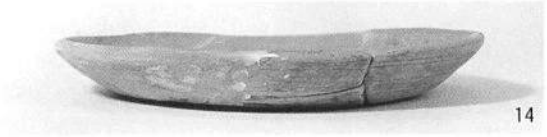
4



6

9

11



14

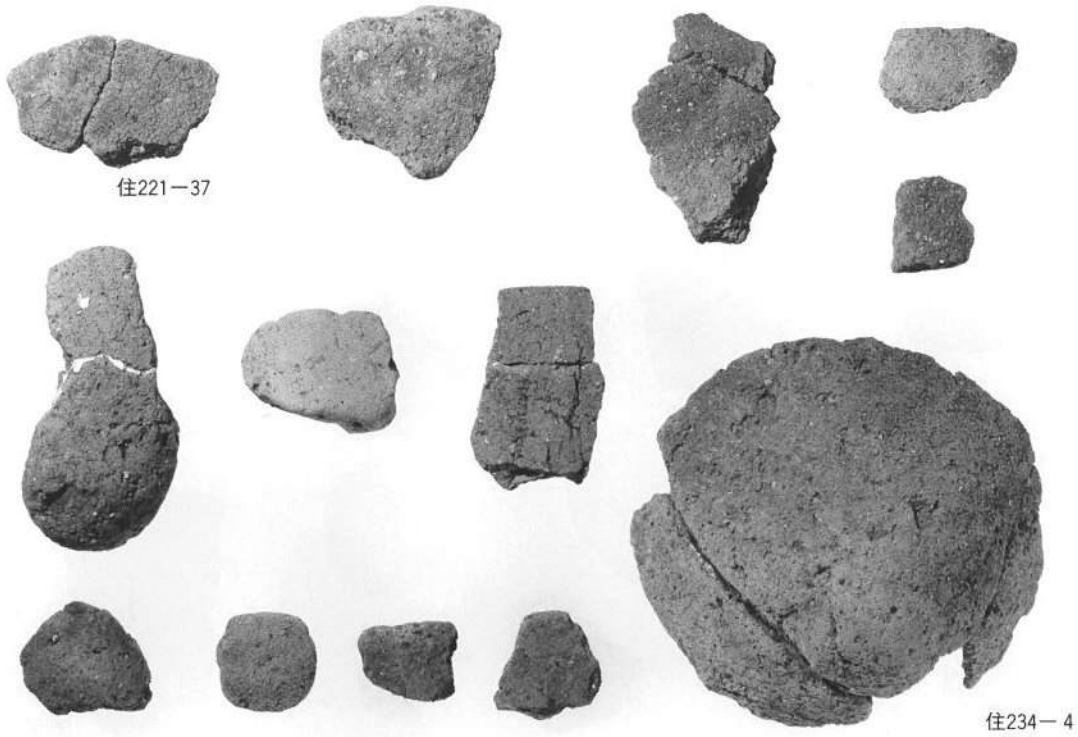
17

19

6

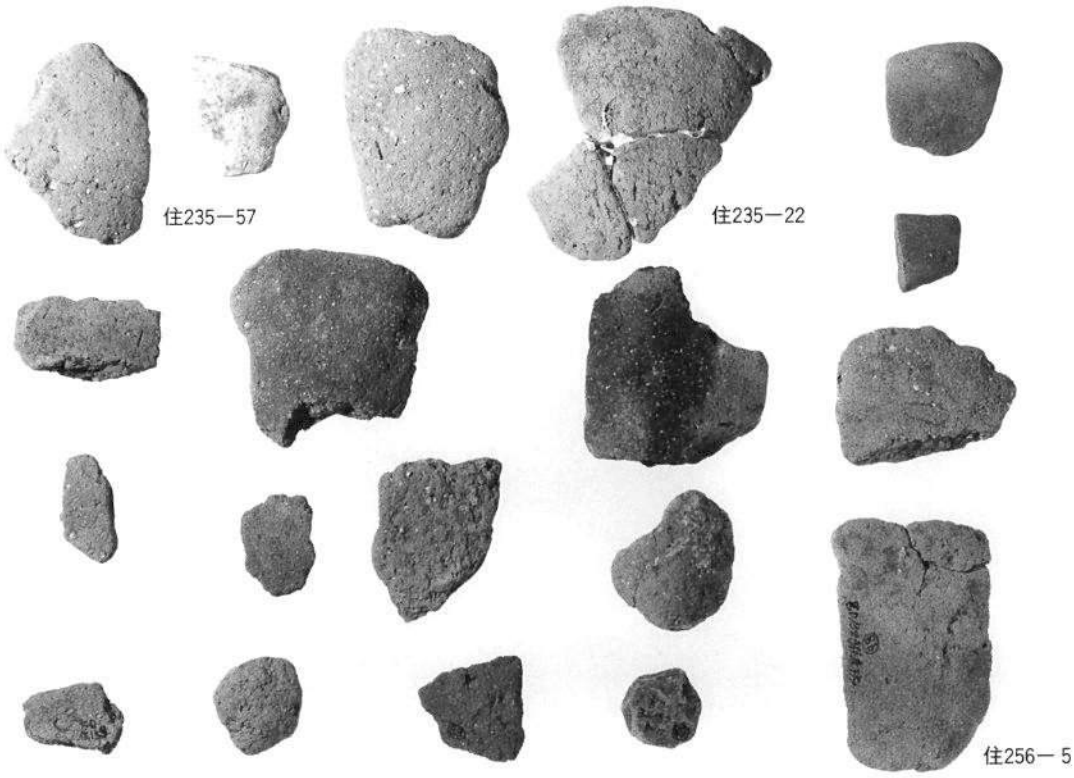
21

刻印土器とその他出土土器

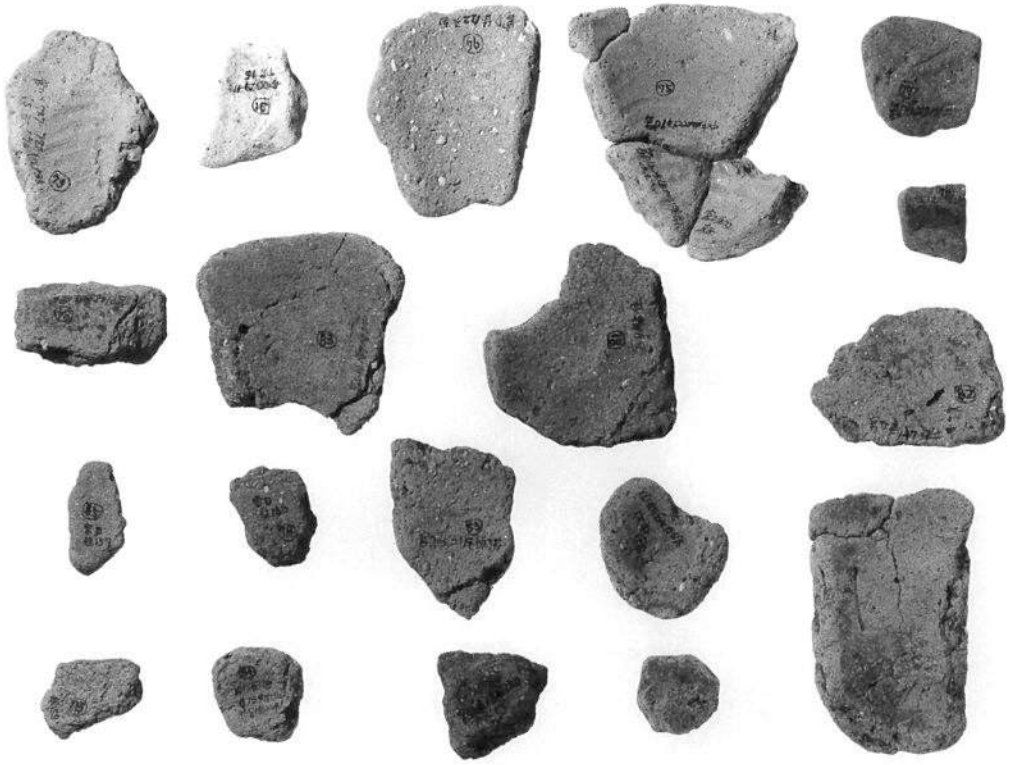


焼塩土器（外面）

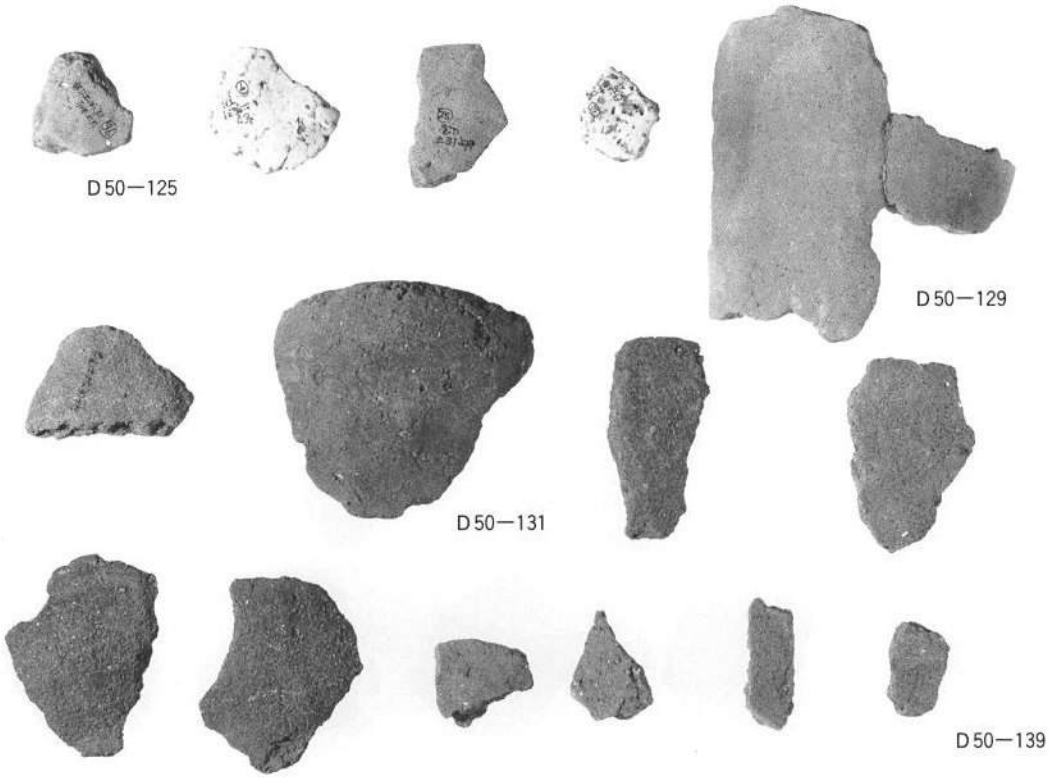
焼塩土器（内面）



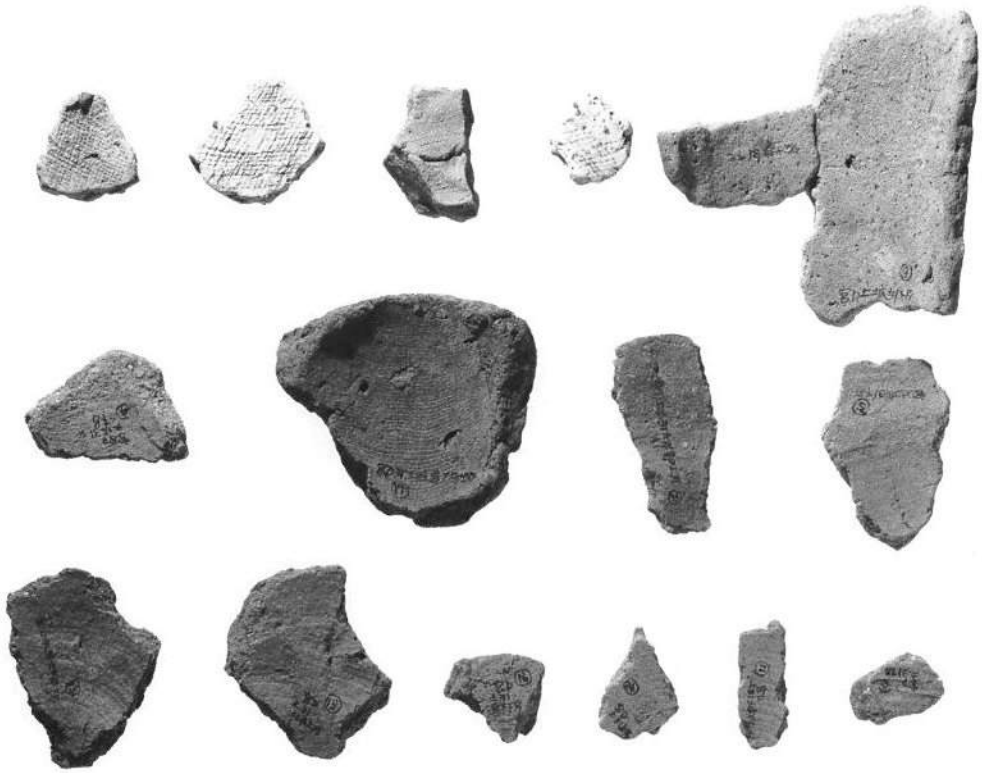
焼塩土器（外面）



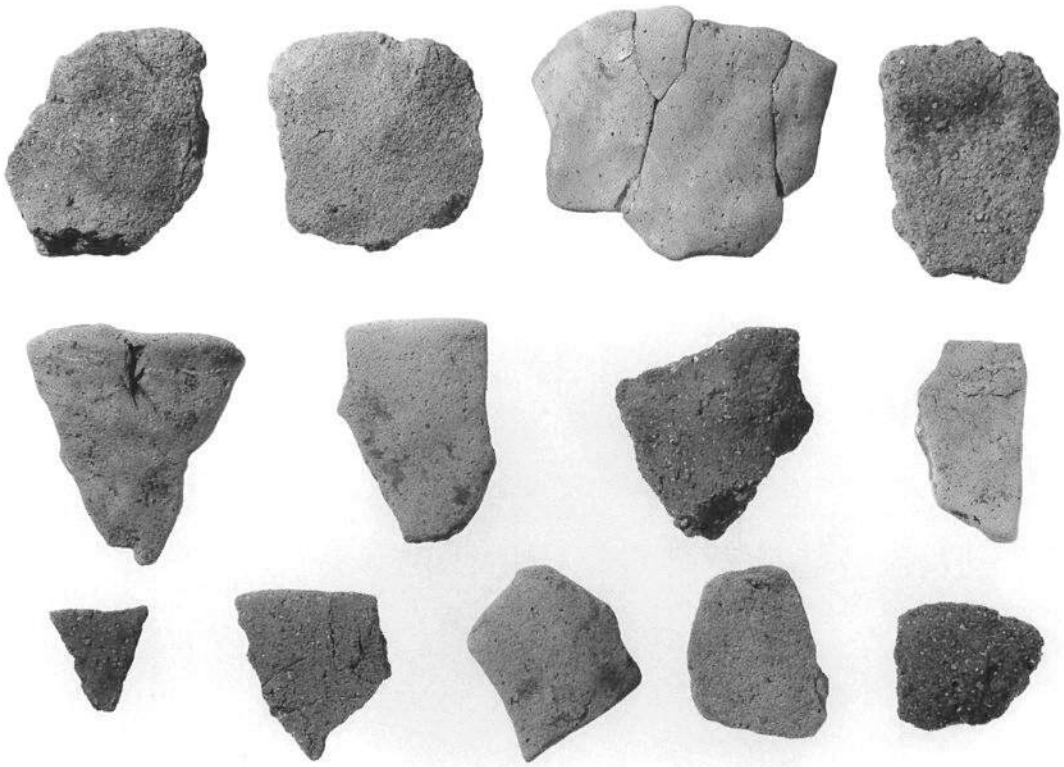
焼塩土器（内面）



焼塩土器（外面）

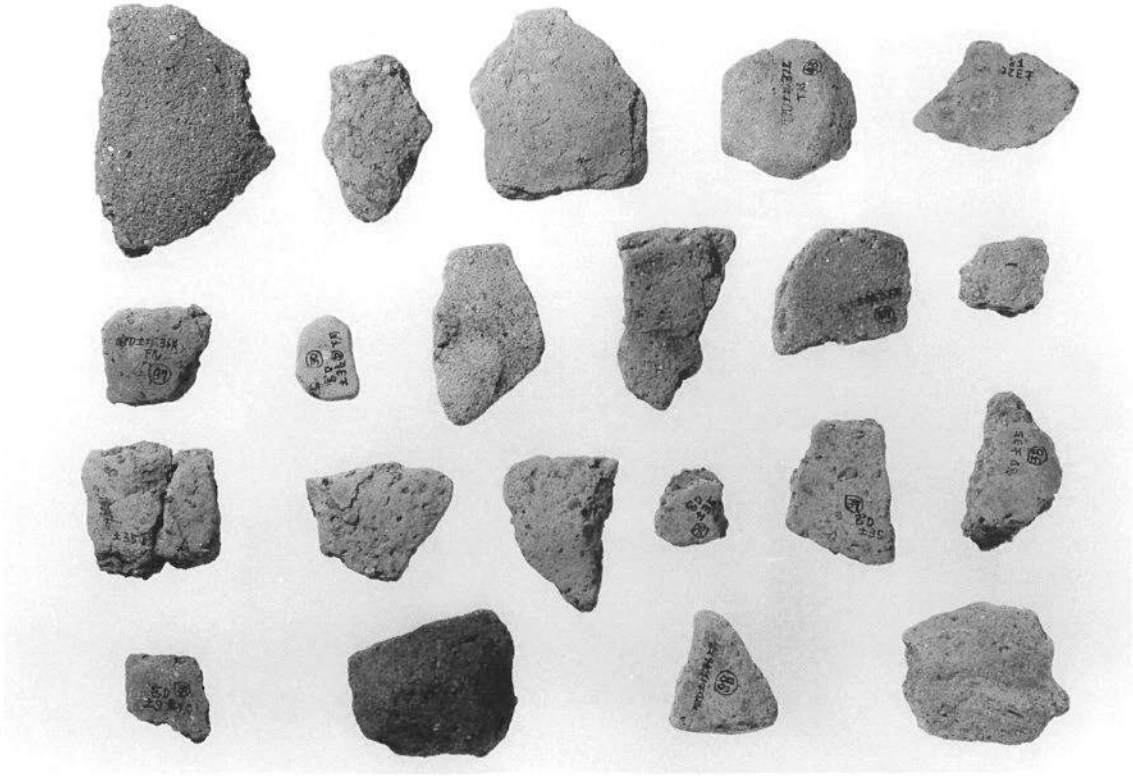


焼塩土器（内面）

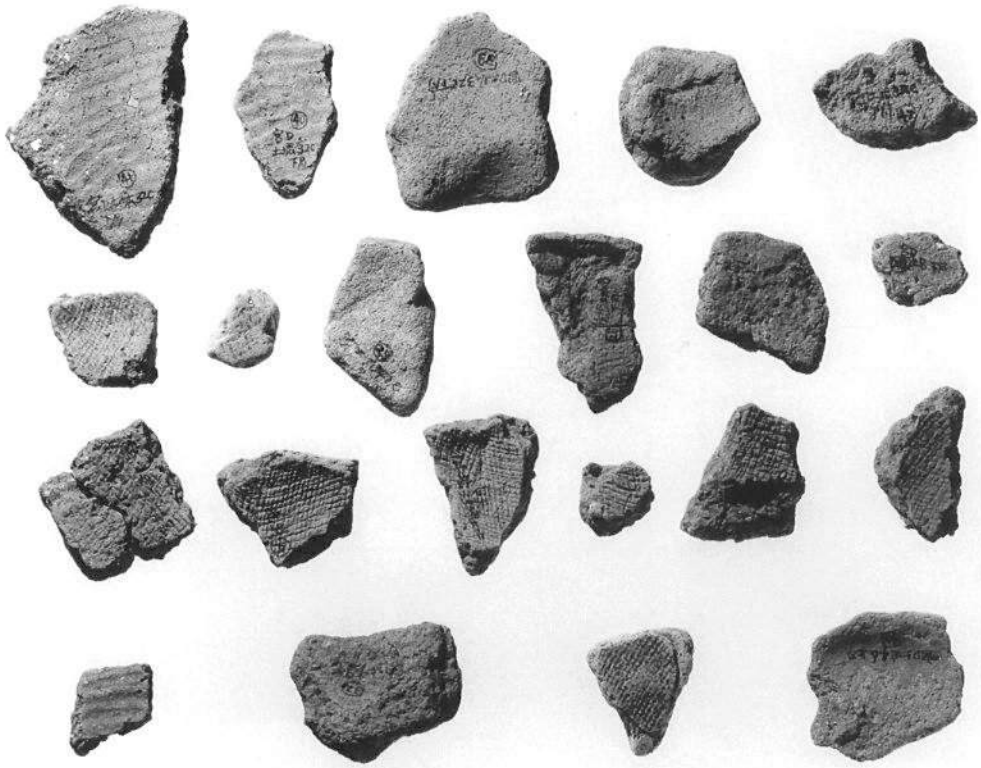


焼塩土器（外面）

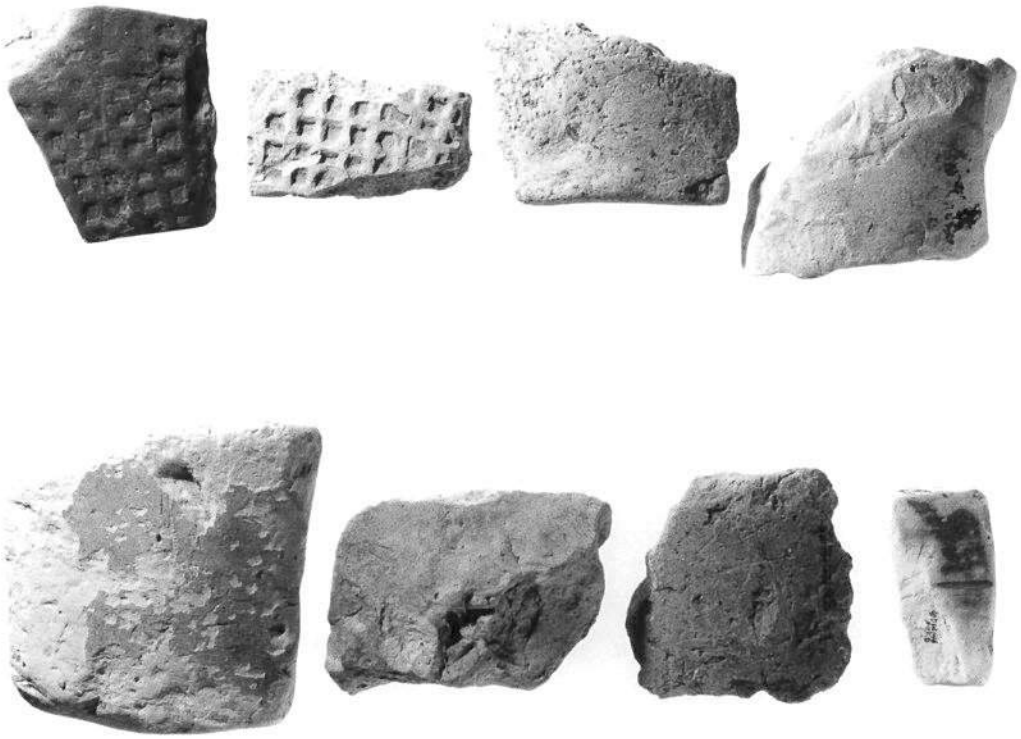
焼塩土器（内面）



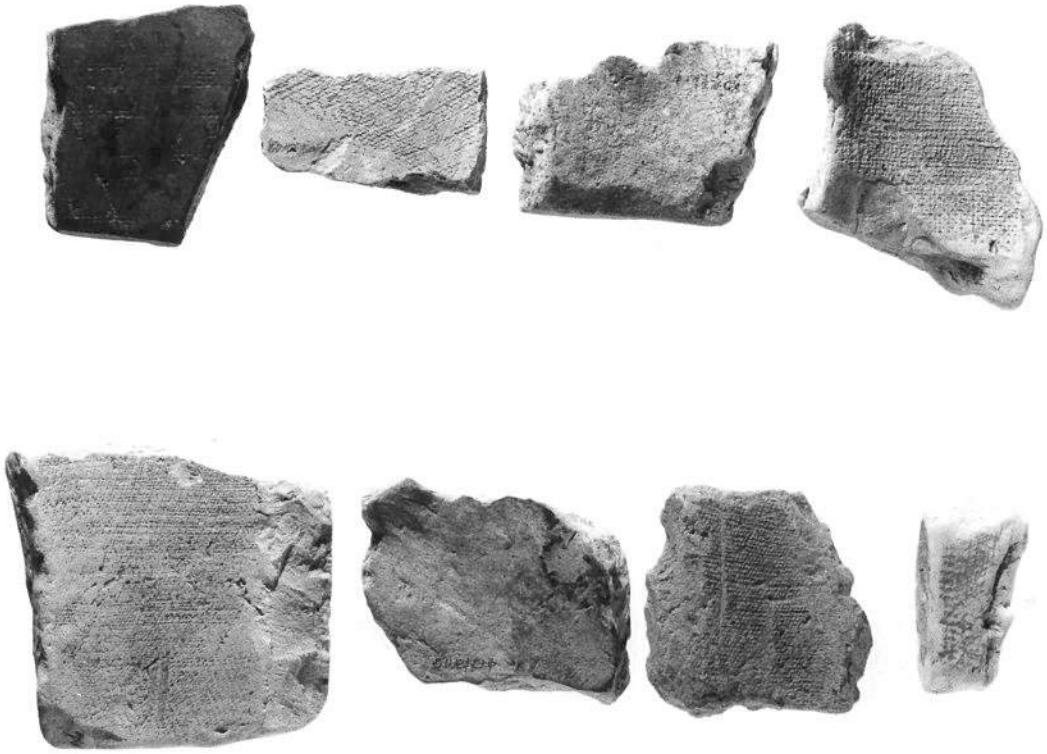
焼塩土器（外面）



焼塩土器（内面）



平・丸瓦（表裏面）



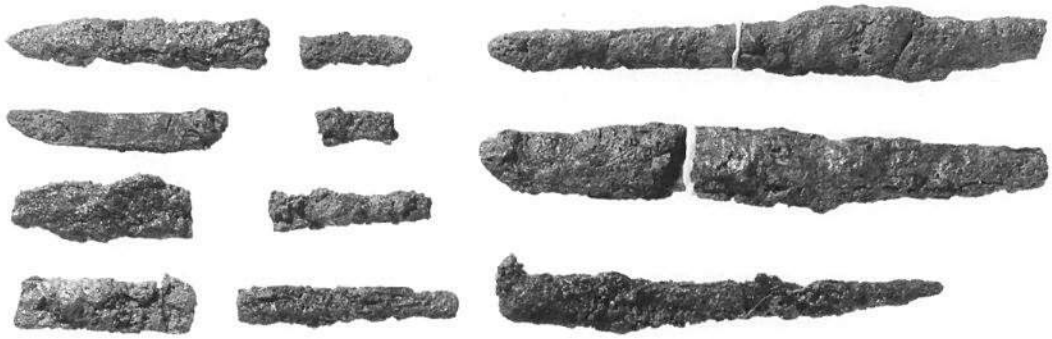
平・丸瓦（表裏面）

土製品

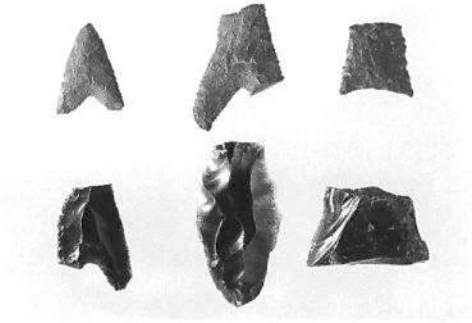
土製品

砥石

砥石



鉄製品



石鏃等

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
副書名	甘木市所在宮原遺跡の調査Ⅳ（D地区）
巻次	－51－
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	－51－
編著者名	木下　修・武田光正・伊崎俊秋・児玉真一
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-0045 福岡市博多区東公園７番７号
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮原遺跡（みやばるいせき）	福岡県甘木市（ふくおかけんあまぎし） 大字下浦字（おおあざしもうらあざ） 宮原（みやばる）	402095	100370	33° 23° 41°	130° 37° 45°	S56～59	約20,000㎡	高速道路建設のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮原遺跡	集落	7～8世紀	竪穴住居跡 掘穴柱建物跡 井戸 おとし穴 土坑 土壙墓 溝	土師器・須恵器・瓦・鉄製品・石製品 ※墨書土器・刻印土器・焼塩土器・転用硯・土器	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ９	登録番号 ８

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 ―51―

平成 10 年 3 月 31 日

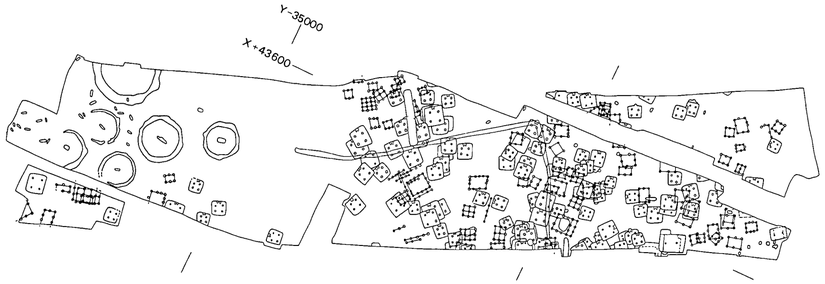
発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂１丁目10－15

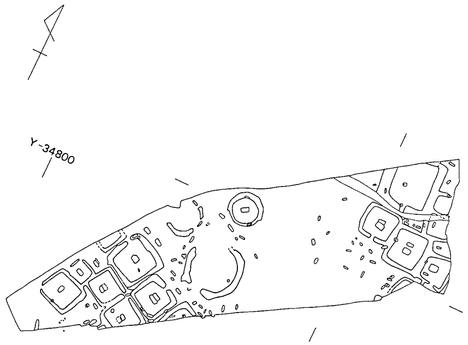
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 51 —

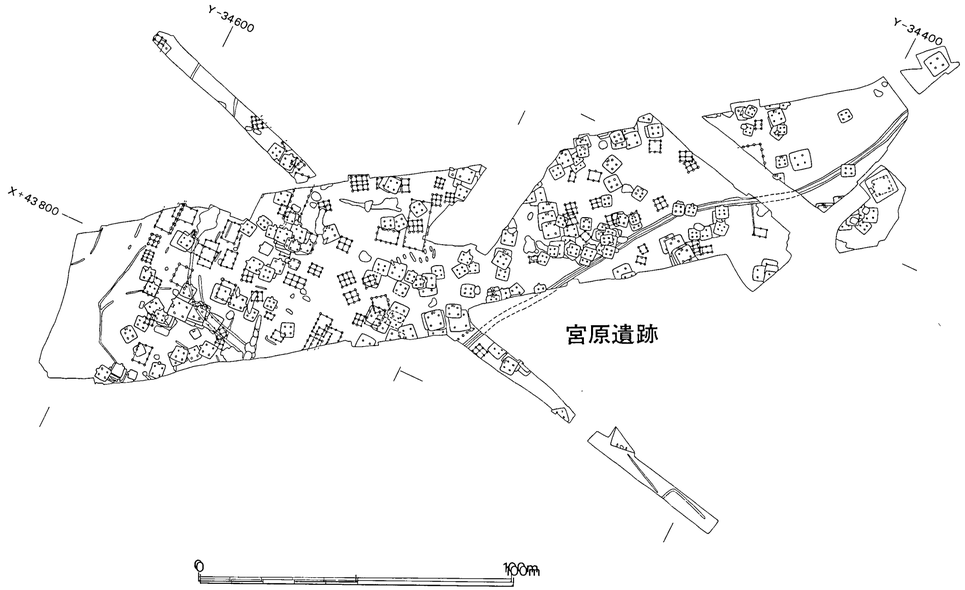
付図１　立野・宮原遺跡路線・宮原遺跡遺構配置図
（上-1/1,250，下-1/2,000）

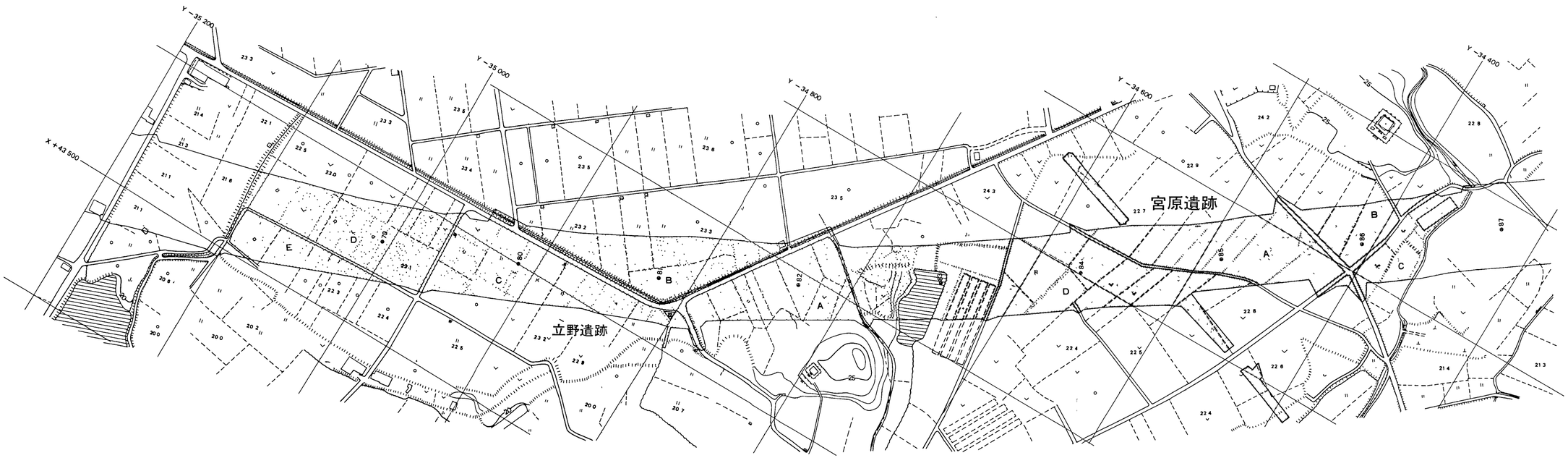
付図２　宮原遺跡Ｄ地区西半部遺構配置図(1/200)



立野遺跡







付図1　立野・宮原遺跡路線・宮原遺跡遺構配置図(上1/1,250，下1/2,000)

付図 2　宮原遺跡Ｄ地区西半部遺構配置図 (1/200)